

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第110集

東松山市

だい しょう じ おお にし
代 正 寺 ・ 大 西

一般国道407号線東松山市地内埋蔵文化財発掘調査報告

代正寺遺跡

(第1分冊)

1991

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



SJ-68



ST9(左)・ST15 形象埴輪

序

埼玉県ほぼ中央に位置する比企丘陵には、豊富な自然が残されており、森林公園や自然遊歩道などは広く県民に親しまれております。またこの地域においては、自然だけでなく、さまざまな遺跡も数多く残されており、ふるくから人々が生活するのに適した場所であったことを窺わせます。

比企丘陵の一角を占める東松山市の、岩鼻遺跡や吉ヶ谷遺跡さらに五領遺跡などは、弥生時代や古墳時代の遺跡として著名なものであります。これらの他に、比企地方最大の古墳で、県指定史跡の野本將軍塚古墳や、古代の郡役所の存在を思わせる「古凍」という地名が残っていることなどは、古代比企地方の中心地を想定させる様相をもってあります。

一般国道407号線のバイパス建設は、近年の交通量の増加にともなう交通渋滞の打開と、幹線交通網の整備を図る目的をもって計画されました。埼玉県教育委員会では、この工事と埋蔵文化財保護との調整をはかりましたが、代正寺遺跡・大西遺跡について、やむを得ず記録保存の措置が講じられることになりました。

当事業団では、この代正寺遺跡・大西遺跡について、埼玉県からの委託を受けて昭和62年度から平成元年度にかけて発掘調査を実施致しました。

その結果、縄文時代から弥生・古墳時代、奈良・平安時代、さらに中近世にかけての、実に多くの遺構が検出され、貴重な成果を得ることができました。本報告書が今後、埋蔵文化財の保護・教育普及・学術研究などの資料として広く活用されることを願っております。

最後になりましたが、刊行に当たり諸調整をして戴きました埼玉県教育局指導部文化財保護課、発掘調査から報告書刊行に至るまで多大な御協力を賜りました埼玉県土木部道路建設課と同東松山土木事務所、東松山市教育委員会、ならびに地元の関係各位、発掘・整理作業に携われた方々に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成3年9月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒井 修二

例 言

1 本書は、埼玉県東松山市大字宮鼻字代正寺55-1番地ほかに所在する代正寺遺跡と、東松山市大字八幡脇162-1番地ほかに所在する大西遺跡の発掘調査報告書である。

文化庁指示通知は1987年10月9日付委保第5-1448号である。遺跡名、略号は東松山市No48, 51である。

2 調査は、一般国道407号線東松山市地内におけるバイパス建設に先立つ事前調査であり、埼玉県教育局指導部文化財保護課が調整し、埼玉県の委託により財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理・報告書作成事業も引き続き、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が受託し実施した。

3 代正寺遺跡と大西遺跡は、小支谷を挟み対峙しており、編集において、項目の重複はできるだけ避けることにした。即ち、「序」・「I 発掘調査の概要」・「II 代正寺遺跡・大西遺跡の立地と環境」は第1分冊のみに掲げ、「VI 胎土分析」・「VII 結語」及び「写真図版」は、第2分冊に所収した。

3 発掘調査は、1987年(昭和62年)8月1日～1989年(平成元年)9月30日まで、整理・報告書作成は、1989年(平成元年)～1991年(平成3年)9月30日まで実施した。なお、発掘調査と整理・報告書作成事業の組織については、2～4ページに示した。

4 遺跡の基準点測量はシン航空写真(株)に、出土土器の胎土分析は(株)第四紀地質研究所に委託した。

5 発掘調査は、初年度と2年目を石塚和則・鈴木孝之が、3年目を金子直行・石塚・山本 靖が行った。整理および図面・図版の作成は、主として鈴木が行い、植木智子の補助を受けた。

発掘調査時における写真撮影は、石塚・鈴木・金子・山本が、遺物の写真撮影は今井 宏・鈴木がそれぞれ行った。

6 本書の執筆は、I-1調査に至る経過を文化財保護課、IV-1の事実記載の内、遺物関係を石塚、IV-2(3)の事実記載の内、円筒埴輪関係を山本、形象埴輪関係を大谷 徹、IV 5(9)・(11)を植木、VII胎土分析を委託会社、VIII結語の内、VIII-1を山本 VIII-2を大谷がそれぞれ担当し、それ以外については鈴木が行った。

7 本書の編集は、資料部資料整理第1課の鈴木が行った。

8 本書にかかる資料は、1991年度(平成3年度)以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

9 本書の作成にあたり、下記の方々より御教示・御協力を賜った。(五十音順・敬称略) 江原昌俊 西本豊弘 宮島秀夫

凡 例

- 1 本書に使用した遺構名の表記記号は以下のとおりである。
S J = 住居跡 S H = 方形周溝墓 S T = 古墳跡 S K = 土塋 S E = 井戸跡
S B = 掘立柱建物跡 S X = 性格不明遺構
なお、全測図中における土塋の表記については、以下の記号を用いた。
Y K = 弥生・古墳時代土塋 T K = 中近世土塋 S K = 時期不明・その他の土塋
- 2 遺跡全測図における X・Y の数値は、平面直角座標第 IX 系（原点：北緯 36 度 00 分 00 秒、東経 139 度 50 分 00 秒）に基づく各座標値を示す。遺構図中の方位は、すべて座標北を示す。
- 3 本書に掲載した挿図の縮尺率は、原則として以下のとおりである。
遺構：住居跡 1/60・1/80、炉・貯蔵穴・カマド 1/30、方形周溝墓 1/160、古墳跡 1/160、土塋・地下式坑・井戸跡、溝跡 1/80・1/160、掘立柱建物跡 1/80
遺物：玉類や石鏃等の小型製品・古銭 1/2 縄文時代の土器 1/3
縄文時代以外の土器、須恵器・瓦・金属製品・埴輪 1/4
遺存状況の良好な円筒埴輪 1/5
- 4 遺物観察表における括弧の数値は、推定値を意味する。胎土の項で含まれる物質は、A：赤粒子、B：柔らかい白色粒子、C：長石、D：角閃石、E：石英、F：金雲母、G：φ 0、9 cm 以下の微砂粒、H：φ 1.0~1.9 cm の細砂粒、I：φ 2.0 cm 以上の小礫、J：白色針状物質を示す。残存率は、実測値までの依存状態を目安とし、5 パーセント刻みで表現した。
- 5 土器実測図におけるスクリントーンは、赤色塗彩の範囲を示し、矢印記号「→」はヘラ削りの方向を、「/ \」の記号は糸切りや、ヘラ削りの範囲を意味する。色調の表現については、外面を基調としたが、必要に応じて内面も明記した。
- 6 遺物分布図の番号は、土器実測図中の番号に対応し、接合関係を線で結んだ。
- 7 土層断面図やエレベーション図、平面図におけるレベルは、いずれも標高値である。
- 8 遺構図版におけるスクリントーンは、無表記のものについては炉跡の範囲を示し、それ以外（炭化物など）に関しては、その都度表記した。
- 9 写真図版の遺物番号は、各遺構ごとの、遺物挿図内の番号に対応する。

代正寺・大西遺跡 第1分冊 代正寺遺跡

序

例言

凡例

I 発掘調査の概要	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 発掘調査・整理・報告書刊行事業の組織	2
3. 発掘調査の方法と経過	5
(1) 発掘調査の概要と方法	5
(2) 発掘調査の経過	6
II 遺跡の立地と環境	7
III 代正寺遺跡の概要	14
IV 代正寺遺跡の遺構と遺物	22
1. 縄文時代の遺構と遺物	22
(1) 住居跡	22
(2) 縄文時代関係グリッド出土遺物	25
2. 弥生～古墳時代の遺構と遺物	28
(1) 住居跡	28
(2) 方形周溝墓	186
(3) 古墳跡	228
(4) 土壌	304
3. 奈良・平安時代の遺構と遺物	308
(1) 住居跡	308
(2) 土壌	322
(3) 蔵骨器	323
(4) 墨書土器	324
4. 中近世の遺構と遺物	326
(1) 土壌	326
(2) 地下式坑	348
(3) 井戸跡	351
5. その他の遺構と遺物	353
(1) 土壌	353

(2) 溝跡	362
(3) 掘立柱建物跡	381
(4) 火葬墓	384
(5) 土葬墓	385
(6) 性格不明遺構	393
(7) 土器集中区	396
(8) グリッド一括・表面採集	400
(9) 瓦	411
(10) 金属製品	418
6. 代正寺遺跡についての小結	421
7. 新旧対照表	422

代正寺・大西遺跡 (第2分冊 大西遺跡)

V 大西遺跡の概要	425
VI 大西遺跡の遺構と遺物	429
1. 縄文時代の遺物	429
2. 弥生～古墳時代の遺構と遺物	432
(1) 住居跡	432
(2) 壺棺墓	525
3. 奈良・平安時代の遺構と遺物	528
(1) 住居跡	528
4. 中近世の遺構と遺物	549
(1) 井戸跡	549
(2) 地下式坑	550
5. その他の遺構と遺物	552
(1) 包含層	553
(2) 土壌	553
(3) 溝跡	570
(4) 性格不明遺構	576
(5) 鉄製品	594
(6) 瓦	595
6. 大西遺跡についての小結	596
7. 新旧対照表	597

VII 付編 胎土分析	598
VIII 結語	608
1. 代正寺遺跡出土の円筒埴輪の編年的位置づけ	608
2. 代正寺遺跡出土の形象埴輪について	611
3. 代正寺・大西遺跡の中期後半～後期半の弥生土器について	623
おわりに	638

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置	7	第43図	第18・19号住居跡(2)	57
第2図	周辺の遺跡	11	第44図	第19号住居跡出土遺物	58
第3図	遺跡周辺地形図	12	第45図	第20～24号住居跡	60
第4図	遺跡全測図(1)	15	第46図	第20・21号住居跡炉跡、 第24号住居跡貯蔵穴	61
第5図	遺跡全測図(2)	16	第47図	第22号住居跡出土遺物	62
第6図	遺跡全測図(3)	17	第48図	第23号住居跡出土遺物	62
第7図	遺跡全測図(4)	18	第49図	第24号住居跡出土遺物	63
第8図	遺跡全測図(5)	19	第50図	第25号住居跡、出土遺物	64
第9図	遺跡全測図(6)	20	第51図	第26号住居跡	65
第10図	遺跡全測図(7)	21	第52図	第26号住居跡出土遺物	66
第11図	第94号住居跡	23	第53図	第27号住居跡	67
第12図	第94号住居跡出土遺物	24	第54図	第27号住居跡出土遺物	68
第13図	グリッド出土遺物	27	第55図	第28号住居跡	70
第14図	第1・2号住居跡	29	第56図	第28号住居跡出土遺物	71
第15図	第1号住居跡出土遺物	30	第57図	第29・30・31号住居跡(1)	72
第16図	第2号住居跡出土遺物	30	第58図	第29・30・31号住居跡(2)	73
第17図	第3号住居跡、出土遺物	31	第59図	第29号住居跡出土遺物	74
第18図	第4・5号住居跡	32	第60図	第32号住居跡	75
第19図	第4・5号住居跡炉跡	33	第61図	第33・34・35号住居跡(1)	76
第20図	第4・5号住居跡出土遺物	34	第62図	第33・34・35号住居跡(2)	77
第21図	第6号住居跡	35	第63図	第33号住居跡出土遺物	78
第22図	第6号住居跡出土遺物	36	第64図	第34号住居跡出土遺物	78
第23図	第7号住居跡	37	第65図	第36・37号住居跡	80
第24図	第8・9号住居跡	38	第66図	第36・37号住居跡出土遺物	81
第25図	第8・9号住居跡炉跡	39	第67図	第38・39号住居跡(1)	82
第26図	第8号住居跡出土遺物	40	第68図	第38・39号住居跡(2)	83
第27図	第9号住居跡出土遺物	41	第69図	第38号住居跡出土遺物	84
第28図	第10・11号住居跡(1)	42	第70図	第40号住居跡	85
第29図	第10・11号住居跡(2)	43	第71図	第41・42号住居跡(1)	86
第30図	第10号住居跡出土遺物	43	第72図	第41・42号住居跡(2)	87
第31図	第11号住居跡出土遺物	45	第73図	第41号住居跡出土遺物	88
第32図	第12号住居跡	46	第74図	第43号住居跡出土遺物(1)	90
第33図	第12号住居跡出土遺物	47	第75図	第43号住居跡出土遺物(2)	91
第34図	第13号住居跡	48	第76図	第43号住居跡出土遺物(3)	92
第36図	第14号住居跡	50	第77図	第44号住居跡	93
第37図	第15・16号住居跡(1)	51	第78図	第44号住居跡出土遺物	94
第38図	第15・16号住居跡(2)	52	第79図	第45号住居跡(1)	95
第39図	第15号住居跡出土遺物	53	第80図	第45号住居跡(2)	96
第40図	第16号住居跡出土遺物	54	第81図	第45号住居跡出土遺物	96
第41図	第17号住居跡	55	第82図	第46・47号住居跡(1)	98
第42図	第18・19号住居跡(1)	56			

第83图	第46·47号住居迹(2)·····	99	第127图	第69号住居迹出土遺物·····	149
第84图	第46号住居迹出土遺物·····	100	第128图	第70号住居迹·····	150
第85图	第48号住居迹、出土遺物·····	102	第129图	第70号住居迹出土遺物·····	151
第86图	第49号住居迹·····	103	第130图	第71号住居迹·····	152
第87图	第50号住居迹·····	104	第131图	第72号住居迹·····	153
第88图	第50号住居迹出土遺物·····	105	第132图	第72号住居迹出土遺物·····	154
第89图	第51号住居迹·····	106	第133图	第73号住居迹·····	155
第90图	第51号住居迹出土遺物·····	107	第134图	第73号住居迹出土遺物(1)·····	156
第91图	第52号住居迹(1)·····	109	第135图	第73号住居迹出土遺物(2)·····	157
第92图	第52号住居迹(2)·····	110	第136图	第74号住居迹·····	159
第93图	第52号住居迹出土遺物·····	111	第137图	第75号住居迹·····	160
第94图	第53·54·55号住居迹(1)·····	112	第138图	第76号住居迹·····	161
第95图	第53·54·55号住居迹(2)·····	113	第139图	第76号住居迹炉跡·····	162
第96图	第55号住居迹出土遺物·····	114	第140图	第76号住居迹出土遺物·····	162
第97图	第56号住居迹·····	116	第141图	第77号住居迹(1)·····	164
第98图	第57·58号住居迹(1)·····	117	第142图	第77号住居迹(2)·····	165
第99图	第57·58号住居迹(2)·····	118	第143图	第77号住居迹出土遺物·····	165
第100图	第57号住居迹出土遺物·····	119	第144图	第78号住居迹(1)·····	166
第101图	第58号住居迹出土遺物·····	120	第145图	第78号住居迹(2)·····	167
第102图	第59·60号住居迹(1)·····	122	第146图	第79号住居迹·····	167
第103图	第59·60号住居迹(2)·····	123	第147图	第79号住居迹出土遺物·····	168
第104图	第59号住居迹出土遺物·····	123	第148图	第80·81号住居迹(1)·····	169
第105图	第61号住居迹·····	125	第149图	第80·81号住居迹(2)·····	170
第106图	第61号住居迹出土遺物·····	125	第150图	第80号住居迹出土遺物·····	171
第107图	第62号住居迹·····	126	第151图	第81号住居迹出土遺物·····	171
第108图	第63号住居迹·····	127	第152图	第82号住居迹·····	173
第109图	第63号住居迹出土遺物·····	127	第153图	第82号住居迹出土遺物·····	174
第110图	第64·65号住居迹·····	128	第154图	第83号住居迹·····	175
第111图	第66·67号住居迹(1)·····	130	第155图	第83号住居迹出土遺物·····	176
第112图	第66·67号住居迹(2)·····	131	第156图	第84号住居迹·····	177
第113图	第66·67号住居迹(3)·····	132	第157图	第84号住居迹出土遺物·····	178
第114图	第66号住居迹出土遺物(1)·····	133	第158图	第85号住居迹(1)·····	179
第115图	第66号住居迹出土遺物(2)·····	134	第159图	第85号住居迹(2)·····	180
第116图	第67号住居迹出土遺物·····	135	第160图	第85号住居迹出土遺物·····	180
第117图	第68号住居迹(1)·····	136	第161图	第87号住居迹·····	181
第118图	第68号住居迹(2)·····	137	第162图	第91号住居迹(1)·····	182
第119图	第68号住居迹(3)·····	138	第163图	第91号住居迹(2)·····	183
第120图	第68号住居迹(4)·····	139	第164图	第91号住居迹出土遺物·····	183
第121图	第68号住居迹出土遺物(1)·····	141	第165图	第93号住居迹·····	185
第122图	第68号住居迹出土遺物(2)·····	142	第166图	第1号方形周溝墓·····	187
第123图	第68号住居迹出土遺物(3)·····	143	第167图	第1号方形周溝墓出土遺物·····	188
第124图	第68号住居迹出土遺物(4)·····	144	第168图	第2号方形周溝墓·····	190
第125图	第68号住居迹出土遺物(5)·····	145	第169图	第3号方形周溝墓·····	191
第126图	第69号住居迹·····	148	第170图	第3号方形周溝墓出土遺物·····	193

第171图	第4号方形周溝墓(1)	194	第215图	第7号古墳跡出土遺物	246
第172图	第4号方形周溝墓(2)	196	第216图	第8号古墳跡	248
第173图	第4号方形周溝墓出土遺物	197	第217图	第8号古墳跡出土遺物	248
第174图	第5号方形周溝墓(1)	198	第218图	第9号古墳跡	249
第175图	第5号方形周溝墓(2)	199	第219图	第9号古墳跡出土遺物	250
第176图	第5号方形周溝墓出土遺物(1)	200	第220图	第9号古墳跡出土形象埴輪(1)	252
第177图	第5号方形周溝墓出土遺物(2)	201	第221图	第9号古墳跡出土形象埴輪(2)	253
第178图	第6号方形周溝墓	203	第222图	第9号古墳跡出土形象埴輪(3)	255
第179图	第6号方形周溝墓出土遺物	204	第223图	第9号古墳跡出土円筒埴輪	256
第180图	第7号方形周溝墓	205	第224图	第10号古墳跡(1)	257
第181图	第8号方形周溝墓	206	第225图	第10号古墳跡(2)	258
第182图	第8号方形周溝墓出土遺物	207	第226图	第10号古墳跡出土遺物	259
第183图	第9号方形周溝墓	208	第227图	第11号古墳跡	260
第184图	第9号方形周溝墓出土遺物	209	第228图	第11号古墳跡出土遺物	261
第185图	第10号方形周溝墓	210	第229图	第12号古墳跡	263
第186图	第10号方形周溝墓出土遺物(1)	211	第230图	第13号古墳跡、出土遺物	265
第187图	第10号方形周溝墓出土遺物(2)	212	第231图	第14号古墳跡	266
第188图	第11号方形周溝墓(1)	214	第232图	第15号古墳跡(1)	268
第189图	第11号方形周溝墓(2)	215	第233图	第15号古墳跡(2)	269
第190图	第11号方形周溝墓出土遺物(1)	216	第234图	第15号古墳跡(3)	271
第191图	第11号方形周溝墓出土遺物(2)	217	第235图	第15号古墳跡出土遺物(1)	272
第192图	第11号方形周溝墓出土遺物(3)	218	第236图	第15号古墳跡出土遺物(2)	273
第193图	第12号方形周溝墓	222	第237图	第15号古墳跡出土形象埴輪(1)	279
第194图	第12号方形周溝墓出土遺物	222	第238图	第15号古墳跡出土形象埴輪(2)	282
第195图	第13号方形周溝墓	223	第239图	第15号古墳跡出土形象埴輪(3)	284
第196图	第13号方形周溝墓出土遺物	224	第240图	第15号古墳跡出土形象埴輪(4)	285
第197图	第14・15号方形周溝墓	225	第241图	第15号古墳跡出土円筒埴輪(1)	289
第198图	第15号方形周溝墓出土遺物	226	第242图	第15号古墳跡出土円筒埴輪(2)	290
第199图	第1号古墳跡	227	第243图	第15号古墳跡出土円筒埴輪(3)	292
第200图	第1号古墳跡出土遺物	228	第244图	第15号古墳跡出土円筒埴輪(4)	293
第201图	第1号古墳跡出土円筒埴輪	229	第245图	第15号古墳跡出土円筒埴輪(5)	294
第202图	第2号古墳跡	230	第246图	第15号古墳跡出土円筒埴輪(6)	297
第203图	第2号古墳跡出土遺物	232	第247图	第15号古墳跡出土円筒埴輪(7)	298
第204图	第3号古墳跡	234	第248图	第15号古墳跡出土円筒埴輪(8)	299
第205图	第3号古墳跡出土遺物	234	第249图	第15号古墳跡出土円筒埴輪(9)	300
第206图	第4号古墳跡(1)	236	第250图	第16号古墳跡	303
第207图	第4号古墳跡(2)	237	第251图	第16号古墳跡出土遺物	304
第208图	第4号古墳跡出土遺物	238	第252图	弥生・古墳時代土壙(1)	306
第209图	第5号古墳跡	240	第253图	弥生・古墳時代土壙(2)	307
第210图	第5号古墳跡出土遺物	241	第254图	弥生・古墳時代土壙出土遺物	308
第211图	第6号古墳跡(1)	242	第255图	第86号住居跡	309
第212图	第6号古墳跡(2)	244	第256图	第86号住居跡出土遺物	310
第213图	第6号古墳跡出土遺物	244	第257图	第88号住居跡(1)	311
第214图	第7号古墳跡	245	第258图	第88号住居跡(2)	312

第344図	第1号住居跡出土遺物(1)……………	436	第386図	第39号住居跡、出土遺物……………	485
第345図	第1号住居跡出土遺物(2)……………	437	第387図	第41号住居跡……………	486
第346図	第1号住居跡出土遺物(3)……………	438	第388図	第41号住居跡出土遺物……………	487
第347図	第1号住居跡出土遺物(4)……………	439	第389図	第42・43号住居跡……………	488
第348図	第1号住居跡出土遺物(5)……………	440	第390図	第42号住居跡出土遺物……………	489
第349図	第2～4号住居跡(1)……………	444	第391図	第43号住居跡出土遺物……………	490
第350図	第2～4号住居跡(2)……………		第392図	第44～46号住居跡……………	491
	第3・4号住居跡出土遺物……………	445	第393図	第47号住居跡……………	493
第351図	第5～7号住居跡……………	447	第394図	第48号住居跡……………	494
第352図	第5号住居跡カマド……………	448	第395図	第48号住居跡出土遺物……………	495
第353図	第5号住居跡出土遺物(1)……………	449	第396図	第49～51号住居跡(1)……………	496
第354図	第5号住居跡(2)、第6号住居跡 出土遺物……………	450	第397図	第49～51号住居跡(2)……………	497
第355図	第8・9号住居跡(1)……………	454	第398図	第49・50号住居跡出土遺物……………	498
第356図	第8・9号住居跡(2)……………	455	第399図	第52号住居跡(1)……………	500
第357図	第8・9号住居跡出土遺物……………	456	第400図	第52号住居跡(2)……………	500
第358図	第10号住居跡……………	457	第401図	第52号住居跡出土遺物……………	502
第359図	第11・12号住居跡……………	459	第402図	第53・54号住居跡(1)……………	504
第360図	第11号住居跡出土遺物……………	460	第403図	第53・54号住居跡(2)……………	505
第361図	第13～16号住居跡……………	461	第404図	第54号住居跡出土遺物(1)……………	506
第362図	第13号住居跡出土遺物……………	462	第405図	第54号住居跡出土遺物(2)……………	507
第363図	第16号住居跡出土遺物……………	463	第406図	第55～57号住居跡(1)……………	509
第364図	第17～19号住居跡(1)……………	464	第407図	第55～57号住居跡(2)……………	510
第365図	第17～19号住居跡(2)……………	465	第408図	第55号住居跡出土遺物……………	511
第366図	第17号住居跡出土遺物……………	466	第409図	第56号住居跡出土遺物……………	511
第367図	第18・19号住居跡出土遺物……………	467	第410図	第58・60号住居跡……………	513
第368図	第20号住居跡……………	469	第411図	第58号住居跡出土遺物……………	512
第369図	第21・22号住居跡……………	470	第412図	第60号住居跡出土遺物……………	514
第370図	第21号住居跡出土遺物……………	471	第413図	第61号住居跡……………	515
第371図	第24号住居跡……………	472	第414図	第62・63号住居跡(1)……………	516
第372図	第24号住居跡出土遺物……………	473	第415図	第62・63号住居跡(2)……………	517
第373図	第27～29号住居跡(1)……………	474	第416図	第62号住居跡出土遺物(1)……………	518
第374図	第27～29号住居跡(2)……………	475	第417図	第62号住居跡出土遺物(2)……………	519
第375図	第27号住居跡出土遺物……………	476	第418図	第63号住居跡出土遺物……………	521
第376図	第28号住居跡出土遺物……………	477	第419図	第65～67号住居跡(1)……………	522
第377図	第29号住居跡出土遺物……………	478	第420図	第65～67号住居跡(2)……………	523
第378図	第31、33～35号住居跡(1)……………	479	第421図	第65号住居跡出土遺物……………	524
第379図	第31、33～35号住居跡(2)……………	480	第422図	第1号甕棺墓……………	526
第380図	第34号住居跡出土遺物……………	480	第423図	第2号甕棺墓……………	527
第381図	第35号住居跡出土遺物……………	481	第424図	第23号住居跡(1)……………	529
第382図	第36・37号住居跡(1)……………	482	第425図	第23号住居跡(2)……………	530
第383図	第36・37号住居跡(2)……………	483	第426図	第23号住居跡出土遺物……………	531
第384図	第36号住居跡出土遺物……………	483	第427図	第25・26号住居跡(1)……………	532
第385図	第37号住居跡出土遺物……………	484	第428図	第25・26号住居跡(2)……………	533
			第429図	第25号住居跡出土遺物……………	533

第430図	第30号住居跡(1)……………	534	第451図	土壌(5)……………	560
第431図	第30号住居跡(2)……………	535	第452図	土壌(6)……………	561
第432図	第30号住居跡出土遺物(1)……………	536	第453図	土壌(7)……………	562
第433図	第30号住居跡出土遺物(2)……………	537	第454図	土壌(8)……………	563
第434図	第32号住居跡……………	540	第455図	土壌(9)……………	564
第435図	第32号住居跡出土遺物……………	541	第456図	土壌(10)……………	565
第436図	第38号住居跡……………	542	第457図	土壌出土遺物(1)……………	566
第437図	第38号住居跡出土遺物……………	543	第458図	土壌出土遺物(2)……………	568
第438図	第40号住居跡、出土遺物……………	544	第459図	土壌出土遺物(3)……………	569
第439図	第59号住居跡……………	545	第460図	第1～3号溝跡……………	572
第440図	第59号住居跡出土遺物……………	546	第461図	第1～4、6号溝跡……………	573
第441図	第64号住居跡……………	547	第462図	第5号溝跡……………	575
第442図	第64号住居跡出土遺物……………	548	第463図	グリッド出土遺物(1)……………	577
第443図	第1号井戸跡……………	549	第464図	グリッド出土遺物(2)……………	578
第444図	地下式坑……………	550	第465図	グリッド出土遺物(3)……………	579
第445図	J区包含層……………	551	第466図	グリッド出土遺物(4)……………	580
第446図	J区包含層出土遺物……………	552	第467図	グリッド出土遺物(5)……………	581
第447図	土壌(1)……………	556	第468図	グリッド出土遺物(6)……………	582
第448図	土壌(2)……………	557	第469図	グリッド出土遺物(7)……………	591
第449図	土壌(3)……………	558	第470図	表面採集遺物……………	592
第450図	土壌(4)……………	559	第471図	鉄製品……………	594

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	第6表	火葬墓一覧表
第2表	弥生・古墳時代土壌一覧表	第7表	土葬墓一覧表
第3表	奈良・平安時代土壌一覧表	第8表	代正寺遺跡新旧対照表
第4表	中近世土壌一覧表	第9表	大西遺跡土壌一覧表
第5表	代正寺遺跡土壌一覧表(G・H区)	第10表	大西遺跡新旧対照表

図 版 目 次

図版1	C区全景、C区現況	図版5	第28号、29号、31号、 33・34・35号、36・37号、36～39号、 38号、41・42号住居跡
図版2	H区航空写真、I区航空写真	図版6	第41号、43号、44号、45号、 51号住居跡
図版3	第1・2号、3号、4号、6号、 10号住居跡		
図版4	第10号、12号、15号・16号、 18号、19号、24号、26号住居跡		

図版7 第51号、52号、55号、57・58号、
59号、61号住居跡

図版8 第66・67号、68号・69号住居跡

図版9 第68号、70号、71号住居跡

図版10 第72号、73号、77号、79号、
83号、84号、85号住居跡

図版11 第88号、87号、88号住居跡

図版12 第90号、91号、92号、93号、94号
住居跡出土土器

図版13 第1号、3号方形周溝墓

図版14 第4号、5号方形周溝墓

図版15 第5号、6号・7号方形周溝墓

図版16 第6号、8号、10号方形周溝墓
G区作業風景

図版17 第11号、13号方形周溝墓

図版18 第14号方形周溝墓、第1号、
2号古墳跡

図版19 第2号・3号古墳跡

図版20 第4号、6号古墳跡

図版21 第7号古墳跡

図版22 第8号、9号古墳跡

図版23 第10号古墳跡

図版24 第11号古墳跡

図版25 第12号・13号古墳跡

図版26 第15号古墳跡

図版27 中近世土墳31、弥生古墳土墳12
平安土墳3、井戸1、地下式坑2、3

図版28 土葬墓9、6、28、33~37、83
火葬墓1、6、5

図版29 溝1、4、15、16、17、44、51・52

図版30 掘建柱建物跡1、2

図版31 縄文土器

図版32 第1号、2号、5号、6号、
10号、11号住居跡出土土器

図版33 第12号、16号、19号、22号、
23号、24号住居跡出土土器

図版34 第24号、26号、27号、

38号住居跡出土土器

図版35 第41号、43号、44号、
45号住居跡出土土器

図版36 第45号、46号住居跡出土土器

図版37 第50号、51号、52号、
55号住居跡出土土器

図版38 第57号、58号、59号住居跡出土土器

図版39 第61号、63号、66号住居跡出土土器

図版40 第66号、67号、68号住居跡出土土器

図版41 第68号住居跡出土土器

図版42 第68号住居跡出土土器

図版43 第68号住居跡出土土器

図版44 第69号、70号、72号住居跡出土土器

図版45 第73号、76号、77号、
79号住居跡出土土器

図版46 第80号、81号、91号住居跡、
第1号方形周溝墓出土土器

図版47 第3号、4号方形周溝墓出土土器

図版48 第4号、5号方形周溝墓出土土器

図版49 第5号、6号方形周溝墓出土土器

図版50 第8号、9号、
10号方形周溝墓出土遺物

図版51 第10号、11号方形周溝墓出土土器

図版52 第11号方形周溝墓出土土器

図版53 第11号方形周溝墓出土土器

図版54 第11号、13号、15号方形周溝墓
第2号古墳跡出土土器

図版55 第3号、4号、
6号古墳跡出土遺物

図版56 第7号、10号古墳跡出土土器

図版57 第10号、11号古墳跡出土土器

図版58 第11号、15号古墳跡出土土器

図版59 第15号古墳跡出土土器

図版60 第1号古墳跡出土円筒埴輪
第9号古墳跡出土形象埴輪

図版61 第9号古墳跡出土形象埴輪

図版62 第15号古墳跡出土円筒埴輪

- 図版63 第15号古墳跡出土円筒埴輪
- 図版64 第86号、90号、92号住居跡出土遺物
- 図版65 第92号、95号、96号住居跡出土遺物
蔵骨器
- 図版66 墨書土器
- 図版67 中近世土壙14、31、58、
213 出土円筒埴輪
- 図版68 43・44出土古銭、
第4号井戸跡出土土器
- 図版69 第11号、14号、44号溝跡出土土器
- 図版70 第52号溝跡出土遺物、
土葬墓6、27、29、30、32出土土器
- 図版71 土葬墓出土古銭
- 図版72 性格不明遺構2、
H区土器集中区出土土器
- 図版73 I区土器集中区出土土器
- 図版74 グリッド出土土器
- 図版75 グリッド出土遺物、金属製品、
表面採集土器
- 図版76 代正寺遺跡瓦、大西遺跡瓦
- 図版77 J区航空写真、I・J区遠景
- 図版78 第1号、2号壺棺墓
- 図版79 第1号住居跡遺物
- 図版80 第1号、2～4号、5・6号、
8・9号、13号住居跡
- 図版81 第18号、25号、30号、
32・34号、42号住居跡
- 図版82 第52号、55・56号、
56号住居跡、L区遺構
- 図版83 K区調査風景、第50号、62号、
64号、65号、67号住居跡、遠景
- 図版84 第1号住居跡出土土器
- 図版85 第1号住居跡出土土器
- 図版86 第1号住居跡出土土器
- 図版87 第5号、6号住居跡出土土器
- 図版88 第11号、16号住居跡出土土器
- 図版89 第16号、19号、21号、
27号住居跡出土土器
- 図版90 第28号、29号、36号、
41号住居跡出土土器
- 図版91 第41号、43号、
48号住居跡出土土器
- 図版92 第50号、52号、
54号住居跡出土土器
- 図版93 第54号住居跡出土土器
- 図版94 第48号・52号住居跡出土遺物、
第56号、58号、
60号住居跡出土土器
- 図版95 第62号住居跡出土土器
- 図版96 第62号住居跡出土土器
- 図版97 第62号住居跡出土土器
- 図版98 壺棺墓出土土器
- 図版99 j区包含層、第22号、
43号土壙出土土器
- 図版100 第44号a・b、58号、
168号土壙出土土器、
- 図版101 グリッド一括遺物
- 図版102 グリッド一括遺物
- 図版103 グリッド一括遺物
- 図版104 表面採集遺物、鉄製品

I 発掘調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

埼玉県では増大する交通量に対処するため、各種の道路建設工事が進められている。一般国道407号のバイパス建設は慢性的な交通渋滞の打開と、埼玉県中央部の交通量の増大と幹線交通網の整備を図る目的をもって、埼玉県土木部によって建設事業が計画された。こうした開発事業に対応するために県教育局指導部文化財保護課では、開発関係部局と各種の事前競技を行い、文化財保護と開発事業の円滑な調整を進めているところである。昭和61年8月9日付道建第577号で、道路建設課長から文化財保護課長あて国道407号の「道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」照会があった。

これに対し文化財保護課では、埋蔵文化財範囲確認調査を実施し、その結果に基づき、昭和62年1月20日付け教文第459-3号により次のとおり回答した。

1. 事業予定地には弥生～平安時代にかけての集落遺跡が所在する。
2. この埋蔵文化財包蔵地の取り扱いは現状保存することが望ましい。
3. 工事計画上やむを得ず現状変更する場合には文化財保護法第57条の3の規定に従って、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること。
4. 発掘調査にあたっては、当課と協議すること。

この確認調査の成果に基づいて、道路建設課と文化財保護課は埋蔵文化財包蔵地の保存策について協議を重ねたが、交通渋滞緩和を目的とした道路建設計画でもあり、計画の変更は不可能と判断されたため、やむを得ず記録保存の措置を講ずることになった。

発掘調査の実施については、道路建設課、文化財保護課並びに財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の三者で事前協議を行い、協議が整ったため、その旨を文化財保護課から道路建設課長並びに財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長あて通知し、これにより両者は、発掘調査に係わる委託契約を締結した。

発掘調査の実施に先立って、埼玉県知事から文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘通知が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から同法第57条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査届が提出され、発掘調査は、昭和62年8月から開始された。

なお、発掘調査届に対する文化庁長官からの指示通知番号は、昭和62年10月9日付け委保第5の1448号である。

(文化財保護課)

2 発掘調査・整理・報告書刊行事業の組織

主体者 (財) 埼玉県埋蔵文化財
調査事業団

1 発掘 (昭和62年度)

庶務経理

発掘

理事長

副理事長

常務理事

(兼) 調査研究部長

理事 (兼) 管理部長

(管理部)

理事 (兼) 管理部長

主査

主事

主事

主事

主事

(調査研究部)

常務理事

(兼) 調査研究部長

調査研究部副部長

調査研究第3課長

調査員

調査員

長井五郎

百瀬陽二

早川智明

原田家次

原田家次

関野栄一

江田和美

岡野美智子

福田 浩

本庄朗人

早川智明

塩野 博

宮崎朝雄

石塚和則

鈴木孝之

2 発掘 (昭和63年度)

庶務経理

発掘

理事長

副理事長

常務理事

(兼) 調査研究部長

理事 (兼) 管理部長

(管理部)

理事 (兼) 管理部長

管理課長

主事

主事

主事

主事

(調査研究部)

常務理事

(兼) 調査研究部長

調査研究部副部長

調査研究第3課長

調査員

調査員

長井五郎

百瀬陽二

早川智明

原田家次

原田家次

関野栄一

江田和美

岡野美智子

本庄朗人

斎藤勝秀

早川智明

塩野 博

宮崎朝雄

石塚和則

鈴木孝之

3 発掘・整理 (平成元年度)

	理事長	荒井修二
	副理事長	百瀬陽二
	常務理事	
	(兼) 管理部長	古市芳之
庶務経理	理事 (兼) 調査研究部長 (管理部)	吉川國夫
	常務理事	
	(兼) 管理部長	古市芳之
	管理課長	関野栄一
	主事	江田和美
	主事	岡野美智子
	主事	本庄朗人
	主事	斎藤勝秀
発掘・整理	(調査研究部)	
	理事 (兼) 調査研究部長	吉川國夫
(発掘)	調査研究部副部長	塩野 博
	調査研究第3課長	宮崎朝雄
	主任調査員	金子直行
	主任調査員	石塚和則
	調査員	山本 靖
(整理)	調査研究第4課長	小久保徹
	調査員	鈴木孝之

4 整理 (平成2年度)

	理事長	荒井修二
	副理事長	早川智明
	常務理事	
	(兼) 管理部長	古市芳之
庶務経理	理事 (兼) 調査部長 (管理部)	吉川國夫
	常務理事	
	(兼) 管理部長	古市芳之
	庶務課長	高田弘義
	主査	松本 晋
	主事	長瀧美智子
	管理課長	関野栄一
	主事	江田和美
	主事	本庄朗人 (～H2.9)
	主事	斎藤勝秀
	主事	菊池 久 (H2.10～)
整理	(資料部)	
	資料部長	栗原文蔵
	資料部副部長	

5 整理 (平成3年度)

主体者 (財) 埼玉県埋蔵文化財
調査事業団
庶務経理

整理

(兼) 資料整理第1課長	増田逸朗
調査員	鈴木孝之
理事長	荒井修二
副理事長	早川智明
常務理事	
(兼) 管理部長	倉持 悦夫
理事(兼) 調査部長	栗原 文蔵
(管理部)	
常務理事	
(兼) 管理部長	倉持悦夫
庶務課長	高田弘義
主査	松本 晋
主事	長瀧美智子
管理課長	関野栄一
主事	江田和美
主事	福田昭美
主事	腰塚 雄二
主事	菊池 久
(資料部)	
資料部長	中島利治
資料部副部長	
(兼) 資料整理第1課長	増田逸朗
主任調査員	鈴木孝之

3 発掘調査の方法と経過

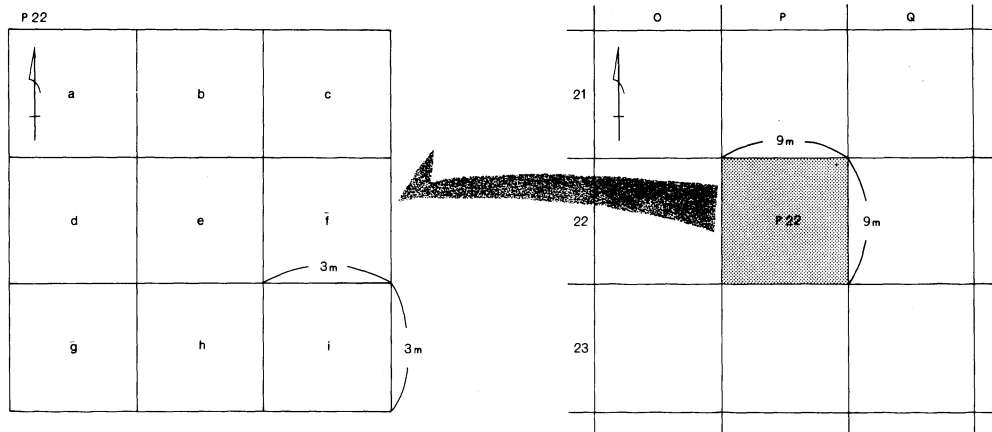
(1) 発掘調査の概要と方法

本発掘調査は、一般国道407号線東松山市地内の、バイパス建設に先立ち実施されたものである。調査対象地は、代正寺遺跡・大西遺跡併せて、高坂台地東部の正代地区・代正寺地区・大黒部地区にまたがる。台地を北東から南西に分断する格好になり、幅20~31m・全長約880m、総面積は約20,500平方メートルである。調査地の地目は畑地が大部分であり、一部に雑木林と墓地が含まれる。周辺については、畑地・宅地・雑木林が多くを占める。台地平坦面では地表面のレベルに変化が小さいためか、現耕作土下層面とローム層との間隔が短く、遺構の遺存状況はきわめて悪いといわざるを得ない。

遺跡が台地上に位置していることから、調査時における水はけは概ね良好であったが、代正寺遺跡と大西遺跡を分ける小支谷に面した斜面部（I区・J区）では、湧水と集水のため調査は困難であった。

既に東松山市教育委員会による分布調査によって周知されていた、東松山市No48遺跡・No51遺跡及びNo54遺跡内を、今回の調査範囲が通過することとなった。前二者は、代正寺という小字名を代表させて代正寺遺跡とした。後者については、東松山市No54遺跡の南東、高坂台地の南端部には大黒部遺跡が存在し、位置的にも内容的にも同一の遺跡と考えられる。しかし、大黒部遺跡が遺物採取のみであるのに対し、東松山市No54遺跡は、一部が市の教育委員会によって大西遺跡として発掘調査されている。この点を重視し、今回の調査範囲南半、小支谷以南を大西遺跡と命名した。

調査範囲は現道によって、計12箇所に分割されており、便宜上北側からA区~L区とした。調査グリッドは、調査区域全体を網羅することを前提に9×9mの大グリッドを設定し、その中に3×3mの小グリッドを設けた。グリッド名は、調査区の北から南へ1、2・・・とアラビア数字で、西から東へA、B・・・と大文字のアルファベットを付し、A以西はA'、B'・・・というように、「'」(ダッシュ)を付して西へ送った。大グリッド内は、小文字でa~iに9分割をした。



(2) 発掘調査の経過

1987年度（昭和62年度）

初年度は、代正寺遺跡のみが調査対象とされた。調査は、できる限り北側部分から南へ進むことを基本とした。用地買収の経過・排土の処理・調査の手順等々に関して、東松山土木事務所と相談のうえ、C区から表土削平を開始、排土については主に搬出することとなった。

調査は、C区・D区・E区に対して行われた。調査面積は6,500㎡。

1987年（昭和62年）

7月下旬 現場事務所建設、器材・重機の搬入。

東松山土木事務所の立ち会いにより、C区～F区の縄張りを行う。

8月 C区・D区・E区の表土削平開始。

9月 C区より調査開始。東松山土木事務所との打ち合わせにより、A区・B区の調査は次年度と決定。

10月 C区南部の調査と並行して、D区の調査を開始。

1988年（昭和63年）

2月 D区の調査を終了し、E区に入る。

3月 E区の調査を終了。これと並行してA区・B区・F区の表土削平を終了。

1988年度（昭和63年度）

2年目に入って、代正寺遺跡の他に、大西遺跡の調査も開始された。調査範囲は、代正寺遺跡がA区・B区、C区・D区の拡幅部分、F区、G区南半部、H区、I区の約5,600㎡。大西遺跡は、J区、K区南部の約4,400㎡。総計約10,000㎡である。

1988年（昭和63年）

4月 A区・F区を並行して調査開始。

6～7月 I区・J区の表土削平。A区・F区・G区南半部の調査終了。

9月 J区～L区の表土削平。H区の調査開始。

11月 H区の調査終了。I区の調査開始。現場事務所を、K区南部の攪乱部分に移転。

12月 I区の調査終了。J区の調査を開始。

1989年（平成元年）

1月 J区の調査終了。K区の調査を開始。

2～3月 K区の調査と並行して、C区・D区拡幅部及び、その他現道部分の調査を行う。

1989年度（平成元年度）

3年目は、調査の最終年度に当たり、残り部分の調査を行った。代正寺遺跡は約1,600㎡、大西遺跡は約2,400㎡、総計4,000㎡。

1989年（平成元年）

1～3月 K区の残り部分・L区その他、現道部分・拡幅部分等々の調査終了。器材・現場事務所などを撤収し、全ての調査を終了。

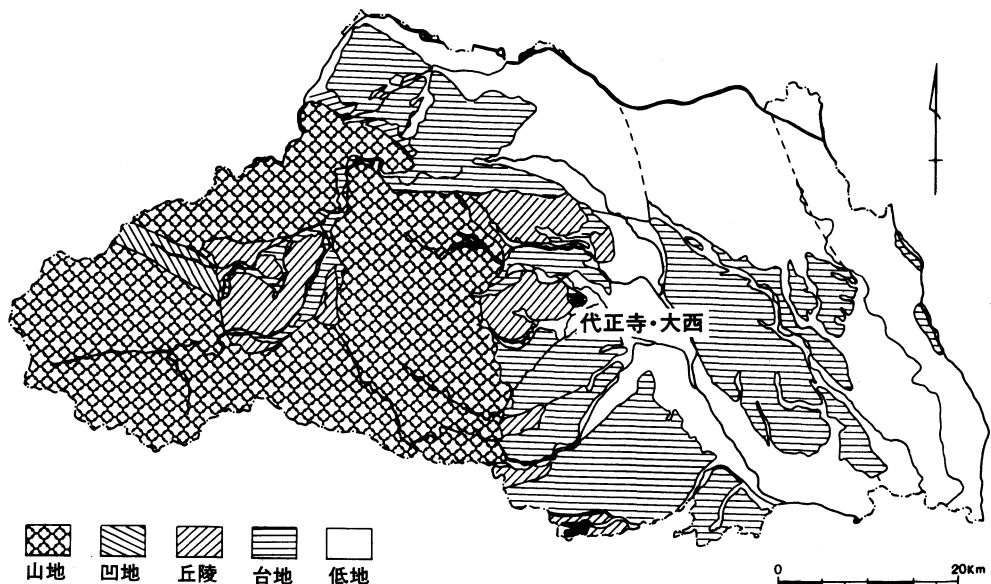
II 遺跡の立地と環境

代正寺遺跡は埼玉県東松山市大字宮鼻字代正寺55-1番地他に、大西遺跡は東松山市大字宮鼻字八幡脇161-1番地他の、東武東上線高坂駅からそれぞれ南東へ500m~600m程の距離に所在する。

比企丘陵は、関東平野東部にひかえる秩父山地東縁に派生をし、埼玉県のほぼ中央に位置している。北側は和田吉野川、南側は越辺川に面し、東側は荒川の沖積地に臨む。そして都幾川を境として、北比企丘陵と南比企丘陵とに別れ、後者には、物見山丘陵や岩殿丘陵の別称がある。高坂台地は、南比企丘陵の東北部、都幾川、越辺川とその支流である九十九川に開析された、南東方向へ延びる一辺約3kmの三角形を呈する洪積台地である。台地上は平坦部が広く、現在に至るまで集落を営むのに適した条件を備えていたといえる。北側縁辺は、崖状もしくは急斜面であり、南側縁辺は、小規模な谷が幾つか入るなどしており、比較的緩やかな斜面を形成している。おおむね標高は26~30m、水田との比高差は8~12mを測る。

代正寺遺跡と大西遺跡は、ともに高坂台地の中央よりやや東寄りに遺跡範囲が推定されており、距離的にもごく近接している。前者が台地縁辺部のみでなく、遺跡の推定範囲中央も広く発掘されているのに対し、後者は推定範囲の縁辺部を小規模に調査されたのみで、遺跡の性格は明確ではない、というのが現状である。例えば部分的であろうとも、遺構的にも遺物的にも共通点をもっているならば、両遺跡がまったくの無関係ではあり得ず、同一遺跡とするべきかも知れない。

しかし、両遺跡は、台地を東西に分断する形で南へ開析する谷を挟んで対峙している。また、本書において報告するように、二者はある程度内容を異にするように見受けられる。遺跡を二つとして看做すのも、あながち矛盾したことも思われぬ。関連性の有無で遺跡を区切っていくのは、



第1図 遺跡の位置

遺跡の定義の問題とも関わり、本項では述べるだけの準備がない。二遺跡として扱うこととした。

東松山市教育委員会の調査による大西遺跡A区と、本書で報告する大西遺跡とは、高坂台地において同じ小支台上にのっていることから、同一の遺跡と判断した。B区、C区・・・として命名していくことも考えたが、将来的にみて、遺跡範囲内での調査箇所・順序等々に関して具体的な計画のない現状ではかえって繁雑化を招くのみであると判断して、今回は遺跡内での区分けを行わなかった。大黒部遺跡(No.3)も、地点的に観て、大西遺跡と同一の遺跡であると推定される。但し、前者は遺物の採取地点に命名されたものであり、後者は発掘調査がなされ、遺跡の範囲推定も行われている周知の遺跡である。そこで今回の調査では、大西遺跡の名称を用いることとした。

次に、高坂台地上に立地する遺跡について概述していくことにする。高坂台地は遺跡の密度が高く、時代的にも面的にも広範囲に亘っている。弥生時代以前については、先土器時代の遺跡は現状では知られておらず、縄文時代においても中期の土器が台地南部・東部で確認されているのみであり、他の時期の遺物は未確認である。この台地上での調査例がまだまだ少ないことにも起因しようが、これらの時期には、人々の営みが活発ではなかったといえるかもしれない。高坂台地が活気づくのは、弥生時代中期後半以降である。

南比企丘陵と、高坂台地南縁の接点に立地する杉の木遺跡(No.5)は、弥生時代後期の吉ヶ谷式土器(縄文系)が検出された集落跡である。台地北西縁と丘陵との接点に立地する、諏訪山古墳群(O)の調査においても(29号墳=M、33号墳=N)、吉ヶ谷式の土器をもった住居跡が確認されている。下寺前遺跡(No.4)は、台地中央の南縁、西と東を緩やかな谷に挟まれた、舌状台地の先端部に立地している。古墳～平安時代の集落跡であるが、弥生時代後期の吉ヶ谷式土器と岩鼻式土器(櫛描き文系)が共に出土している(註1)。大黒部遺跡は、発掘調査が行われていないが、弥生時代後期(岩鼻式)・古墳時代後期・平安時代の土器が採取されている。台地南東部に位置する小代館跡(No.4)の範囲確認調査においては、四隅をブリッジ状に残す方形周溝墓6基が確認された。遺物は検出されなかったが、近辺に弥生集落の存在を想定させる(註2)。

高坂台地には、諏訪山古墳群、南縁に毛塚古墳群(P)、東部に高坂古墳群(Q)が、主に台地縁部を占地して存在する。諏訪山古墳群は、1967年(昭和42年)の分布調査で、37基が確認されている。6世紀前半を中心として、7世紀まで継続される古墳群である。諏訪山29号墳は、同古墳群における最古の古墳であり、4世紀中葉に比定される朝顔状壺形土器が出土している。前方部を南東に向け、周囲に幅10mの溝を巡らせた、全長53mの前方後方墳である。諏訪山33号墳は、直径約33mの円墳とみられ、円筒埴輪などから5世紀第3四半期に比定される。毛塚古墳群(P)の具体的内容については、殆ど明らかになっていない。高済寺古墳(R)を含む高坂古墳群についても、多くの古墳が失われており6基(A～F)の現存に止まる。今回の調査で検出された16基の古墳跡は、支群の別はあろうが、この高坂古墳群の範疇に含まれるといえよう。下寺前遺跡については、古墳時代前期の住居跡・方形周溝墓、後期の住居跡・古墳跡、さらに奈良・平安時代の住居跡等々も検出されており、内容の豊富さを窺わせる。

古墳時代の集落については、前期から後期へ、さらに奈良・平安時代にまで及ぶ大規模な集落跡の存在が、大西遺跡A区として知られていた。本書における大西遺跡は、大西遺跡A区をも包括し

て命名された名称であることは、既に述べたとおりである。

なお、弥生・古墳時代の遺物については、三番町遺跡や東形遺跡においても採取されており、既期の集落の存在が推定されてきた。御霊神社境内での小代館跡の範囲確認調査では平安時代に帰属する住居跡が確認されている。中近世については、高坂氏館跡（No44）と小代氏館跡が代表的なものとして挙げられ、これらと関連した集落や施設の存在は充分想定される。

今回の、代正寺遺跡・大西遺跡の調査結果を考え合わせると、縄文時代以前に関しては不明確ではあるが、高坂台地東部は、そのほぼ全域が長期間に亘って、人々の生活の舞台として適した立地環境であったと看做すことができよう。そしてこのことは、現在に至っても同様であるといえよう。

次に、周辺地域について弥生・古墳時代を中心に概観したい。弥生時代中期後半の宮ノ台式土器は、県南部の大宮台地や武蔵野台地北部に多く出土し、さらに入間川を越えた川越市霞ヶ関遺跡、登戸遺跡、猫田遺跡、坂戸市附島遺跡（No39）においても確認され、分布圏の北限とされてきた。

後期については、大谷の支谷に面した丘陵突端部に立地する吉ヶ谷遺跡と、市ノ川とその支流滑川の形成による岩鼻台地南縁に位置する岩鼻遺跡（No19）は、共に土器型式の指標とされる遺跡である。各々遺跡の立地条件や、土器の文様帯や製作技法に特徴をもっている。吉ヶ谷式土器を出土する遺跡は、沖積地を臨む丘陵突端部や台地縁辺部に主として立地し、沖積面との比高差は10～60m程。岩鼻式土器を出土する遺跡は、台地縁辺部から自然堤防上の微高地を主に占地し、沖積面との比高差は10m以下である。前者の主要な遺跡には大里郡大里村船木遺跡、市の川右岸の台地上に立地する比企郡嵐山町屋田遺跡、岩殿丘陵南東縁に位置する根平遺跡、杉の木遺跡、駒堀遺跡（No34）、松山台地の籠田遺跡、下道添遺跡（No23）、高麗川右岸の台地縁辺の坂戸市花影遺跡等々が挙げられる。後者の主要な遺跡としては、松久丘陵東端部の舌状台地上の大里郡寄居町の用土・平遺跡、都幾川左岸の雉子山遺跡（No45）、附川遺跡（No46）、岩鼻台地南縁の八幡遺跡、坂戸台地北東端の坂戸市附島遺跡などがある。

次いで、古墳時代の遺跡を瞥見してみる。岩殿丘陵上には、舞台・桜山・田木山・根平・駒堀の各古墳群が存在しているが、その多くは小円墳で、横穴式石室は凝灰岩切石だけでなく、河原石や緑泥片岩等々の石材を用いている。都幾川を挟み対峙する松山台地では、五領遺跡（No21）、番清水遺跡（No22）、下道添遺跡（No23）、古凍根岸裏遺跡（No24）を、主要な遺跡として挙げることができる。五領遺跡（No21）は、近畿・山陰・北陸・東海各地の土器様式を導入・採用、あるいは製品が一部搬入されているとみられる。番清水遺跡では、古墳時代～平安時代まで営まれた遺跡であるというのみでなく、南西隅にブリッジを有する大型の方形周溝墓が単独で検出されている。方形周溝墓については、下道添遺跡や古凍根岸裏遺跡でも、10m以下程度のものが同時期に存在している。そして各々の分布は、近接しているものはあまりなく、ある程度距離を隔てて占地している。その他に古墳時代後期の遺跡として、古凍下山遺跡、観音寺遺跡、八幡遺跡などがある。野本将軍塚古墳（L）は比企地方最大の古墳で、松山台地の南縁、都幾川の沖積地際に立地する。同台地上には、古凍古墳群（S）・柏崎古墳群（K）・附川古墳群・下唐子古墳群があり、この周辺には、岩鼻古墳群・久米田古墳群・山の根古墳群（J）がある。市野川・滑川流域の丘陵上に占地する古墳

には、凝灰岩を石室構築材とする例が多い。

越辺川対岸の、越辺川と高麗川に挟まれた毛呂山台地北東部の低位台地上には、古墳時代初頭から中世に及ぶ大規模な複合遺跡が存在する。坂戸市棚田遺跡 (No25)・稲荷前遺跡 (No26)・桑原A・B遺跡 (No27)・広面A・B遺跡 (No28)・中耕遺跡 (No29)・塚の越遺跡 (No30)・田島遺跡・金井遺跡 (No32)・足洗遺跡 (No33)等々がそれで、常時冠水していることから、条里成立以前の遺跡の存在は、推定しづらい地域であった。棚田遺跡は6世紀初頭の集落跡、稲荷前遺跡は古墳時代初頭の方形周溝墓や4～10世紀の住居跡ほか、桑原A・B遺跡では、古墳時代後期の水田跡や、後期～平安時代の住居跡120軒ほかの、遺構が検出されているが、集落の中心は6世紀前半とされる。広面A・B遺跡は、古墳時代前期の方形周溝墓22基が、中耕遺跡では古墳時代初頭の方形周溝墓や同時期の住居跡等が多数確認され、塚の越遺跡においては、弥生時代中期の住居跡2軒の他、古墳時代後期の前方後円墳 (1基)・住居跡67軒や、奈良・平安時代の遺構が多数検出された。谷に面した古墳時代後期の住居跡には、排水溝が住居隅から谷に向かって設けられたものである。金井遺跡は古墳時代後期を中心とした集落跡、足洗遺跡は7～9世紀を中心とした集落跡とされる。

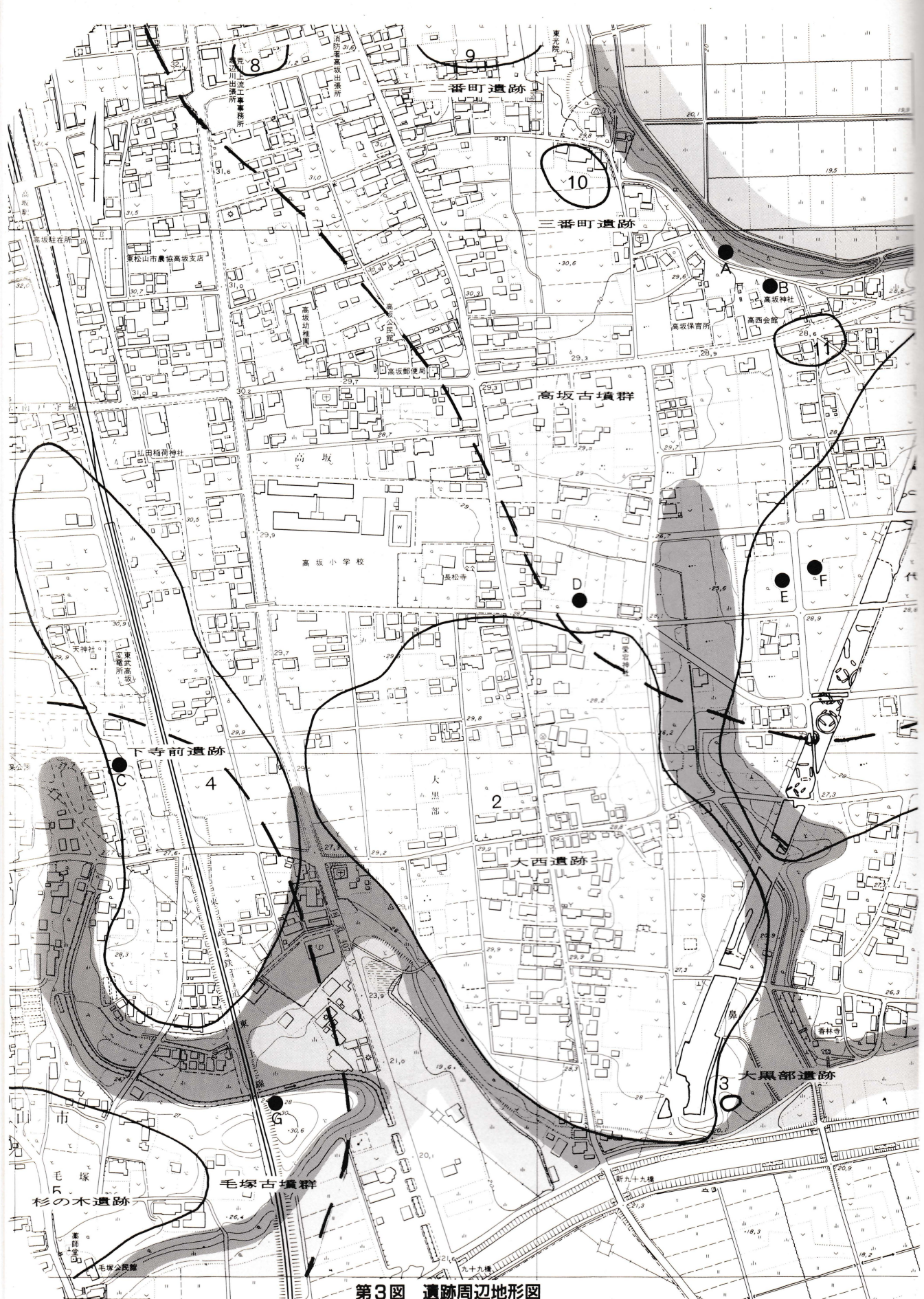
以上の点から、この地域は微地形によって幾つかの地点に区切られ、古墳時代初頭～後期以降、集落域・水田域・墓域等々が、営まれていたと想定される。

第1表 周辺遺跡一覧表

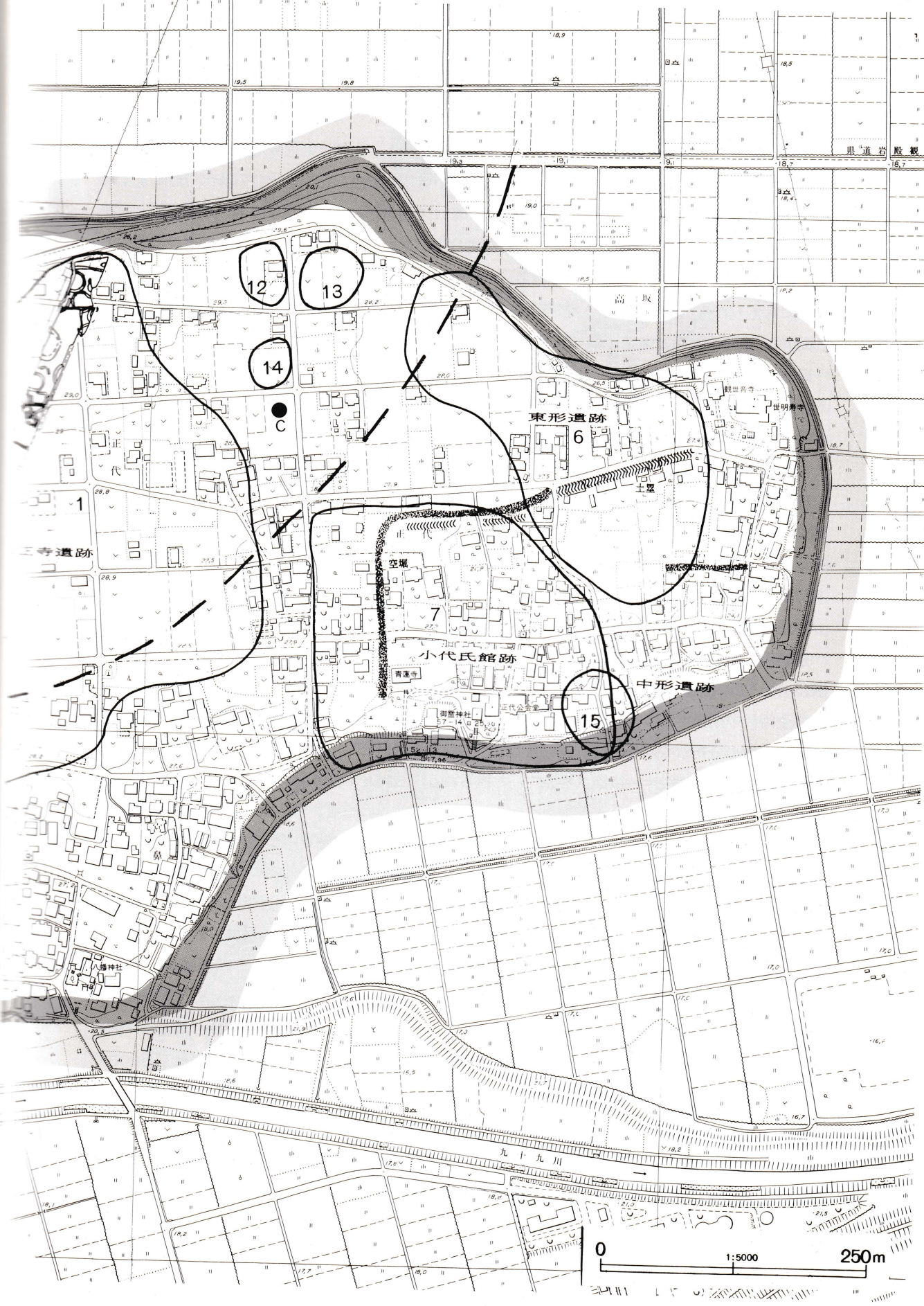
番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	代正寺遺跡	24	古凍根岸裏遺跡	A	東松山市No45遺跡
2	大西遺跡	25	棚田遺跡	B	東松山市No46遺跡
3	大黒部遺跡	26	稲荷前遺跡	C	東松山市No19遺跡
4	下寺前遺跡	27	桑原遺跡	D	東松山市No53遺跡
5	杉の木遺跡	28	広面遺跡	E	東松山市No52遺跡
6	東形遺跡	29	中耕遺跡	F	東松山市No50遺跡
7	小代館跡	30	塚の越遺跡	G	東松山市No61遺跡
8	東松山市No15遺跡	31	三福寺遺跡	H	庚塚古墳
9	二番町遺跡	32	金井遺跡	I	田甲原古墳群
10	三番町遺跡	33	足洗遺跡	J	山の根古墳
11	東松山市No. 47遺跡	34	駒堀遺跡	K	柏崎古墳群
12	東松山市No. 123遺跡	35	勇福寺遺跡	L	野本將軍塚古墳
13	東松山市No. 124遺跡	36	石井前遺跡	M	諏訪山29号墳
14	東松山市No. 128遺跡	37	新町遺跡	N	諏訪山33号墳
15	中形遺跡	38	ひいらぎ遺跡	O	諏訪山古墳群
16	円山遺跡	39	附島遺跡	P	毛塚古墳群
17	田甲原遺跡	40	大平遺跡	O	高坂古墳群
18	沢口遺跡	41	児沢北遺跡	R	高済古墳群
19	岩鼻遺跡	42	物見山遺跡	S	古凍古墳群
20	御所遺跡	43	蔵骨器出土地点		
21	五領遺跡	44	高坂氏館跡		
22	番清水遺跡	45	雉子山遺跡		
23	下道添遺跡	46	附川遺跡		



第2図 周辺の遺跡



第3図 遺跡周辺地形図



III 代正寺遺跡の概要

代正寺遺跡は、高坂台地の中央よりやや東寄りに位置する。北側は台地縁辺部に達し、東側は小代氏館跡推定地際にまで及ぶ。南側は、沖積面にやや舌状に突出した、小支台の基部付近にまで続く。西～西南側については、台地をほぼ東西に分断する谷地形によって区切られ、大西遺跡と対峙する。北西側および東～南側に関しては、現在宅地化が進んでいることから、分布調査が困難であり、推定線としては飽くまでも概略である。今後の調査によって、遺跡はさらに拡大する可能性が十分に考えられる。現状における推定範囲は、600×380m程である。調査範囲は幅22～24m、全長約600m、遺跡の北端と南端、および遺跡範囲の中央付近を発掘調査した形になる。

調査範囲は、現道によって9箇所に分割されており、調査の便宜上、北からA区～I区と銘々した。なお、谷を挟んで南に続く大西遺跡に関しても、代正寺遺跡に引き続きJ区～L区とした。全体的に、遺構の遺存状況はきわめて悪い。その一因として、当時も現在と地表面のレベルが近く、そのため攪乱を受ける度合いが大きかったのではないかと、というのが調査時における印象である。

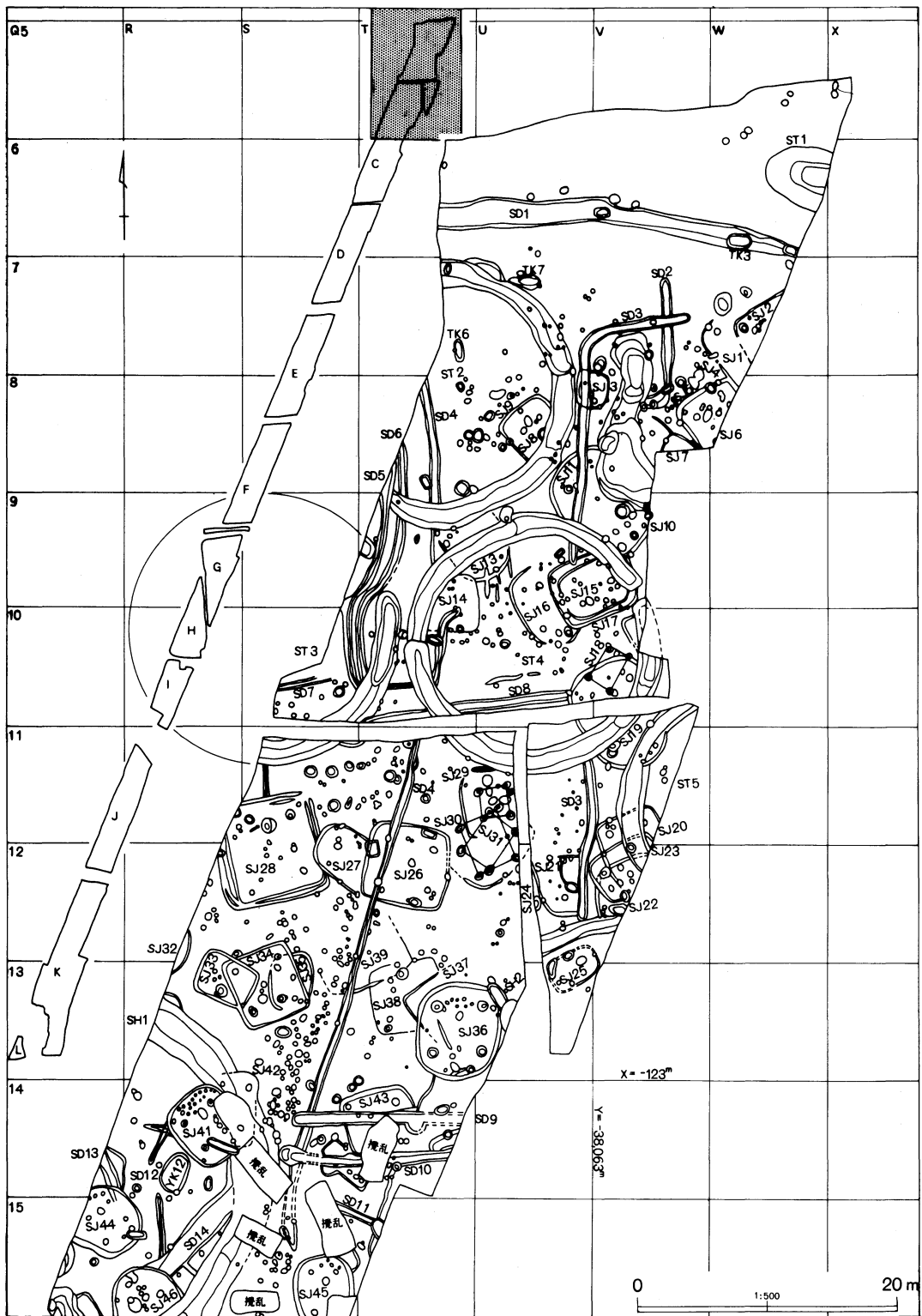
代正寺遺跡において検出された遺構は、以下のとおりである。

縄文時代前期の住居跡1軒、弥生時代中期後半～古墳時代前期の住居跡89軒、弥生時代中期後半～後期の方形周溝墓14基、古墳時代前期の方形周溝墓1基、後期の古墳跡16基、弥生～古墳時代の土壇32基、平安時代の住居跡7軒、土壇5基、中近世の土壇242基、火葬墓(跡)9基、土葬墓37基、井戸跡4基、時期不明の掘建柱建物跡2棟、土壇90基等のほか、溝跡52条、性格不明遺構2基。

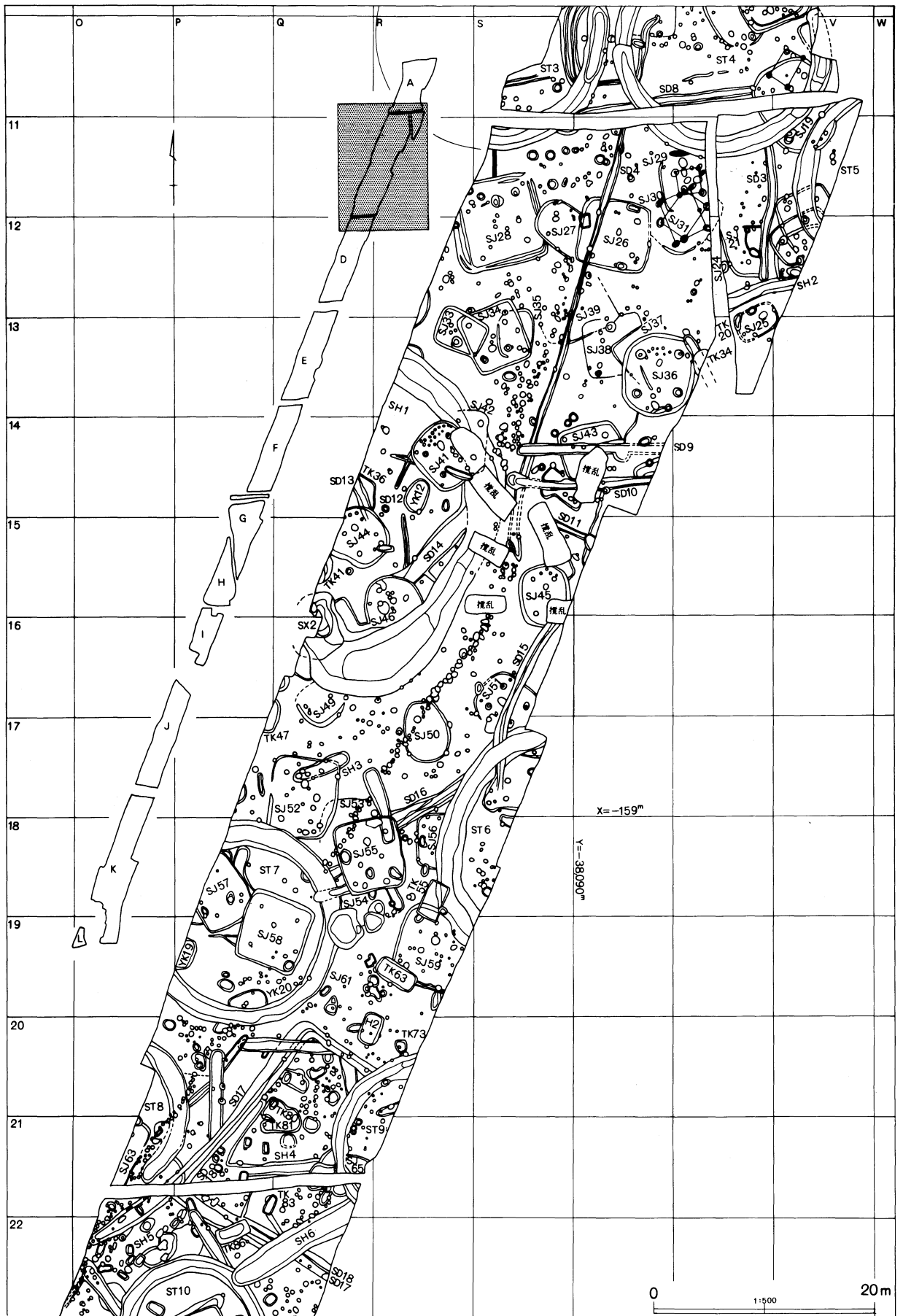
遺跡のほぼ中央付近に、埋没谷の谷頭付近と考えられる部分が検出された(第3図・7図内、破線部分)。この付近は、本遺跡の調査範囲内で、唯一遺構の疎らな箇所といえる。

弥生時代中期後半から古墳時代後期に至るまで、住居跡・方形周溝墓・古墳跡などは、埋没谷を挟んで両側に分布している。この谷を隔てて、別の集落が存在したとの見方もできようが、谷の南部に、弥生時代中期後半～後期(岩鼻式)と観られる住居跡が7軒確認されており、内1軒は埋没谷を切っている。このことから、少なくとも谷頭付近は、この時期すでに埋没し始めていたと推定される。この埋没谷が、どのような広がりを持ち、それとの関わりの中で、遺構がどういった展開をしているのか、今後の調査が待たれる。平安時代の遺構は、遺跡南部においてのみ確認されており、この時期の集落でもある大西遺跡との関連によるとも考えられる。中近世にはいると、遺構自体の集中度は低くなるものの、調査区の全体に及んでいる。主として土壇と溝跡であるが、館跡あるいは屋敷地の存在を示すのであろうか。遺跡北端(A区)と南端(I区)では溝跡が、北寄り(C・D区)に、柵列と推定されるピット列が配されていた。そして、中世における代正寺遺跡の一問題として、近在する小代氏館跡との関連性がある。台地の北・東・南の三方は台地縁辺に囲まれ、さらに部分的にはあるが、土塁や空堀が確認されている。それに対して、平坦面である西側では、館跡に伴う施設や遺構はこれまでのところ知られていない。これらの土壇や溝跡のうちには、あるいは小代氏館跡に関係する遺構もあるのであろうか。

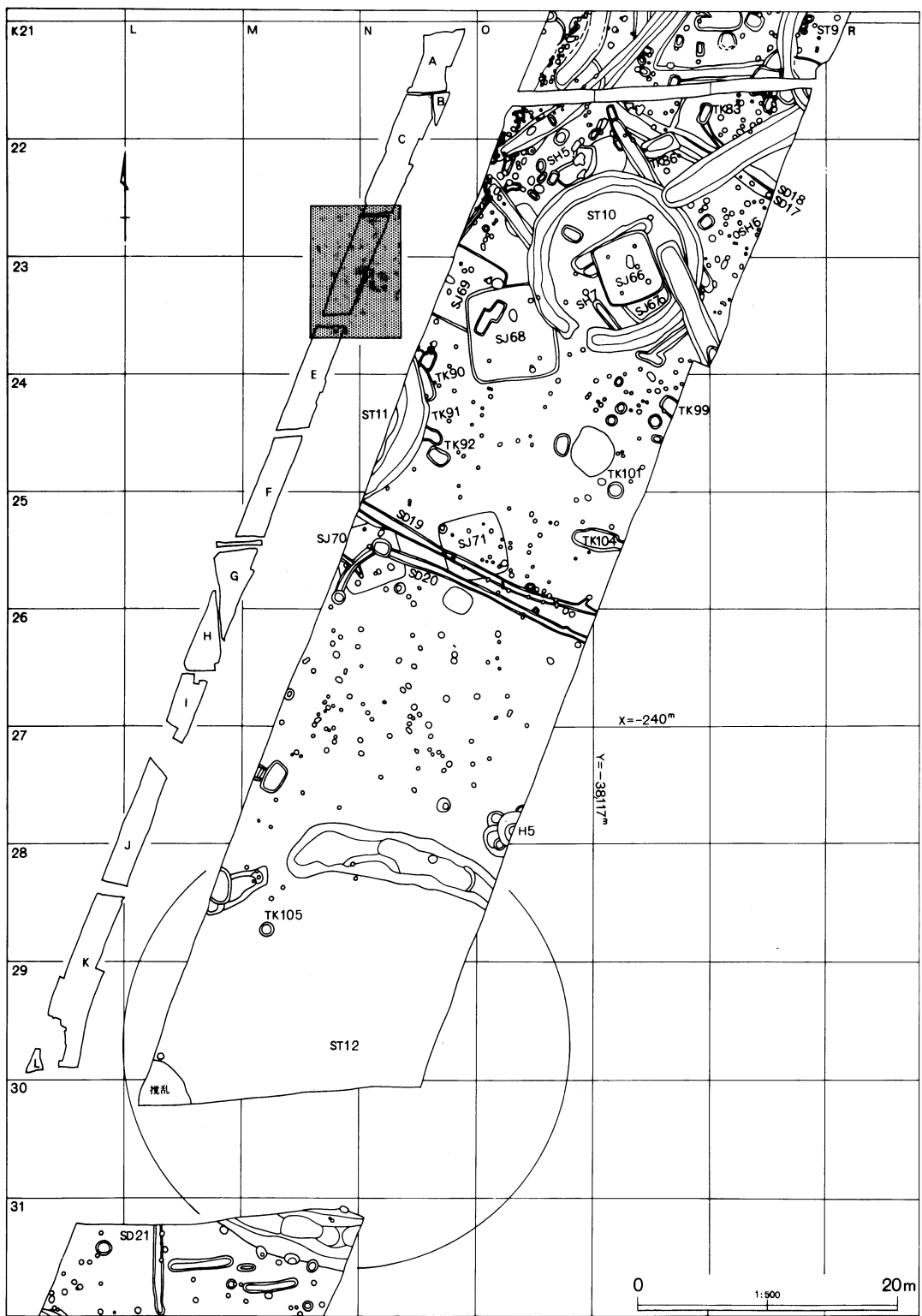
以上にみたように、縄文時代前期、弥生時代中期後半以降、古墳時代・平安時代を経て中近世に至るまで、代正寺遺跡は、さまざまな問題点を含んでいるといえよう。



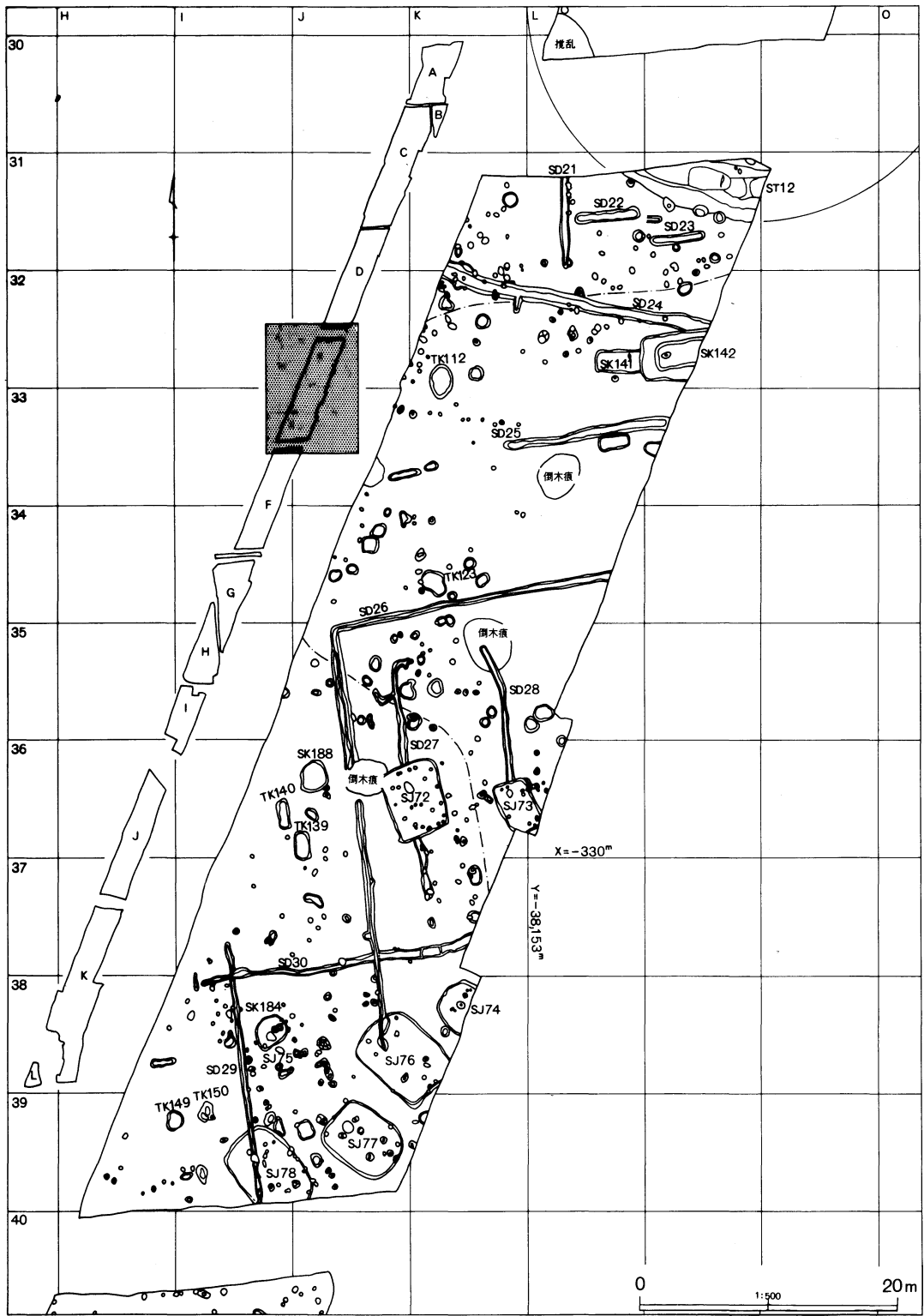
第4図 遺跡全測図(1)



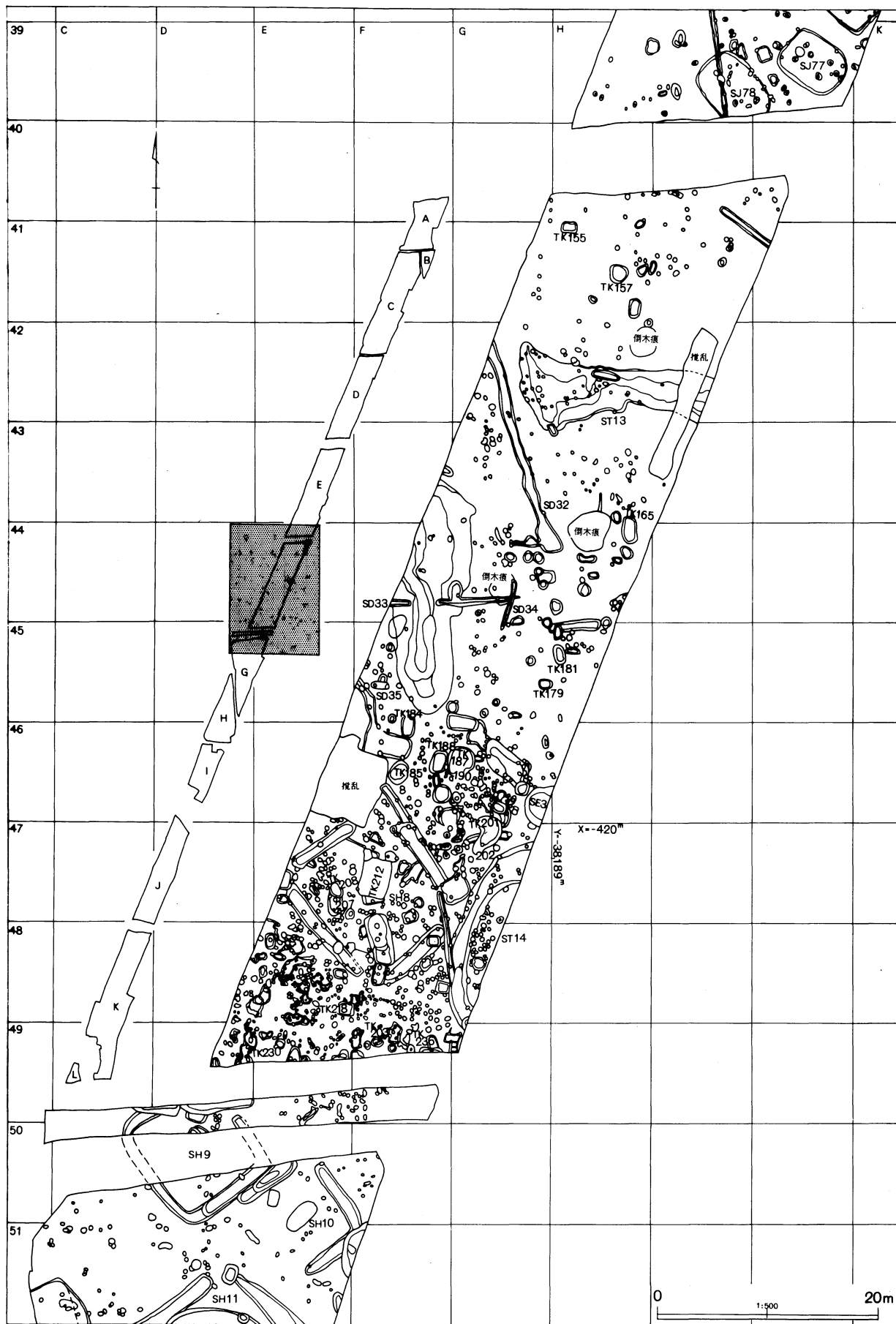
第5図 遺跡全測図②



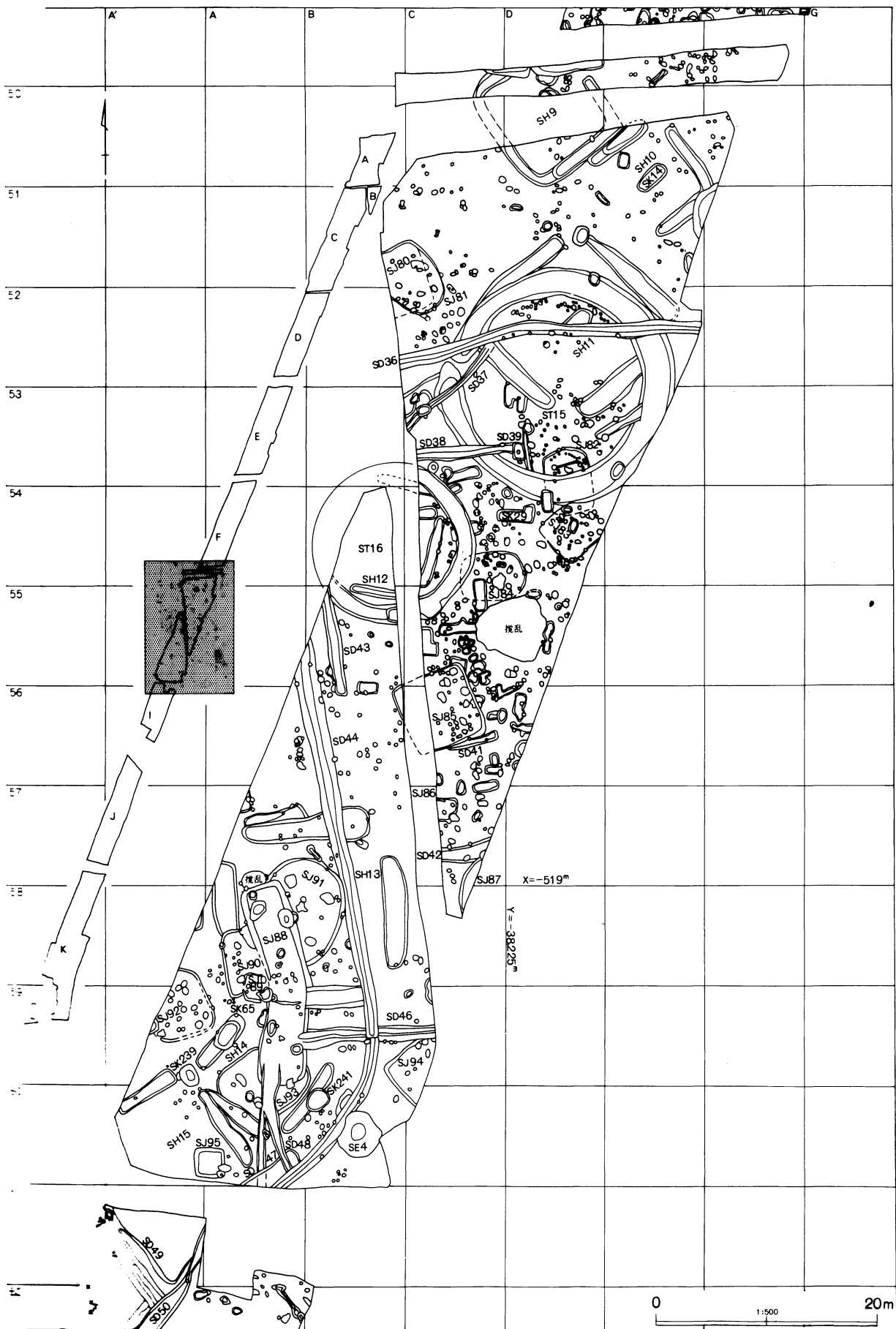
第6圖 遺跡全測図③



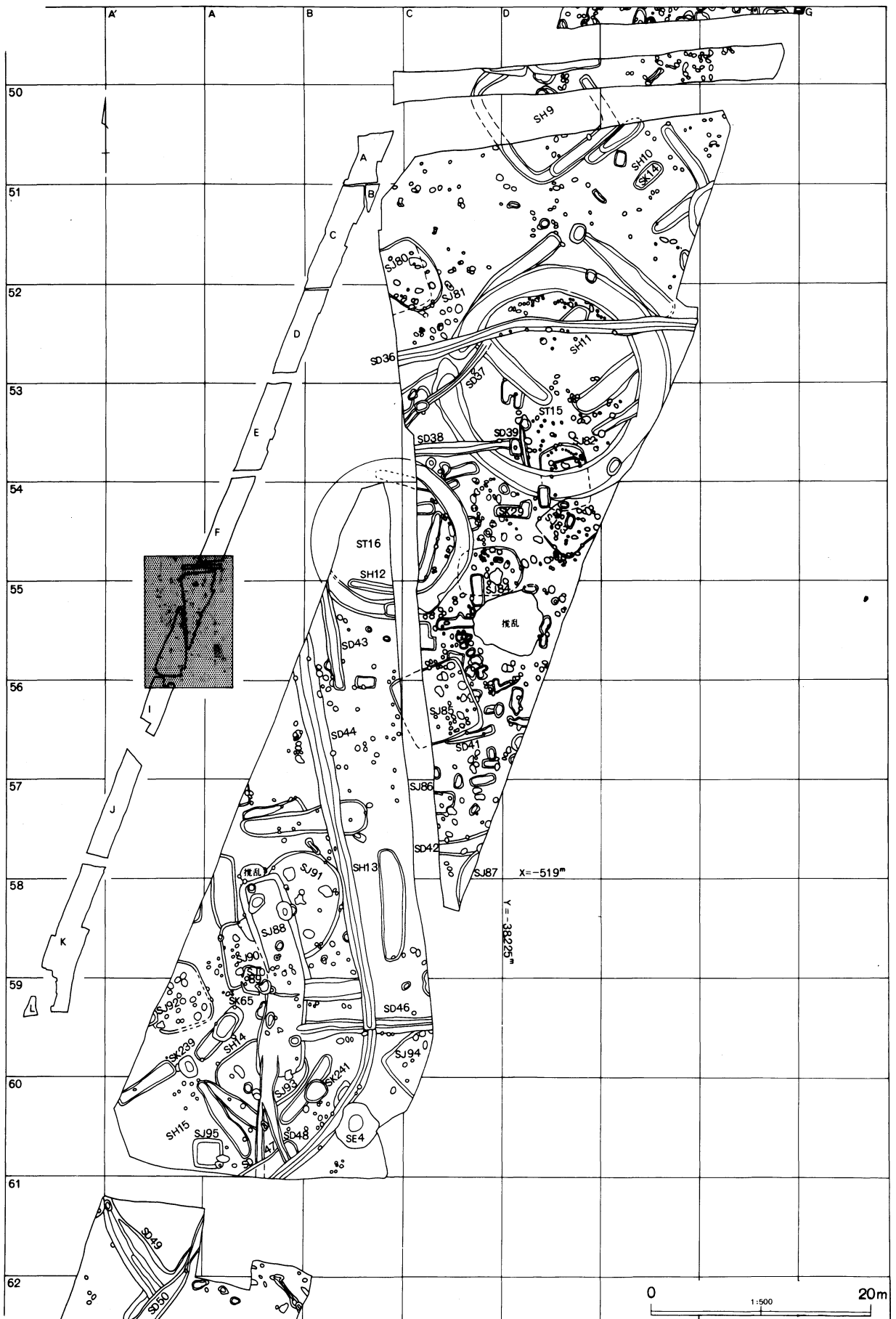
第7図 遺跡全測図(4)



第8圖 遺跡全測図⑤



第9圖 遺跡全測圖(6)



第9図 遺跡全測図(6)



第10図 遺跡全測図(7)

IV 代正寺遺跡の遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第94号住居跡 (第11図)

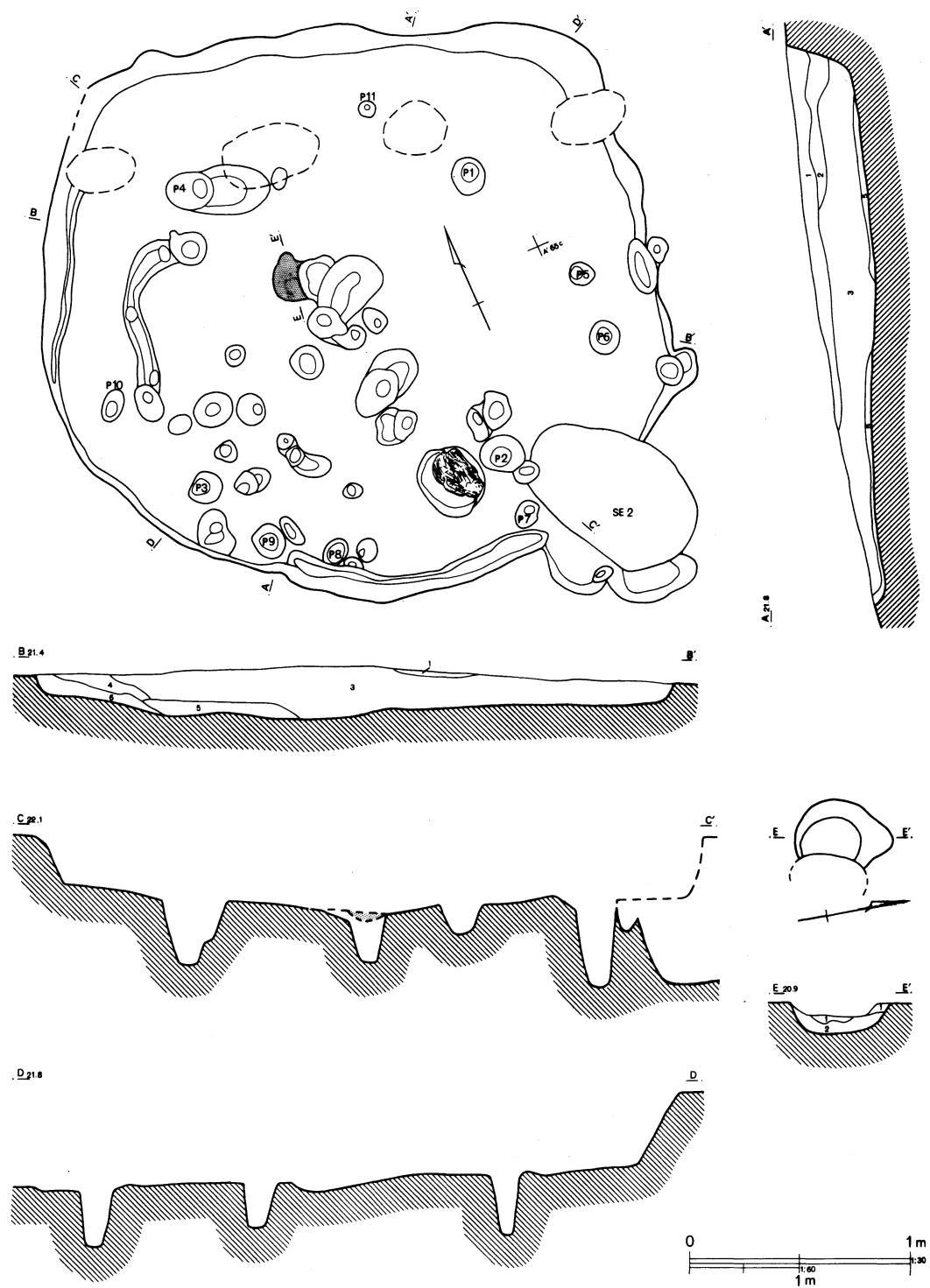
第94号住居跡は、A' 64h グリッドに位置する。南東に開く小支台の、南向き斜面途中に位置する。今回調査した代正寺遺跡の範囲内で、最も南側に一位置する住居跡でもある。北側を第2号掘建柱建物跡に、南東側を第2号井戸跡に切られ、さらに住居跡内を数多くのピットに切られていると推定されるが、概して遺構の遺存状態は良好といえる。南向き斜面に構築された住居跡であるためか、北側壁面の立ち上がりはよく残り、南側では僅かに残るのみであった。

平面規模は、東西方向550cm・南北方向513cmを測り、確認面からの深さは、東西部分では共に17cm、北側では最も深く57cm、南側では8cmを測るのみであった。平面形態は、北側では隅丸の方形に近いが、南側では円形を呈している。P1~P4を支柱穴と推定した。各々の平面規模・形態・床面からの深さは、P1: 34cm×30cm・略円形・54cm、P2: 40cm×32cm・略円形・74cm、P3: 30cm×28cm・略円形・51cm、P4: 42cm×35cm・楕円形・55cmを測り、深くてしっかりとした柱穴であるといえる。各支柱穴間の距離は、P1-P2間で260cm・P2-P3間で266cm・P3-P4間で268cm・P4-P1間で240cmを測り、比較的方形に近いもので、規則正しく配置されている。なお、P5~P11については、支柱穴としての可能性を想定したが、確定するには至らなかった。幅20cm~25cm・深さ5cm程の壁溝が、西側と南側の一部に巡らされている。これ以外の部分についても、床面を精査したが検出はされなかった。西側については、内側にもう1本同規模の溝が、120cm程検出されている。床面は比較的堅固で明瞭なものであり、壁面の立ち上がりについても、直線的であった。住居跡中央より、やや北西寄りに炉跡が1箇所検出された。規模は42cm×32cm(推定)の楕円形、深さは13cmを測る。なお、この炉跡は、ピットを切って設けられている。南東部床面近くから、55cm×32cm程の自然石が出土をした。本住居跡に直接関連はせず、遺構廃棄後の埋没過程で、投棄されたものであろうか。土器破片が小数出土したが、図化し得た遺物は断面実測を合せて23点である。

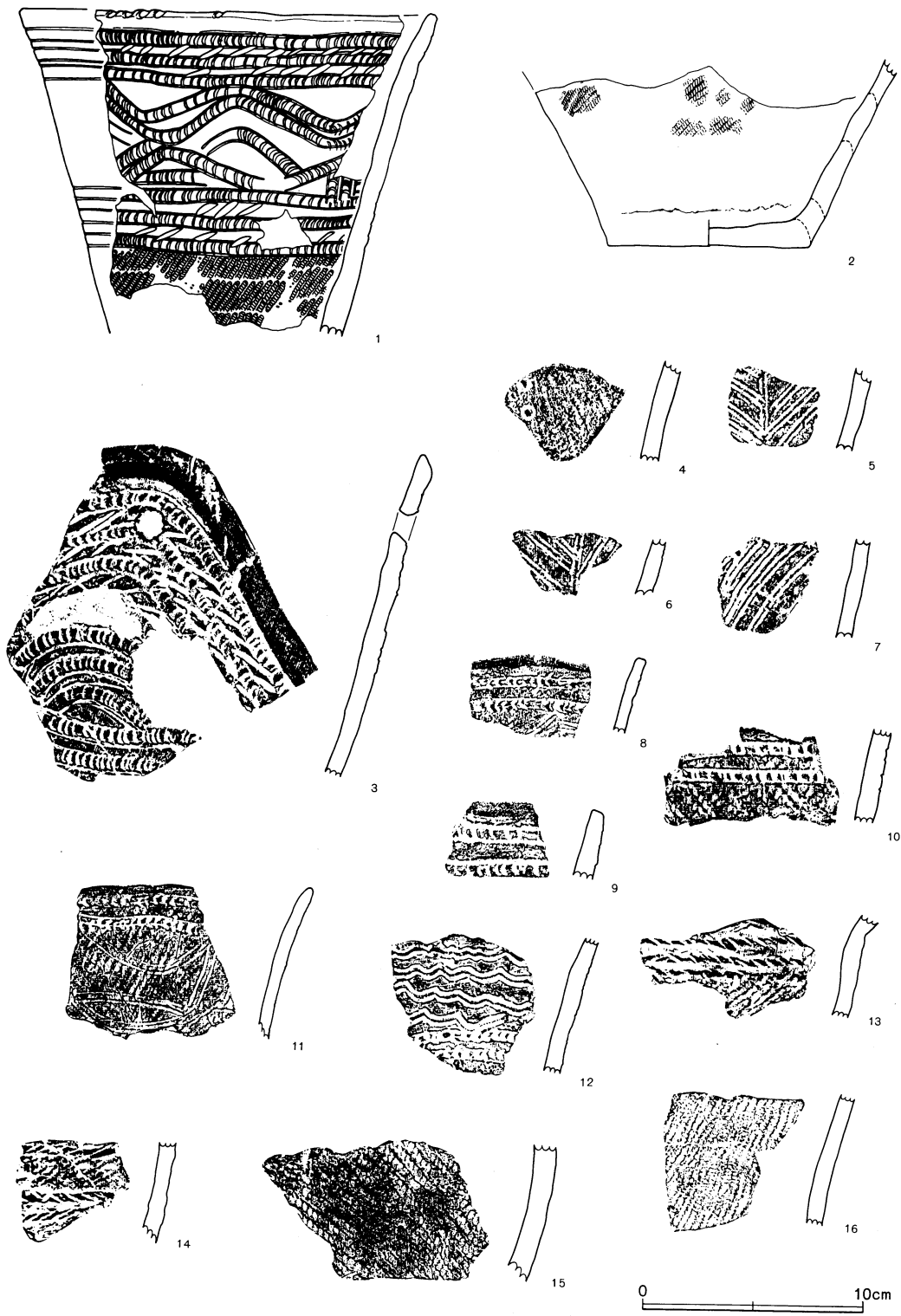
遺物 (第12図)

1は、やや小型の深鉢で、口縁部に向って直線的に開く器形を呈する。覆土中より出土した破片の一部が接合したもので、口縁部は1/4弱、胴部下半で約1/2が残存している。推定口径19.0cm、現存高14.2cmを測る。口唇部には棒状の施文具を押しつけて5箇所に凹みを施しているが、単位は不明である。口縁部文様は幅狭の無文帯下に3条の爪形文を横走させ、条間に斜行する刻目を入れる。下半部上端にも、口縁部と同様の3条の爪形文が巡る。両者間には、上下から波状の爪形文を施して、菱形のモチーフを現出している。菱形モチーフの対をなす三角形の区画の一部は爪形文で粗く充填されている。これらは、上から順に施されている。下半部には単節LRが横位に施文される。

2は深鉢の底部である。底径9.4cmを測り、胴部は大きく開く。LR単節縄文が浅くまばらに施さ



第11圖 第94号住居跡



第12图 第94号住居跡出土遺物

れている。

3は台形状の波状口縁を有する深鉢で、2単位構成をとるものと推定される。「く」の字に屈曲する口唇部に対応して径1cmほどの円孔が開けられている。口縁部には3あるいは4条の爪形文を波状に沿って施し、同時に区画を作出していると考えられる。破片下端に認められる2条の爪形文が区画の下を押えている。また、区画内は弧状の爪形文と斜位の刻みで充填している。

4～7は諸磯a式と思われるが、本住居跡の出土土器の様相から、流れ込みと判断されるものである。4は、円形竹管の刺突が縦方向になされている。地文は単節RL縄文を横位に施文している。5・6は、竹管による2本沈線によって縦位に区画し、区画内はおそらく同一施文具による斜行沈線を施し、肋骨文を描出している。7も同様のモチーフと考えられる。いずれも地文は認められない。

8～16は諸磯b式と考えられる。8～12は爪形文系土器の一群である。8・9は平縁の深鉢の口縁部破片で、両者ともに幅狭の無文帯下に2条の爪形文を巡らしている。10は口縁部に向って開く器形の深鉢と考えられる。胴部文様の下端に施された2条の爪形文が見られる。下半部には単節RL縄文を横位に施文している。11・12は沈線文系土器である。11は口縁部に2条の爪形文を巡らし、その下位に同一施文具で弧状や葉状の沈線文を描き出している。地文は単節RLをやや斜位に回転させる。12には10と同様、胴部文様下端の2条の爪形文が見られる。胴部文様は半截竹管によって、波状の沈線文を多段に施している。

11・12は浮線文系土器である。貼付け隆帯に斜方向の刻目を施している。地文は両者ともに単節RL縄文の横位施文である。

15・16は胴部下半の破片である。15は単節RLを横位に、16は単節LRをやや斜位に施文している。

代正寺遺跡グリッド等出土遺物 (第13図)

代正寺遺跡の縄文時代の土器は、第94号住居跡に伴う前期諸磯b式の一群以外は、ほとんどが後世の遺構に流れ込んだものである。また出土量も僅かであり、各時期にわたって量的なまとまりはない。グリッド等出土土器の分類は以下の通りである。

第I群土器 前期の土器群

第II群土器 中期の土器群

第III群土器 後期の土器群

第I群土器 (1～14)

縄文前期の土器を一括した。黒浜式、諸磯式が認められた。

第1類 (1～6)

黒浜式土器と考えられる深鉢の口縁部及び胴部破片である。いずれも胎土に繊維を含む。1～3は荒い単節RL縄文を施文している。4～6は比較的明確に重層的な横帯を具現している。原体は4・6が単節RL、5が単節LRである。4はやや斜位に施文している。

第2類 (7~10)

諸磯b式に比定される胴部破片である。7・8は沈線文系と考えられる。7は胴部文様の下端にあたり、3条の爪形文で区画している。胴部文様は半截竹管により粗い波状文を施す。8も同じモチーフと考えられるが、さらに粗い。9・10は波状口縁を有する深鉢の口縁部破片で、いずれも2条の爪形文が見られる。

第3類 (11~14)

いずれも諸磯c式と考えられる深鉢の胴部破片である。12は粒状の貼付け突起が多く見られる。地文は細かい集合沈線である。11・14は沈線で区画や懸垂文を施し、13は地文に単節RLを縦位に施文する。

第II群土器 (15~20)

中期の土器を一括した。下小野式、阿玉台式、加曾利E I式がある。

第1類 (15)

下小野式に比定される。深鉢の口縁部破片である。口唇部は折返して、隆起している。内面には稜を有する。地文は単節RLで、口唇部は横位に胴部には縦位に施文している。

第2類 (16・17)

阿玉台式に比定される。16は円筒状の胴部破片である。輪積痕を指頭で斜方向に消している。隆帯は断面三角形で「く」の字状に屈曲し、なぞるように沈線が施されている。17の隆帯上には刻みが施されている。

第3類 (18・19)

18は加曾利E I式の深鉢の口縁部破片である。楕円区画の一部であろう。区画内の地文は単節RLで、横位に施文されている。19は加曾利E I式深鉢の頸部付近の小破片である。

第III群土器 (21~23)

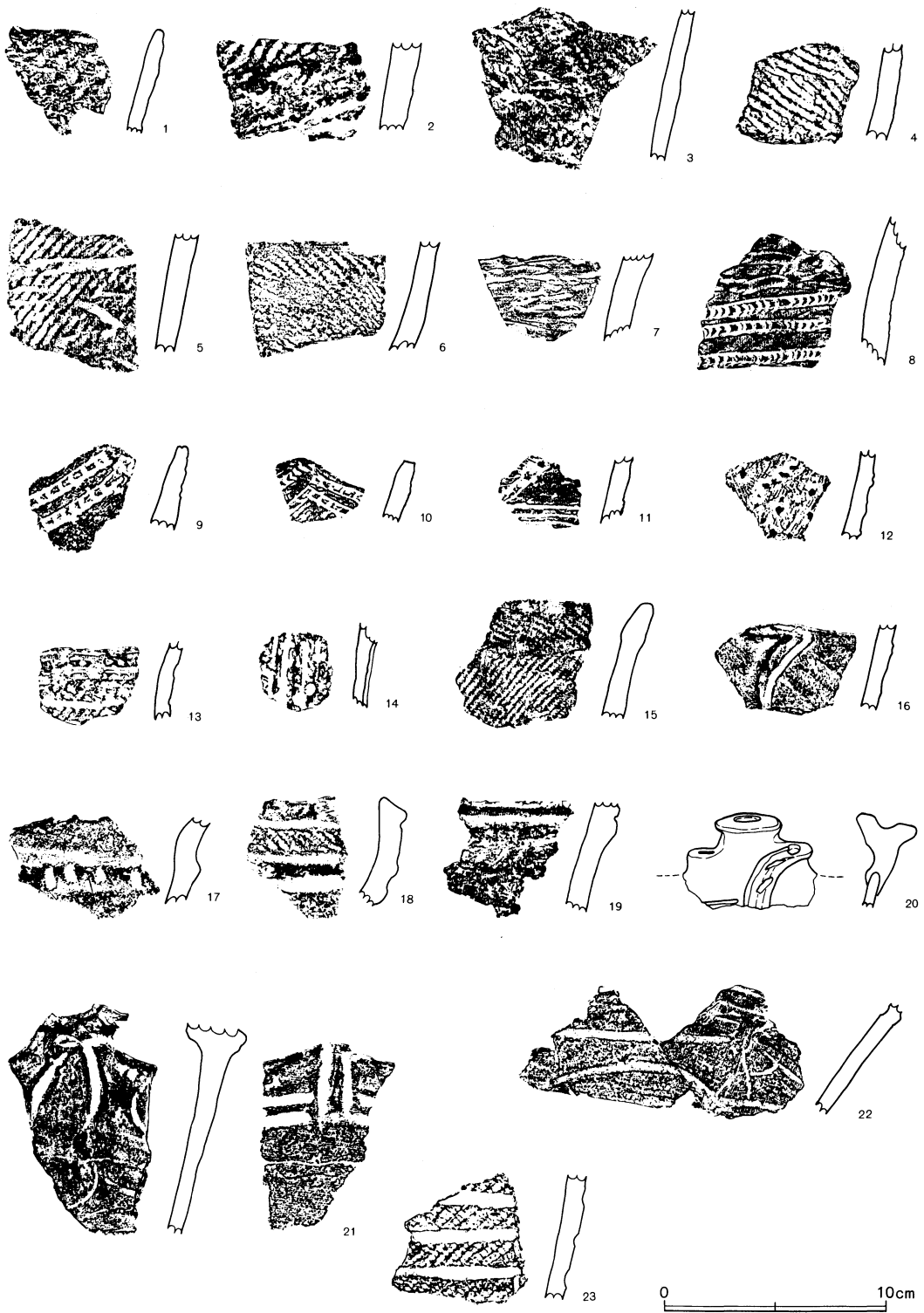
後期の土器群を一括した。堀之内式と安行式が認められた。

第1類 (21~22)

堀之内II式に比定できる深鉢の口縁部破片である。20・21には突起が設けられている。20は突起の肩部から斜め方向に隆帯を垂下させる。隆帯上には刻目を施す。21はその突起を中心として内外面に沈線文を垂下させている。22は口唇部を欠失するが、内面の口縁直下にめぐる沈線が見られる。胴部から大きく開く器形を呈し、浅い沈線文が施される。21・22は沈線のみ認められ、いずれも文様の詳細は不明である。

第2類 (22)

安行式に比定される。多段の横帯区画を太目の沈線で作り、単節LRを横位に充填している。



第13図 グリッド出土遺物

2. 弥生～古墳時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第1号・2号住居跡 (第14図)

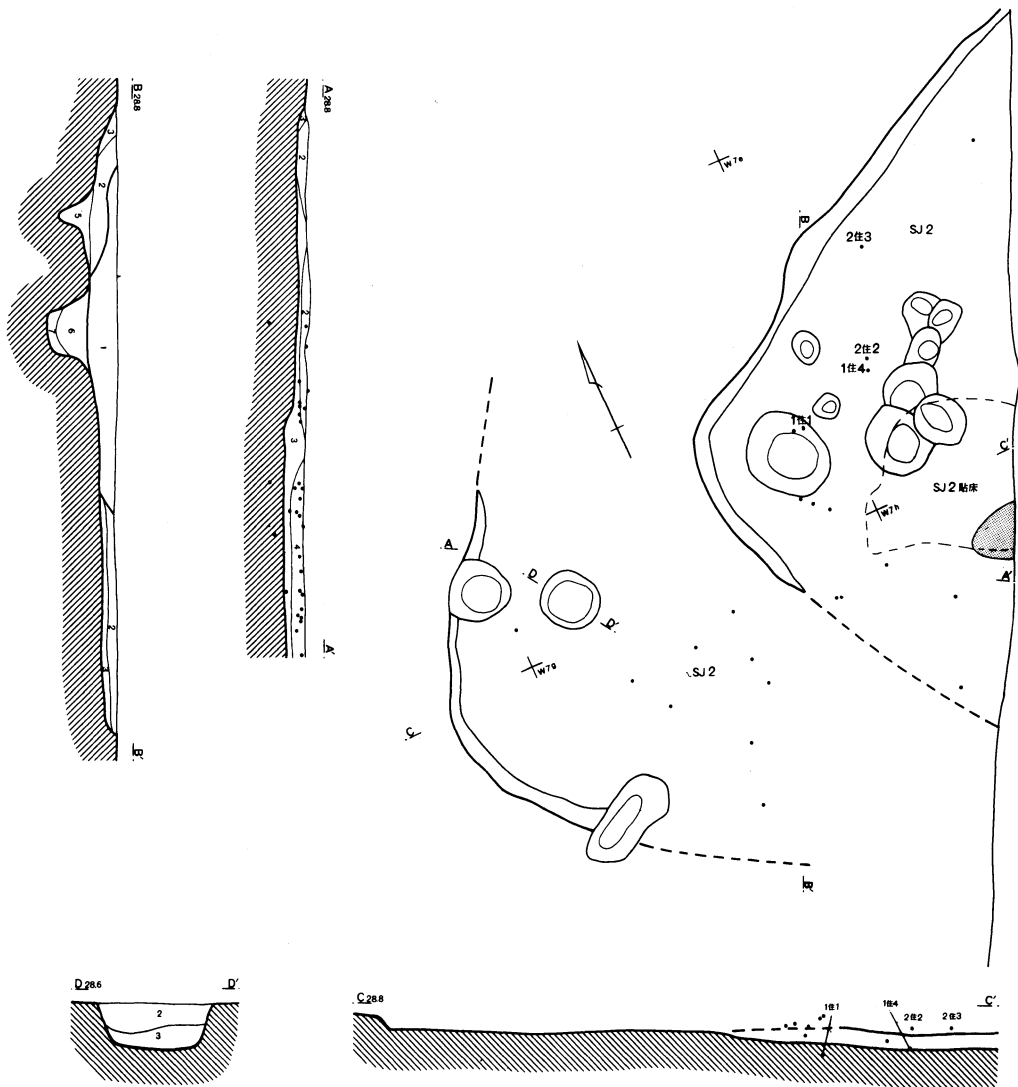
第1号・2号住居跡は、重複した状態で位置する。代正寺遺跡において今回検出された住居跡の中で、最も北に位置するものであり、台地の北側稜線に、6～7mの距離にあたる。どちらもコーナー付近が、1箇所検出されたのみである。遺存状況が悪くプラン不明瞭なため、確認は困難なものであった。

第1号住居跡はW7eグリッド、第2号住居跡に切られる状態で、東側に位置する。遺存状態は第2号住居跡以上に悪く、プランは非常に不明瞭である。確認面(=第2号住居跡貼床面)からの深さは12cm。立ち上がりは緩慢で、不明確。住居の平面形態は、方形もしくは長方形を呈すると思われる。壁溝はない。柱穴と覚しきピットも1箇所検出されたが、他は調査範囲外に存在するため、規模や主軸方向は不明。プランのみからでは、N-33°-Eまたは、N-33°-Wが推定される。床面については、明瞭なものではなかった。第2号住居跡貼床の下層に、焼土が存在した(平面図におけるスクリーン部分)が、第1号住居跡床面から浮いた状態のもので、炉跡ではない。本住居跡廃絶後、投棄されたものであろうか。

遺物は、床面付近から小数出土したのみであり、実測可能な土器はいずれも破片で4点、石錘は1点、計5点である。

第1号住居跡出土遺物 (第15図)

	器種	法量 cm	形態および手法的特徴	胎土・残存率%等
1	小型壺	口径 (11.9) 現存高 6.0	口縁部：内外面ともヘラ磨き。胴部：外面ヘラ磨き、内面ナデ。にぶい黄褐色。	B+G++J(細密) 口・胴上半10 焼成：やや良
2	小型壺	口径 (12.7) 現存高 3.3	外面は荒れている。内外面ともヘラ磨き。赤褐色。	B+C+G+J 口25 焼成：やや良
3	小型壺	口径 14.1 現存高 5.5	器面は荒れている。内外面ともヘラ磨き。赤褐色。	A+B+C+G 焼成：普
4	埴	口径 19.9 現存高 6.0	器面は荒れている。内外面ともヘラ磨き。赤褐色。	口80 焼成：やや不良
5	石錘	長さ 10.3 幅 4.7	厚さ1.0cm、重さ75.3g。上端・下端部付近の両側面を打ち欠き凹面を設けている。下端部側の凹は弱い。	緑泥片岩製



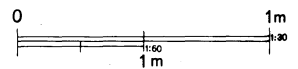
第1・2号住居跡土層註記

A-A' B-B' 共通

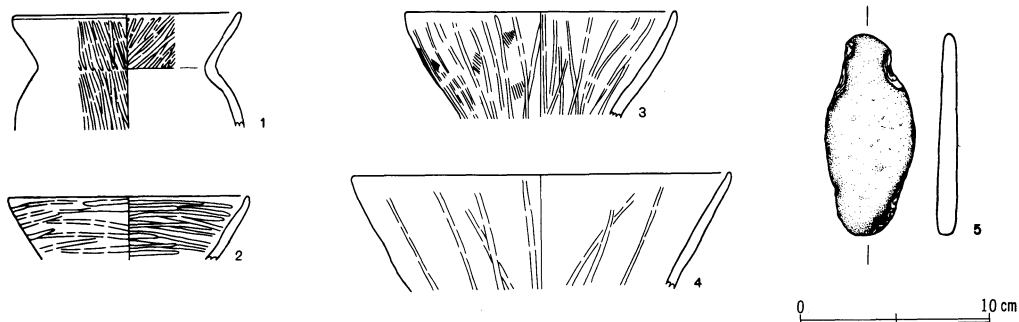
- 1 攪乱
- 2 暗褐色土 ローム粒少、カーボン微量。しまり強、粘性やや弱。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック少、カーボン微量。しまり強、粘性やや弱。
- 4 暗黄褐色土 ロームブロック多（貼床部分と思われる）。
- 5 暗黄褐色土 ロームブロック（φ5cm）多。しまり強、粘性やや弱。
- 6 黒褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり弱、粘性やや強。
- 7 暗褐色土 カーボン少。しまり弱、粘性やや強。

ピット土層註記D-D'

- 1 暗褐色土 ローム粒若干、カーボン少。しまり・粘性やや強。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック（φ3cm）多。しまり・粘性やや強。



第14図 第1・2号住居跡



第15図 第1号住居跡出土遺物

第2号住居跡 (第14図)

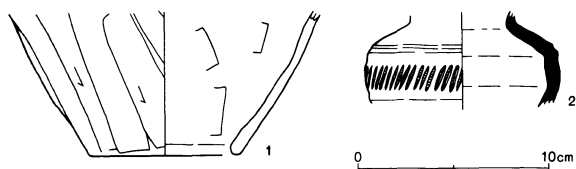
第2号住居跡は、W7 dグリッドに位置する。コーナー部分がわずかに1箇所検出できたが、残る3箇所の内1箇所は確認し得ず、2箇所は調査範囲外に存在するとみられる。確認面からの深さは15cm程であるが、遺存度は非常に低い。壁溝はなく、規模や主軸方向については不明。柱穴と確定できるピットは残念ながら得られなかったが、第1号住居跡のコーナー際のピットがあるいは柱穴であろうか。その他の柱穴やカマド等は、調査できた部分内では未確認。

平面実測図からでは、隅丸方形が想像されるが、本来もっと直線的であり、コーナー部分は直角に近かったと推定される。ロームブロックを多く含む貼床が行われているのが検出された(第4層)が、その一部は第1号住居跡の覆土上に及んでいる。この点からも、第2号住居跡が第1号住居跡を切っていると判断される。

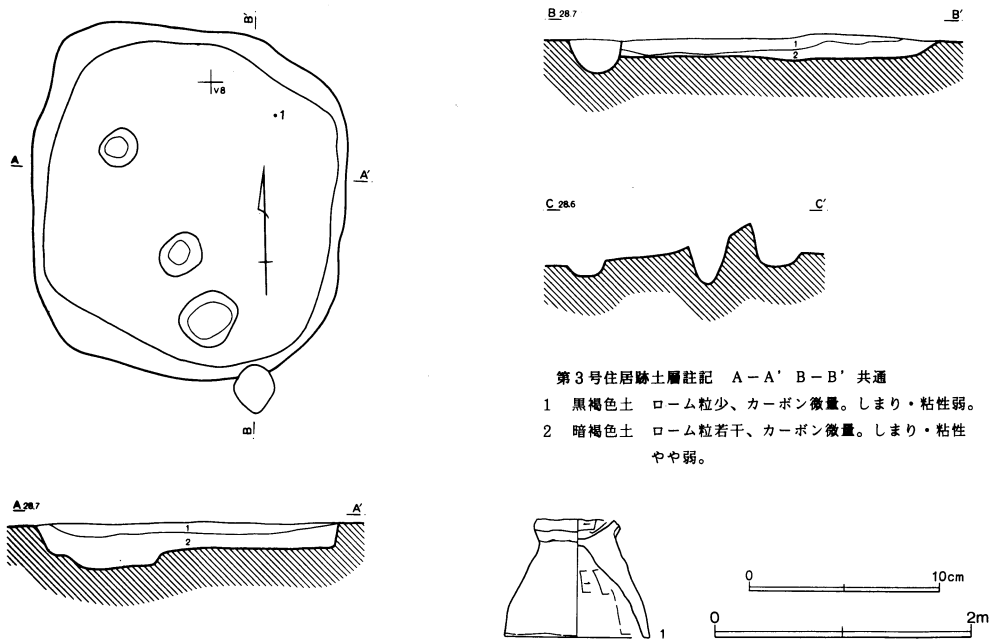
遺物はごく小数であり、実測可能な遺物は2点のみであった。土師器の甑と須恵器の甕はどちらも破片で、ほぼ床面直上のレベルから出土している。

第2号住居跡出土遺物 (第16図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甑	底径 (7.8) 現存高 7.5	外面部：ヘラ削り。内面：ヘラナデ。 におい黄褐色。	A+B+D+F+I 底35 胴下位30 焼成：普
2	須恵器 はそう	胴径 (10.2) 現存高 4.5	体部中央にハケ状工具による押捺文を施す。 灰褐色。	A+B+G+J 体45 焼成：やや不良



第16図 第2号住居跡出土遺物



第3号住居跡土層註記 A-A' B-B' 共通
 1 黒褐色土 ローム粒少、カーボン微量。しまり・粘性弱。
 2 暗褐色土 ローム粒若干、カーボン微量。しまり・粘性やや弱。

第17図 第3号住居跡、出土遺物

第3号住居跡 (第17図)

第3号住居跡は、U8cグリッドに位置する。第3号溝跡を切り、4基のピットに切られる。平面規模は270cm×252cmの概ね隅丸方形、深さは20cm、小規模な住居跡である。壁面はやや傾斜をもち、直線的に掘り込まれる。主軸方向は、N-3°-Eを指す。床面は比較的平坦で、かなり硬化しており頑強である。

炉跡・貯蔵穴・柱穴・壁溝等は検出されなかった。住居跡内のピットは、覆土の観察から3箇所とも第3号住居跡に伴うものではなく、攪乱であると判断される。

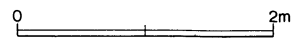
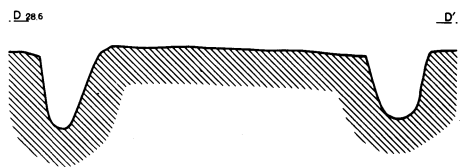
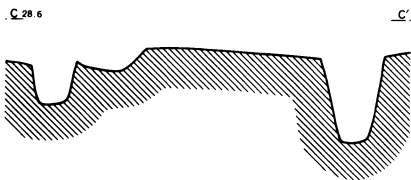
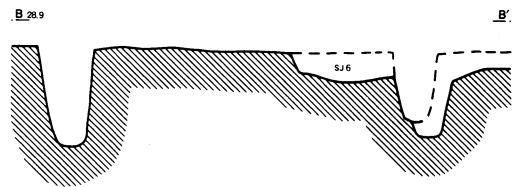
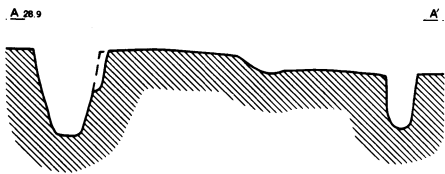
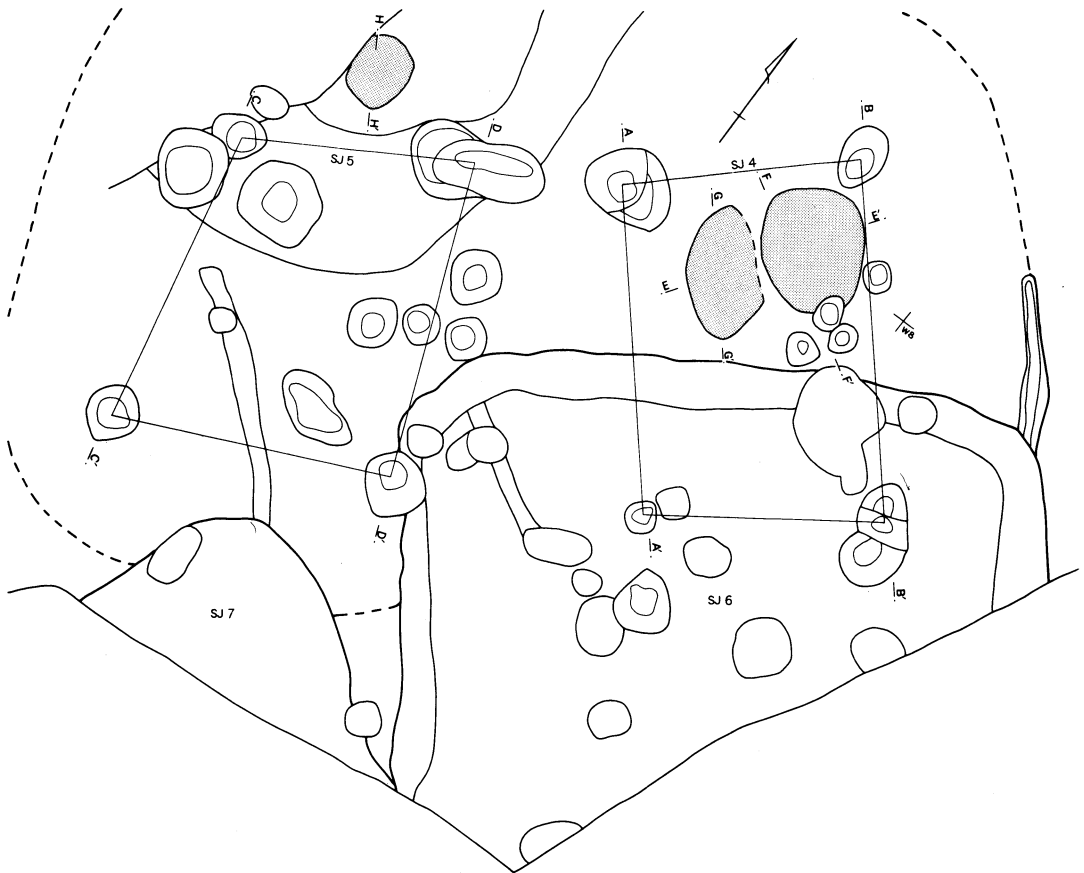
遺構の遺存状況は比較的良好であるが、遺物の出土はごく小数で図化できたのは台付甕の脚台部1点のみであった。

第4号住居跡 (第18・19図)

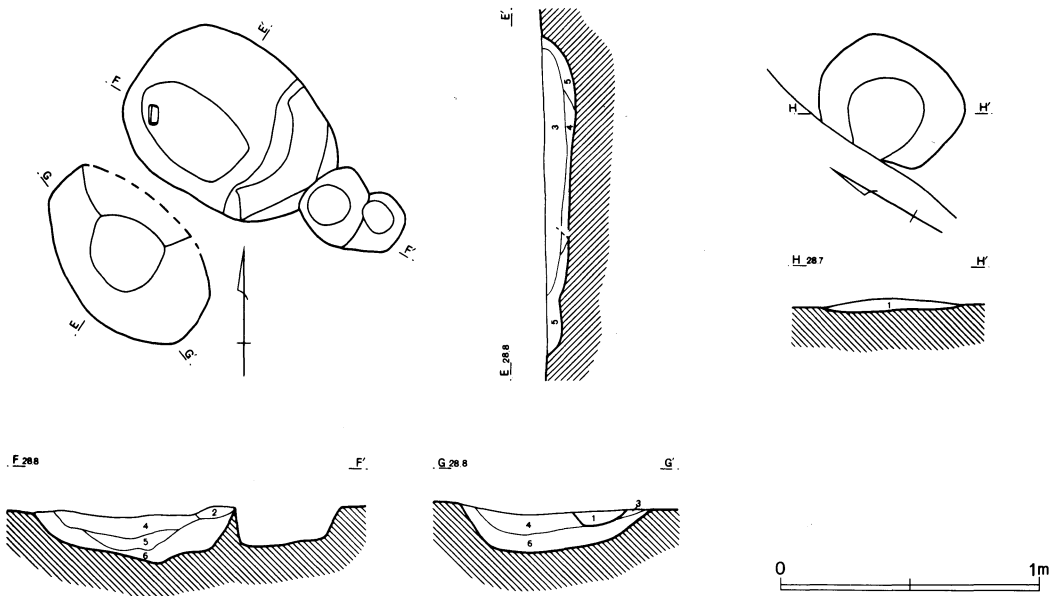
第4号住居跡は、U8cグリッドに位置する。本住居跡の確認面は、床面より下位面であった。平面形態については、ごく部分的に残っていた壁溝からプラン推定をした。調査時において、プラン確認や土層観察を繰り返したが、周辺遺構の新旧関係の判定は非常に困難であった。

北側の2号溝跡との新旧関係は不明、東側は2号住居跡に切られる。南側は第6号住居跡の床面下から、本住居跡のものと観られる壁溝の一部と主柱穴の1つが検出されたことから、本住居跡が切られていると判断した。西側の、第5号住居跡との新旧関係は不明。壁面は遺存していない。なお、確認面が床面下であるためか、貼床はまったく確認されなかった。

貯蔵穴は検出されていない。主柱穴間の距離は、長軸で285cm・短軸で190cm、確認面からの深さ



第18图 第4·5号住居跡



第4号住居炉跡土層註記

A-A' B-B' C-C' 共通

- 1 攪乱
- 2 青灰色土 粘土層。
- 3 黒色土 カーボン層中に焼土粒微量。しまり・粘性やや弱。
- 4 赤褐色土 焼土ブロック層中にカーボン微量。しまり強、粘性弱。

- 5 暗黄褐色土 ロームブロック層中に焼土・カーボン微量。しまり強、粘性弱。
- 6 暗黄褐色土 熱のために硬化したローム層。

第5号住居炉跡土層註記

- 1 赤褐色土 焼土ブロック層中にカーボン少。

第19図 第4・5号住居跡炉跡

は北東のものから時計回りに、75cm・55cm・42cm・68cmを測り、比較的しっかりとしている。4基の内、2基には抜き取り痕と覚しきピットがみられる。プラン短軸は460cm程、平面形態は長楕円形と想定される。

主軸は、N-43° -Wを指し、N-18° -Wを示す第5号住居跡、N-36° -Wを示す第6号住居跡とは若干異なり、また各々と重複もしていること等々からも、両住居跡とは時期的にも異なると推定される。支柱穴4基を結んだ線より内側の北西寄りに、炉跡2基が存在する。2基の炉跡の内、東側のものは粘土が帯状に、円弧を描き遺存していた。“火皿”の一部分であろうか。

遺物は、砥石1点のみの出土である。

第5号住居跡(第18・19図)

5号住居跡は、V8cグリッドに位置する。第6号住居跡と同様に、遺存状況は劣悪で、確認面は床面より下位であった。調査時において、プラン確認や土層観察を繰り返したが、周辺遺構との新旧関係の判定は、非常に困難であった。北側は、第1号古墳跡に切られ、第2号溝跡及び、東側の第4号・第6号住居跡、南側の第7号住居跡との新旧関係は不明である。壁面・床面はまったく残っておらず、支柱穴4箇所と炉跡の最下面のみの検出である。支柱穴の配列は、若干歪んでいる。

主柱穴間の距離は、長軸で260cmと240cm・短軸で185cmと225cm。確認面からの深さは北東のものから時計回りに、63cm・53cm・70cm・32cmを測り、比較的しっかりとしている。主柱穴4基の内、1基には抜き取り痕と覚しきピットが観察される。平面形態は長楕円形と推定される。

主軸は、N-18° -Wを指し、N-43° -Wを示す第4号住居跡、N-36° -Wを示す第6号住居跡とは若干異なり、また各々と重複もしていること等々からも、両住居跡とは時代的にも異なると推定される。壁溝は確認されていない。貯蔵穴についても同様に検出されなかった。炉跡は、主柱穴4基を結んだ線より外側、北寄りに位置する。

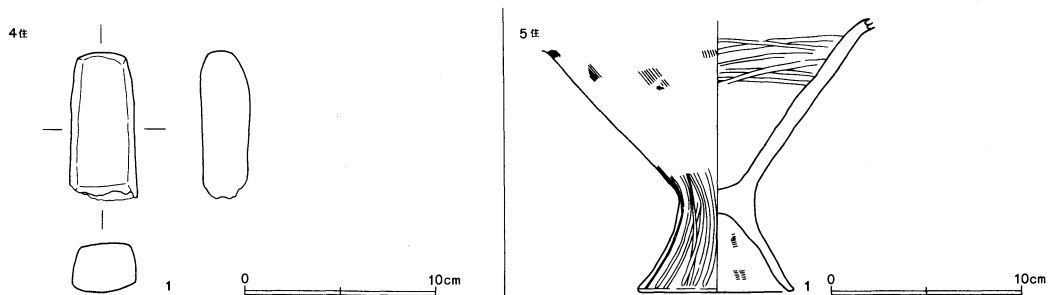
遺物はほとんど出土しておらず、図化し得たのは1点にとどまる。

第4号住居跡出土遺物 (第20図)

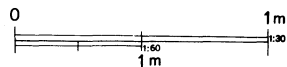
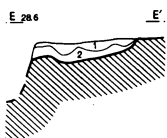
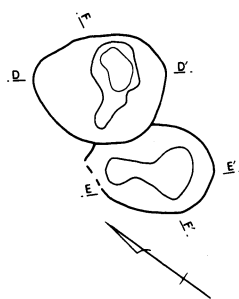
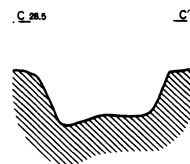
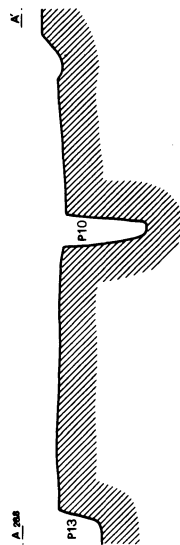
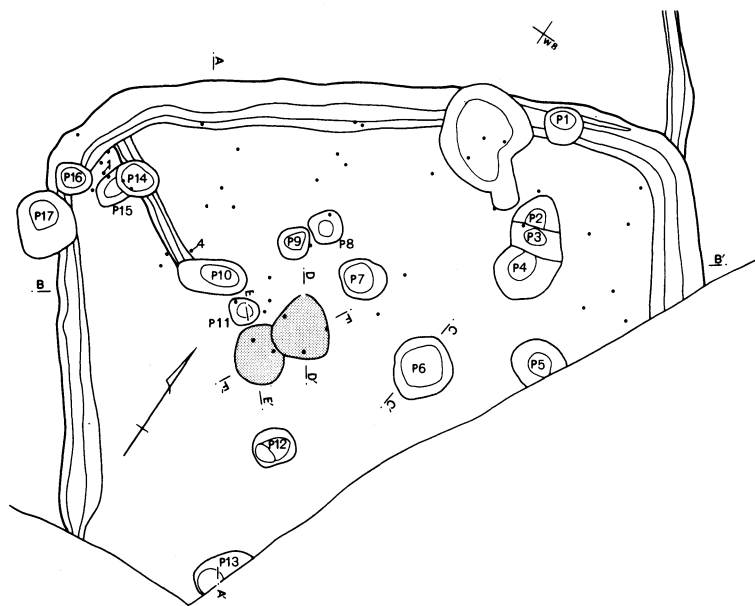
番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	砥石	現存長 7.7 幅 3.5 厚さ 2.6	下部を欠損する。欠損面の一部分に研磨されている部分をもつ。転用品か。表裏面・側面の4面とも平滑。炉内。現存重量137.7g。	凝灰岩製

第5号住居跡出土遺物 (第20図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	高坏	脚径 8.3 現存高 14.2	口縁部外面～体部外面下半：ハケの後横ナデ。内面：横ナデの後粗いヘラ磨き。赤褐色。	A+B+C+D+E+G 体・脚100 焼成：普



第20図 第4・5号住居跡出土遺物



第6号住居跡土層註記

D-D'

- 1 黒色土 カarbon層中に焼土粒少。しまり弱、粘性やや強。

E-E'

- 1 明赤褐色土 焼土を主体とする層、一部黒色土が混入。
2 暗黄褐色土 焼けたローム層、ブロック化している。

第21図 第6号住居跡

第6号住居跡 (第21図)

第6号住居跡は、V8fグリッドに位置する。第4号・第6号住居跡と同様に、遺存状態は悪く周辺部との新旧関係の判定は、非常に困難であった。北側については、床面下から、第4号住居跡のものと覚しき支柱穴1基(P3)と壁溝が検出され、本住居跡が後出と判断した。東側と、南側の調査範囲外に続く第7号住居跡とは、範囲外で重複すると思われるが、新旧関係は不明である。壁面の掘り込みは不明瞭で、遺存する立ち上がりは緩く弱いものである。短軸は510cm、確認面からの深さは10cmを測る。支柱穴は3箇所検出され、P4・P13・P10が該当すると考えられる。

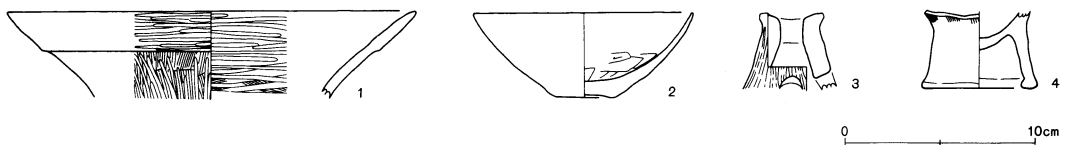
支柱穴間の距離は、長軸(P10-P13間)で240cm・短軸(P4-P10間)で245cm、深さはP4が45cm、P10が68cmを測り、比較的しっかりとした柱穴である。平面形態は隅丸方形を呈すると推定される。

主軸は、N-36°-Wを指し、N-43°-Wを示す第4号住居跡、N-18°-Wを示す第5号住居跡とは若干異なる。また各々と重複もしていること等々からも、両住居跡とは時期的にも異なると推定される。調査し得た床面は、硬化しており明瞭なものであった。壁溝は、周囲を一巡すると推定される。貯蔵穴は検出されなかったが、調査範囲外に存在すると想定される。炉跡は、支柱穴を結んだ線より内側、西寄りに2箇所存在する。ともに、本住居跡に帰属する炉跡と観られるが、検出状況から併存したものではなく、内側に新たに設けられた結果と考えられる。

遺物の出土は少なく、図化できたのは4点である。

第6号住居跡出土遺物 (第21図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	口径 (21.3) 現存高 4.5	口縁部外面ハケ目の後ヘラ磨き。内面：ヘラ磨き。 器面は磨滅著しい。赤褐色。	A+B+C+E 口20 焼成：普
2	碗	口径 (11.5) 器高 4.4 底径 3.1	器面やや磨耗。外面：ナデか。内面：ヘラナデの後ナデか。 にぶい橙色。	A+B+C+D 口60 胴80 焼成：やや良
3	器台	現存高 4.0	器面は磨滅している。外面：ヘラ磨き。内面：ナデか。孔有。 橙色。	A+B+J (細密) 50 焼成：普
4	台付甕	脚径 (5.8) 現存高 3.9	内外面ともナデ。橙色。	A+B+G+J 脚100



第22図 第6号住居跡出土遺物

第7号住居跡 (第23図)

第7号住居跡は、V 8 f グリッドに位置する。コーナー1箇所のみを検出であり、それ以外の部分は範囲外に続く。北側で第5号住居跡と、東側の調査範囲外で第6号住居跡と重複するが、ともに新旧関係は不明。西側については、第1号古墳跡に切られると思われる。遺存状況は非常に悪く、平面プラン・壁面・立ち上がり・床面等は不明瞭である。

平面形態は、隅丸方形を呈すと思われる。平面規模・主軸方向は不明、確認面からの深さは約10cmを測る。

遺物は、小破片が数点出土したのみで、図化し得たものはなかった。

第8号住居跡 (第24・25図)

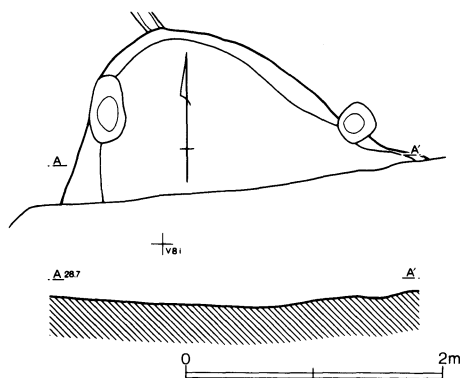
第8号住居跡は、U 8 d グリッドに位置する。北側については、重複する第9号住居跡の主柱穴と推定されるピット (P 7) に、壁溝が切られている点と、出土遺物の時期等から、本住居跡が前出と推定される。南側は、第2号古墳跡に切られる。これらの他にも、壁溝の北側部分が炉跡と覚しき遺構を切っていること、またその周囲にピットが多数分布しており、その幾つかは柱穴と観られること等から、本住居跡に切られている住居跡があと1軒想定される。

壁面は遺存しておらず、部分的に壁溝が確認できたのみである。確認面からの深さは10cmを測る。住居跡の短軸は408cm。主柱穴は、第2号古墳跡の周溝に切られ遺存度の低い2基を含め、4箇所検出された (P 1 ~ P 4)。主柱穴間の距離は、長軸 = P 1 - P 2 間で300cm・P 3 - P 4 間で285cm、短軸 = P 1 - P 4 間で146cm・P 2 - P 3 で175cm、床面からの深さは、P 1 が50cm・P 2 が20cm・P 3 が86cm・P 4 が35cm、P 2 とP 4 はやや浅目の柱穴である。

平面形態は、コーナー部分が若干湾曲する方形を呈す。

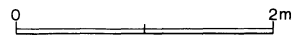
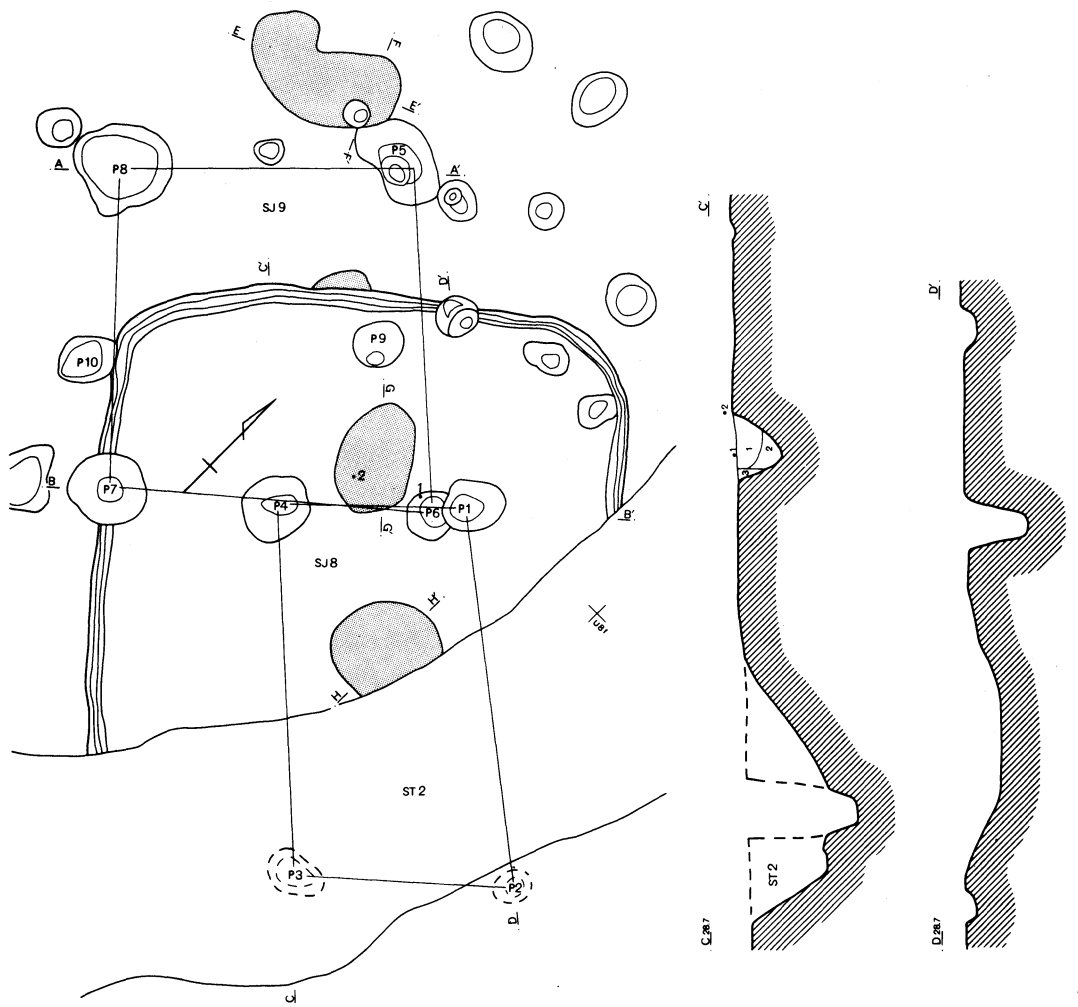
床面は部分的に硬化しているが、全体的に明瞭ではなく、本住居跡に伴わないピットとの新旧関係についても、確認することはできなかった。第8号住居跡の北側には、ピットが数多く検出されており、その中には、深度の比較的大きなものも幾つか存在した。床面や炉跡が、既に失われた住居跡の柱穴の可能性は否定できない。

主軸は、N-48° - Wを指し、N-45° - Wを示す第9号住居跡と近い。壁溝は、周囲を一巡する

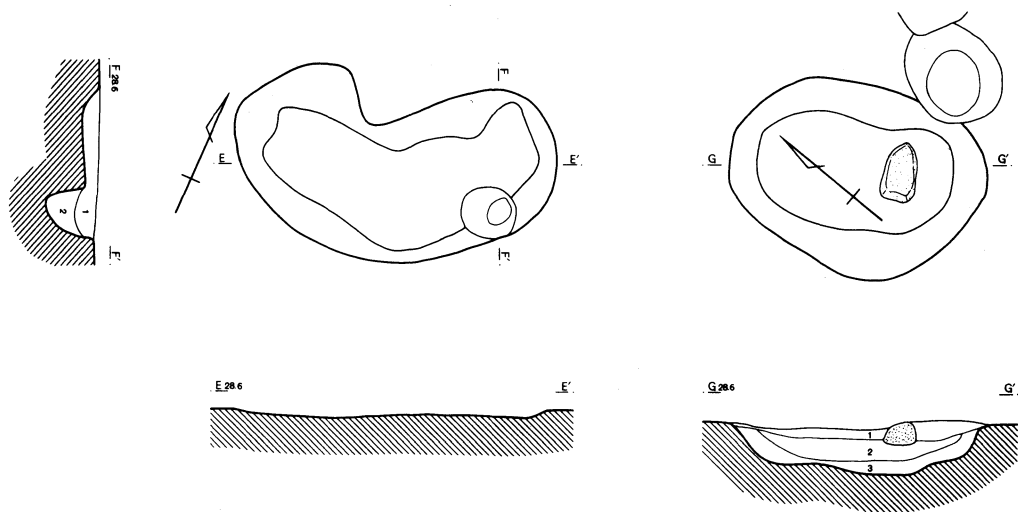


第23図 第7号住居跡

とみられる。貯蔵穴は検出されなかったが、第2号古墳跡に切られたものと推定される。炉跡は、主柱穴を結んだ線より内側と外側に各1箇所ずつ、計2箇所が確認された。しかし、内側のものはごく浅い掘り込み内に、焼土が僅かに観られるのみであり、主に機能したのは外側の炉跡であろうか。外側に位置する炉跡は、平面規模99cm×75cmの楕円形を呈し、深さは18cm。熱のためよく締まっている。床面に近いレベル (第2層直上) に枕石状に石が確認された。



第24图 第8·9号住居跡



第8・9号住居跡土層註記

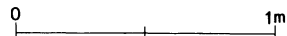
- 1 黒褐色土 ローム粒少、カーボン微量。しまりやや弱、粘性やや強。
- 2 暗褐色土 ローム粒若干、カーボン微量。しまりやや弱、粘性やや強。
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒若干。しまり・粘性やや強。
- 4 黒褐色土 ローム粒・カーボン微量。しまりやや弱、粘性やや強。
- 5 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ3cm)少。しまり弱、粘性強。
- 6 暗褐色土 ローム粒・カーボン少。しまりやや弱、粘性やや強。
- 7 暗黄褐色土 ロームブロック(φ3cm)。しまり・粘性やや強。
- 8 黒褐色土 ローム粒・カーボン微量。しまりやや弱、粘性やや強。
- 9 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック若干。しまりやや弱、粘性やや強。

第9号住居跡土層註記

- 1 黒褐色土 ローム粒・焼土粒・焼土ブロックを含む、炉の覆土にしては焼土が少ない。
- 2 暗黄褐色土 ビット覆土。ロームを主体とし、上部は若干焼けている。

第8号住居跡土層註記

- 1 赤褐色土 焼土層中にローム粒少。しまり強、粘性弱。
- 2 赤褐色土 焼土ブロック層中にカーボン少。しまり非常に強、粘性弱。
- 3 暗黄褐色土 熱のため硬化したローム層中にカーボン少。しまり非常に強、粘性弱。

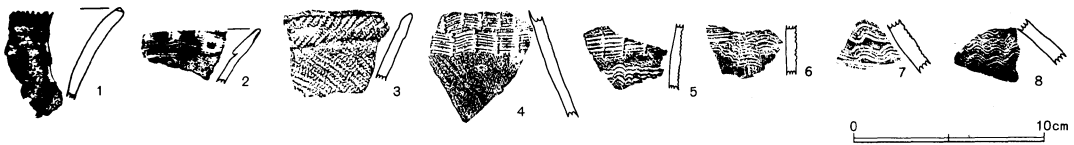


第25図 第8・9号住居跡炉跡

第9号住居跡 (第24・25図)

第9号住居跡は、U8 a グリッドに位置する。遺存状況は悪い。西側から北側にかけて、第4号溝跡と重複するが、新旧関係については不明。東側から南側にかけては、第8号住居跡と重複するが、主柱穴の1つ(P7)が壁溝の一部を切っており、第9号住居跡が後出と推定される。主柱穴4箇所(P5～P8)と、これを結ぶ線より外側の北西に、炉跡が1基存在した。

主柱穴間の距離は、長軸でP5-P6間が265cm・P7-P8間が260cm、短軸でP5-P8間が215cm・P6-P7間が250cmを測る。確認面からの深さは、P5が28cm・P6が22cm・P7が20cm・P8が14cm、全体的に浅い柱穴である。壁面や壁溝が確認されないため、プランは不明であるが、方形あるいは長方形が推定される。主軸方向はN-45°-Wを指し、N-48°-Wを示す第8号住



第26図 第8号住居跡出土遺物

第8号住居跡土遺物 (第26図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	現存高	4.6	口唇部に木口状工具による刻み目を施す。外面はハケの後、頸LR部に縄文を施す。内面はナデか。茶褐色。	A+B+H+J 焼成：普
2	甕	現存高	2.9	口唇部に指頭による相互押捺。内外面ともハケ目。褐色。	A+B+D+J 焼成：普
3	壺	現存高	2.7	外面は口縁にLR縄文、頸部にRL縄文、内面はナデ。	A+B+H+J 焼成：普
4	壺	現存高	5.6	外面は7本単位の櫛状工具による右回転の簾状文2段残存。茶褐色。	A+B+J 焼成：普
5	甕	現存高	3.5	外面にスス付着。外面はハケ目の後、7本単位の櫛描簾状文を右回転の等間隔止めに施す、内面はナデか。櫛描文は太く鮮明である。黒褐色。	B+H+J 焼成：普
6	甕	現存高	2.8	外面は5本単位の櫛描簾状文を右回転に行った後、波状文を施文か、内面はハケ目。暗褐色。	A+D+J 焼成：普
7	壺	現存高	2.1	外面は上位に4本単位の櫛描簾状文か、その下位に波状文2段施す。内面はナデか。文様は比較的線が太く深い。茶褐色。	A+H+J 焼成：普
8	壺	現存高	2.3	外面はハケ目の後、8本単位の櫛描波状文を2段施す、線は浅く、波高も小さい。橙色。	A+D+J 焼成：普

居跡と非常に近い。貯蔵穴と思われる遺構も検出されていない。炉跡は128cm×54cmの不整形で、遺存状態は非常に悪い。

遺物は、ほとんど出土しておらず、図化し得たのは2点である。



第27図 第9号住居跡出土遺物

第9号住居跡出土遺物 (第27図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	壺	口径 (18.2) 現存高 5.2	口縁部：内外面とも横ナデの後、粗いへら磨き。 頸部：内外面ともナデの後、粗いへら磨き。黄橙色。	B+c+G 口25 焼成：良
2	壺	底径 (7.8) 現存高 2.5	内外面ともナデ。 橙色、一部黒色。	B+c+H 底45 焼成：良

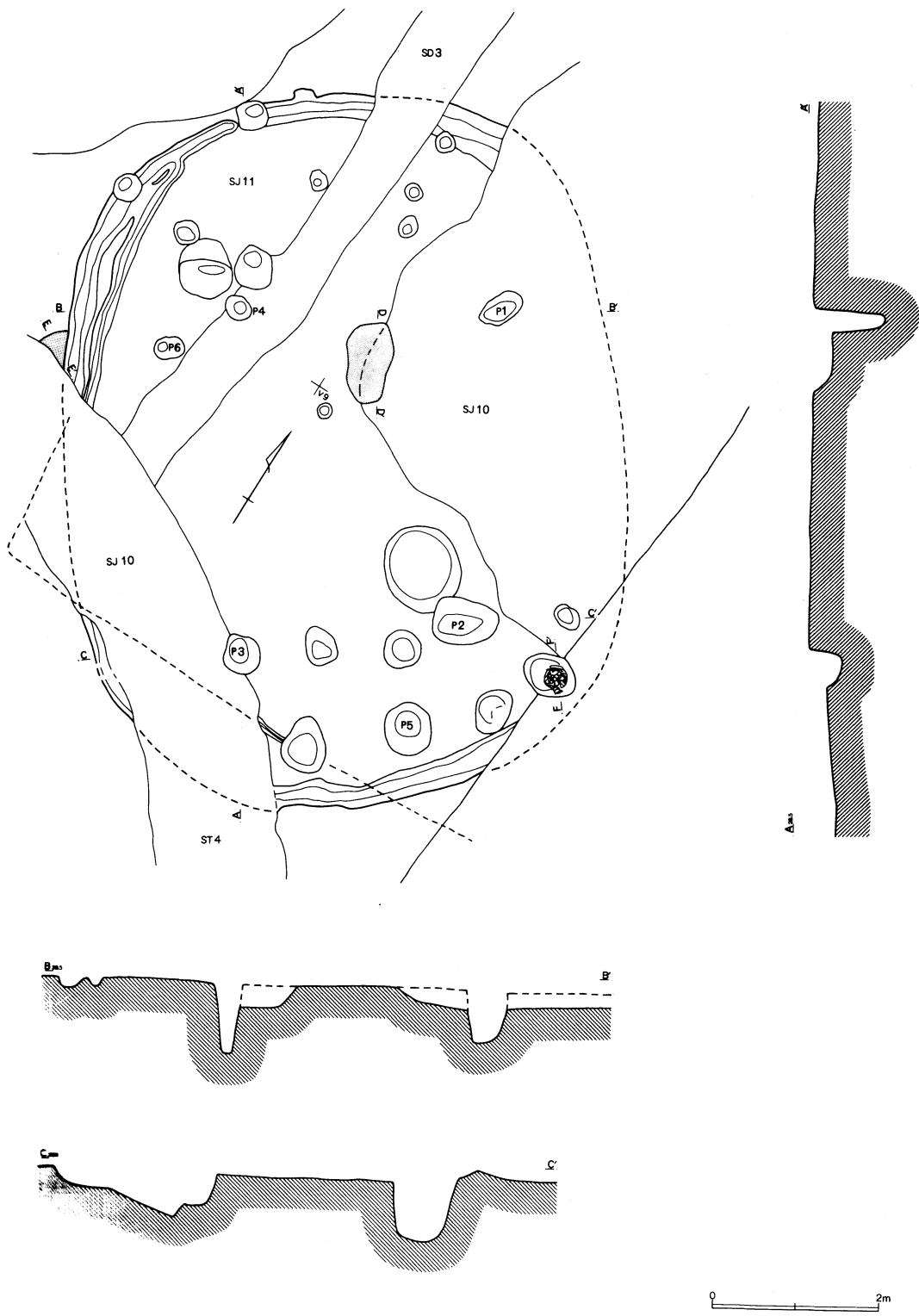
第10号住居跡 (第28・29図)

第10号住居跡は、U 8 a グリッドに位置する。北側を第1号古墳跡に、南側を第10号古墳跡に、西側を第3号溝跡によって切られている。また西側では、第4号古墳跡に切られている可能性がある。本住居跡は、遺構の大部分が第11号住居跡と重複している。時期的に第10号住居跡が切っているが、遺存状況は非常に悪く、平面規模・形態についてはほとんど不明であるといわねばならない。本住居跡と第11号住居跡との位置関係については、後者の床面より若干上位面に、前者がのった状態で構築され、その結果第11号住居跡の床面に壁溝が残されたと推定される。

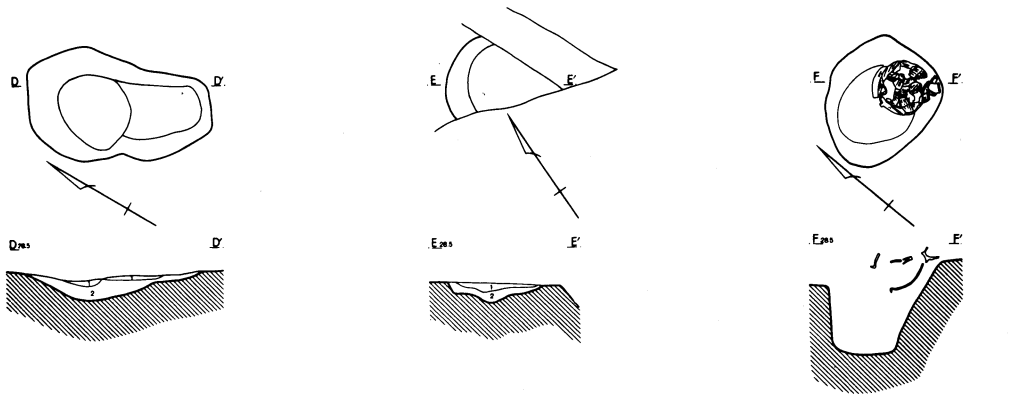
そしてその後第3号溝跡や、第1号古墳跡・第4号古墳跡・第2号古墳跡などによって切られることによって、遺構の大部分が失われたと考えられる。さらに後世になり耕作等に攪乱されることによって、第11号住居跡床面に残された壁溝と貯蔵穴のみが、遺存したと想定できないであろうか。第11号住居跡と第1号古墳跡の重複範囲は、黒褐色土と黒褐色土の切りあいであり、遺構のプランを把握したのは、前者を掘り上げる直前に近かった。またその時点になって、第10号住居跡の貯蔵穴が検出されたという状況である。残念ながら、本住居跡のプランをとらえることはできなかった。第11号住居跡に関して検出できたのは、僅かに西側と南側の壁溝、および貯蔵穴のみである。部分的な壁溝をもとに、西側のプランを想定してみた(第28図 直線の破線部分)が、貯蔵穴との位置関係から、若干の疑問点が残るといわざるを得ない。

以上にみた重複遺構以外にも、第10号・第11号住居跡の範囲内には、多数のピットが検出されている。これらの内には、第10号住居跡の柱穴も含まれると推定されるが、住居跡の方位・規模がつかめないうえ、ピットの並び想定することはできなかった。両住居跡との関連や新旧関係についても不明であるといわねばならない。

検出された貯蔵穴は、平面規模67cm×58cmを測り、平面楕円形を呈す。確認面からの深さは35cmである。出土した台付甕(第29図1)は、貯蔵穴底面から浮いた位置にあり、口縁部を下に向けた形で、貯蔵穴の壁面に寄りかかった状態で出土した。底面から浮いた位置にあったのは、台付甕が



第28图 第10・11号住居跡(1)



第10号住居炉跡土層註記

- 1 黒色土 カarbon多、焼土粒少。しまり・粘性やや強。
- 2 赤褐色土 焼土ブロック層中にCarbon少。しまり強、粘性弱。

第11号住居炉跡土層註記

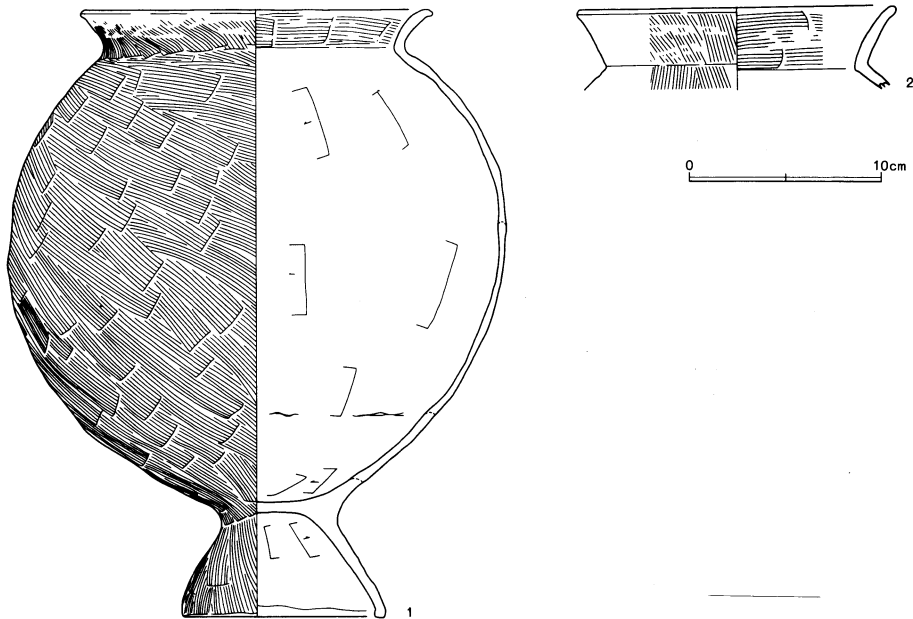
- 1 黒色土 カarbon層中に焼土粒微量。しまり・粘性強。
- 2 赤褐色土 焼土ブロック層中にCarbon微量。しまり強、粘性弱。

0 1m

第29図 第10・11号住居跡(2)

置かれた時点では、既にその部分まで貯蔵穴が埋まっていたことを意味すると解釈したい。なお、土器は土圧で押し潰された様相を示していた。本住居跡に伴う遺物として、図化し得たのは2点である。

第29図における、エレベーション図E-E'に示した炉跡は、第11号住居跡外にあり、第10号住居跡の、推定範囲からみればずれると看做される。



第30図 第10号住居跡出土遺物

第10号住居跡出土遺物 (第30図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	台付甕	口径 (18.0) 胴径 25.9 器高 31.7 底径 (10.5)	胴部外面にスス附着。内面下位に炭化物附着。口縁部：内外面にハケ目の後、粗い横ナデ。胴部：外面はハケ目、内面はヘラナデ。脚台部：外面はハケ目、内面はヘラナデ。内面ヘラナデで器壁をうすく仕上げる。黒褐色。	A+B+E+I(多)+J 口95 胴80 底75 焼成：やや良
2	甕	口径 (16.7) 現存高 4.3	一部外面にスス附着。口縁部：内外面ともにハケ目の後、粗い横ナデ。明褐色(黒褐色)。	A+B+J 口25 焼成：普

第11号住居跡 (第28・29図)

第11号住居跡は、U 8 i グリッドに位置する。北側から東側にかけて第3号溝跡・第1号古墳跡に切られる。南側の一部が調査範囲外に続き、西側では第4号古墳跡に切られている。そして、本住居跡の上面に、第10号住居跡が重複した状態にある。

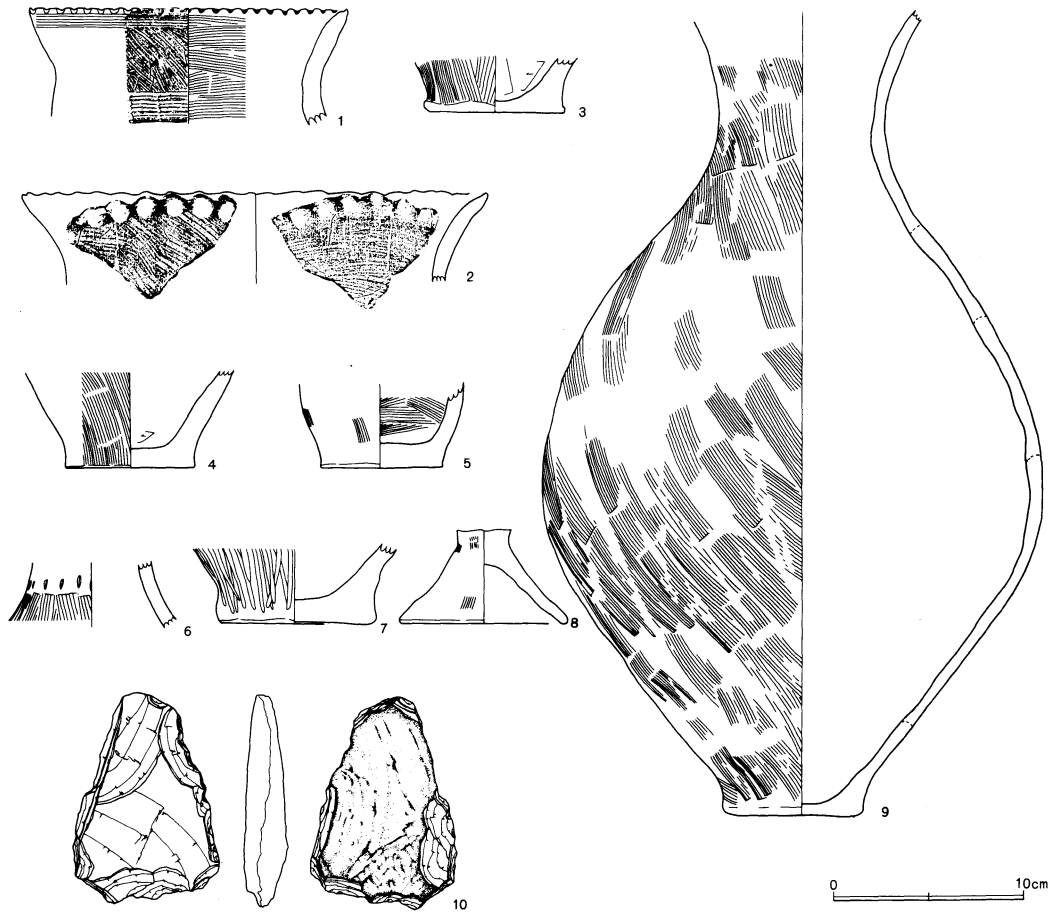
平面規模は、長軸864cm・短軸680cm(推定値)を測る。隅丸の長方形を呈すると推定される。壁面は遺存しておらず、壁溝からのみプランが推定された。主軸方向はN-45° -Wを指す。主柱穴4箇所(P 1~P 4)が検出され、P 5については梯子穴が想定される。各主柱穴間の距離は、P 1-P 2間で384cm・P 2-P 3間で272cm・P 3-P 4間で416cm・P 4-P 1間で320cmを測る。各主柱穴の確認面からの深さは、P 1が64cm・P 2が72cm・P 3が40cm・P 4が88cmを測り、遺存状態は悪いがしっかりとした明瞭なものである。床面については、壁溝の遺存範囲でごく僅かに残っていたのみであり、それ以外では既に失われていた。主柱穴を結んだ線の内側、やや北寄りに炉跡が1箇所検出された。平面規模は94cm×57cmの楕円形、確認面からの深さは10cmを測る。炉跡の、底面部分のみの遺存であるため、焼土ブロック層であり、カーボンが若干含まれる。

小破片が多数出土しているが、図化し得たのは石製品1点を合わせ、計10点である。

第11号住居跡出土遺物 (第31図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径 (16.6) 現存高 6.0	口唇部：ハケ押捺による刻み目。口唇部下位：横位のハケ目。頸部：斜位のハケ目。6本単位の櫛状工具による等間隔めの右回転簾状文。明赤褐色。	B+E+J 口15 焼成：普
2	甕	口径 (24.2) 現存高 4.7	内外面ともハケ目の後、口縁部を指頭による押捺。橙色。	B+E+G+J 口10 焼成：普
3	壺	底径 (7.0) 現存高 3.0	胴部：外面ハケ目、内面ヘラナデ。底部：外面ヘラ削り、内面：ヘラナデ。にぶい橙色。	A+B+E+J 底100 焼成：普
4	壺	底径 (6.8) 現存高 5.1	器面は荒れている。胴部：外面ハケ目、内面ナデか。底部：外面ナデ、内面ヘラナデか。にぶい黄褐色。	A+B+E+J 底15 焼成：普

5	甕	底径 現存高	6.5 4.5	胴部下位：外面はハケ目の後ナデ、内面はハケナデ。底部：内外面ともナデ。橙色。	A+B+C+H 底100 焼成：普
6	壺	現存高	3.6	外面：ハケ目、内面：ナデ。にぶい黄橙色	A+B+D+E+J 頸25 焼成：普
7	壺	底径 現存高	7.7 4.0	内面に炭化物付着。胴部外面：ヘラ磨き、底部外面：ナデ。胴部～底部内面：ナデ。	A+B+G+J 底90 焼成：やや良
8	台付甕	脚台径 現存高	8.9 4.9	器面は摩滅著しい。外面：ハケ目の後ナデか、内面：ナデ。明赤褐色。	A+B+C+G(多) 脚45 焼成：やや不良
9	壺	胴径 現存高	(26.1) 42.0	内面は荒れが著しい。頸部：内外面とも横ナデ、胴部外面：ハケ目の後、粗いナデ。底部外面：ナデ、胴部～底部内面：ナデか。褐色。	A+B+H+J 胴30 底100 焼成：普
10	打製石斧	長さ 幅	11.0 7.5	裏面に自然面を残す。横剥ぎの主要剥離を残す。厚さ2.3cm、重さ191.3g。	安山岩製

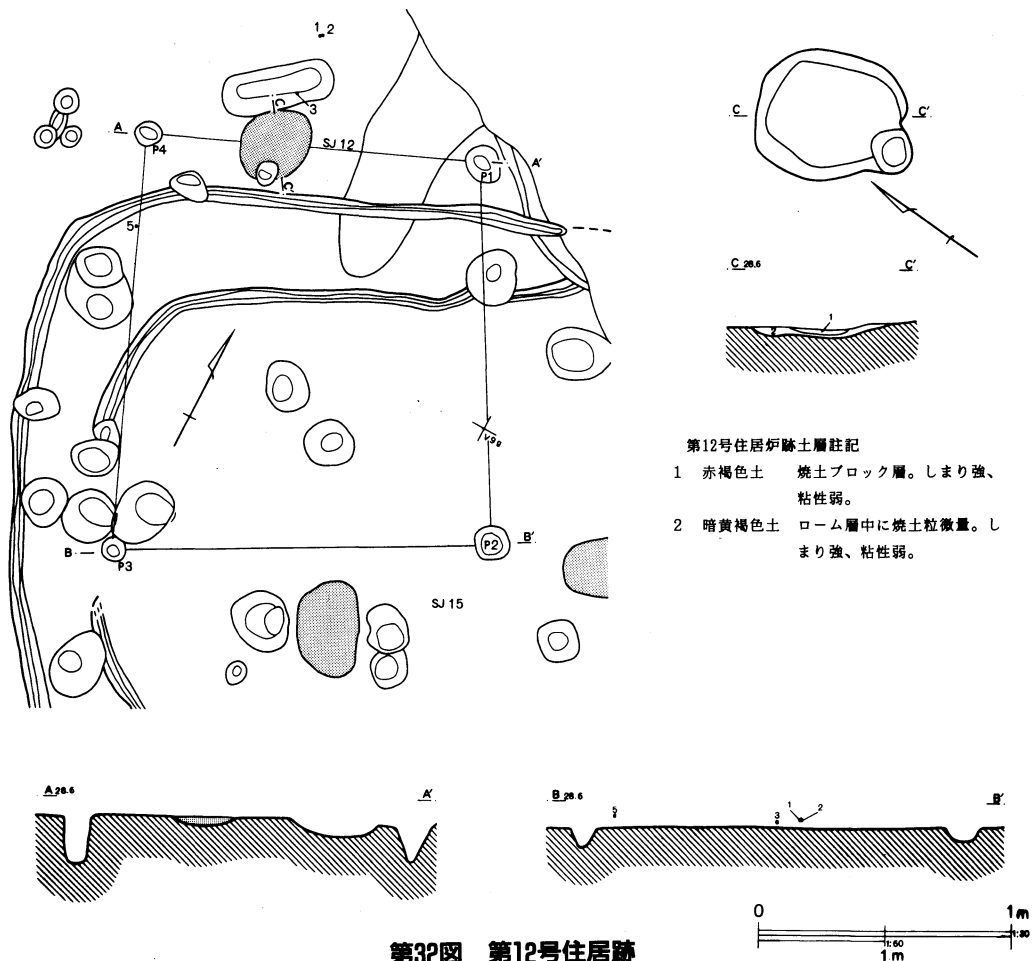


第31図 第11号住居跡出土遺物

第12号住居跡 (第32図)

第12号住居跡は、U 8 f グリッドに位置する。遺存状態は非常に悪く、床面は既に失われていた。壁面や壁溝が確認されていないため、平面形態や規模は不明。北側で第3号溝跡と重複するが、新旧関係は不明。東側で、第4号古墳跡に切られる。南側で第15号住居跡と、西側で第16号住居跡と重複する。本住居跡は、支柱穴の内2基 (P 2・P 3) が、第15号住居跡の床面を切っていたことから、時期的に新しいと推定される。土層断面の観察から、第15号住居跡は、第16号住居跡に切られている。これらの事柄から、構築された順序は古い方から、第16号住居跡→第15号住居跡A・B (拡張前=A、拡張後=B) →第12号住居跡と推定できる。なお、第15号住居跡Bは、Aを意識して構築されており、床面も共通している。この点から、AとBの間に、第12号住居跡が時期的に入るとは考えにくい。遺物は検出されなかったが、第12号住居跡が後出であろう。

本住居跡は、他遺構との重複部分以外でも、床面はまったく遺存しておらず、支柱穴4箇所 (P 1~P 4) と炉跡1箇所が確認されたのみである。平面規模は不明。規模・貯蔵穴についても検出されていない。支柱穴間の距離は、長軸でP 1-P 2間が300cm・P 3-P 4間が330cm、短軸でP

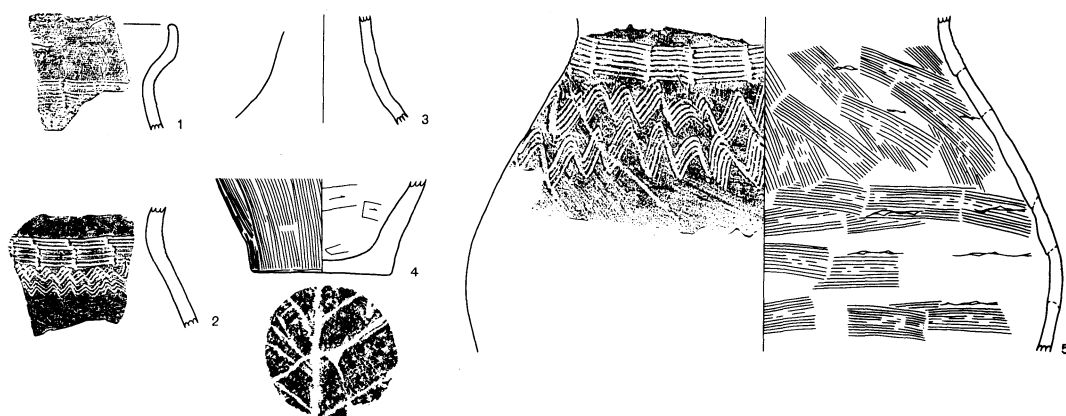


第32図 第12号住居跡

1-P4間で270cm・P2-P3で300cm。確認面からの深さは、P1が30cm・P2が13cm・P3が16cm・P4が37cmを測る。遺構自体の遺存度が低いため、数値的には浅い印象となっている。P2・P3では、第15号住居跡床面からの数値であるため、さらに浅く感じられる。しかし調査時の印象では、柱穴はしっかりとした明瞭なものであり、ほかのピットとの区別は明確であった。

主軸方向はN-26°-Wを指し、N-60°-Eを指す第15号住居跡とはほぼ直行し、N-38°-Wを指す第16号住居跡とはやや近い。炉跡については、支柱穴を結んだ線上のやや西寄りに位置する。炉跡は56cm×51cmで、平面形態は楕円形を呈す。深さについては、2cm程が遺存しているのみであった。炉跡南側をピットに切られる。

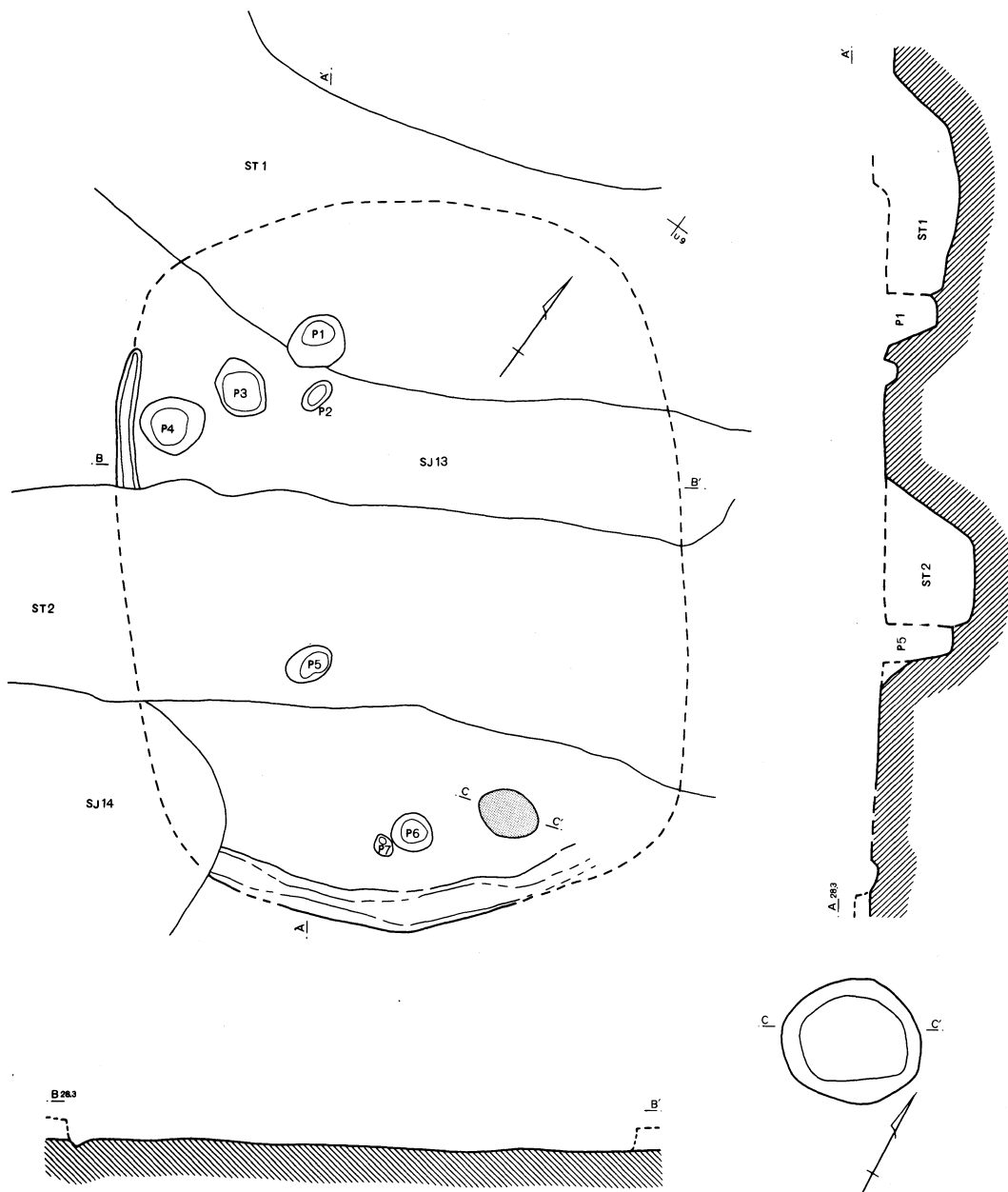
本住居跡範囲内で、第15号・第16号住居跡の床面よりやや上の位置から、小数ではあるが土器が出土している。しかし、本住居跡は既に床面が失われており、掘り方でもない。また、各々の住居跡の床面直上でもあることから、第15号・第16号住居跡に帰属すると判断された。出土した遺物は小数であり、図化し得た遺物は5点、うち櫛描きを有するものが3点含まれる。



第33図 第12号住居跡出土遺物

第13号住居跡土遺物 (第33図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	現存高	5.3	口縁部：内外面とも横ナデ。頸部：外面は9本単位(?)の櫛描き簾状文を右回転に施すと思われる。内面はナデ。黒褐色。	B+D+E+J □10 焼成：やや不良
2	壺	現存高	6.3	外面：5本を単位とする櫛状工具で、右回転の簾状文2段、のち波状文2段を施す(おのおの下段が新)。黒褐色。	B+D+E+J 頸10 焼成：普
3	壺	現存高	5.7	器面は摩滅著しい。頸部：外面はヘラ磨きか、内面はナデ。明褐色。	A+B+C+E+G (細) 頸：85 焼成：普
4	壺	底径 現存高	7.0 4.8	底部に木葉痕。胴部外面：ハケ目。胴部～底部内面：ヘラナデ。橙色。	A+B+C+D 底100 焼成：普
5	壺	胴径 現存高	(31.2) 17.4	外面にスス付着。内外面ともハケ目。におい黄褐色。	A+B+D+E+J 胴20 焼成：普



第13号住居炉跡土層註記

- 1 赤味を帯びた暗褐色土 焼土ブロック少。しまりやや強、粘性弱。
- 2 暗褐色土 ロームブロック層中に焼土粒微量。しまりやや強、粘性弱。

第34図 第13号住居跡

第13号住居跡（第34図）

第13号住居跡は、T9cグリッドに位置する。多くの住居跡と同様に、遺存状態は非常に悪い。第2号・第3号古墳跡に切られる。南側で、第14号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。僅かに確認された壁溝から、推定した遺構の範囲内に、ピット7基（P1～P7）・炉跡1基が検出された。この内で、P5とP1もしくはP3が支柱穴と推定される。P6は第6ピットであろうか。遺構実測図におけるエレベーション図は、P1を柱穴と想定してのものである。その場合の推定プランは、破線で行った線よりも、北と東に一回り大きなものが考えられる。柱穴間の距離とその際の主軸方向は、P1－P5間で275cm・N-35°-W、P3－P5間では225cm・N-41°-W。確認面からの深さは、P1が45cm・P5が62cmを測る。

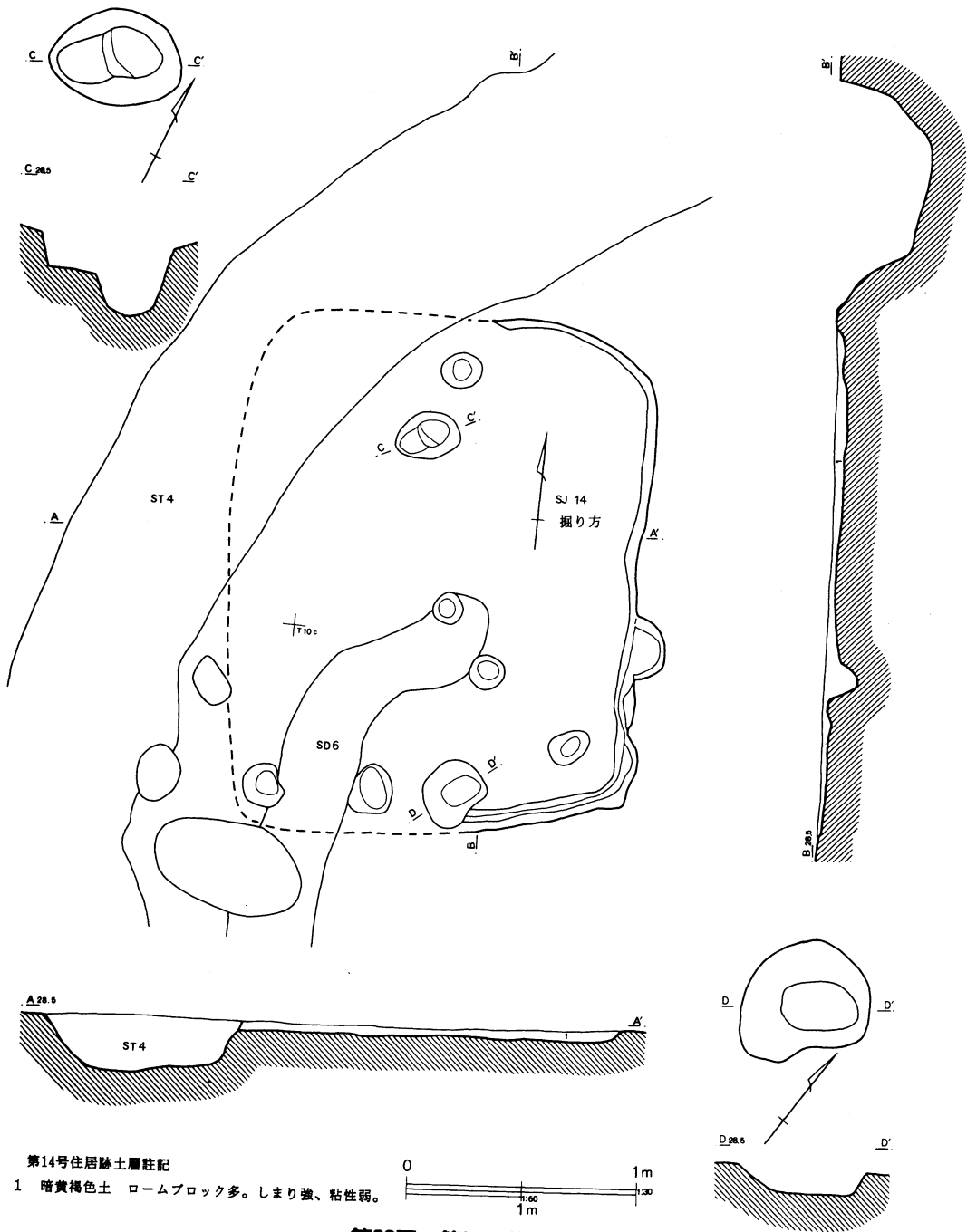
本住居跡に伴うと思われる遺物は検出されなかった。

第15号住居跡（第37・38図）

第15号住居跡は、U9iグリッドに位置する。拡張が行われていると判断され、拡張前（内側）をA、拡張後をBとした。第12号住居跡・第4号古墳跡に切られ、第16号住居跡を切る。Aの平面規模は、長軸512cm・短軸は推定で384cm、主軸方向は、N-60°-Eを指す。Bの規模は、長軸656cm・短軸は504cm、主軸方向は、Aと同様にN-60°-Eを指す。

支柱穴も、Aと同様にP1～P4であると観察された。あるいは、床面下にAの柱穴が埋め込まれているのだろうか。拡張する際に床面も貼り替えたとすれば、Aの壁溝が丸々遺存している点と矛盾すると考えられる。また、他に並ぶピットもないこと等々から、支柱穴は同一であると判断した。深さは、P1が40cm・P2が80cm・P3が56cm・P4が56cmを測り、しっかりとした柱穴である。床面は、A・Bとも同一レベルであり、明瞭で堅固である。Bについては、掘り込みが6cm程残されていたのみである。壁溝は全周する。Aについては、西側中央部分で途切れている。この辺りは、炉1との位置関係からみても、出入口部と推定され、P5ないしP6はそのための梯子穴か。主軸方向や支柱穴を移動せずに、拡張のみを行ったのであれば、出入口部も同様の可能性が高い。P6またはP7は、Bのための梯子穴と想定される。そして、この箇所でもAの壁溝が切れているのは、Bの梯子穴を設ける際に埋めるか埋まるかした結果、あるいは、Bの出入口部として使用されている過程で埋没した結果であろうか。これらのピットと、第16号住居跡の支柱穴（P8・P9）以外に、本住居跡内には14基のピットが位置しているが、その大部分は床面を切って掘り込まれたものであった。

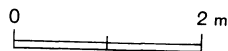
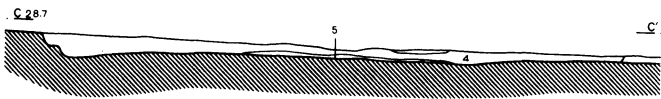
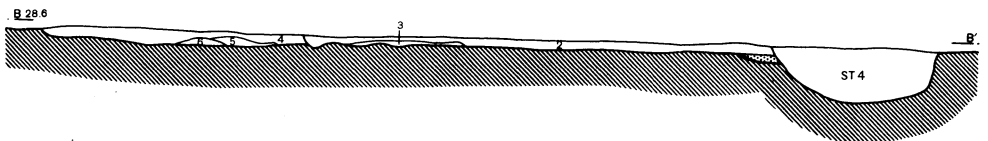
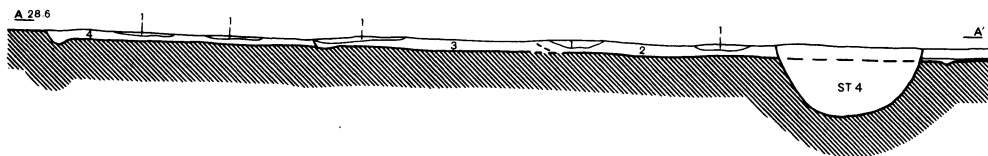
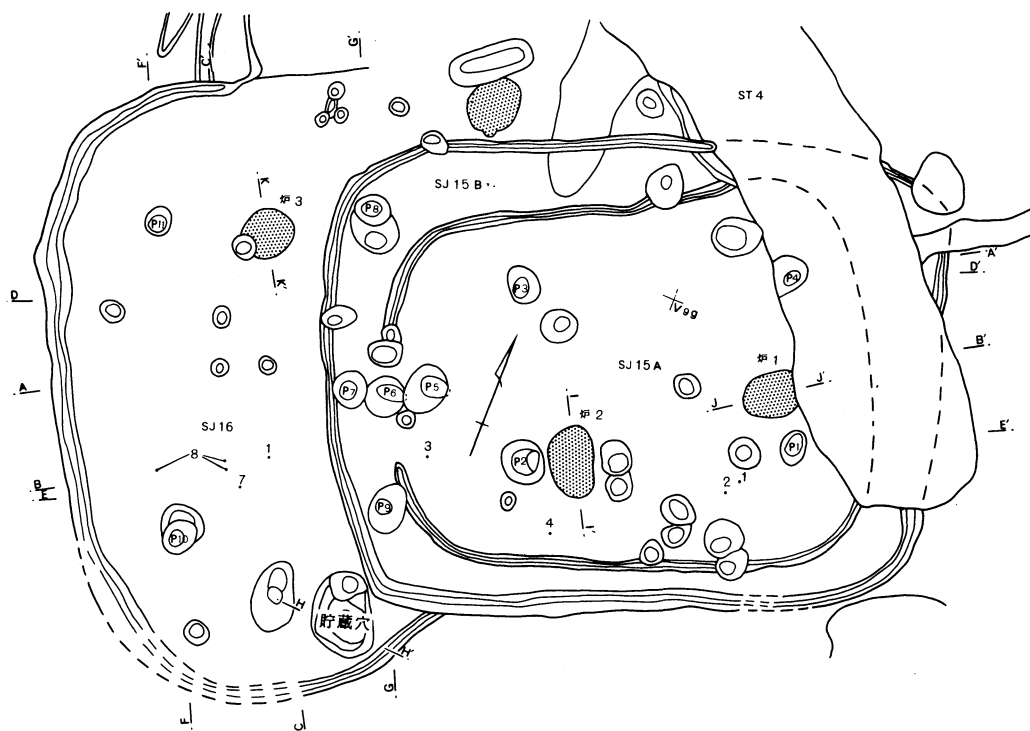
貯蔵穴は検出されなかったが、第4号古墳跡に切られている部分に位置したのであろうか。支柱穴を結んだ線より内側に1基（炉1）、線上に1基（炉2）、計2基の炉跡が検出された。どちらも、第15号住居跡Bの段階で使用されていた遺構であると考えられる。出土した遺物は少なく、拓本を合わせて6点、うち榎描きおよびへら描きの施された土器は4点である。



第36図 第14号住居跡

第14号住居跡 (第36図)

第14号住居跡は、T9 i グリッドに位置する。西側を第4号古墳跡に切られる。第13号住居跡や第4号溝跡と重複するが、共に新旧関係は不明。ピット9基との関連も不明。コーナー部分を2箇所検出したが、壁溝は部分的と観られる。支柱穴と確定できるピットの外、炉跡・貯蔵穴等は確認できなかった。長軸方向の規模は430cm、深さは12cm、方向はN-3° -Wを指す。遺物の出土はない。



第15・16号住居跡土層註記

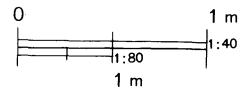
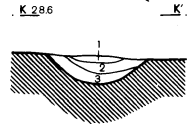
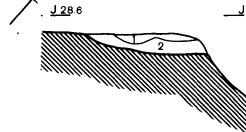
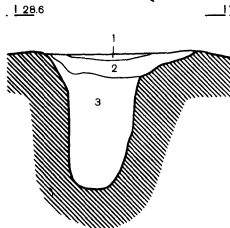
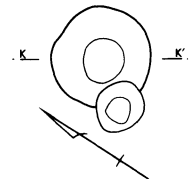
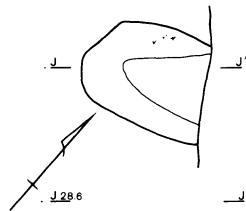
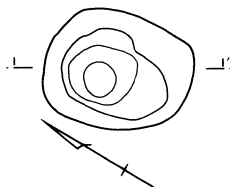
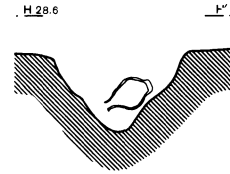
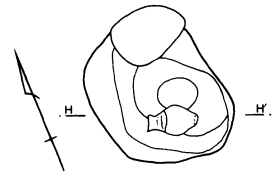
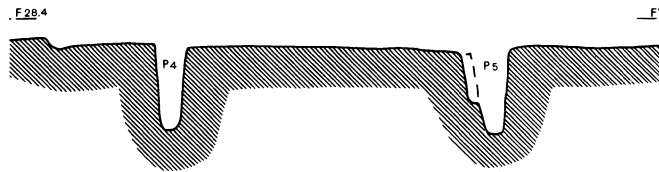
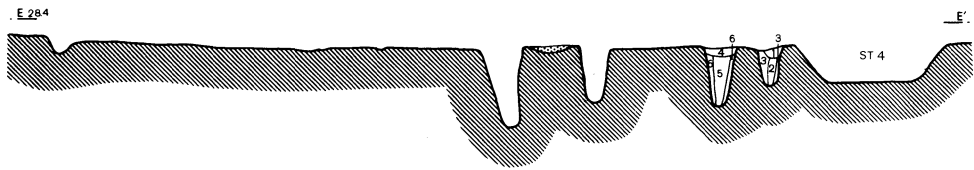
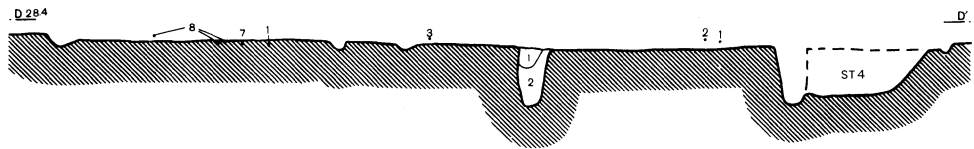
A-A' B-B' C-C' 共通

- 1 攪乱
- 2 暗褐色土 ローム粒少、カーボン微量。
- 3 黒褐色土 カーボン多、ローム粒少。
- 4 暗褐色土 ローム粒・カーボン微量。
- 5 暗褐色土 ローム粒若干、カーボン微量。
- 6 暗黄褐色土 ローム粒多、カーボン微量。

D-D' E-E' 共通

- 1 黒褐色土 ローム粒少、カーボン微量。
- 2 黒褐色土 ローム粒・カーボン微量。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック (φ 2cm) 多。
- 4 暗黄褐色土 S J 15を拡張した際の貼床。
- 5 黒褐色土 ローム粒・カーボン若干。
- 6 暗黄褐色土 ロームブロック (φ 2cm) 多。

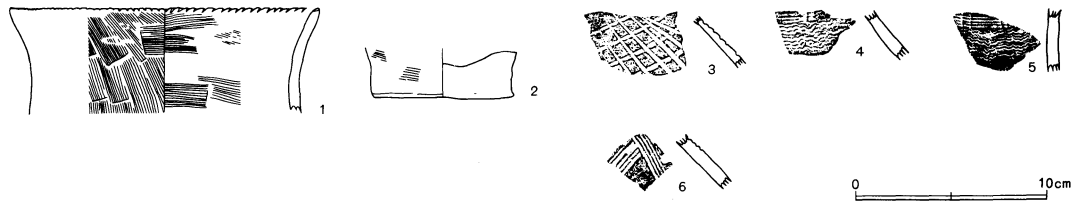
第37図 第15・16号住居跡(1)



- 第15号住居炉跡土層註記
- 炉1 1 黒色土 カarbon多、焼土粒少。
 2 赤褐色土 焼土ブロック層中にCarbon少。
- 炉2 1 黒色土 Carbon層中に焼土粒少。
 2 赤褐色土 焼土ブロック層中にCarbon少。
 3 暗褐色土 ロームブロック(φ2cm)・ローム粒多。

- 第16号住居跡土層註記
 G-G'
- 1 黒褐色土 ローム粒少、Carbon微量。
 2 暗褐色土 ローム粒若干、Carbon微量。
 3 黒褐色土 ローム粒若干、Carbon微量。
 4 暗黄褐色土 ロームブロック多。
- 第16号住居炉跡土層註記
- 1 暗褐色土 ローム粒少。
 2 赤褐色土 焼土ブロック層中にCarbon少。
 3 暗黄褐色土 ロームブロック層中にCarbon・焼土粒少。

第38図 第15・16号住居跡(2)



第39図 第15号住居跡出土遺物

第15号住居跡出土遺物 (第39図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径 (5.3) 現存高 5.5	口唇部に木口状工具による刻み目を施す。外面：ハケ目の後、口縁部を粗い横ナデ。内面：ハケ目とナデ。褐色。	B+G+J 口径35 焼成：やや良
2	壺	底径 7.1 現存高 2.6	胴部：外面ハケの後ナデ、内面ナデ。底部：内外面ともナデ。明赤褐色。	B+D+E 底100 焼成：やや良
3	壺	現存高 2.7	外面：ヘラ描き沈線による左下り直線文の後、右下りの直線文を施す。内面：ナデか。文様は線が深く鮮明。黒褐色。	A+B+F 焼成：普
4	壺	現存高 2.5	外面：櫛描き簾状文を右回転に施し、その下位に8本単位の櫛描き波状文。文様は線が浅く不鮮明。褐色。	A+J 焼成：普
5	甕	現存高 3.3	外面：櫛描き簾状文を右回転で施し、その下位に10本単位の波状文を行う。内面：ナデ。文様は線が浅く不鮮明。茶褐色。	B+E+H+J 焼成：普
6	壺	現存高 2.7	外面：4本単位の櫛描きによる連続山形文を施すと思われる。内面：ナデか。文様は線が深く鮮明。褐色。	A+E+H+J 焼成：普

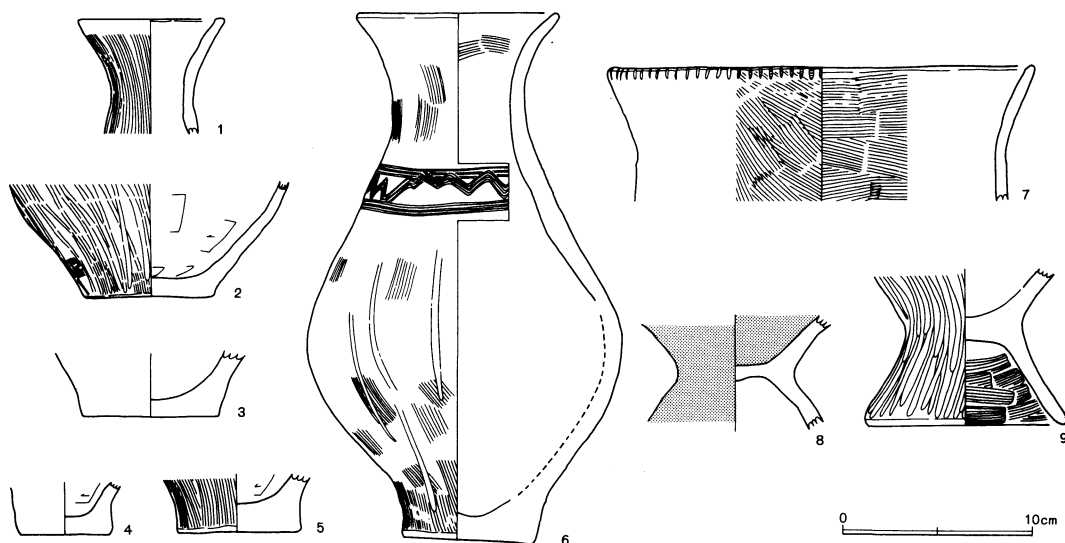
第16号住居跡(第37・38図)

第16号住居跡は、U9hグリッドに位置する。第12号・第15号住居跡に切られる。長軸は、664cm、確認面からの深さは7cm。平面形態は、隅丸の長方形を呈すと考えられる。支柱穴間の距離は、P8-P9間で312cm・P10-P11間で336cm、P8-P11間で232cm・P9-P10間で224cmを測り、主軸方向はN-38°-Eを指す。支柱穴の深さはP8が80cm・P9が84cm・P10・P11が88cmを測るしっかりしたもので、他の遺構との区別は明確であった。炉跡は、支柱穴を結んだ線より若干内側に位置する。

貯蔵穴も確認され、内部から櫛描きをもつ壺(6)が出土した。図化し得た遺物は、計9点である。

第16号住居跡出土遺物 (第40図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	口径 7.2 現存高 5.9	口縁部：内外面とも粗い横ナデか。頸部：外面ハケ目、内面ナデ。にぶい橙色。	A+B+C+H 口径70 焼成：やや良
2	壺	底径 6.5 現存高 4.6	器面は摩滅著しい。胴部：外面はハケ目の後ヘラ磨き、内面はヘラナデ。底部：外面はナデ、内面はヘラナデ。橙色。	A+B+J 胴55 底90 焼成：普
3	壺	底径 6.9 現存高 3.3	内外面ともナデ。にぶい橙色。	A+B+C 底100 焼成：やや不良
4	壺	底径 4.6 現存高 2.9	外面：ナデ、内面：ヘラナデ。黒褐色。	A+B+C+H 底100 焼成：普



第40図 第16号住居跡出土遺物

5	壺	底径 6.4 現存高 3.0	底部に木葉痕。外面：ハケ目、内面：ヘラナデ。橙色。	A+B+C+H 底65 焼成：良
6	壺	口径 (10.3) 胴径 16.5 底径 6.7 器高 27.4	器面は摩滅著しい。口縁部：内外面ともハケ目の後、横ナデか。胴部：外面はハケ目の後ヘラ磨きか、内面はナデか。底部：外面はナデ、内面はナデか。赤褐色。貯穴内。	A+B+I+J 口40 胴・底100 焼成：普
7	甕	口径 (22.0) 現存高 7.0	口唇部外面：木口状工具による刻み目を施す。口縁部：内外面ともハケ目の後、粗いナデ。褐色。	A+B+H+J 口20 焼成：やや不良
8	高 杯	現存高 5.6	器面は荒れている。内外面ともナデ。赤褐色。	A+B+D+H 85 焼成：普
9	台付甕	脚台径 (10.3) 現存高 8.1	胴部下位～脚台部外面：ヘラ磨き。胴部下位内面：ナデ、脚台部内面：ハケ目。黒褐色。	A+B+H+J 75 焼成：普

第17号住居跡 (第41図)

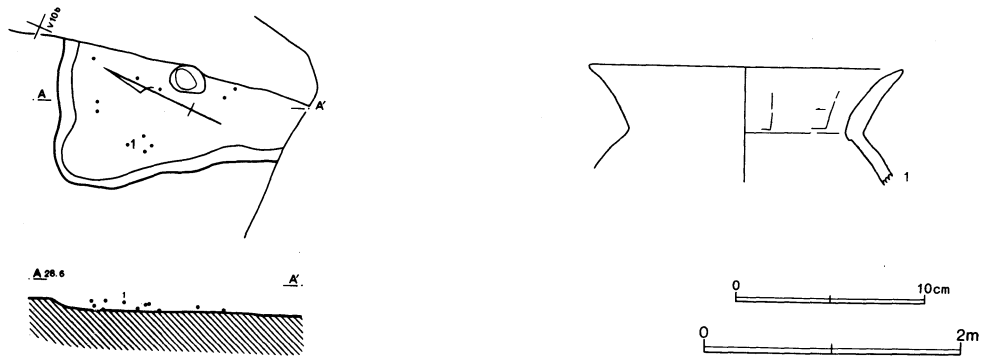
第17号住居跡は、V10 a グリッドに位置する。第4号古墳跡に切られているのと、遺構の大部分が調査は範囲外に続くことから、平面規模・主軸方向は不明。確認面からの深さは4cm。

壁面の立ち上がりは緩やかであり、床面も不明瞭である。ピットは、支柱穴のうちの一つであろうか。

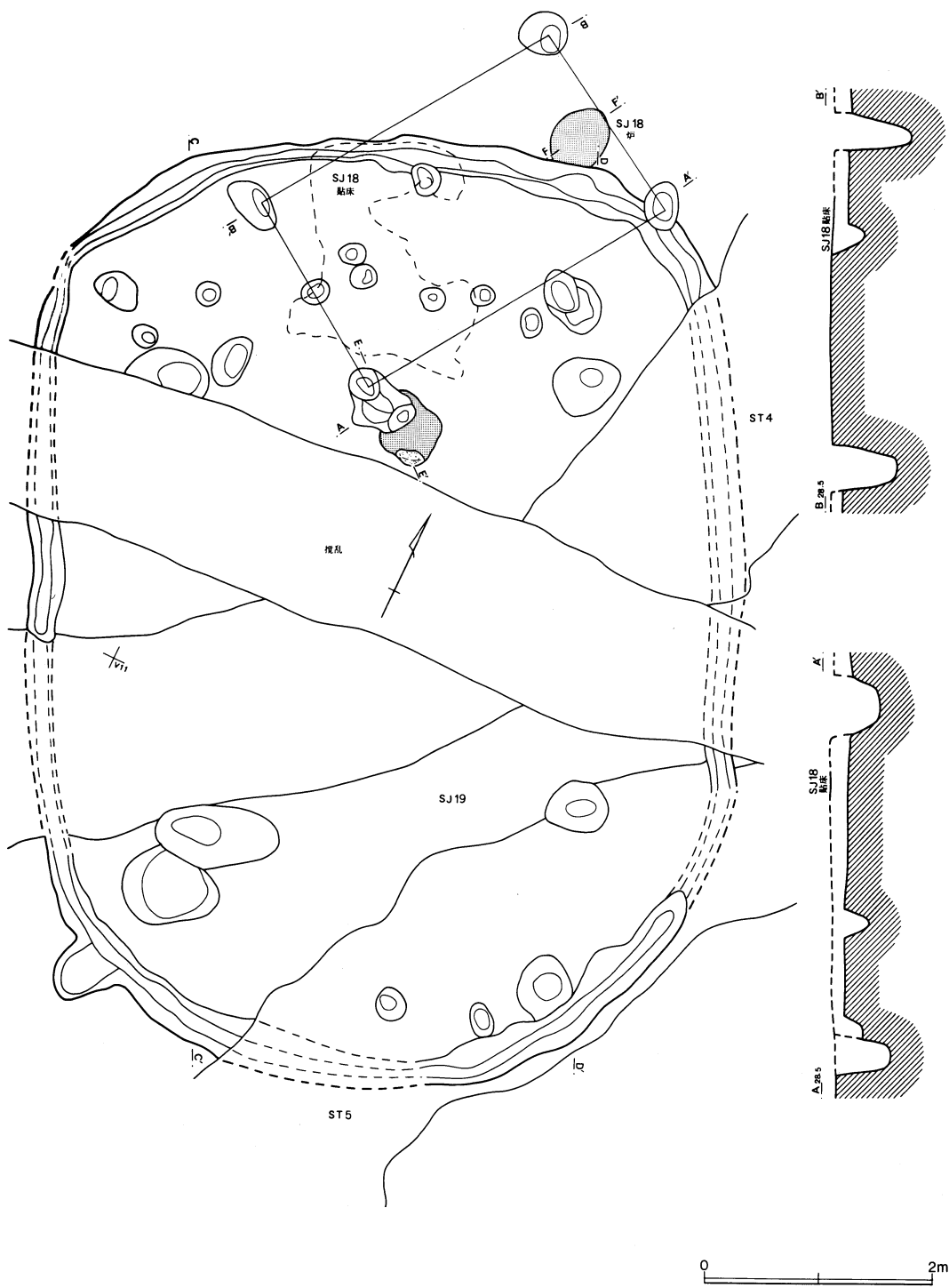
遺物は11点出土したが、図化し得たのは1点である。

第17号住居跡出土遺物 (第41図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径 (16.5) 現存高 6.0	外面にスス附着。口縁部：外面は横ナデ、内面ヘラナデの後横ナデ。胴部上位：内外面ともナデ。にぶい橙色。	B+C+E+H 焼成：やや良



第41図 第17号住居跡

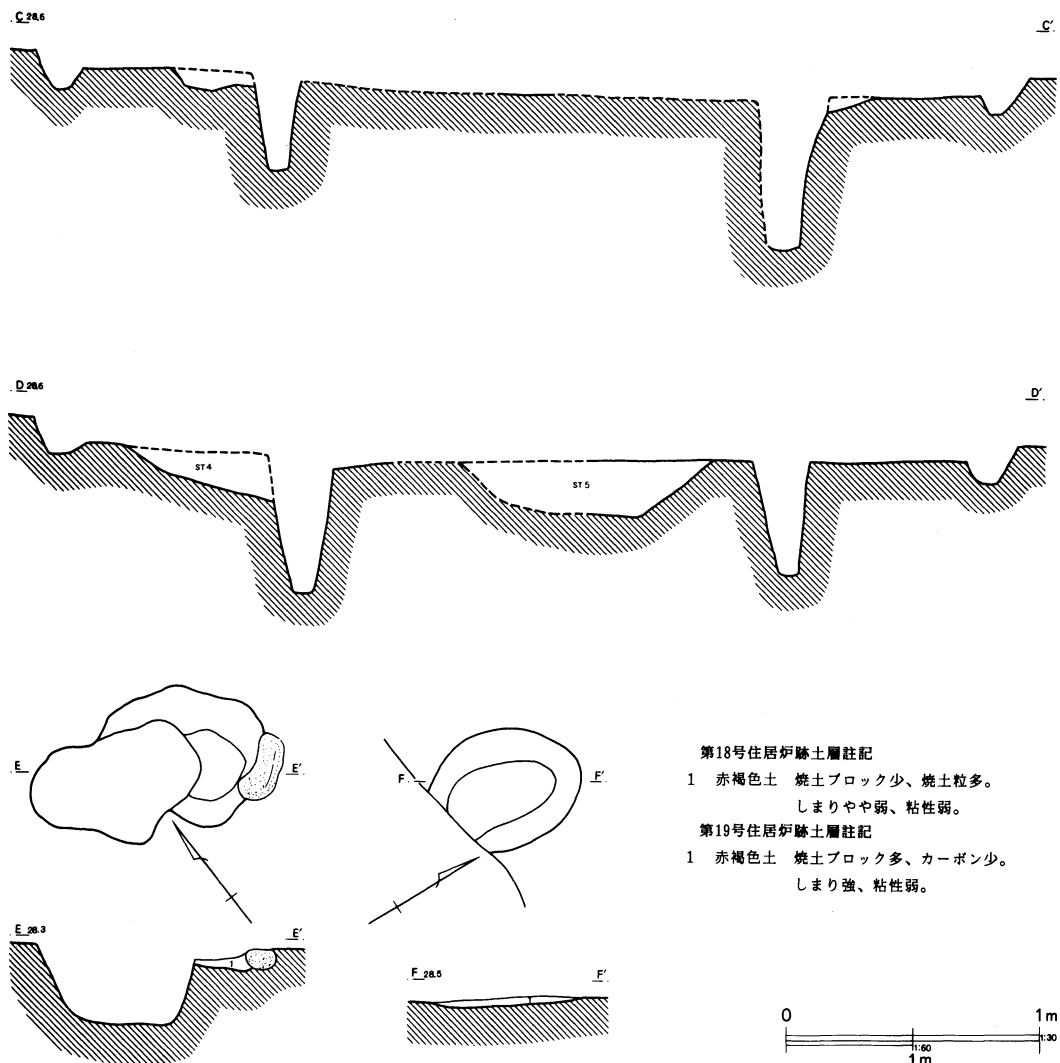


第42图 第18·19号住居跡(1)

第18号住居跡 (第42・43図)

第18号住居跡は、V10 d グリッドに位置する。北側で、第17号住居跡と重複していると推定されるが、新旧関係は不明。東側から南側にかけて、第4号古墳跡に切られる。西側で第8号溝跡と重複するが、新旧関係は不明。南東部分では、水道管によって攪乱されている。本住居跡の推定範囲内には10基程のピットが検出されたが、新旧関係については大部分が不明。但し、第5ピットの可能性をもつものが1基あるが、確定はできなかった。また、第19号住居跡と重複しているが、部分的に検出された貼床が、第19号住居跡ののっており、本住居跡の方が後出であると推定される。壁面・壁溝等は検出されておらず、平面規模は不明。

主柱穴4箇所と炉跡1箇所、それに貼床の一部が確認された。各主柱穴間の距離は、長軸が315cmと300cm、短軸が共に135cmを測り、よく整った長方形に配置されている。各ピットの貼床面からの



第43図 第18・19号住居跡(2)

深さは、北東のピットから時計回りに、42cm・49cm・57cm・75cmを測る。第19号住居跡の壁溝との重複で変形をしている例を除いて、やや浅めではあるが、比較的しっかりとした支柱穴といえる。支柱穴と炉跡から観た主軸方向は、N-31°-Eを指し、N-27°-Wを指す第19号住居跡とは大きく異なっている。一部分検出された貼床は、ロームブロックを主体とした、堅固なものであった。

そしてこれは、第19号住居跡の覆土にのった状態で検出されており、その範囲外では確認されていない。あるいは存在していたとしてもそれほど堅固な貼床ではなく、確認し得なかったのかも知れないが、第19号住居跡の覆土にのっていたものとは強度の点でも大きく異なっていたと考えられる。本住居跡を構築する際、下位に第19号住居跡の覆土があったため、強度をもたせるためよく踏み固めた結果であろうか。炉跡は、支柱穴を結んだ線より若干内側に位置したものである。

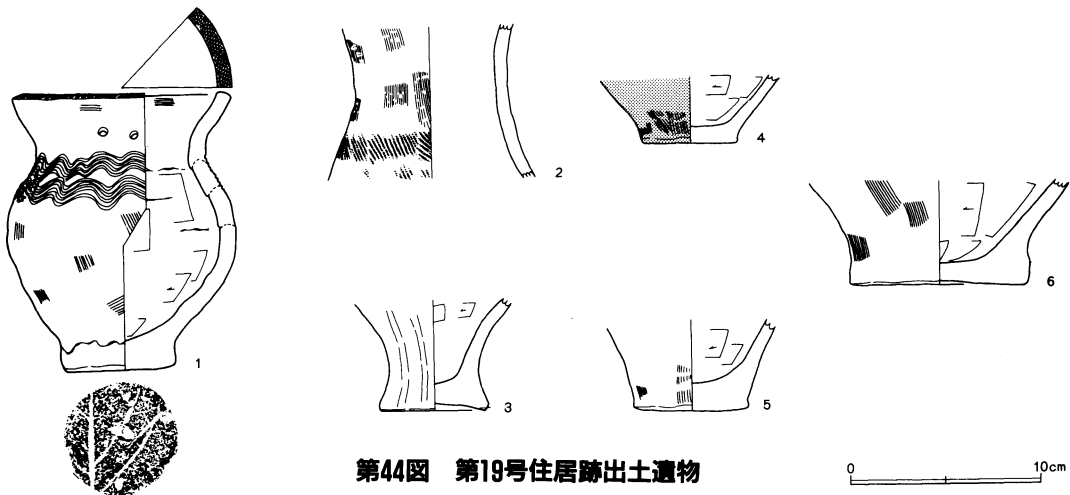
遺物は検出されなかった。

第19号住居跡 (第42・43図)

第19号住居跡は、V11aグリッドに位置する。北側を第18号住居跡に、中央部分を第4号古墳跡と現代の水道管に、南側を第5号古墳跡に切られる。西側では、第8号溝跡と重複するが、新旧関係については不明である。これらの他に、遺構内には幾つかのピットが確認されたが、本住居跡との関連については判別できなかった。しかし、その多くは住居跡を切っているものと推定される。

長軸は830cm、短軸は推定で638cm、確認面からの深さは25cm。平面形態は隅丸の長方形を呈し、確認された壁面は、緩やかではあるが直線的に立ち上がる。主軸方向はN-27°-Wを指し、N-31°-Eを指す第18号住居跡とは大きく異なる。支柱穴4基と、第5ピットとしての梯子穴・炉跡1基・全周するとみられる壁溝、及び貯蔵穴と推定される土壇が、南西部分の支柱穴脇に検出された。支柱穴間の距離は、長軸で375cmと395cm、短軸で365cmと350cmを測る。各支柱穴の深さは、北東のものから時計回りに95cm・90cm・101cm・70cmを測り、非常にしっかりとしたものである。炉跡は、支柱穴を結んだ線の内側に設けられており、内部から、“枕石”と観られる石が出土している。

出土した遺物のうち、図化し得たのは6点である。1は櫛描き文をもち、完形に近い。



第44図 第19号住居跡出土遺物

第19号住居跡出土遺物 (第44図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径 胴径 底径 器高	11.4 12.0 5.9 14.4	頸部対角線上に、2孔を1対有する。口唇部：LR縄文を施す。 口縁部：内外面ともハケ目の後、横ナデ。胴部：外面ハケ目の後、ナデ、内面ヘラナデ。底部内面：ヘラナデ。底部に木葉痕。赤褐色。	A+B+C+E+H 口70 胴90 底100 焼成：やや良
2	壺	現存高	8.0	器面は摩滅著しい。頸部にRL縄文。外面：ハケ目の後ナデか、内面：ナデか。橙色。	A+B+D+E 頸100 焼成：普
3	壺	底径 現存高	5.4 5.6	器面は摩滅著しい。胴部：外面ヘラ磨きか、内面ヘラナデとナデか。底部：内外面ともナデか。赤褐色。	A+B+D+E+I+J 底100 焼成：普
4	壺	底径 現存高	5.0 3.4	器面は荒れている。胴部下位外面：ハケ目の後ナデ、内面：ヘラナデ。底部：外面ナデ、内面ヘラナデ。赤褐色。	B+E+J 底100 焼成：普
5	甕	底径 現存高	5.9 4.6	器面は摩滅著しい。胴部下位：外面ハケ目、内面ナデか。底部：内外面ともナデ。橙色。	A+B+E+H 底100 焼成：やや不良
6	壺	底径 現存高	9.2 5.4	器面は摩滅著しい。胴部下位：外面ハケ目の後ナデか、内面ヘラナデ。底部：外面ナデ、内面ヘラナデ。橙色。	A+B+G+H 底100 焼成：普

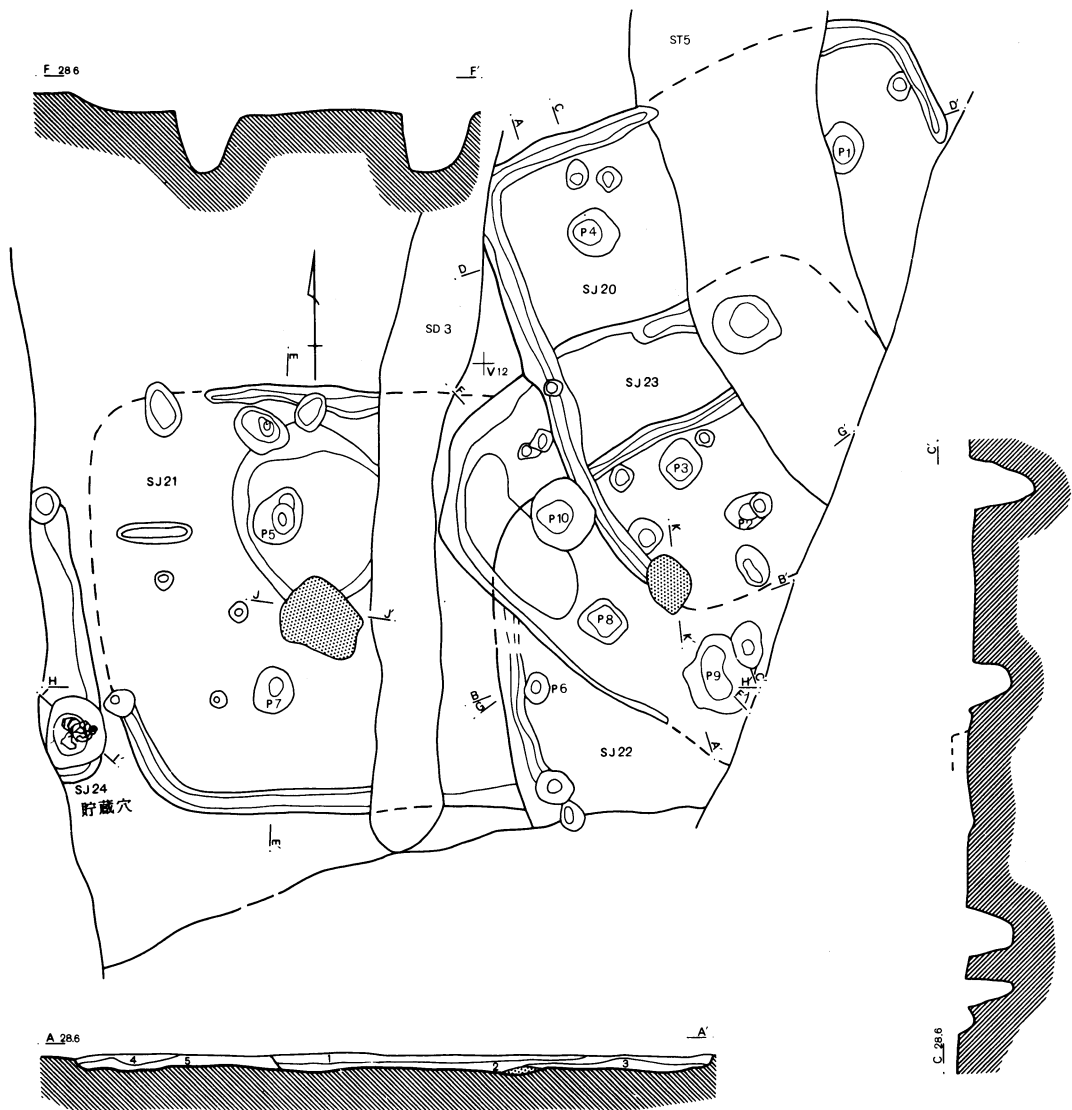
第20号住居跡 (第45・46図)

第20号住居跡は、V11 aグリッドに位置する。中央部分を、南北に第5号古墳跡に切られる。南から西側にかけて、第22号・第23号・第21号と重複する。土層断面から、第23号住居跡に切られているのが観察できたが、他の2軒や第11号溝跡との新旧関係は不明である。

長軸は推定で520cm・短軸は504cmを測り、コーナー部分がやや丸味を帯びた長方形を呈す。P1～P3を支柱穴と推定したが、P3ではなくP2の可能性も否定できない。支柱穴間の距離は、P1-P4間で280cm・P3-P4間で264cmであるが、P2-P4間では336cmとなる。各々の確認面からの深さは、P1が48cm・P3が48cm・P4が56cmを測る。主軸方向は、P2の場合N-20°-Wを指し、P3の場合ではN-23°-Wを指す。規模はP3を支柱穴としての推定値であり、P2であれば今少し大きなものとなる。壁溝は全周すると推定される。炉跡・貯蔵穴は検出されず、遺物の出土もなかった。

第21号住居跡 (第45・46図)

第21号住居跡は、U12 bグリッドに位置する。中央部分で第11号溝跡と、東側で第20号・第22号・第23号住居跡と重複するが、新旧関係については不明である。遺存状況は非常に悪く、床面も不明瞭であった。一部分検出された壁溝から短軸は168cm、壁面はまったく残っていなかった。主軸方向はN-91°-Wを指す。P5～P7が支柱穴と推定される。残る1箇所については、P10と重複しているのであろうか。支柱穴間の距離は、P6-P7間で272cm・P5-P7間で168cm、確認面からの深さは、P5が40cm・P6とP7が48cmを測り、比較的しっかりとしている。図化し得る遺物の出土はなかった。



第20・22号住居跡土層註記

A-A' B-B' C-C' 共通

- 1 黒褐色土 ローム粒少、カーボン微量。しまり・粘性やや弱。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック(φ3cm)若干。しまり・粘性やや弱。
- 3 暗褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり・粘性やや弱。
- 4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少。しまり・粘性やや弱。
- 5 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック若干。しまり・粘性やや弱。
- 6 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少。しまり・粘性やや弱。

E 28.1



0 2 m

第45図 第20~24号住居跡

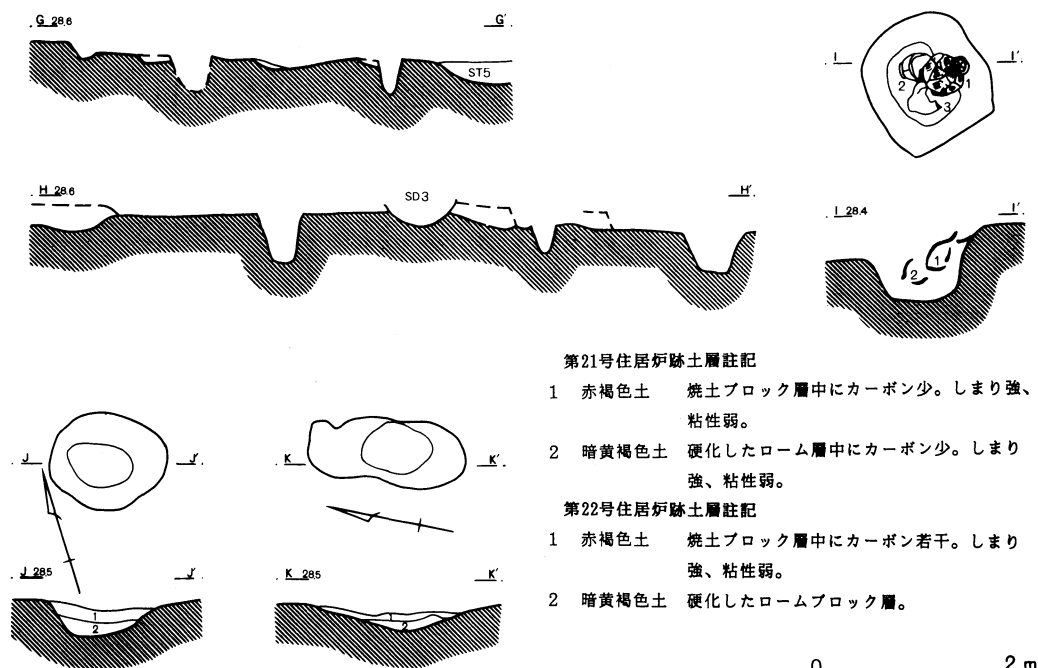
第22号住居跡 (第45図)

第22号住居跡は、V12 a グリッドに位置する。北側から東側にかけて、5号古墳跡に切られる。西側の第21号住居跡、北側の第20号・第23号住居跡との新旧関係については、判別できなかった。コーナー部分が1箇所検出できたのみであり、平面規模は不明、平面形態は隅丸の方形もしくは長方形と推定される。確認面からの深さは16cmである。P 8あるいはP 9を、支柱穴の1つとして推定したい。確認面からの深さは、P 8が64cm・P 9が65cmを測る。調査部分において、壁溝が検出された。

住居跡内で炉跡が検出されているが、本住居跡・第23号住居跡いずれに伴うのか確定し得なかった。調査時においては、後者に伴うものではないか、というのが印象であった。そうであるとすれば、本住居跡が切られていると推定されよう。出土遺物は少なく、図化し得たのは3点である。

第22号住居跡出土遺物 (第47図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	高 坏	脚台径 現存高	9.7 13.0	外面：粗いヘラ磨き。坏部内面：ナデ、脚台部内面：ヘラナデとナデ。橙色。	A+B+G+J 脚35 焼成：やや良
2	高 坏	現存高	7.4	外面：ヘラ磨き。赤褐色。	A+B+H+J 焼成：普
3	高 坏	現存高	5.7	器面は荒れている。外面：ヘラ磨き、内面：ナデ。橙色。	A+B+H+J 接合部 100 焼成：普



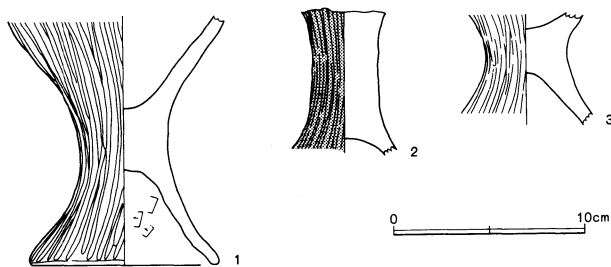
第21号住居炉跡土層註記

- 1 赤褐色土 焼土ブロック層中にカーボン少。しまり強、粘性弱。
- 2 暗黄褐色土 硬化したローム層中にカーボン少。しまり強、粘性弱。

第22号住居炉跡土層註記

- 1 赤褐色土 焼土ブロック層中にカーボン若干。しまり強、粘性弱。
- 2 暗黄褐色土 硬化したロームブロック層。

第46図 第20・21号住居跡炉跡、第24号住居跡貯蔵穴



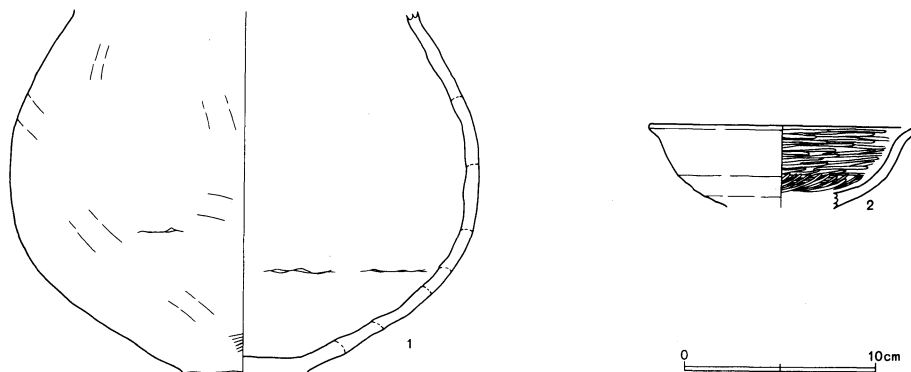
第47図 第22号住居跡出土遺物

第23号住居跡 (第45図)

第23号住居跡は、V12 a グリッドに位置する。北側の第20号住居跡を切り、北側から東側にかけて第5号古墳跡に切られる。南側から西側にかけて、第22号・第21号住居跡と重複するが、新旧関係については不明である。調査時において、第22号・第23号住居跡にまたがった位置に確認された炉跡が、後者に帰属しているように観察された。そうであるとすれば、本住居跡は後出とも考えられよう。コーナー部分が1箇所確認できたのみであり、平面規模・主軸方向は不明、確認面からの深さは16cmを測る。床面ははっきりとせず、立ち上がりについても不明瞭である。壁溝は検出されていない。P10を支柱穴の1つと推定した。確認面からの深さは64cmを測る。P9が支柱穴の可能性も考えられるが、確定は困難であった。本住居跡に伴うと考えられる遺物は、2点であった。

第23号住居跡出土遺物 (第48図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	胴径 (24.5) 底径 6.3 現存高 19.0	胴部外面：上～中位はヘラ削りの後ナデ、下位はハケ目の後ナデ、内面：ナデ。底部：内外面ともナデ。黒褐色。	B+G+J 胴40 底80 焼成：普
2	高杯	口径 (13.7) 現存高 4.3	口縁部：外面横ナデ、内面横ナデの後ヘラ磨き。体部：外面ナデ、内面ヘラ磨き。橙色。	A+B+H+J 口15 体20 焼成：良



第48図 第23号住居跡出土遺物

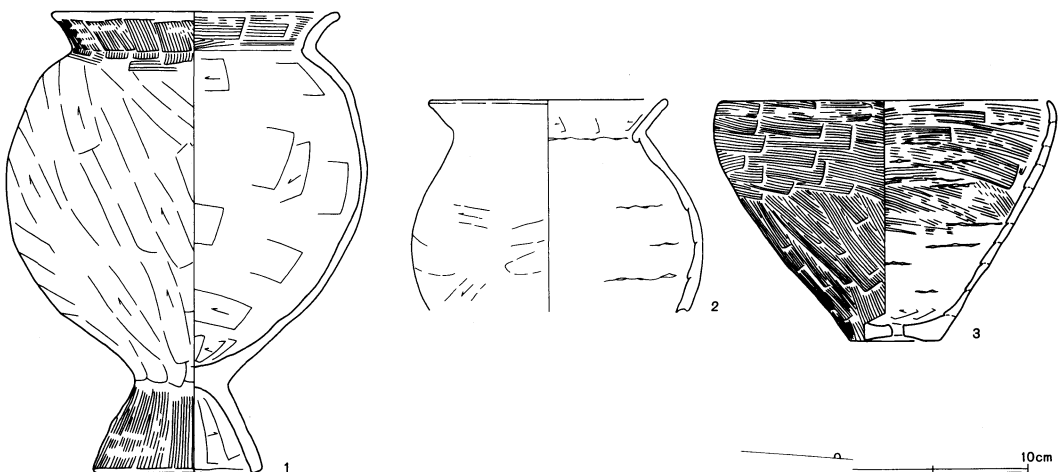
第24号住居跡 (第45・46図)

第24号住居跡は、U12eグリッドに位置する。南北方向を、水道管によって攪乱されている。殆ど貯蔵穴部分のみが検出されたのみであるため、遺構の平面規模・形態及び主軸方向は不明である。そのため、周辺遺構の内どこまでが重複しているのかも判断に苦しむ。強いて挙げるならば、北側で第30号・第31号住居跡と、東側で第21号住居跡とそれぞれ重複している可能性をもつ。第30号・第31号住居跡はその平面形態から推して、弥生時代に属する遺構であろう。重複していると仮定するならば、本住居跡が切っていると判断される。第21号住居跡については、形態が今一つ不明確で遺物も検出されていないことから、不明であるといわざるを得ない。

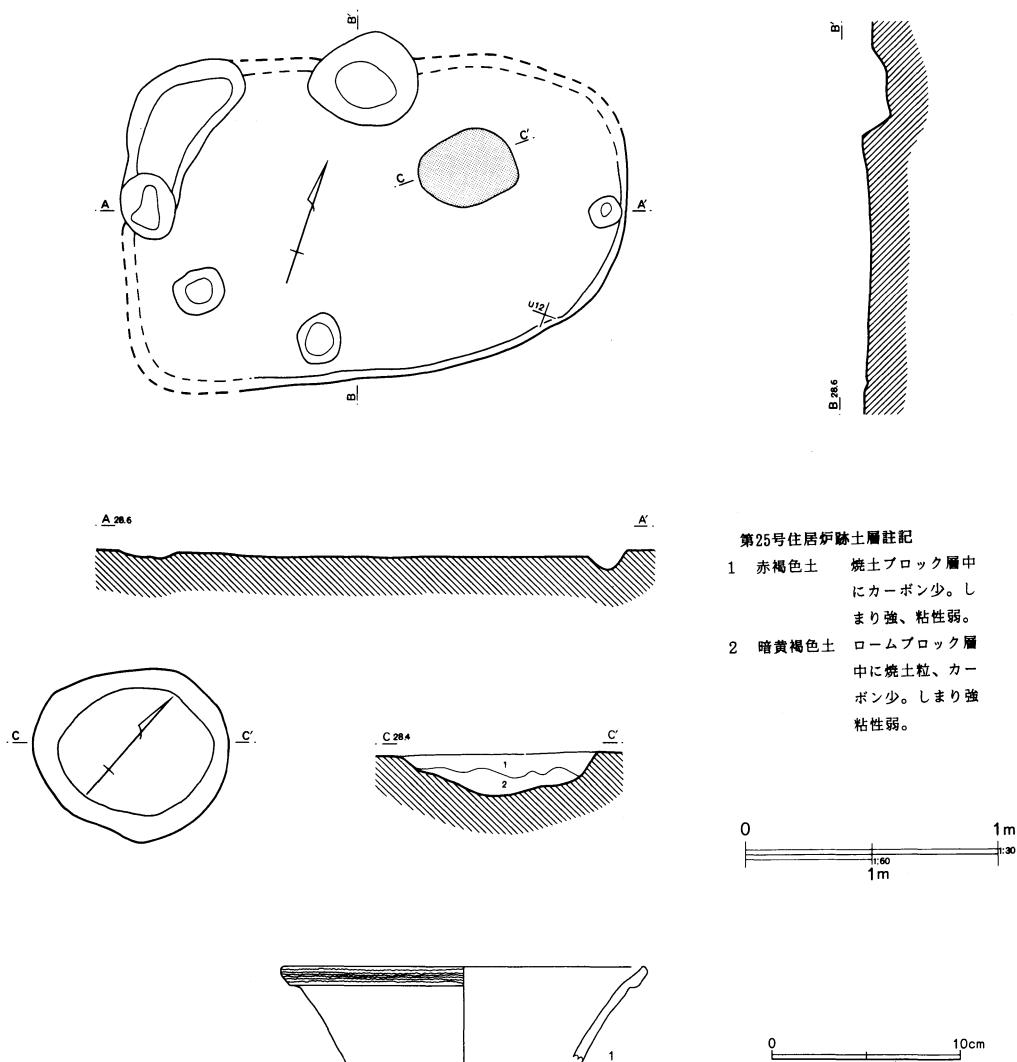
貯蔵穴は、攪乱から僅かにそれたため、辛うじて遺存し得たともいうべき遺構であった。66cm×64cmの平面円形に近く、確認面からの深さは42cm。図化した遺物は全て、貯蔵穴出土である。

第24号住居跡出土遺物 (第49図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	台付甕	口径	14.9	口縁部：内外面ともハケ目の後、粗い横ナデ。胴部外面：ヘラ削りの後、部分的に粗いナデ。胴部内面：ヘラナデ。脚台部外面ハケ目の後粗いナデ、内面ヘラナデ。にぶい褐色。貯蔵穴内。	A+B+H(多)+J 口90 胴85 脚100 焼成：やや良
		胴径	18.8		
		脚台径	8.9		
		器高	24.0		
2	甕	口径	12.4	器面は荒れている。口縁部～肩部にスス附着。口縁部：外面横ナデ、内面ヘラナデの後横ナデ。胴部：粗いヘラ削りの後粗いナデか、内面ナデ。明赤褐色。貯蔵穴内。	A+B+C+E+H 口・胴上半100 焼成：普
		胴径	15.2		
		現存高	11.1		
3	甗	口径	17.2	体部外面：ハケ目、内面：上半ハケ目の後粗いナデ、下半ナデ。底部：外面ナデ、内面ヘラナデ。褐色。底部の孔は1箇所。孔径0.8cm。貯蔵穴内。	A+B+H+J 体95 底100 焼成：やや良
		底径	4.9		
		器高	12.4		



第49図 第24号住居跡出土遺物



第25号住居炉跡土層註記

- 1 赤褐色土 焼土ブロック層中にカーボン少。し
まり強、粘性弱。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック層中に焼土粒、カー
ボン少。しまり強
粘性弱。

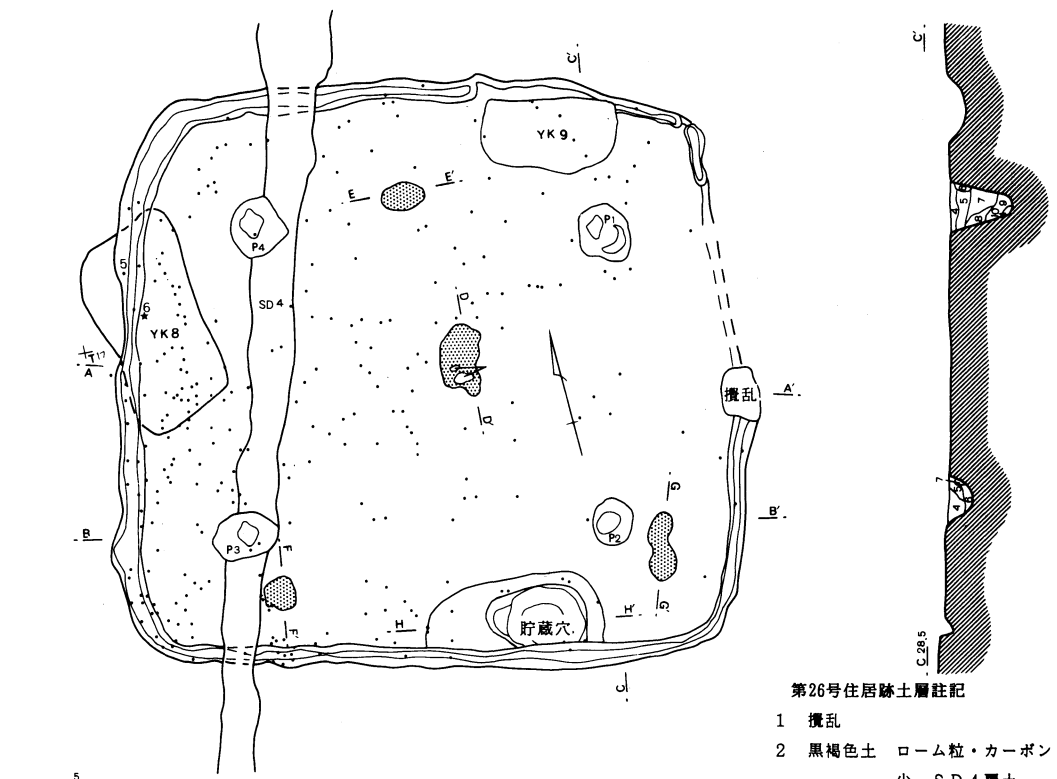
第50図 第25号住居跡、出土遺物

第25号住居跡 (第50図)

第25号住居跡は、U12 i グリッドに位置する。東側から南側に壁面が、西側には掘り方の一部が確認された。壁溝はなく、柱穴と覚しきピットはなかった。平面規模は共に推定で405cm×253cm、確認面からの深さは5cm。炉跡1基検出。図化し得た遺物は1点である。

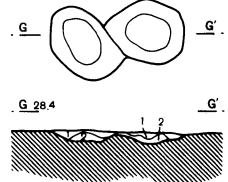
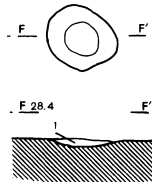
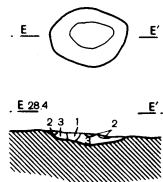
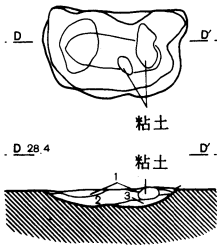
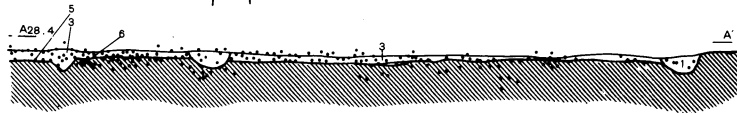
第25号住居跡出土遺物 (第50図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	口径 (19.0) 現存高 5.0	器面は摩滅している。口縁部外面：横ナデの後、6本単位の櫛状工具による波状文。頸部外面：ハケ目の後ナデか。内面全体：ナデか。明橙色。ピット内。	A+B+G+J 口20 焼成：やや不良



第26号住居跡土層註記

- 1 攪乱
- 2 黒褐色土 ローム粒・カーボン少。SD4覆土。
- 3 暗褐色土 ローム粒・炭化物少。
- 4 黒褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物含有。
- 5 黒褐色土 1層に類似。茶色が若干強い。
- 6 黒褐色土 ロームブロック混入。
- 7 黒褐色土 2層に比して黒色強。
- 8 茶褐色土 ローム粒多。
- 9 黒褐色土 ロームブロック若干。
- 10 黄褐色土 5層に類似。



炉跡土層註記

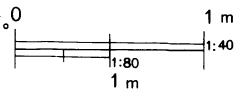
D-D'

- 1 黒褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物含有。しまり弱、粘性強。
- 2 赤褐色土 焼土層、熱のため赤化している。
- 3 黒褐色土 熱のため赤化気味。ローム粒・ロームブロック・焼土粒含有。しまり無。

E-E' F-F' G-G' 共通



- 1 攪乱
- 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土・炭化物含有。
- 3 黒褐色土 第1層に類似するが焼土粒少。
- 4 明赤褐色土 焼土層。



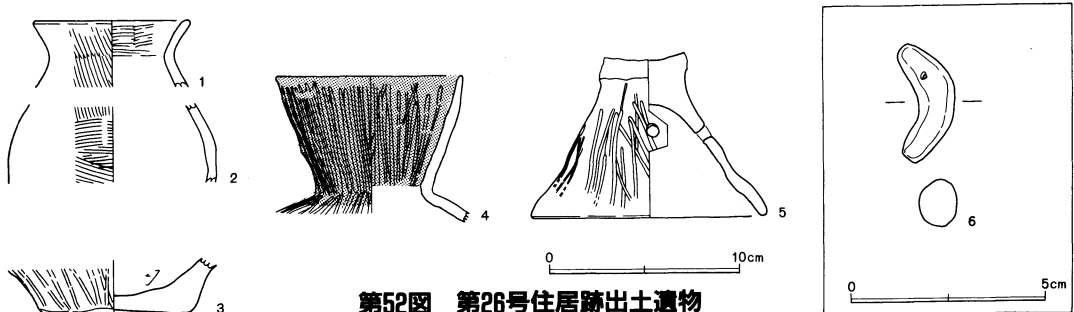
第51図 第26号住居跡

第26号住居跡 (第51図)

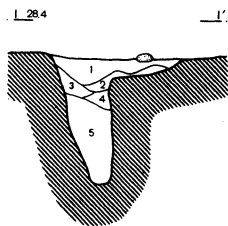
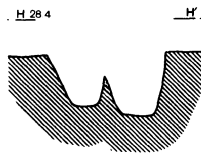
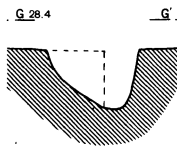
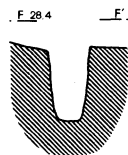
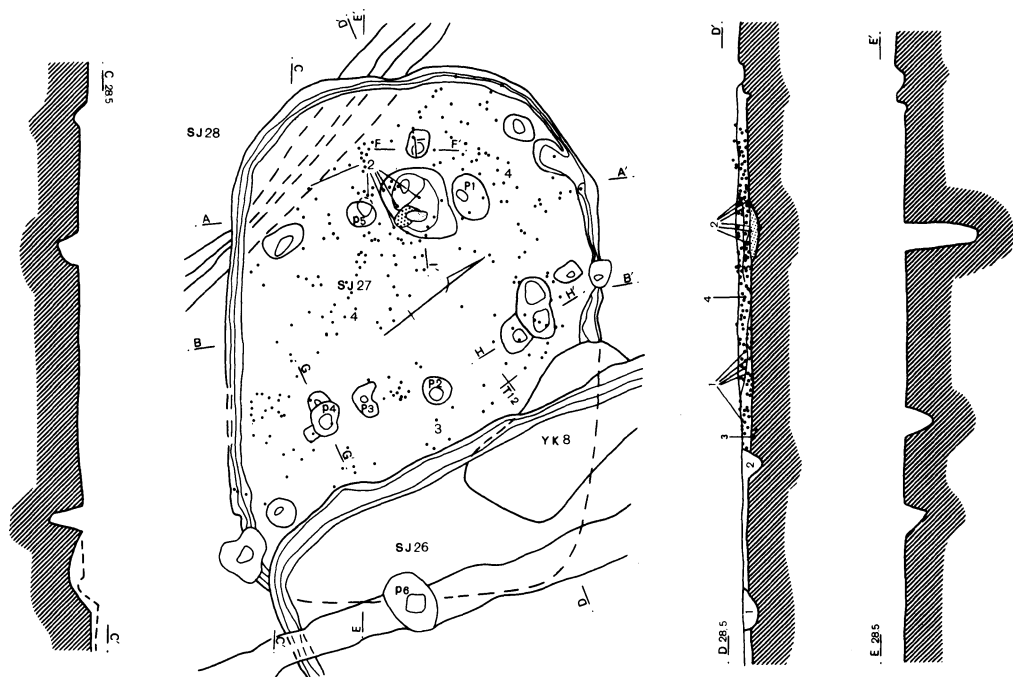
第26号住居跡は、T11gグリッドに位置する。南北に第4号溝跡に切られる。東側では、その形態から弥生時代の遺構と観られる、第30号・第31号住居跡を切る。南側では、第39号住居跡と重複するが新旧関係は不明。西側では、第27号住居跡を切っている。ちなみに、本住居跡は今回の調査で最初に調査された遺構である。平面規模は、長軸672cm・短軸624cm、確認面からの深さは10cmを測り、形態はコーナー部分がやや丸味をもった方形に近い。壁溝は一部途切れるが、ほぼ全周する。支柱穴4基 (P1~P4)・貯蔵穴・炉跡等々が確認できた。支柱穴間の距離は、P2-P3間が376cm・P1-P4間が368cm・P1-P2間が312cm・P3-P4間が328cmを測り、主軸方向はN-11°-Eを指す。床面からの支柱穴の深さは、P1が64cm・P2が24cm・P3が80cmであり、比較的しっかりとしている。壁面は曖昧なもので、比較的緩やかに立ち上がる。貼床は、ロームブロックが少ないためあっても、非常に判別しづらいものであった。住居跡の中央付近に、炉跡が検出された。粘土ブロックを有し、長方形に近い。このほか壁溝近くにも、3基の炉跡状遺構が存在した。床面が焼けたものではないが、炉跡とするには焼土粒・炭化物が少ないといえる。図化した遺物は6点であった。

第26号住居跡出土遺物 (第52図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等		
1	壺	口径	8.0	1と2は同一個体と思われる。口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデ。胴部：外面ハケ目、内面ナデ。ハケ目は目が粗い。褐色。	A+B+D+I+J		
2		胴径	(10.9)		口・胴20		
		現存高	7.5		焼成：普		
3	壺	底径	7.5	胴部外面：ヘラ磨き。底部外面：ナデ。内面全体：ヘラナデか。にぶい橙色。	A+B+D+I		
		現存高	2.8		焼成：やや良		
4	壺	口径	9.6	口縁部：内外面とも横ナデの後、ヘラ磨き。胴部上端部：外面粗いヘラ磨き、内面ナデ。赤褐色。	A+B+C+G		
		現存高	4.4		口95		
		脚台径	(12.4)	坯底部内面：ナデ。脚台部：外面ヘラ磨き、内面非常に粗いナデ、のち端部内外面を横ナデ。孔4箇所。にぶい褐色。	B+C+D+F		
5	高坏	現存高	8.6		脚60	焼成：良	
		長さ	3.2	部平坦。片側穿孔と思われるが、表裏で孔径が異なる。	A+B+E+J	完形	
6	土製勾玉	幅	1.2				焼成：普
		重さ	4.1g				

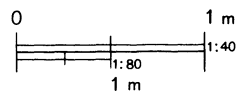


第52図 第26号住居跡出土遺物

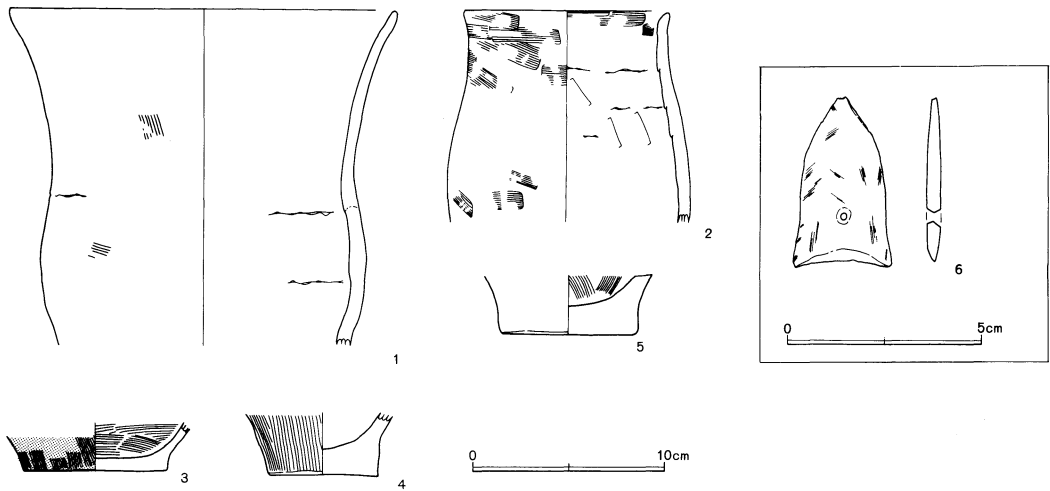


第27号住居跡土層註記

- 1 SD 4 覆土。
- 2 SJ 26 覆土。
- 3 黒褐色土 カーボン少。
- 4 黒褐色土 焼土粒少。
- 5 黒褐色土 焼土粒若干。



第53図 第27号住居跡



第54図 第27号住居跡出土遺物

第27号住居跡（第54図）

第27号住居跡は、S11 i グリッドに位置する。東側を、第26号住居跡と第4号溝跡に切られる。西側については、第28号住居跡に切られている。なお北側で弥生・古墳時代土壌8と重複しているが、調査時の土層観察において、本住居跡が切られていると推定された。

平面規模は長軸方向で推定560cm・短軸方向で400cmを測り、平面形態は隅丸の長方形が推定される。確認面からの深さは、16cmを測る。主軸方向はをN-56° -Wを指し、第26号住居跡（N-11° -E）、第28号住居跡（N-12° -W）とは大きく異なる。

主柱穴は、4箇所検出された。但し、南東部分の主柱穴については、P3とP4の両方に可能性が考えられる。各主柱穴間の距離は、P1-P2間が212cm・P2-P3間では80cm・P2-P4間では124cm・P3-P5間では196cm・P4-P5間では228cm・P5-P1間が112cmを測る。本住居跡は、遺構の規模に較べて主柱穴の配置がごく狭い範囲内に並べられている。各ピットの確認面からの深さは、P1が76cm・P3が80cm・P4が56cm・P5が72cmを測る。南東部分の主柱穴は、P3・P4いずれに関わらず、全体的に深くしっかりしたものといえる。

但し主柱穴の南側短軸を、P2-P3またはP2-P4で想定した場合、東側の推定プラン（第53図破線部分）との間隔が若干大きいように見受けられる。あるいは、第26号住居跡の貼床面に位置しているのであろうか。

主柱穴を結んだ線のやや内側、北寄りにおいて炉跡が1基検出された。炉跡は、平面規模42cm×29cm、平面楕円形を呈し、確認面からの深さ66cmを測るピットを切って設けられている。炉跡の平面規模は、30cm×20cmの平面楕円形、確認面からの深さは11cmである。遺物は、甕1点（同図2）の上半部が復元できたのみであった。

第27号住居跡出土遺物 (第54図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径	20.1	口縁部：内外面共横ナデ。胴部：外面はハケ目の後、丁寧なナデ。内面はナデ。 暗褐色。	A+B+H 口径50
		胴径	17.0		胴65
		現存高	17.4		焼成：普
2	甕	口径	10.6	口縁部：ハケの後横ナデ。胴部：外面はハケ、内面はヘラナデの後ナデか。内外面共に器面は摩滅著しい。 黄橙。	A+B+C+E+H
		胴径	12.7		口径95 胴70
		現存高	11.1		焼成：良
3	壺	底径	7.5	胴部：外面はハケ目の後、ナデ。内面はハケ目。 底部：内外面共ナデ。赤褐色。	底100
		現存高	2.5		焼成：普
4	甕	底径	5.1	胴部：外面はハケ目、内面はナデ。底部外面はナデ。 黄褐色。	B+D+J 底80
		現存高	3.2		焼成：普
5	壺	底径	7.1	底部：外面はナデ、内面はハケ目。器面は荒れている。 橙色。	底100
		現存高	3.1		焼成：普
6	石 鏃	現存長	4.4	磨製によるもので、両に条線を多く残す。先端部を欠くが、概形は5角形を呈し、挟りは浅い。長幅比は0.6。先端角は65度。 中央部より下位に両方向からの穿孔。転用品か。重さ4.4 g。	緑泥片岩製
		幅	2.6		
		厚さ	0.4		

第28号住居跡 (第55図)

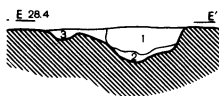
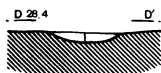
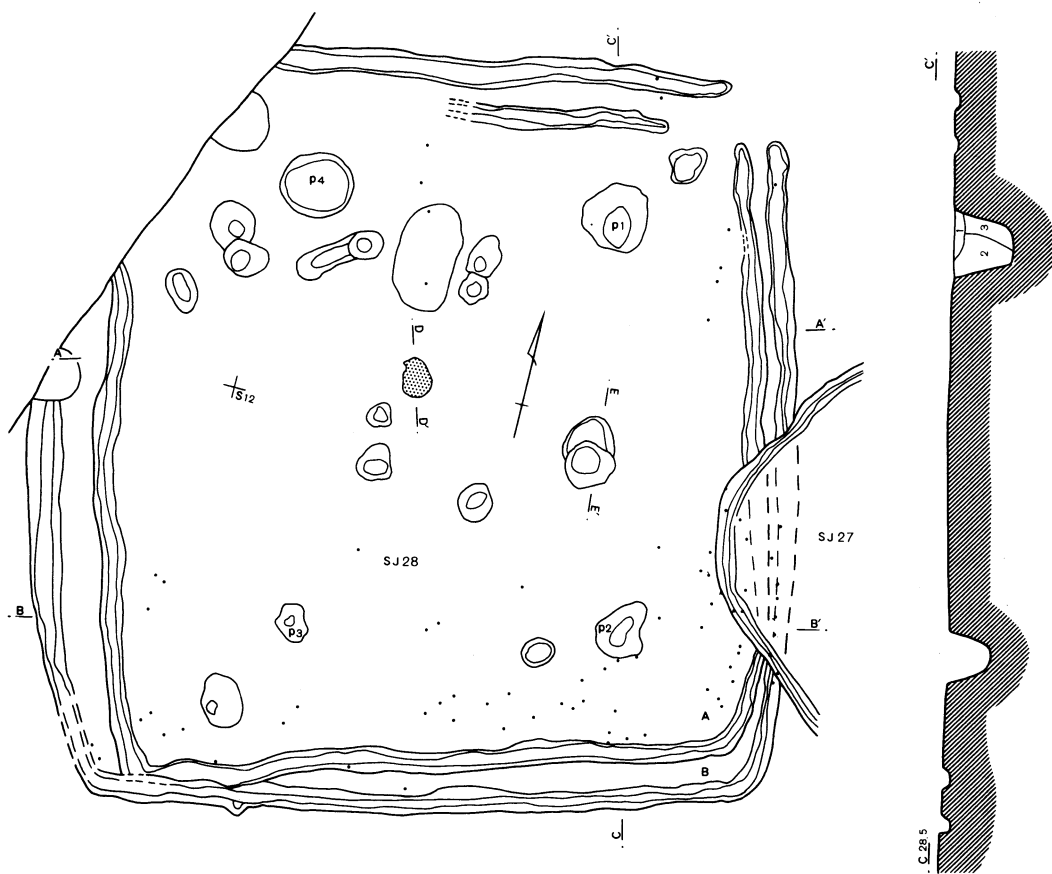
第28号住居跡は、T11 f グリッドに位置する。北側で、溝跡と重複している。両遺構とも遺存状態が悪いため、新旧関係は不明ではあるが、検出状況から本住居跡が切られていると推定される。東側で、第27号住居跡を切る。西側コーナー部分については、調査範囲外に続いている。確認面から貼床面までの深さは、4～6 cm と非常に浅くはあるが、平面規模や平面形態は良く止めている。

本住居跡は、その平面規模・形態において、以下の特徴が挙げられる。

- 1：壁溝がほぼ平行して2重に巡っており、明らかに後出の遺構が、もう一方を意識した結果と看做される。(便宜上、内側をA、外側をBと命名して以下に記述を行う。)
- 2：貼床面のレベルは一致している。
- 3：支柱穴についてはP1～P4が推定されるが、2軒分の壁溝に対し、支柱穴はその並びから1軒分しか検出されていない。P1～P4の支柱穴が共通であったと考えられる。
- 4：炉跡は1箇所のみで検出されており、A・Bに共通もしくは、どちらか後出の住居跡に伴う結果と推定される。
- 5：僅かに遺存していた覆土は、A住居跡・B住居跡とに共通であり、内側に位置する前者が後者を切って構築されたとは考えにくい。

1～5の事柄から、内側に位置するAの住居跡を拡張して、Bの住居跡が構築されたと推定される。支柱穴や炉については、A住居跡のものがそのまま継続して用いられた、と考えられようか。

A(内側)の平面規模は、南北方向・東西方向共に803cmであり、非常に整った方形を呈す。確認



第28号住居跡土層註記

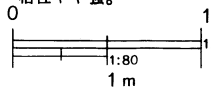
- 1 暗褐色土 ローム粒・カーボン若干。しまり・粘性やや弱。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック (φ 3 cm) ・ローム粒多。しまり・粘性やや弱。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック (φ 5 cm) 若干、ローム粒多。しまり・粘性強。

ピット土層註記

- 1 黒褐色土 ローム粒・カーボン微量。しまり・粘性やや強。
- 2 暗褐色土 ローム粒少。しまり・粘性やや強。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒多。しまり・粘性やや強。

炉跡土層註記

- 1 赤褐色土 焼土ブロック多。



第55図 第28号住居跡

面から僅かに2～3cmを掘り下げた段階で、貼床面に達してしまった。貼床面は、ロームブロックの含まれる割合が少ないためか、色調的にも不明確であり、硬度も低いものであった。

主軸方向は、A・BともN-8°-Wを指し、第26号住居跡(N-11°-E)とは若干ずれをもち、第27号住居跡(N-56°-W)とは大きく異なっている。

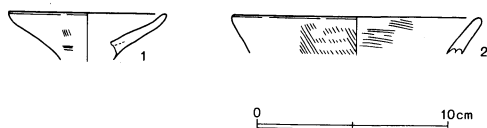
P1～P4が、支柱穴として推定される。支柱穴間の距離は、P1-P2間が448cm・P2-P3間が344cm・P3-P4間が456cm・P4-P1間が320cmを測り、各支柱穴の貼床面から支柱穴の深さは、P1が64cm・P2が64cm・P3が28cmを測る。支柱穴の並びは長方形を呈し、非常に規則的に配置がされている。

遺構内には、多数の土壌やピットが確認されている。土壌(第55図において上場の線のみで表現してある遺構)についてはフカフカした黒色の覆土をもつ遺構であり、近世以降に降ると推定される。ピットについても、その大部分が、本住居跡の貼床面を切って穿れたものであると想定された。貯蔵穴と覚しき遺構は検出されなかった。

第28号住居跡は、拡張している点から観ても、ある程度継続性をもった住居跡と想定される。そして、攪乱によって覆土の大部分は失われてはいたが、貼床面にまで及んではいなかった。しかし、検出された貼床面は、非常に軟弱なものであり、これはAの外側にも共通している。

B(外側の住居跡)の平面規模は、南北方向で804cm・東西方向で803cmを測り、非常に整った方形を呈す。主軸方向については、Aと同様である。Bの範囲内においても、貯蔵穴と思われる遺構は検出されていない。支柱穴を結んだ線の内側、やや北西寄りに炉跡が検出されている。平面規模は、42cm×32cmを測り、平面楕円形。床面からの深さは6cmを測る。住居跡の規模に対して、炉跡は平面の規模や掘り込みが、非常に小さなものであるといえよう。

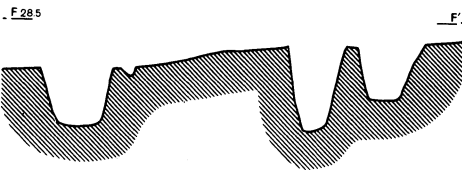
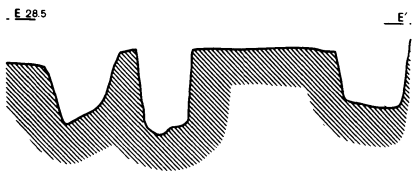
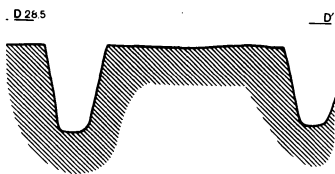
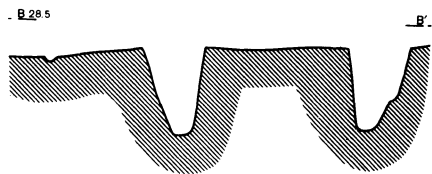
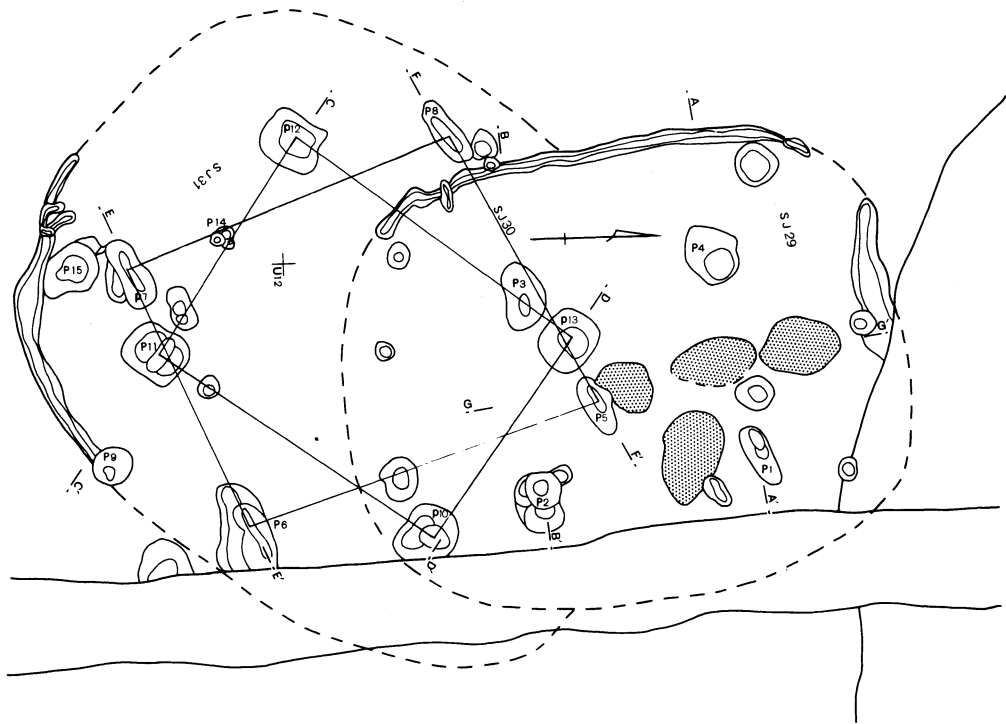
僅かに残された覆土中から、小数の土器片が出土した。主に壁溝際に分布しているが、これは壁溝付近が、中央部分に較べ若干低いため、攪乱から免れたためとも考えられよう。出土した遺物のうち、図化し得たのは2点であった。



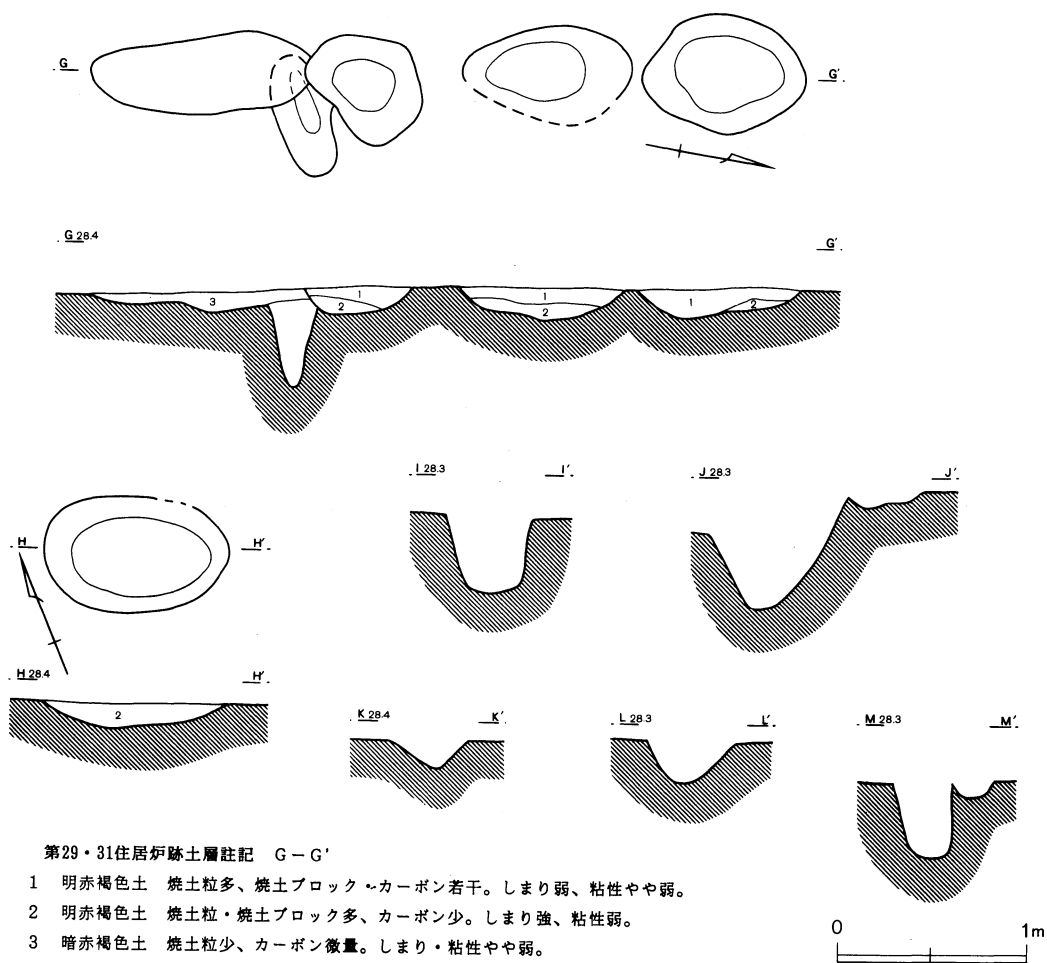
第56図 第28号住居跡出土遺物

第28号住居跡出土遺物 (第56図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	器台	口径 現存高	8.2 2.4	口縁部：内外面とも横ナデ。坏部：外面はハケ目の後、ナデ。内面はナデ。橙色。	A+B+I+J □30 坏30 焼成：普
2	壺	口径 現存高	(13.1) 1.9	口縁部：内外面ともハケ目の後、粗い横ナデ。褐色。	A+B+P+I+J □25 焼成：普



第57图 第29·30·31号住居跡(1)



第58図 第29・30・31号住居跡(2)

第29号住居跡 (第57・58図)

第29号住居跡は、T11 f グリッドに位置する。遺構の遺存状況は、非常に悪い。北側を第4号古墳跡に切れ、東側を水道管によって攪乱される。南側から西側にかけて重複する、第30号・第31号住居跡との新旧関係については不明である。壁溝の一部と炉跡3箇所・支柱穴4箇所が検出された。壁溝から推定した平面形態は隅丸の長方形であり、規模は長軸で600cm、短軸で480cm。主軸方向はN-8°-Wを指す。支柱穴間の距離は、P1-P2間で232cm・P3-P4間で216cm、P1-P4間で192cm・P2-P3間で200cmを測る。各支柱穴の確認面からの深さは、P1が80cm・P2が84cm・P3が92cm・P4が96cmと、いずれも深くしっかりとしており、他の住居跡の支柱穴との区別は明確であった。床面は既に失われており、炉跡も最下面のみが遺存したため数的に3基となったと推定される。本来は1~2基と思われる。出土遺物は2点であり、甕(1)は混入であろう。

第29号住居跡出土遺物 (第59図)

番号	器種	法量	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	底径 9.5 現存高 7.6	胴部下半：外面はヘラ削りの後、粗いナデか。内面は丁寧なヘラナデ。底部：外面はヘラ削りの後ナデ。内面はナデ。橙色。	A+B+C+H (多) 胴下30 底100 焼成：普
2	甌	底径 6.5 現存高 3.0	外面はナデ、内面はヘラナデか。 橙、黒色帯びる。孔径1.2cm。	A+B+C+G 底100 焼成：普

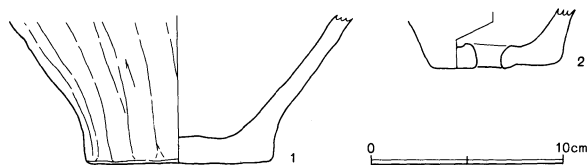
第30号住居跡 (第57・58図)

第30号住居跡はT11 i グリッドに、第31号住居跡はR12 h グリッドに位置する。互いに重複している。南に一部確認されている壁溝は、第31号住居跡に伴うとして推定線を引いたが、第30号住居跡に帰属する可能性も否定しきれなかった。新旧関係は不明。北側で第29号住居跡と重複するが、壁溝の残存から、どちらの床面レベルも近いと推察される。炉跡の痕跡を残す第29号住居跡が後出とも仮定できようか。詳細は不明である、といわねばならない。第30号住居跡については、南部分の壁溝を伴うとも考えられるが、やはり可能性は低いといえる。確実な遺構としては支柱穴4基 (P5～P8) であり、P9が第5ピットとなるかも知れない。主軸方向はN-18° -Wを指す。支柱穴間の距離は、P5-P6間で384cm・P7-P8間で368cm、P5-P8間で304cm・P6-P7間で324cm、各支柱穴の確認面からの深さは、P5で60cm・P6で66cm・P7で88cm・P8で68cmを測る。いずれも、平面は長方形を呈する柱穴である。他の遺構との判別は明瞭であった。遺物の出土はない。

第31号住居跡 (第57・58図)

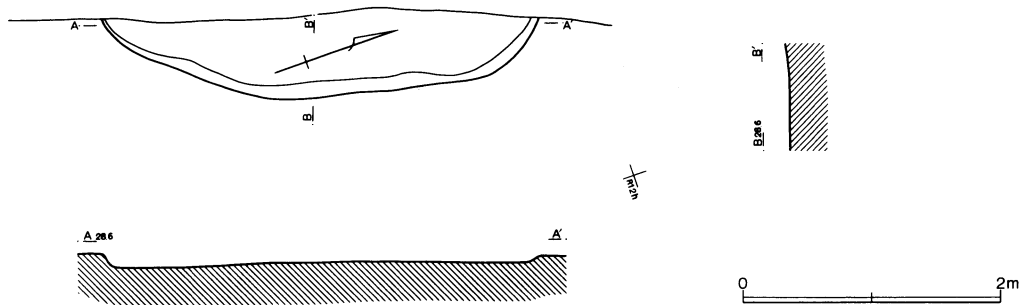
第31号住居跡は、壁溝をもつと推定される。支柱穴は4基 (P10～P13) 検出されている。P14は柱穴であろうか。壁溝を、本住居跡に伴うとしての平面規模は、長軸710cm・短軸570cm程、形態は隅丸の長方形を呈すると推定される。

主軸方向はN-40° -Eを指し、第29号・第30号住居跡のいずれとも異なる。各支柱穴間の距離は、P10-P11間・P12-P13間共に352cm、P10-P13間で256cm・P11-P12間で264cmであり、整然と配置されていた。各支柱穴の深さは、P10が84cm・P12が104cm・P13が92cmを測り、



第59図 第29号住居跡出土遺物

非常にしっかりしている。規模・形態ともに類似していることから、他遺構との判別は明瞭であった。P2・P6・P7・P10・P11のように、一部掘り広げられた例は、柱材の抜き取り痕であろうか。P15に貯蔵穴の可能性を考えたが、第30号住居跡に伴う可能性もある。遺物の出土はなかった。



第60図 第32号住居跡

第32号住居跡 (第60図)

第32号住居跡は、R12 i グリッドに位置する。住居跡の東側縁辺部が、僅かに調査区域内に入っているのみであり、大部分は範囲外であった。平面の規模・形態共に不明で、確認面からの深さは10cmを測る。壁溝は検出されていない。壁面の立ち上がりは緩やかで不明瞭である。

遺物は出土していない。

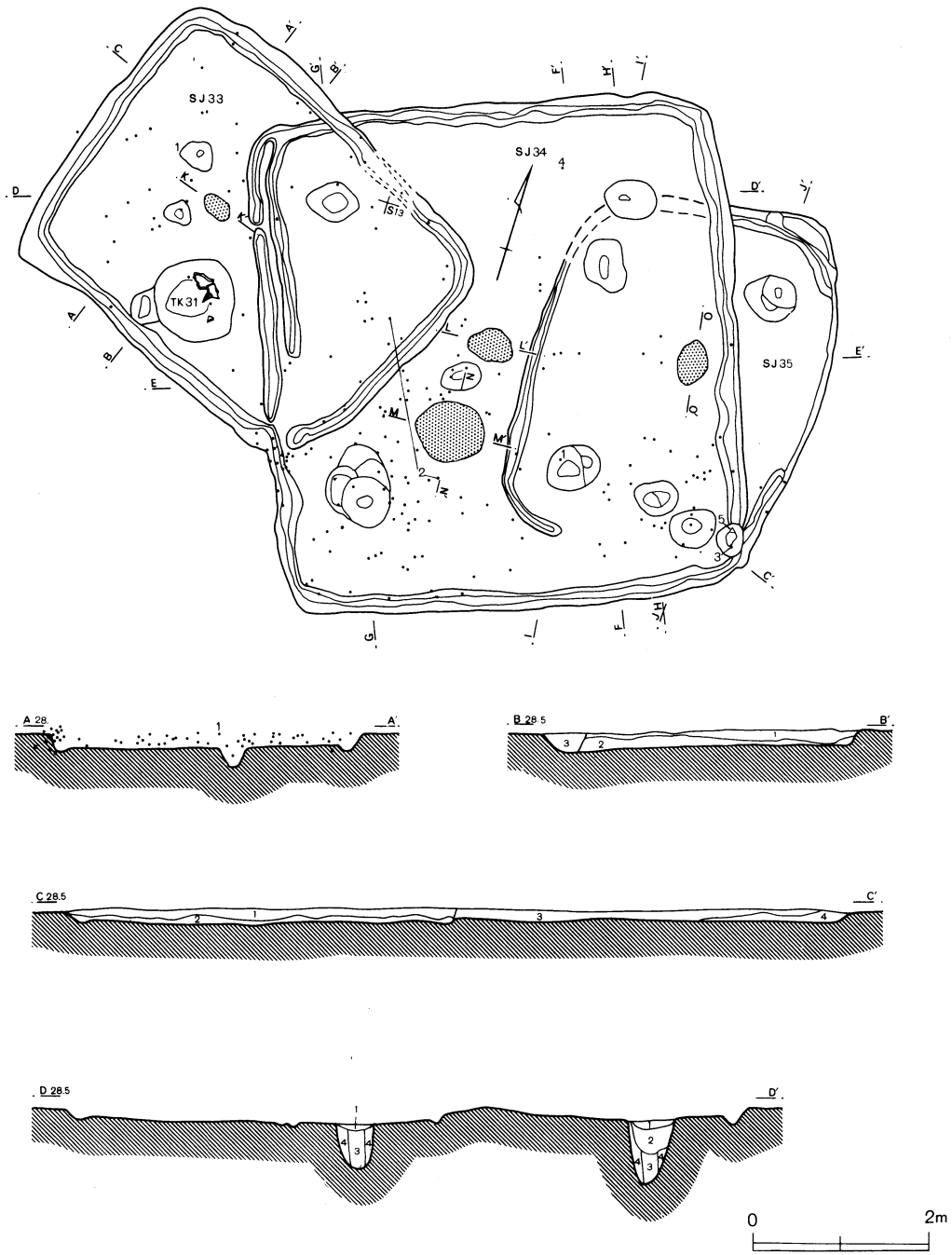
第33号住居跡 (第61・62図)

第33号住居跡は、S13 a グリッドに位置する。東側で第34号住居跡と重複しているが、第34号住居跡はさらに第35号住居跡と重複している。土層断面の観察から、第35号住居跡→第34号住居跡→第33号住居跡の順に構築されたと推定される。

平面規模は、長軸で452cm・短軸で360cmを測り、コーナー部分がやや丸味を帯びた長方形を呈す。確認面からの掘り込みは、16cmを測る。

主軸方向は、N-71°-Eを指し、N-20°-Wを指す第34号住居跡、N-2°-Wを指す第35号住居跡とは大きく異なる。壁溝は全周する。遺構範囲内にピットが確認されているが、支柱穴と覚しきものは検出されていない。床面は平坦で、比較的明瞭であった。床面のレベルについては、第33号～第35号住居跡の3軒とも、ほとんど差がないようであった。住居跡中央よりやや北東よりに、炉跡が1箇所あるが、貯蔵穴については確認されなかった。炉跡は、平面規模44cm×24cm、確認面からの深さ4cmを測る長楕円形を呈す。なお、本住居跡を切って中近世土壌31が確認されており、朝顔形の円筒埴輪が出土している。

幾つかの遺物が出土したが、図化し得たのは2点である。

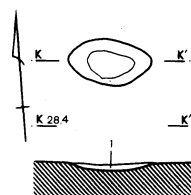


第34号住居跡土層註記

D-D'

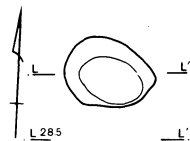
- | | |
|---|--|
| <p>1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ2cm)少、
カーボン微量。しまり・粘性やや弱。</p> <p>2 暗黄褐色土 ロームブロック(φ3cm)多、ローム粒若
干。しまり・粘性やや弱。</p> | <p>3 暗褐色土 ロームブロック(φ3cm)少、ローム粒若
干、カーボン少。しまり弱、粘性やや弱。</p> <p>4 暗黄褐色土 ロームブロック(φ5cm)・ローム粒多。
しまり強、粘性やや弱。</p> |
|---|--|

第61図 第33・34・35号住居跡(1)



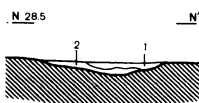
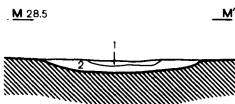
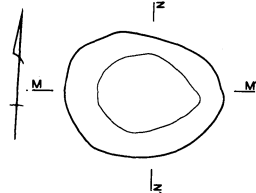
第33号住居跡土層註記 K-K'

- 1 焼土ブロック (φ 3 cm) カーボン多。しまり強、粘性弱。



第34号住居跡土層註記 L-L'

- 1 黒色土 カーボン多。しまり・粘性弱。
- 2 赤褐色土 赤色化、硬化したローム。しまり強、粘性弱。



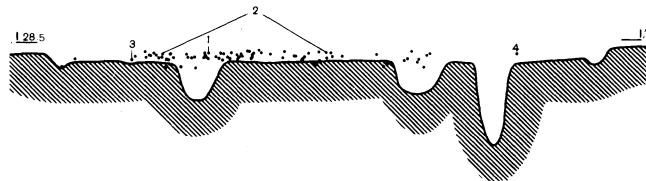
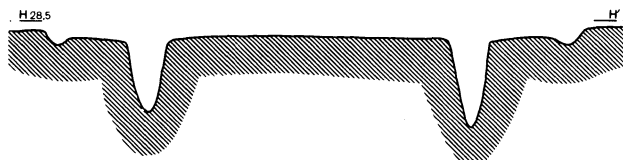
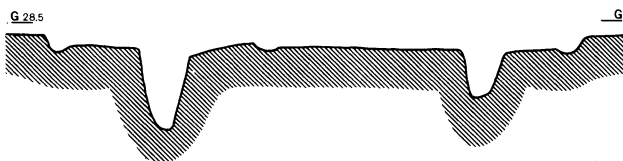
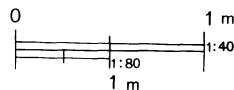
M-M' N-N' 共通

- 1 赤味を帯びた黒褐色土 焼土粒・カーボン多、ローム粒少。しまり弱、粘性やや強。
- 2 赤褐色土 焼土ブロック中にカーボン少。しまり弱、粘性やや強。



第35号住居跡土層註記

- 赤褐色土 赤色化したローム。
しまり強、粘性弱。



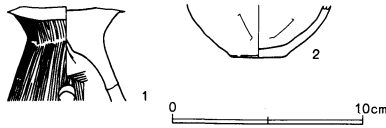
第33・34・35号住居跡土層註記

B-B' C-C' E-E' 共通

- 1 黒褐色土 ローム粒少、カーボン微量。しまり・粘性やや弱。
- 2 暗褐色土 ローム粒若干、ロームブロック (φ 2 cm) 少、カーボン微量。しまり・粘性やや弱。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒多、カーボン微量。しまり・粘性やや弱。
- 4 黒味を帯びた赤褐色土 焼土ブロック (φ 3 cm) 若干、カーボン少。しまり・粘性弱。
- 5 暗褐色土 ローム粒少、カーボン微量。しまり・粘性やや弱。
- 6 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック (φ 2 cm) 少、カーボン微量。しまり・粘性やや弱。
- 7 黒褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり・粘性やや弱。

(1・2 = S J 33 3・4・5 = S J 34 6・7 = S J 35)

第62図 第33・34・35号住居跡(2)



第63図 第33号住居跡出土遺物

第33号住居跡出土遺物 (第63図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	高 坏	現存高	4.8	坏部：内面はハケ目。脚台部：外面はハケ目、内面は絞りとハケ目。黄褐色。	A+B+E 焼成：普
2	壺	底 径 現存高	3.0 2.7	胴部：内外面ともヘラナデの後ナデ。底部：内外面ともナデ。黒色（一部黄褐色）。	A+B+F（細密） 底90 胴下位30 焼成：普

第34号住居跡 (第61・62図)

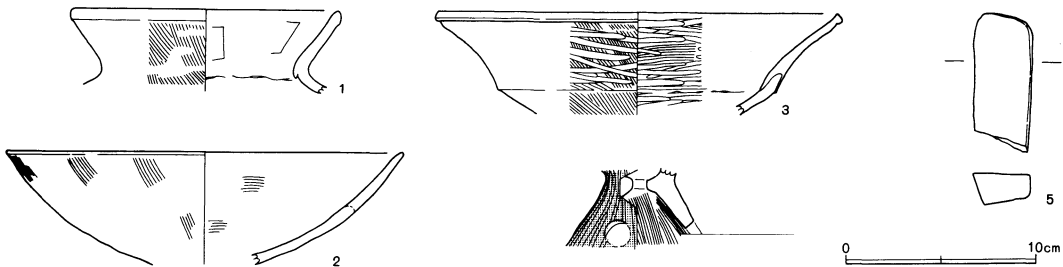
第34号住居跡は、S13bグリッドに位置する。土層観察の結果から、東側の第35号住居跡を切り、西側の第33号住居跡に切られていると判断される。平面規模は長軸で576cm・短軸で544cmを測り、コーナー部分がやや丸味を帯びた方形を呈す。確認面からの掘り込みは、10cmを測る。

検出できた壁面は、立ち上がりが不明瞭で、緩いものであった。

主軸方向は、N-20°-Wを指し、N-71°-Wを指す第34号住居跡、N-2°-Wを指す第35号住居跡とは大きく異なる。壁溝は全周する。支柱穴が4基確認されているが、長軸で344cmと360cm、短軸では共に328cm、ほぼ方形に配されている。各支柱穴の確認面からの深さは、北東部のものから時計回りに、88cm・72cm・80cm・48cmを測り、比較的明瞭なものといえよう。床面は平坦ではあるが、あまり硬化はみられない。そのためであろうか、本住居跡の床面精査の段階で、第35号住居跡の西側壁溝が検出でき、その平面形態や規模を掴むことができた。なお床面のレベルに関しては、第33号～第35号住居跡の3軒とも、ほとんど差がないようであった。

本住居跡の中央とやや南よりに、1基づつ炉跡が検出された。規模については、前者が平面規模48cm×36cm、深さ4cmの楕円形、後者が84cm×66cm、深さ8cmの楕円形である。

遺物は幾つか出土しているが、図化し得たのは僅かに土器4点と石製品1点の、計5点のみであった。



第64図 第34号住居跡出土遺物

第34号住居跡出土遺物 (第64図)

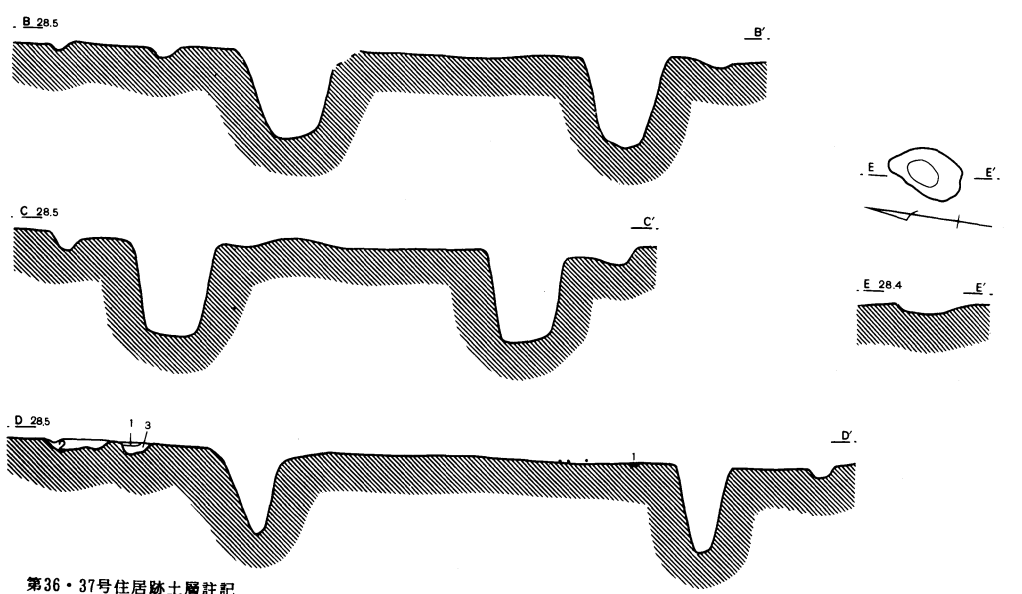
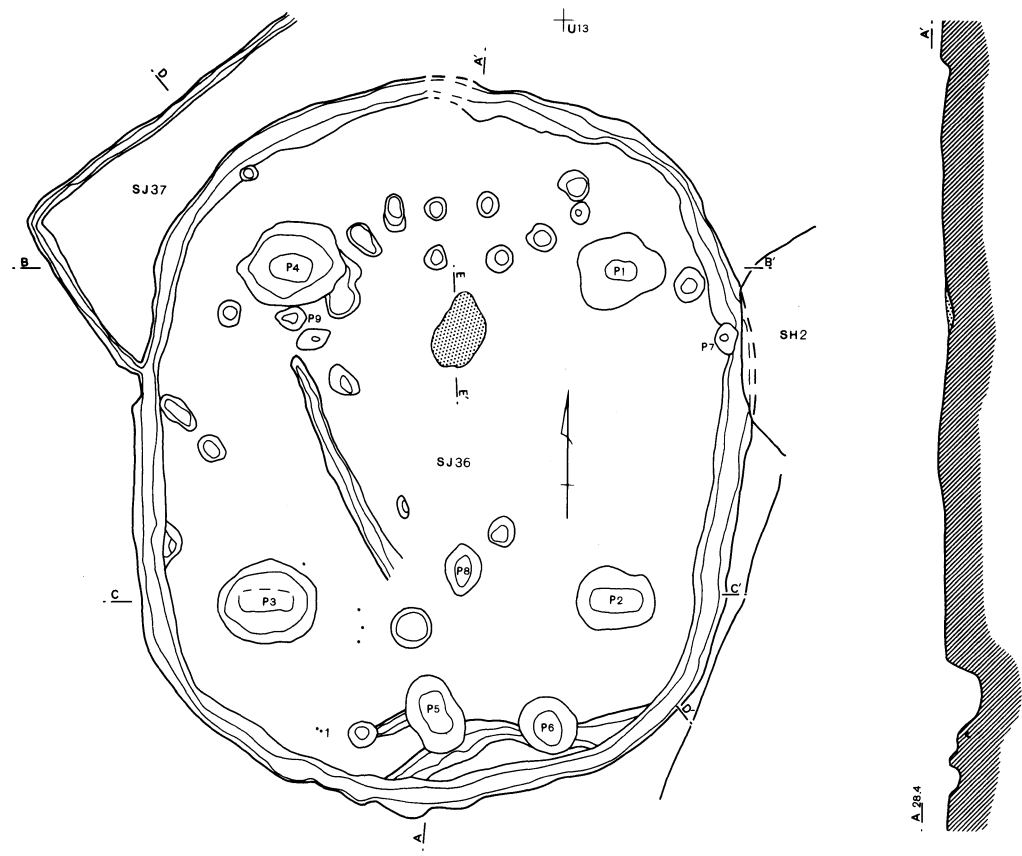
番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径	(13.8)	口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデ。	A+B+F+I+J
		現存高	4.3	褐色。	口20 焼成：普
2	高 坏	口径	(20.5)	口縁部：内外面ともハケ目の後横ナデ。坏部：内外面ともハケ	口25 坏20
		現存高	5.8	目の後、ナデ。器面は摩滅している。赤橙色。	焼成：普
3	高 坏	口径	(20.9)	口縁部：内外面ともハケ目の後粗いへら磨き。	A+B+J 口20
		現存高	5.3	坏部：外面はハケ目、内面はへら磨き。赤橙色。	坏部15 焼成：普
4	器 台	現存高	4.0	脚台部：外面はへら磨き、内面はハケ目。橙色（一部黒色）。	A+B+H+J
				孔3。	焼成：良
5	砥 石	現存長	7.1	下部欠損。上面は自然面。4面を磨き面として用いる。	凝灰岩製
		幅	3.0	とくに裏面は平滑。49.3g。	
		厚さ	1.6		

第35号住居跡 (第61・62図)

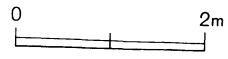
第35号住居跡は、T13cグリッドに位置する。土層観察の結果から、西側の第34号住居跡に切られる。また、第34号住居跡は、西側の第33号住居跡に切られていると判断される。このことから、重複する3軒は、第35号→第34号→第35号住居跡の順に構築されたと判断される。平面規模は、長軸で408cm・短軸で336cmを測り、コーナー部分が隅丸の長方形を呈す。確認面からの掘り込みは、7cmを測る。

検出できた壁面は、立ち上がりが非常に不明瞭で、緩いものであった。

主軸方向は、N-2°-Wを指し、N-71°-Wを指す第34号住居跡、N-71°-Wを指す第33号住居跡とは大きく異なる。壁溝は部分的に途切れるが、第34号住居跡に切られた結果であろうか。支柱穴が4基確認されているが、長軸で264cmと224cm、短軸では200cmと156cmを測る。各支柱穴の確認面からの深さは、北東部のものから時計回りに、40cm・48cm・40cm・32cmを測り、比較的浅くはあるが遺構としては明瞭であった。床面は平坦ではあるが、あまり硬化はみられない。第34号住居跡の床面精査の段階で、本号住居跡の西側壁溝が検出でき、その平面形態や規模を掴むことができた。なお床面のレベルに関しては、第33号～第35号住居跡の3軒とも、ほとんど差がないようである。支柱穴を結んだ線より内側、やや北寄りに、炉跡が検出された。規模は、平面規模52cm×30cm、深さ4cmの楕円形を呈す。図化し得る遺物は出土しなかった。



- 第36・37号住居跡土層註記
- 1 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少。
 - 2 黒褐色土 ロームブロック多。
 - 3 黄褐色土 ロームを主体とする層。



第65図 第36・37号住居跡

第36号住居跡 (第65図)

第36号住居跡は、T13bグリッドに位置する。東側で第2号方形周溝墓に切られる。西側から北側にかけて、第37号・第38号住居跡と重複するが、それぞれの平面形態から推して、後2者に先行すると推定される。平面規模は、長軸で768cm・短軸で640cmを測り、隅丸の長方形を呈す。確認面からの掘り込みは、7cmを測るのみである。

立ち上がりはないに等しく、僅かに検出できた壁面は不明瞭で、緩いものであった。

主軸方向はほぼ真北を指し、具体的数値は不明であるが、第37号住居跡とは大きく異なる。壁溝は全周する。主柱穴が4基確認されている(P1～P4)が、P5は梯子穴であろうか。各主柱穴の確認面からの深さは、P1・P2が88cm・P3が90cm・P4が88cmを測り、比較的しっかりとして明瞭であった。床面は平坦ではあるが、重複のためか明確ではなかった。

主柱穴を結んだ線より内側、やや北寄りに炉跡が検出された。本住居跡内には、壁溝と覚しき遺構が存在し、ピットも多い。他にも住居跡の存在が想定されるが、判別はし得なかった。

図化し得る遺物は1点のみである。

第36号住居跡出土遺物 (第66図)

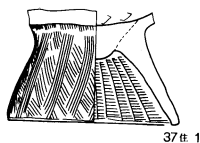
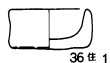
番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	手捏ね	口径	4.0	全面ナデ。橙色。	A+E+H+J ほぼ完形 焼成：普
		底径	4.0		
		現存高	2.1		

第37号住居跡 (第65図)

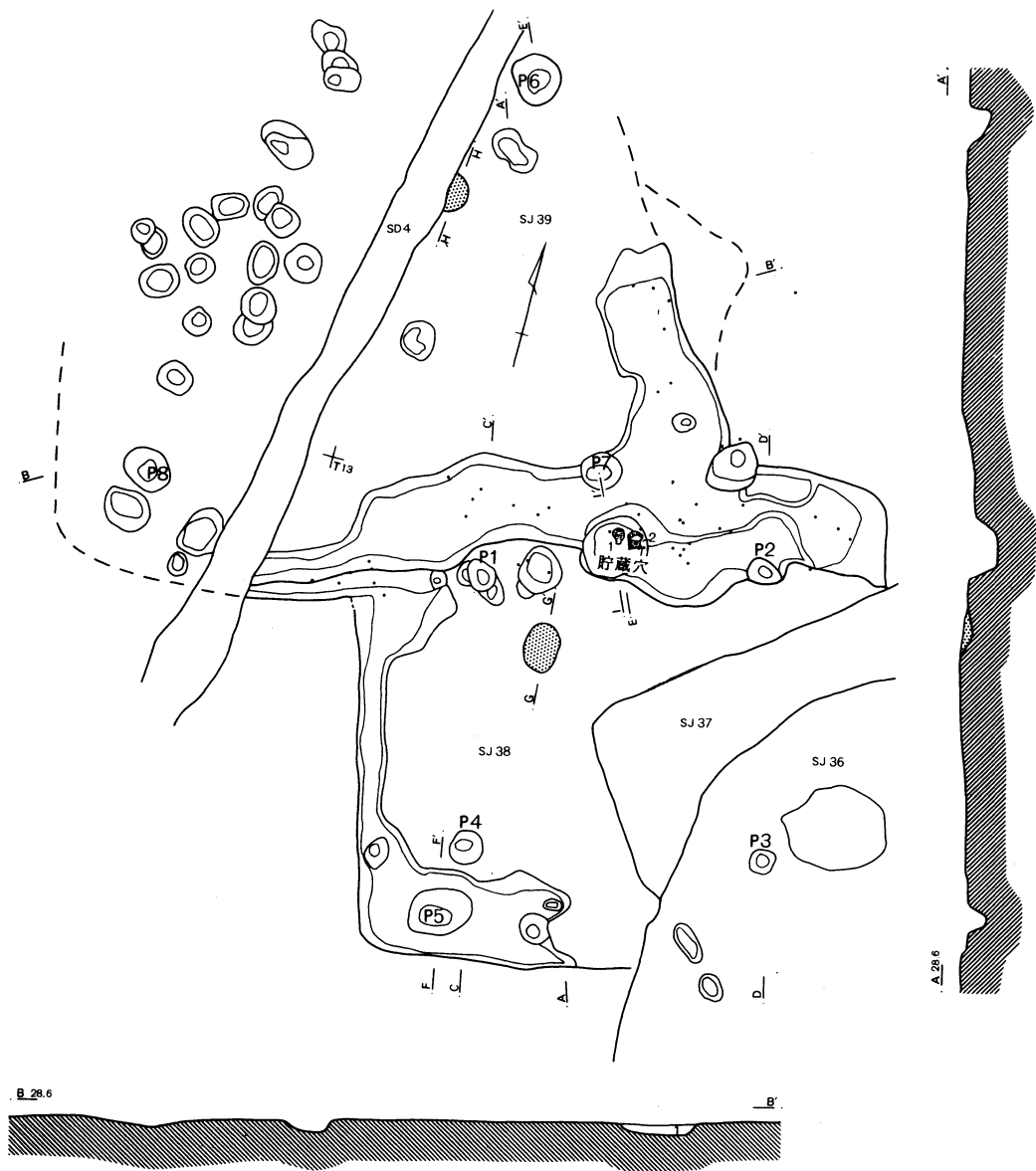
第37号住居跡は、T13aグリッドに位置する。第36号住居跡を切っていると思われるが、第38号住居跡との新旧関係は不明。壁溝の一部のみの検出である。方形または長方形を呈すと推定される。主柱穴として、P7～P9を想定したが詳細は不明。実測可能な遺物は、1点のみの出土である。

第37号住居跡出土遺物 (第66図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	台付甕	脚台径	8.9	脚台部：内外面ともハケ目。底部：内面はヘラナデ。赤褐色。	A+B+F+I+J 脚90 焼成：普
		現存高	5.8		



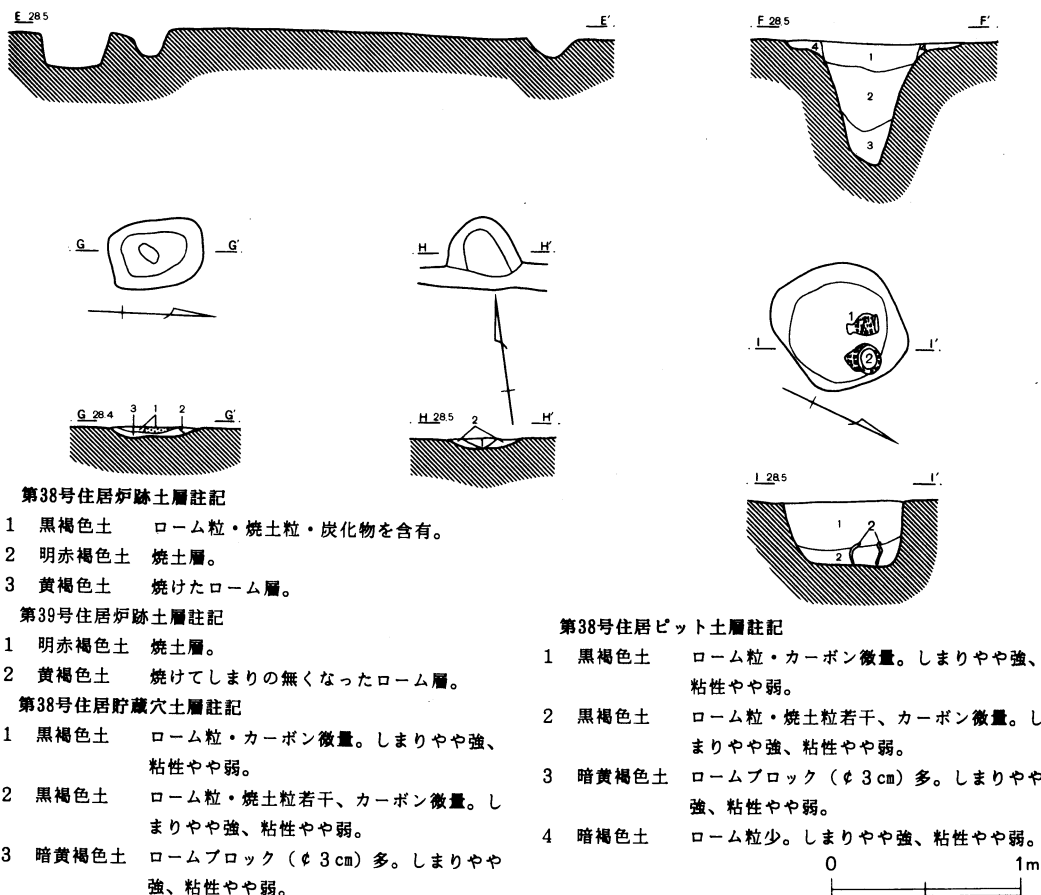
第66図 第36・37号住居跡出土遺物



第39号住居跡土層註記

- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック含有。

第67図 第38・39号住居跡(1)



第38号住居炉跡土層註記

- 1 黒褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物を含有。
- 2 明赤褐色土 焼土層。
- 3 黄褐色土 焼けたローム層。

第39号住居炉跡土層註記

- 1 明赤褐色土 焼土層。
- 2 黄褐色土 焼けてしまりの無くなったローム層。

第38号住居貯蔵穴土層註記

- 1 黒褐色土 ローム粒・カーボン微量。しまりやや強、粘性やや弱。
- 2 黒褐色土 ローム粒・焼土粒若干、カーボン微量。しまりやや強、粘性やや弱。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック(φ3cm)多。しまりやや強、粘性やや弱。

第38号住居ピット土層註記

- 1 黒褐色土 ローム粒・カーボン微量。しまりやや強、粘性やや弱。
- 2 黒褐色土 ローム粒・焼土粒若干、カーボン微量。しまりやや強、粘性やや弱。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック(φ3cm)多。しまりやや強、粘性やや弱。
- 4 暗褐色土 ローム粒少。しまりやや強、粘性やや弱。

第68図 第38・39号住居跡(2)

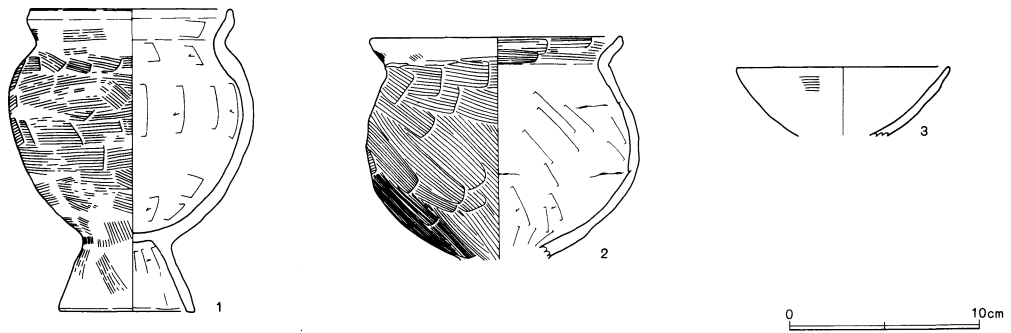
第38号住居跡 (第67・68図)

第38号住居跡は、T13aグリッドに位置する。北側部分で、第39号住居跡と重複するが、新旧関係は判別できなかった。東側から南側にかけて重複する、第36号・第37号住居跡の内、前者を切るが後者との関係は不明である。実測図におけるプランは、検出し得た掘り方から求めたものである。P1～P4を支柱穴と推定した。P5は貯蔵穴であろうか。

推定平面規模は、長軸(東西)が568cm・短軸(南北)が552cmを測り、平面形態は方形に近い。そのため、主軸方向は判断しづらくN-10°-W、またはN-110°-Wが考えられる。各支柱穴間の距離は、P1-P2間で296cm・P3-P4間で320cm、P1-P4間で288cm・P2-P3間で304cm、ほぼ方形に配置されている。各支柱穴の確認面からの深さは、P1で32cm・P2で21cm・P3で16cm・P4で24cmを測り、住居跡自体の遺存度が悪いとはいえ、全体的に浅いといえよう。

床面は大部分失われている状態であり、判別困難であった。壁溝は確認されていない。P5を貯蔵穴と仮定した場合、その平面規模は64cm×48cmの楕円形を呈し、深さは62cmとなるが、やや深過ぎるきらいがある。炉跡は1箇所、支柱穴を結んだ線の内側、北西寄りに存在する。

本住居跡に伴うと推定される遺物の内で、図化し得るものは皆無であった。



第69図 第38号住居跡出土遺物

第38号住居跡出土遺物 (第69図)

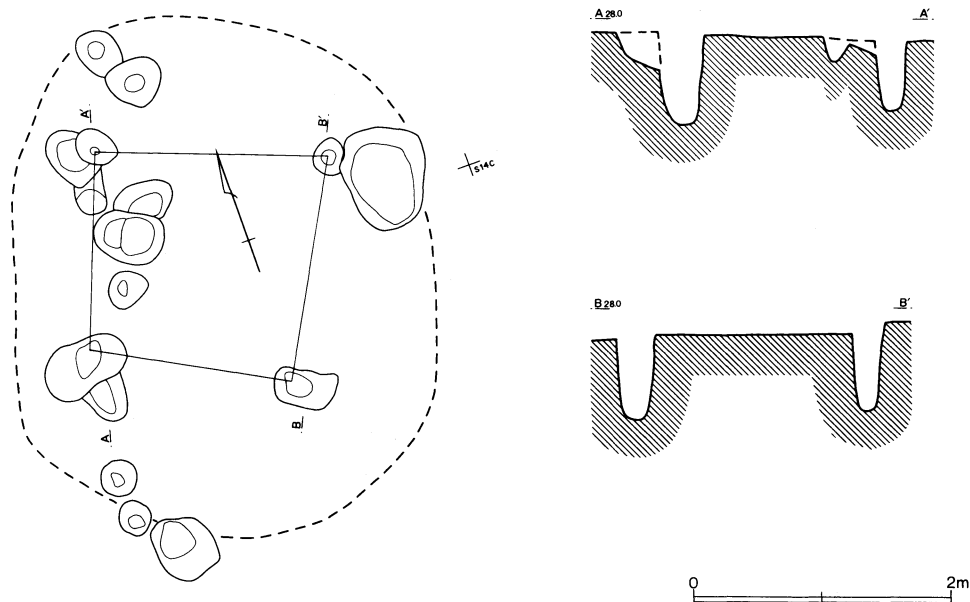
番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	台付甕	口径	10.3	口縁部：外面はハケ目の後横ナデ、内面はヘラナデの後横ナデ。 胴部：外面はハケ目、内面はヘラナデ。脚台部：外面はハケ目の後横ナデ、内面はヘラナデの後横ナデ。器面は摩滅している。外面にスス付着。黄橙色。貯蔵穴内。	B+E+H+J
		胴径	12.8		ほぼ完形
		底径	7.1		焼成：普
		器高	15.7		
2	台付甕	口径	12.9	口縁部：内外面ともハケ目の後横ナデ。胴部：外面はハケ目。内面はヘラナデの後ナデ。 黄褐色。貯蔵穴内。	A+B+C+I (多)
		胴径	14.2		口90 胴80
		現存高	11.5		焼成：普
3	器台	口径	(11.0)	口縁部：外面はハケ目の後内外面とも横ナデ。 坏部：内外面ともナデ。褐色。	A+B+H+J
		現存高	3.6		口20 焼成：普

第39号住居跡 (第68図)

第39号住居跡は、T12gグリッドに位置する。北側から西側にかけて、第26号・第27号住居跡と重複する可能性があるが、遺存度が悪く不明。南側の、第38号住居跡との新旧関係についても不明である。西側では、もし重複しているならば、その平面形態から推して第35号住居跡を切っている可能性をもつ。これらの他に、北東から西南にかけては第4号溝跡と、柵列状のピット群に切られている。

掘り方や出土遺物などから、住居跡の平面形態は、方形もしくは長方形を呈すると推定される。プランについては、南部分に残された掘り方も、第38号住居跡との区別が非常に困難であった。この、両住居跡の掘り方が重複する範囲内から、平面規模76cm×68cmの楕円形を呈し、深さ28cmを測る貯蔵穴が1基検出された。位置関係からみて、第38号住居跡に伴うとは考えにくく、本住居跡に帰属すると推定した。

P6～P8を主柱穴と仮定した場合、各ピット間の距離は、P6-P7間は416cm・P7-P8間は472cmを測り、主軸方向はN-74°-Eが想定される。主柱穴を結んだ線の内側、やや北寄りに炉跡が確認された。図化し得た遺物は、貯蔵穴内からの2点を合わせ、計3点である。



第70図 第40号住居跡

第40号住居跡（第70図）

第40号住居跡は、S13cグリッドに位置する。西側を柵列と観られるピット群に切られている。遺構と遺存度は非常に悪く、僅かに支柱穴4箇所を確認できたのみである。各支柱穴間の距離は、南北方向に180cm・175cm、東西方向に185cm・175cmを測り、平面形態は隅丸方形を呈すと推定される。深さは、北東部分から時計回りに60cm・54cm・70cm・50cmを測る。図化し得る遺物はなかった。

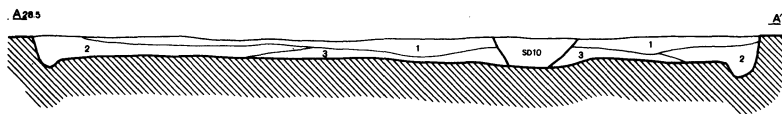
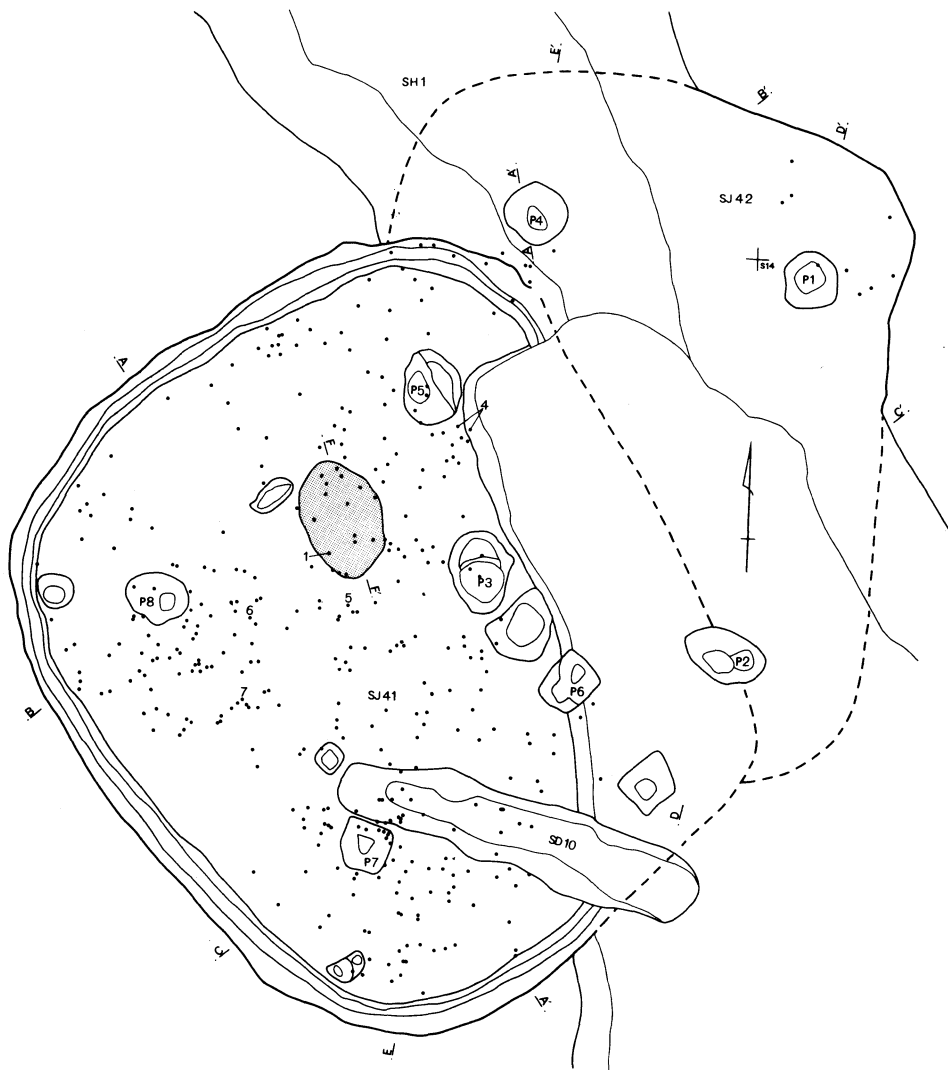
第41号住居跡（第71・72図）

第41号住居跡は、R13cグリッドに位置する。北側から東側にかけて、第1号方形周溝墓に切られるが、第42号住居跡との新旧関係については、検出状況からみて本住居跡が切っていると推定された。南側で、第10号溝跡に切られる。平面規模は、長軸で563cm・短軸で485cmを測り、隅丸方形を呈す。確認面からの掘り込みは、18cmを測る。

主軸方向は、N-40° -Wを指し、N-10° -Eを指す第42号住居跡とは大きく異なる。壁溝は全周すると推定される。支柱穴が4基確認された（P5～P8）。各ピット間の距離は、P5 - P6間は260cm・P6 - P7間で220cm・P7 - P8間は245cm・P8 - P5間で256cmを測り、各支柱穴の深さは、P5が45cm・P6が62cm・P7が90cm・P8が85cmを測り、しっかりと明瞭であった。床面は平坦であり、比較的堅固なものである。

支柱穴を結んだ線より内側、やや北寄りに炉跡が検出された。平面規模は92cm×57cmの楕円形で、床面からの深さは10cmを測る。第41号住居跡内には、以上の他にピットが6基確認されているが、本住居跡との関連については不明である。他の遺構に切られている部分を除けば、遺存状況は、良好な部類に含まれるといえよう。

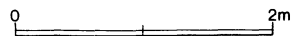
遺物の出土は多数あったが、図化し得た土器は7点である。



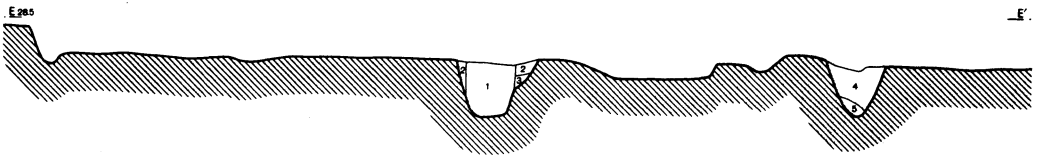
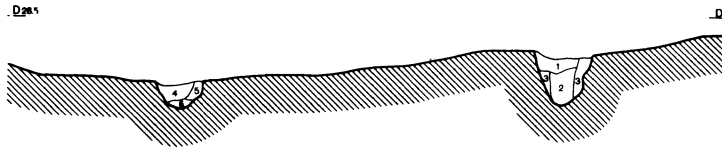
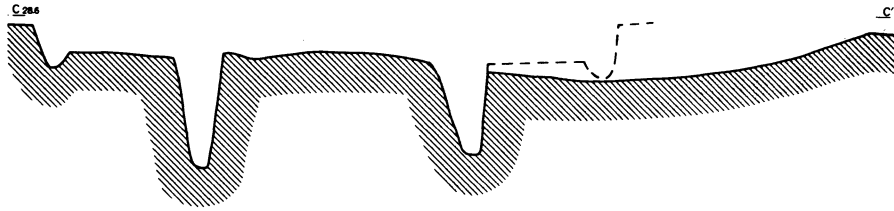
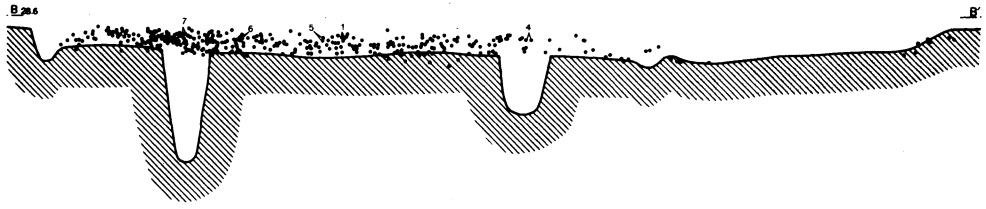
第41号住居跡土層註記

A-A'

- 1 黒褐色土 カーボン・ローム粒微量。しまり・粘性やや弱。
- 2 暗褐色土 ローム粒若干、カーボン微量。しまり・粘性やや弱。
- 3 赤味を帯びた黒褐色土 カーボン・焼土粒・ローム粒若干。しまり・粘性やや弱。



第71図 第41・42号住居跡(1)



第41・42号住居跡土層註記

D-D'

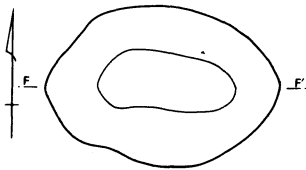
- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック (φ 4 cm) 少。しまり・粘性やや強。
- 2 黒褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり弱、粘性やや強。
- 3 暗褐色土 ロームブロック (φ 3 cm) ・カーボン少。しまり・粘性やや強。
- 4 黒褐色土 ローム粒・カーボン少。しまりやや弱、粘性やや強。
- 5 暗褐色土 ロームブロック (φ 3 cm) 少、カーボン微量。しまり・粘性強。
- 6 暗褐色土 ローム粒多。しまり・粘性やや強。

E-E'

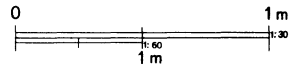
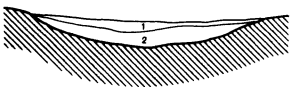
- 1 黒褐色土 ローム粒・カーボン少。しまりやや弱、粘性やや強。
- 2 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少。しまりやや弱、粘性やや強。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック多。しまり強、粘性やや強。
- 4 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック若干。
- 5 茶褐色土 第1層よりロームブロック多。

第41号住居跡土層註記

- 1 黒褐色土 カーボン・焼土粒少。しまり・粘性強。
- 2 赤褐色土 赤色化・硬化したロームブロック (φ 4 cm) ・カーボン多。しまり強、粘性弱。



F-F'



第72図 第41・42号住居跡(2)



第73図 第41号住居跡出土遺物

第41号住居跡出土遺物 (第73図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甑	口径 (20.5) 現存高 11.2	口縁部：横ナデか。胴部：外面はハケ目か、内面はナデか。 器面は摩滅著しい。橙色（一部黒色）。	A+B+H(多)+J 口50 胴50 焼成：不良
2	甑	口径 (16.6) 脚台径 (10.5) 器高 14.3	口縁部：外面はハケ目の後内外面とも横ナデ。坏部内面：ヘラナデの後丁寧なナデ。脚台部：外面はハケ目の後丁寧なナデ、内面はナデ。底部に焼成前穿孔の孔を一箇所もつ。高坏からの転用か。内外面とも黒色。	B+H(多)+J 口50 坏70 脚50 焼成：普
3	壺	口径 (19.5) 胴径 17.0 底径 (6.5) 器高 18.4	口縁部：内外面ともハケ目の後端部を押捺。胴部：外面はハケ目の後一部をナデ。内面はヘラナデとナデ。 底部：内外面ともナデか。黒褐色。	B+D+G+J 口5 胴70 底25 焼成：普
4	壺	底径 (9.8) 現存高 6.3	胴部：外面はハケ目の後粗いナデ、内面はナデ。 底部：内外面ともナデ。黄褐色（黒色）。	A+B+H+J 底20 胴下20 焼成：普
5	壺	口径 (9.3) 現存高 7.7	口縁部：外面はハケ目の後粗いナデ、内面は粗いナデ。 頸部にLR縄文を施す。	A+B+H+J 口30 焼成：普
6	手捏ね	口径 4.1 底径 4.4 器高 2.8	全面ナデ。橙色（一部黒色）。	B+D+J 80 焼成：普
7	手捏ね	口径 3.4 底径 3.6 器高 7.8	全面ナデ。橙色。	B+D+J 完形 焼成：普

第42号住居跡 (第71・72図)

第42号住居跡は、S13gグリッドに位置する。遺構の大部分を、第1号方形周溝墓に切られる。西側の、第41号住居跡との新旧関係についても、土層断面(エレベーション図ではB-B')に、第41号住居跡の壁面が第42号住居跡の覆土を切っているのが観察された。以上のことから、北東のコーナー部分と、支柱穴4箇所が検出できたのみであった。

推定の平面規模は、長軸で535cm・短軸で405cmを測り、隅丸方形を呈すと思われる。確認面からの掘り込みは、15cmにとどまる。

主軸方向は、N-10°-Eを指し、N-40°-Wを指す第41号住居跡とは大きく異なる。壁溝は検出されなかった。確認された支柱穴4基(P1~P4)の各々の距離は、P1-P2間で305cm・P2-P3間で210cm・P3-P4間で295cm・P4-P1間で215cmを測る。各支柱穴の確認面からの深さは、P1が52cm・P2が55cm・P3が40cm・P4が39cmを測り、攪乱を大きく受けているためもあり、全体的に浅い。

小数の土器片が出土しているが、図化し得た遺物はなかった。

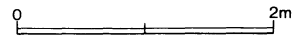
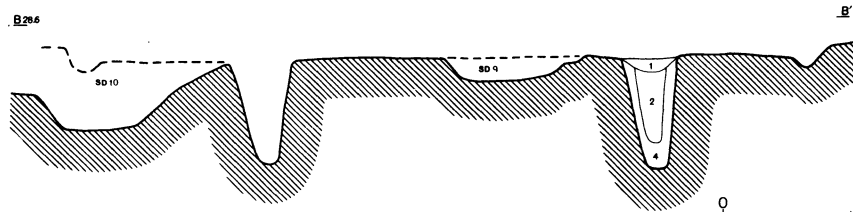
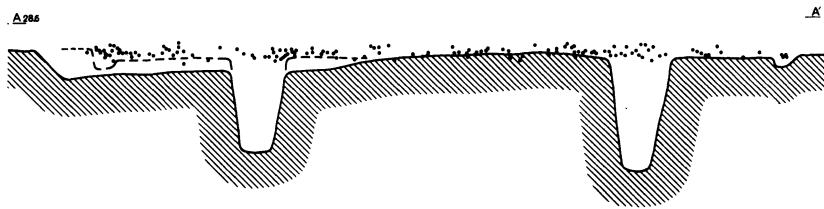
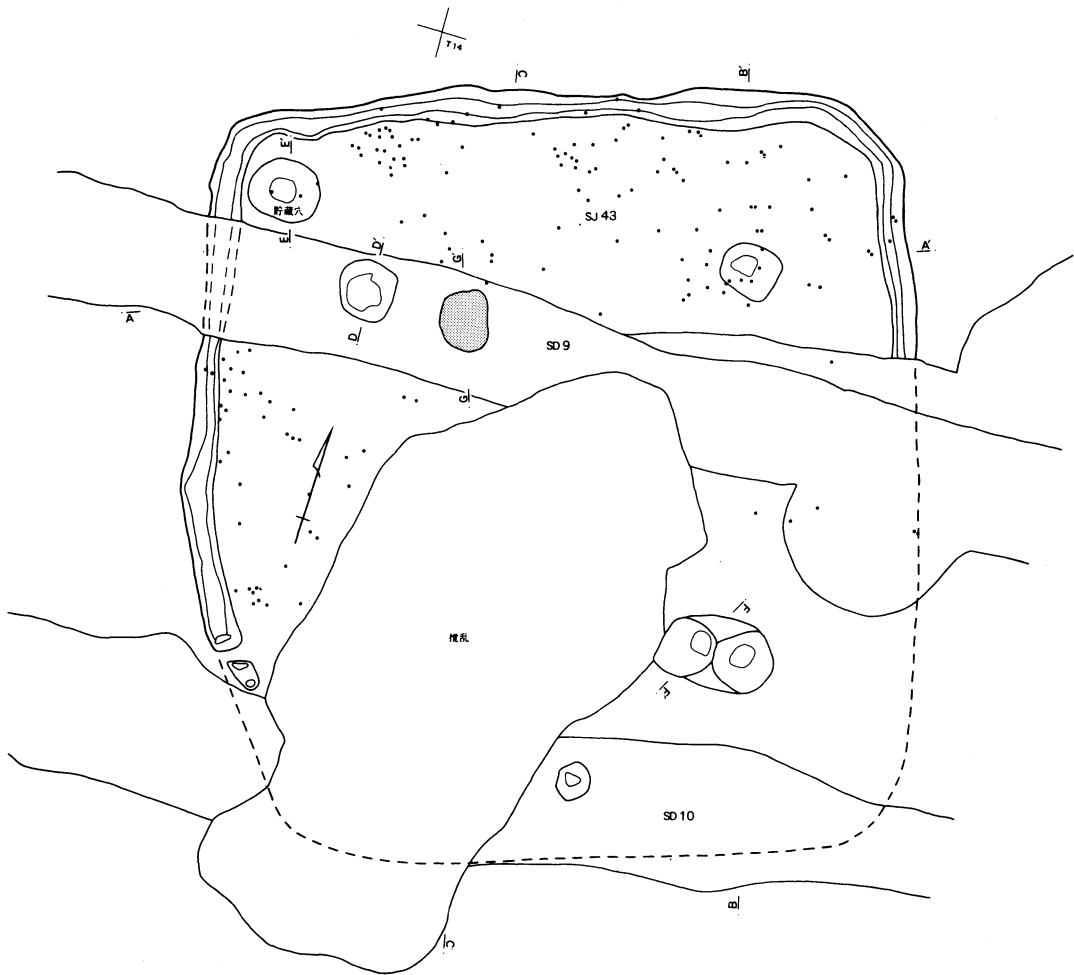
第43号住居跡 (第74・75図)

第43号住居跡は、T14aグリッドに位置する。東西に延びる第9号・第10号溝跡に切られるほか、バックホーによって掘り込まれたゴミ穴による攪乱を受けている。また東側には、遺構として把握することはできなかったが、第36号住居跡の南端部付近から15m程に亘って、浅い溝状の“落ち込み”が検出された。調査範囲外に続くため規模・性格については不明。調査時の印象ではあるが、本住居跡はこの“落ち込み”を切っているように思われた。詳細については不明であるが、この重複関係によって、第43号住居跡の東側の壁面については検出されなかった。

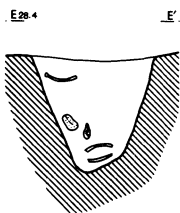
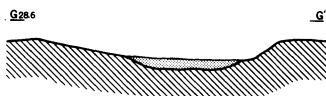
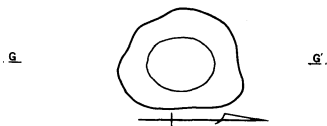
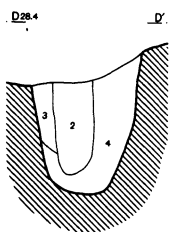
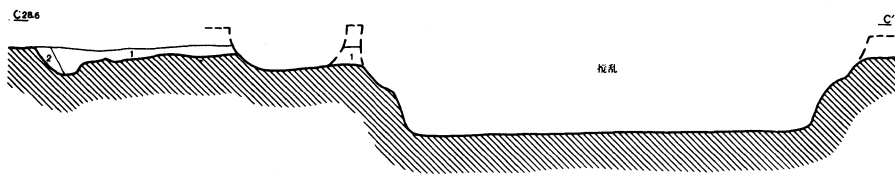
推定の平面規模は、長軸で603cm・短軸で573cmを測り、略方形を呈すと思われる。確認面から掘り込みは、7cm程にとどまる。主軸方向は、N-18°-Wを指す。壁溝は全周すると推定される。攪乱部分を除いて、支柱穴3基が確認された。各支柱穴間の距離は、長軸方向で310cm・短軸方向で305cmを測る。各支柱穴の確認面からの深さは、北東から時計回りに90cm・70cm・60cmを測り、規模・深さともにしっかりとした明瞭なものである。北西隅に貯蔵穴が検出され、甕と小型壺の破片(第76図4・5)が出土した。平面規模は56cm×45cmで楕円形を呈し、深さは47cmを測る。

支柱穴を結んだ線の内側、北西寄りの位置に、第9号溝跡に切られた状態で炉跡が部分的に検出された。平面規模は47cm×32cmで楕円形を呈し、確認面からの深さは6cmを測る。

図化した遺物の内、1・2については3~5と时期的に異なるものである。4・5の遺物は、その時期・住居跡の形態、さらに貯蔵穴内という出土状況等々から観て、本住居跡に伴うと考えられる。前述したように、本住居跡は“落ち込み”部分と重複しており、1・2はそこからの混入であろうか。参考として掲げておくこととした。

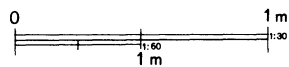
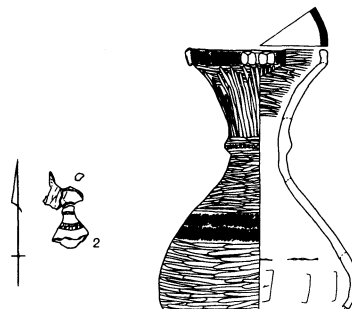
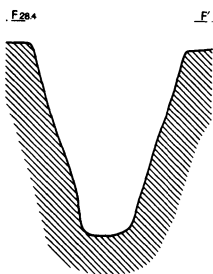


第74図 第43号住居跡出土遺物(1)



第43号住居跡炉土層註記

1 赤褐色土 焼土ブロック層中にカーボン少。



第43号住居跡土層註記 A-A'

- 1 赤褐色土 焼土粒多、ローム粒少。しまり強、粘性弱。
- 2 暗褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり・粘性やや弱。

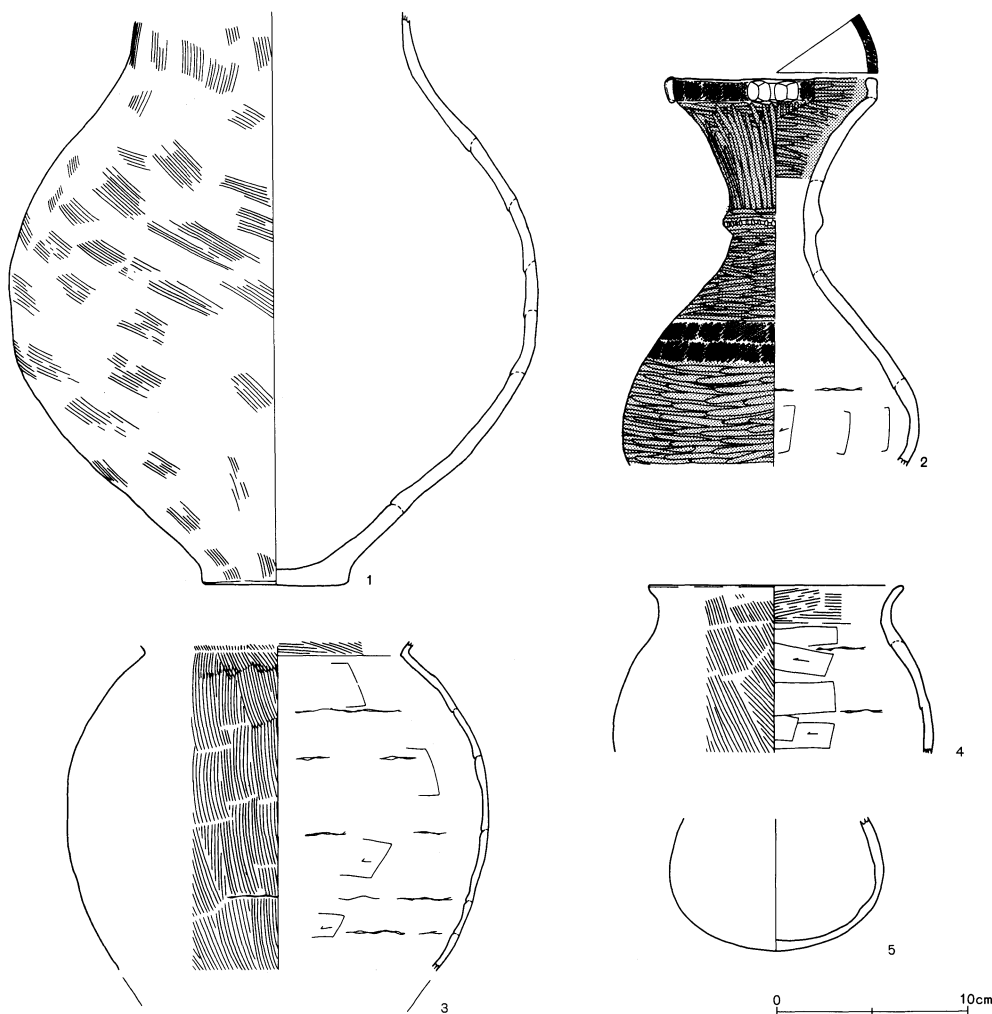
B-B' D-D' 共通

- 1 黒褐色土 ローム粒・カーボン微量。しまり・粘性やや弱。
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ3cm)若干。しまりやや弱、粘性弱。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック多。しまり強、粘性弱。
- 4 暗黄褐色土 ロームブロック多。しまり非常に強。

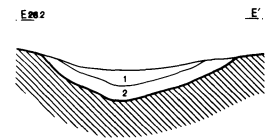
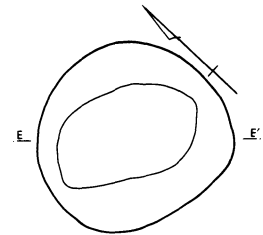
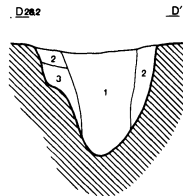
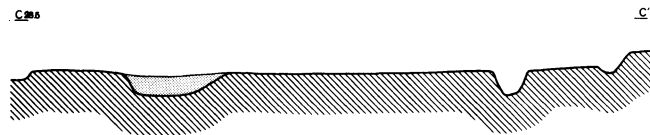
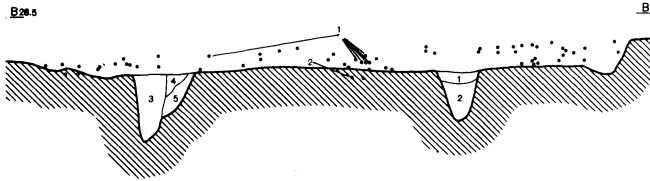
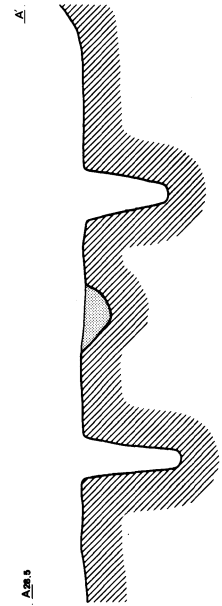
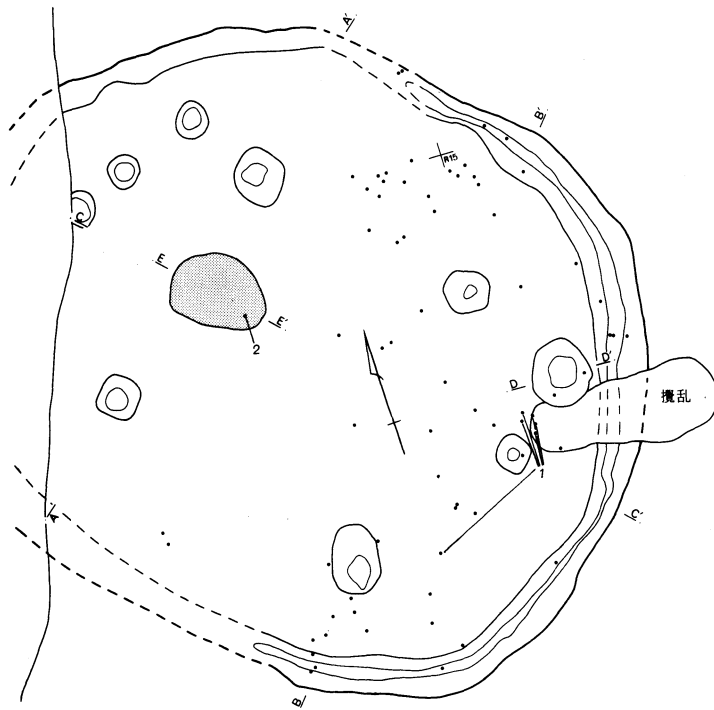
第75図 第43号住居跡出土遺物(2)

第43号住居跡出土遺物 (第76図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	胴径 (27.5) 底径 7.1 現存高 29.9	器面は荒れている。胴部：外面はハケ目の後ナデ、内面はナデか。底部：外面はナデ、内面はナデか。にぶい橙色。	A+B+D+J 胴30 底100 焼成：普
2	壺	口径 (12.8) 現存高 20.2 胴径 15.4	口縁の貼付は2個単位で、4箇所と思われる。口唇部と口縁にLR斜縄文。口縁部：外面はヘラ磨き、内面はナデ。胴部：外面はヘラ磨き（肩部にLR斜縄文2段）、内面上はナデ、中位はヘラナデ。にぶい橙色（赤彩）。	A+B+D+F+H+J 口径70 頸90 焼成：普
3	甕	現存高 17.0	胴部：外面はハケ目、内面はヘラナデ。黒色（一部暗褐色）。	A+B+G+J 胴35 焼成：普
4	甕	口径 (12.8) 胴径 (16.8) 現存高 8.8	口縁部：内外面ともハケ目の後横ナデ。胴部：外面はハケ目内面はヘラナデ。褐色。貯蔵穴内。	A+B+I+J 口径30 焼成：やや不良
5	小型壺	胴径 (11.2) 現存高 4.9	全面ナデ。内外面とも赤彩。貯蔵穴内。	A+B+I 胴25 焼成：普



第76図 第43号住居跡出土遺物(3)



第44号住居跡土層註記 B-B'

- 1 黒褐色土 ローム粒・カーボン微量。しまりやや弱、粘性やや強。
- 2 暗褐色土 ロームブロック (φ 3 cm) ・ローム粒多。しまりやや弱、粘性やや強。
- 3 暗褐色土 ロームブロック (φ 4 cm) ・ローム粒多、カーボン微量。しまり・粘性やや強。
- 4 黒褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり・粘性やや強。
- 5 暗褐色土 ロームブロック (φ 2 cm) 多、カーボン微量。しまり・粘性やや強。

ピット土層註記

- 1 黒褐色土 ローム粒多、カーボン微量。しまりやや弱、粘性やや強。
- 2 黒褐色土 ローム粒・カーボン微量。しまりやや弱、粘性やや強。
- 3 暗褐色土 ロームブロック (φ 3 cm) 、ローム粒若干。しまり・粘性やや強。

炉跡土層註記

- 1 赤褐色土 焼土ブロック層中にカーボン微量。しまり強、粘性弱。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック層中に焼土粒・カーボン微量。しまり強・粘性弱。

第77図 第44号住居跡

第44号住居跡（第77図）

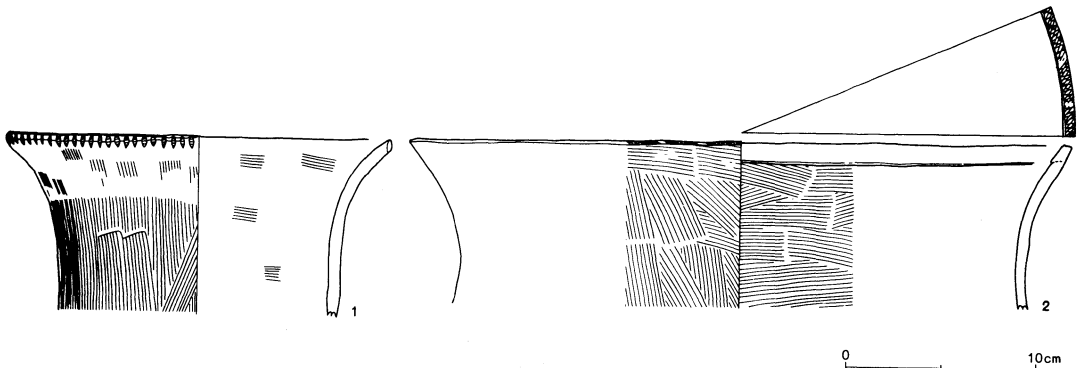
第44号住居跡は、Q15cグリッドに位置する。北側を第13号溝跡に切られ、南側に一部攪乱を受ける。なお本住居跡北半の上層から南側にかけて、ゴミ穴による攪乱を受けている。そのためか北半部での遺物の出土は、南半に比べて少ないものとなっている。西側部分は調査範囲外に続く。推定による平面規模は、長軸で562cm・短軸で470cmを測り、隅丸方形を呈す。確認面からの深さは、15cmを測る。

主軸方向は、N-43° -Wを指す。壁溝は、北側部分で途切れていると推定される。支柱穴が4基確認されている。各支柱穴間の距離は、南北（主軸）方向が195cm・225cm、東西方向が215cm・232cmを測る。住居形態は主軸方向に長いのに対し、支柱穴間の距離は逆に短いものとなっている。各支柱穴の確認面からの深さは、北側のものから時計回りに、65cm・40cm・50cm・80cmを測り、しっかりしたものである。このほかにも、梯子穴と覚しきピットが南東部分に、そこから40cm程の位置に、貯蔵穴が検出されている。床面は平坦で、堅固であった。

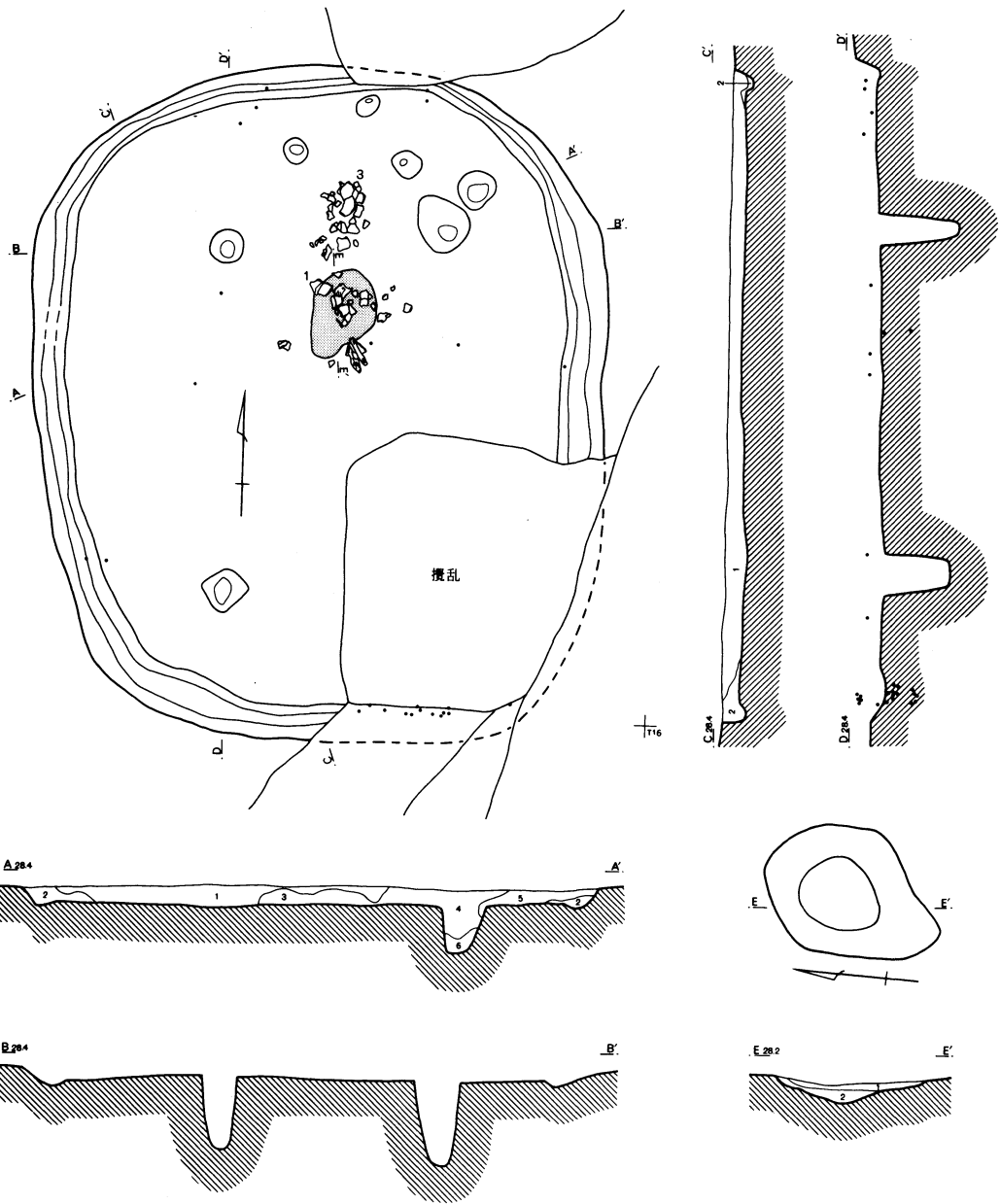
支柱穴を結んだ線上～内側、やや北西寄りに炉跡が検出された。平面規模は77cm×72cmの楕円形で、床面からの深さは12cmを測る。貯蔵穴については、平面規模は54cm×48cmの略円形、床面からの深さは38cmを測る。第44号住居跡の北側部分にはピットが3基確認されているが、検出状況からみて、本住居跡を切っているものである。攪乱部分を除けば、遺存状況は比較的良好な部類に含まれるといえよう。幾つかの遺物が出土しているが、図化し得たのは2点である。

第44号住居跡出土遺物（第78図）

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径 (19.7) 現存高 9.3	口縁部：内外面ともハケ目の後横ナデ。胴部：外面はハケ目内面はハケ目の後、ナデか。黒褐色。	B+G+J(細密) 口45 胴45 焼成：普
2	甕	口径 (34.0) 現存高 8.6	口唇部にr 撚りの回転押捺の後、内外面とも口縁部粗い横ナデ。頸部：内外面ともハケ目。赤褐色。	A+B+H+J 口35 焼成：良



第78図 第44号住居跡出土遺物



第45号住居跡土層註記

- 1 黒褐色土 焼土粒・カーボン少。しまり・粘性やや強。
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ3cm)少。しまり・粘性やや強。
- 3 黒色土 カーボン多、ローム粒少。しまり・粘性やや強。
- 4 暗褐色土 ローム粒・カーボン微量。しまり・粘性やや強。
- 5 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック若干。しまり・粘性やや強。
- 6 黒褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり・粘性やや強。

炉跡土層註記

- 1 黒色土 カーボン層中に焼土粒・ローム粒少。しまり・粘性やや弱。
- 2 赤褐色土 赤色化・硬化したロームである。



第79図 第45号住居跡(1)



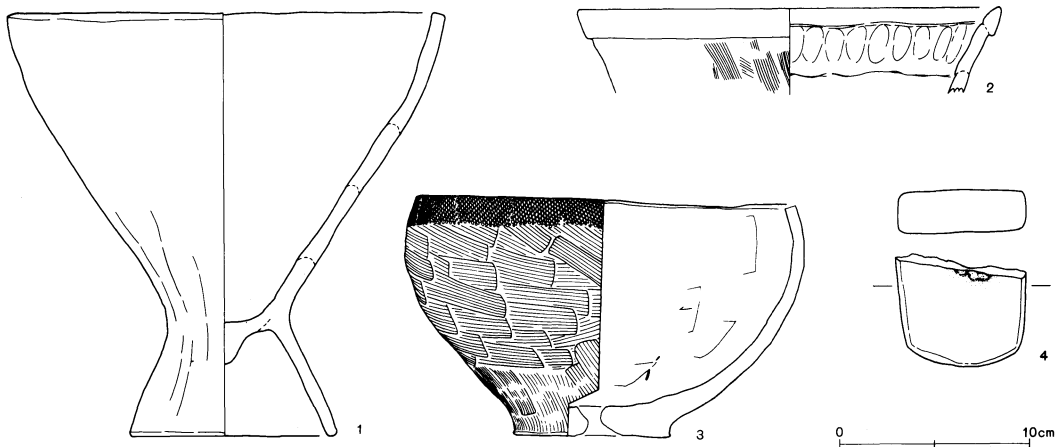
第80図 第45号住居跡②

第45号住居跡 (第79・80図)

第45号住居跡は、S15eグリッドに位置する。北側の一部と東側から南側にかけてを、第43号住居跡と同様に、バックホーによるゴミ穴の攪乱を受けている。また、南側を第15号溝跡によって切られる。平面規模は長軸545cm・短軸460cm、確認面からの深さは15cmを測り、隅丸の長方形を呈す。主軸方向は、ほぼ真北を示す。壁溝は全周すると思われる。攪乱部分を除いて、支柱穴が3基確認されている。各支柱穴間の距離は、長軸方向が280cm、短軸方向が180cm。各支柱穴の確認面からの深さは、北東側のものから時計回りに、65cm・50cm・65cmを測り、しっかりと明瞭なものである。支柱穴を結んだ線の内側、やや北寄りに炉跡が検出された。平面規模は77cm×52cmの楕円形で、床面からの深さは8cmを測る。貯蔵穴については、検出されなかった。あるいは、攪乱部分に存在したとも推定される。第45

号住居跡の北側部分には、ピットが4基確認されているが、検出状況からみて、本住居跡を切っているものである。炉跡焼土上と、それよりやや北の位置からは、土器の破片がまとまって出土し、南部分からは炭化した木片が検出されている。

これらを合わせて、図化し得た遺物は、石製品1点を含め計4点である。



第81図 第45号住居跡出土遺物

第45号住居跡出土遺物 (第81図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	高杯	口径 21.9 脚台径 (10.2) 器高 22.1	胴部：外面はヘラ削りの後ナデか。内面はナデか。 脚台部：外面はハケ目の後ナデか。内面はナデ。器面は摩滅著しい。橙色。	A+B+C+H □70 胴70 脚80 焼成：普

2	壺	口径 (22.0) 現存高 4.5	口縁部：内外面とも横ナデ。頸部：外面は粗いハケ目の後粗いナデ。内面は粗いナデの後粗い指頭による押捺。端部に粘土紐を貼付して、複合口縁とする。褐色。	A+B+D+J 口15 焼成：良
3	甗	口径 19.9 底径 7.9 器高 12.2	口縁部：外面はLR縄文。体部：外面はハケ目、体部～底部内面：ヘラナデとナデ。底部：外面はナデ。壺の下半部を甗に転用。橙色（一部黒色）。	A+B+H+J 口55 体60
4	磨製石斧	現存長 5.9 幅 6.7	下半部を欠く磨製石斧と思われる。断面形は隅丸の長方形に近い。欠損面を除いて滑らかな面を有す。174.9g。	砂岩製

第46号住居跡（第82・83図）

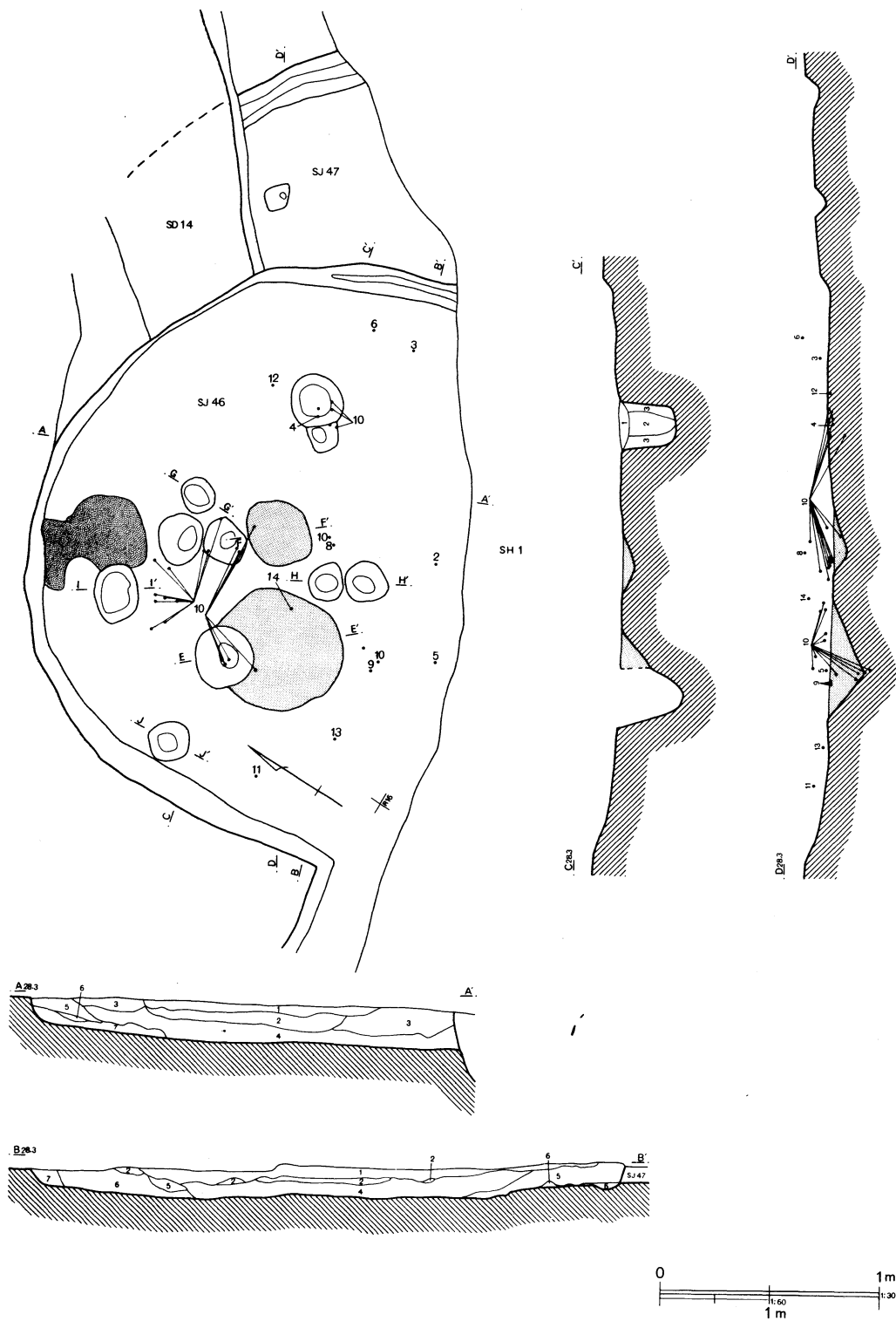
第46号住居跡は、R15gグリッドに位置する。北側から東側にかけて、第14号溝跡・第47号住居跡と重複する。前者には切られ、後者は切っていると推定される。東側から南側にかけて、第1号方形周溝墓に切られる。平面規模は短軸533cm、確認面からの深さは40cmを測り、隅丸の長方形を呈すると推定される。主軸方向は、N-22°-Wを指す。壁溝はごく一部分で確認された。支柱穴2基を、エレベーションC-C'で推定をした。支柱穴間の距離は245cm、支柱穴の確認面からの深さは、60cmと50cmを測る、比較的しっかりとしたものである。しかし、エレベーションE-E'では、大型の炉跡に切られているのが確認されている。平面規模は111cm×91cmの楕円形で、確認面からの深さは34cmを測る大型の炉跡である。

これは第47号住居跡に伴う炉跡であり、第46号住居跡を切っていると想定することは、本住居跡の方が切っていることから（土層断面B-B'）も成り立たない。遺構内における位置・規模等からみても、あるいは第46号・第47号住居跡とは別個の遺構であろうか。

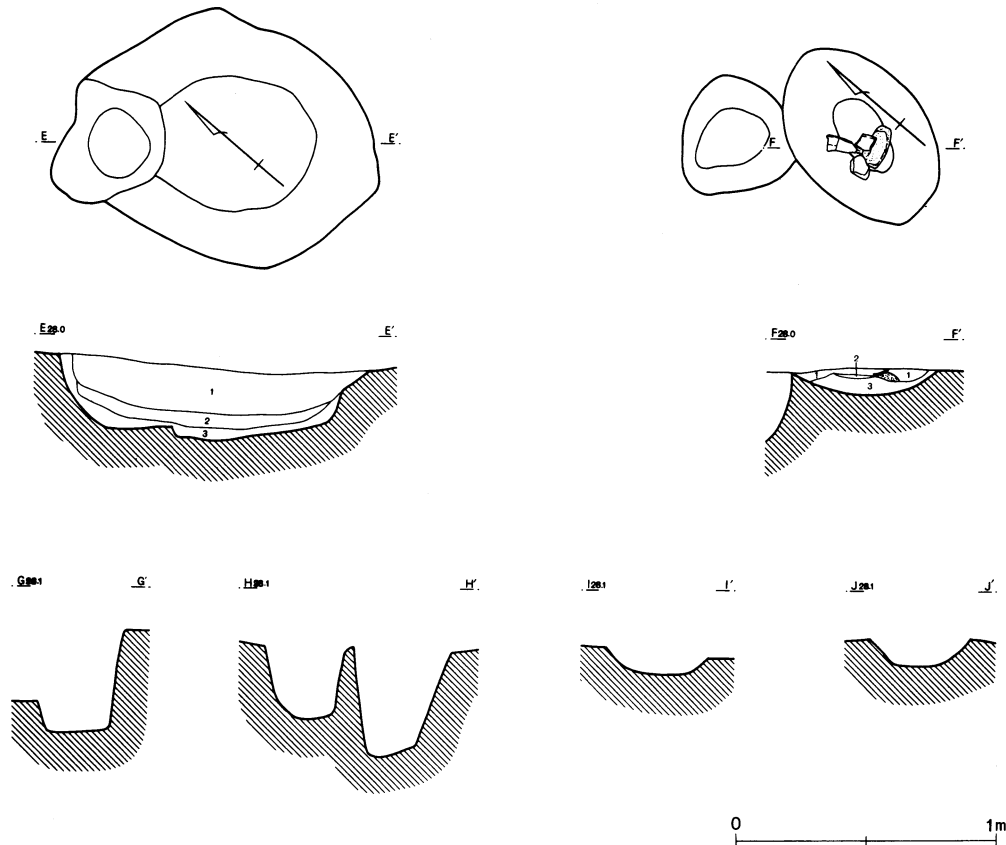
支柱穴を結んだ線上に、もう1基の炉跡が検出された。平面規模は85cm×52cmの楕円形で、確認面からの深さは10cmを測る。本住居跡に伴うのはこちらのみであろうか。貯蔵穴については、調査範囲内では検出されなかった。北側壁面の近辺で、炭化物（スクリントーン部分）が、床面から浮いた状態で確認された。図化し得た遺物は15点であるが、一部に第1号方形周溝墓の覆土内に関わる遺物が混入していると推定される。

第46号住居跡出土遺物（第84図）

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	甗	口径 (18.0) 胴径 (15.1) 現存高 7.8	口縁部：内外面とも横ナデ。指頭による相互押捺。胴部：外面ハケ目の後ナデ、内面ヘラナデか。内外面にスス付着。器面は荒れている。橙色。	B+C+J 口15 胴15 焼成：良
2	甗	口径 (25.0) 現存高 8.5	口縁部：外面はヘラ削りの後粗い横ナデ。内面はヘラ削りの後粗い横ナデ。橙色。	A+B+I+J 口25 焼成：良
3	台付甗	底径 7.8 現存高 6.6	底部内面：ヘラナデ。脚台部：内外面ともナデ。橙色（一部黒色）。	A+B+E+J 脚100 焼成：普



第82图 第46·47号住居跡(1)



第46号住居跡土層註記 A-A' B-B' 共通

- 1 黒色土 カarbon若干、焼土粒・カーボン少。しまりやや弱、粘性やや強。
- 2 黒色土 カarbon多、焼土粒・ローム粒少。しまりやや弱、粘性やや強。
- 3 黒褐色土 カarbon少、ローム粒・焼土粒若干。しまりやや弱、粘性やや強。
- 4 黒色土 カarbon・焼土粒・灰若干、ローム粒少。しまりやや弱、粘性やや強。
- 5 暗褐色土 カarbon・焼土粒・ローム粒少。しまりやや弱、粘性やや強。
- 6 赤味を帯びた暗褐色土 焼土ブロック・焼土粒若干。しまりやや弱、粘性やや強。
- 7 暗黄褐色土 ローム粒若干、カarbon微量。しまり弱、粘性弱。

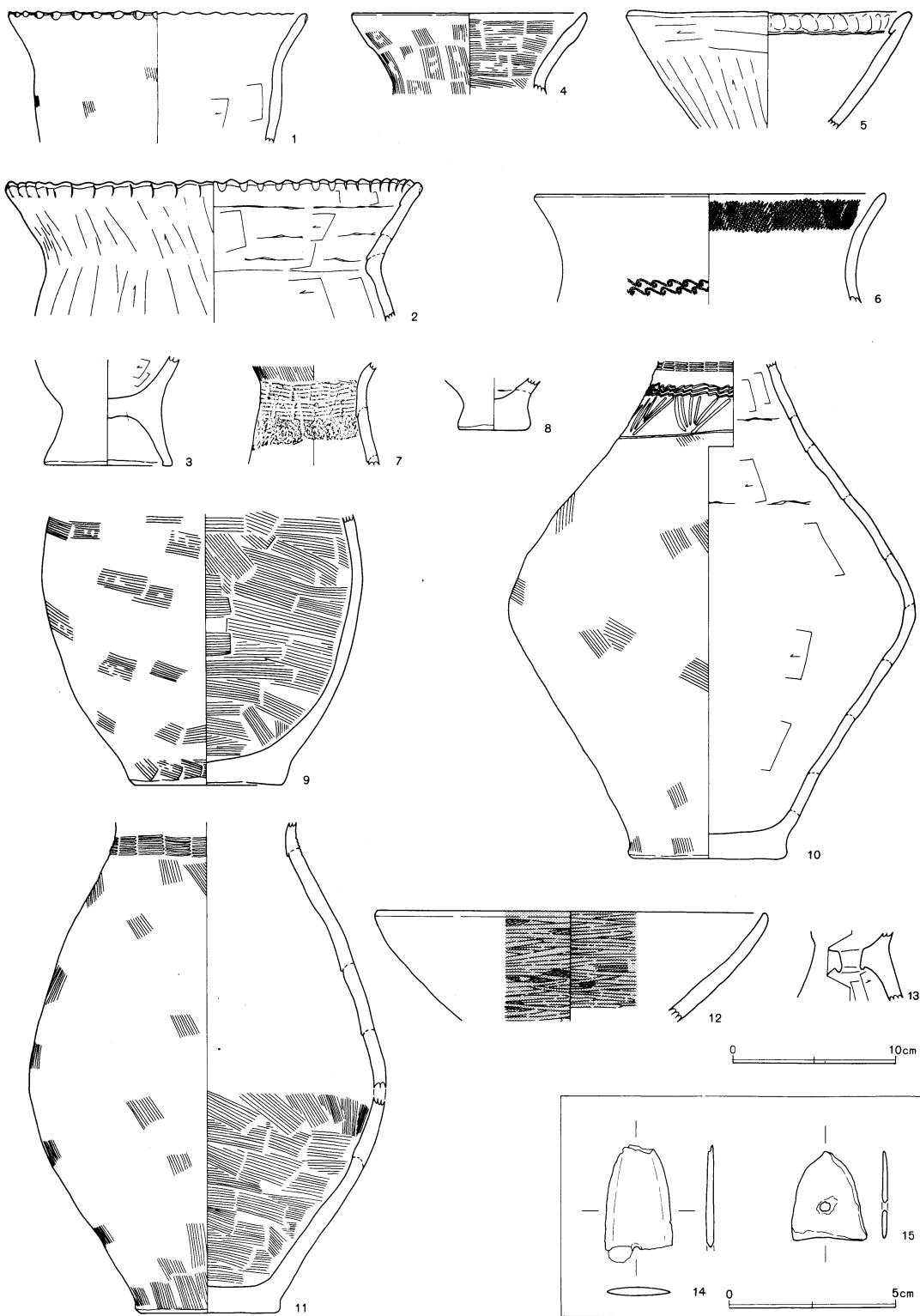
C-C'

- 1 黒褐色土 ローム粒少、しまり・粘性やや弱。
- 2 暗褐色土 ローム粒若干、ロームブロック (φ 3 cm) ・カarbon少。しまり・粘性やや弱。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック (φ 4 cm) 多。しまりやや強、粘性弱。

炉跡土層註記

- 炉 1
- 1 暗褐色土 ロームブロック (φ 5 cm) ・ローム粒・カarbon若干。しまり・粘性やや弱。
 - 2 黒色土 カarbon層。
 - 3 赤褐色土 焼土層。
- 炉 2
- 1 黒褐色土 カarbon・焼土粒若干、ローム粒少。しまりやや強、粘性弱。
 - 2 黒色土 カarbon・焼土粒少。しまり弱、粘性やや強。
 - 3 赤褐色土 赤色化、硬化したローム。

第83図 第46・47号住居跡(2)



第84图 第46号住居跡出土遺物

4	壺	口径 (14.1) 現存高 4.9	口縁部：内外面とも、ハケ目の後ナデか。器面は荒れている。褐色。	A+B+D+J 口径30 焼成：普
5	壺	口径 (17.0) 現存高 7.1	口縁部：外面はヘラ削りか、内面は折り返し部は指頭による押捺、それ以下はナデか。器面は摩滅している。	A+B+E+H+J 口径25 焼成：普
6	壺	口径 (21.2) 現存高 6.5	口縁部：内外面とも横ナデ。口縁内面にRL縄文、頸部外面にr結節文2段を施す。橙色。	A+B+G+J 口径15 焼成：良
7	壺	現存高 6.0	内面：ナデ。6本単位の櫛描き簾状文2段。(上段が後) 橙色。	A+B+G+J 焼成：普
8	壺	底径 4.2 現存高 3.2	内外面ともナデか。器面は荒れている。橙色(一部黒色)。	A+G+J 底100 焼成：普
9	壺	底径 (9.2) 胴径 (19.5) 現存高 16.4	外面：ハケの後、ナデ。内面：ハケ目。底面：内外面ともナデか。器面は荒れている。明赤褐色。	A+B+D+J 焼成：普
10	壺	底径 9.5 胴径 24.9 現存高 30.3	胴部：外面はハケ目の後丁寧なナデ。内面はヘラナデ。底部：内外面ともナデ。肩部が3本単位の櫛状工具による右回転の簾状文→波状文→沈線による山形文(7箇所)。橙色。	B+I(多)+J 胴45 底100 焼成：良
11	壺	底径 (8.2) 胴径 (21.7) 現存高 30.0	胴部：外面はハケ目の後ナデ。内面は上半ナデ、下半ハケ目。黄橙。	B+G+J 底45 焼成：普
12	高坏	口径 (23.6) 現存高 6.3	内外面とも、ハケ目の後ヘラ磨きか。器面は摩滅著しい。赤褐色。	A+B+E+J 口径25 焼成：やや良
13	器台	現存高 4.2	外面：ナデか。内面：ヘラナデか。器面は摩滅著しい。橙色(一部黒色)。	A+E+H(多)+J 接合95 焼成：普
14	磨製石鏃	現存長 3.6 幅 2.0 厚さ 0.2	先端部と基部を欠損する。両側面とも表裏面から鋭利な面を研ぎ出す。表裏面に条線を残す。下部に両側から径0.2cm程の孔を穿つ。現存重量2.6g。	緑泥片岩製

第47号住居跡(第82・83図)

第47号住居跡は、R15eグリッドに位置する。北側では、第14号溝跡に切られていると推定される。東側では第1号方形周溝墓に切られ、南側から西側にかけては、第46号住居跡に切られている。遺存状態は非常に悪く、プランの一部とピット1基が確認されたのみである。平面規模や形態については不明であるが、隅丸の方形もしくは長方形であろうか。確認面からの深さは、12cmを測る。確認の範囲内では、周溝が検出された。壁面は、緩やかに開いている。ピットが支柱穴であるのか、あるいは第46号住居跡の中に、本住居跡に伴うピットがあるのかについても不明である。

図化し得る遺物の出土はなかった。

第48号住居跡 (第85図)

第48号住居跡は、Q15 i グリッドに位置する。遺存度は非常に悪い。

南側を第1号方形周溝墓によって切られ、西側は性格不明遺構2によって切られている。コーナー部分が僅かに1箇所残っていたのみであり、遺構の平面規模についてはまったく不明である。調査し得た部分のみから推定すれば、平面形態は方形、あるいは長方形が考えられるといえよう。

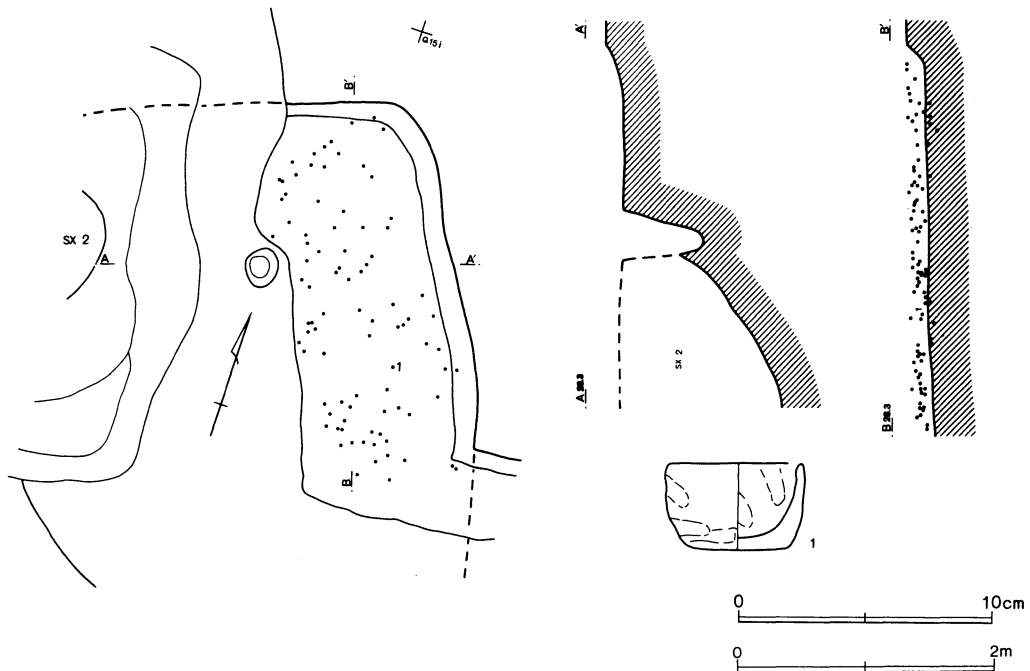
主軸方向についても判断できない。性格不明遺構2の範囲内において、ピットが1基検出されているが、その位置・規模等から推して本住居跡に伴う主柱穴の1つであると推定をした。

検出し得た範囲内では、壁溝は確認されていない。壁面についても非常に遺存度が悪く、立ち上がりは緩やかで、不明瞭なものとなっている。確認面からの床面までの深さは、僅かに15cmを測るのみである。

確認面からの、ピットの深さは60cmを測り、主柱穴としても、しっかりと明瞭なものである。遺物については、土器片が多数出土しているが、図化し得るものとしては1点のみであった。

第48号住居跡出土遺物 (第85図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	手捏ね	口径 (5.3) 底径 3.8 器高 3.4	内外面に指頭による押捺痕を残す。黒褐色。	A+E+I+J □5 体95 焼成：普

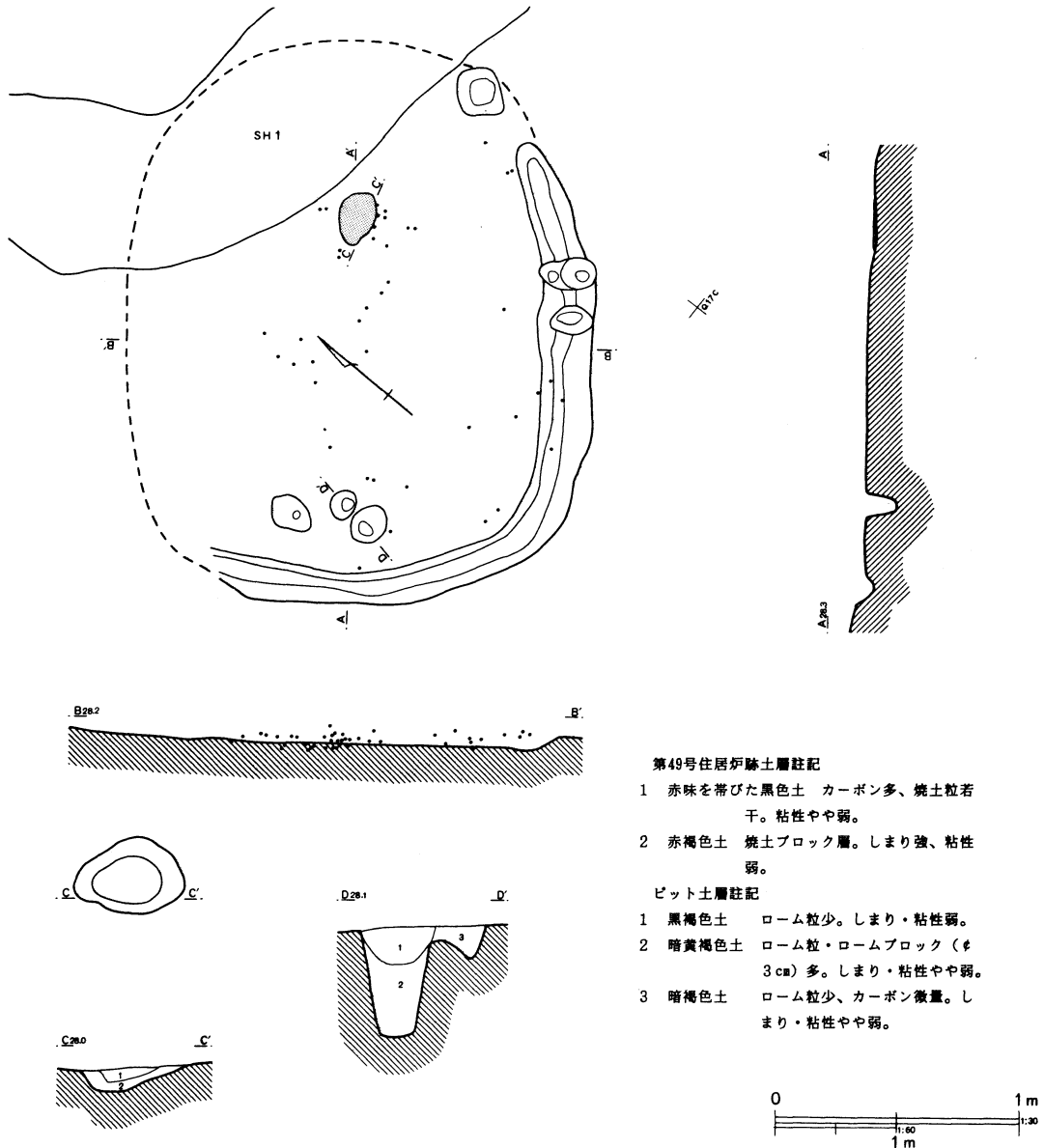


第85図 第48号住居跡、出土遺物

第49号住居跡 (第86図)

第49号住居跡は、Q16hグリッドに位置する。遺存度は非常に悪い。北側を、第1号方形周溝墓によって切られている。西側については、耕作土によりプランが失われていた。

推定による平面規模は、長軸456cm・短軸378cm、確認面からの深さは15cmを測る。平面形態は隅丸の長方形を呈す。主軸方向は、N-48° -Eを指す。遺構内において、ピット7基が検出されているが、本住居跡との関連については不明である。あるいは南側の1基が梯子穴であり、北東隅のピットが貯蔵穴と想定されようか。中央よりやや北寄りに、炉跡が存在する。平面規模は45cm×31cmの楕円形、確認面からの深さは9cmを測る。出土遺物の内に、図化し得るものはなかった。

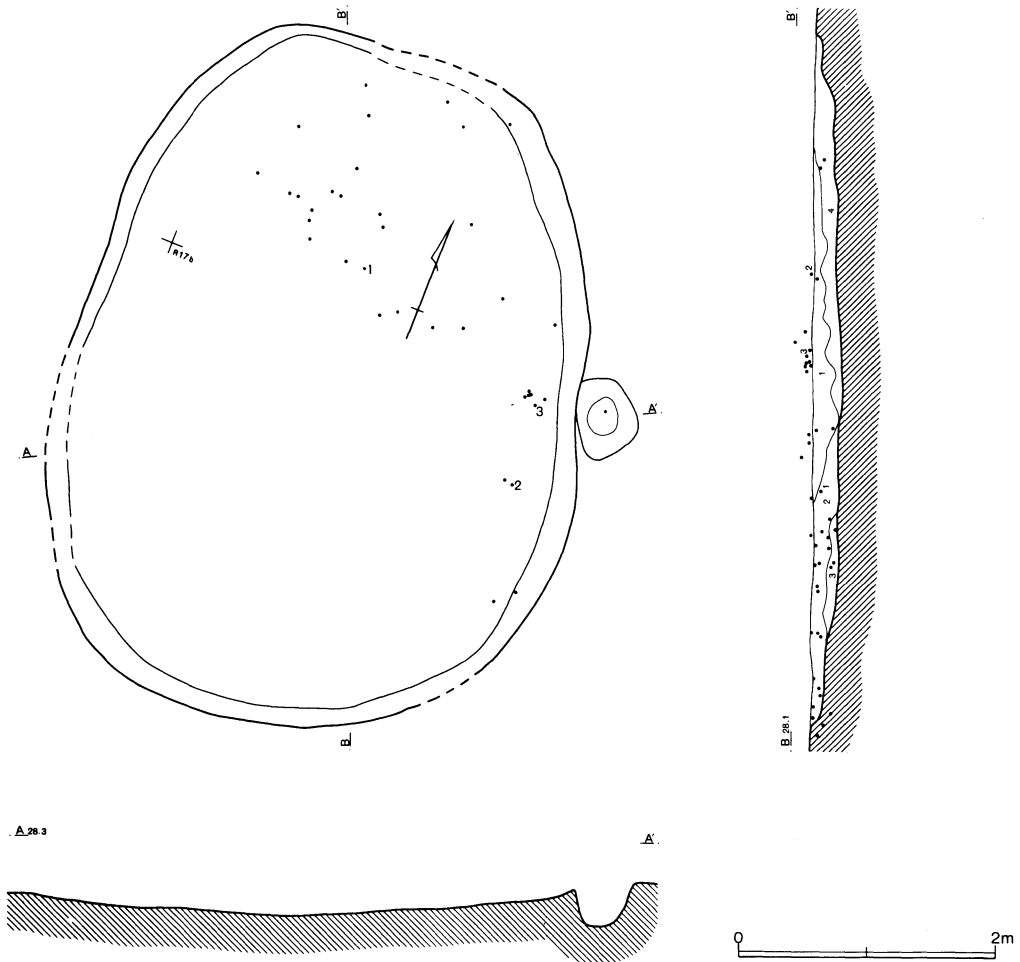


第86図 第49号住居跡

第50号住居跡 (第87図)

第50号住居跡は、R16hグリッドに位置する。遺存度は非常に悪い。北側から西側にかけては、北東から南西に及ぶ、柵列と推定されるピット列に攪乱されている (第5図・全測図2)。

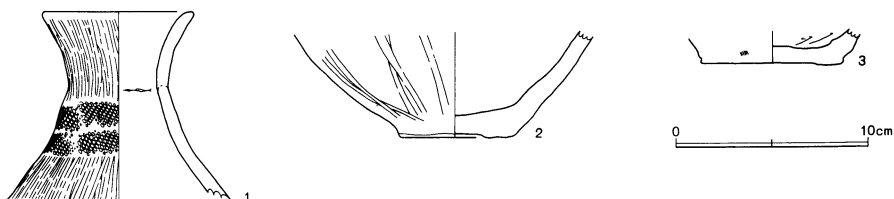
床面については曖昧であり、壁面の立ち上がりについても同様に、緩やかに開いているのが確認されたにとどまる。炉跡・壁溝・柱穴・貯蔵穴等々については、いっさい検出されていない。不明確な推定による数値ではあるが、平面規模は長軸541cm、短軸406cmを測り、平面形態は楕円形に近い。床面はやや窪地状を呈し、確認面からの深さは25cmを測る。主軸方向は、N-25°-Wを指す。弥生式期と覚しき土器片が、幾点かは出土しているが、図化し得るものは3点である。



第50号住居跡土層註記

- 1 黒褐色土 ロームブロック (φ 5 cm) 少。しまり・粘性やや弱。
- 2 暗褐色土 ローム粒少。しまり・粘性やや弱。
- 3 暗褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり・粘性やや弱。
- 4 黒色土 ロームブロック (φ 3 cm) 少、カーボン微量。しまり・粘性やや弱。

第87図 第50号住居跡



第88図 第50号住居跡出土遺物

第50号住居跡出土遺物 (第88図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	口径 (7.8) 現存高 9.8	頸部：外面はヘラ磨き、内面はナデ。頸部には、LR縄文が2段施文されていると思われる。	A+B+G+J 口径10 頸90 焼成：不良
2	壺	底径 6 現存高 5.4	胴部：外面は粗いヘラ磨き、内面はヘラナデか。底部：内外面ともナデ。器面は荒れている。橙色（一部黒色）。底部は粗いドーナツ状を呈す。	A+B+C+D+G 底80 焼成：普
3	壺	底径 7.2 現存高 1.7	胴部：外面はハケ目の後ヘラ磨きか。底部：内外面ともヘラナデ。橙色。	A+B+C+E+G 底85 焼成：良

第51号住居跡 (第89図)

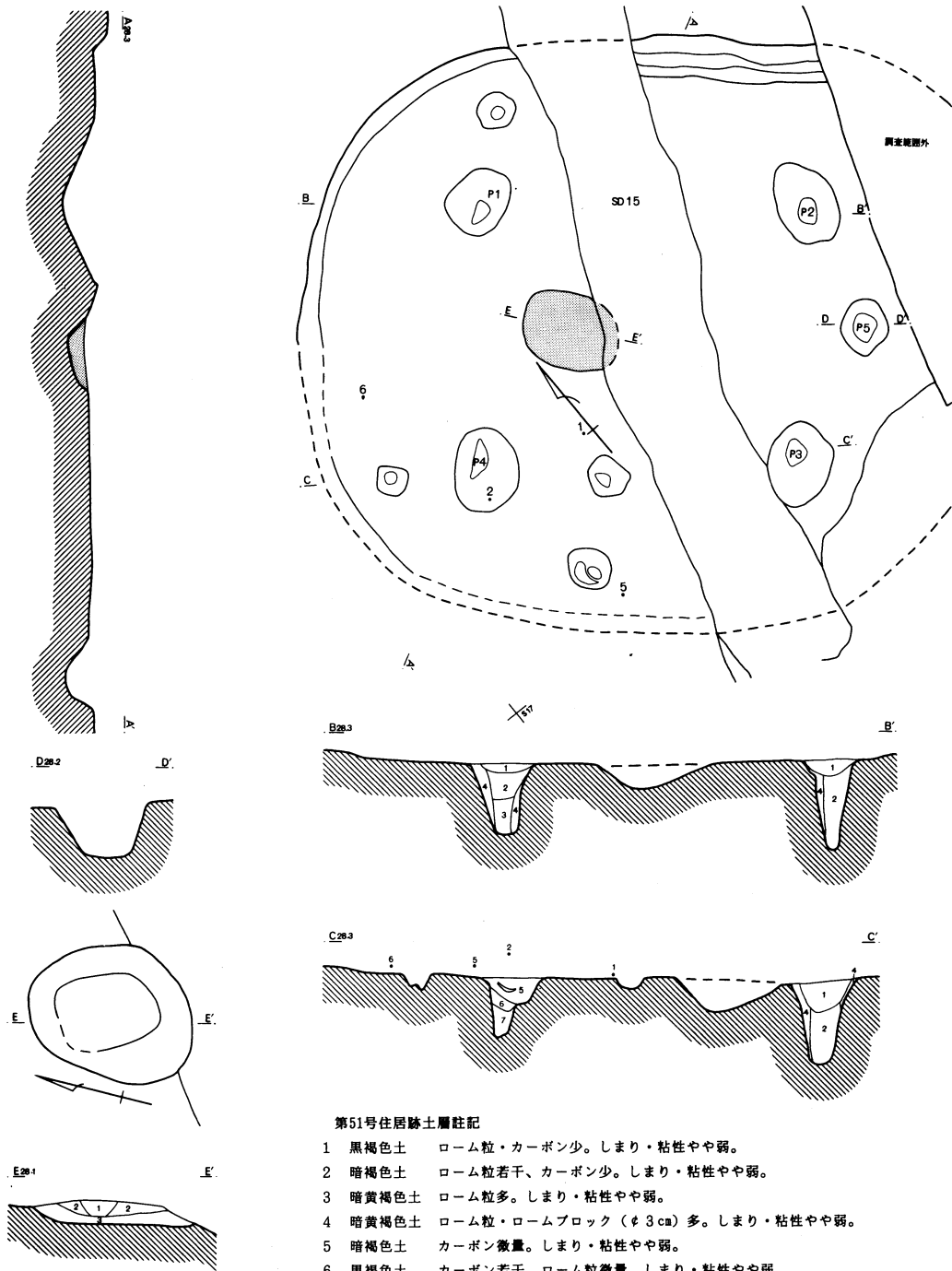
第51号住居跡は、S16dグリッドに位置する。中央を第15号溝跡に切られ、東側は調査範囲外に続く。南側は、第6号古墳跡に切られる。西側の一部を土壌によって切られるが、遺構図(第89図)では省略して図化した。全体的に、遺存状況は悪い。推定による平面規模は、長軸593cm・短軸508cmとなり、隅丸の長方形を呈す。確認面からの深さは、14cmを測る。

主軸方向は、N-46°-Wを指す。壁溝は、ごく一部分においてしか確認されていない。しかし他の遺構に切られている範囲が大きく、それ以外についても遺存状況が悪いこともあり、壁溝がなかったとまでは表現できない。

主柱穴が4基(P1~P4)と梯子穴と思われるピット(P5)が確認されている。各主柱穴間の距離は、P1-P2間で276cm・P2-P3間で205cm・P3-P4間で275cm・P4-P1間で215cmを測る。各主柱穴の確認面からの深さは、P1が60cm・P2が75cm・P3が75cm・P4が50cmを測り、しっかりしたものである。なお、P5の深さは50cmを測る。遺存していた床面は、比較的平坦で堅固であった。

主柱穴を結んだ線の内側、やや北東寄りに炉跡が検出された。平面規模は72cm×56cmの楕円形で、確認面からの深さは10cmを測る。貯蔵穴については、検出されなかった。調査範囲外もしくは、他遺構によって切られている箇所が存在したのであろうか。これらの他にも、4基のピットが確認されたが、いずれも本住居跡を切っているものと推定された。

幾つかの遺物が出土しており、このうち図化し得た遺物も9点に上る。しかし、いずれも部分的な状態での出土であった。

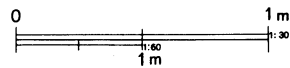


第51号住居跡土層柱記

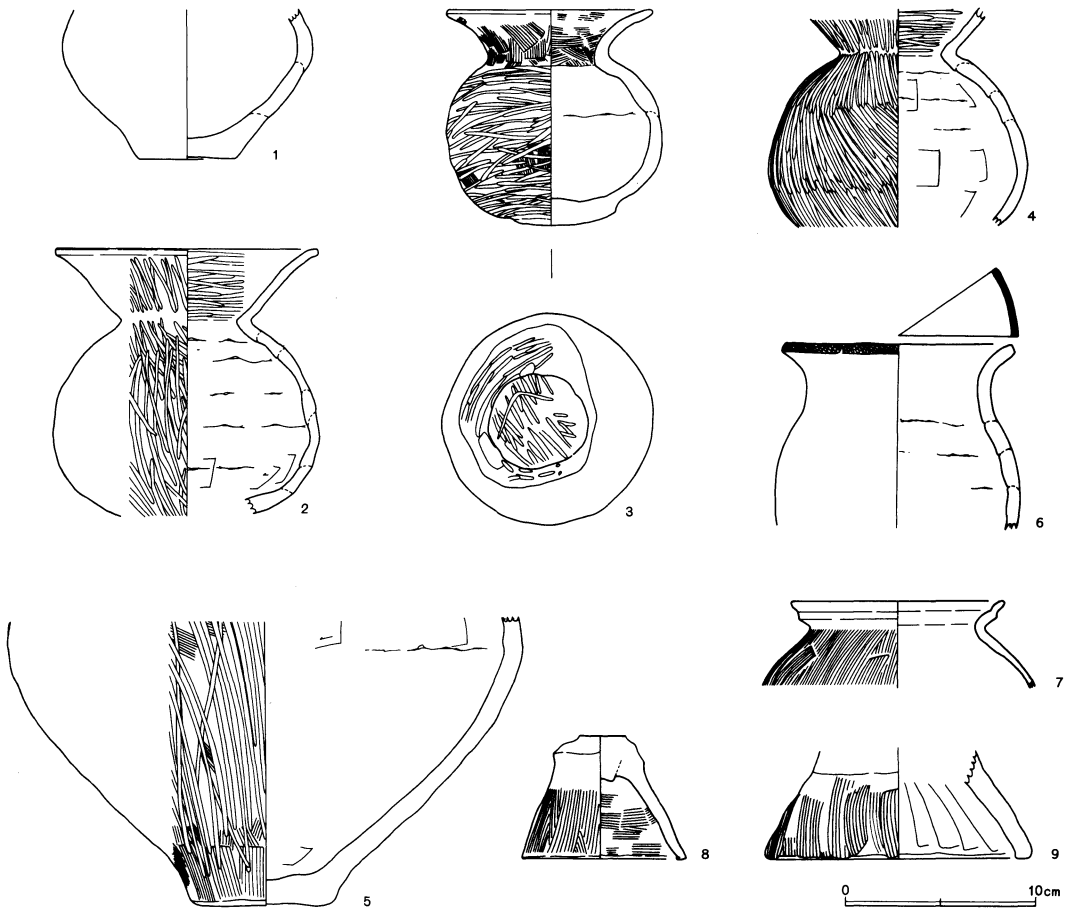
- 1 黒褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり・粘性やや弱。
- 2 暗褐色土 ローム粒若干、カーボン少。しまり・粘性やや弱。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒多。しまり・粘性やや弱。
- 4 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ3cm)多。しまり・粘性やや弱。
- 5 暗褐色土 カーボン微量。しまり・粘性やや弱。
- 6 黒褐色土 カーボン若干、ローム粒微量。しまり・粘性やや弱。
- 7 暗黄褐色土 ロームブロック(φ3cm)多。しまり・粘性弱。

第51号住居跡土層柱記

- 1 赤褐色土 赤色硬化した粘土。しまり強、粘性やや弱。
- 2 青灰色土 粘土層。しまり強、粘性やや弱。
- 3 暗灰色土 カーボン・焼土粒若干。しまり弱、粘性弱。



第89図 第51号住居跡



第90図 第51号住居跡出土遺物

第51号住居跡出土遺物 (第90図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	底径 現存高	3.2 7.8	胴部：外面はヘラ磨きか。内面はナデか。底部：内外面ともにナデか。内外面ともに摩滅著しい。橙色。	I(多)+J 底100 焼成：不良
2	壺	口径 胴径 現存高	13.5 (14.0) 14	口縁部～胴部：外面はヘラ磨き。内面はヘラ磨き。 胴部：内面は上半ナデ、下半ヘラナデとナデ。 橙色。	B+D+E+J 口50 胴40 焼成：良
3	壺	口径 底径 器高	10.4 (5.3) 11.2	口縁部：内外面とも、ハケ目の後粗い横ナデ。 胴部～底部：外面は粗いヘラ磨き。内面はナデ。 橙色（一部黒色）。	A+B+G(細密) 口80 胴60 底100 焼成：良
4	壺	胴径 現存高	(13.5) 10.9	頸部～胴部：外面はヘラ磨き。頸部：内面はヘラ磨き。 胴部：内面はヘラナデ。明褐色。	A+B+H+J 胴25 焼成：良

5	壺	胴径 (27.0) 底径 6.7 現存高 15.0	胴部：外面はハケ目の後へラ磨き、内面はへらナデとナデ。 底部：外面はナデ。黒褐色。	B+C+E+J 胴下30 底100 焼成：良
6	甕	口径 (11.8) 胴径 12.7 現存高 9.6	内外面とも丁寧なナデ。口唇部にLRの縄文。 器面は荒れている。暗赤褐色（一部黒褐色）。	B+G(細密) 口径45 胴上半20 焼成：良
7	台付甕	口径 (11.0) 現存高 4.3	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はハケ目。内面はナデ。 口縁内面に平坦面をもつ。黒褐色。口縁はS字状を呈す。	A+B 口径15 焼成：良
8	台付甕	脚台径 8.3 現存高 6.4	脚台部：外面はハケ目の後上位をナデ。内面はハケ目の後粗いナデ。橙色（一部黒色）。	A+B+J 脚75 焼成：良
9	台付甕	底径 13.8 現存高 5.6	外面はハケ目。内面は指頭によるナデツケ。 橙色。	脚30 焼成：良

第52号住居跡（第91・92図）

第52号住居跡は、Q17dグリッドに位置する。北側では、第3号方形周溝墓を切る。東側では、第53号住居跡と重複するが、本住居跡が切っていると思われる。南側では、第7号古墳跡に切られる。

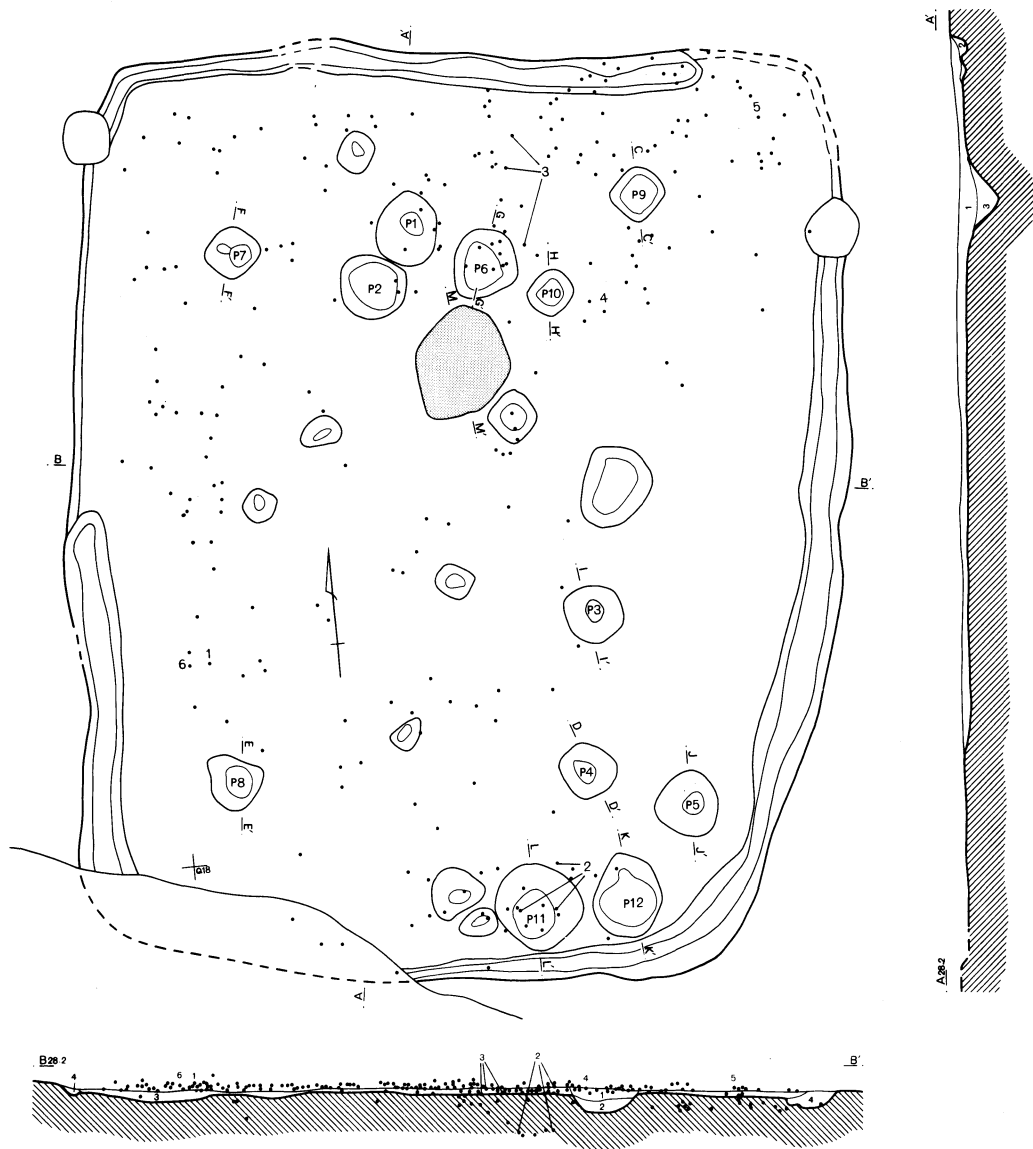
平面規模は、長軸で725cm・短軸で600cm、確認面からの深さは、僅かに5cmを測るのみであった。平面形態は、コーナー部分がやや丸味をもつ長方形を呈す。

主軸方向は、N-5°-Eを指す。壁溝は、東側において一部途切れるほかはほぼ全周している。主柱穴が4基（P9またはP10、及びP4・P7・P8）と、梯子穴と思われるピットが確認されている。各主柱穴間の距離は、北東部分がP9の場合P9-P4間が455cm、P10の場合P10-P4間が375cm、P4-P8間で270cm・P8-P7間で406cm・P7-P9間が316cm、またP7-P10間で245cmを測る。各主柱穴の床面からの深さは、P9の場合23cm・P10の場合10cm、P4が75cm・P8が49cm・P7が20cmを測り、比較的浅い柱穴である。貼床面は比較的平坦ではあるが、明瞭でなく硬化も少ないものである。

北東部分の主柱穴がP9またはP10であろうと、炉跡は主柱穴を結んだ線の内側、やや北寄りに位置するといえる。平面規模は92cm×77cmの楕円形で、床面からの深さは7cmを測る。貯蔵穴については、P11またはP12が想定される。P11の平面規模は、66cm×61cmの略円形を呈し、床面からの深さは42cmを測る。調査範囲外もしくは、他遺構によって切られている箇所が存在したのだろうか。これらの他にも、4基のピットが確認されたが、いずれも本住居跡を切っているものと推定された。P12の平面規模は、63cm×55cmの楕円形を呈し、床面からの深さは12cmを測る。P11の方が、可能性は高いといえるかも知れない。

なお、本住居跡の貼床は、第3号方形周溝墓の覆土を切って行われていた。また遺構中には、ピットが数多く検出されているが、その大部分は本住居跡を切っているものと推定される。

多数の土器片が出土しているが、ほとんど小破片ばかりで、接合関係にあるものはごく少数であった。図化し得た遺物は、6点を数えるのみである。



第52号住居跡土層註記

- 1 黒褐色土 カーボン少。しまり・粘性やや強。
- 2 黒褐色土 ロームブロック (φ 3 cm) 若干、カーボン少。しまりやや弱、粘性やや強。
- 3 黒褐色土 焼土粒・ローム粒・カーボン少。しまりやや弱、粘性やや強。
- 4 暗褐色土 ローム粒若干、カーボン少。しまりやや弱、粘性やや強。

第52号住居ピット土層註記

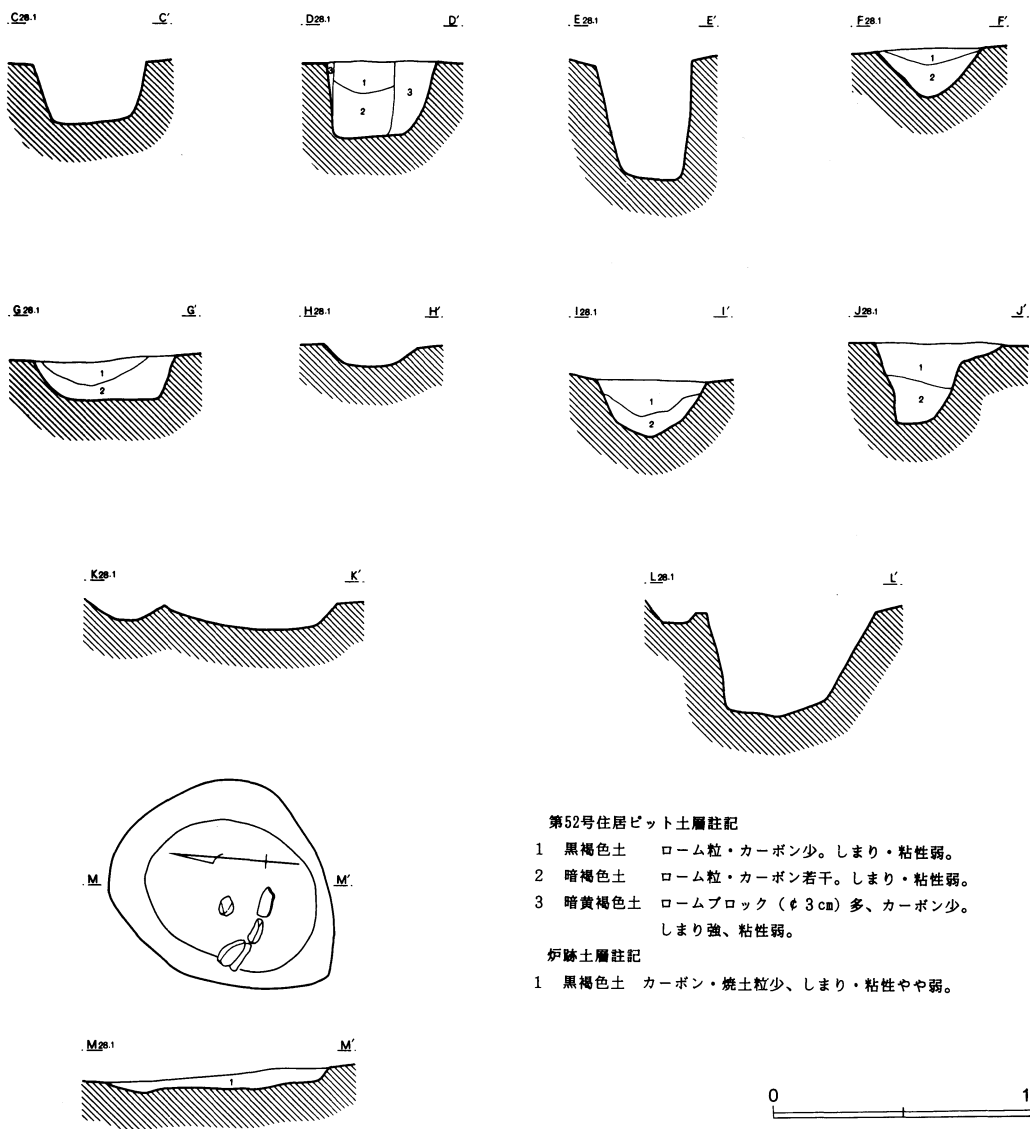
- 1 黒褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり・粘性弱。
- 2 暗褐色土 ローム粒・カーボン若干。しまり・粘性弱。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック (φ 3 cm) 多、カーボン少。しまり強、粘性弱。

炉跡土層註記

- 1 黒褐色土 カーボン・焼土粒少、しまり・粘性やや弱。



第91図 第52号住居跡(1)

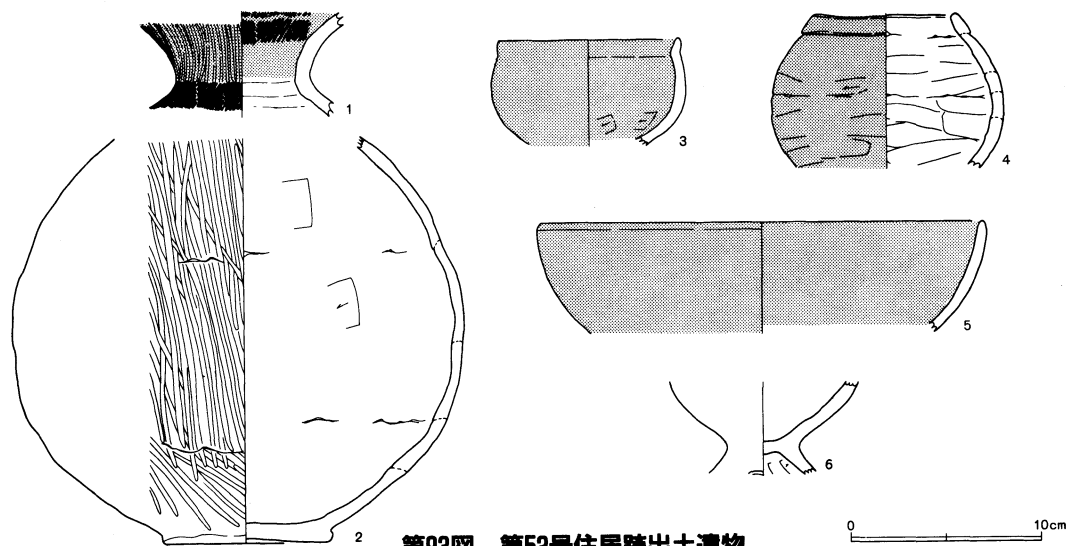


第92図 第52号住居跡(2)

第52号住居跡出土遺物 (第93図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	現存高	4.8	頸部：外面はヘラ磨き。内面はナデ。肩部にLRの縄文。橙色。口縁部赤彩。	A+B+E+J(細密) 焼成：普
2	壺	胴径 底径 現存高	(23.7) (8.6) 21.0	外面はヘラ磨き。内面はヘラナデとナデ。底部に木葉痕。赤褐色。	B+D+J 胴25 底45 焼成：良

3	碗	口径 9.5 現存高 5.2	口縁部：内外面ともに横ナデ。体部：外面は丁寧なナデ。内面はヘラナデの後ナデ。赤橙色。	A+B+H+J 口径60 径50 焼成：普
4	壺	口径 (7.2) 胴径 (12.1) 現存高 8.0	口縁部：粗い横ナデ。胴部：外面はヘラ削りの後粗いナデ。内面は指頭による粗いナデツケ。輪積み痕をよく残す。赤褐色。	B+G+J 口径25 胴20 焼成：普
5	高 坏	口径 (23.2) 現存高 5.8	口縁部：内外面ともナデか。器面は摩滅している。黄褐色。	A+B+E+H+J 口径15 焼成：やや不良
6	高 坏	現存高 4.2 器高 12.8	坏部：内外面ともナデか。脚台部：外面はナデか。内面はヘラナデか。器面は摩滅している。にぶい黄橙色。	B+C+D(細密) 径100 焼成：普

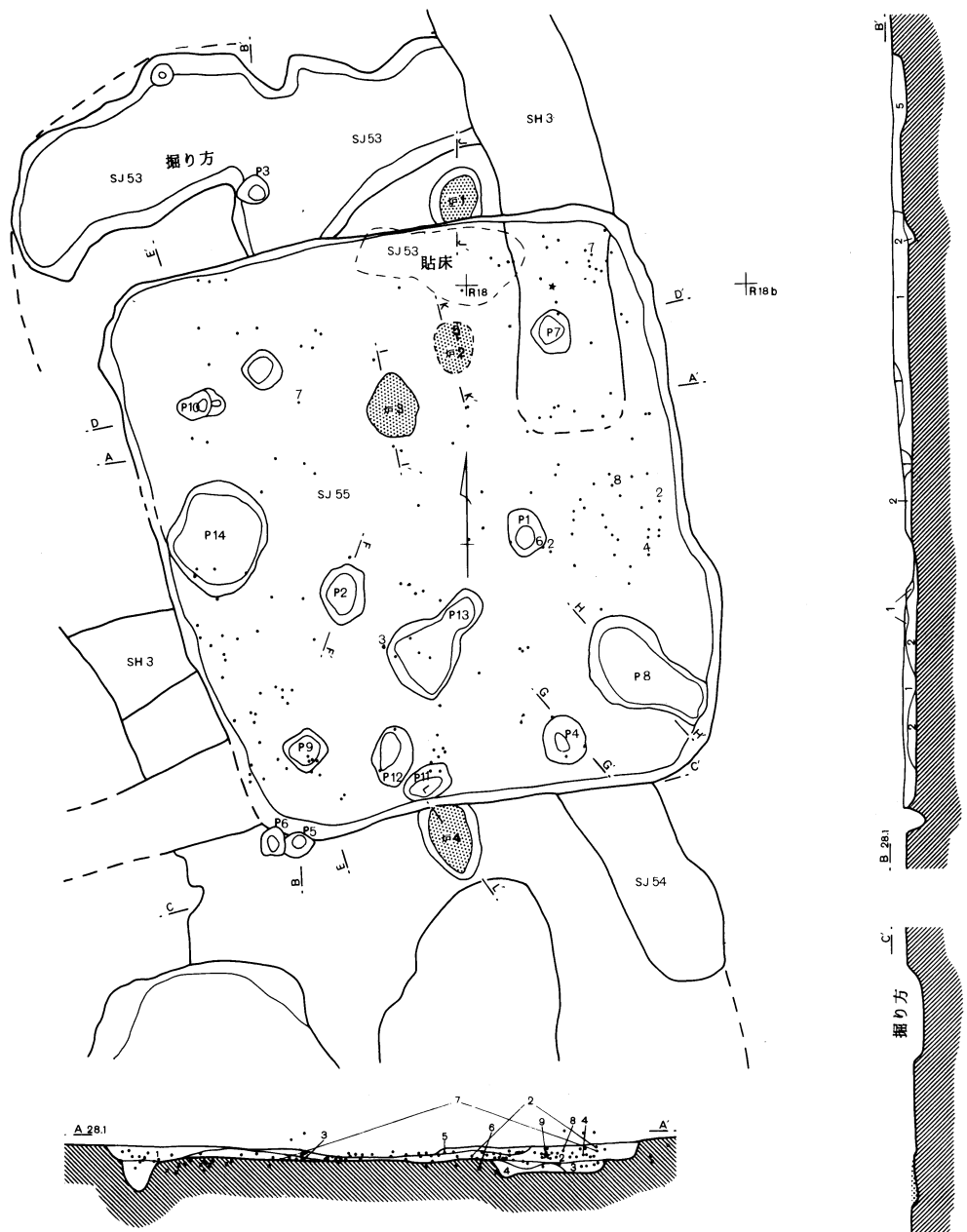


第93図 第52号住居跡出土遺物

第53号住居跡 (第94・95図)

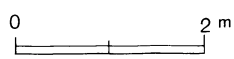
第53号住居跡は、Q17 i グリッドに位置する。北側から東側では、第3号方形周溝墓を切る。南側では第55号住居跡と重複するが、本住居跡に伴うと推定される貼床が、第55号住居跡覆土上になつた状態で検出された。この点から、本住居跡が後出すると判断される。西側では、第52号住居跡と重複するが、新旧関係については不明である。また、第7号古墳跡との重複も考えられるが、その場合は本住居跡が切られていると推定される。

遺存状況は非常に悪く、プランに関しては掘り方のみを検出であり、平面規模・形状などは不明。第55号住居跡との新旧関係から、本住居跡もコーナー部分がやや丸味を帯びた方形、もしくは長方形が想定されるにとどまる。P1・P2・P3に、支柱穴を想定してみた。その場合、北東部分の支柱穴は、第3号方形周溝墓の中に位置したと考えられる。各ピット間の距離は、P1-P2間で208cm・P2-P3間で440cmを測り、確認面からの深さはP2で32cm・P3で15cmとなる。前者については、本住居跡の床面下に存在する、第55号住居跡床面からの数値であり、後者については、

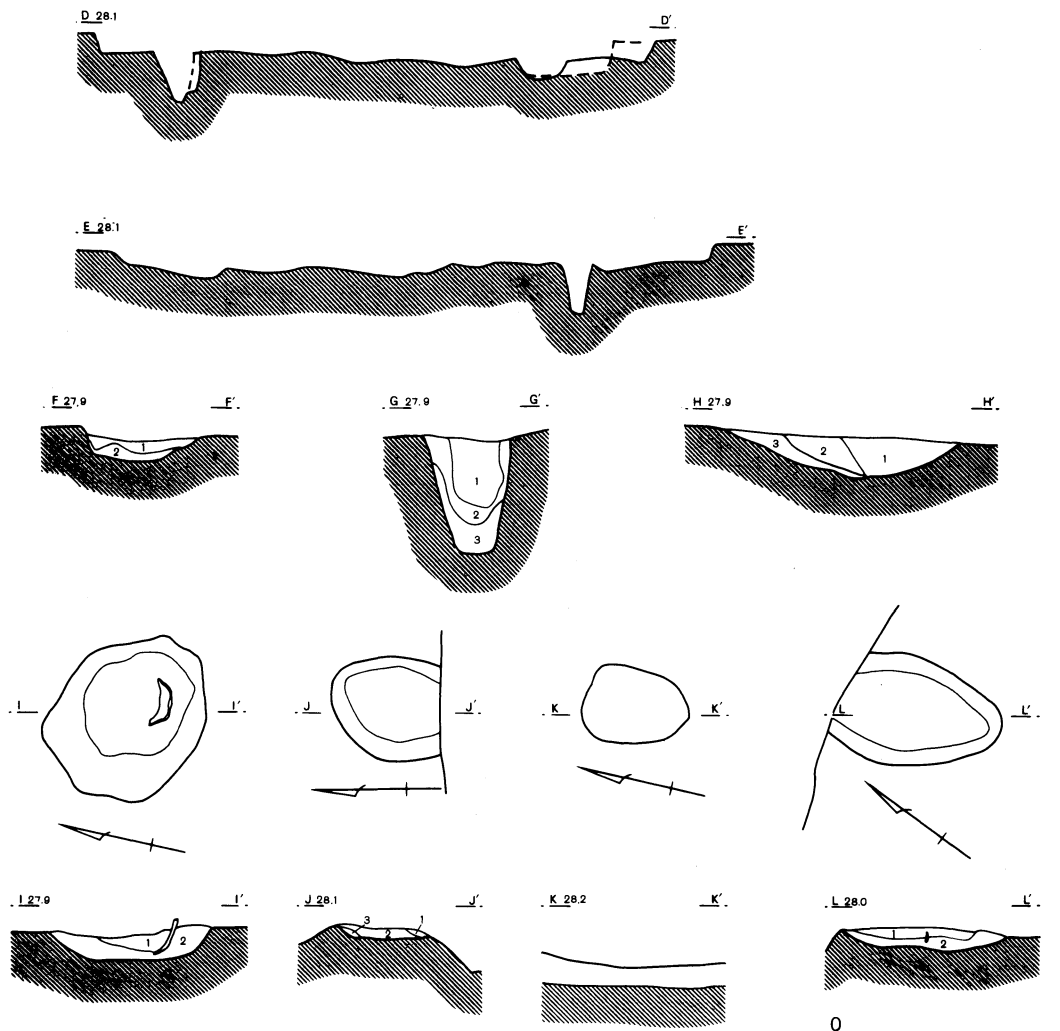


第53・54・55号住居跡土層註記

- 1 黒褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり・粘性やや弱。
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ1cm)少、カーボン微量。(1・2層=SJ55)
- 3 黒褐色土 ロームブロック・カーボン少。しまり・粘性やや弱。
- 4 暗褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり・粘性やや弱。(3・4層=SH3)
- 5 暗褐色土 ロームブロック(φ3cm)・ローム粒若干、カーボン少。しまり強、粘性やや弱(=SJ53掘り方)。



第94図 第53・54・55号住居跡(1)



第55号住居ピット土層註記

F-F'

- 1 黒褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり・粘性やや弱。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック(φ3cm)多。しまり・粘性やや弱。

G-G'

- 1 黒褐色土 ローム粒若干、カーボン少。しまりやや強粘性やや弱。
- 2 暗褐色土 ローム・カーボン少。しまりやや強、粘性やや弱。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック(φ3cm)多。しまり強、粘性弱。

H-H'

- 1 黒褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり・粘性やや弱。
- 2 暗褐色土 ローム粒若干、カーボン微量。しまり・粘性やや弱。(S J 55を切る)。
- 3 暗褐色土 ローム粒・カーボン微量。しまり・粘性やや弱

第53・54・55号住居炉跡土層註記

第55号住居炉跡土層註記

- 1 赤褐色土 焼土ブロック多、カーボン少。しまり強、粘性弱。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック多、焼土粒・カーボン少。しまり・粘性弱。

第53号住居炉跡土層註記

- 1 黒色土 カーボン層。しまり弱、粘性強。
- 2 赤褐色土 赤色硬化したロームブロック層。しまり強・粘性弱。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック層。しまり強、粘性弱。

第54号住居炉跡土層註記

- 1 赤褐色土 焼土ブロック・カーボン多。しまり強、粘性弱。
- 2 暗黄褐色土 硬化したロームブロック層。しまり強、粘性弱。

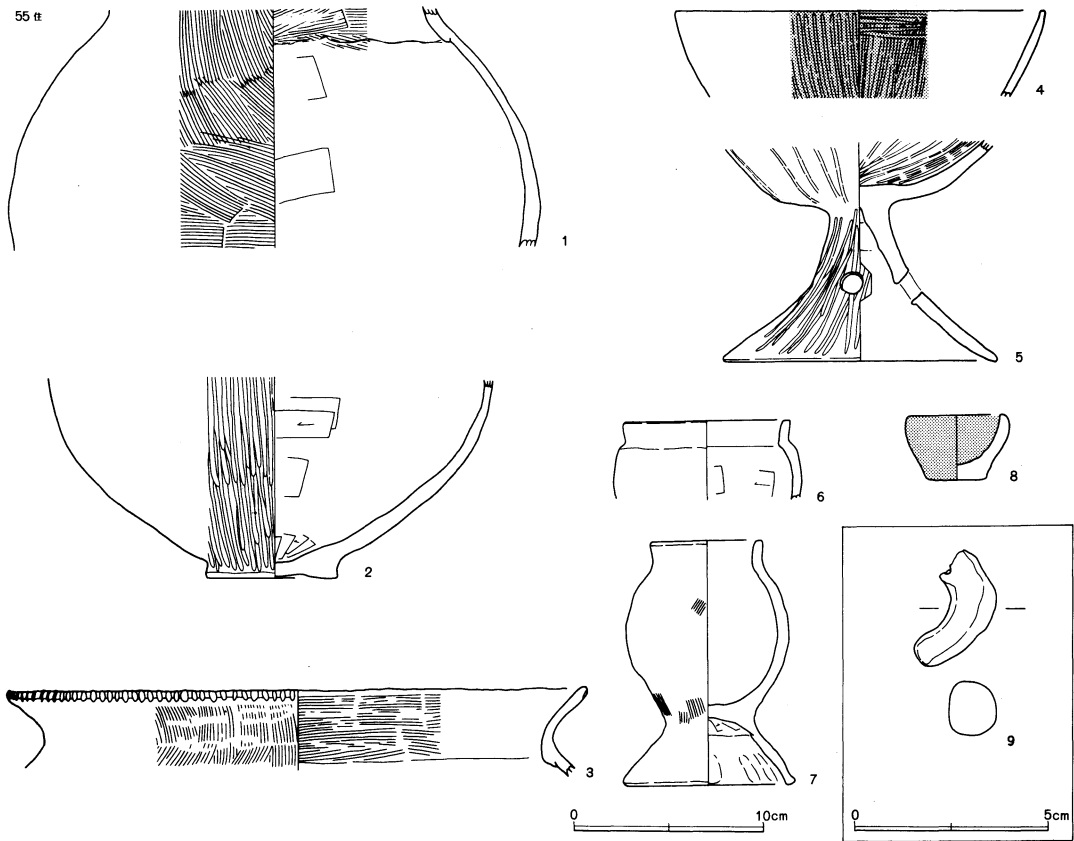
第95図 第53・54・55号住居跡(2)

本住居跡の掘り方下面からの数値でもある。このことから、数値的には概ね浅い印象を受ける。主軸方向は、 $N-13^{\circ}-W$ と推定される。支柱穴を結んだ線よりも内側と思われる位置に、炉跡が2基(炉1・炉2)検出された。炉1は、短径50cmの平面楕円形、確認面からの深さは5cm。炉2は第55号住居跡ののっており、長径56cm・短径42cmの平面楕円形、確認面からの深さは4cm。P8は、貯蔵穴であろうか。

遺物の出土はなかった。

第54号住居跡 (第94・95図)

第54号住居跡は、R18gグリッドに位置する。第53号住居跡と同様に、遺存状態は非常に悪い。北側で第55号住居跡に切られ、南側から西側にかけて、幾つかの土壇やピットに切られるほか、地下式坑にも切られている。P4の他に、P5またはP6が支柱穴であろうか。ピット間の距離は、P4-P5間では304cm、P4-P6間であるとすると336cmとなる。確認面からの深さは、P4が64cm、P5が20cmを測る。短軸60cm、楕円形を呈し、深さ10cmの炉跡が検出された。遺物の出土はない。



第96図 第55号住居跡出土遺物

第55号住居跡 (第94・95図)

第55号住居跡は、Q18cグリッドに位置する。北側では、第3号方形周溝墓を切り、第53号住居跡に切られる。南側では、第54号住居跡を切っている。西側においても、第3号方形周溝墓を切っている。平面規模は長軸624cm・短軸576cm、確認面からの深さは10cmを測り、コーナー部分にやや丸味をもつ方形に近い。

主軸方向は、N-8°-Wを指す。支柱穴が3箇所(P7・P9・P10)検出された。南東の支柱穴はP8内であろうか。各支柱穴間の距離は、P9-P10間で393cm・P10-P7間で392cmを測り、方形に配置されている。確認面からの深さはP7で20cm・P9で20cm・P10で48cmを測る。支柱穴を結んだ線より内側、北寄りに炉跡(炉3)が検出された。平面規模は96cm×76cm、床面からの深さは16cm、平面楕円形を呈す。貯蔵穴と覚しき遺構は検出されていないが、P8の内に含まれるか、あるいは第3号方形周溝墓を切っている範囲内に存在したのであろうか。床面は、ロームブロックの割合の少ない貼床であるためか、硬度は低く明瞭なものではなかった。壁溝は検出されていない。P12は、梯子穴であろうか。遺物の出土は多いが、図化し得た遺物は9点である。

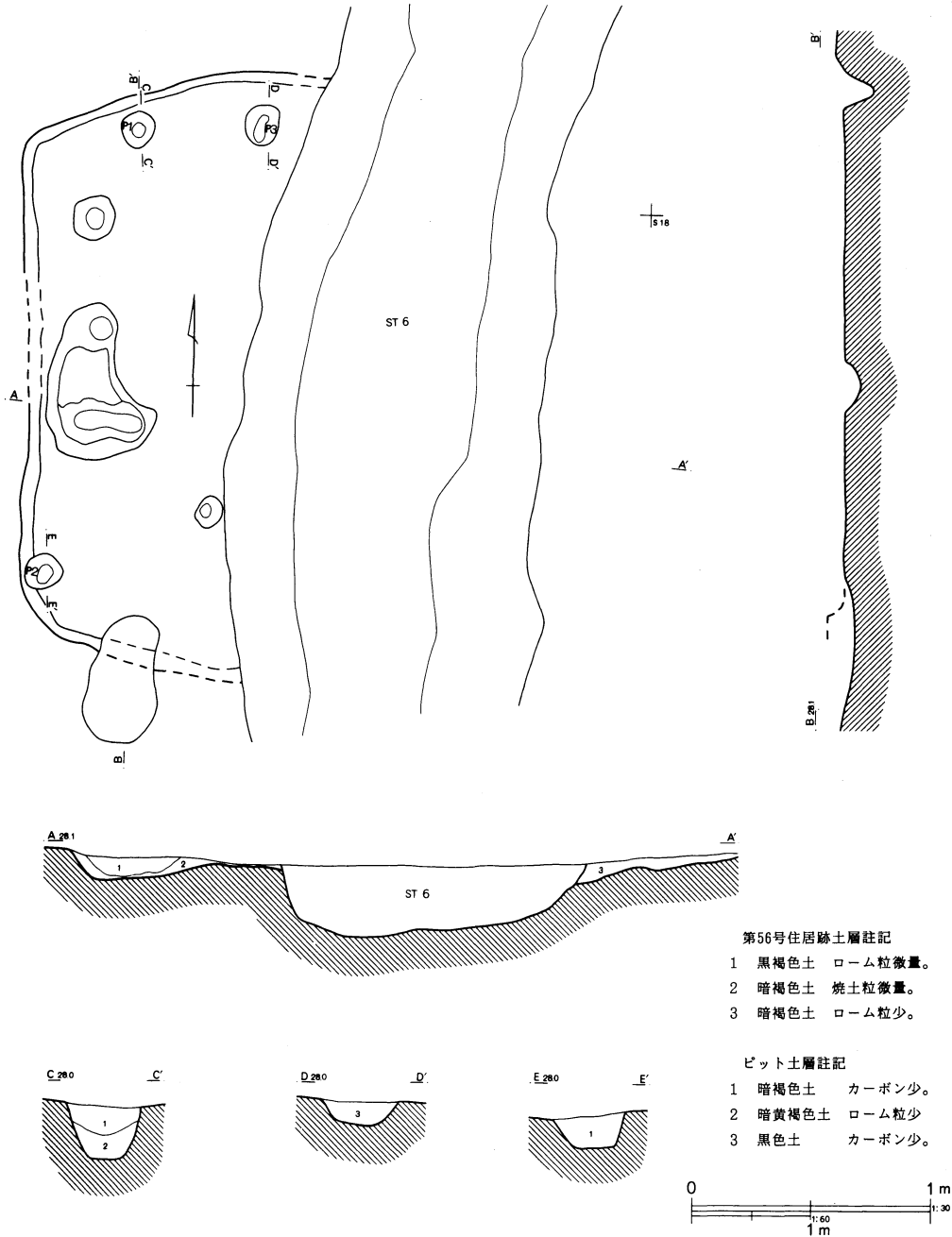
第55号住居跡出土遺物 (第96図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	胴径	(27.7)	胴部：外面はハケ目。内面は上端のみハケ目、以下はヘラナデとナデ。褐色。	A+B+J 胴上半40 焼成：普
		現存高	12.6		
2	壺	口径	(23.3)	胴部：外面は粗いヘラ磨き。内面はヘラナデ。底部：外面はナデ。内面はヘラナデ。底部外面はドーナツ状を呈す。	A+B+I+J 底100 胴下20 焼成：良
		底径	6.5		
		現存高	10.5	器面は摩滅している。褐色。(一部黒色)	
3	甕	口径	(30.2)	口縁部：内外面とも、ハケ目の後横ナデ。外面にスス附着。	A+B+I+J 口20 焼成：普
		現存高	4.1	にぶい黄褐色。	
4	高杯	口径	(19.2)	口縁部：内外面とも、ヘラ磨き。	A+G+J (細密) 口20 焼成：良
		現存高	4.4	赤褐色。	
5	高杯	脚台径	(14.2)	脚台部：外面はヘラ磨き。内面はナデか。坏部：外面はヘラ磨きか。内面は暗文状のヘラ磨きか。器面は摩滅著しい。	A+B+C+E (細密) 脚20底65焼成：普
		現存高	11.2		
6	台付甕	口径	(8.7)	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はナデ。内面はヘラナデ。橙色。	A+B+H+J 口15 胴15 焼成：良
		現存高	4.2		
7	台付甕	口径	(5.7)	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部～脚台部：外面はハケ目の後ナデ。内面上半はヘラナデ。下半は横ナデ、部分的に指頭による圧痕残す。器面はやや荒れている。灰黄褐色。	A+B+J (細密) 口25 胴40 脚95 焼成：普
		胴径	(8.5)		
		脚台径	8.2		
		器高	12.8		
8	手握ね	口径	(5.6)	器面は摩滅著しい。全面ナデ。橙色。	B+G+J (細密) 口25 坏25 底100 焼成：不良
		底径	3.0		
		器高	3.4		
9	土製 勾玉	現存長	3.1	片側からの穿孔と思われる。頭部から尾部へすばまる。	A+B+J 焼成：普
		幅	1.3	断面は楕円形に近い。茶褐色。重さ5.9g。	

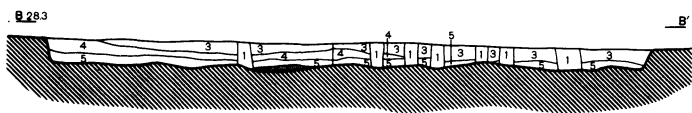
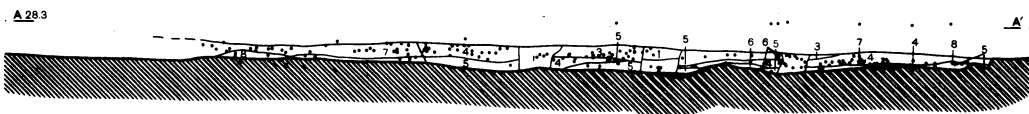
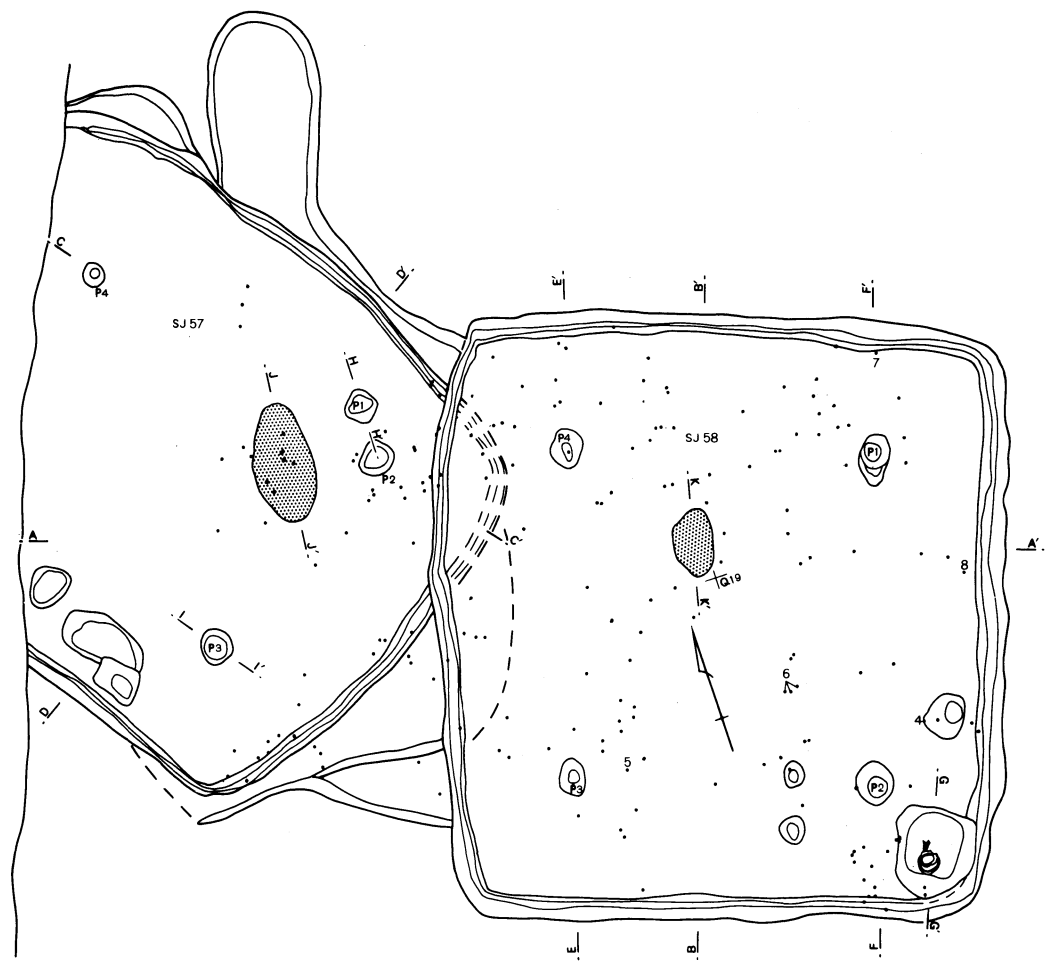
第56号住居跡 (第97図)

第56号住居跡は、R17hグリッドに位置する。北側一部の上位を第16号溝跡に、東側を第6号古墳跡によって切られる。また、南側も土壌に切られており、遺構の遺存度は悪い。南北500cm、確認面からの深さは5cm程である。壁溝は検出されていない。支柱穴・炉跡・貯蔵穴等についても確認されていない。平面形態は、方形または長方形が推定される。

土師器片が僅かに出土したが、図化し得るものはなかった。

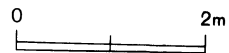


第97図 第56号住居跡

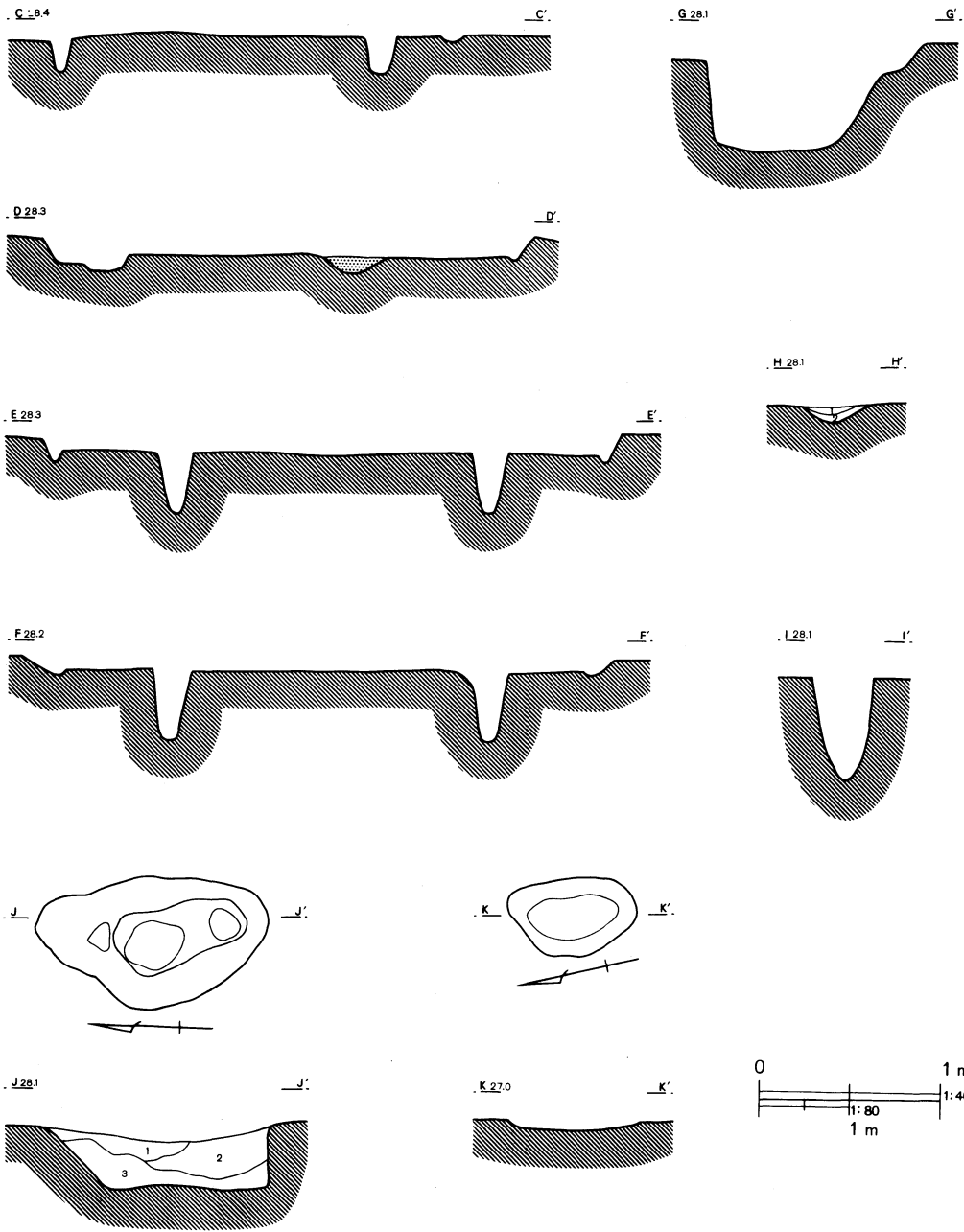


第57・58号住居跡土層註記

- | | | |
|---------|--------|------------------------|
| 1 攪乱 | 6 赤褐色土 | 焼土粒多、カーボン少。しまり強、粘性弱。 |
| 2 攪乱 | 7 黒褐色土 | ローム粒・カーボン少。しまり強、粘性弱。 |
| 3 黒褐色土 | 8 暗褐色土 | ローム粒若干、カーボン少。しまり強、粘性弱。 |
| 4 暗褐色土 | | |
| 5 暗黄褐色土 | | |
- 3 カarbon・ローム粒少。しまり・粘性やや弱。
 4 ローム粒若干、ロームブロック(φ3cm)・カarbon少。しまり・粘性やや弱。
 5 ロームブロック(φ4cm)・ローム粒多。しまり強、粘性弱。



第98図 第57・58号住居跡(1)



第57号住居跡土層註記

- 1 黒色土 カーボン多、ロームブロック（φ 3 cm）・
焼土粒若干。しまり弱、粘性強。
- 2 赤褐色土 焼土ブロック（φ 5 cm）多、カーボン・ロ
ームブロック少。しまり弱、粘性強。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック（φ 3 cm）層中に焼土粒・
カーボン少。しまり弱、粘性強。

ピット土層註記

- H-H' 1 赤味を帯びた赤褐色土 焼土粒・カーボン・ローム粒少
しまり・粘性弱。
- I-I' 2 暗褐色土 ローム粒若干。しまり・粘性弱。

第99図 第57・58号住居跡(2)

第57号住居跡 (第98・99図)

第57号住居跡は、P18eグリッドに位置する。北側で、溝跡もしくは土壌に切られ、東側では第58号住居跡と重複するが、土層観察からでは、本住居跡が切られていると推定された。この他に南側で、住居跡と思われる遺構 (第98図 破線部分) と重複している。西側は調査範囲外へと続いている。

平面規模は短軸560cmで、コーナー部分がやや丸味をもつ方形または長方形を呈すと推定される。確認面からの深さは20cmを測る。主軸方向は、N-153° -Eを指し、N-20° -Eを指す第58号住居跡とは大きく異なる。確認し得た範囲内において、壁面は緩やかではあるが、直線的に立ち上がる。

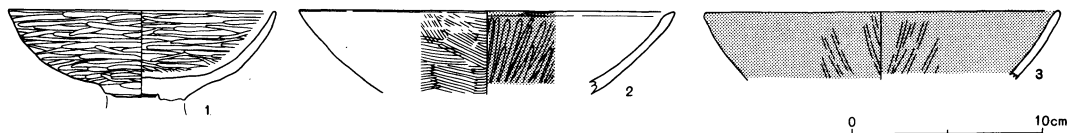
P2・P3・P4が、支柱穴と推定される。各支柱穴間の距離は、P2-P3間で264cm・P2-P4間で360cmを測り、規則正しい配置と表現できよう。確認面からの深さは、P2で30cm・P3で85cm・P4で25cmを測り全体的に浅いものである。支柱穴を結んだ線より内側、南東寄りに偏った位置から炉跡が1箇所検出された。平面規模は128cm×72cmを測り、平面楕円形、床面からの深さは56cmである。貼床面は、ロームブロックの割合が少ないためか黒色がかっており、明瞭さを欠く。しかし、床面自体は、ある程度の硬度をもっていた。

壁溝は、全周すると推定される。貯蔵穴については、検出されなかった。以上の他に、土壌1基・ピット2基が検出されているが、本住居跡の貼床面が不明瞭なため、これらとの切り合い関係については判断できなかった。

遺物は幾つか出土しているが、図化し得たのは3点のみであった。

第57号住居跡出土遺物 (第100図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	高 坏	口 径 現存高	13.9 4.7	坏部：内外面ともヘラ磨き。橙色。	A+B+D+E+J □70 坏75 焼成：良
2	高 坏	口 径 現存高	(19.8) 4.3	口縁部：外面はハケ目の後、粗い横ナデ。内面はヘラ磨き。 外部は黒色。内部は赤褐色。	A+B+I+J 坏35 焼成：普
3	高 坏	口 径 現存高	(18.5) 3.5	内外面ともヘラ磨き。器面は摩滅著しい。	A+B+D+H+J □45 焼成：普



第100図 第57号住居跡出土遺物

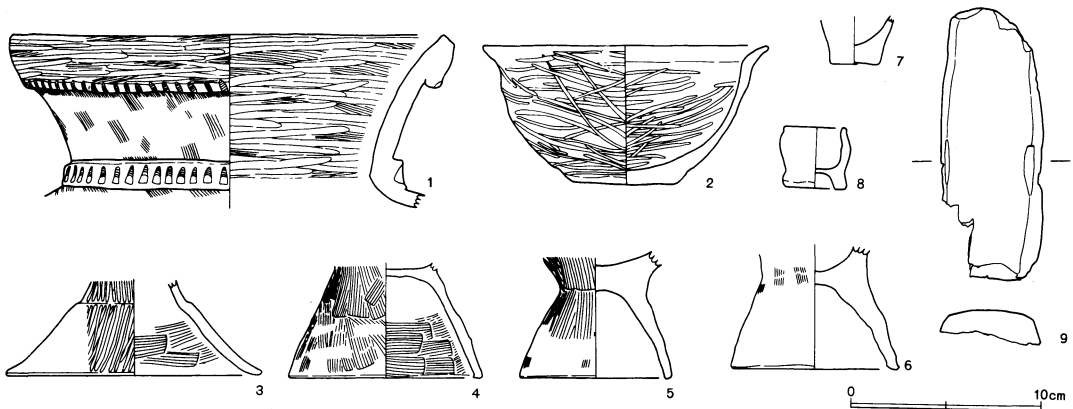
第58号住居跡 (第98・99図)

第58号住居跡は、P18 i グリッドに位置する。西側で第57号住居跡と重複するが、調査時における土層観察からでは、本住居跡が切っていると推定された。なおこの他にもう1箇所、住居跡と覚しき遺構 (第98図 破線部分) と重複しているのが確認されているが、本住居跡及び第57号住居跡との新旧関係については、判別できなかった。

平面規模は、長軸640cm・短軸600cmを測り、略方形を呈す。確認面からの深さは24cmを測り、本遺跡においては、遺存状況の良い部類に含まれる住居跡である。主軸方向は、N-20° -Eを指し、N-153° -Eを指す第57号住居跡とは大きく異なる。

壁溝は、全周する。壁面は比較的垂直に近い状態で、直線的に立ち上がる。主柱穴4基 (第58号住居跡P1~P4) が、検出されている。各主柱穴間の距離は、P1-P2間で344cm・P2-P3間で320cm・P3-P4間で344cm・P4-P1間で320cmを測り、非常に規則正しく配置されている。各主柱穴の確認面からの深さは、P1で55cm・P2で60cm・P3で50cm・P4で50cmを測り、深さ・形状共に均一的で、しっかりしたものである。主柱穴を結んだ線より内側、北寄りに炉跡が検出された。平面規模は72cm×42cmを測り、平面楕円形、床面からの深さは4cmである。南東コーナーに貯蔵穴が検出された。平面規模は92cm×80cmを測り、平面略円形、床面からの深さは48cmである。

遺物は多数出土しているが、図化し得たものは、石製品1点を含めて計9点である。



第101図 第58号住居跡出土遺物

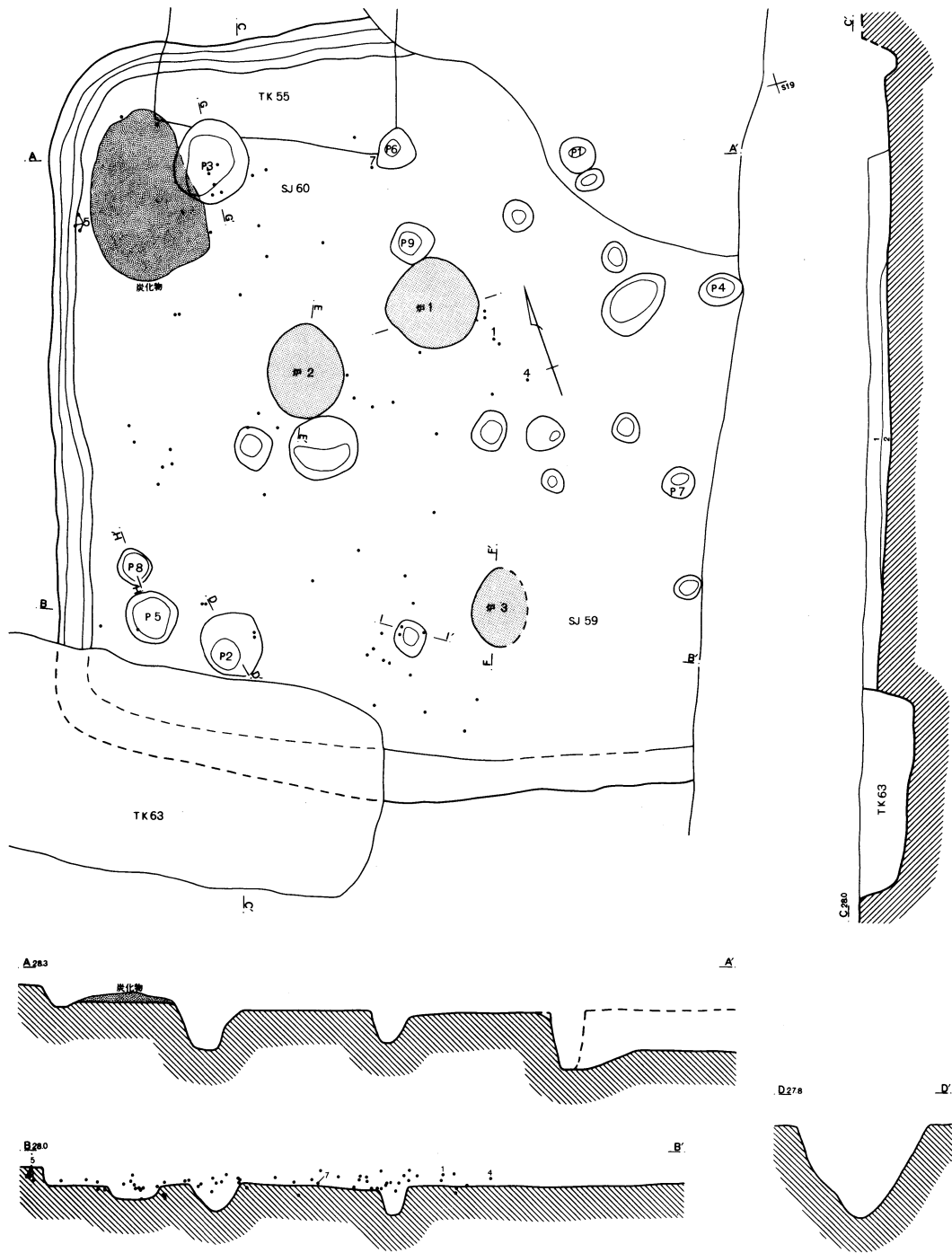
第58号住居跡出土遺物 (第101図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	口径 22.4 現存高 9.0	口縁部：内外面ともハケ目の後横ナデ。頸部：外面はハケ目の後ナデ。内面はハケ目の後、粗いヘラ磨き。橙色 (一部黒色)。	A+B+E+J □100 焼成：良
2	碗	口径 (14.8) 底径 5.5 器高 7.2	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：内外面とも、非常に粗いヘラ磨き。底部：外面はヘラ削り。内面はナデ。橙色。	B+C+H (多)+J □25 坏30 底100 焼成：普

3	高 坏	脚台径 (13.3) 現存高 5.0	外面はヘラ磨き。内面はハケ目とナデ。赤褐色。	A+D+E+J 脚25 焼成：普
4	台付甕	脚台径 (9.9) 現存高 6.0	脚台部：外面はハケ目の後、粗いナデ。内面は上半ナデ、下半ハケ目。底部内面はナデ。橙色。	A+B+D+H 脚40 焼成：普
5	台付甕	脚台径 8 現存高 6.6	脚台部：外面はハケ目の後粗いナデ。内面はナデ。底部内面はヘラナデ。橙色。	A+B+C+E 底70 焼成：普
6	台付甕	脚台径 8.6 現存高 6.4	脚台部：外面はハケ目の後ナデ。内面は粗いナデ。底部：粗いナデ。橙色（一部黒色）。	B+C+H+J 脚65 焼成：良
7	手捏ね	底 径 2.7 現存高 2.6	全面：ナデ。明橙色、底部黒色。	A+B+E 胴下半100 焼成：普
8	手捏ね	口 径 3 底 径 3.1 器 高 3.2	内外面ともナデ。明赤褐色。	A+B+D+G ほぼ完形 焼成：普
9	砥 石	長 さ 14.2 幅 5.2 厚 さ 1.8	上・下面に自然面を残し、裏面に欠損、残る3面を使用する。使用面は滑らか。現存重量188.9g	凝灰岩製

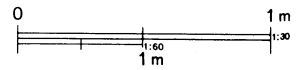
第59号住居跡（第102・103図）

第59号・第60号住居跡は、R19bグリッドに位置する。北側を、中近世土壌55と第6号古墳跡に切られる。東側は調査範囲外に続き、南側については中近世土壌63によって切られている。本住居跡の南辺は、全体的に遺存状態が悪いといえる。残念なことに実測図（第102図）では、1軒の住居跡としてしかプランの表現ができず、その範囲内に2軒分のピットが図化されているという状態である。調査時において、上位から覆土を掘り下げていく過程で、粘土を用いた炉跡の一部が検出され、さらにその下位から別の住居跡（＝第102図に表現されているプラン）が検出された。そこで、上位の住居跡を第59号住居跡、下位を第60号住居跡とした。調査の終了間際で2軒存在すると判明したため、遺物の取り上げについては、その大部分が1軒分として取り上げられる結果となってしまった。そこで、図化し得る遺物については、第59号・第60号住居跡出土遺物（第104図）として、一緒に版組を行った。当初、第60号住居跡とほぼ類似した平面規模・形態を想定して調査に入り、その過程で第59号住居跡の炉跡の一部が検出された。このことから第59号住居跡は、既に壁面や床面の殆どが失われており、第60号住居跡とまったく異なる平面規模であっても、確認できなかったと判断したい。仮に両住居跡の平面規模・形態が、ほぼ同様であったと仮定した場合、支柱穴の位置についても近いと推察される。しかし、P1～P3を第60号住居跡の支柱穴と推定したが、これと類似した配列を示すピットは得られない。可能性として、P4～P6（残る1箇所は住居跡南の土壌内か）、あるいはP7～P9（残る1箇所は中近世土壌63内か）を想定してみたが、確定するには至らなかった。いずれにしても、第60号住居跡とは平面規模・形態を異にしていると考えられる。あくまでも参考として、仮定の支柱穴からの数値を出してみたい。P4～P6間で315cm・P6～P5間で460cmを測り、P7～P9間では315cm・P9～P8間では365cmを測る。主軸方向は、前者ではN-37°-Eを指し、後者ではN-58°-Eを指す。第60号住居跡は、南北682

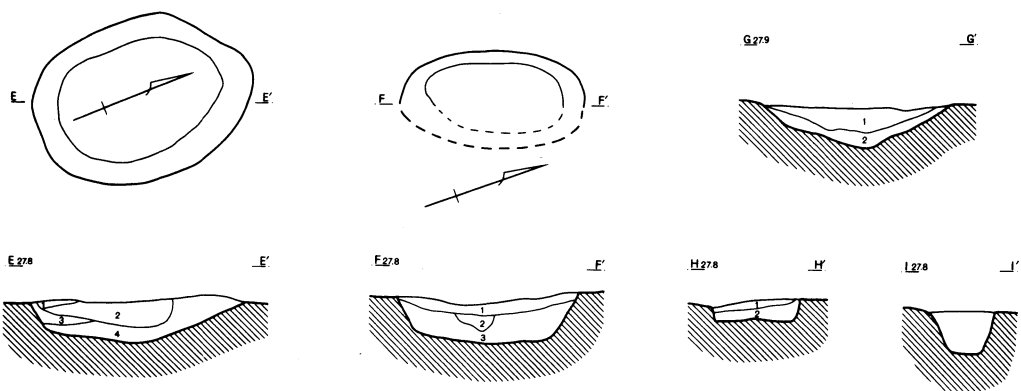


第59号住居跡土層註記

- 1 黒褐色土 ロームブロック (φ 4 cm) ・ローム粒若干。しまり・粘性やや弱。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック (φ 2 cm) ・ローム粒非常に多。しまり・粘性やや弱。



第102図 第59・60号住居跡(1)



第59号住居跡土層註記 1・2共通

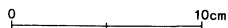
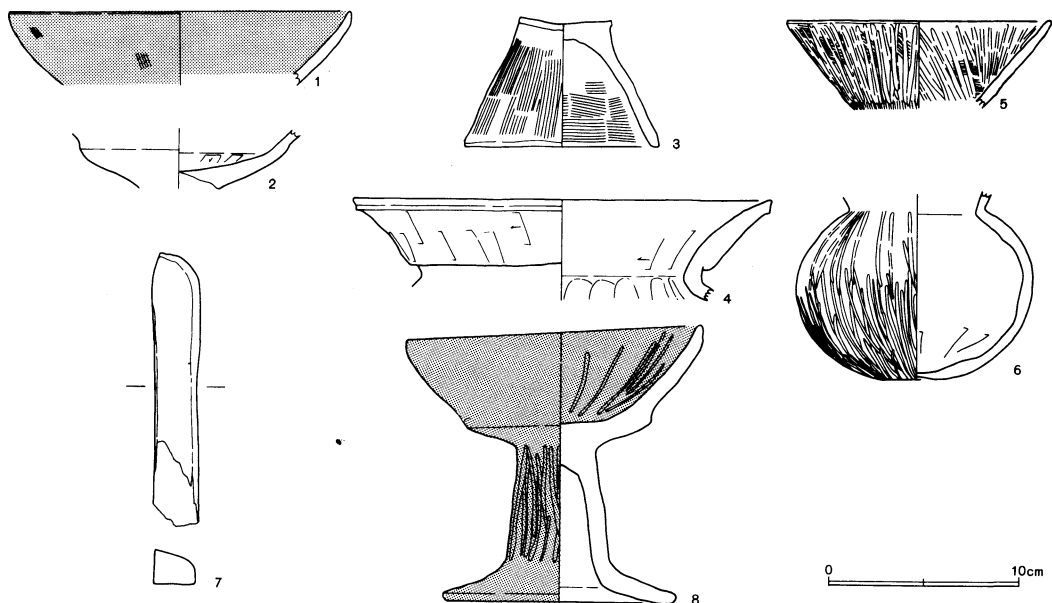
- 1 青灰色土 焼土ブロック(φ3cm)多、ローム粒少。
しまり・粘性強。
- 2 赤褐色土 焼土ブロック(φ5cm)多、カーボン少。
- 3 暗褐色土 ロームブロック(φ1cm)・カーボン若干。
しまり・粘性やや弱。
- 4 暗黄褐色土 ロームブロック(φ5cm)多。しまり・粘
性やや弱。

ピット土層註記

- 1・2共通
- 1 黒褐色土 カーボン・ローム粒少。しまり・粘性やや弱。
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒若干。しまりやや
強、粘性やや弱。
- 3・4共通
- 1 黒褐色土 ローム粒・カーボン微量。しまり・粘性弱。
- 2 暗褐色土 ローム粒若干。しまり・粘性やや弱。



第103図 第59・60号住居跡(2)



第104図 第59号住居跡出土遺物

第59号住居跡出土遺物 (第104図)

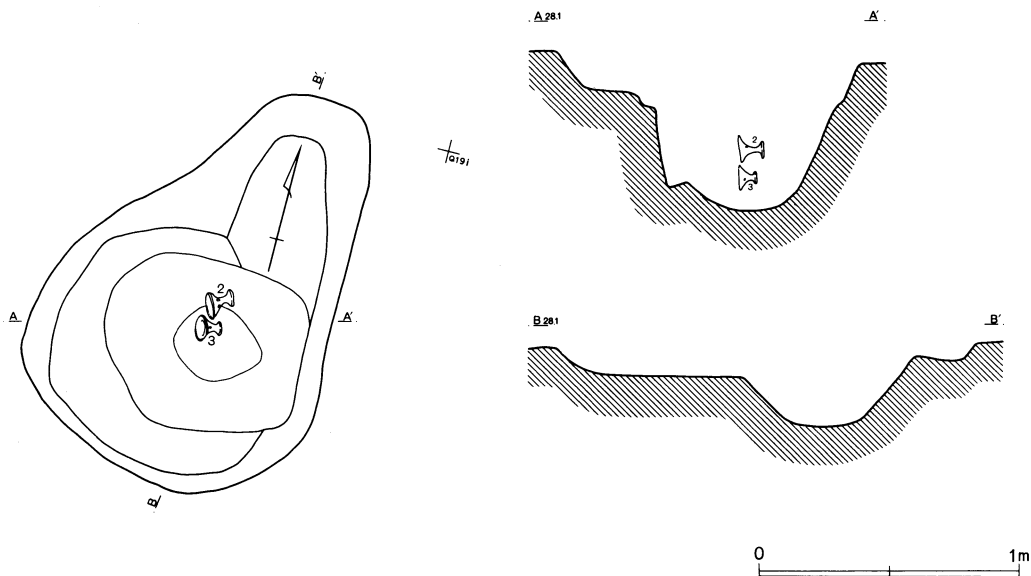
番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	高 坏	口 径	(18.0)	口縁部：外面はハケ目の後、横ナデ。内面は横ナデ。	A+B+H+J(多)
		現存高	3.9	茶褐色。	□20 焼成：良
2	高 坏	現存高	3.1	坏部：内外面ともナデか。底部：内面はヘラナデか。	A+B+E+H
				器面は摩滅している。橙色。	焼成：普
3	台付甕	脚台径	10.2	外面：ハケ目。内面：上半ナデ、下半ハケ目。	A+B+J 脚90
		現存高	6.6	赤褐色。	焼成：良
4	壺	口 径	21.8	口縁部：内外面ともヘラナデの後横ナデ。頸部：内面は指頭による押え。黄橙色（一部黒斑）。	A+B+C+I □100
		現存高	5.2		焼成：良
5	小型壺	口 径	(13.7)	口縁部：内外面ともハケ目の後ヘラ磨き。	A+B+G+J □55
		現存高	4.5	黄褐色。	焼成：良
6	壺	胴 径	12.3	胴部：外面上半は粗いヘラ磨き、下半は丁寧なヘラ磨き。	B+C+D+H
		底 径	3.2	外面は赤彩。内面上半はナデ、下半はヘラナデの後ナデか。	胴・底100
		現存高	9.8	底部：ヘラ磨き。明赤褐色。	焼成：良
7	砥 石	長 さ	14.4	下部を欠損する。4面を使用するが裏面はやや表面が粗い。	緑泥片岩
		幅	2.6	側面に条線が走る。転用品か。現存重量102.5g。	
		厚 さ	1.8		
8	高 坏	口 径	15.3	口縁部：内外面とも横ナデの後、内面を暗文状のヘラ磨き。	A+B+C+E(細密)
		底 径	11.8	柱状部：外面はヘラ磨き。内面は絞り目を残す。裾部：内外面とも横ナデ。赤橙色。	□80 脚60
		器 高	14		焼成：良

cm、平面形態はコーナー部分がやや丸味を帯びる方形、または長方形を呈すと考えられる。確認面からの深さは15cmを測る。P1～P3を支柱穴と推定したが、その場合主軸方向は、N-18° -Eを指す。各支柱穴間の距離は、P1-P3間で320cm・P2-P3間で450cmを測る。各柱穴の確認面からの深さは、P1が45cm・P2が80cm・P3が40cmとなる。

炉跡が3箇所で見出された。炉1は、75cm×75cmの略円形、深さは15cm。炉2は、85cm×61cmの楕円形、深さは17cm。炉3は、短軸71cmの楕円形か、深さは17cm。壁溝南側部分・貯蔵穴は見出されていない。その他のピットの、両住居跡との関連は不明。第60号住居跡の床面は非常に堅固であり、壁面も直線的に立ち上がる。出土した遺物の内で、図化し得た遺物は、石製品を含め計8点であるが、2・8は第59号住居跡に伴うものであろうか。

第61号住居跡 (第102・106図)

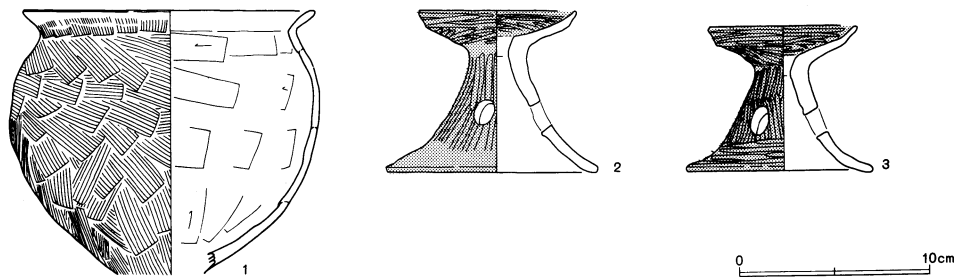
第61号住居跡は、Q19hグリッドに位置する。貯蔵穴のみの検出である。周辺に、床面の痕跡と覚しき硬化した箇所が僅かに検出されたが、遺構の範囲をとらえるまでには至らなかった。一部攪乱を受けており、平面規模は115cm×100cmの略円形、深さは60cm。遺物の出土は3点である。



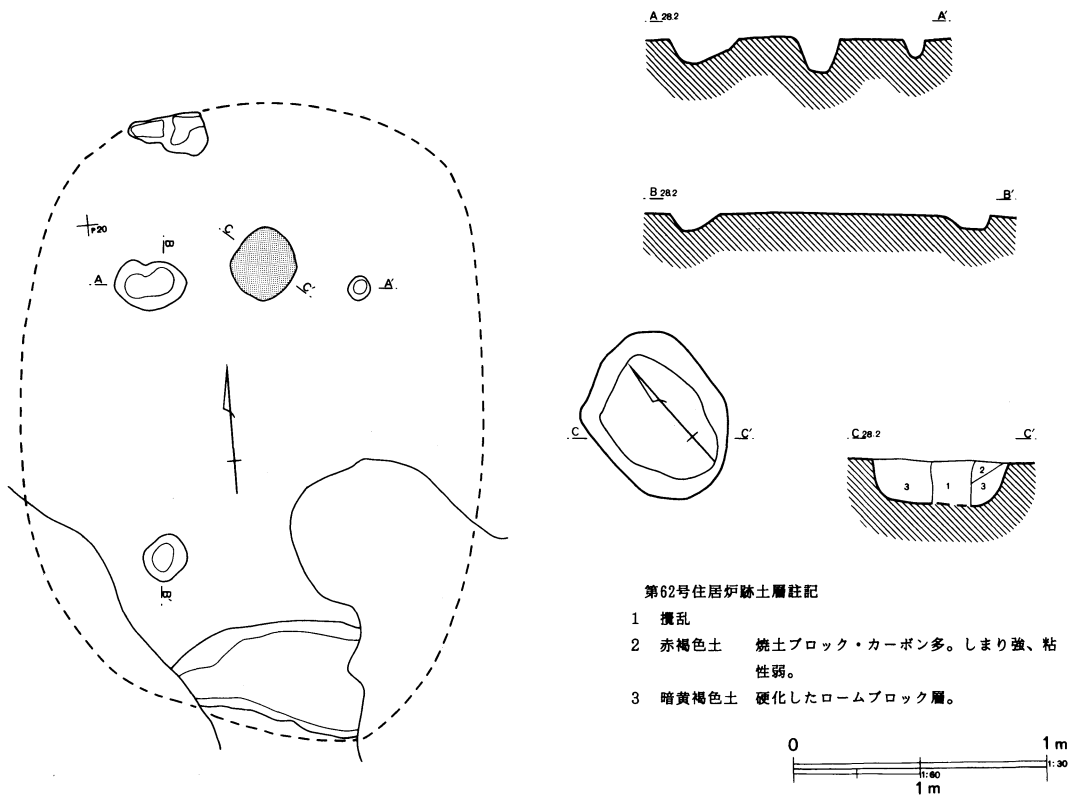
第105図 第61号住居跡

第61号住居跡出土遺物 (第106図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径 (15.1) 現存高 13.7	口縁部：外面はハケ目の後、内外面とも横ナデ。胴部：外面はハケ目。内面はヘラナデ。褐色。	A+B+H+J 口10 胴45 焼成：良
2	器台	口径 8.1 脚台径 11 器高 8.4	坏部：内外面ともヘラ磨き。脚台部：外面はヘラ磨きの後裾部を横ナデ。内面はナデ。穿孔3。赤色。	A+B+H 坏90 脚95 焼成：良
3	器台	口径 7.7 脚台径 9.7 器高 7.5	口縁部：内外面とも横ナデの後、ヘラ磨き。坏部：内外面ともヘラ磨き。脚台部：裾部内外面とも横ナデの後、外面はヘラ磨き。内面はナデ。穿孔3。赤褐色。	A+B+E+G (細密) 口75 坏100 脚100 焼成：良



第106図 第61号住居跡出土遺物



第107図 第62号住居跡

第62号住居跡 (第107図)

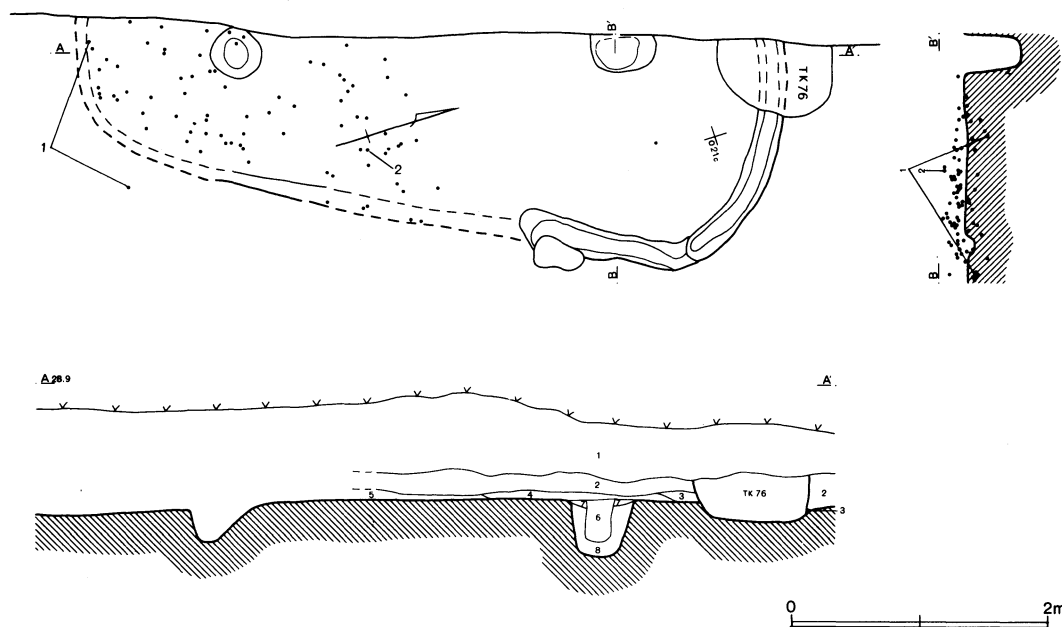
第62号住居跡は、O19 i グリッドに位置する。南側を、土壌や第8号古墳跡に切られている。その他の部分についても遺存状態は非常に悪く、北側で壁溝の一部、南側で掘り方の一部が検出され、遺構の概略規模・形態が窺えるのみである。平面規模は長軸495cm・短軸370cmが推定され、平面形態は隅丸の長方形であろうか。主軸方向は、N-6°-Eか。主柱穴と覚しきピット3箇所が検出された。ピット間の距離は、南北215cm・東西155cmを測る。深さについては、北東のものから時計回りに、15cm・10cm・20cmである。ピットを結ぶ線上よりやや北寄りに炉跡が検出されている。

遺物の出土はなかった。

第63号住居跡 (第108図)

第63号住居跡は、O21 b グリッドに位置する。北側を中近世土壌76に切れ、東側から南側の壁面の多くを、耕作土により失われている。遺構の大部分は、西側の調査範囲外に続く。確認面からの深さは25cmを測り、平面形態は隅丸の方形または長方形が推定される。主柱穴と思われるピットが2基検出されており、ピット間の距離は300cm、床面からの深さは50cm・25cmを測る。主軸方向はN-18°-Eを指すと考えられる。調査範囲内では、一部壁溝が途切れる。

出土した遺物の内、図化し得たのは僅かに2点であった。



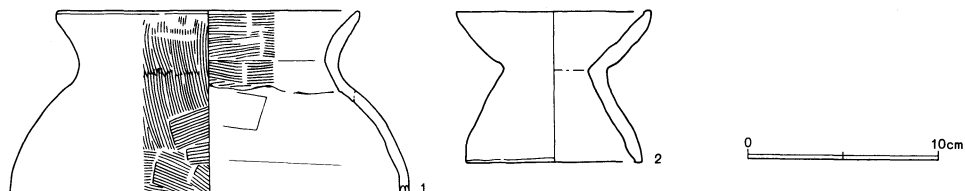
第63号住居跡土層註記

- | | | | |
|---------|-------------------------------|---------|----------------------|
| 1 表土 | 耕作土。 | 4 黒褐色土 | 第2層に類似。焼土粒多。 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒・ロームブロック・焼土粒・カーボン若干。しまり強。 | 5 黒褐色土 | ローム粒含有多。 |
| 3 明赤褐色土 | 焼土ブロック、焼土粒を主体とする層、黒褐色土を混入。 | 6 黒褐色土 | ロームを主体とする層、7層よりしまり弱。 |
| | | 7 黒褐色土 | ロームを主体とする層。 |
| | | 8 暗黄褐色土 | 黒色土が6・7層より多。 |

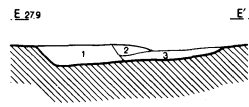
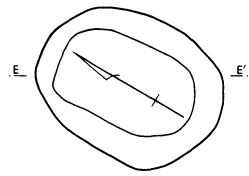
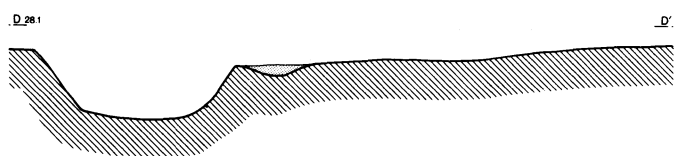
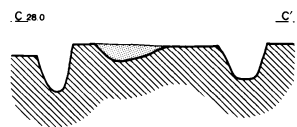
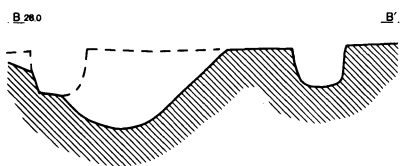
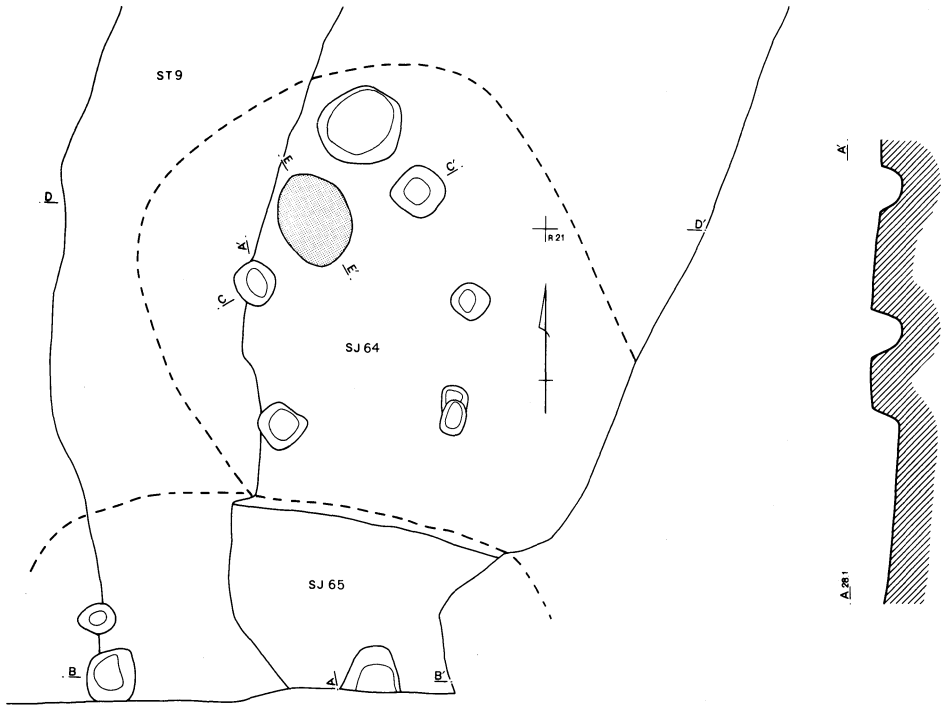
第108図 第63号住居跡

第63号住居跡出土遺物 (第109図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径 (16.0) 現存高 9.5	口縁部：内外面ともハケ目の後、粗い横ナデ。胴部：外面はハケ目。内面はヘラナデとナデ。外部：黒色。内部：暗褐色。	A+B+F+J 口径25 胴上20 焼成：良
2	器台	口径 10 底径 9.2 器高 7.8	内外面とも、全面に粗いナデ。整形は雑。橙色。	A+B+C+D+H+J 完形 焼成：普

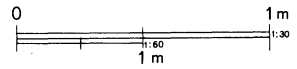


09図 第63号住居跡出土遺物



第64号住居跡土層註記

- 1 攪乱
- 2 暗赤褐色土 焼土粒・カーボン若干。しまり強、粘性弱。
- 3 暗黄褐色土 硬化したロームブロック層。しまり強、粘性弱。



第110図 第64・65号住居跡

第64号住居跡（第110図）

第64号住居跡は、Q21cグリッドに位置する。南側で第65号住居跡と重複するが、新旧関係については不明。西側から北側を、第9号古墳跡に切られている。遺構の遺存度は非常に悪く、平面規模・形態についても不明である。床面についても既に失われており、炉跡の下部面と支柱穴と覚しきピットが確認されたのみである。エレベーションC-C'で支柱穴を想定すると、ピット間の距離は150cmを測り、確認面からの深さは20cm・25cmを測る。主軸方向は、N-29°-Wを指すと考えられる。炉跡は、平面規模74cm×56cmの平面楕円形、深さ18cmを測る。

遺物は出土していない。

第65号住居跡（第110図）

第65号住居跡は、Q21fグリッドに位置する。北側で第64号住居跡と重複するが、新旧関係は不明。東側は調査範囲外に続き、南側については水道管によって攪乱されている。西側については、第9号古墳跡に切られている。遺存状況は非常に悪く、僅かに壁面の一部と、支柱穴と思われるピット2箇所が検出されたのみである。エレベーションB-B'で支柱穴を想定すると、ピット間の距離は215cmを測り、確認面からの深さは33cm・32cmを測る。主軸方向は、N-90°-WまたはN-90°-Eを指すと考えられる。

少数の土器片が出土しているが、いずれも図化し得るものではなかった。

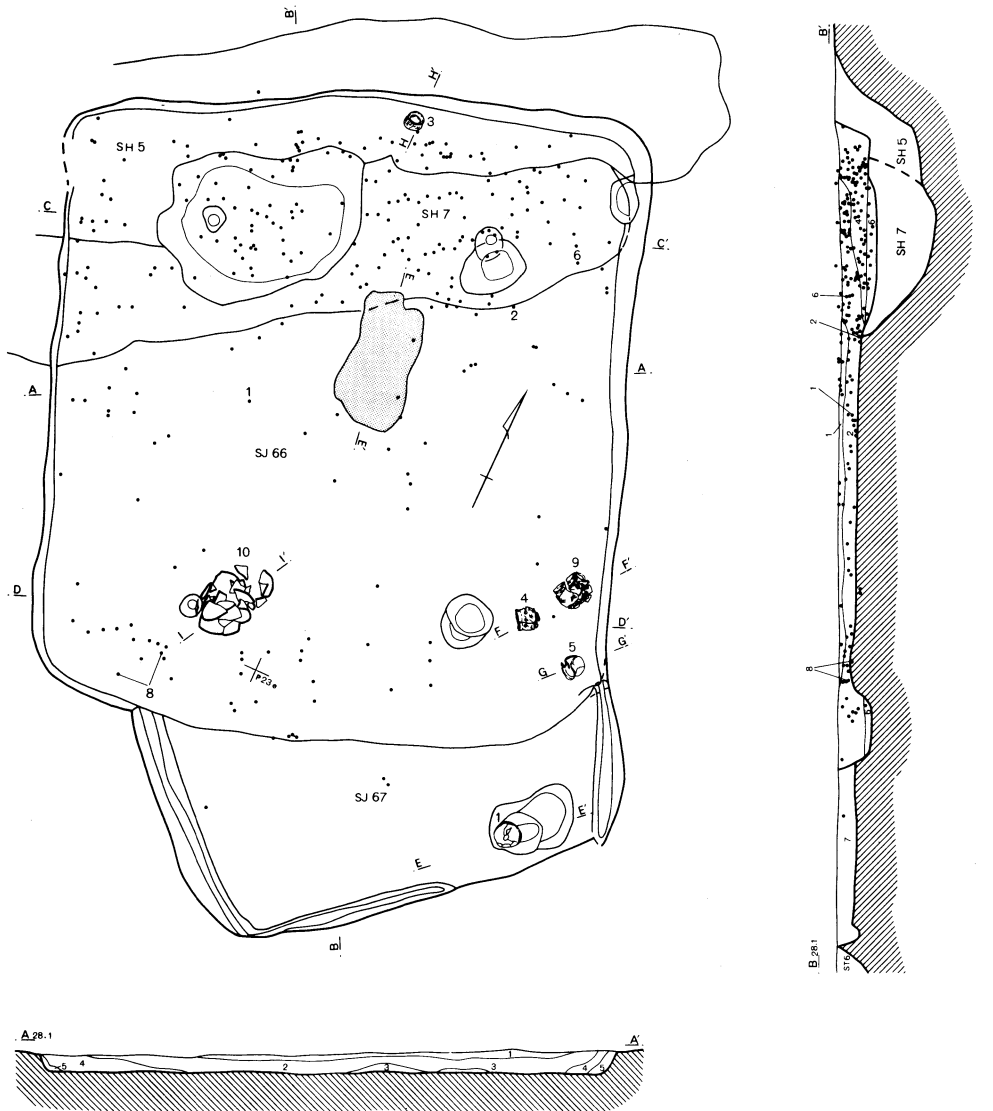
第66号住居跡（第111・112図）

第66号住居跡は、P23aグリッドに位置する。北側で第5号・第7号方形周溝墓を切り、南側では第67号住居跡を切っている。確認面からの深さは15cmと浅くはあるが、遺存状況は比較的良好な部類に含まれるといえよう。

本住居跡の床面は、第5号・第7号方形周溝墓にのった状態で、貼床されている。比較的堅固で明確なものであり、平坦であった。なお貼床面のレベルは、先行する第67号住居跡とほぼ同様である。平面規模は、長軸521cm・短軸460cmを測り、コーナー部分がやや丸味を帯びる長方形を呈す。主軸方向はN-21°-Wを指し、先行する第67号住居跡の主軸方向N-43°-Wとはややずれる。

検出し得た壁面は、緩やかな立ち上がりではあるが、直線的なものである。壁溝はもたない。支柱穴が4箇所検出された。各支柱穴間の距離は、長軸方向が280cm・304cm、短軸方向が220cm・222cmを測り、長方形に整然と配置されている。各支柱穴の、床面からの深さは北東部のものから時計回りに、56cm・59cm・56cm・42cmを測り、しっかりとした明瞭なものである。

貯蔵穴は確認されていない。支柱穴4箇所と、支柱穴を結んだ線の内側、やや北寄りに炉跡が1箇所検出された。平面規模は110cm×56cmの長楕円形を呈し、床面からの深さは14cmを測り、遺存状態も良好であった。東側2箇所の支柱穴は、それぞれ別個のピットに切られている。あるいは、柱材の抜き取り痕であろうか。本住居跡では、多数の遺物が出土しており、床面直上からのものも数多くがある。それ等の中には、良好な遺存状況で出土している土器があった。北側壁面近くから甕（3＝ほぼ完形）が、南東コーナー付近からは甕2点（4＝完形に近い・5＝ほぼ完形）と台付甕（9＝脚台部を欠く）が、南西の支柱穴脇からは、外面に「カゴ目」を残す大型の壺が、土圧で押し潰された状態で検出された。



第66・67号住居跡土層註記

A-A' B-B' 共通

- 1 黒褐色土 第2層より黒色が強く、ローム粒・焼土粒、炭化物を若干含む。
- 2 黒褐色土 第1層に比してローム粒の含有多、ロームブロック若干、焼土粒・炭化物1層より多。
- 3 黒色土 黒色強く、炭化物多、ローム粒・焼土粒含有。
- 4 黒褐色土 第2層に類似。ローム粒少、壁際に焼土粒多。
- 5 黄褐色土 壁の崩落ロームを主体とする層。
- 6 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒若干。しまり強。

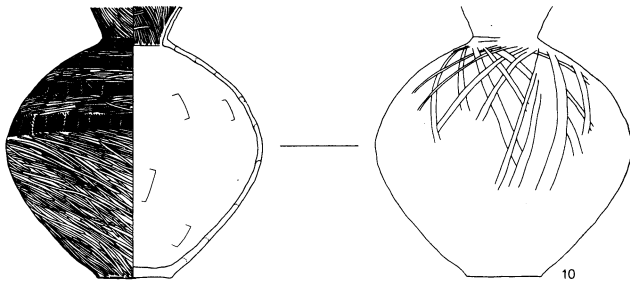
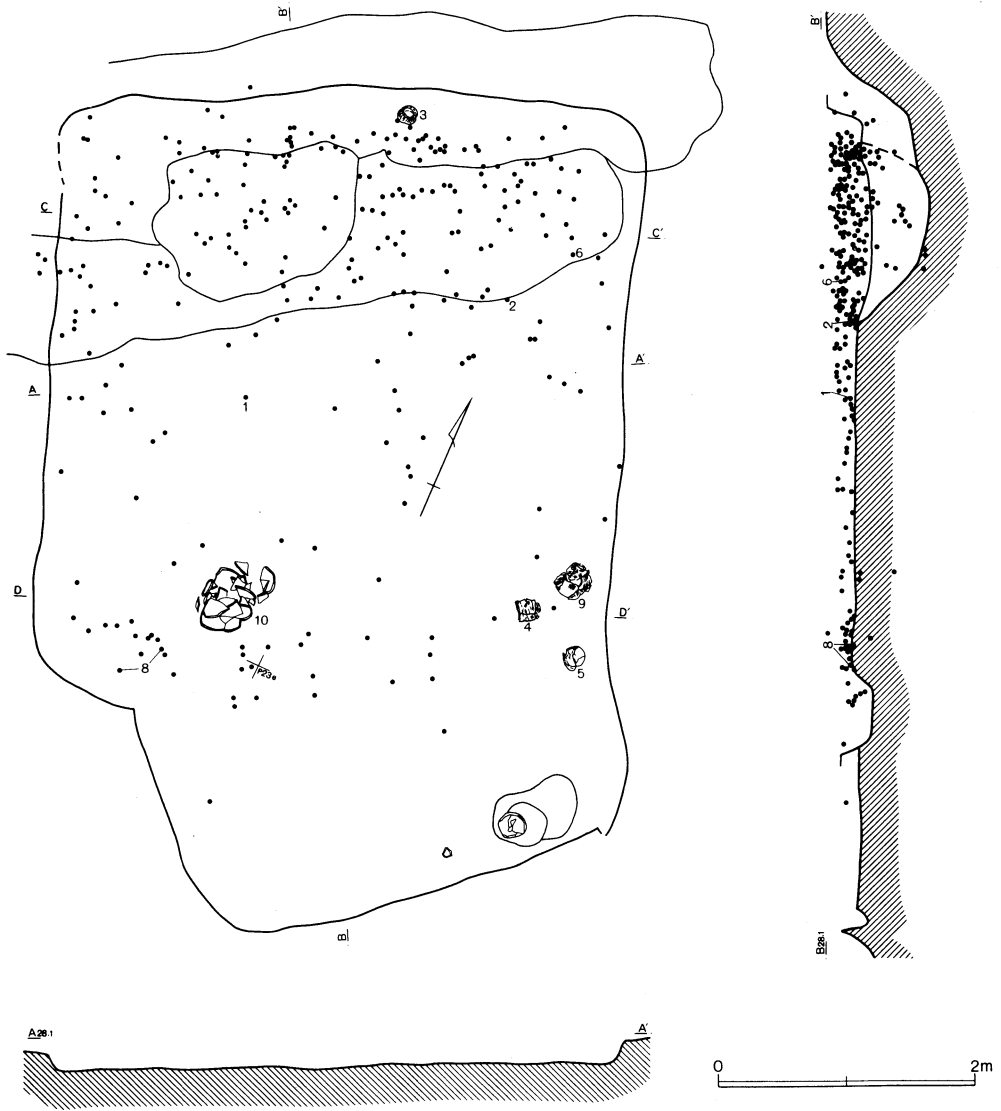
- 7 黒褐色土 粒子の粗い層、ローム粒・ロームブロック多、焼土粒・炭化物少。

第66号住居跡土層註記

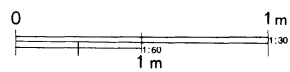
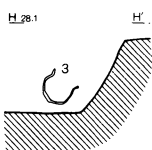
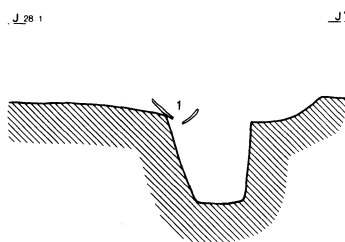
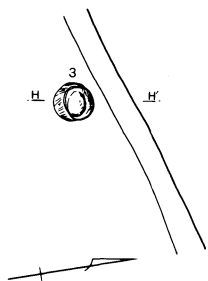
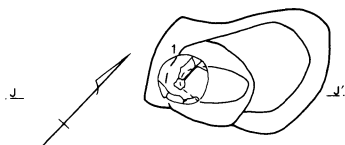
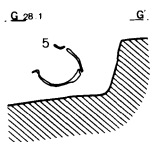
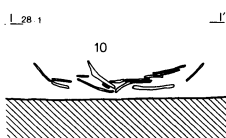
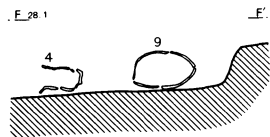
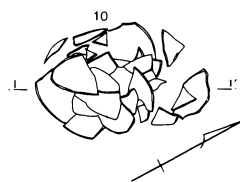
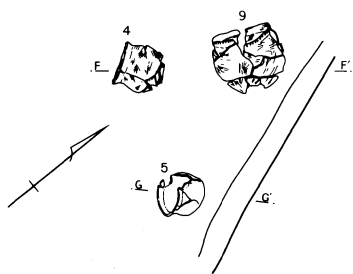
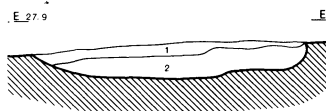
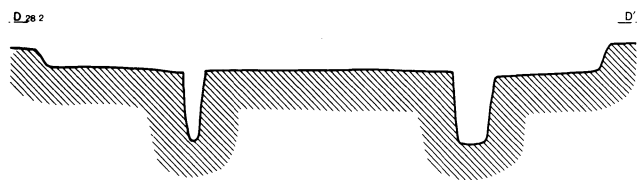
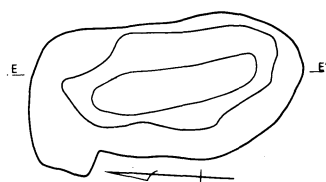
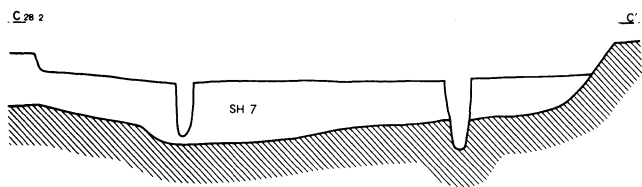
- 1 黒褐色土 ロームブロック若干、ローム粒・焼土粒少
南側に炭化物多。
- 2 赤褐色土 焼土粒多、カーボン若干。

0 2m

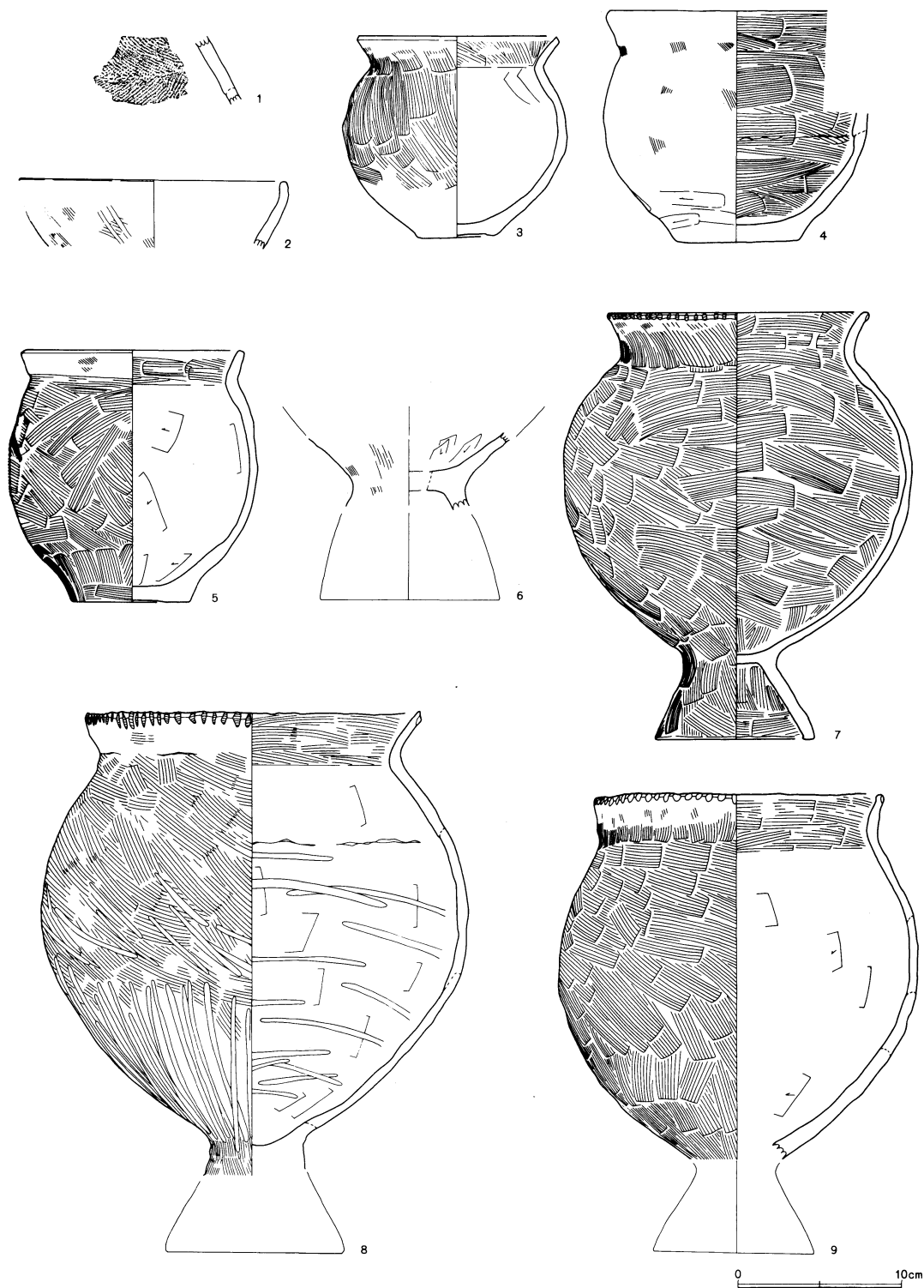
第111図 第66・67号住居跡(1)



第112图 第66・67号住居跡(2)



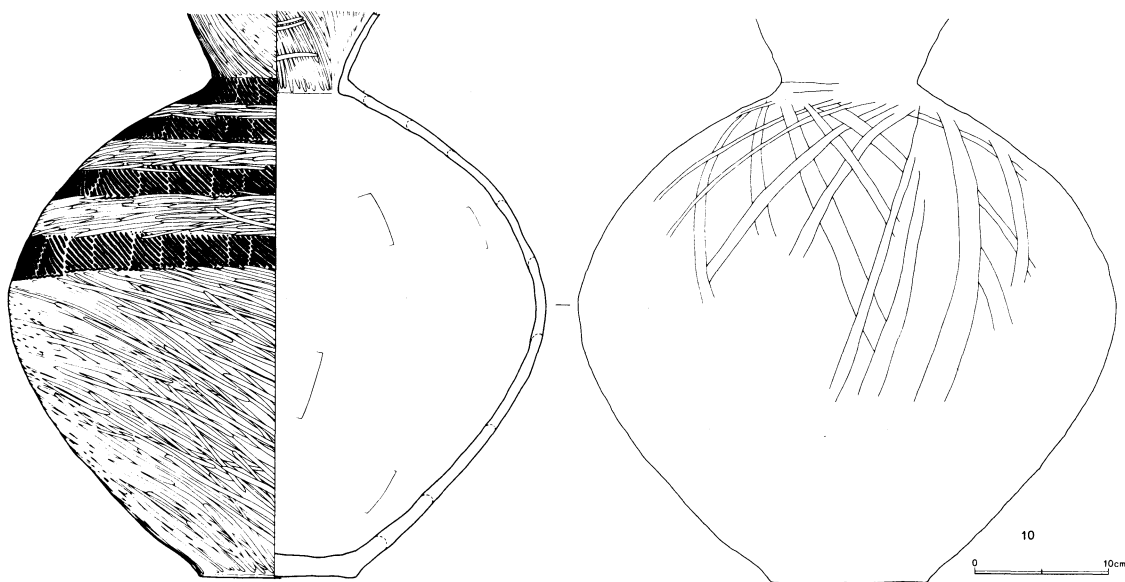
第113图 第66·67号住居跡(3)



第114图 第66号住居跡出土遺物(1)

第66号住居跡出土遺物 (第114・115図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	現存高	3.7	外面上位からRL縄文-S字結接文-LR縄文を施す。褐色。	B+I+J 焼成：普
2	高 坏	口 径 現存高	(16.4) 4.1	口縁部：内外面とも横ナデ。坏部：外面はハケ目の後ヘラ磨きか。内面はナデ。口縁はやや内彎ぎみに開く。器面は荒れている。橙褐色。	A+I+J 口20 焼成：良
3	甕	口 径 胴 径 底 径 器 高	12 13.7 4.9 12.2	口縁部：ハケ目の後ナデ。胴部：外面はハケ目。内面はナデ。底部：内外面ともナデ。黒褐色。	A+B+C+D+F+H 口100 胴95 底98 焼成：良
4	甕	口 径 胴 径 底 径 器 高	15.8 16.1 7.5 14	口縁部：外面はハケ目の後、横ナデか。内面はハケ目の後粗い横ナデ。胴部：外面はハケ目の後ナデか。下位は一部粗いヘラ削り。内面はハケ目。底部：外面はヘラ削り、内面はナデ。黒褐色。	A+B+C+H 口70 胴85 底100 焼成：普
5	甕	口 径 胴 径 底 径 器 高	13.7 15.4 7.2 15.4	口縁部：内外面ともハケ目の後、粗い横ナデ。胴部：外面はハケ目。胴部内面～底部内面はヘラナデ。底部：外面はナデ。明褐色。	A+B+C+H ほぼ完形 焼成：普
6	台付甕	現存高	4.4	胴部：外面はハケ目の後ナデ。内面はヘラナデとナデ。脚台部：内面はナデ。	A+E+J 焼成：普



第115図 第66号住居跡出土遺物(2)

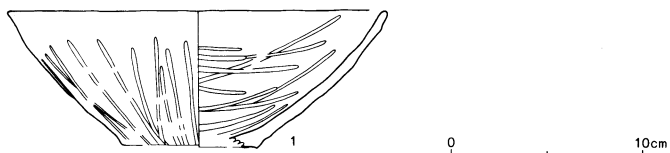
7	台付甕	口径 15.6 胴径 (21.2) 脚台径 9.6 器高 26.0	外面全体的にススが付着。胴部内面下位に炭化物付着。 口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデ。 胴部・脚台部：内外面ともハケ目。口縁部に木口状工具による刻み目。褐色（一部黒色）。	B+C+G 口95 胴45 脚80 焼成：やや良
8	台付甕	口径 20.2 胴径 (26.0) 現存高 28.2	外面にススが付着。口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデ。 胴部外面：上半はハケ目の後粗い横ナデ、下半はナデの後粗いヘラ磨き。内面：ヘラナデの後粗いヘラ磨き。口縁部に木口状工具による刻み目。黒褐色。	A+B+H 口60 胴40 焼成：やや良
9	台付甕	口径 17.4 胴径 21.2 現存高 22.3	口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデ。胴部：外面ハケ目、内面ヘラナデ。口縁部に木口状工具による刻み目。 褐色（一部黒色）。	B+H+J 口95 胴90 焼成：やや良
10	壺	胴径 40.3 底径 11.7 現存高 42.2	外面にスス付着。胴部外面に「カゴ目」痕を有す。胴部外面上半：結節縄文4段。頸部～胴部外面：丁寧なヘラ磨き。頸部内面：丁寧なヘラ磨き。胴部内面：ヘラナデとナデ。底部：内外面ともナデか。黄褐色（一部黒色）。	A+B+E+H 頸60 胴80 底100 焼成：良

第67号住居跡

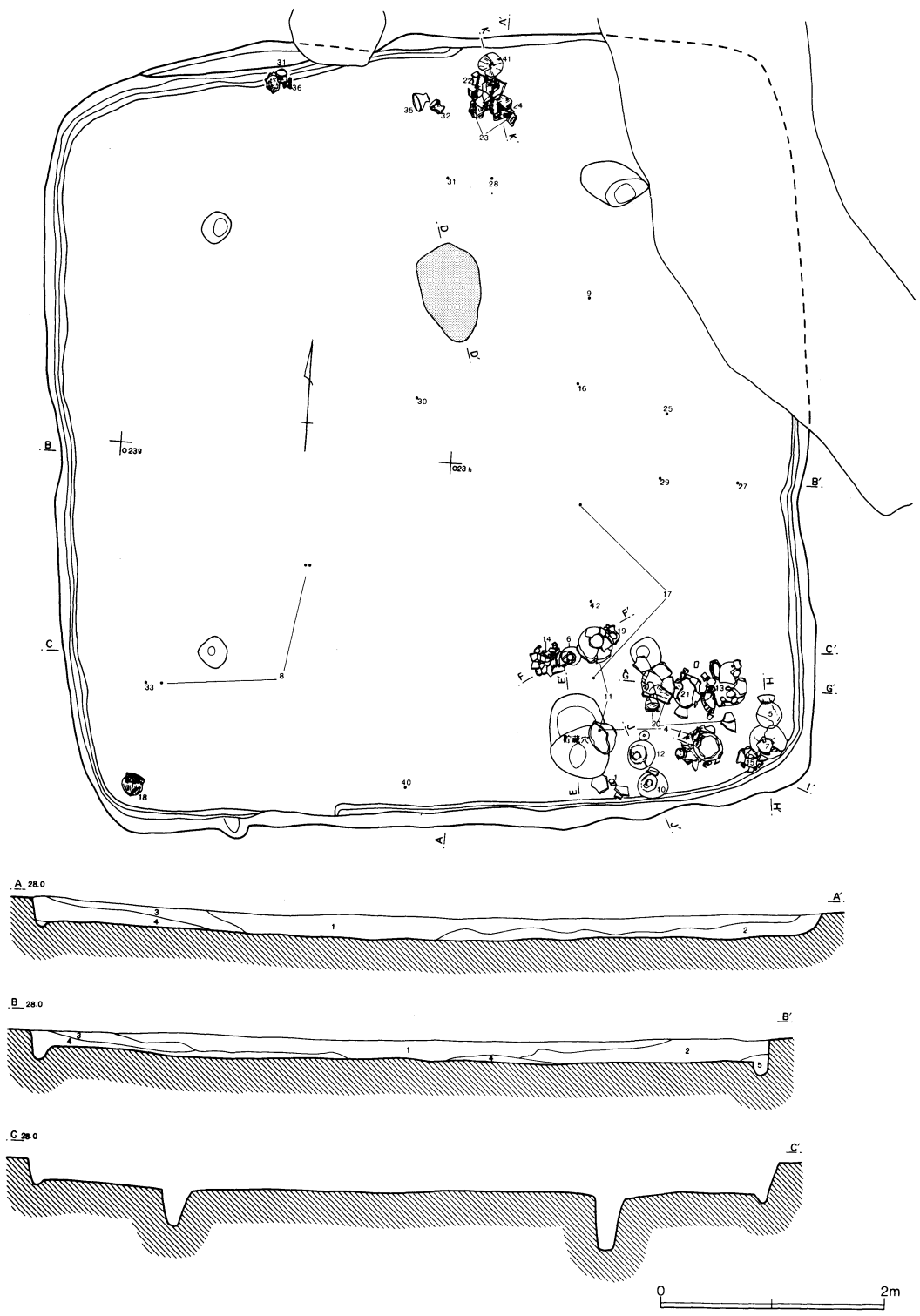
第67号住居跡は、P23eグリッドに位置する。遺構の大部分を、北側の第66号住居跡に切られており、南側では壁面の一部を第10号古墳跡によって切られている。平面規模は東西方向が370cm程度と思われるが、南北方向については不明である。平面形態は、コーナー部分にやや丸味をもつ方形、あるいは長方形と推定される。確認面からの深さは15cmを測り、壁面は直線的に立ち上がると推定される。第10号古墳跡に切られている南東部分を除いて、壁溝が検出された。南東コーナーに貯蔵穴と覚しき土壌が確認された。ピットとの重複も考えられるが、外側で計測すると、平面規模は72cm×48cm、深さは34cmを測る。図化した遺物は1点のみであった。

第67号住居跡出土遺物 (第116図)

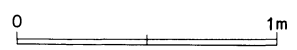
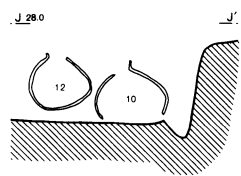
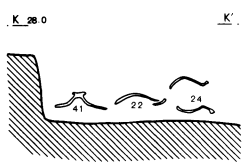
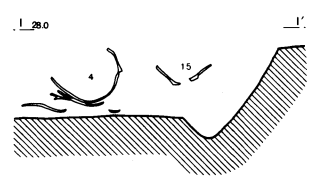
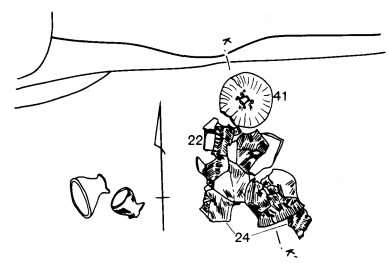
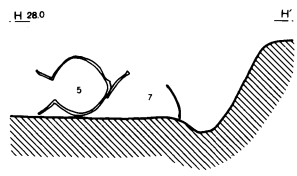
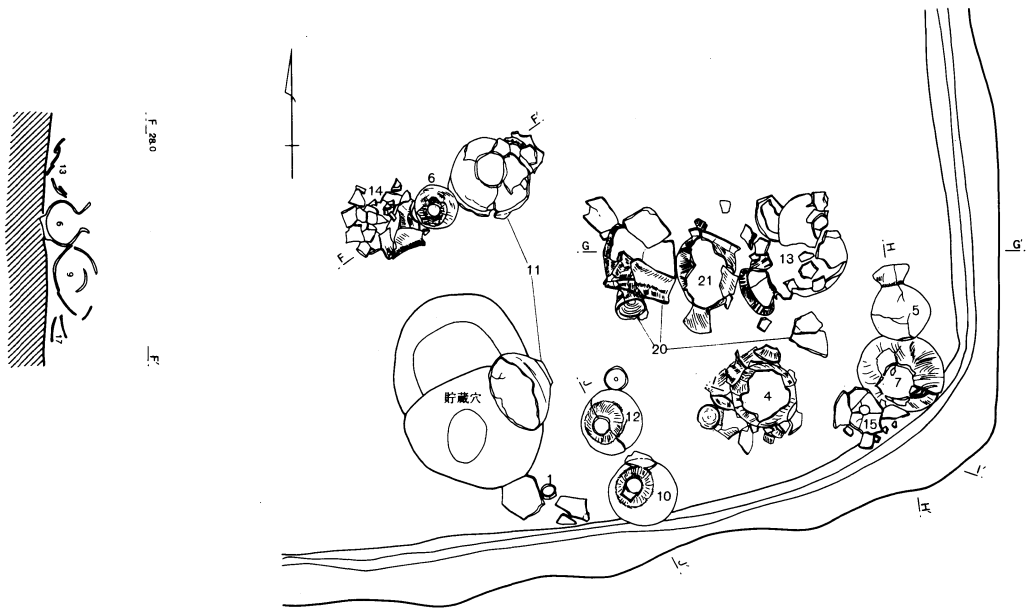
番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	高坏	口径 19.9 現存高 7.0	器面は荒れている。坏部：内外面とも横ナデの後ヘラ磨き。 橙色であるが内外面とも赤彩か。茶褐色（一部黒色）。	A+B+C+D+G 坏90 焼成：普



第116図 第67号住居跡出土遺物



第117图 第68号住居跡(1)



第118图 第68号住居跡(2)

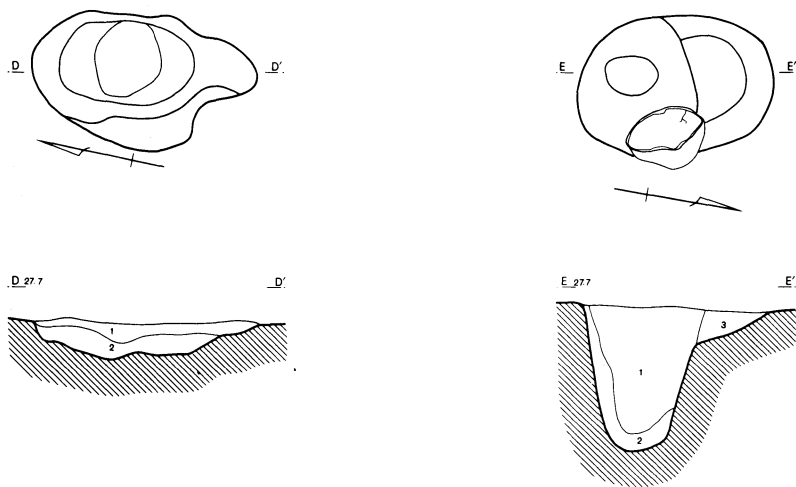
第68号住居跡（第117～120図）

第68号住居跡は、N23cグリッドに位置する。北側から東側にかけて、第10号古墳跡によって切られ、西側から北側において第69号住居跡を切る。これらの、部分的に重複している点を除けば、確認面からの深さは20cm程ではあるものの、遺存状況は良好な部類に含まれ、遺物の内容的にも本遺跡中屈指の一つであった。

平面規模は、長軸710cm・短軸670cmを測り、コーナー部分がやや丸味を帯びる略方形を呈す。主軸方向はN-4°-Wを指し、N-65°-Wを指す第69号住居跡の主軸方向とはズレをもつ。

検出し得た壁面は、直線的に立ち上がるものである。壁溝は一部分途切れるが、ほぼ全周する。主柱穴が4箇所検出された。各主柱穴間の距離は、長軸方向が365cm・390cm、短軸方向が410cm・372cmを測り、ほぼ方形に整然と配置されている。主柱穴の床面での直径と形態は、北東のものから時計回りに、40cm×19cmの楕円形・17cm×17cmの円形・28cm×24cmの楕円形・28cm×24cmの略円形である。エレベーションC-C'にみる、主柱穴の床面からの深さは、32cmと46cmを測り、比較的浅いが明瞭なものである。

ロームブロックを多く混入した貼床は、平坦で堅固なものであった。南側壁面近くの東寄りに、貯蔵穴が検出された。主柱穴4箇所と、主柱穴を結んだ線の内側やや北寄りに、炉跡が1箇所検出



第68号住居跡土層註記 A-A' B-B' 共通

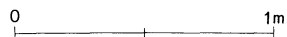
- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒若干。粒子粗く、粘性弱。
- 2 黒褐色土 第1層よりロームブロック多。
- 3 黒褐色土 第2層に類似。炭化物多。
- 4 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多。
- 5 暗黄褐色土 ロームを主体とする層。

炉跡土層註記

- 1 黒褐色土 焼土粒・焼土ブロック多、ローム粒・炭化物少。
- 2 赤褐色土 焼土ブロック層中にカーボン少。

貯蔵穴土層註記

- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒若干。しまり・粘性弱。
- 2 暗黄褐色土 ロームを主体とする層、粘性強（崩落ロームか）。
- 3 黒褐色土 貼床と考えられる。ロームブロック・ローム粒含有。しまり強。



第119図 第68号住居跡(3)



第120图 第68号住居跡(4)

された。平面規模は、88cm×51cmの楕円形を呈し、床面からの深さは14cmを測る。遺存状態も良好であった。第1層は、焼土粒や焼土ブロックを多く含む黒褐色の層であり、この他にローム粒や炭化物を少量混入しており、堅い層である。第2層は、焼土ブロックからなる赤褐色の層であり、炭化物を少量混入し、堅い層である。平面実測図(第117図)では、本住居跡北壁に土壌が重複しているが、本住居跡に切られている第69号住居跡の貯蔵穴である。

本住居跡からは、多数の遺物が出土をしており、図化し得た点数も、今回調査を行った代正寺遺跡の住居跡中では最多であり、遺存状態も良好な一括性の高い資料が得られた。出土状況から観ても、これらは一括廃棄されたものではなく、本住居跡に伴う遺物と推定される。土器片は、住居跡中央部から周辺にまで広がりをもって分布をし、接合によってほぼ原形に復せる土器群については、概略2箇所に分かれると表現できよう。まず挙げられるのは、南東部分の支柱穴、及び貯蔵穴の位置から南東コーナーまでの範囲であり、復元できた遺物の過半数に上る。この住居跡で用いられた土器の多くは、この範囲内に置かれていたものと判断されよう。もう1箇所については、北壁の中央付近である。炉跡に近い位置であり、想定される出入り口部(南壁中央付近)の、対角線上の位置に当たるといえるかも知れない。この付近の土器と、南西コーナーに位置する土器(18)については、壁面上の、覆屋との間に存在する平坦部分を“物置き台”として使用し、そこから転落した遺物とも推定できようか。

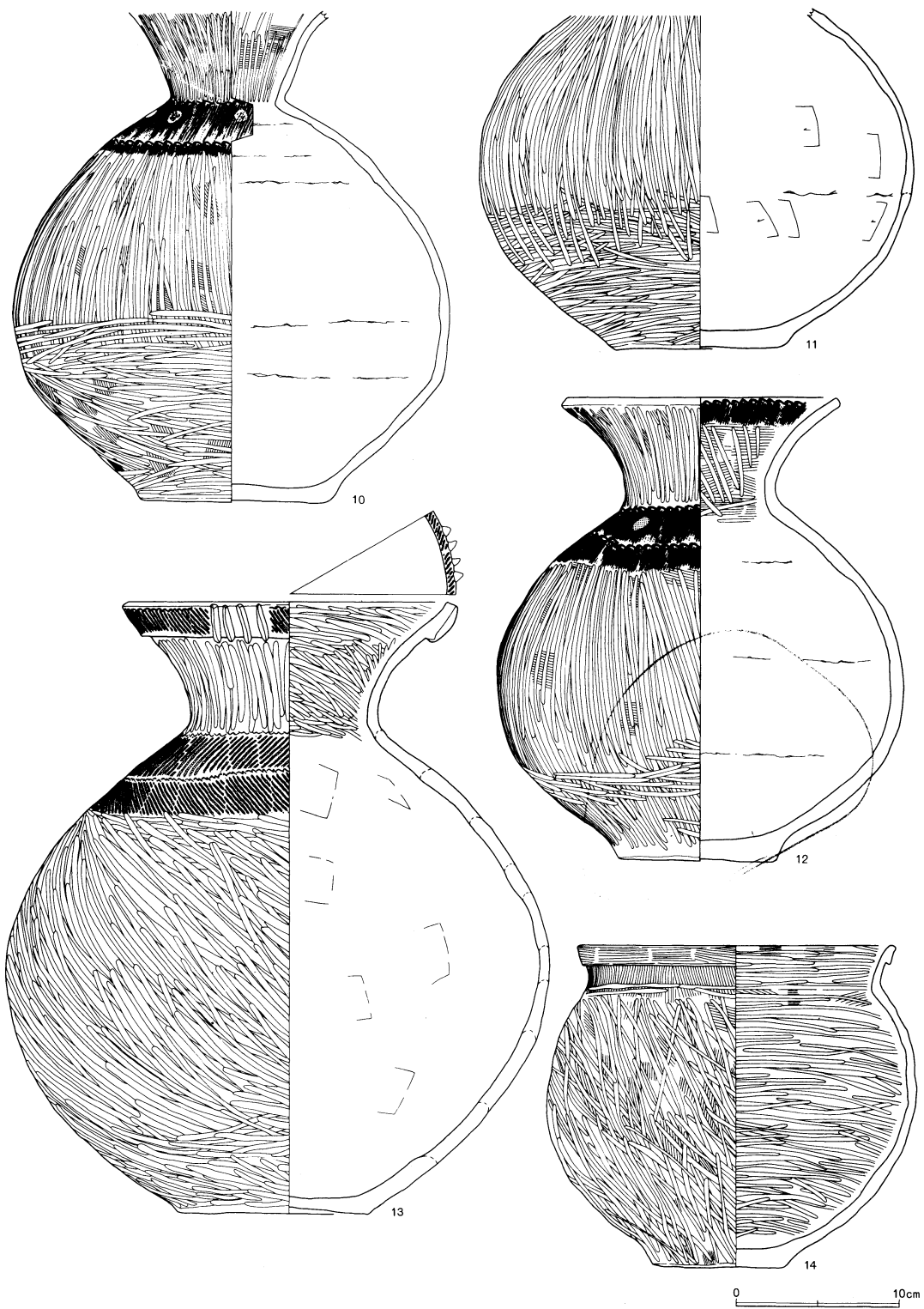
本住居跡からの出土遺物の内、図化し得たのは42点にのぼる。

第68号住居跡出土遺物 (第121～125図)

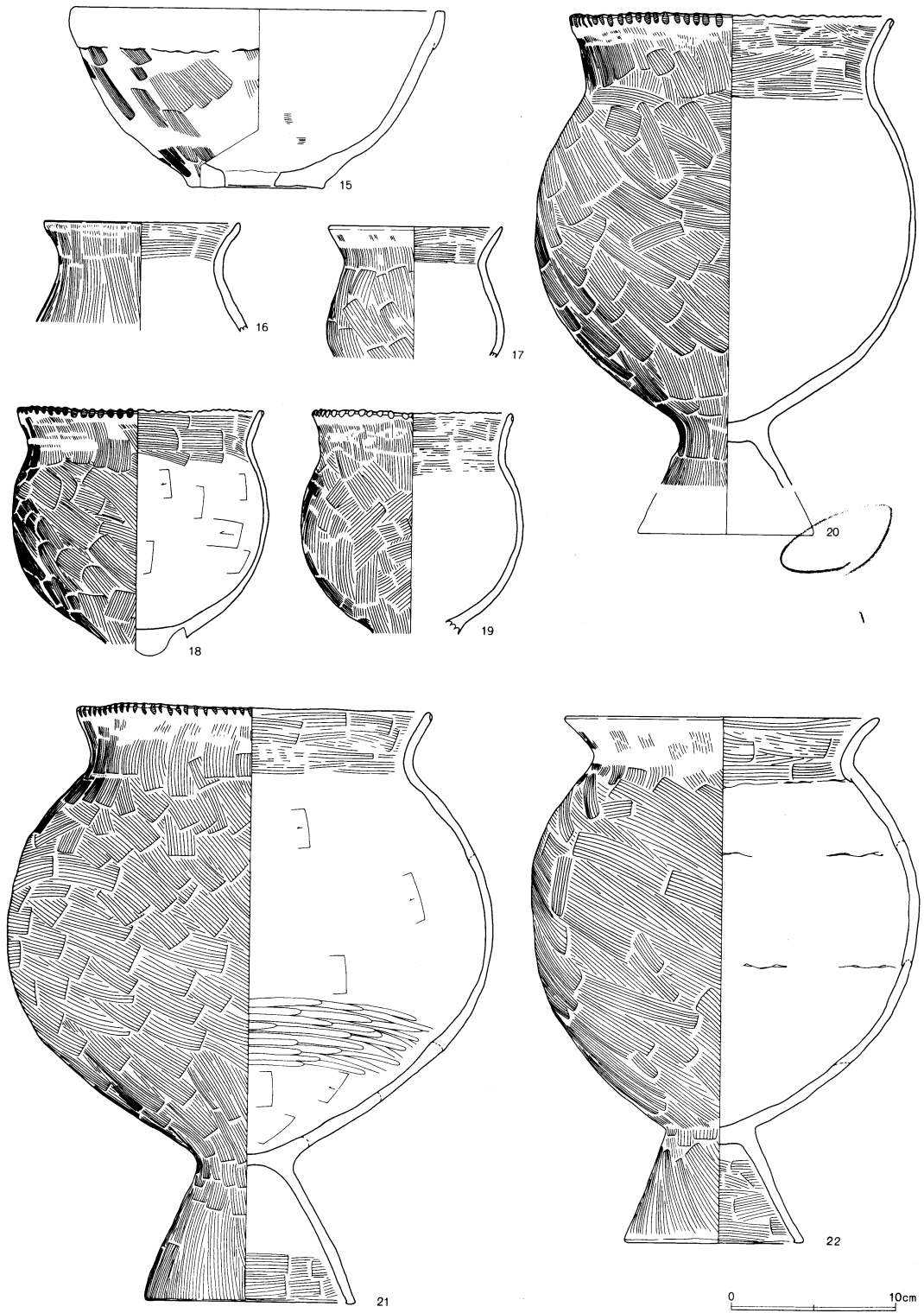
番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	小型壺	口径	4.8	口縁部～胴部外面：ハケ目の後ヘラ磨き。口縁部内面：ハケ目の後ヘラ磨き。底部外面：ナデ。胴部～底部内面：ナデ。全体的に丁寧な整形である。褐色。	A+G+J(細密) 完形 焼成：良
		胴径	4.8		
		底径	2.0		
		器高	4.5		
2	壺	口径	(10.7)	器面は非常に荒れている。口縁部に木口状工具による刻みか。頸部に櫛状工具による左回転と思われる簾状文。口縁部：内外面ともハケ目の後ナデか。橙色。	A+G+H 口25 焼成：やや不良
		現存高	5.7		
3	壺	口径	(19.8)	口縁部：内外面ともハケ目の後横ナデ。頸部外面：ハケ目の後粗いヘラ磨き、内面：ハケ目の後ナデ。赤褐色。	A+I(多)+J 口30 焼成：普
4	壺	口径	14.7	頸部は「く」字状に屈曲する。口縁部：内外面ともハケ目の後横ナデ。胴部：外面ハケ目、内面ナデ。底部：内外面ともナデ。底部はやや上げ底状を呈す。にぶい褐色。	A+B+D+J 口90 胴80 底100 焼成：不良
		胴径	25.0		
		底径	9.0		
		現存高	29.7		
5	壺	口径	14.6	頸部は「く」字状に屈曲する。口縁部～胴部外面：ハケ目の後ヘラ磨き。底部外面：ナデ。口縁部内面：ヘラ磨き。胴部～底部内面：ナデ。橙色。	B+C+D+J 口75 胴・底100 焼成：やや良
		胴径	22.8		
		底径	6.5		
		器高	27.5		
6	壺	口径	11.4	口縁部：内外面ともハケ目の後横ナデ。胴部外面：ハケ目の後一部粗いナデ。内面：上～中位はナデ、下位はヘラナデ。底部：内外面ともナデ。にぶい橙色(一部黒色)。	A+B+C+H(多) 口60 胴・底100 焼成：普
		胴径	16.1		
		底径	6.7		
		現存高	19.4		
7	壺	口径	(18.3)	頸部は「く」字状に屈曲し、胴部は下膨れである。底部は上げ底状を呈す。口縁部：内外面ともハケ目の後ヘラ磨き。胴部外：面ハケ目の後ヘラ磨き、内面：ヘラナデとナデ。底部外面：ヘラによるナデツケ、内面：ヘラナデか。赤褐色。	A+B+D+E+J 口20 胴85 底100 焼成：やや良
		胴径	32.6		
		底径	12.0		
		器高	35.6		



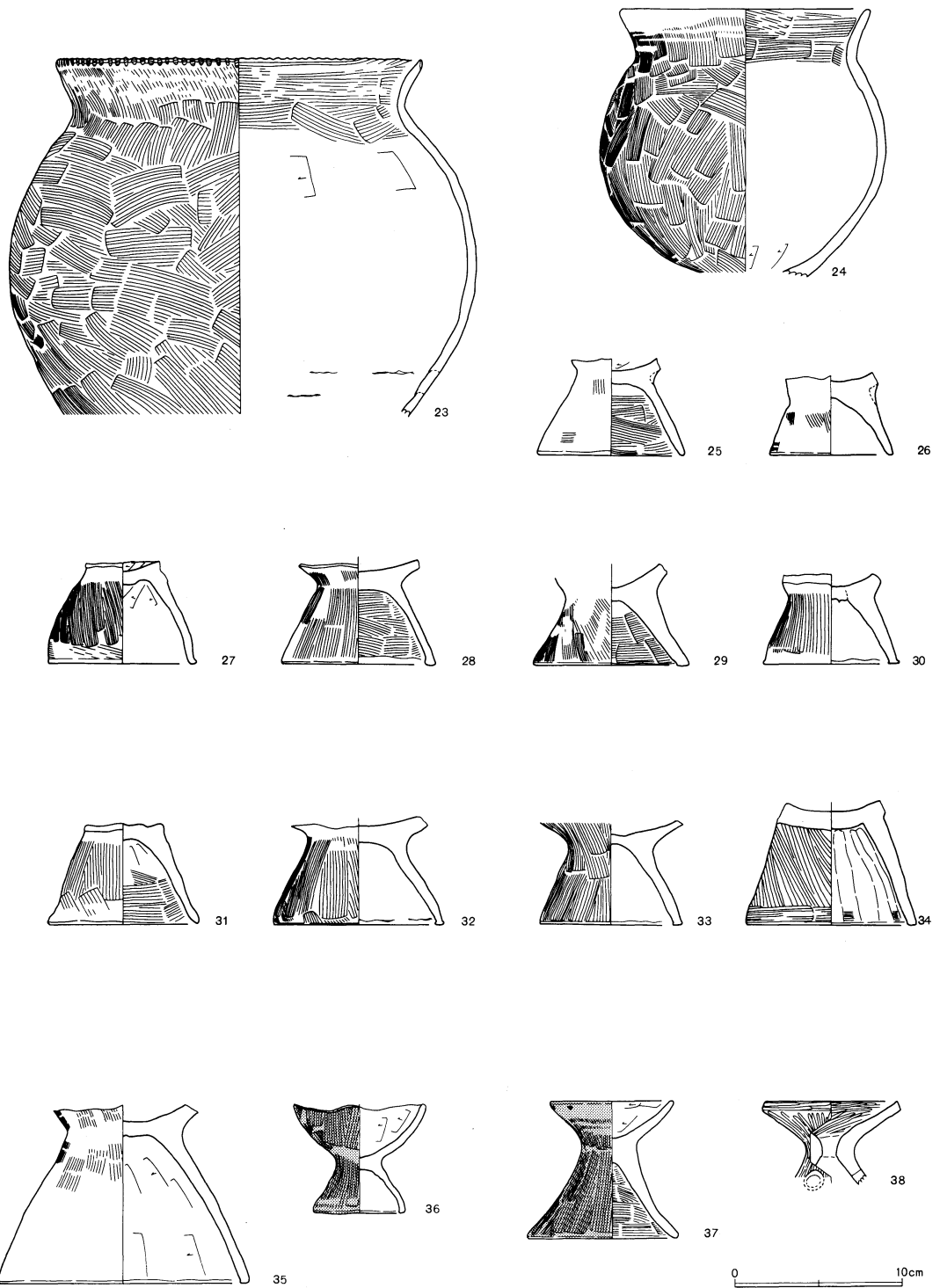
第121図 第68号住居跡出土遺物(1)



第122図 第66号住居跡出土遺物(2)

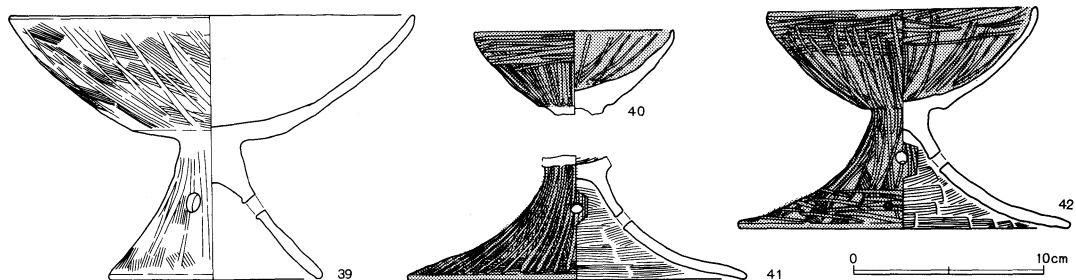


第123図 第68号住居跡出土遺物(3)



第124图 第68号住居跡出土遺物(4)

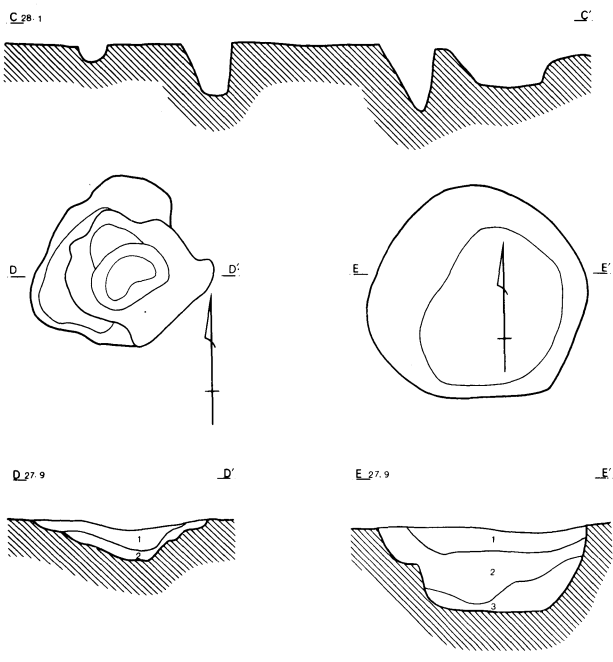
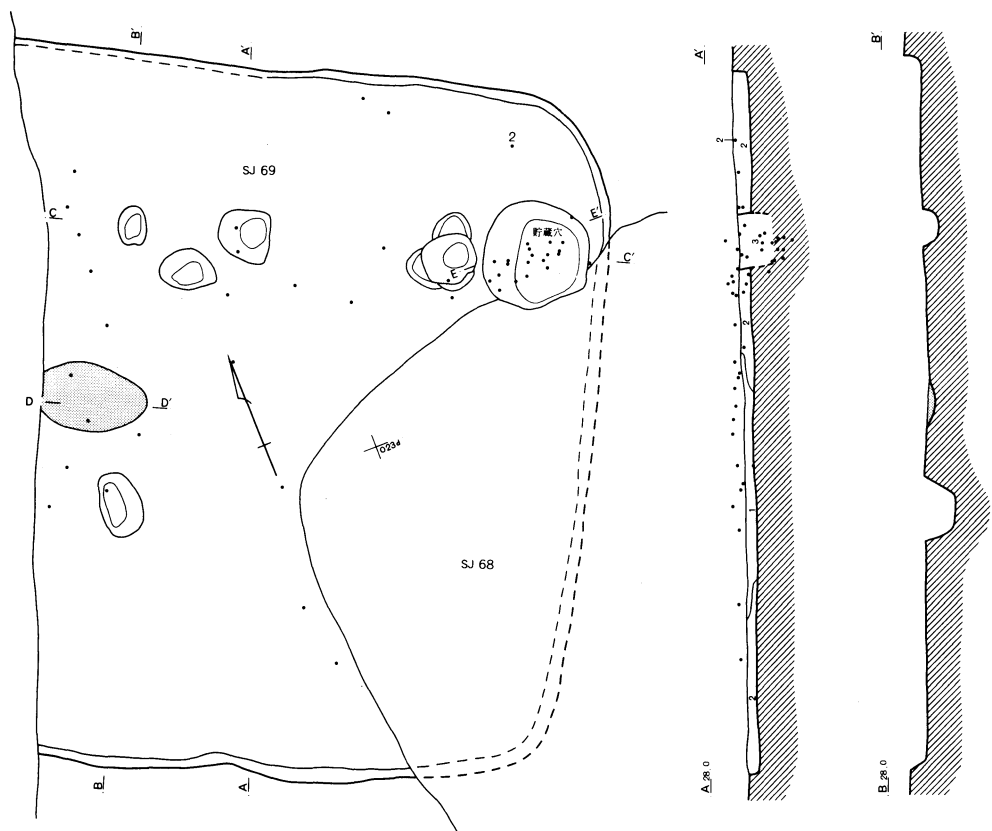
8	小型壺	胴径 (11.5) 現存高 7.9	外面：ヘラ磨き、内面：上位は指頭による押捺、中～下位はナデ。褐色。	A+B+D+E+J 胴40 焼成：普
9	壺	口径 (29.5) 現存高 2.5	内外面とも摩滅著しい。口唇部：ナデか。口縁部：内外面とも縦位のヘラ磨き。粘土紐を貼付し複合口縁の形態を呈すと思われる。明黄褐色。	A+B+D+E 口径15 焼成：普
10	壺	胴径 26.4 底径 10.7 現存高 29.7	頸部は「く」字状に屈曲し、胴部は下膨れである。肩部にLR縄文4段、S字結節文2段、円形朱文7箇所を施す。頸部：内外面ともハケ目の後ヘラ磨き。胴部：外面丁寧なヘラ磨き、内面ナデ。底部：外面ヘラ磨き、内面ナデ。赤褐色（一部黒色）。	A+B+H+J 頸55 胴70 底60 焼成：良
11	壺	胴径 26.5 底径 10.0 現存高 26.5	胴部：外面ヘラ磨き、内面ヘラナデとナデ。底部：内外面ともナデ。橙色（一部黒色）。	A+B+H+J 胴90 底90 焼成：やや良
12	壺	口径 16.4 胴径 24.9 底径 9.1 器高 28.2	肩部にS字結節文2段、LR縄文3段、円形朱文6箇所を施す。口縁部内面にS字結節文、LR縄文を各1段行う。口縁部：内外面ともハケ目の後ヘラ磨き。胴部：外面ハケ目の後丁寧なヘラ磨き、内面ナデ。底部：内外面ともナデ。赤褐色。	A+B+H+J 口径30 胴95 底100 焼成：良
13	壺	口径 19.5 胴径 33.2 底径 11.5 器高 37.0	頸部は「ハ」字状に外反し複合口縁は内彎気味に開く。口唇部にRL縄文。口縁部にS字結節文とRL斜縄文の後、円形朱文9箇所と4本単位の棒状浮文。肩部にS字結節文2段とLR縄文、RL縄文を各1段の後、円形朱文6箇所。頸部：内外面とも丁寧なヘラ磨き。胴部～底部外面：丁寧なヘラ磨き、内面：ヘラナデとナデ。赤褐色（一部黒色）。	A+B+H+J(細密) 口・胴95 底100 焼成：良
14	広口壺	口径 18.6 胴径 22.5 底径 8.0 器高 19.5	口縁部外面：ハケ目の後部分的に粗いヘラ磨き。胴部外面：ハケ目の後ヘラ磨き、内面：ヘラ磨き。底部：内外面ともナデ。複合口縁は緩やかに外反して開き、胴部中央に最大径をもつ。丁寧なつくりである。橙色（一部黒色）。	B+C+H+J 口径100 胴85 底50 焼成：良
15	甑	口径 22.8 底径 8.0 器高 10.7	焼成後穿孔と観られ鉢からの転用と思われる。口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面ハケ、内面ハケ目の後ナデか。底部：内外面ともナデ。孔径3.0cm。橙色。	A+B+C+D+H 口径50 体60 底80 焼成：普



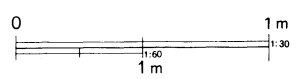
第125図 第68号住居跡出土遺物⑤

16	甕	口径 現存高	11.8 6.3	口縁部：内外面ともハケ目の後横ナデ、胴部：ハケ目、内面ナデ。橙色（一部黒色）。	B+E+J 口径55 焼成：普
17	甕	口径 胴径 現存高	(10.5) (10.8) 7.9	口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデ。胴部：外面ハケ目、内面ナデ。褐色（一部黒色）。	A+B+J 口径 胴30 焼成：やや良
18	台付甕	口径 胴径 現存高	14.6 15.6 14.6	口縁外面に木口状工具による刻み目。口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデ。胴部外面：ハケ目、内面：上半はヘラナデ、下半はナデ。橙色（外面に一部スス附着）。	A+B+C+H 口径・胴95 焼成：普
19	台付甕	口径 胴径 現存高	(12.2) (13.5) 13.5	口縁外面に木口状工具による刻み目。口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデ。胴部：外面ハケ目、内面：ナデ。明橙色。	D+G+J 口径20 胴40 焼成：普
20	台付甕	口径 胴径 現存高	19.3 23.0 28.4	口縁外面に木口状工具による刻み目。胴部内面下位に炭化物附着。口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデ。胴部：外面ハケ目、内面：ナデ。脚台部：外面、内面ナデ。暗褐色。	A+B+C+H 口径90 胴95 焼成：普
21	台付甕	口径 胴径 脚台径 器高	21.2 29.5 12.5 36.0	口縁外面に木口状工具による刻み目。外面にスス附着。口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデ。胴部外面：ハケ目、内面：上半ナデ、下半ヘラによるナデツケ。底部内面：ヘラナデ。脚台部外面：ハケ目、内面：上半ハケ目、下半ハケ目。黒褐色。	A+B+H+J 口径・胴・脚95 焼成：やや良
22	台付甕	口径 胴径 脚台径 器高	19.0 23.5 10.5 31.5	頸部は「く」字状に屈曲する。外面にスス附着。胴部内面に炭化物附着。口縁部：内外面ともハケ目の後横ナデ。胴部～脚台部外面：ハケ目。胴部～底部内面：ナデ。脚台部内面：ナデ。茶褐色（一部黒色）。	B+E+F 口径100 胴70 脚100 焼成：普
23	甕	口径 胴径 現存高	21.6 27.8 21.2	口縁外面に木口状工具による刻み目。口縁部：内外面ともハケ目の後横ナデ。胴部外面：ハケ目、内面：上位ヘラナデ、中位ナデ。赤味を帯びた橙色（一部黒色）。	B+E+G+J 口径45 胴60 焼成：良
24	甕	口径 胴径 現存高	14.5 17.0 15.8	外面広範囲にスス附着。口縁部：内外面ともハケ目の後ヘラ磨き。胴部：外面ハケ目、内面ヘラナデの後ナデ。暗褐色。	A+B+C+G 口径・胴95 焼成：普
25	台付甕	脚台径 現存高	8.6 5.7	器面は荒れている。底部内面：ヘラナデ。脚台部：外面ハケ目か、内面ハケ目。橙色。	A+B+C+E 脚90 焼成：普
26	台付甕	脚台径 現存高	6.7 4.8	器面は熱のためやや赤色化している。底部内面：ヘラナデ。脚台部：外面ハケ目の後粗いナデ、内面ナデ。赤褐色。	A+B+C+H 脚65 焼成：普
27	台付甕	脚台径 現存高	8.5 5.5	底部内面：ヘラナデ。脚台部：外面ハケ目の後下端部を横ナデ、内面ヘラナデの後下端部を横ナデ。橙色。	B+C+D+H 脚90 焼成：普
28	台付甕	脚台径 現存高	9.0 6.4	底部：内外面ともナデ。脚台部：内外面ともハケ目。茶褐色。	A+B+D+E+J 脚90 焼成：やや良

29	台付甕	脚台径 現存高	8.7 6.1	外面は荒れている。脚台部：内外面ともハケ目。橙色。	A+B+C+D+I 脚95 焼成：普
30	台付甕	脚台径 現存高	8.0 5.3	脚台部：外面ハケ目、内面ナデ、のち内外面下端部を横ナデ。明赤褐色。	A+B+C+D+G 脚90 焼成：良
31	台付甕	脚台径 現存高	8.8 6.0	脚台部：内外面ともハケ目。橙色。	B+D+E+J 脚60 焼成：普
32	台付甕	脚台径 現存高	9.6 6.4	脚台部：外面ハケ目、内面ナデ。橙色。	A+B+D+H 脚85 焼成：普
33	台付甕	脚台径 現存高	8.5 6.1	底部内面：ヘラナデか。脚台部：外面ハケ目、内面ナデ。橙色。	A+B+C+E+H 脚90 焼成：良
34	台付甕	脚台径 現存高	10.2 7.4	底部内面：ヘラナデ。脚台部外面：上～中位は目の粗い斜位のハケ目、下位は横位のハケ目の後横ナデ。内面：上～中位は指頭によるナデツケ、下位は横位のハケ目の後横ナデ。黄褐色。	A+B+C+E+I 脚95 焼成：普
35	台付甕	脚台径	14.6	底部内面に炭化物付着。底部内面：ヘラナデか。脚台部外面：ハケ目の後ナデ、内面：ヘラナデ。赤味を帯びた橙色。	A+B+I 脚95 焼成：普
36	器台	口径 脚台径 器高	7.9 5.4 6.4	台付甕の脚台部からの転用であり、そのさい坏口唇部の粗い面取りと赤彩をしたものと思われる。坏部～脚台部外面：ハケ目。坏部内面：ヘラナデ。脚台部内面：ナデ。赤味を帯びた灰褐色。	A+B+G 完形 焼成：普
37	器台	口径 脚台径 器高	7.2 9.1 高	坏部外面：ハケ目の後粗い横ナデ、内面：ヘラナデの後粗い横ナデ。脚台部：内外面下位を横ナデの後全体をハケ目。赤褐色。	A+B+C+E+H ほぼ完形 焼成：やや良
38	器台	口径 現存高	7.8 4.9	脚台部の穿孔は3箇所と思われる。坏部：内外面とも丁寧なヘラ磨き。脚台部：外面丁寧なヘラ磨き、内面ナデ。坏部孔径0.9cm。	B+G+J(細密) 坏95 焼成：良
39	高坏	口径 脚台径 器高	21.2 11.1 13.7	器面は摩滅著しい。坏部：外面ハケ目の後ヘラ磨き、内面ナデか。脚台部：外面ハケ目の後ヘラ磨き、内面ナデ。脚台部の穿孔は外面からのもので3箇所。橙色。	A+B+E+I(多) 坏90 脚100 焼成：普
40	高坏	口径 現存高	10.3 4.5	坏部外面：上半は横ナデの後横位のヘラ磨き、下半はハケ目の後縦位のヘラ磨き。内面：ナデの後ヘラ磨き。赤褐色。	A+B+C+G 坏70 焼成：良
41	高坏	脚台径 現存高	17.6 6.4	坏部内面：ヘラ磨き。脚台部外面：ハケ目の後ヘラ磨き、内面丁寧なハケ目。脚台部の穿孔は外面からのもので3箇所。赤橙色。	A+B+C+D+G 脚90 焼成：良
42	高坏	口径 脚台径 器高	14.0 17.2 11.4	坏部：内外面とも丁寧なヘラ磨き。脚台部外面：ハケ目の後丁寧なヘラ磨き、内面丁寧なハケ目。脚台部の穿孔は外面からのもので4箇所。赤褐色。	A+B+C+J 坏80 脚70 焼成：良



- 第69号住居跡土層註記**
- 1 黒褐色土 黄色が強い。ローム粒・ロームブロック多。粒子粗く、しまり弱。
 - 2 黒褐色土 1層より多量のロームブロックを含む。
 - 3 黒褐色土 (近世のピット)。
- 炉跡土層註記**
- 1 黒褐色土 焼土粒・焼土ブロック多、ローム粒少。
 - 2 明赤褐色土 焼土層。
- 貯蔵穴土層註記**
- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少。
 - 2 黒褐色土 1層に比して、ロームブロックの含有少。
 - 3 黒褐色土 2層に類似するが、粘性強。



第126図 第69号住居跡



第127図 第69号住居跡出土遺物

第69号住居跡 (第126図)

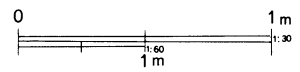
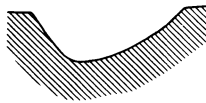
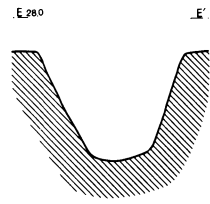
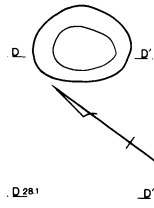
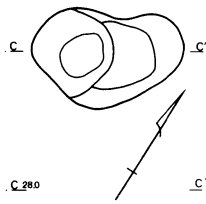
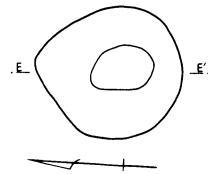
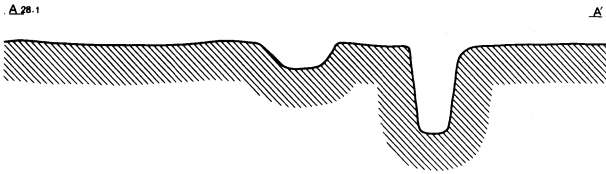
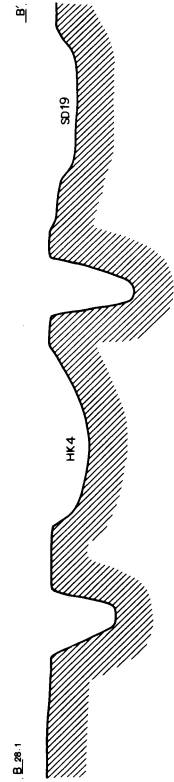
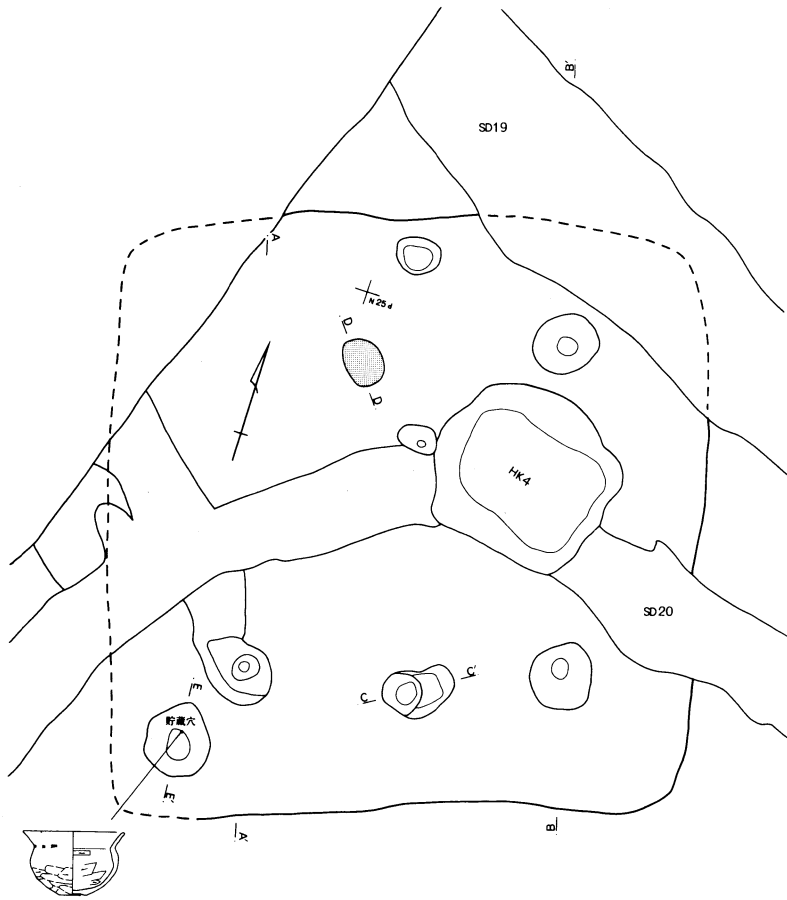
第69号住居跡は、O23 d グリッドに位置する。東側から南側にかけてを、第68号住居跡に切れ、西側については調査範囲外に続く。平面規模については、南北方向で555cmを測り、東西方向（主軸方向）は不明。平面形態は、コーナー部分にやや丸味を帯びる方形、または長方形を呈すと推定される。確認面からの深さは、10cmを測る。主軸方向は、N-65° -W を指し、N-4° -W を指す第68号住居跡の主軸方向とはズレをもつ。主柱穴3箇所が検出されたが、南東部分のものについては、第68号住居跡の貼床面下に位置すると推定される。各主柱穴間の距離は、南北方向で220cmを測り、東西方向（主軸方向）では25cmを測る。各主柱穴の深さは、北西のものから時計回りに50cm・25cm・40cmを測り、やや浅めの柱穴といえる。北東隅に貯蔵穴が検出された。平面規模は86cm×58cmの略円形、深さは34cmを測る。主柱穴を結んだ線からやや西寄りに、平面規模70cm×68cmの不整形、深さは12cmを測る炉跡が検出された。図化し得た遺物は、2点のみであった。

第69号住居跡出土遺物 (第127図)

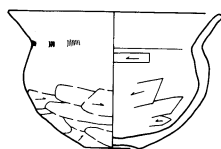
番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	甕	口径 (11.6) 現存高 4.5	口縁：内外面とも横ナデ。胴部：内外面ともナデか。 黒褐色。	A+B(細密) 口30 焼成：普
2	壺	口径 (5.5) 胴径 (5.8) 底径 (3.0) 器高 5.4	口縁部：内外面ともヘラナデの後ナデ。胴部：外面はヘラナデの後ナデ。内面はヘラナデ。底部：外面はナデ、内面は不明。 橙色。	A+B+G+J 口35 胴30 底20 焼成：普

第70号住居跡 (第128図)

第70号住居跡は、L25 f グリッドに位置する。第19号・第20号溝跡や、平安時代土壌4等々に切られるほか、耕作による攪乱も受け遺存状態は非常に悪い。僅かに残る床面と覆土の範囲から、プランを推定することができた。平面規模は、南北方向は455cm・東西方向は466cmを測る。主軸方向はN-17° -W を指し、N-13° -W を指す近在の第71号住居跡に近い。主柱穴が3箇所検出された。主柱穴間の距離は、南北方向・東西方向共に250cmを測る。各々の確認面からの深さは、北東部のものから時計回りに、65cm・50cm・65cm。梯子穴と覚しきピットも存在し、深さは18cmを測る。主柱穴を結んだ線上あるいはやや内側に炉跡が、南西コーナーに貯蔵穴が検出された。後者の平面規模は、56cm×50cmの略円形、深さは42cmを測る。出土土器は、埴1点のみであった。



第128图 第70号住居跡



第129図 第70号住居跡出土遺物

第70号住居跡出土遺物 (第129図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	罎	口径	11.2	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面上は粗いハケの後横ナデ。外面下はヘラ削りの後ナデか。内面はヘラナデ。 底部：ナデ。黒褐色。	B+C+細粒子 完形 焼成：良
		胴径	9.7		
		底径	3.0		
		器高	7.1		

第71住居跡 (第130図)

第71号住居跡は、N25cグリッドに位置する。第19号・第20号溝跡に切られる他、耕作による攪乱も受け、遺存状態は非常に悪い。僅かに残る床面と覆土の範囲から、プランを推定した。平面規模は、南北方向は485cm・東西方向は475cmを測る。主軸方向は N-13° -W を指し、N-17° -W を指す近在の第70号住居跡に近い。主柱穴が4箇所検出された。主柱穴間の距離は、南北方向で250cm・260cm、東西方向で270cm・210cmを測る。各々の確認面からの深さは、北東部のものから時計回りに、45cm・50cm・35cm・40cm。主柱穴を結んだ線上に炉跡が、検出された。北西と南東のコーナー部分に、貯蔵穴と覚しき遺構が検出された。後者の平面規模は、56cm×44cmの楕円形、深さは50cmを測る。遺物はまったく検出されなかった。

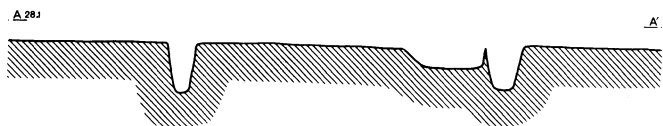
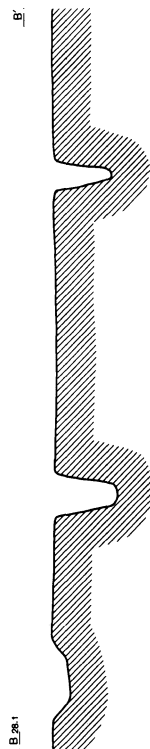
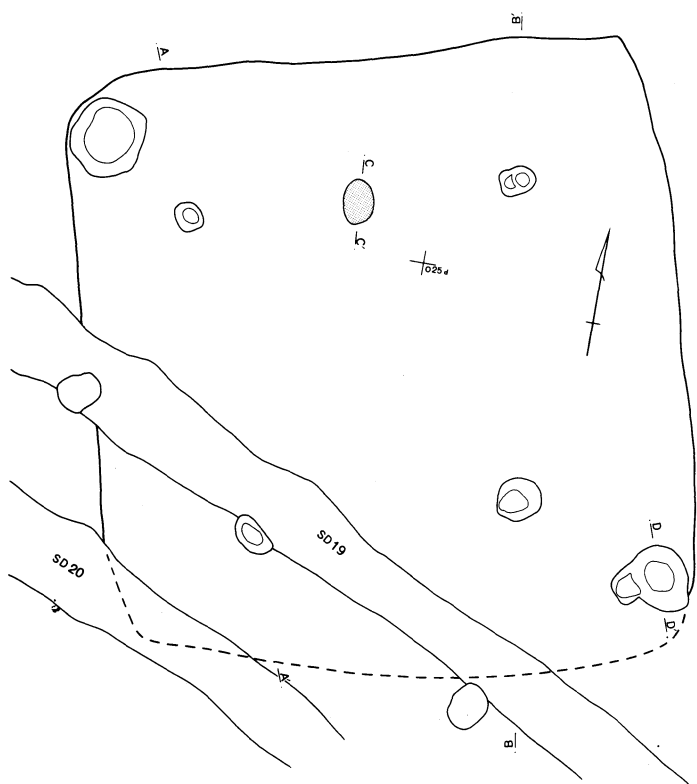
第72号住居跡 (第131図)

第72号住居跡は、J36fグリッドに位置する。第27号溝跡に遺構中央を南北に切られ、また幾つかのピットに切られる他は、遺存状況は比較的良好な部類に含まれるという。

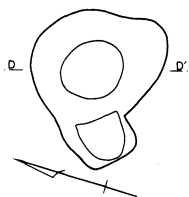
平面規模は、長軸550cm・短軸435cmを測り、ほぼ長方形を呈す。主軸方向は N-22° -W を指し、近在する第73号住居跡の主軸方向、N-30° -W に比較的近い。確認面からの深さは30cmを測る。

検出された壁面は直線的に立ち上がり、明確であった。主柱穴が4箇所検出された。各主柱穴間の距離は、P1-P2間が248cm・P2-P3間が220cm・P3-P4間が220cm・P4-P1間が222cmを測り、ほぼ長方形に整然と配置されている。各主柱穴の床面からの深さは、P1で30cm・P3で30cm・P4で40cmを測り、しっかりとして明瞭なものである。P5は、南方向から斜めに掘り込まれており、梯子穴と推定される。貯蔵穴は確認されていない。主柱穴を結んだ線のやや内側に、炉跡が1箇所検出された。平面規模は、96cm×62cmの楕円形を呈し、貼床面からの深さは16cmを測る。貼床面は、非常に堅固なものである。壁溝は検出されなかった。

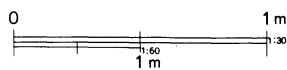
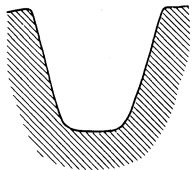
幾点かの遺物が出土しているが、拓本も含めて図化し得たのは3点であった。



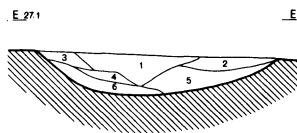
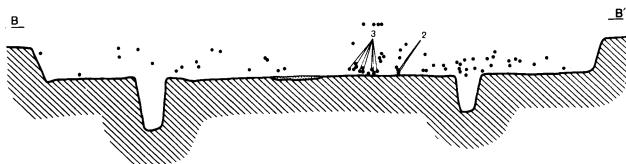
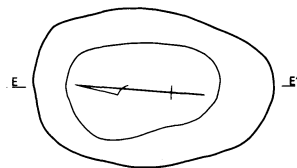
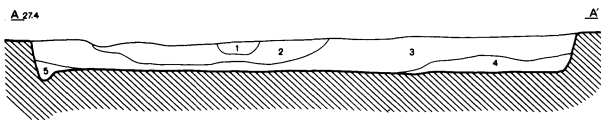
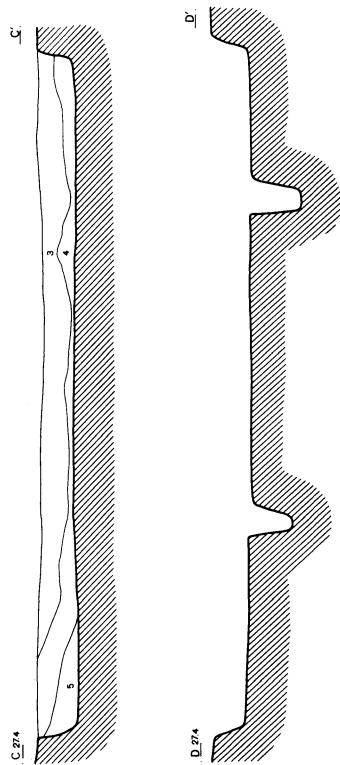
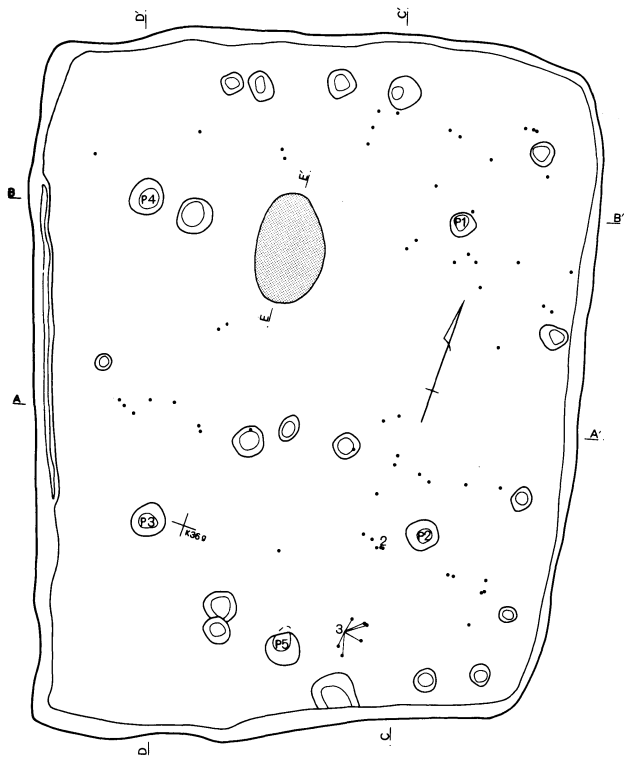
C.28.1



D.28.1



第130图 第71号住居跡

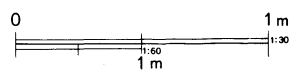


第72号住居跡土層註記

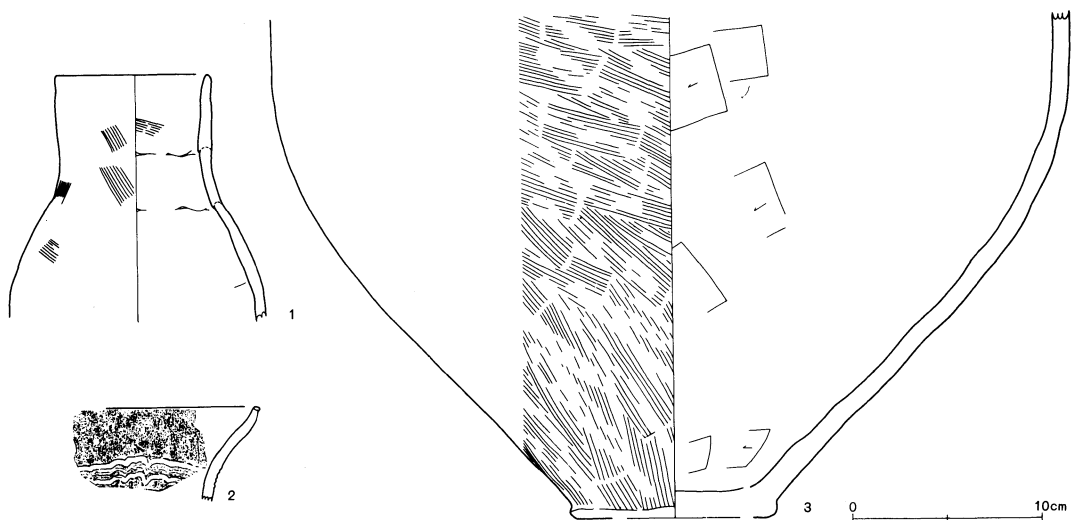
- 1 黒褐色土 カーボン・焼土粒少。しまり弱、粘性強。
- 2 灰褐色土 灰層中に焼土粒・カーボン少。しまりやや弱、粘性やや強。
- 3 黒色土 カーボン層中に焼土粒少。しまりやや弱、粘性やや強。
- 4 赤褐色土 焼土ブロック層中にカーボン少。しまり強、粘性弱。
- 5 灰色味を帯びた赤褐色土 灰層中に焼土粒多、カーボン少。しまり弱、粘性強。
- 6 暗黄褐色土 ロームブロック層中に焼土粒・カーボン少。しまり強、粘性弱。

第72号住居跡土層註記

- 1 黒褐色土 ローム粒含有。しまり良（SD27の覆土）。
- 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック含有、焼土粒若干。
- 3 黒褐色土 2層に比してローム少。しまり中。
- 4 黒褐色土 3層よりさらにローム含有少。しまり良。
- 5 黒褐色土 2層とほぼ同量のロームブロックを含有。



第131図 第72号住居跡



第132図 第72号住居跡出土遺物

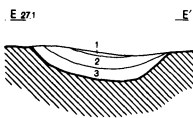
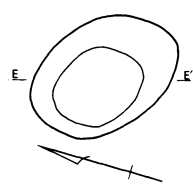
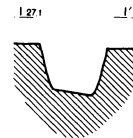
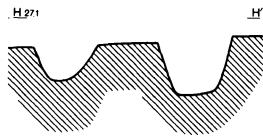
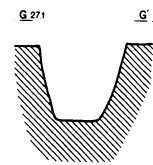
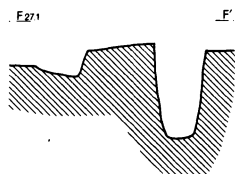
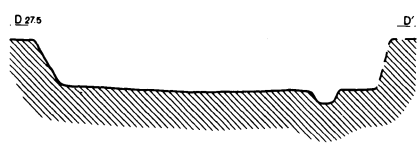
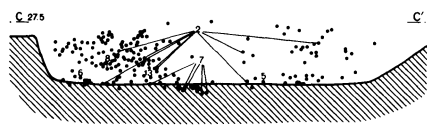
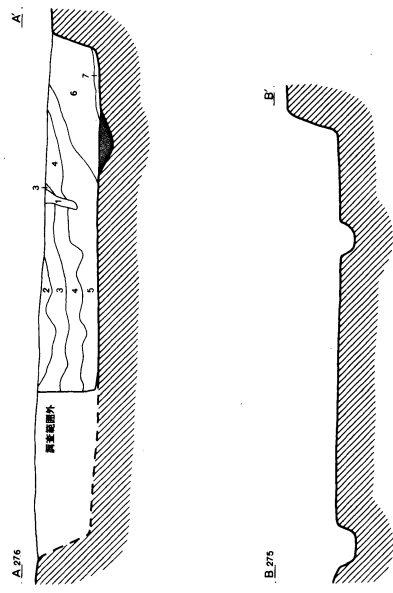
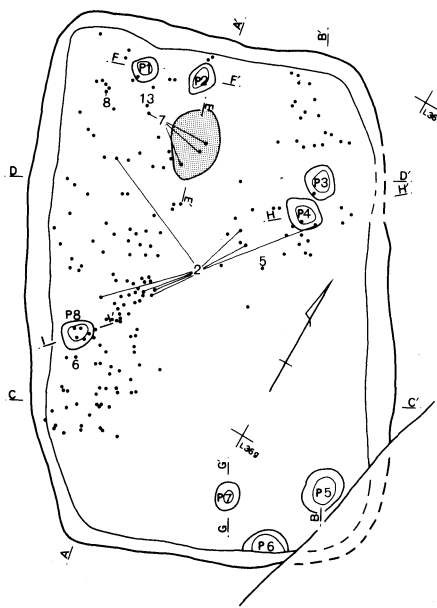
第72号住居跡出土遺物 (第132図)

番号	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等	
1	壺	口径 現存高	7.6 12.9	口縁部：内外面ともハケ目の後横ナデ。他は内外面ともハケ目の後ナデ。外面にスス附着。黒褐色。	B+C+D+H+J 口径70 類100 焼成：普
2	壺	現存高	4.8	内外面ともハケ目の後横ナデ。	B+E+J 口径15 焼成：良
3	壺	胴径 底径 現存高	(42.0) 10.0 26.3	胴部：外面はハケ目の後粗いナデ。内面はヘラナデ。 底部：外面はナデか。内面はヘラナデか。 内部：暗灰黄色。外部：橙色。	B+J+小碟(多) 胴20 底15 焼成：普

第73号住居跡 (第133図)

第73号住居跡は、K36 f グリッドに位置する。第28号溝跡に遺構中央を南北に切られ、南東コーナーは調査範囲外に位置している。これらの他に、幾つかのピットに切られる以外は、遺存状況は比較的良好な部類に含まれる。なお本住居跡は、当初南西コーナーのみが調査されたのみであったが、後に調査区の拡張を行った結果、ほぼ全体の形態・規模を得ることができた。調査範囲を拡張した際、全点ドットを行うだけの余裕がなかった。そのため、平面実測図(第133図)における遺物出土状況は、拡張以前の段階を示している。拡張調査部分についても、数多くの遺物の出土がみられ、全体的に万遍なく分布していたと推定される。

平面規模は、長軸415cm・短軸285cmを測り、ほぼ長方形を呈す。主軸方向は N-30° -W を指し、近在する第72号住居跡の主軸方向、N-22° -W に比較的近い。確認面からの深さは40cmを測る。

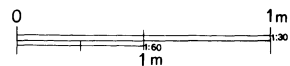


第73号住居跡土層註記

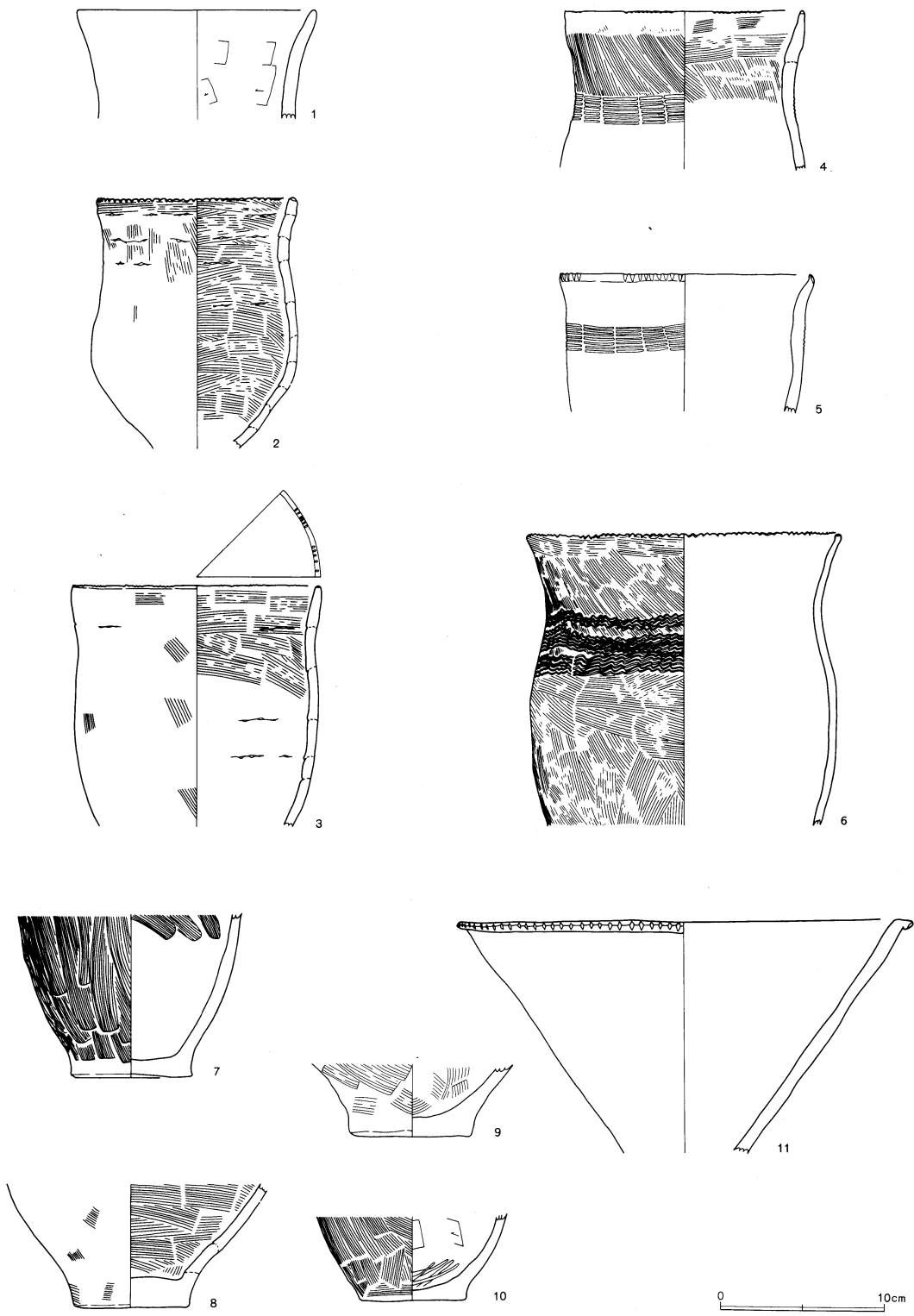
- 1 黒色土 茶褐色土が斑らに混入。ローム粒・焼土粒・炭化物含有。粒子の粗い層。
- 2 黒褐色土 第1層より茶色強。ローム粒・焼土粒・炭化物含有。
- 3 黒褐色土 ロームブロック多、焼土粒少。
- 4 黒褐色土 ロームブロックは殆ど含まない、色調は第2層に類似。
- 5 黒褐色土 第4層より黒色が強い層。
- 6 黒色土 ローム粒・焼土粒上層より多。しまり強。

炉跡土層註記

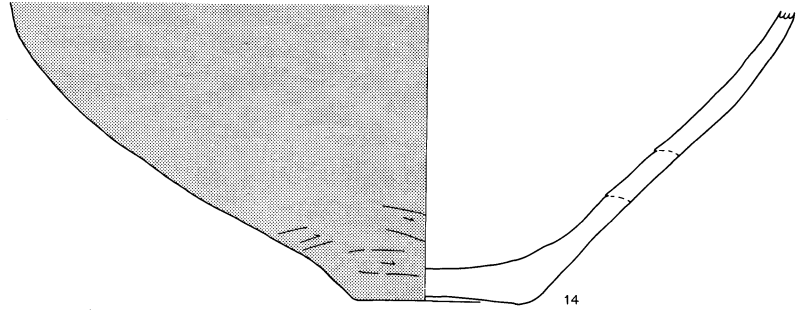
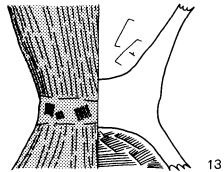
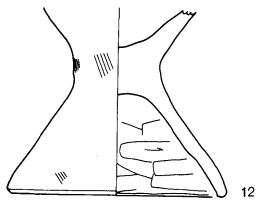
- 1 黒褐色土 カーボン若干。しまりやや弱、粘性やや強。
- 2 赤褐色土 焼土ブロック層中にカーボン少。しまり強、粘性弱。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック層中にカーボン・焼土粒少。しまり強、粘性弱。



第133図 第73号住居跡



第134图 第73号住居跡出土遺物(1)



0 10cm

第135図 第73号住居跡出土遺物(2)

第73号住居跡出土遺物 (第134図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	口径	(14.2)	口縁部上：内外面とも横ナデ。口縁部中～下：外面はナデ、内面はヘラナデ。茶褐色。	A+B+I+J 口径35 焼成：普
2	甕	口径	12.4	口唇部に木口状工具による刻み目。口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデ。胴部：外面はハケ目か、内面はハケ目。外面は熱のため非常に荒れている。赤褐色（一部黒色）。	A+B+J+小礫 口径100 胴60 焼成：やや不良
3	甕	口径	(15.1)	口縁部：外面はハケ目の後、横ナデ。胴部：外面はハケ目の後ナデか。内面上位はハケ目、中位はナデ。口唇部に木口状工具による刻み目。黒褐色。器面は荒れている。	A+B+G+J 口径25 胴35 焼成：普
4	甕	口径	(14.3)	口縁部：内外面ともハケ目の後、横ナデ。胴部：外面（熱の為）荒れている。口唇部に木口状工具による刻み目を施すが部分的。頸部～胴部上位：外面はハケ目、内面はハケ目とナデ。赤褐色。	A+B+E+J 口径20 頸20 焼成：普
5	甕	口径	(15.1)	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部上：内外面ともナデか。口唇部の刻み目は全周ではなく途切れる。外面は荒れている。赤褐色。	口縁～胴上半25 焼成：普
6	甕	口径	(18.8)	口縁部：外面はハケ目の後横ナデ。内面は横ナデ。胴部：外面はハケ目、内面はナデ。口唇部に木口状工具による刻み目。肩部の波状部は、6本単位で3段。波高は比較的低く、やや不鮮明。	A+B+D+J 口径30 胴30 焼成：普
7	甕	底径	7.4	胴部：外面はハケ目、内面上半はハケ目、下半はナデ。底部：内外面ともナデ。明赤褐色。	A+B+C+G 胴下半65 底65 焼成：普
8	壺	底径	6.8	胴部：外面はハケ目の後ナデ、内面はハケ目。底部：内外面ともナデ。橙色。	A+B+C+D+J 底100 焼成：普

9	壺	底径 現存高	6.9 4.5	胴部：外面はハケ目の後ナデ、内面はハケ目。底部外面はナデ。 橙色。	B+E+J 底100 焼成：やや不良
10	壺	底径 現存高	6.4 5.2	胴部：外面はハケ目、内面はヘラナデ。底部：外面はナデ、 内面はヘラナデ。褐色。	A+B+E+J 底100 胴下40 焼成：普
11	高 坏	口径 現存高	(27.5) 14.0	内外面とも丁寧なナデ。赤褐色。	A+B+D+I(多)+J 口 ・体35 焼成：良
12	台付甕	脚台径 現存高	11.3 9.7	脚台部：外面はハケ目の後ナデか、内面はヘラナデ。底部内面 はナデか。器面は荒れている。橙色（一部黒色）。	A+B+C+E+H 脚100 焼成：普
13	高 坏	現存高	8.6	外面はヘラ磨き。くびれ部に接合痕を残す。器面は摩滅著しい。 赤褐色（一部黒色）。	A+B+C+E+J 焼成：普
14	壺	底径 現存高	(9.0) 15.2	胴部：外面はヘラ整形の後ナデか、内面は不明。底部内面不明。 器面は摩滅著しい。赤褐色（一部黒色）。	A+D+H(多) 胴75 底45 焼成：不良

検出された壁面は直線的に立ち上がり、明確なものであった。支柱穴と貫しき柱穴は、検出されなかった。

ちなみに、P 3 - P 5 間の距離は、245cmを測る。各ピットの床面からのからの深さは、P 1が20cm・P 2が70cm・P 3が10cm・P 4が25cm・P 5が15cm・P 7が60cm・P 8 35cmを測り、P 2・P 7を除いて全体的に浅いピットである。

本住居跡の主軸上、北壁近くに炉跡が1基確認された。平面規模は、50cm×44cmの楕円形を呈し、床面からの深さは5cmを測る。壁溝や貯蔵穴は確認されなかった。

出土した遺物の点数は多く、そのうちから14点を図化することができた。

第74号住居跡（第136図）

第74号住居跡は、K38 a グリッドに位置する。遺構の南半分が、調査範囲外に続いている。調査し得た範囲からの推定平面規模は、長軸460cm・短軸380cm程が想定される。確認面からの深さは21cmを測り、平面形態については、隅丸の長方形が推定される。短軸方向の支柱穴2箇所が検出された。支柱穴間の距離は155cmを測り、床面からの深さは25cm・55cmである。主軸方向は、N-45° - W が想定される。壁溝は確認されておらず、貯蔵穴についても同様である。支柱穴を結んだ線上からやや内側の位置に、炉跡が1基確認された。平面規模は、70cm×54cmの楕円形を呈し、床面からの深さは16cmを測る。貼床面は比較的軟弱で、不明瞭である。

遺物は、ごく小数の土器片が出土したが、図化し得るものはなかった。

第75号住居跡（第137図）

第75号住居跡は、J 38 g グリッドに位置する。第98土壌や、数多くのピットに切られている。これらの他にも、耕作による攪乱を受けており、遺構の遺存状態は非常に悪い。エレベーション（第

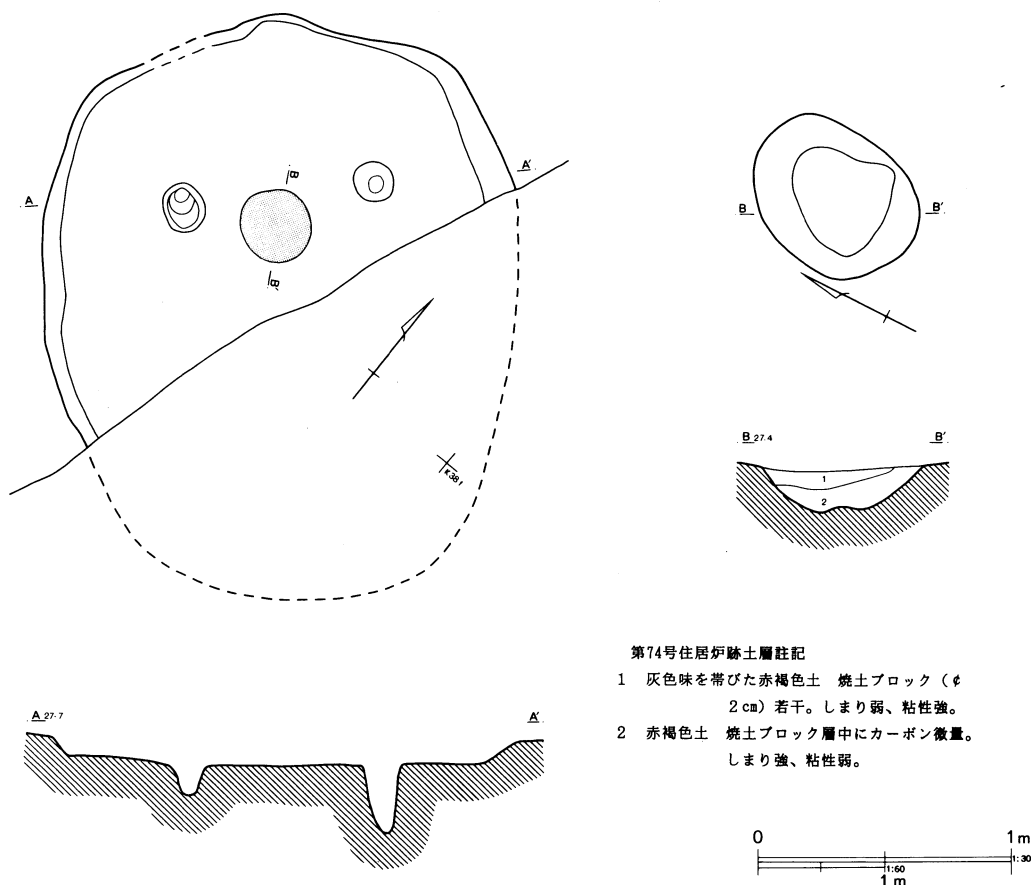
137図) A-A'、B-B' で、支柱穴を推定した。これ等のピット間の距離は、長軸方向で220cm・280cm、短軸方向で145cm・132cmを測り、確認面からの深さは北側のものから時計回りに、70cm・45cm・25cm・50cmとなる。支柱穴を結んだ線上、及びその内側に炉跡が検出された。平面規模・形態は、北側から68cm×64cm・略円形・深さ25cm、66cm×40cm・楕円形・深さ10cmである。

遺物の出土はなかった。

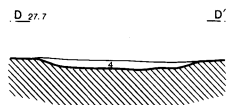
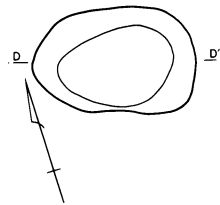
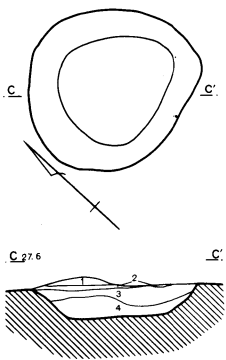
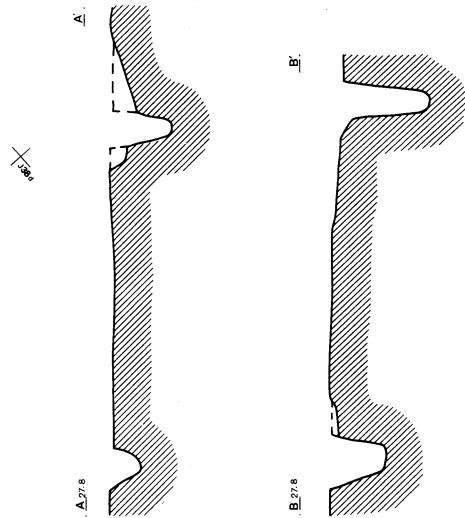
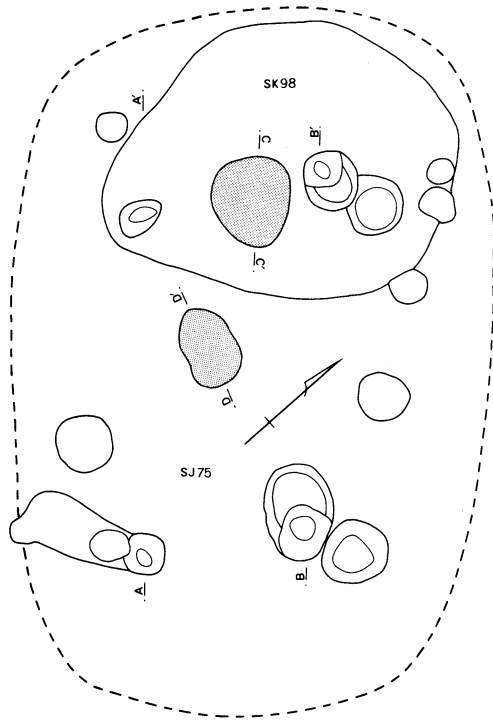
第76号住居跡 (第138図)

第76号住居跡は、J 38 f グリッドに位置する。北側を第26号溝跡に切られ、東側コーナー部分は調査範囲外に続く。平面規模は、長軸675cm・短軸490cmを測り、コーナーがやや丸味を帯びた長方形を呈す。主軸方向は N-47° - W を指し、近在する第74号住居跡 (N-45° - W) ・第77号住居跡 (N-52° - W) ・第78号住居跡 (N-41° - W) に比較的近い。確認面からの深さは10cmを測る。

支柱穴が4箇所と、梯子穴が検出された。各支柱穴間の距離は、長軸が275cm・290cm、短軸240cm・212cmを測り、長方形に規則正しく配置されている。各支柱穴の床面からの深さは、北側から時計回りに35cm・17cm・40cm・35cmを測り、全体的に浅い。貯蔵穴は確認されていない。南側に、ごく

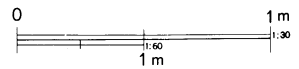


第136図 第74号住居跡

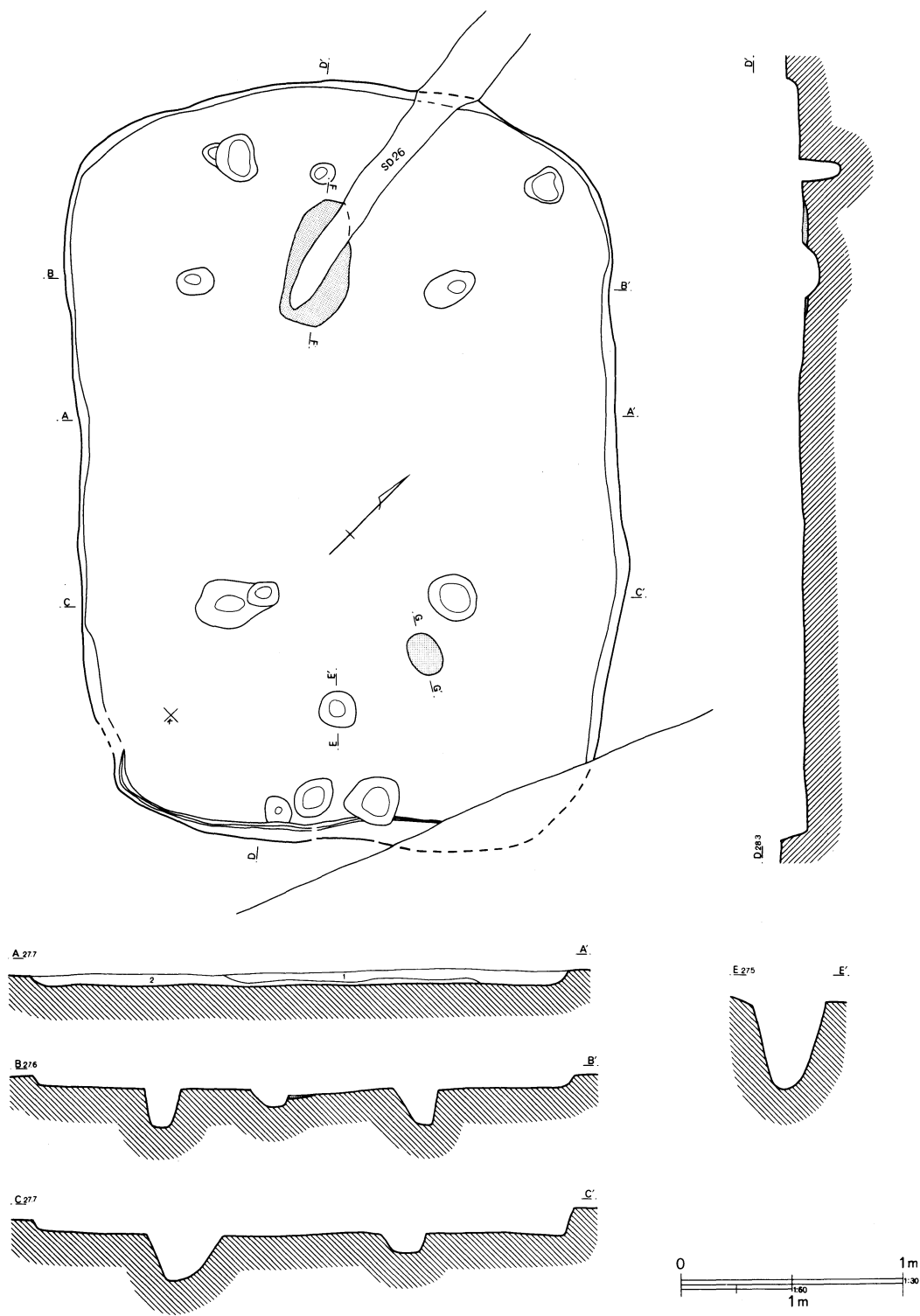


第75号住居跡土層註記 1・2共通

- 1 黒褐色土 カarbon若干・焼土粒少。しまり弱、粘性やや強。
- 2 黒色土 カarbon層中に焼土粒少。しまり弱、粘性やや強。
- 3 赤褐色土 焼土ブロック層中にCarbon少。しまり強、粘性弱。
- 4 暗黄褐色土 ロームブロック層中にCarbon・焼土粒少。しまり強、粘性弱。



第137図 第75号住居跡

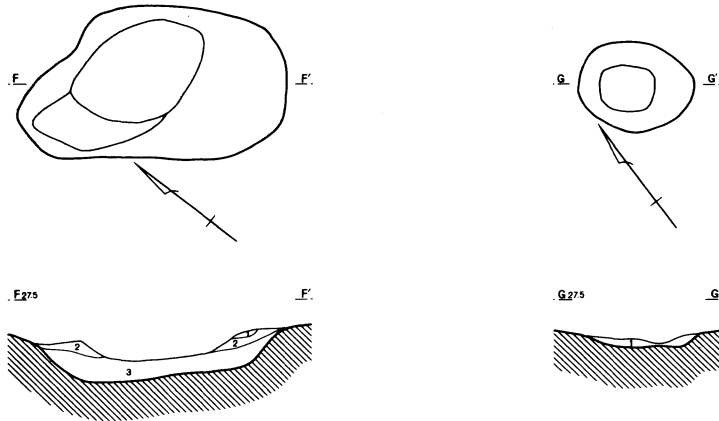


第138图 第76号住居跡

部分的にはあるが壁溝が確認され、その他の範囲ではみられなかった。

支柱穴を結んだ線上と、東側支柱穴脇に、炉跡が1箇所ずつ検出された。規模・確認面からの深さ等は、北側のものから108cm×60cm・平面楕円形・深さ20cm、45cm×35cm・平面楕円形・深さ10cmを測る。後者については、規模も小さく焼土層もごく浅いものであった。

遺構内に、幾つかのピットが検出されているが、いずれも本住居跡を切っていると思われ、伴うものではないと想定される。小数の土器片が出土したが、図化し得るものは3点であった。



第76号住居炉跡土層註記

炉1

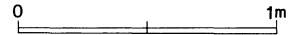
- 1 黒色土 カーボン層。しまり弱、粘性やや強。
- 2 赤褐色土 焼土ブロック層中にカーボン少。しまり強、粘性弱。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック層中にカーボン少。しまり強、粘性弱。

炉2

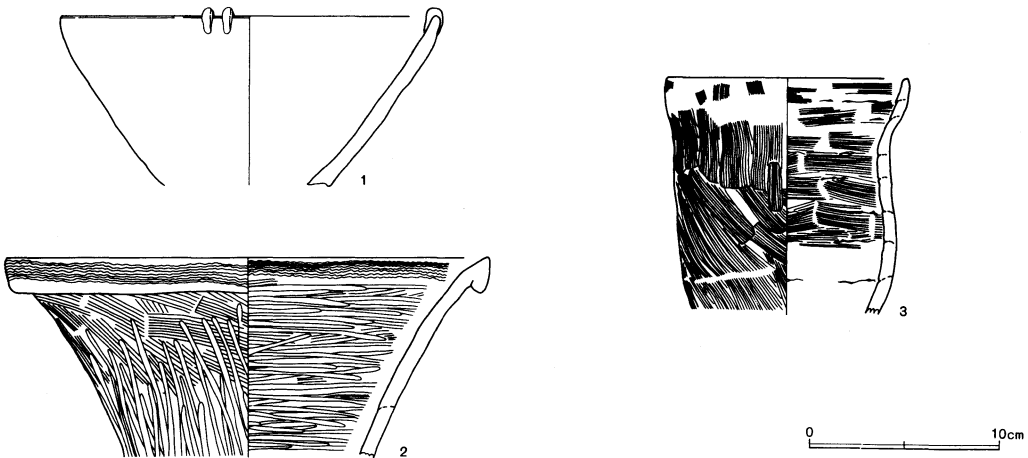
- 1 赤褐色土 焼土ブロック層中にカーボン若干。しまり強、粘性弱。

第76号住居跡土層註記

- 1 黒色土 ローム粒微量。しまり弱、粘性やや強。
- 2 黒褐色土 ローム粒・カーボン少。しまりやや弱、粘性やや強。
- 3 暗褐色土 ローム粒若干、カーボン少。しまりやや弱、粘性やや強。



第139図 第76号住居跡炉跡



第140図 第76号住居跡出土遺物

第76号住居跡出土遺物 (第140図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	高 杯	口 径 (19.5) 現存高 9.3	内外面ともに整形不明。器面は摩滅著しい。 口縁部の突帯は2本単位で4箇所。橙色。	A+B+I(多)+J 口15 焼成：普
2	壺	口 径 (25.3) 現存高 10.5	複合口縁部の内外面に、8本単位の櫛状工具による波状文を巡らせる。文様は線が浅く波高も小。複合口縁部：内外面とも横ナデ。頸部：内外面ともハケ目の後ヘラ磨き。橙色。	B+C+I+J 焼成：普
3	甕	口 径 12.3 胴 径 11.3 現存高 12.3	口縁部：内外面ともハケ目の後横ナデ。胴部：外面はハケ目。 内面上はハケ目、中はナデ。全体にススが附着。 口唇部に刻み目をもたない。赤褐色。	A+B+C+H 口100 胴60 焼成：不良

第77号住居跡 (第141・142図)

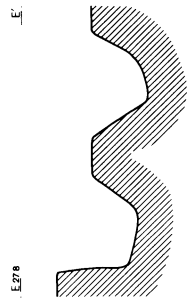
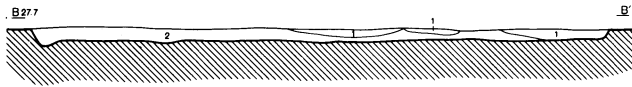
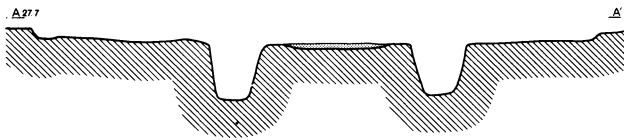
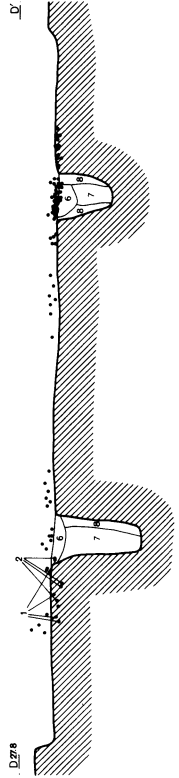
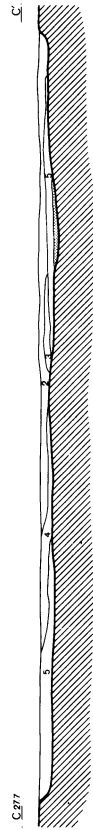
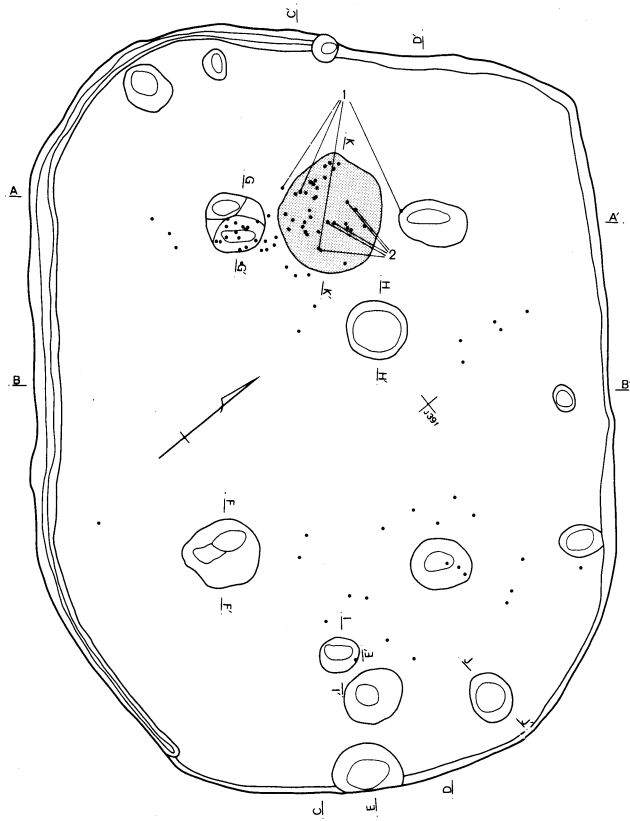
第77号住居跡は、J 39 b グリッドに位置する。確認面からの深さは7cmと浅いものの、幾つかのピットに切られているのみであり、平面規模・形態についてはほぼ全体を知ることができる。

平面規模は長軸596cm・短軸455cmを測り、隅丸の長方形を呈す。主軸方向は N-51° - W を指す。各支柱穴間の距離は、長軸で272cmと266cm・短軸で163cmと165cmを測り、長方形に規則正しく配置されている。各支柱穴の床面からの深さは、北側のものから時計回りに43cm・70cm・53cm・46cmである。西側で、長軸方向に並ぶ支柱穴は、別個のピットに切られている。あるいは、柱材の抜き取り痕今であろうか。エレベーション E-E'、または I-I' で示されるピットのいずれかが、梯子穴に相当すると考えられる。支柱穴を結んだ線上に、炉跡が検出された。規模は100cm×100cm・略円形・深さ22cmを測る。壁溝は、住居跡の北側から南側にかけて半周していた。

何点かの遺物が出土しているが、接合関係をもつのは、主に炉跡とその周辺からのものである。

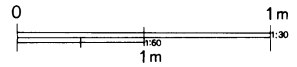
第77号住居跡出土遺物 (第143 図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口 径 (16.7) 胴 径 23.0 底 径 7.5 器 高 29.4	口唇部に木口状工具による刻み目。頸部に5本単位の櫛状工具による右回りの簾状文2段。文様は間隔が不統一で線も不鮮明。口縁部：内外面とも、ハケ目の後、粗い横ナデ。 胴部：外面はハケ目、内面上位はハケ目、下位は粗いハケ目とナデ。底部：内外面ともナデ。	A+B+H+J 口35 胴50 底95 焼成：普
2	甕	口 径 (10.8) 現存高 8.2	口唇部に木口状工具による刻み目。口縁部：内外面とも、ハケ目の後、粗い横ナデ。胴部：内外面ともハケ目。赤褐色。	A+B+D+J 口35 焼成：普
3	壺	胴 径 (10.5) 底 径 7.0 現存高 10.0	器面は荒れている。頸部に7本単位の櫛状工具による右回転の簾状文を1段残す。文様は比較的等間隔で明瞭。 胴部：外面はハケ目の後ナデ、内面は一部ハケ目の後ナデ。 底部：外面はヘラナデ、内面はナデ。橙色。	B+C+J(細密) 胴30 底100

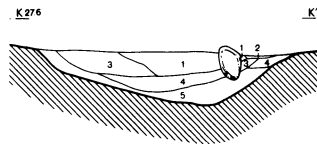
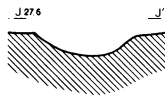
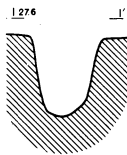
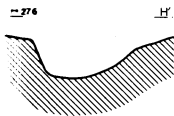
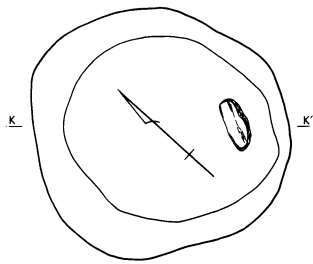
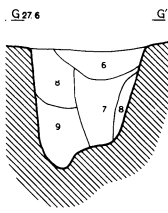
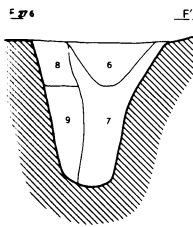


第77号住居跡土層註記 B-B' C-C' 共通

- 1 黒褐色土 カーボン少。しまり・粘性やや弱。
- 2 暗褐色土 カーボン・ローム粒少。しまり・粘性やや弱。
- 3 赤味を帯びた暗褐色土 焼土粒・カーボン。しまり・粘性やや弱。
- 4 黒褐色土 カーボン若干。しまり・粘性やや弱。
- 5 暗褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり・粘性やや弱。



第141図 第77号住居跡(1)



伊藤土層註記

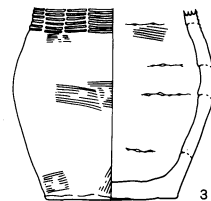
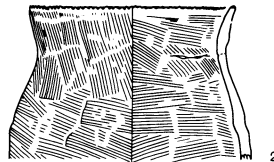
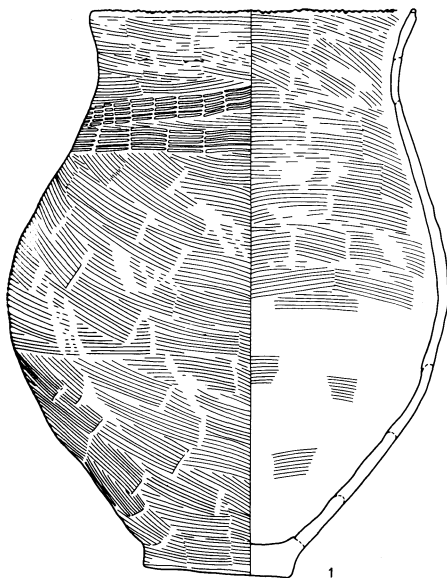
- 1 赤褐色土 焼土ブロック (φ 3 cm)、灰を多く含む、カーボン少。しまり・粘性やや強。
- 2 赤褐色土 焼土ブロック層中にカーボン少。しまり強粘性やや強。
- 3 黒褐色土 カーボン層中に焼土粒若干。しまり・粘性やや強。
- 4 赤褐色土 焼土ブロック層中にカーボン少。しまり強、粘性弱。
- 5 暗黄褐色土 ロームブロック層。しまり強、粘性弱。

第77号住居ビット土層註記 1~4共通

- 6 黒褐色土 焼土粒・カーボン少。しまり弱、粘性強。
- 7 暗褐色土 焼土ブロック・カーボン・ロームブロック少。しまり弱、粘性やや強。
- 8 暗褐色土 ロームブロック若干、カーボン少。しまりやや強、粘性やや強。
- 9 暗黄褐色土 ロームブロック (φ 3 cm) 多、ローム粒・カーボン少。しまり・粘性やや強。

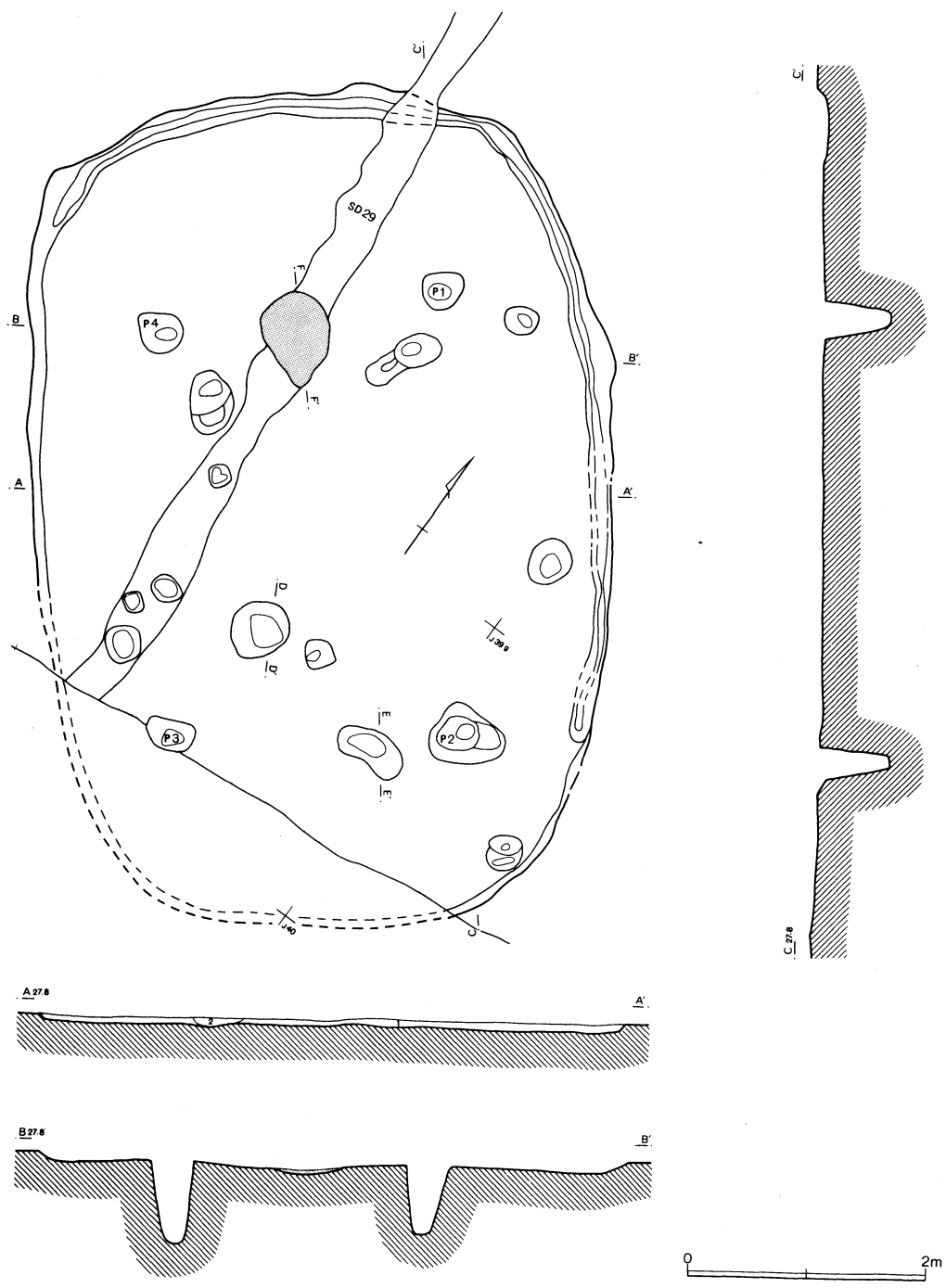
0 1m

第142図 第77号住居跡(2)

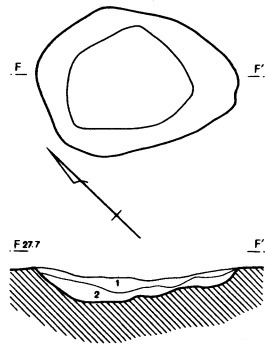
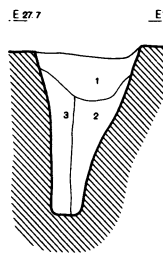
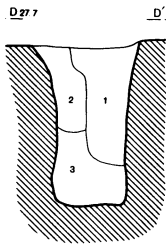


0 10cm

第143図 第77号住居跡出土遺物



第144图 第78号住居跡(1)



第78号住居ピット土層註記

E-E'

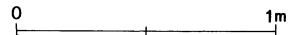
- 1 黒褐色土 ローム粒・カーボン微量。しまり弱、粘性やや強。
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ2cm)若干。しまり弱、粘性やや強。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多。しまり強、粘性やや強。

D-D'

- 1 黒褐色土 ローム粒・カーボン少。しまりやや弱、粘性やや強。
- 2 暗褐色土 ロームブロック(φ3cm)多。しまりやや強、粘性やや弱。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック(φ3cm)若干。しまりやや強、粘性やや弱。

炉跡土層註記

- 1 赤褐色土 焼土ブロック層中にカーボン少。しまり強、粘性弱。
- 2 暗黄褐色土 硬化したロームブロック層。しまり強、粘性弱。



第145図 第78号住居跡(2)

第78号住居跡 (第145図)

第78号住居跡は、I 39 e グリッドに位置する。第29号溝跡に切られ、南西コーナー付近が調査範囲外に続くほかはプランをよく残している。平面規模は長軸で推定 710cm・短軸で500cmを測る隅丸の長方形を呈し、確認面からの深さは10cm。主軸方向は N-41° -W を指す。

主柱穴間の距離は、P 1 - P 2 間で375cm・P 2 - P 3 間で252cm・P 3 - P 4 間で382cm・P 4 - P 5 間で240cmを測る。各主柱穴の貼床面からの深さは、P 1 が55cm・P 2 が60cm・P 4 が70cmである。貼床は面は、比較的堅固であった。

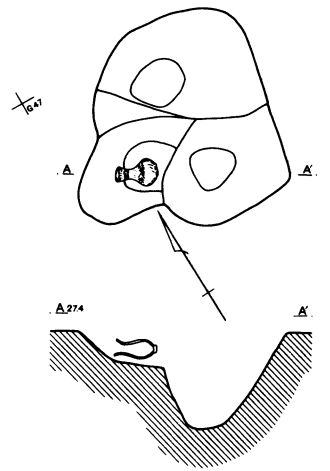
壁溝は東側コーナー付近と、西側壁面付近で途切れる。貯蔵穴は検出されなかった。

小破片がごく小数出土したが、図化し得るものはなかった。

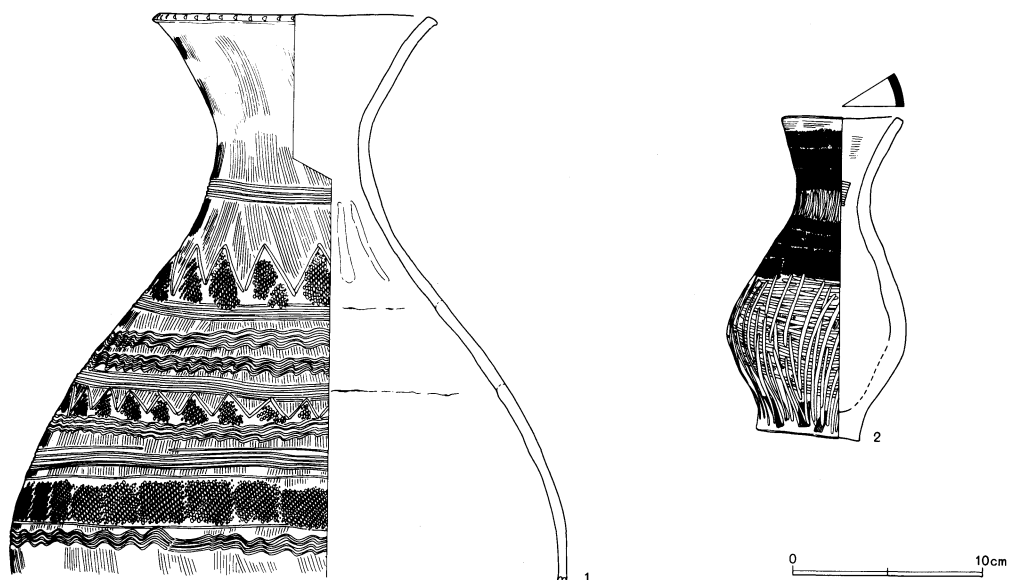
第79号住居跡 (第146図)

第79号住居跡は、G 47 g グリッドに位置する。46グリッド近辺から南の区域では、土葬墓をはじめとして、土壇・ピット・溝跡・方形周溝墓・古墳跡等、さまざまな遺構が存在しており、住居跡のプランを得ることはできず、貯蔵穴のみ検出であった。また、貯蔵穴の周辺においても、床面などの痕跡はみられず、既に失われているものと推定された。

貯蔵穴そのものについても、2基のピットに切られているため、全体の規模・形態については不明である。規模・形態は、長軸は推定57cm・短軸は34cmを測る。確認面からの深さは13cmである。図化できる遺物は、2点の出土である。



第146図 第79号住居跡



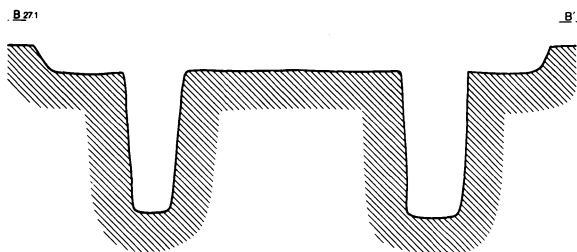
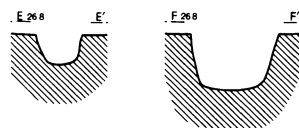
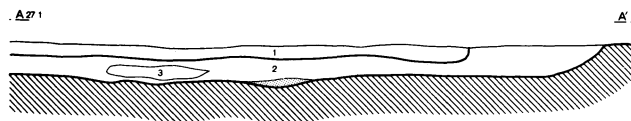
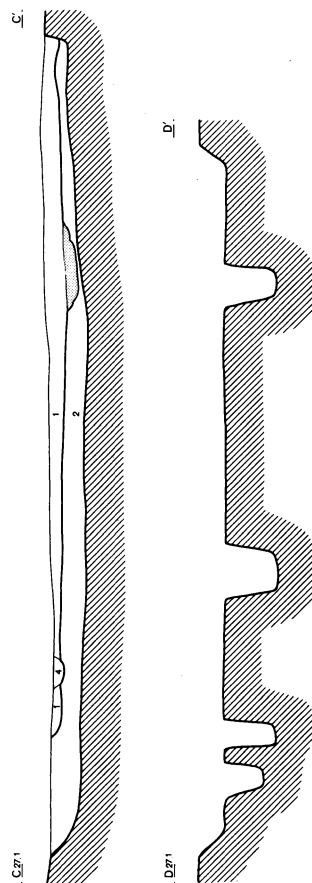
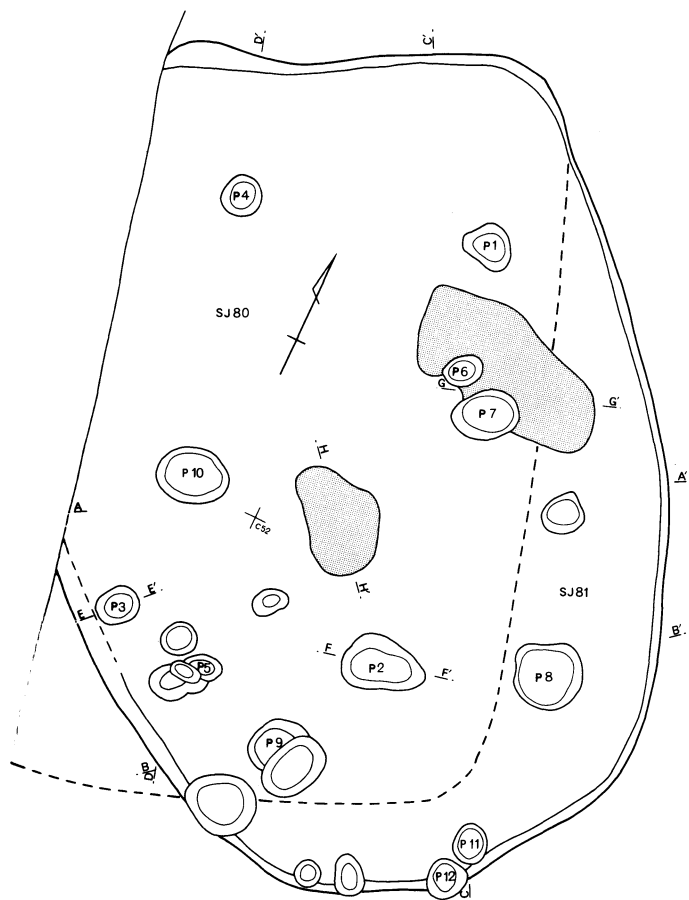
第147図 第79号住居跡出土遺物

第79号住居跡出土遺物 (第147図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	口径 (14.0) 胴径 (29.2) 現存高 29.5	器面はやや摩滅している。口唇部に刺突文一巡。4本単位の櫛状工具とヘラ状工具による施文。頸部～肩部の施文は上位より櫛描横線文－ヘラ描山形文－LR縄文－櫛描横線－櫛描波状文2段－櫛描横線文－ヘラ描山形文－LR縄文－櫛描波状文－ヘラ描横線文－櫛描横線文－ヘラ描横線文－LR縄文－ヘラ描横線文－櫛描波状文。文様は比較的鮮明。口縁部：外面はハケ目の後横ナデ、内面は横ナデか。頸部～胴部：外面はハケ目の後施文、内面はナデと指頭による押捺。胴部：内面はナデ。黄橙色。	A+B+D+H+J □45 胴40 焼成：普
2	壺	口径 (14.0) 胴径 (29.2) 現存高 29.5 器高 16.9	口唇部にLR縄文。頸部に上からLR－RL－LR。肩部に上からLR－RL－LR縄文。口縁部：内外面とも、ハケ目の後横ナデ。胴部：外面はハケ目の後、ヘラ磨き、内面はナデか。底部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はナデか。全体的に丁寧なつくりである。外面は黒色、内面は褐色。	A+B+H+J 完形 焼成：普

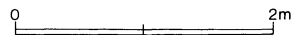
第80号・第81号住居跡 (第148・149図)

第80号・第81号住居跡は、C51d・C51dグリッドに位置する。両住居跡は重複している。西側は調査範囲外に続いている。遺存状況が悪く、遺構の切り合いについても不明瞭であり、遺構調査の段階ではプランの確認が非常に困難であった。検出された平面規模・形態及び、炉跡の位置やピット等々から、2軒の住居跡を想定した。第80号住居跡の主柱穴として、P1～P4と推定した。各ピット間の距離は、P1－P2間で336cm・P2－P3間で220cm・P3－P4間で333cm・P4－P5間で202cmを測る。各ピットの確認面からの深さは、P2が45cm・P3が20cm・P4が42cm



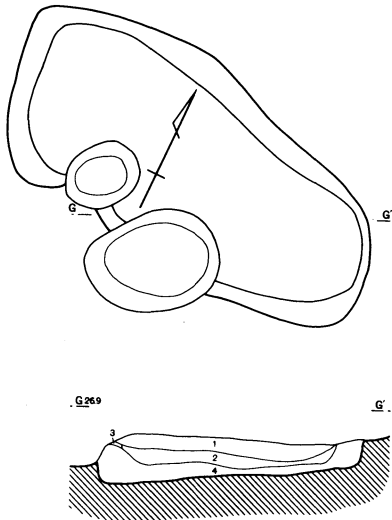
第80・81号住居跡土層註記

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含有。(S J - 80覆土)
- 2 褐色土 ロームブロック多。一度に埋め戻されている。
- 3 黄褐色土 ロームブロック層。
- 4 攪乱



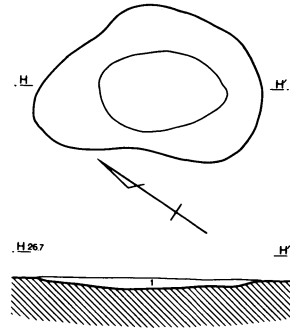
第148図 第80・81号住居跡(1)

となる。推定平面規模は、長軸585cmであり、主軸方向はN-8°-Wが推定され、N-37°-Wを指す第81号住居跡とは若干のズレをもつ。平面形態は、コーナーに丸味をもった長方形を呈すと推定される。確認面からの深さは22cmを測る。第81号住居跡の主柱穴として、P7~P10を想定した。各ピット間の距離は、P7-P8間で212cm・P8-P9間で230cm・P9-P10間で225cm・P10-P7間で235cmを測る。各ピットの確認面からの深さについては、P8が115cm・P9が110cmと



第80号住居跡炉土層註記 炉1

- 1 黒褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物含有。しまり中。
- 2 明赤褐色土 焼土層、焼きしまっている。
- 3 黄褐色土 ロームを主体とする層。しまり強。



- 4 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック含有。しまり強。

81号住居跡炉土層註記 炉2

- 1 赤褐色土 焼土粒多、カーボン少。しまり強、粘性弱。

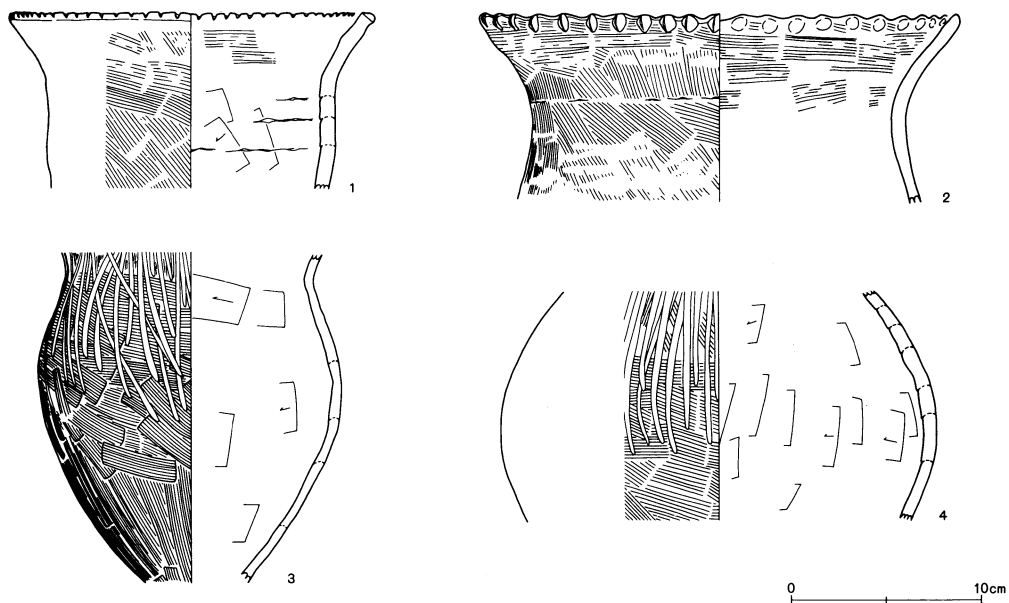


第149図 第80・81号住居跡②

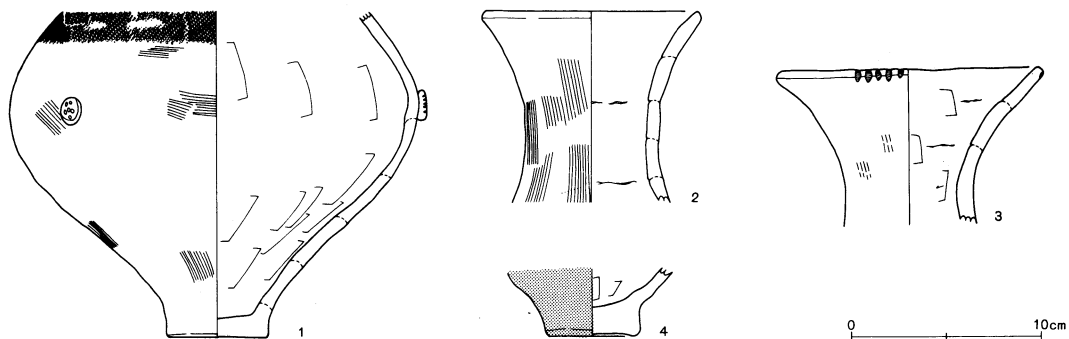
第80号住居跡出土遺物 (第150図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径 (17.8) 胴径 15.0 現存高 9.2	口唇部に木口状工具による刻み目。口縁部：内外面とも、ハケ目の後横ナデ。胴部：外面はハケ目、内面はヘラナデ。外面にスス付着。黒褐色（内面褐色）。	A+B+H+J 口15 焼成：やや良
2	甕	口径 (24.8) 現存高 9.8	口縁部：内外面とも、ハケ目の後横ナデ。口縁に指頭による相互押捺。胴部：外面はハケ目の後一部ナデ、内面はナデ。灰黄褐色。	B+E+H+J 口45 焼成：やや良
3	甕	現存高 17.2	胴部：外面はハケ目の後上半を粗いヘラ磨き、内面はヘラナデ。	B+J 胴75 焼成：やや良
4	壺	胴径 (23.0) 現存高 12.0	胴部：外面はハケ目の後、上半を粗いヘラ磨き、内面はヘラナデ。明赤褐色（一部黒色）。	B+I+J 胴40 焼成：普

深い柱穴である。本住居跡は短軸方向で490cmである。平面形態は、隅丸の長方形を呈すと推定される。確認面からの深さは、22cmを測る。P7～P10が支柱穴であれば、北側の範囲は一回り小さくなるとも考えられる。検出された炉跡は、共に本住居跡に伴うものであろうか。出土遺物については、その出土地点から2軒分として掲げた(第150図・第151図)。しかし、遺構の切り合い関係が不明確であり、遺物自体にも、大きな時期差がみられない。共に、同一住居跡に伴う遺物という可能性も否定できない。その場合、第80号・第81号住居跡のうち、後出の遺構に帰属すると考えられ、第81号住居跡にその確率が高いと推定される。



第150図 第80号住居跡出土遺物



第151図 第81号住居跡出土遺物

第81号住居跡出土遺物 (第151図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	胴径 (21.4) 底径 5.1 現存高 16.9	肩部にLR縄文2段。胴部の円形浮文は2個1単位で1対と思われる。器面はやや摩滅している。胴部：外面はハケ目の後ナデか。内面はヘラナデ。底部：内外面ともナデ。橙色。	B+D+F+J 胴50 底100 焼成：普
2	壺	口径 (11.2) 現存高 20.0	口縁部：内外面ともに横ナデ。頸部：外面はハケ目の後ナデ、内面はナデ。褐色（一部黒褐色）。	B+E+J 口20 焼成：やや良
3	壺	口径 (13.4) 現存高 8.1	器面は摩滅著しい。口縁に木口状工具による部分的押捺。口縁部：内外面ともに横ナデか。頸部：外面はハケ目の後ナデか、内面はヘラナデ。8個1単位の刻み目は1対か。赤褐色。	B+E+I(多)+J 口80 焼成：普
4	壺	底径 4.6 現存高 3.5	胴部：外面はナデ、内面～底部内面はナデとヘラナデ。底部：外面はヘラ削り。赤褐色。	B+H+J 底100 焼成：普

第82号住居跡(第152図)

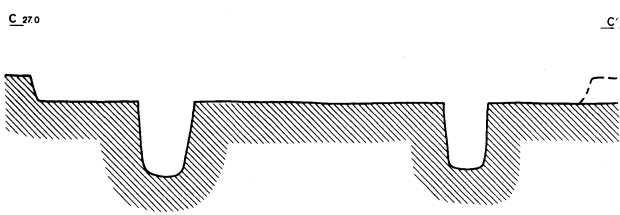
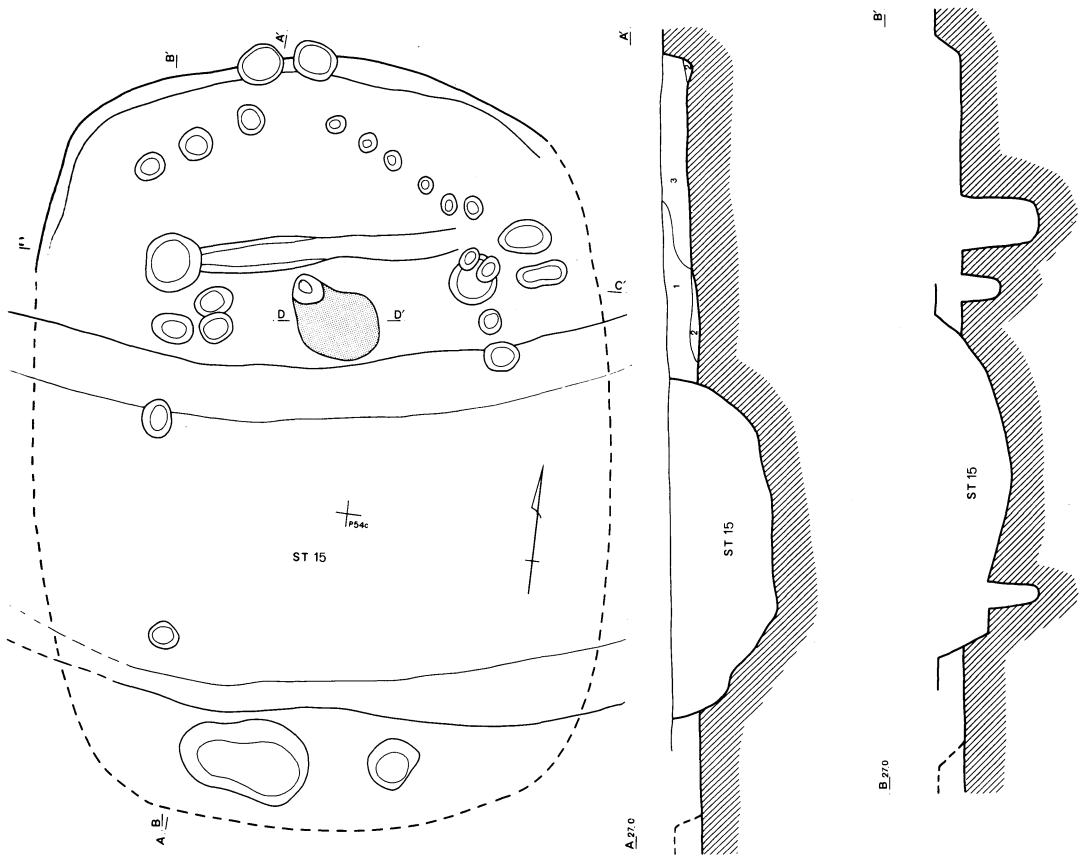
第82号住居跡は、D54 e グリッドに位置する。中央部分を第15号古墳跡に切られるほか、多数のピットと重複しており、その大部分は本住居跡を切っているものと推定される。南側では、第83号住居跡と重複しているが、本住居跡切っていると考えられる。全体的に、遺構の遺存状態は非常に悪い。

エレベーション(第152図) C-C'、D-D' で支柱穴を想定した。ピット間の距離は、長軸286cm・短軸236cm、確認面からの深さは16cmを測る。平面形態は、隅丸の長方形を呈すると推定される。確認された床面からの深さは、北東部のピットから時計回りに47cm・55cm・58cmを測り、比較的しっかりとて明確な柱穴である。3箇所の支柱穴をもとに、主軸方向はN-7°-Wが推定される。支柱穴を結んだ線より内側に、炉跡が1箇所検出された。平面規模は61cm×52cmの楕円形、確認面からの深さは20cmを測る。貯蔵穴は確認されていない。検出し得た北側壁面の範囲では、壁溝は認められなかった。また、住居跡そのものの遺存状態が悪いためもあり、床面についても明確には確認することはできなかった。

ごく小数の遺物片が出土したが、図化し得たものは1点のみであった。

第82号住居跡出土遺物 (第152図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	胴径 (32.5) 現存高 30.5	胴部はほぼ球形を呈す。胴部：外面はハケ目の後ナデ、その後上位のみ粗いヘラ磨き。内面上はハケ目とヘラナデの後ナ 胴15 デ、下はヘラナデの後ナデ。暗茶褐色。	A+B+H+J 焼成：普

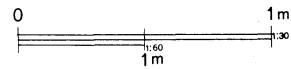
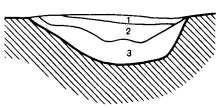
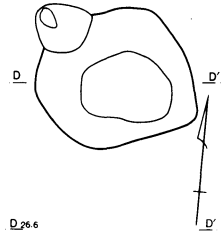


第82号住居跡土層註記

- 1 茶褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物含有、粒子の粗い層。
- 2 茶褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物含有。粘性有。
- 3 茶褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物・ロームブロック含有。
- 4 黄褐色土 ロームを主体とする層。

炉跡土層註記

- 1 黒褐色土 焼土粒子・炭化物少量含有。
- 2 赤褐色土 ロームの赤色化した部分。
- 3 暗橙褐色土 ロームの火熱した部分、ザクザクのロームが詰まっている。



第152図 第82号住居跡



第153図 第82号住居跡出土遺物

第83号住居跡 (第154図)

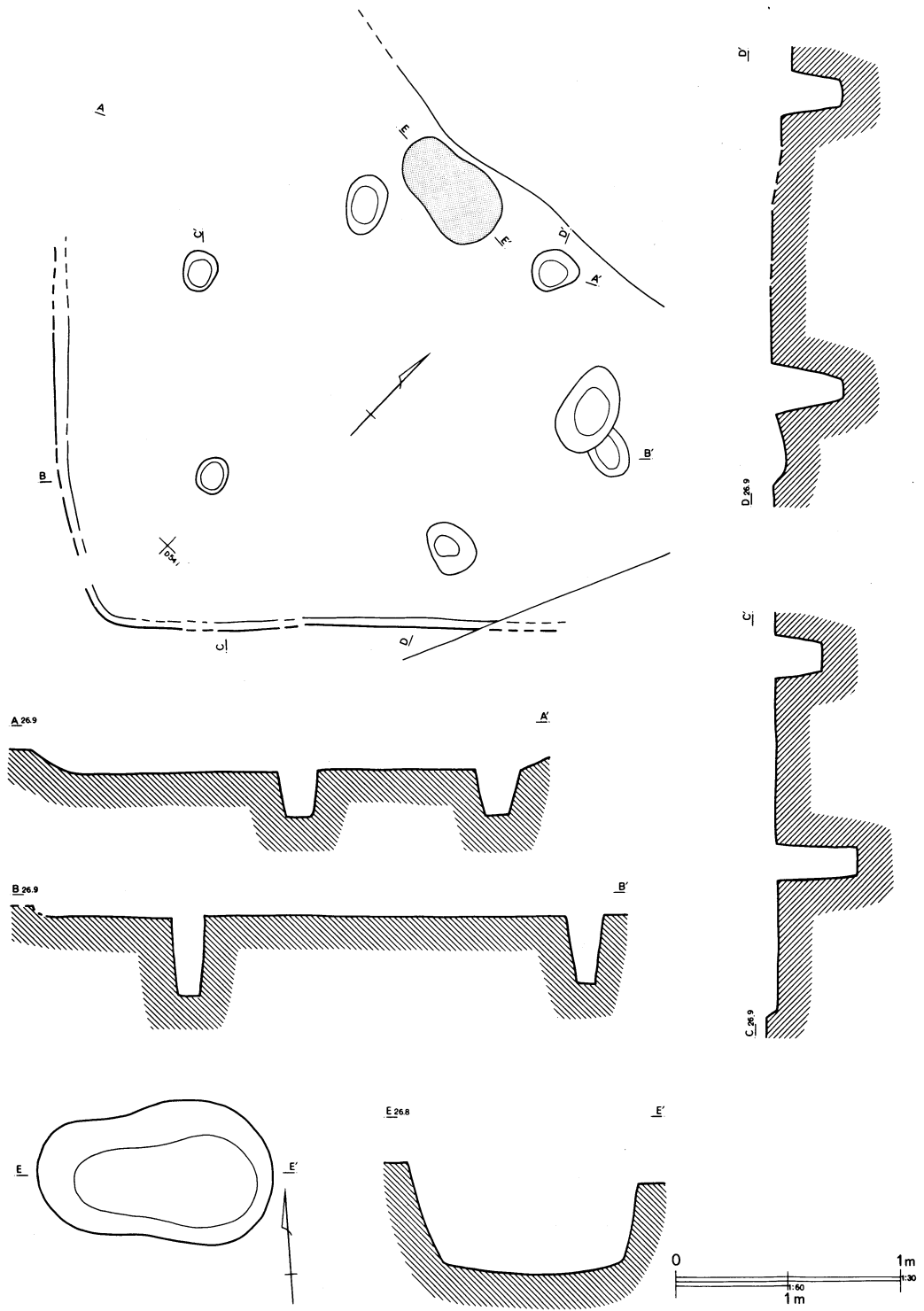
第83号住居跡は、C54 i グリッドに位置する。北側を第15号古墳跡に切られ、東側の一部は調査範囲外に続く。西側については第82号住居跡と重複しているが、本住居跡が切っていると推定される。これらの他にも、耕作による攪乱が著しく、遺存状態の非常に悪い住居跡であるといえる。遺構内に位置するピットが7基検出されているが、本住居跡との関連については不明である。

第83号住居跡に伴うものとして、炉跡1箇所とコーナー部分が1箇所検出されたのみである。確認面からの深さは17cmを測り、平面形態は方形または長方形が推定される。

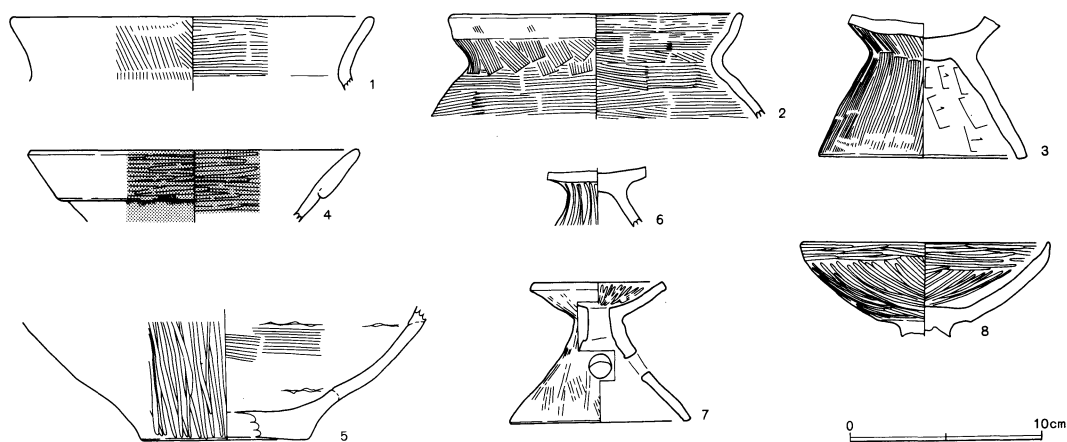
参考として、エレベーション図から得られた、ピット間の距離・確認面からの深さを掲げておく。括弧内の数値が深さを示す。A (39cm) - A' (41cm) 間で181cm、B (68cm) - B' (58cm) 間で358cm、C (70cm) - C' (40cm) 間で178cm、D (62cm) - D' (56cm) 間で270cmを測る。コーナーが1箇所確認されたのみであり、主軸方向については不明である。

炉跡については、平面規模は106cm×60cmを測り、平面楕円形。確認面からの深さは、45cmを測る。住居跡として確認することまではできたが、床面は既に失われており、様子を知ることはできなかった。

遺存状態の割には出土遺物が多く、図化し得た土器は8点である。



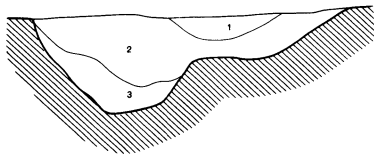
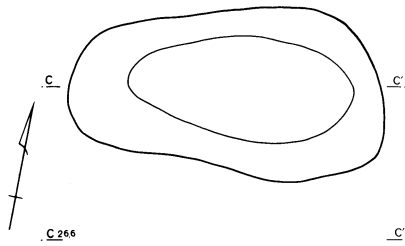
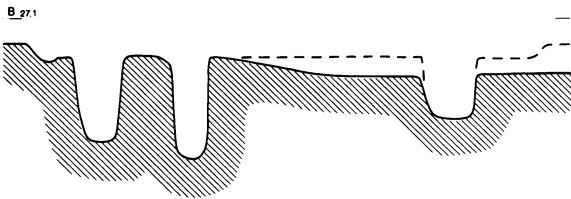
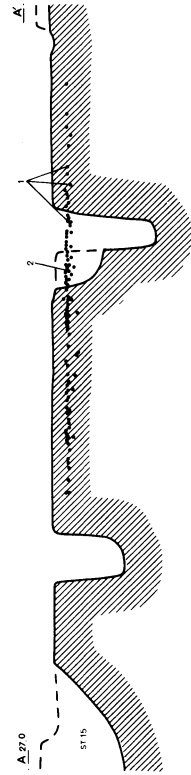
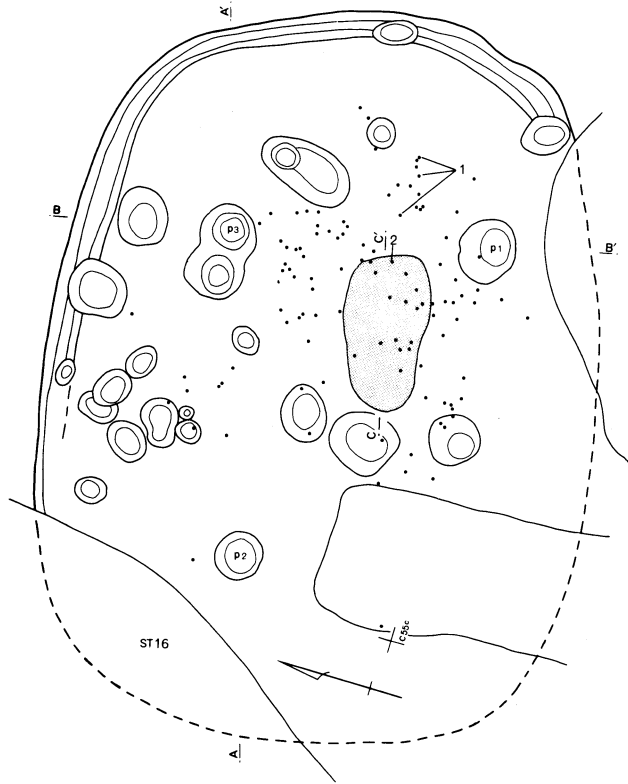
第154图 第83号住居跡



第155図 第83号住居跡出土遺物

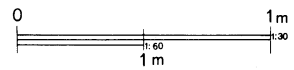
第83号住居跡出土遺物 (第155図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径 (18.7) 現存高 3.8	口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデ。 褐色。	B+E+J 口40 焼成：普
2	甕	口径 (15.0) 現存高 7.2	口縁部：内外面ともハケ目の後横ナデ。胴部：内外面ともハケ目。黒褐色。	A+B+J 口20 焼成：やや良
3	台付甕	脚台径 11.2 現存高 6.9	胴部・底部：内外面ともナデ。脚台部：外面はハケ目、内面はヘラナデ。脚台端部：内外面とも粗い横ナデ。橙色。	A+B+I+J 脚85 焼成：普
4	壺	口径 (17.0) 現存高 3.8	口縁部：外面はハケ目の後ヘラ磨き、内面はヘラ磨き。 暗茶褐色。	A+B+I(多) 口55 焼成：普
5	壺	底径 (8.4) 現存高 6.8	胴部：外面はヘラ磨き、内面はハケ目とナデ。底部：内外面ともナデ。褐色。	B+G+J(細密) 底35 焼成：やや良
6	高 坏	現存高 2.9	坏部：内外面ともヘラ磨き。脚台部：外面はヘラ磨き、内面はナデ。黄褐色。	B+I+J(細密) 焼成：良
7	器 台	口径 6.7 器 高 7.3 脚台径 9.1	器面はやや摩滅している。坏部：外面はヘラ磨きか、内面はヘラ磨き。脚台部：外面はハケ目の後ヘラ磨きか、内面はナデ。穿孔3箇所。橙色。	A+B+E+J 坏70 脚80 焼成：普
8	高 坏	口径 (12.7) 現存高 4.9	坏部：内外面とも丁寧なヘラ磨き。橙色（一部黒色）。	B+G+J(細密) 坏70 焼成：良

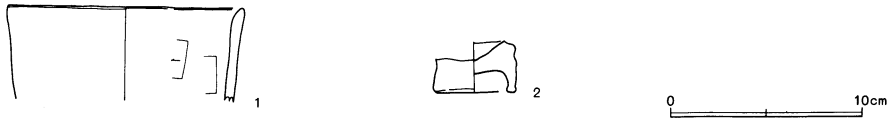


第84号住居跡土層註記

- 1 赤褐色土 焼土。
- 2 暗褐色土 若干の炭化物と焼土粒子を含む。
- 3 黒褐色土 ロームブロック少量含む。



第156図 第84号住居跡



第157図 第84号住居跡出土遺物

第84号住居跡 (第156図)

第84号住居跡は、C55hグリッドに位置する。南側に攪乱を受けており、さらに土壌に切られる。西側については、第16号古墳跡に切られている。北側と東側でプランが確認されたのみであり、遺構の遺存状況は非常に悪い。平面規模は推定で、長軸574cm・短軸435cm、確認面からの深さは10cmを測り、平面形態は隅丸の長方形が推定される。P1～P3を支柱穴として推定した。各ピット間の距離は、P2-P3間が60cm・P3-P4間が205cmを測る。各支柱穴の確認面からの深さは、P1が50cm・P2が57cm・P3が80cmを測り、比較的しっかりとした明確な柱穴であるといえる。南西部分の支柱穴については、土壌に切られていると判断される。主軸方向はN-78°-Eが推定される。遺存していたのは全体の半分ほどであり、その範囲内においては、壁溝が巡っている。貯蔵穴・梯子穴等については検出されていない。支柱穴を結んだ線の内側やや東寄りに、炉跡が1基認められた。

規模は122cm×52cmの楕円形、深さは38cmを測る。図化し得た遺物は、2点である。

第84号住居跡出土遺物 (第157図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	口径 (12.2) 現存高 4.9	口縁部：外面はヘラ削りの後ナデか、内面はナデ。 赤褐色。	A+B+E+J (細密) 口25 焼成：普
2	手捏ね	脚台径 4.1 現存高 2.6	全面ナデ。褐色 (一部黒色)。	B+G+J 脚90 焼成：普

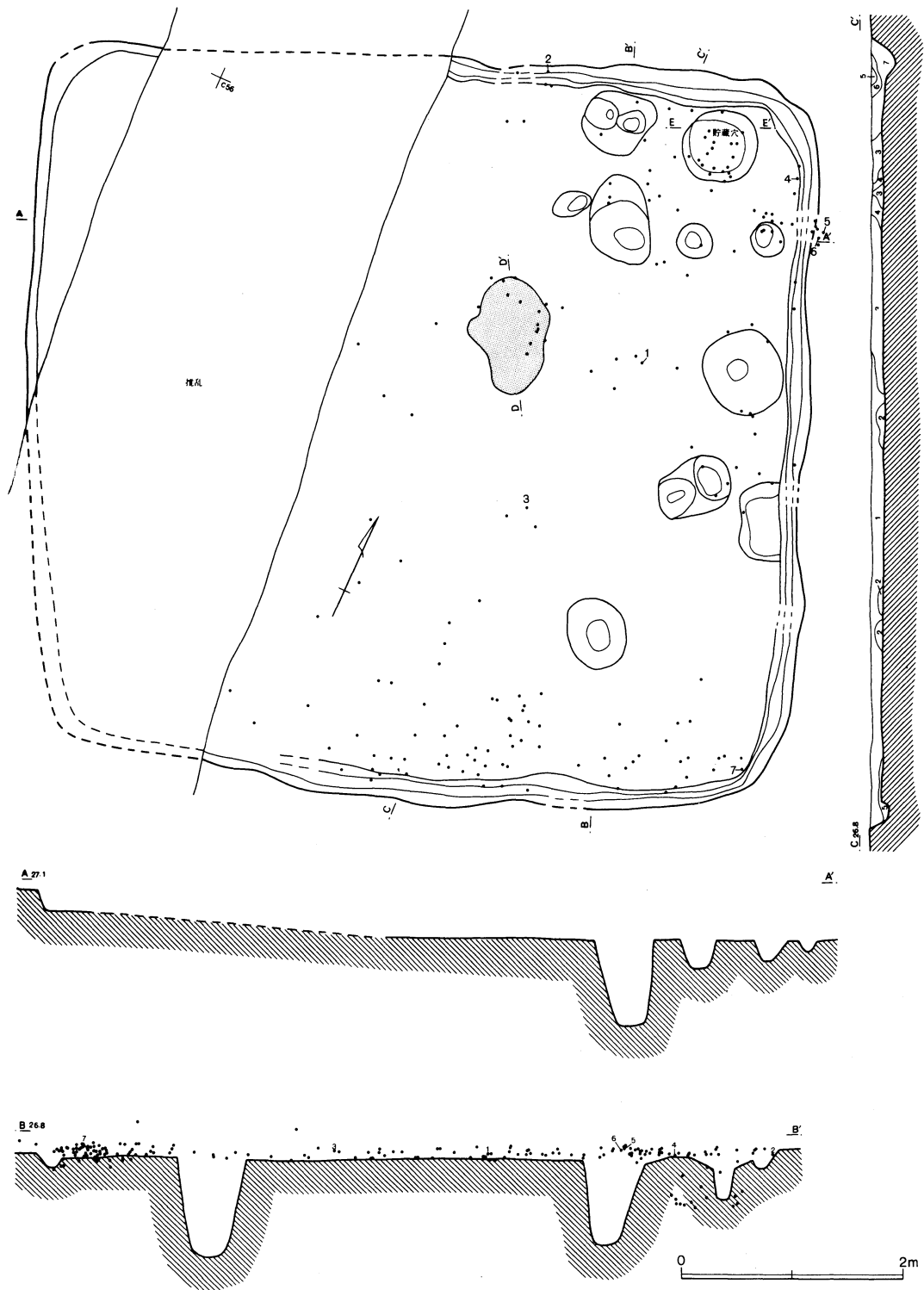
第85号住居跡 (第158・159図)

第85号住居跡は、C57bグリッドに位置する。西側を水道管によって切られるが、さらにその西側にコーナー部分が検出され、遺構の平面規模・形態を得ることができた。

平面規模は、長軸712cm・短軸688cmのほぼ方形を呈し、確認面からの深さは20cmを測る。主軸方向はN-70°-Eを指すが、あるいはN-20°-Wとすべきであろうか。短軸方向の、支柱穴2箇所が検出された。距離は369cmであり、確認面からの深さは80cmと90cmを測る。

北東コーナー部分に、貯蔵穴が確認された。平面規模は68cm×64cmの略円形、深さは47cmを測る。支柱穴を結んだ線のやや内側に炉跡が1箇所検出された。平面規模は88cm×70cmの楕円形、床面からの深さは12cmを測る。西側部分以外では、壁溝が確認された。

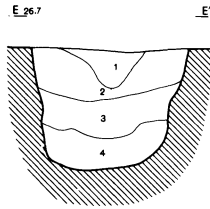
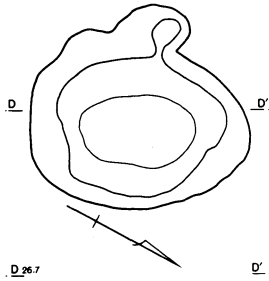
貯蔵穴周辺・炉周辺・南壁面付近に、遺物の出土が多くみられた。図化し得たのは7点である。



第158图 第85号住居跡(1)

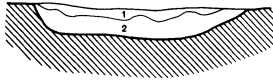
第85号住居跡土層註記

- | | | | |
|--------|-------------------------------------|---------|--------------------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒・若干のロームブロック・焼土粒・炭化物含有。しまり強、粘性弱。 | 4 暗黄褐色土 | ローム粒が集中する、3層内のブロック。 |
| 2 暗褐色土 | 1層に類似。1層よりローム粒多。 | 5 暗褐色土 | ソフトローム層、色調暗い、粒子粗い、焼土粒含有。 |
| 3 暗褐色土 | 1層に類似。2層よりローム粒多。 | 6 暗褐色土 | 5層より焼土粒多。 |
| | | 7 暗褐色土 | 一部焼土ブロックが見られる。 |



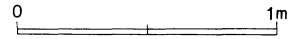
貯蔵穴土層註記

- | | |
|---------|-------------------------|
| 1 暗茶褐色土 | 焼土粒・ローム粒・炭化物を含有。 |
| 2 明赤褐色土 | 第1層に類似。焼土粒多、炭化物・ローム粒含有。 |
| 3 暗茶褐色土 | 焼土粒・ローム粒・ロームブロック・炭化物含有。 |
| 4 黒色土 | ローム粒少。粘性強。 |

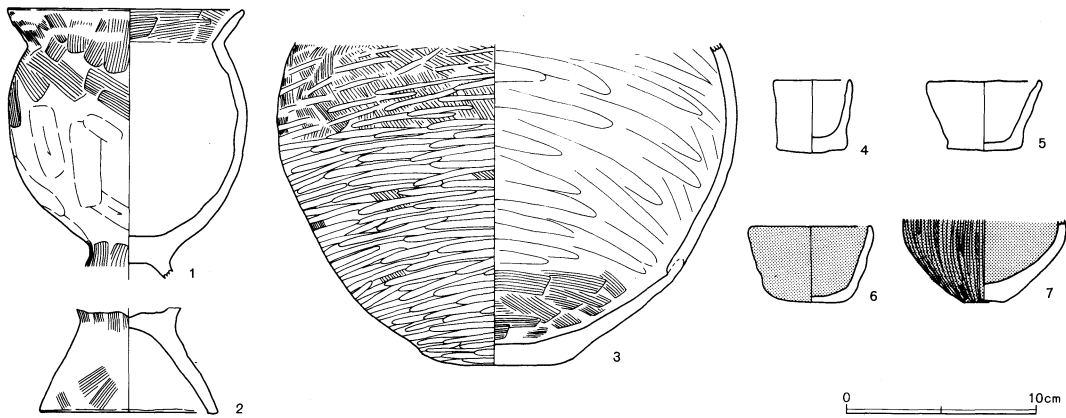


炉跡土層註記

- | | |
|--------|------------------------------|
| 1 暗褐色土 | カーボン・焼土粒・ローム粒少。しまりやや弱、粘性やや強。 |
| 2 赤褐色土 | 焼土ブロック層中にカーボン少。しまり強、粘性弱。 |



第159図 第85号住居跡(2)



第160図 第85号住居跡出土遺物

第85号住居跡出土遺物 (第160図)

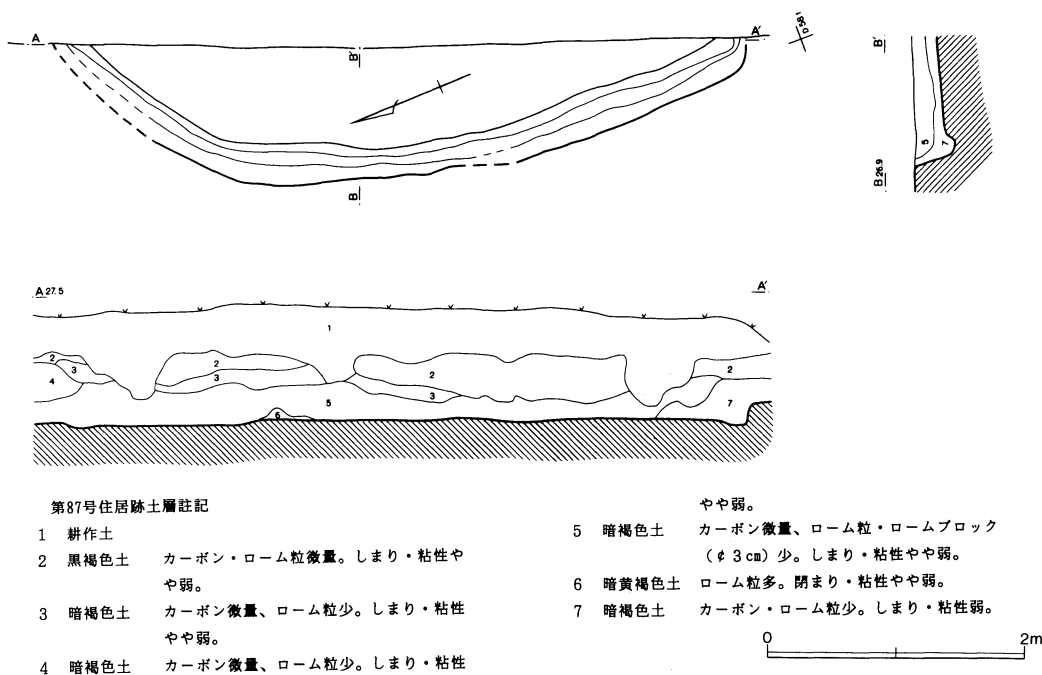
番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	台付甕	口径	12.3	器面は荒れている。口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデ。胴部：外面上位は粗いハケ目、中～下位は粗いへら削りの後粗いナデ。内面はナデ。脚台部上：外面は粗いハケ目か内面はナデ。整形は非常に雑。橙色（一部黒色）。	A(多)+B+C+H
		胴径	12.4		口65 胴70
		現存高	14.0		焼成：やや不良
2	台付甕	脚台径	9.2	脚台部：外面はハケ目の後ナデ、内面はナデ。にぶい橙色。	A+B+E+H+J 脚60
		現存高	5.5		焼成：普
3	壺	胴径	(24.0)	器面は剝離部分多。胴部：外面上位はハケ目の後へら磨き。内面中位は指によるナデ付け、下位はハケ目。底部：外面は	A+B+D+H
		底径	5.0		底100

4	手捏ね	現存高	16.7	ヘラ磨き、内面はハケ目。橙色。	焼成：良
		口径	3.9	全面ナデ。にぶい橙色。	A+B+C+G
		底径	3.5		完形
		器高	3.7		焼成：普
5	手捏ね	口径	5.8	全面ナデ。橙色（一部黒色）。	A+B+C+G
		底径	3.8		完形
		器高	3.6		焼成：普
6	手捏ね	口径	6.3	全面ナデ。赤橙色（一部黒斑）。	A+B+C+H
		底径	3.4		口85 体100
		器高	4.0		焼成：普
7	小型壺	胴径	(8.5)	胴部：外面は丁寧なヘラ磨き、内面は丁寧なナデ。底部：外面はヘラ削り、内面は丁寧なナデ。赤褐色。	A+B+J
		底径	2.2		底100 胴下25
		現存高	4.3		焼成：やや良

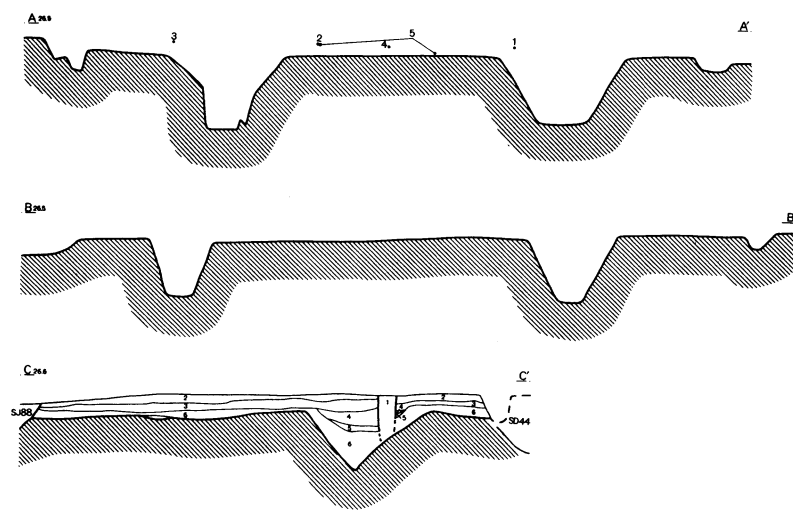
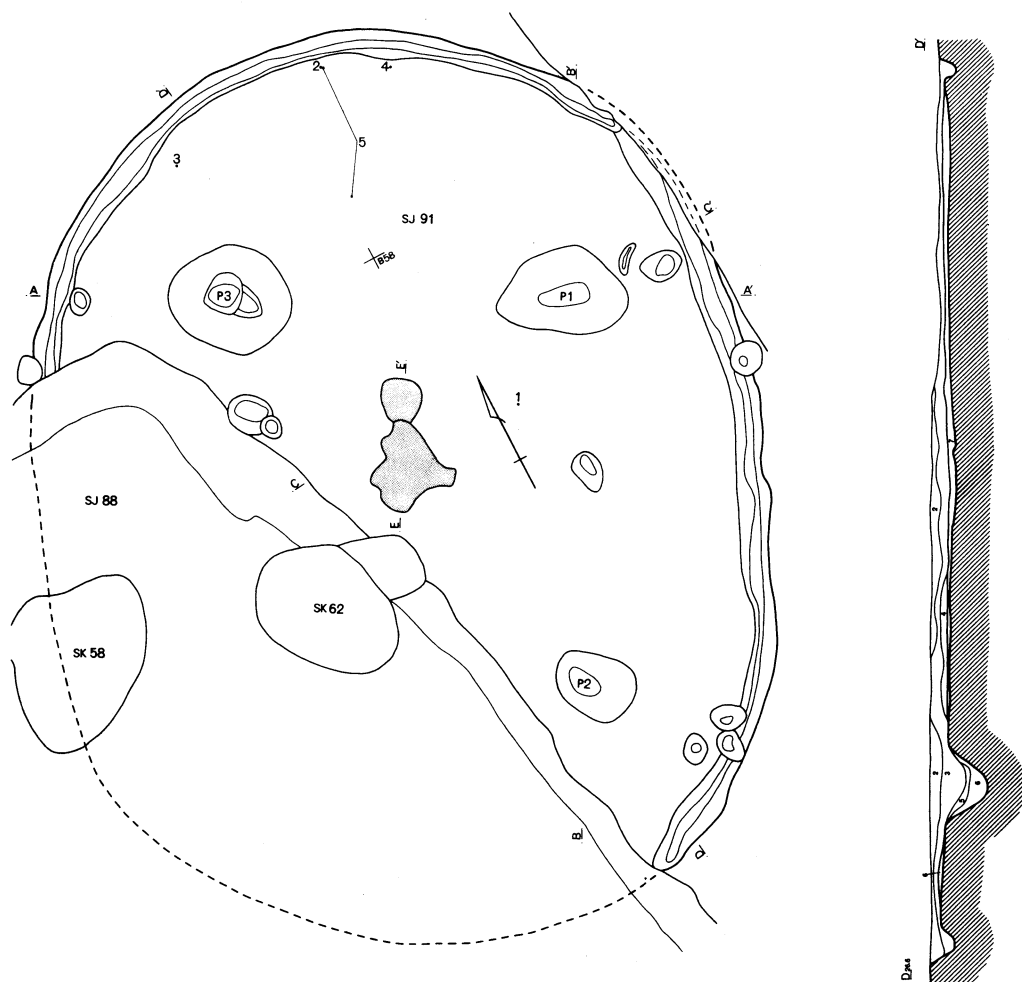
第87号住居跡 (第161図)

第87号住居跡は、A58 b グリッドに位置する。北側部分で第42号溝跡に切られるほか、遺構の大部分が調査範囲外に続く。確認面からの深さは20cmを測るが、それ以外については不明である。平面形態は、隅丸の方形・長方形であろうか。床面の硬化は少ない。

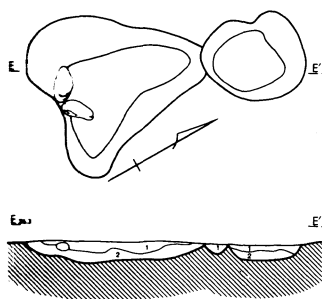
遺物の出土はなかった。



第161図 第87号住居跡



第162图 第91号住居跡(1)



第91号住居跡土層柱記

- 1 覆土
- 2 黒褐色土 ローム粒微量。しまり・粘性やや強。
- 3 暗褐色土 ローム粒少、カーボン微量。しまり・粘性やや強。
- 4 暗黄褐色土 ローム粒多、カーボン微量。しまり・粘性やや強。
- 5 暗褐色土 ローム粒少、カーボン微量。しまり・粘性やや強。
- 6 暗黄褐色土 ローム粒多。しまり弱、粘性やや強。
- 7 暗黄褐色土 ロームブロック多。しまり非常に強。(貼床)

炉跡土層柱記

- 1 黒褐色土 ローム粒・焼土粒を含有。しまり弱。
- 2 明赤褐色土 焼土層。



第163図 第91号住居跡(2)

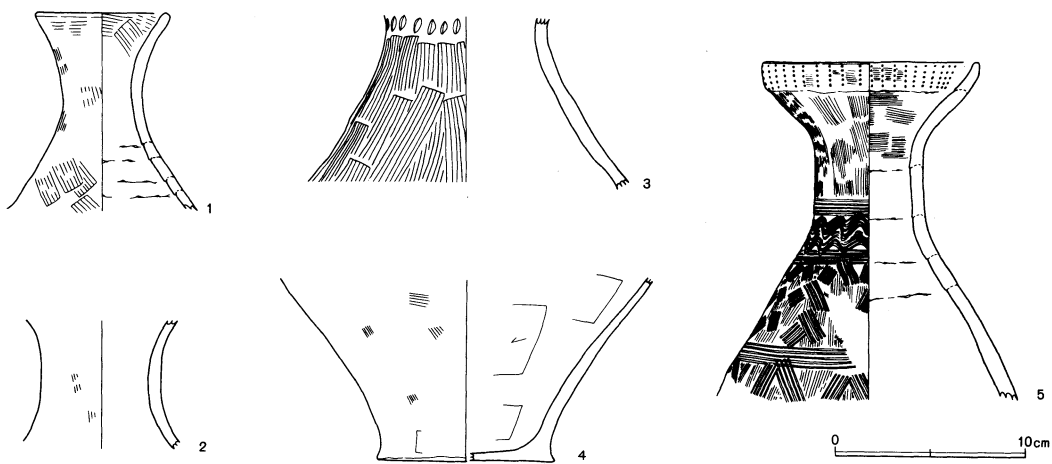
第91号住居跡 (第162・163図)

第91号住居跡は、A58cグリッドに位置する。東側を第44号溝跡によって僅かに切られ、南側から西側にかけてを、第88号住居跡によって大きく切られている。推定による平面規模は、長軸724cm・短軸560cm、平面形態は小判形に近い隅丸長方形を呈すると想定される。確認面からの深さは、20cmを測る。主軸方向は、N-26°-Eを示す。

主柱穴が、3箇所(P1~P3)検出された。各主柱穴間の距離は、P1-P2間で306cm・P1-P3間で268cmを測る。各々の確認面からの深さは、P1が50cm・P2が43cm・P3が57cmを測り、柱穴の掘り方も大きく明確なピットである。4本目の主柱穴は、第88号住居跡に切られていると判断される。

プランの把握できた範囲内では、壁溝が確認された。貼床面は比較的よく踏み固められており、明瞭なものであった。住居の中央付近において、炉跡が2箇所検出された。一方は平面規模64cm×62cmの不整形、深さ9cmを測り、他方は平面規模64cm×62cmの楕円形、深さ6cmを測る。

出土した遺物は小数であり、その中で図化し得たのは5点である。



第164図 第91号住居跡出土遺物

第91号住居跡出土遺物 (第164図)

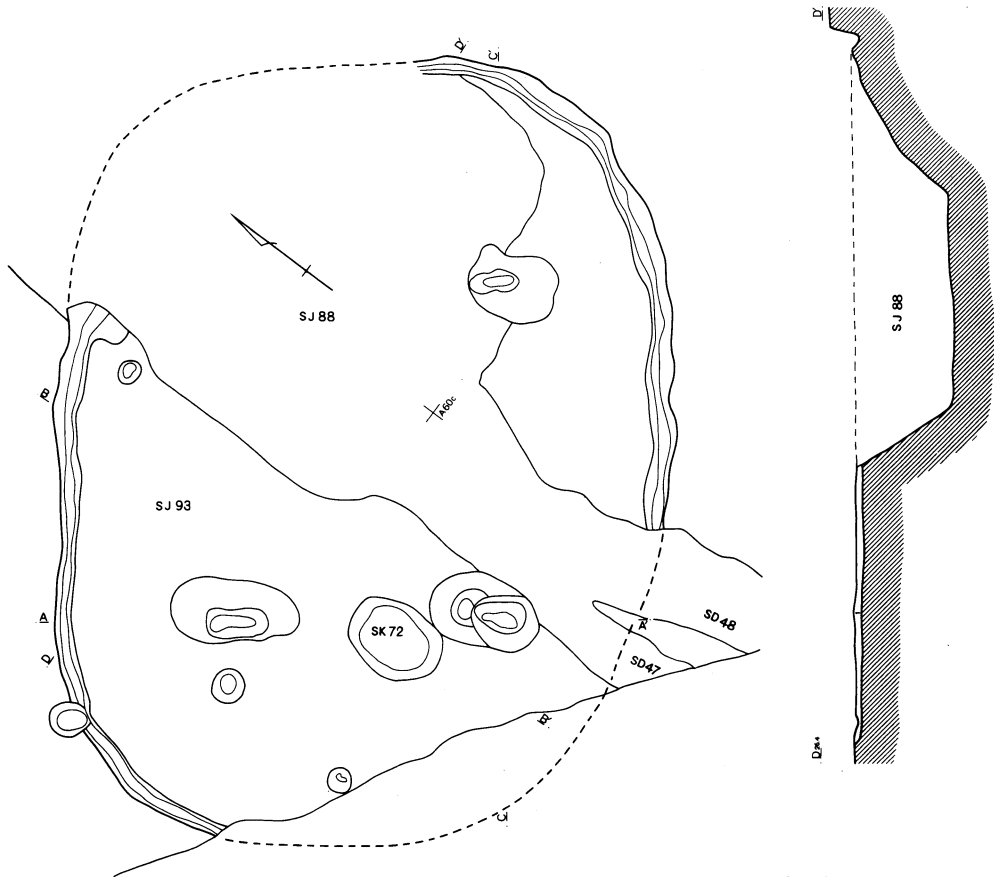
番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	壺	口径 6.9 現存高 10.3	口縁部：内外面ともハケ目の後、横ナデ。頸部～胴部上位： 外面はハケ目の後ナデ、内面はナデ。にぶい橙色。	B+G+J 口径90 焼成：やや良
2	壺	現存高 6.7	器面は摩滅著しい。外面はハケ目の後ナデか、内面はナデか 橙色（一部阴灰色）。	B+J+子礫（多） 焼成：やや不良
3	壺	現存高 8.7	頸部に刺突文を巡らす。外面はハケ目、内面はナデ。灰褐色	A+B+D+E+H肩75 焼成：不良
4	壺	底径（9.2） 現存高 9.5	胴部：外面はハケ目の後粗いナデ、内面はヘラナデ。 底部：外面は木葉痕、内面はナデ。灰黄褐色。	B+I+J 底30 焼成：普
5	壺	口径（11.4） 現存高（17.6）	口縁は内彎気味に開く。文様はいずれも5本を単位とする同一の櫛状工具によるものと思われる。口縁内外面に縦位の刺突による列点文。頸部～胴部の文様は上位から横線文「ハ」字状山形文（1段のみ残存）であり上位から下位の施文。文様は線も太く深いもので鮮明。口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデか。頸部：内外面ともハケ目の後粗いナデ。胴部：外面はハケ目、内面はナデ。にぶい黄橙色。	B+E+J（細密） 口径25 頸75 胴上半20 焼成：普

第93号住居跡 (第165図)

第93号住居跡は、A' 64h グリッドに位置する。北側から中央部にかけて、第88号住居跡と第47号・第48号溝跡によって切られる。南側から西側にかけては、第14号方形周溝墓と重複する。本住居跡・第14号方形周溝墓ともに、小破片がごく少数出土したのみではあるが、方形周溝墓を切っていると推定される。また、遺構内を第72号土壌に切られている。

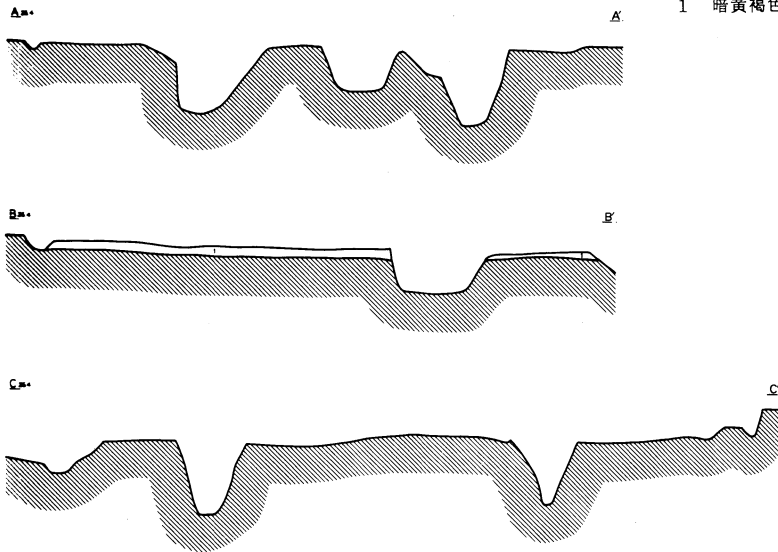
平面規模は、長軸832cm（推定値）・短軸654cmを測り、隅丸の長方形を呈す。確認面からの深さは8cmである。主軸方向は、N-55°-Eを示す。主柱穴は、3箇所が検出されている。長軸方向は356cm・短軸方向は296cmを測る。各主柱穴の確認面からの深さは、北東部のものから時計回りに72cm・82cm・72cmであり、掘り方も大きな主柱穴である。南西端の小ピットは、あるいは梯子穴であろうか。検出し得た範囲内においては、壁溝が認められた。残り1箇所の主柱穴と炉跡に関しては、第88号住居跡や、第47号・第48号溝跡に切られていると推定される。

弥生時代と思われる土器の小破片が、ごく僅かに出土したのみで、図化し得るものはなかった。



第93号住居跡土層註記

- 1 暗黄褐色土 ロームブロック (φ 3 cm)
多、カーボン少。しまり強、
粘性弱。



第165図 第93号住居跡

(2) 方形周溝墓

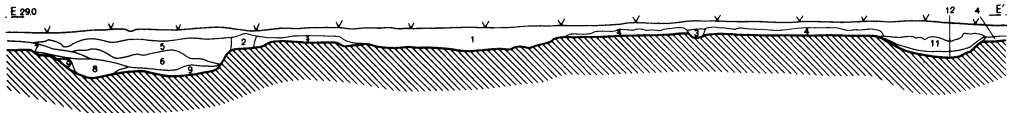
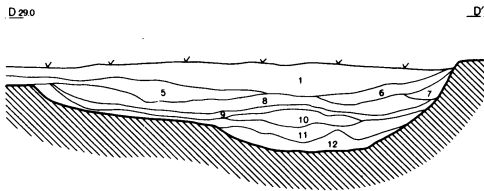
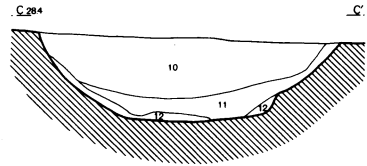
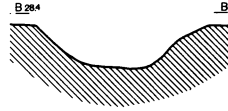
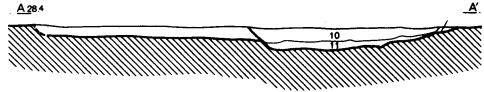
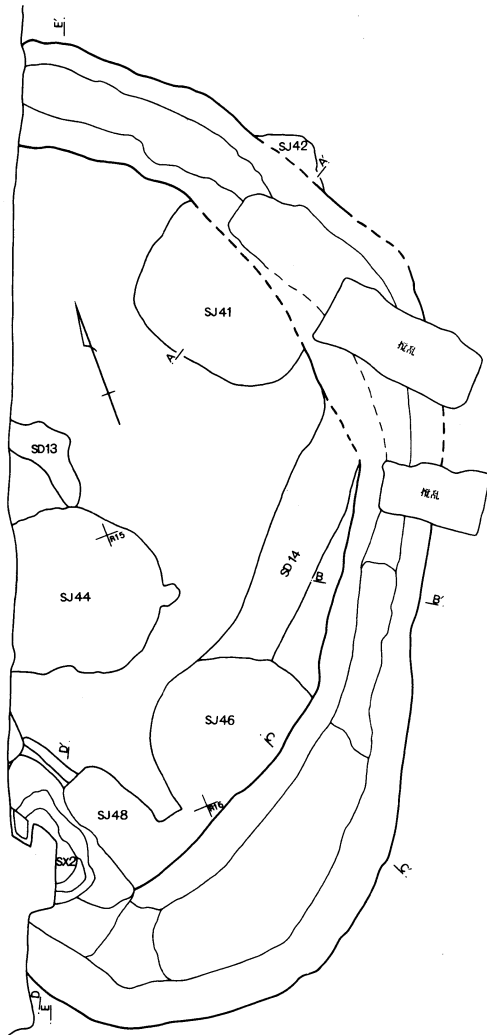
第1号方形周溝墓 (第166図)

第1号方形周溝墓は、R13dグリッドに位置する。北溝・南溝の一部と東溝が検出されたのにとどまる。

コーナー部分の形状にやや疑問が残るが、北側コーナーの場合は遺構自体が浅い部分である上に、他の遺構(第41号・第42号住居跡)との重複でローム面が失われており、さらに曖昧な形状を呈している。南西端は、性格不明遺構2に切られているため、方台部の形状が一部分崩れている。本遺構は、今回の調査で検出された方形周溝墓の中では、形態・規模共に他のものとは異なっている。さらに他の方形周溝墓が、弥生時代中期後半から後期前半の範疇に含まれるのに対して、第1号方形周溝墓は古墳時代前期に降る遺構である。既期の方形周溝墓が、本方形周溝墓の周辺に分布しているのであろうか。方台部の盛り土は既に失われている。外周を含めた規模は南北3120cm、主軸方向はN-31°-Eを指す。溝各部分での幅と確認面からの深さは、エレベーションA-A'では幅312cm・深さ36cm、B-B'では幅246cm・深さ60cm、C-C'では幅480cm・深さ132cm・D-D'では深さ144cm、E-E'北側では幅336cm・深さ72cmを測る。第12層は、方台部の盛り土が崩落した層であろうか。概して、溝底は船底形を呈し、部分的にテラス状の平坦部をもつ。北東コーナーは浅く、南東コーナーでは極端に深まりをみせている。コーナー部分以外では、概ね溝の深さは近い数値となっている。遺物は、その殆どが破片であり、全体的に分布をしていた。特に南東コーナー付近では、多数の土器片が検出されている。

第1号方形周溝墓出土遺物 (第167図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	口径 (20.9) 現存高 7.7	外面全体：ハケ目の後ヘラ磨き。内面全体：ヘラ磨き。 赤褐色。	A+B+J 口径25 焼成：やや良
2	壺	口径 23.8 現存高 8.0	複合口縁を呈す。外面：ハケ目の後ヘラ磨き、内面：ヘラ磨き。にぶい橙色。	A+B+D+G 口径35 焼成：やや良
3	壺	現存高 5.8	頸部に凸帯を巡らす。頸部：外面ハケ目の後ヘラ磨き、内面ナデ。胴部：外面ハケ目か、内面ナデ。明赤褐色。	A+C+E+J 頸40 焼成：やや良
4	壺	底径 5.7 現存高 3.2	外面：ナデ、内面：ヘラナデ。橙色。	A+B+C+G 底100 焼成：普
5	小型壺	胴径 16.7 現存高 10.7	器面は磨滅著しい。器形は歪んでいる。外面：ヘラ磨きか、内面：ヘラナデ。橙色。	B+D+E+H 胴30 焼成：普
6	壺	底径 9.8	胴部：外面ハケ目の後ナデ、内面ヘラナデ。底部：内外面ともナデ。にぶい橙色。	A+B+J 胴下半75 底100 焼成：普
7	甕	口径 (13.4) 胴径 (12.5) 現存高 6.8	口縁部：内外面ともハケ目。胴部：外面ハケ目の後ナデ、内面ナデ。橙色。	A+B+G+J 口径25 胴10 焼成：普



第1号方形周溝墓土層註記

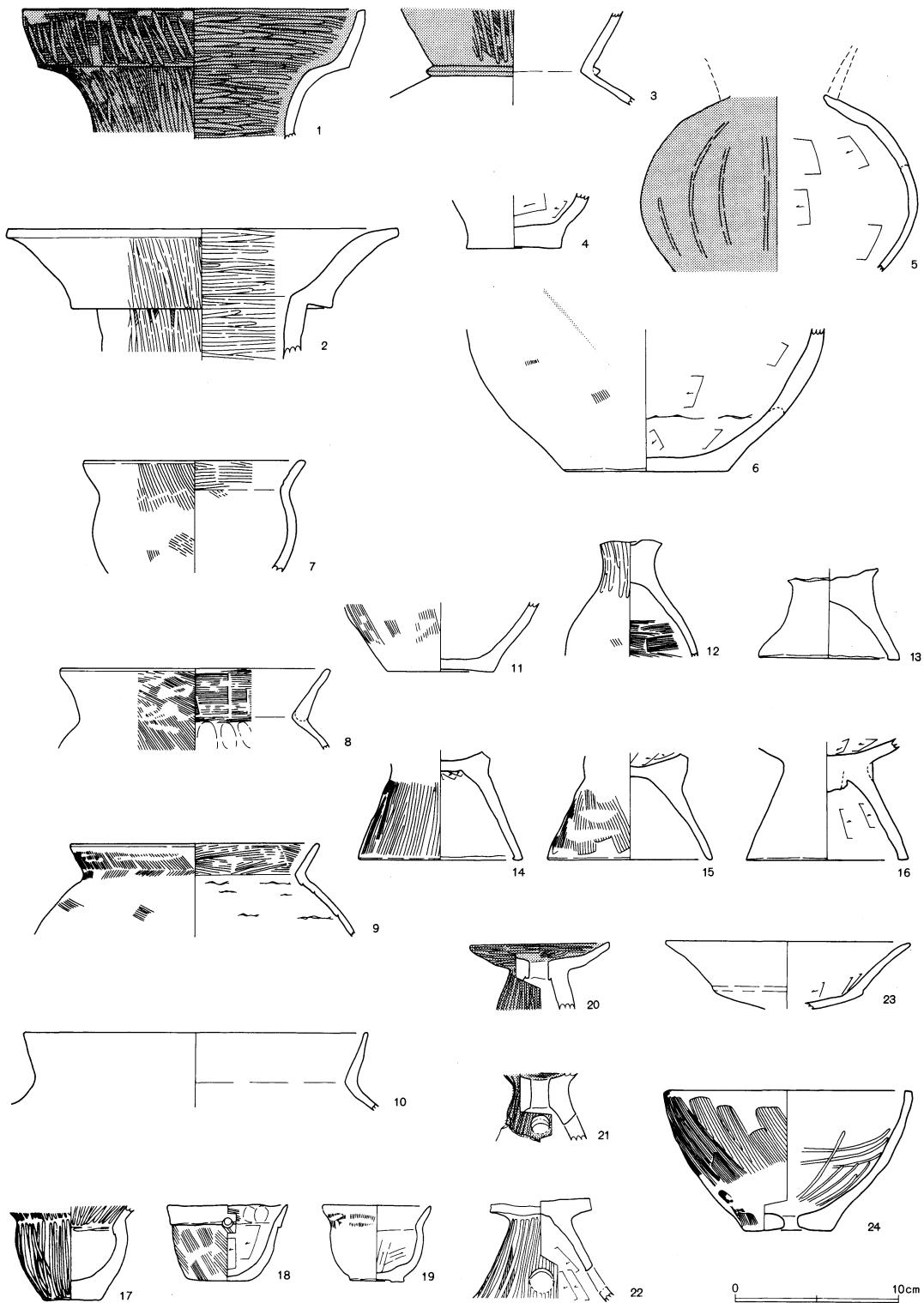
A-A' C-C' D-D' E-E' 共通

- 1 耕作土
- 2 攪乱
- 3 黒褐色土 ローム粒少。
- 4 暗褐色土 ローム粒・カーボン少。
- 5 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ1cm)少。
- 6 黒褐色土 薄緑色の砂粒、石片若干。
- 7 暗褐色土 ローム粒少。

- 8 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ2cm)若干。
- 9 暗黄褐色土 ロームブロック層。
- 10 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ1cm)少。
- 11 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ4cm)若干。
- 12 暗黄褐色土 ロームブロック層。



第166図 第1号方形周溝墓



第167图 第1号方形周沟墓出土遗物

8	甕	口 径 (16.2) 現存高 4.9	口縁部：内外面とも、ハケ目の後粗い横ナデ。胴部上位：外面ハケ目、内面ナデと指頭による押捺。橙色。	A+B+G+J □25 焼成：普
9	甕	口 径 (15.2) 現存高 5.7	口縁部：内外面とも、ハケ目の後粗い横ナデ。胴部：外面ハケ目、内面ナデ。橙色。	A+B+G+J □40 焼成：普
10	甕	口 径 (20.7) 現存高 4.5	器面は磨滅著しい。口縁部：内外面ともハケ目の後横ナデか。胴部：外面ハケ目か、内面ナデか。にぶい黄橙色。	A+B+E+G+J □25 焼成：普
11	壺	底 径 6.6	胴部：外面ハケ目か、内面丁寧なナデ。底部：外面ナデ、内面丁寧なナデ。にぶい黄橙色。	B+D+J(細密) 底90 焼成：普
12	高 杯	現存高 7.2	外面：接合部付近はヘラ磨き、それ以下はハケ目の後ナデか、内面：上半ナデ、下半ハケ目。にぶい橙色。	B+E+J(細密) 脚45 焼成：普
13	台付甕	脚台径 (8.6) 現存高 5.6	内外面とも粗いナデ。黄褐色。	B+D+J 脚70 焼成：普
14	台付甕	脚台径 9.6 現存高 6.6	底部内面：ナデ。脚台部：外面ハケ目、内面ナデ。橙色。	B+E+H 脚85 焼成：良
15	台付甕	脚台径 9.9	底部内面：ヘラナデ。脚台部：外面ハケ目の後ナデ、内面ナデ。橙色。	A+B+D+E 脚70 焼成：普
16	台付甕	脚台径 (9.8)	底部内面：ヘラナデ。脚台部：外面ナデ、内面ヘラナデの後ナデ。橙色。	A+B+G+J 脚35 焼成：普
17	小型壺	胴 径 (6.8) 底 径 (3.5) 現存高 5.6	口縁部：内外面ともヘラ磨き。胴部：外面ヘラ磨き、内面ナデ。底部：内外面ともナデ。にぶい橙色。	B+H+J(細密) □5 胴40 底50 焼成：やや良
18	埴	口 径 7.3 底 径 4.0 器 高 4.6	口縁部外面：ナデ。内面：ハケ目の後ナデ、一部を指頭による押捺。体部：外面ハケ目、内面ヘラナデ。底部：内外面ともナデ。橙色。口縁部に穿孔1箇所。	A+B+J 完形 焼成：普
19	埴	口 径 (6.6) 胴 径 5.7 底 径 3.2 器 高 4.6	口縁部：内外面とも横ナデ。体部外面：ハケ目の後ナデ、内面：ナデ。底部外面：ナデ、内面：ナデ。底部外面はドーナツ状を呈す。にぶい黄橙色。	A+B+D+H □35 体55 底100 焼成：普
20	器 台	口 径 (8.6) 孔 径 1.1 現存高 4.0	坏部：内外面ともヘラ磨き。脚台部：外面ヘラ磨き、内面ナデ。赤褐色。	B+G+J 坏20 脚上半70 焼成：やや良
21	器 台	孔 径 1.0 現存高 4.0	坏部内面：ヘラ磨き。脚台部：外面ヘラ磨き、内面ナデ。赤橙色。脚台部に穿孔4箇所。	A+B+E+J 焼成：やや良
22	高 杯	現存高 5.7	坏部内面：ヘラ磨き。脚台部：外面ハケ目の後ヘラ磨き、内面ヘラナデの後ナデ。にぶい黄橙色。脚台部に穿孔3箇所。	A+B+E+J 脚40 焼成：普

23	高杯	口径 14.7	口縁部：外面横ナデ、内面ヘラナデの後横ナデ。底部：内外面ともナデ。赤褐色。	A+B+C (細密) 坏60 焼成：良
24	甌	口径 14.2 底径(5.3) 器高 8.5 孔径 0.8	口縁部：内外面とも粗い横ナデ。体部外面：ハケ目の後、粗いナデ、内面粗いヘラ磨き。底部外面：ナデ。内面からの穿孔1箇所。赤橙色。	A+B+C+D+G 口50 体60 底50 焼成：良

第2号方形周溝墓 (第168図)

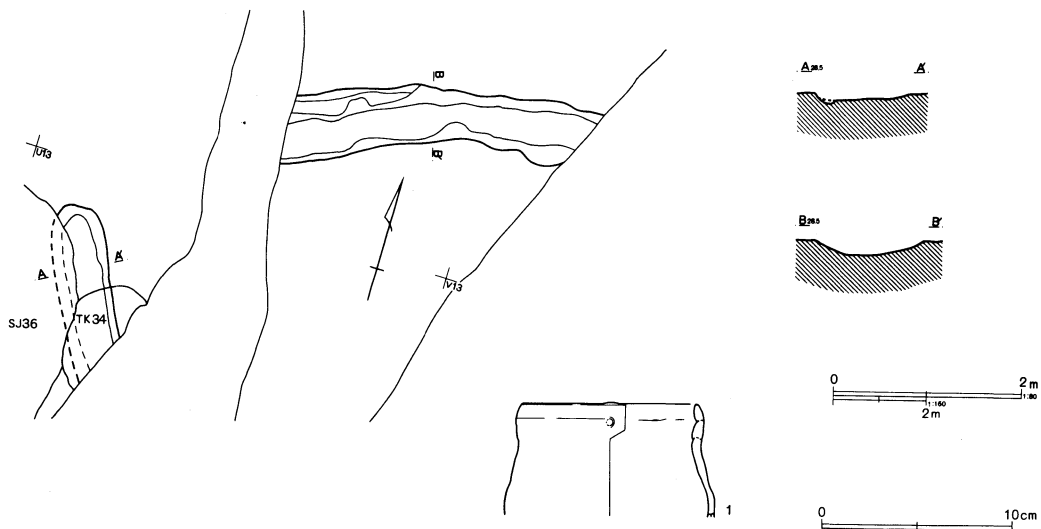
第2号方形周溝墓は、U12hグリッドに位置する。北溝は、東側が調査範囲外に続き、西側は攪乱を受けている。西溝は西側で第36号住居跡に切られ、南側は攪乱を受け、さらに調査範囲外に延びている。位置的に観て、今回の調査で検出された方形周溝墓15基の中で、最も北にそして最も東に立地するものである。

北西隅は、陸橋状に掘り残される。あるいは、四隅を残す形態のものであろうか。方台部の盛り土は失われており、周溝自体の遺存度も非常に悪い遺構である。確認面における北溝の幅は86cm、深さは16cmを測り、主軸方向はN-25°-Wが推定される。溝内に検出された覆土が、方台部の盛り土であったかについては確認できなかった。溝底面は平坦に近い状態である。

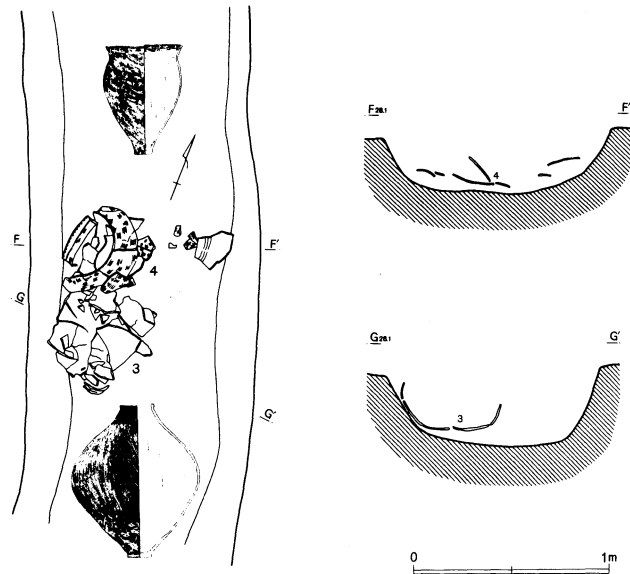
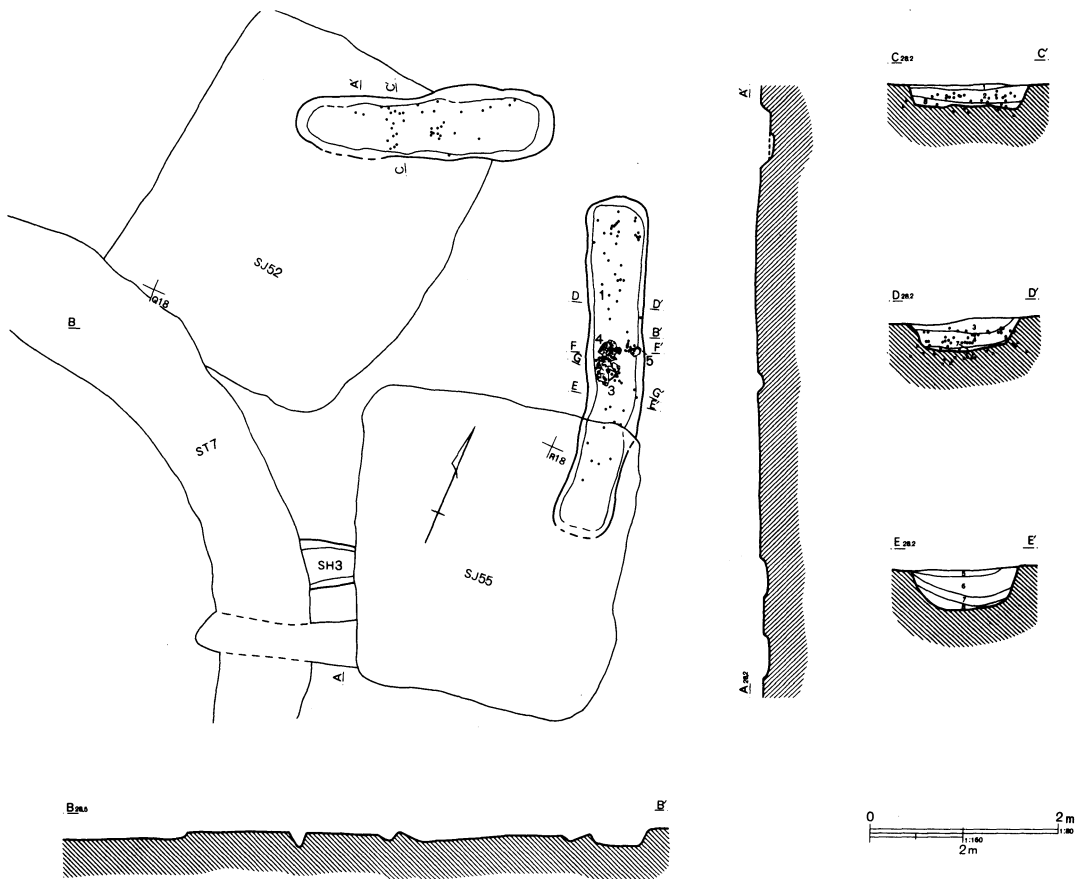
遺物は、ごく小数量出土しているが、図化し得たものは1点である。

第2号方形周溝墓出土遺物 (第168図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径(9.1) 胴径(11.0)	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：内外面ともナデ。口縁部に内面からの穿孔1箇所残存。橙色。	A+B+F+I+J 口15 胴10 焼成：普



第168図 第2号方形周溝墓



第3号方形周溝墓土層註記

C-C' D-D' E-E' 共通

- | | |
|---------|----------------------------------|
| 1 暗褐色土 | ロームブロック多、
カーボン微量。
(SJ52貼床) |
| 2 黒褐色土 | ロームブロック・
ローム粒少。
(SJ52掘り方) |
| 3 黄褐色土 | ロームブロック・
ローム粒多。
(SJ53貼床) |
| 4 暗褐色土 | ローム粒少。
(SJ53掘り方) |
| 5 暗黄褐色土 | ローム粒多。
(SJ53貼床) |
| 6 暗褐色土 | ローム粒少。
(SJ53掘り方) |
| 7 暗褐色土 | ローム粒少、カー
ボン微量。 |
| 8 暗褐色土 | ローム粒・カーボ
ン微量。 |

第169図 第3号方形周溝墓

第3号方形周溝墓 (第169図)

第3号方形周溝墓は、Q17dグリッドに位置する。北溝・東溝・南溝が検出された。各々の溝はつながるものではなく、隅を陸橋状に掘り残す形態と推定される。北溝は、第52号住居跡の貼床面下位から検出された。東溝は第53号・第55号住居跡の、貼床面の下位から検出された。南溝については、東側を第55号住居跡に、西側を第17号古墳跡に切られ、一部分のみの検出である。北溝・南溝は、西側へ行くほど掘り込みが浅くなっている、というのが調査時における印象であった。西溝については、第52号住居跡の貼床面下を精査したが、検出することはできなかった。

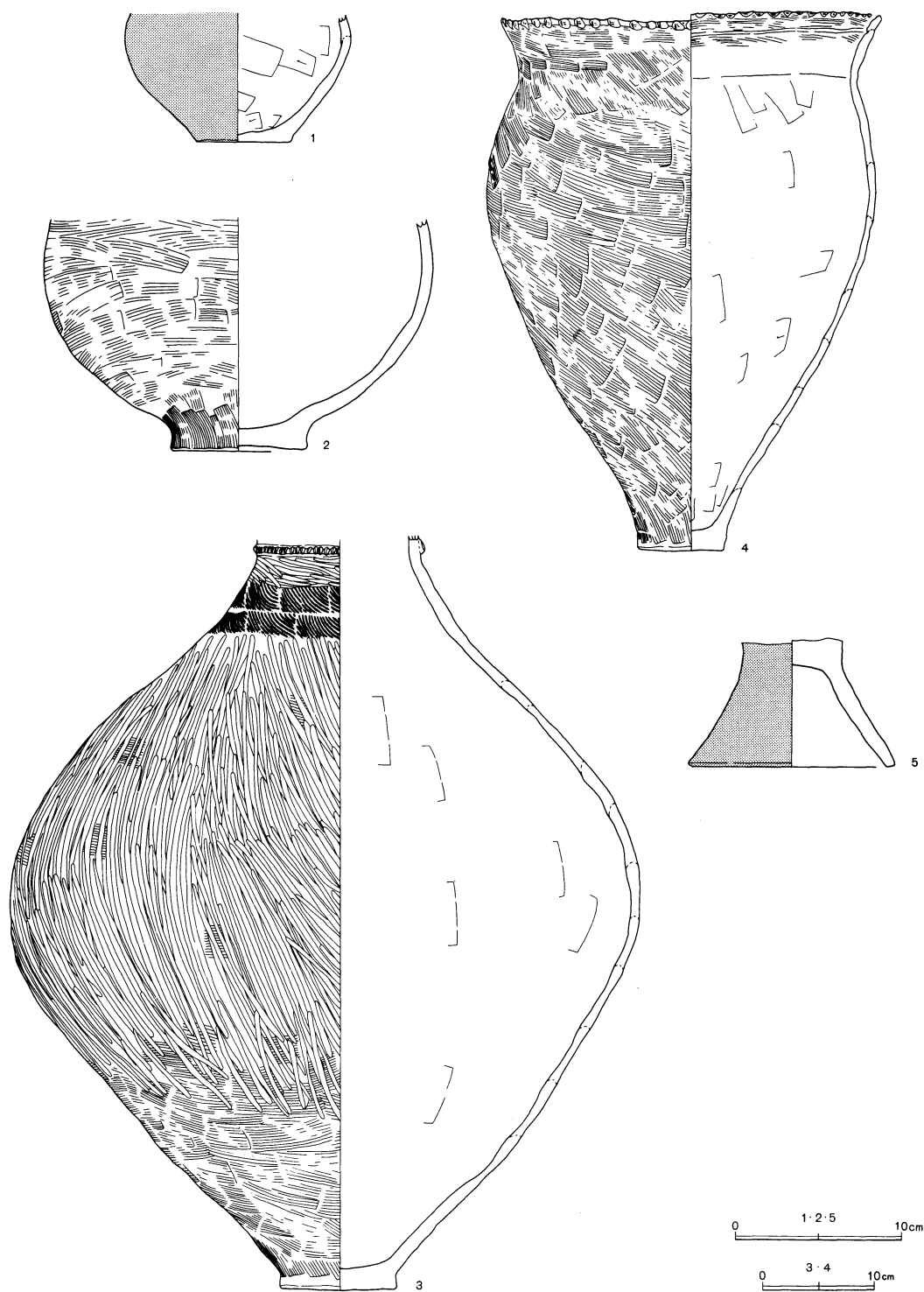
方台部の盛り土は既になく、第7層・第8層は、盛り土の流れ込んだものであろうか。外周を含めた規模は、南北方向で1040cmを測る。各溝の規模は、北溝：長さ560cm・最大幅160cm・深さ25cm、東溝：長さ720cm・最大幅112cm・深さ40cm、南溝：幅104cm・深さ16cmを測る。主軸方向はN-25°-Wを指す。

北溝は平面が直線的であるのに対し、東溝はやや外側に湾曲する。各溝は、端部がやや方形に近く、底面は比較的平坦である。溝底の立ち上がりは、概ね方台部側が鋭く直線的であるのに対し、外周側は緩やかといえる。

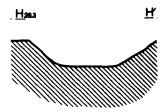
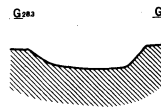
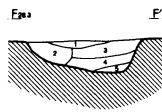
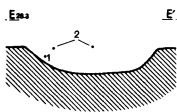
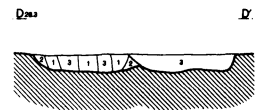
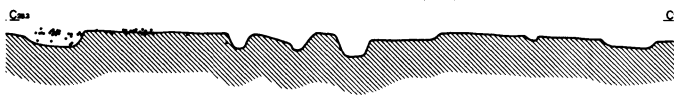
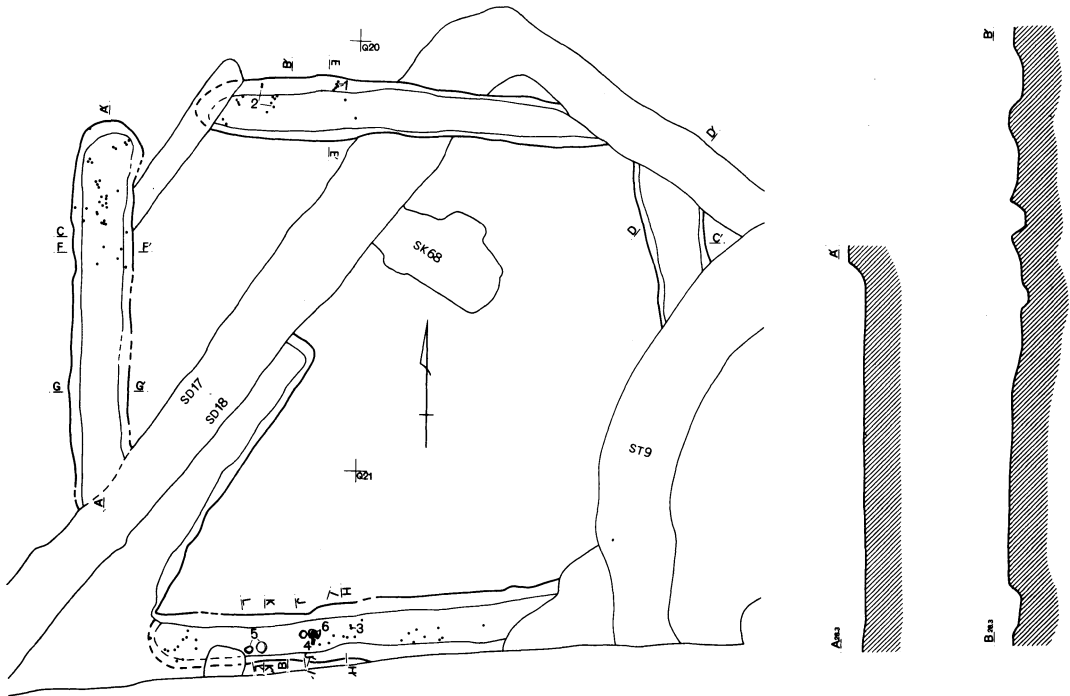
遺物は、北溝と東溝から出土している。北溝の遺物については、第52号住居跡貼床面の下位からのものである。東溝中央部において、大型の壺と甕 (第170図3・4) が検出されているが、その出土状況から観て、土圧によって押し潰されたものと推定される。なお完形度が低いのは、耕作等による攪乱を受け、上位の破片が失われた結果と判断される。

第3号方形周溝墓出土遺物 (第170図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	胴径 13.7 底径 5.5 現存高 7.1	赤彩は底部にまで及ぶ。外面全体：丁寧なナデ、内面全体：ヘラナデと丁寧なナデ。明赤褐色。	D+E+F+G 胴60 底100 焼成：やや良
2	壺	胴径 23.4 底径 8.0 現存高 13.8	器面は荒れている。胴部外面：ハケ目の後部分的に粗いナデ、内面ナデか。底部外面：木葉痕を残す、内面ナデか。橙色。	A+B+G+J 胴35 底100 焼成：普
3	壺	胴径(56.2) 底径 10.0 現存高 66.8	胴部中位に最大径をもつ。頸部に突帯を巡らし、爪先による刻み目を施す。肩部にRL縄文を2段行う。胴部外面：ハケ目の後、上～中位をヘラ磨き。胴部内面：ヘラナデとナデか。底部：内外面ともナデ。橙色。	A+B+E+F+H+J 頸20 胴35 底100 焼成：やや良
4	甕	口径 34.0 胴径 34.6 底径 7.5 器高 47.7	胴部上位に最大径をもち、口縁は緩く外反して開く。口唇部：指頭による相互押捺。口縁～胴部外面：ハケ目。口縁部内面：ハケ目。胴部内面：ハケ目。底部：内外面ともナデ。橙色。	A+C+H+J ほぼ完形 焼成：やや良
5	高杯	脚台径 12.4 現存高 7.6	外面：丁寧なナデ、内面：ナデ。赤褐色。	B+D+E+J 脚75 焼成：やや良



第170图 第3号方形周湾墓出土遗物



F - F'

- 1 黒色土 カーボン・ローム粒少。しまり・粘性やや弱。
- 2 黒褐色土 カーボン微量。しまり・粘性やや弱。
- 3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ5cm)少。しまり・粘性やや弱。
- 4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ3cm)若干。しまり・粘性やや弱。
- 5 暗褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり・粘性やや弱。

第4号方形周溝墓土層註記 D - D'

- 1 攪乱
- 2 黒褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり・粘性やや弱。
- 3 暗褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり・粘性やや弱。



第171図 第4号方形周溝墓(1)

第4号方形周溝墓 (第171・172図)

第4号方形周溝墓は、P20 bグリッドに位置する。北溝は、東西を第17号・18号溝跡によって切られている。東溝は、南北を第17号・18号溝跡・第9号古墳跡によって切られる。南溝は、東西を第17号・18号溝跡・第9号古墳跡他によって切られ、また南側についても一部攪乱を受けている。西溝は、南側を第17号・18号溝跡により切られる。重複によって失われている範囲が多いが、ほぼ概形は残されている。

形態の特徴として、隅部が掘り残されるものが想定されるが、各溝とも長さの割には幅が狭く、

陸橋状の範囲が小さい点が挙げられる。

方台部の盛り土は既になく、第5層は盛り土の流れ込んだものであろうか。外周を含めた規模は、南北方向で614cm・東西方向で664cmを測る。方台部の形態は、比較的整った方形を呈す。各溝の規模は、北溝：幅56cm・深さ38cm、東溝：幅64cm・深さ8cm、南溝：幅64cm・深さ24cm、西溝：幅64cm・深さ24cmを測る。確認面からの深さは、全体的に浅いものであった。

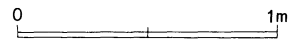
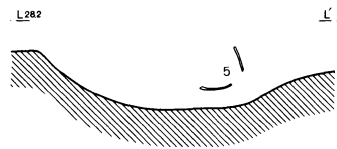
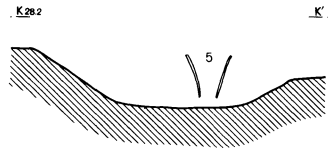
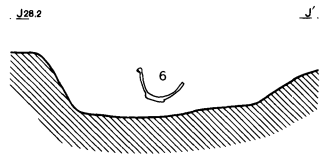
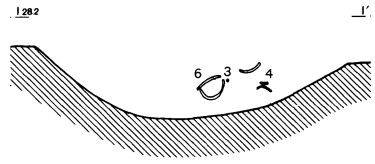
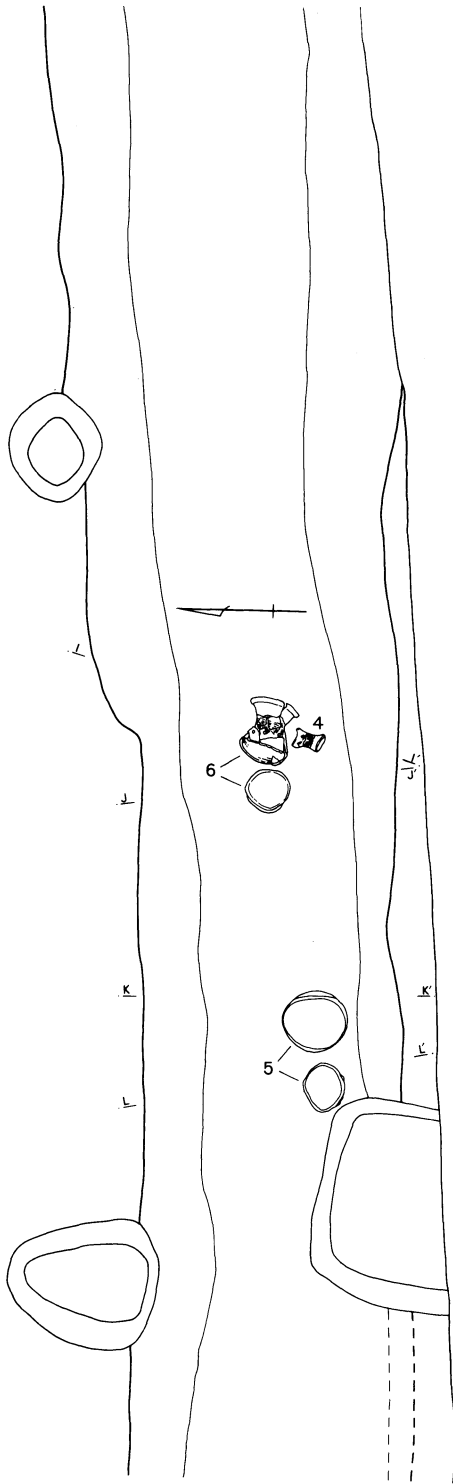
主軸方向はN-3°-Wを指し、南に近在する第5号方形周溝墓(N-33°-W)・第6号方形周溝墓(N-35°-W)・第7号方形周溝墓(N-30°-W)とは大きく異なり、北に近在の第1号方形周溝墓(N-31°-E)、北東方向に70m程離れた第2号方形周溝墓(N-25°-W)とも、離れた値を示す。

各溝とも平面形が直線的であり、端部がやや丸味を帯びると推定される。底面は比較的平坦であり、溝底の立ち上がりは、方台部側がやや鋭く直線的であるのに対し、外周側は緩やかであるといえよう。

遺物は、北溝の西側・南溝・西溝北側から出土している。北溝・西溝の遺物については、その殆どが小破片であり、ほぼ原形に復すことができたものは、南溝の西寄り部分からの壺2点(第173図5・6)のみであった。5・6共に、胴部中位の粘土紐接合部分で2つに割れ、転がっている状態が想定された。あるいは、盛り土からの転落によるものであろうか。この2点以外については、その大部分が破片で出土しており、接合関係にある遺物はきわめて少ない。

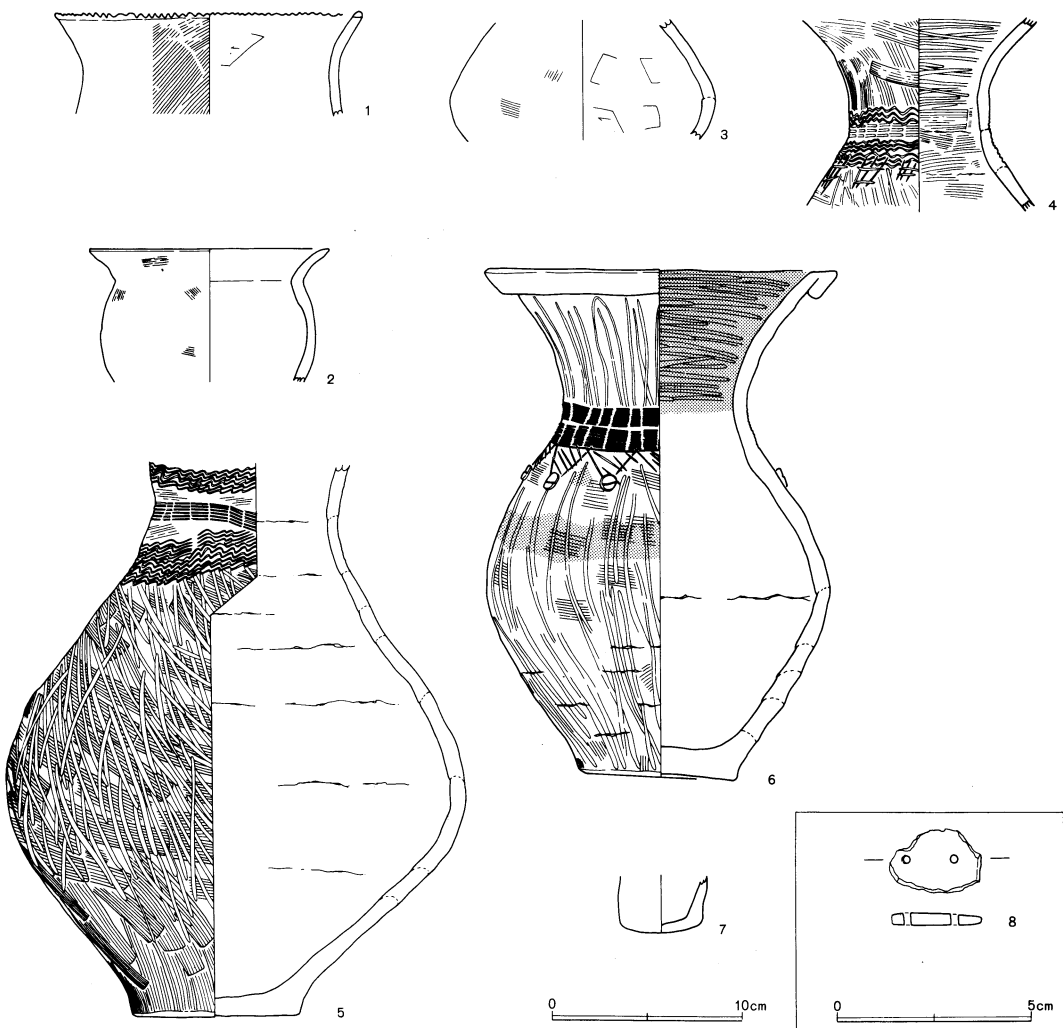
第4号方形周溝墓出土遺物 (第173図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径(15.8) 現存高 5.3	口縁部：外面ハケ目の後粗い横ナデ、内面粗い横ナデ。胴部外面ハケ目、内面ヘラナデとナデ。黄褐色。	A+B+J 口径15 焼成：普
2	甕	口径(12.6) 胴径(11.3) 現存高 7.0	外面にスス付着。口縁部外面：ハケ目の後粗い横ナデ、内面：粗い横ナデ。胴部外面：ハケ目の後粗いナデか、内面：ナデ。黄褐色。	A+B+G+J 口径・胴20 焼成：普
3	壺	胴径(14.0) 現存高 6.3	外面：ハケ目の後ナデ、内面ヘラナデ。黄褐色。	A+B+F+J 胴25 焼成：普
4	壺	現存高 9.7	頸部に3本単位の櫛状工具で、上位から波状文-右回転の簾状文-波状文2段-さらにヘラ描沈線による鋸歯文を施す。頸部外面：ハケ目の後ナデ、内面：ヘラ磨き。肩部外面粗いハケ目、内面：粗いハケ目。橙色。	B+G+J 頸100 焼成：やや良
5	壺	胴径 24.1	頸部~肩部に6本単位の櫛状工具で、上位から波状文-右回転	A+E+G+J

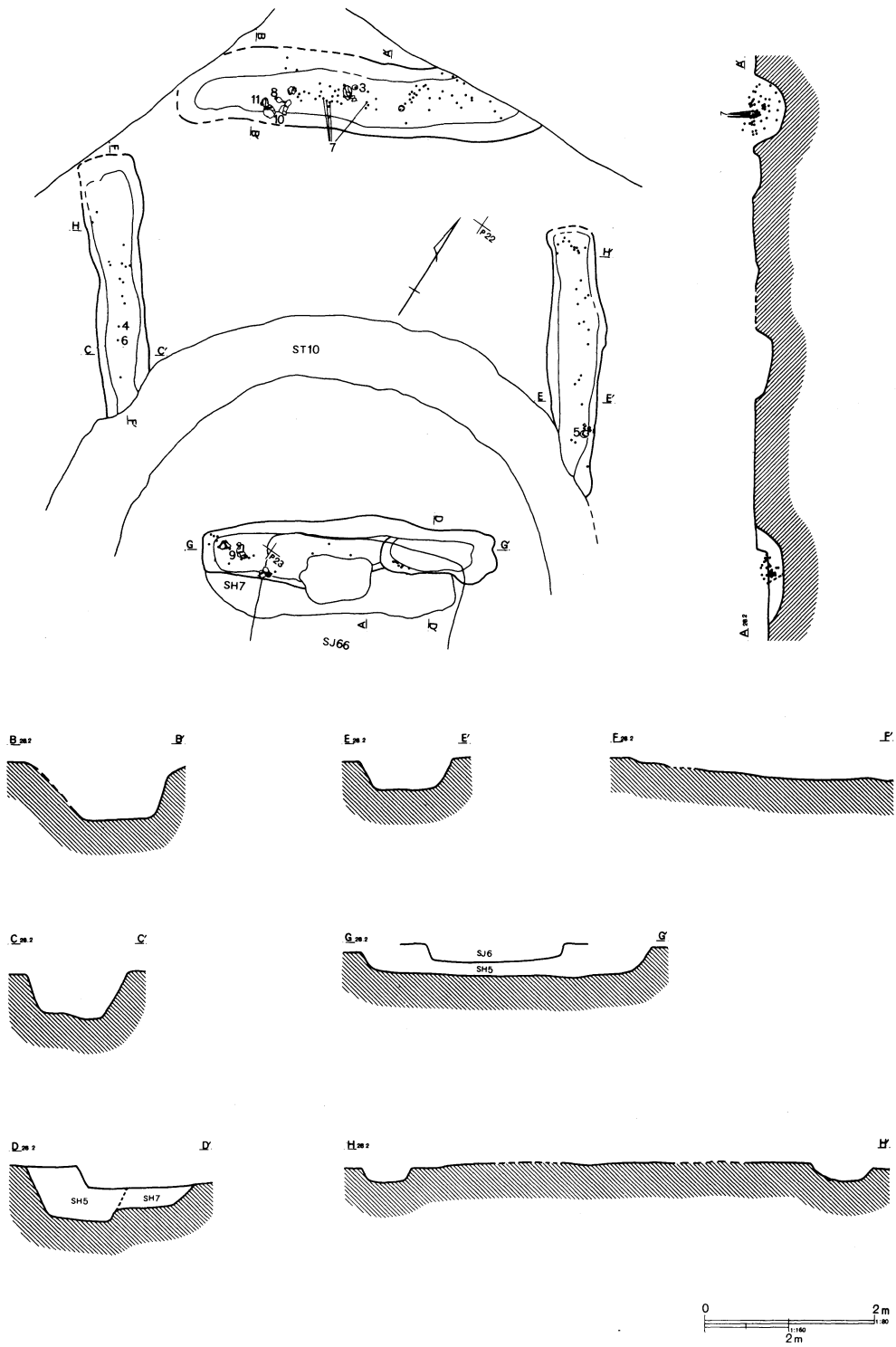


第172图 第4号方形周溝墓(2)

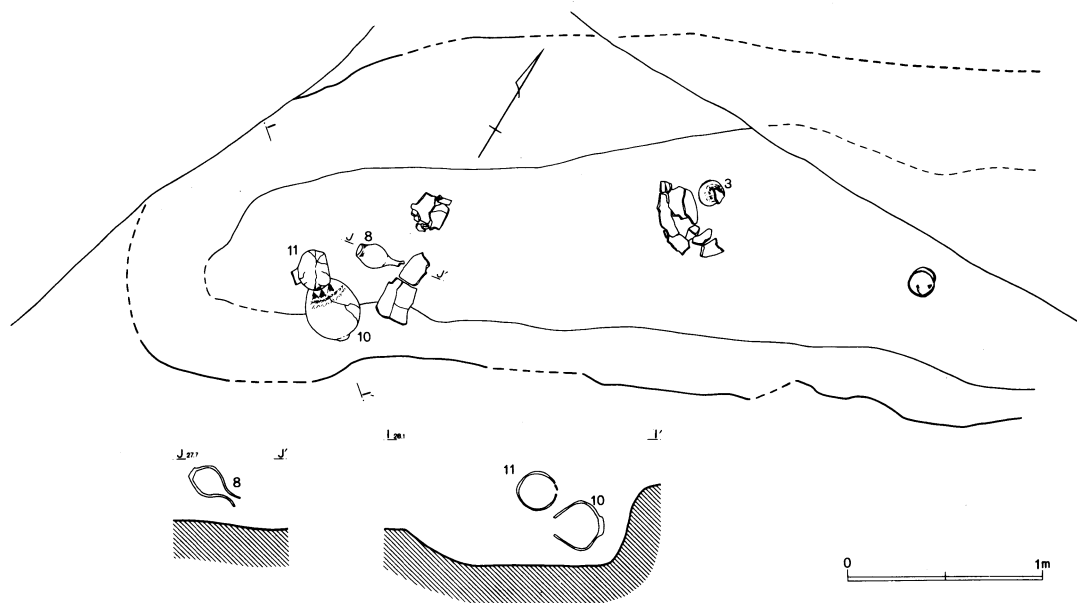
		底径 8.3 現存高 28.8	の簾状文—雑な波状文2段を施す。胴部外面：ハケ目の後粗いヘラ磨き、内面ナデ。底部：内外面ともナデ。赤橙色。	胴95 底50 焼成：やや良
6	壺	口縁部 17.1 胴径 18.0 底径 8.0 器高 26.5	口縁は外反して大きく開き、幅の狭い複合口縁を呈す。頸部～肩部に8本単位の櫛状工具で右回転の簾状文2段と、ヘラ描沈線による鋸歯文、12個の円形浮文を施す。文様は雑。口縁部：内外面とも横ナデ。頸部：内外面ともヘラ磨き。胴部外面：ハケ目の後粗いヘラ磨き。胴部内面・底部内外面：ナデ。橙色。	A+B+G 口90 胴・底100 焼成：普
7	手握ね	底径 4.3 現存高 3.0	全面ナデ。黒褐色。	A+B+C+H(多)体80 焼成：やや不良
8	有孔 石製品	現存長 1.6 幅 2.4 厚さ 0.3	片側からの穿孔2箇所。孔径0.2。比較的平坦であるが、周囲は成形が粗い。	滑石製。



第173図 第4号方形周溝墓出土遺物



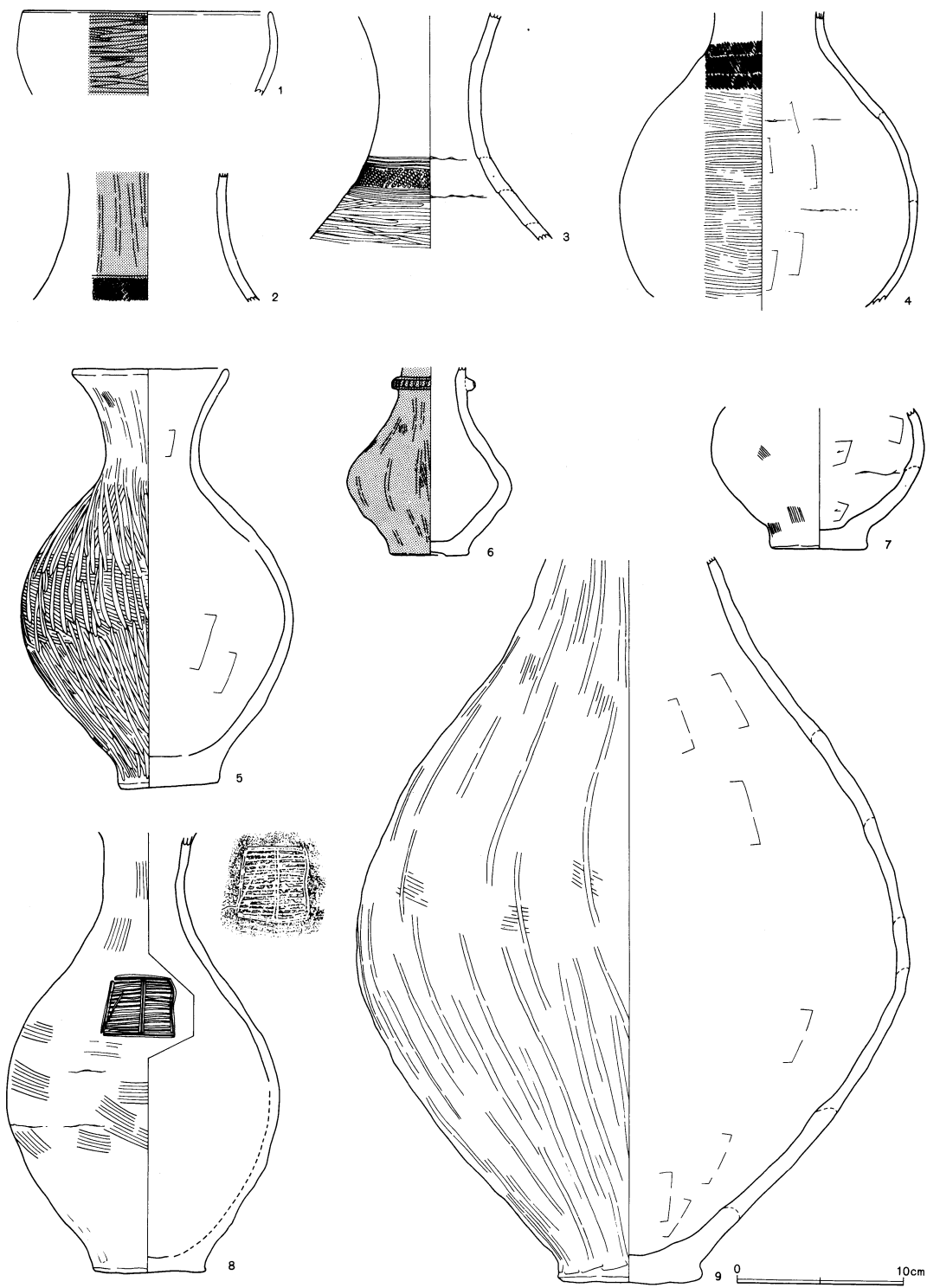
第174图 第5号方形周沟墓(1)



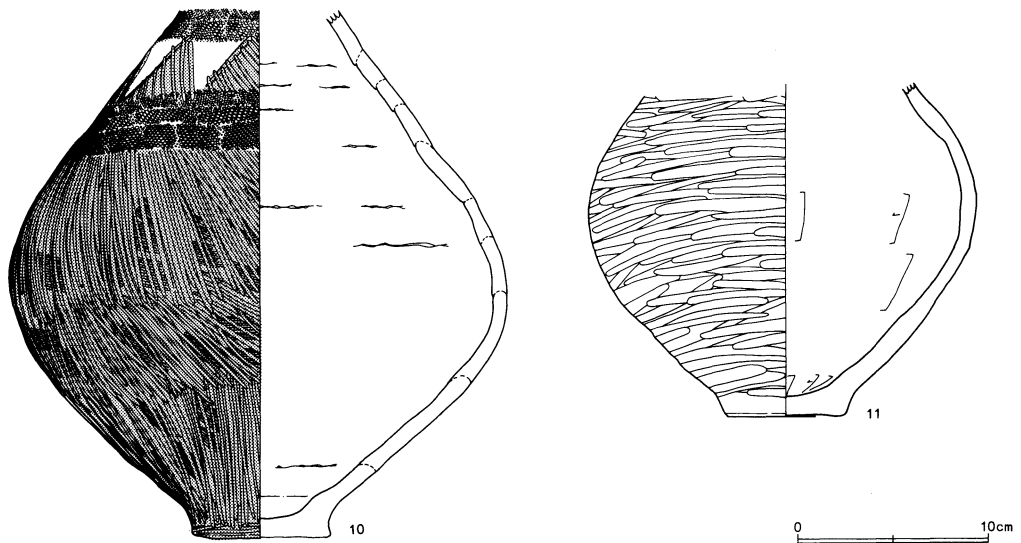
第175図 第5号方形周溝墓(2)

第5号方形周溝墓 (第174・175図)

第5号方形周溝墓は、O21hグリッドに位置する。北東溝は、南を第10号古墳跡に切られる他、第6号方形周溝墓と重複しているとすれば、第5号方形周溝墓が切られていると推定される。南東溝は、第7号方形周溝墓の北西溝と接しており、本方形周溝墓が切られている。そしてさらに、中央部を第66号住居跡によって切られる。南西溝は、南側を第10号古墳跡に切れ、北側をC区から続く柵列状遺構のピットに切られている。北西溝については、北側に攪乱を受けているほかに、溝内や北側のプランが、柵列状遺構によるピットに切られている。重複によって失われている部分も多いが、ほぼ概形をとどめている。形態の特徴として、四隅が陸橋状に掘り残されると想定され、溝の平面形は直線的である。また、長さの割には細い溝であるといえる。方台部の盛り土は既にないが、方台部の平面形は直線的で方形に整った形態である。外周を含めた規模は、北東-南西方向で1184cm・南東-北西方向で1186cmを測る。方台部の形態は、直線的で整った方形を呈す。各溝の規模は、北東溝：幅128cm・深さ36cm、南東溝：長さ688cm・幅160cm・深さ64cm、南西溝：幅128cm・深さ56cm、北西溝：幅168cm・深さ64cm。主軸方向はN-33°-Wを指し、南東溝で接する第7号方形周溝墓(N-30°-W)、北東溝を切る第6号方形周溝墓(N-35°-W)とは、非常に近い方位を示す。これに対し、北東に近在する第4号方形周溝墓(N-3°-W)とは、大きく異なっている。各溝とも平面形が直線的であり、端部がやや四角張る。底面は比較的平坦であり、溝底の立ち上がりは、方台部側がやや鋭直線的であるのに対し、外周側は緩やかであるといえよう。遺物はいずれの溝からも出土しているが、完形度の高い土器は、南東溝西側と北西溝西寄りの範囲である。特に後者からは、壺(第176図8・10・11等)が溝底から浮いた状態で出土しているが、原位置については、葬送儀礼時点で墳丘上に樹立されていたか、あるいは墳丘中に埋置されていたものが崩落したと推定される。



第176图 第5号方形周溝墓出土遺物(1)



第177図 第5号方形周溝墓出土遺物(2)

第5号方形周溝墓出土遺物 (第176~177図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	高 坏	口 径 14.8 現存高 5.0	器面は磨滅している。外面：ハケ目の後へラ磨き、内面：ナデか。赤褐色。	A+B+D+H+J 口25 焼成：普
2	壺	現存高 7.7	器面は磨滅著しい。頸部にLR縄文の後、横位のへラ描き沈線文を施す。外面：へラ磨きか、内面：ナデか。橙色。	A+B+I+J 頸20 焼成：普
3	壺	現存高 13.5	頸部に上位から、横位のへラ描き沈線文4本-LR縄文-へラ描き沈線文4本を施す。頸部：内外面ともナデ。肩部外面：へラ磨き、内面：ナデ。橙色。	A+B+G+J 焼成：やや良
4	壺	胴 径(18.0) 現存高 18.1	肩部にRL縄文を3段施す。外面：ハケ目、内面：へラナデ。茶褐色。	A+B+F+G+J 胴35 焼成：普
5	壺	口 径 9.2 胴 径 16.5 底 径 6.0 器 高 25.4	胴部はほぼ球形を呈す。口縁部：外面ハケ目の後横ナデ、内面横ナデ。胴部外面：ハケ目の後へラ磨き、内面へラナデか。赤褐色。	A+B+F+H+J 口70 胴80 底100 焼成：良
6	壺	胴 径 9.8 底 径 現存高 11.4	器面は磨滅している。頸部～胴部：外面ハケ目の後へラ磨き、内面ナデか。底部：内外面ともナデか。赤褐色。	B+I(多)+J 頸70 胴・底100 焼成：普
7	壺	胴 径 12.9 底 径 5.6 現存高 6.4	胴部：外面ハケ目の後ナデ、内面へラナデ。底部：内外面ともナデ。橙色。	B+E+H+J 胴・底55 焼成：普

8	壺	胴 径 16.5 底 径 6.5 現存高 26.6	肩部にへら描き沈線による文様を施す。頸部～胴部外面：ハケ目の後丁寧なナデ、内面：ナデか。底部：外面ナデ、内面ナデか。橙色。	B+F+H+J 類50 胴・底100 焼成：やや良
9	壺	胴 径 (33.5) 底 径 7.8 現存高 43.9	器面は荒れている。胴部中央に最大径をもつ。胴部外面：ハケ目の後へら磨き、内面へらナデとナデ。底部：内外面ともナデ。	B+E+H+J 胴40 底50 焼成：普
10	壺	胴 径 26.0 底 径 7.2 現存高 27.6	器面はあれている。頸部にRLとLRの縄文を羽状に施し、肩部にRL～LR～RLの縄文を羽状に施文、その後、その間部分にへら描沈線による山形文を8箇所行う。胴部：外面はハケ目の後へら磨き、内面はナデ。底部：内外面ともナデ。赤彩。	B+G+J 胴100 底100 焼成：普
11	壺	胴 径 20.4 底 径 6.1 現存高 17.0	胴部：外面は横位のへら磨き、内面はへらナデ。底部：内外面ともへらナデ。褐色。	A+B+E+J 胴70 焼成：やや良

第6号方形周溝墓 (第178図)

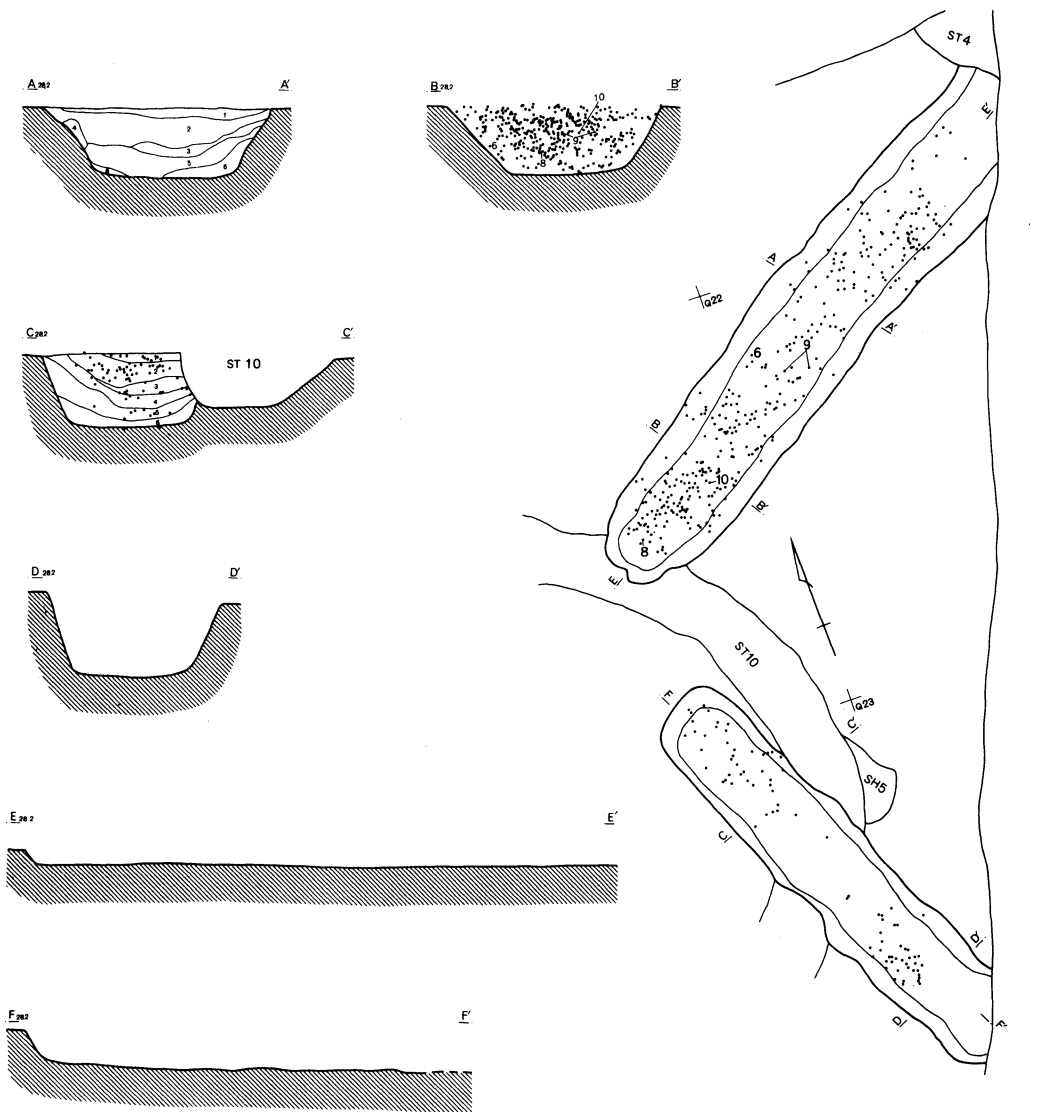
第6号方形周溝墓は、P22 f グリッドに位置する。北溝と西溝のみが検出された。北溝は、西側で第10号古墳跡に、中央付近では第17号・第18号溝跡に切られるが溝底付近は遺存し、東側は第9号古墳跡に切られ、さらに調査範囲外へと続く。また、西側で第5号方形周溝墓と重複しているとすれば、これを切っていると推定される。西溝は、第7号方形周溝墓の東溝・南溝と重複するが、これを切っていると推定される。南側については、調査範囲外に続いている。検出し得た部分については、遺存状況は良好であった。

形態の特徴として、四隅が陸橋状に掘り残されると想定され、両溝とも端部はやや四角張っており、平面形は直線的である。方台部の盛り土は既に失われているが、その平面形は直線的であり、方形または略方形に整った形態が想定される。底面は比較的平坦であり、溝底の立ち上がりは、方台部側がやや鋭く直線的であるのに対し、外周側は緩やかであるといえよう。

各溝の規模は、北溝：幅256cm・深さ72cm、西溝：幅196cm・深さ88cmを測る。主軸方向はN-35°-Wを指す。西に近在する第5号方形周溝墓(N-33°-W)、第7号方形周溝墓(N-30°-W)とは、非常に近い方位を示す。これに対し、北に近在する第4号方形周溝墓(N-3°-W)とは、大きく異なっているといえる。

位置的にも主軸方向的にも、第5号・第7号方形周溝墓に近似しているが、遺構自体の規模はかなりの違いをみせているといえる。方形周溝墓全体の規模については、検出部分が少ないため不明ではあるが、各溝の長さ・幅・深さ共に、両者を大きく凌いでいることはほぼ明瞭である。

遺物は、両溝から出土しているが、点数的には、北溝が多数を占める。第179図13の壺についても、平面図(第179図)上に点を落とすことはできなかったが、北溝から口縁部を半分ほど欠損するものの、ほぼ完形に近い状態で検出された。



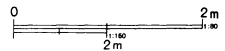
第6号方形周溝墓土層註記

A-A'

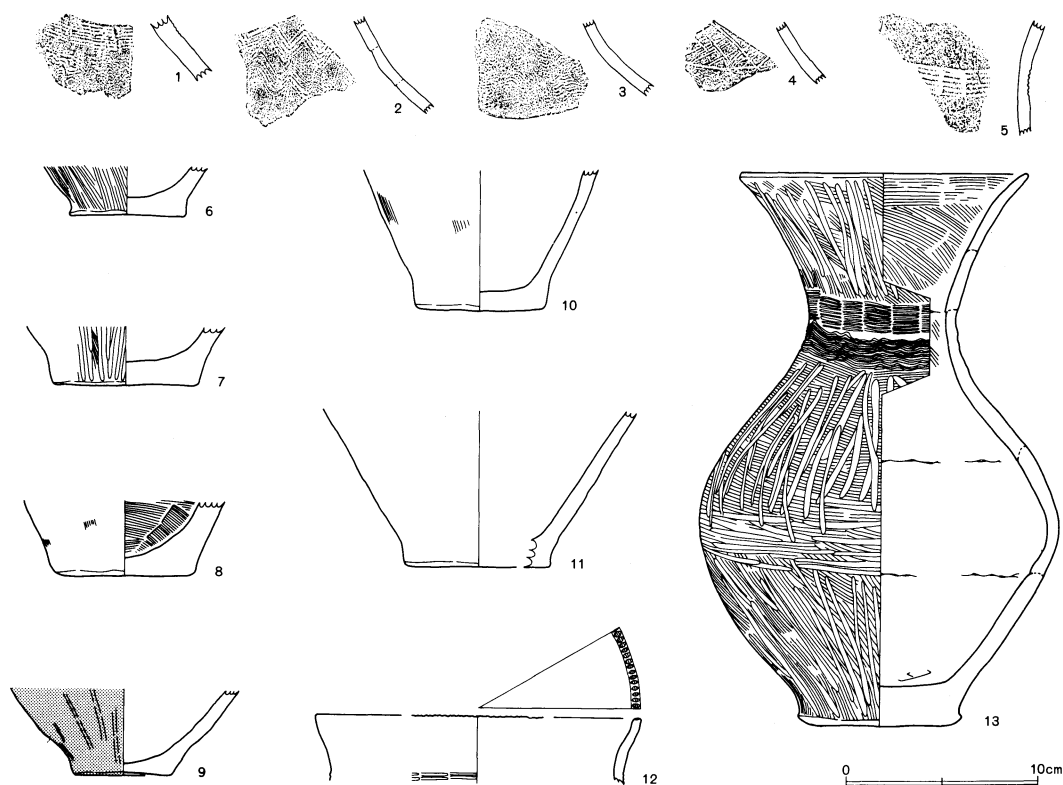
- 1 黒褐色土 ローム粒少、焼土粒若干。
- 2 黒褐色土 第1層に比してローム粒多、焼土粒・炭化物・ロームブロック若干。しまり弱。
- 3 黒色土 第1・2層に比して黒色の強い、ローム粒・ロームブロック多、炭化物も上層より多。
- 4 黒褐色土 第6層に類似。ロームブロック多。
- 5 黒褐色土 第2層に類似するが、炭化物は認められない。
- 6 黒褐色土 ロームブロック多（特に北側に顕著）、壁の崩落したものと考えられる。

C-C'

- 1 黒褐色土 ローム粒少。しまりやや強、粘性弱。
- 2 暗褐色土 ローム粒若干、ロームブロック（ $\phi 1\text{ cm}$ ）・カーボン微量。しまりやや強、粘性弱。
- 3 黒褐色土 ローム粒若干、カーボン微量。しまりやや強、粘性弱。
- 4 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック（ $\phi 3\text{ cm}$ ）多。しまりやや強、粘性弱。
- 5 暗褐色土 ローム粒少、カーボン少。しまりやや強、粘性弱。
- 6 暗褐色土 ロームブロック（ $\phi 3\text{ cm}$ ）、ローム粒多。しまりやや強、粘性弱。



第178図 第6号方形周溝墓

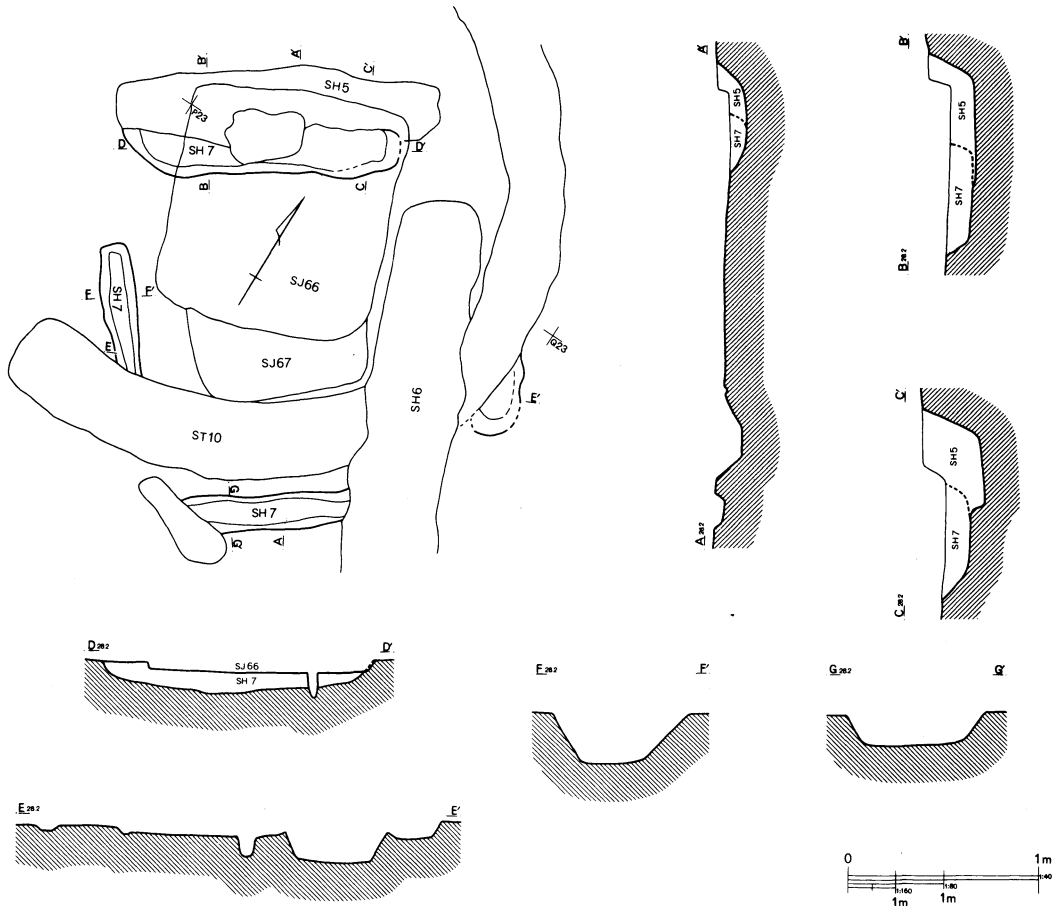


第179図 第6号方形周溝墓出土遺物

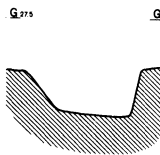
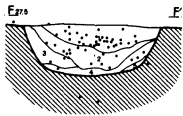
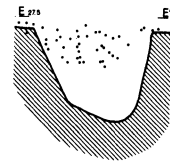
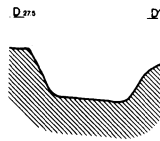
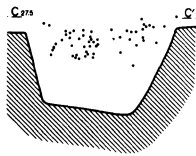
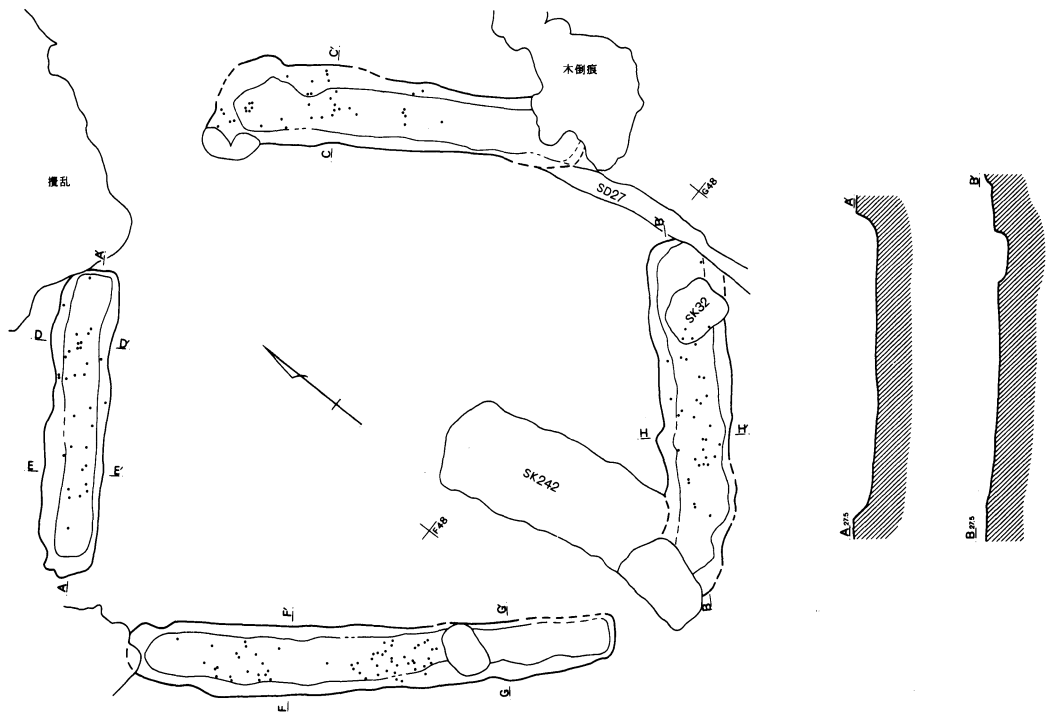
第6号方形周溝墓出土遺物 (第179図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	現存高 3.4	7本単位の櫛状工具で、右回転の簾状文を1段、不整形な波状文を施す。施文は雑で比較的浅く不鮮明。内面ナデ。茶褐色。	A+B+H+J 焼成：普
2	壺	現存高 5.0	外面：ハケ目の後、6本単位の櫛状工具で波状文を2段施す。内面：ナデ。文様は比較的太く鮮明で、波高も大。黄橙色。	A+E+H+J 焼成：普
3	壺	現存高 3.9	外面：7本単位の櫛状工具で波状文を3段施す。文様は比較的太く鮮明であるが、波高は低い。内面ナデ。茶褐色。	A+E+H+J 焼成：普
4	壺	現存高 3.3	外面：へら描き沈線による横線文の後、左下がりの斜線文、その後右下りの斜線文。連続山形文の充填部か。その下位に櫛描き波状文。櫛描き文は細く浅い。黄橙色。	A+D+H+J 焼成：普
5	甕	現存高 5.9	6本単位の櫛状工具で右回転の簾状文を1段。文様は太く鮮明で等間隔止め。内面：ナデ。外面にスス付着。黒褐色。	A+E+H+J 焼成：普
6	壺	底径 6.0 現存高 2.4	胴部：外面ハケ目、内面ナデ。底部：内外面ともナデ。褐色。	B+C+J 底100 焼成：やや良
7	壺	底径 7.1 現存高 3.0	胴部：外面ハケ目の後へら磨き、内面ナデ。底部：内外面ともナデ。橙色。	B+C+E+J 底80 焼成：やや良

8	壺	底径 6.7 現存高 4.0	外面は荒れている。胴部：外面ハケ目の後ナデか、内面ハケ目。底部：内外面ともナデか。橙色。	A+B+D+E 底50 焼成：普
9	壺	底径 5.0 現存高 4.5	器面は磨滅している。胴部：外面ヘラ磨き、内面ナデ。底部：内外面ともナデ。橙色。	B+E+J 底100 焼成：普
10	甕	底径(6.4)	胴部：外面ハケ目のちナデか、内面ナデ。底部：内外面ともナデ。におい黄橙色。	B+C+D+E 底30 焼成：普
11	壺	底径(7.4) 現存高 8.0	器面は磨滅著しい。整形不明。橙色。	B+D+E+J 胴下位 20 焼成：普
12	壺	口径(17.0) 現存高 3.5	口縁はやや受け口状を呈す。口唇部：木口状工具による押捺。口縁部：内外面とも横ナデ。頸部：外面櫛状工具による右回りの簾状文、内面ナデ。橙色。	C+E+J 口径15 焼成：普
13	壺	口径(15.0) 胴径 18.8 底径(8.6) 器高 29.0	口縁部：外面ハケ目の後粗いヘラ磨き、内面ハケ目。胴部：外面ハケ目の後粗いヘラ磨き、内面ナデ。底部：外面ナデ、内面ヘラナデ。頸部に9本単位の櫛状工具で右回転の簾状文を1段、その下位に波状文を1段。前者はほぼ等間隔止め、後者は波高低く不鮮明で施文も雑。黄褐色。	A+B+I+J 口径45 胴100 底70 焼成：やや良



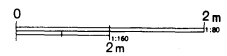
第180図 第7号方形周溝墓



第8号方形周溝墓土層註記

F-F' H-H' 共通

- | | | | |
|--------|--------------------------|--------|--------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒若干。 | 4 黒褐色土 | 1層に類似。ローム粒多。 |
| 2 黒褐色土 | 1層よりローム少、3層より黒色が強い。しまり良。 | 5 暗褐色土 | ローム粒多。しまり弱。 |
| 3 黒褐色土 | 2層よりローム少、黒色が強い。しまり良。 | | |



第181図 第8号方形周溝墓

第7号方形周溝墓（第180図）

第7号方形周溝墓は、P23 a グリッドに位置する。北東溝は、第10号古墳跡・第6号方形周溝墓に切られる。南東溝は、東側を第6号方形周溝墓に、西側を土壌に切られている。南西溝は、南側を第10号古墳跡によって切られる。外周を含めた推定規模は、北東-南西方向866cm・南東-北西方向864cmを測る。各溝の規模は、北東溝：幅112cm・深さ32cm、南東溝：幅80cm・深さ24cm、南西溝：幅80cm・深さ15cm、北西溝：長さ592cm・深さ48cmを測る。主軸方向はN-30°-Wを指し、第5号・第6号方形周溝墓にきわめて近い。溝底の立ち上がりは、方台部側が若干急な立ち上りを示している。南東溝・南西溝は、他の2溝に較べ規模が小さい。図化し得る遺物は出土しなかった。



第182図 第8号方形周溝墓出土遺物

第8号方形周溝墓（第181図）

第8号方形周溝墓は、E47 b グリッドに位置する。様々な遺構に切られてはいるが、規模や形態を得ることはできた。隅部陸橋状に掘り残す。方台部の盛り土は失われている。外周を含めた推定規模は、北東-南西方向で1328cm・南東-北西方向で1408cmを測る。各溝の規模は、北東溝：長さ（推定）784cm・幅160cm・深さ88cm、南東溝：幅154cm・深さ32cm、南西溝：長さ（推定）1024cm・幅160cm・深さ56cm、北西溝：長さ624cm・深さ96cmを測る。主軸方向はN-41°-Wを指す。南東溝・南西溝は、他の2溝に較べ全体的に浅い。図化し得る遺物は、石製品が1点のみであった。

第8号方形周溝墓出土遺物（第182図）

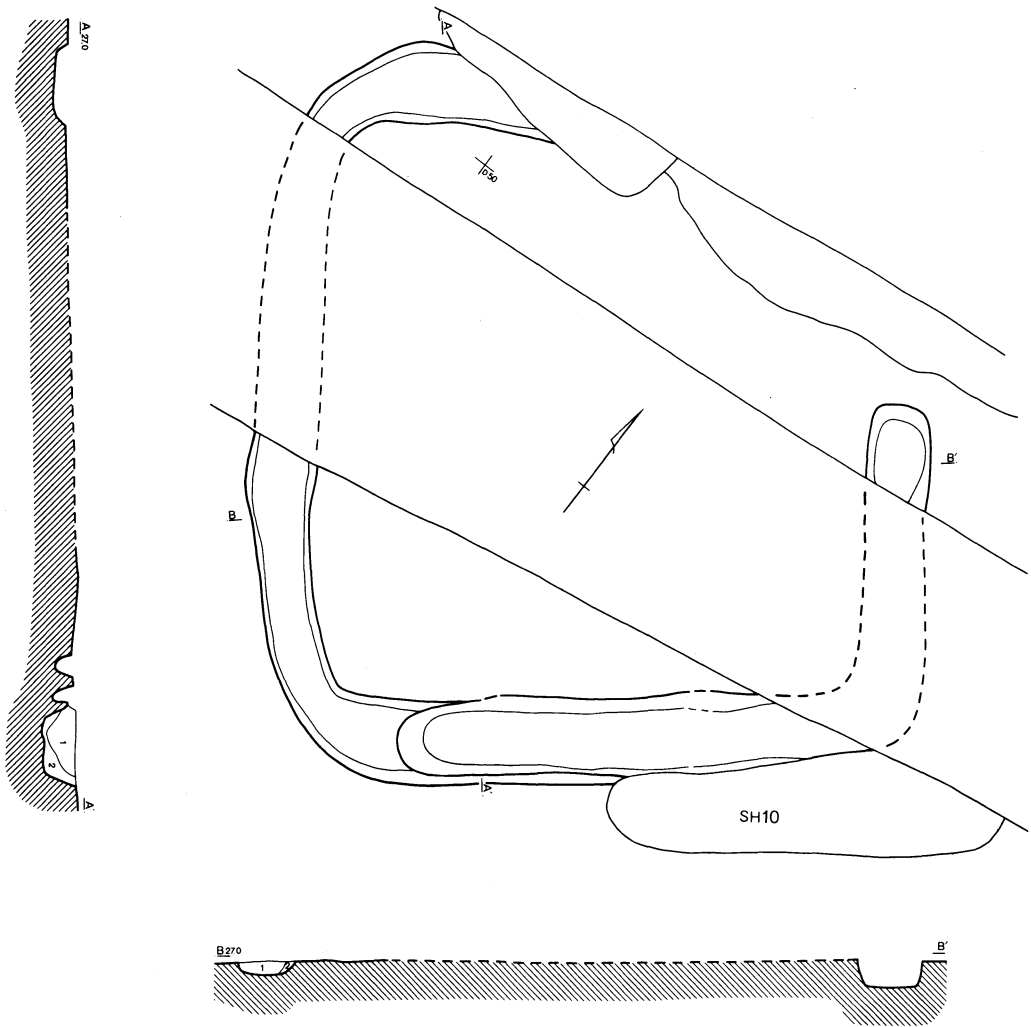
番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	鎌形 石製品	長さ 幅 厚さ	9.7 2.8 0.4	重量16g。両面に粗い磨きを行う。周囲全体に面取りをし、大雑把に磨く。基部の成形は粗い。	緑泥片岩製

第9号方形周溝墓（第183図）

第9号方形周溝墓は、D50 h グリッドに位置する。南東溝が、第10号方形周溝墓と重複しているが、切っていると推定される。攪乱2箇所挟まれて検出された。北側コーナー部分は、陸橋状に掘り残しているか否かについては不明確であった。南側と西側コーナーは、陸橋状をもたず溝を巡らせている。東側コーナーについては不明であるが、溝が途切れないと推定される。

方台部の盛り土は失われている。外周を含めた規模は、北東-南西方向で1092cm・南東-北西方向で1164cmを測る。各溝の規模は、北東溝：幅102cm・深さ48cm、南東溝：幅132cm・深さ50cm、南西溝：幅120cm・深さ20cm、北西溝：幅126cm・深さ20cmを測る。主軸方向はN-39°-Wを指す。

遺存状況が悪いため、溝は全体的に浅い。検出範囲から想定すると、方台部の形状・溝の形状共に、整っているといえる。溝底からの立ち上がりは、方台部側が急で、外周側がやや緩やかになる。南東溝南側は深まりをもつ。溝底は比較的平坦である。遺存状態が悪いためもあつてか、出土遺物は大変に少ない。図化し得た遺物は、2点である。

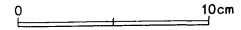
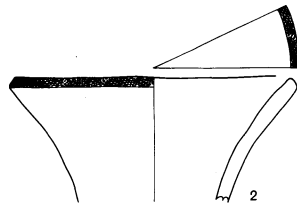
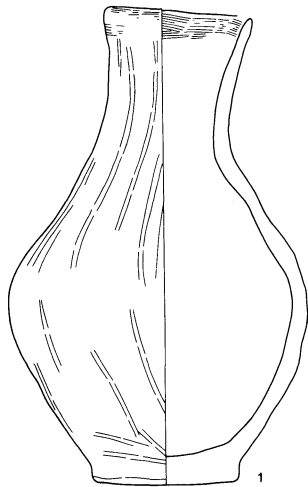


第9号方形周溝墓土層註記

- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少。しまり良。
- 2 黒褐色土 ロームブロック多（特に南側に顕著）。
- 3 暗黄褐色 ローム粒多。しまり弱。

0 4m

第183図 第9号方形周溝墓



第184図 第9号方形周溝墓出土遺物

第9号方形周溝墓出土遺物 (第184図)

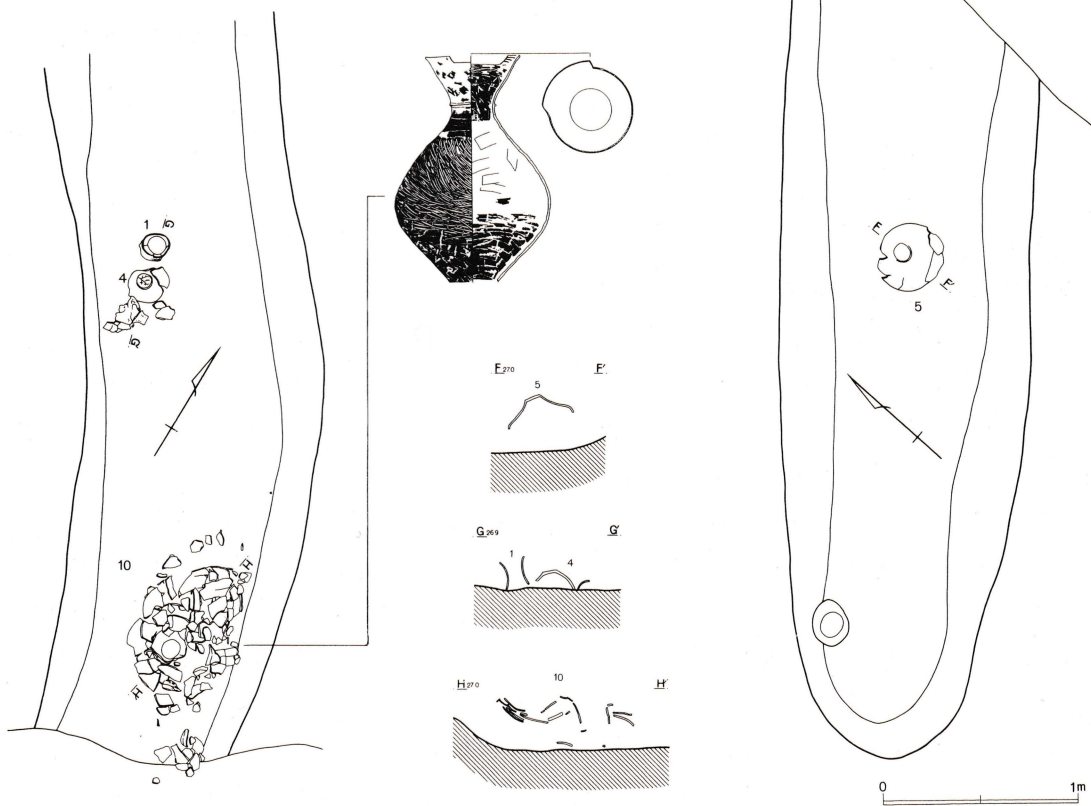
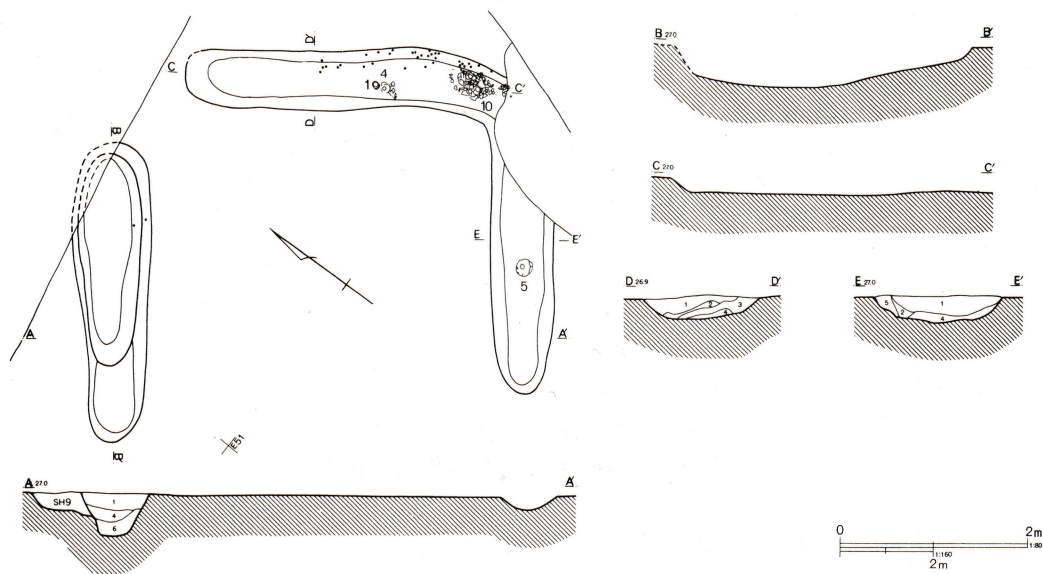
番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	口径 (7.8) 胴径 15.6 底径 7.1 器高 25.0	器面は摩滅著しい。口縁部：内外面ともハケ目の後横ナデか。 頸部～胴部：外面ヘラ磨きか、内面ナデか。底部：内外面とも ナデか。橙色。	A+B+E+J □60 頸・胴・底100 焼成：普
2	壺	口径 (14.2) 現存高 6.5	器面は摩滅している。口唇部にRL斜縄文。口縁部：内外面とも ナデか。橙色。	B+I+J □20 焼成：普

第10号方形周溝墓 (第185図)

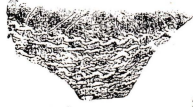
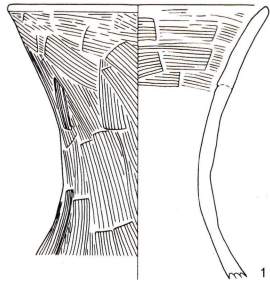
第10号方形周溝墓は、E50 d グリッドに位置する。東側コーナーを切られ、北西溝は第9号方形周溝墓の南東溝を切る。南西側については、溝の痕跡と思われる遺構があるが、南西溝とするには無理がある。検出状況からでは、南西側に溝はなく、北側は陸橋状に掘り残す。北東から南東へは、溝が巡る。方台部の盛り土は、既に失われている。

外周を含めた規模は、南東-北西方向で992cm。各溝の規模は、北東溝：幅128cm・深さ24cm、南東溝：幅128cm・深さ30cm、北西溝：長さ624cm・幅160cm・深さ96cmを測る。主軸方向はN-39° - Wを指し、第9号方形周溝墓とまったく一致している。方台部の形状・溝の形状共に直線的であり、整った遺構である。北西溝南側は、テラス状を呈し浅くなる。土層断面図(第185図) E-E'に観る第5層は、方台部盛り土が崩れた層と推定される。

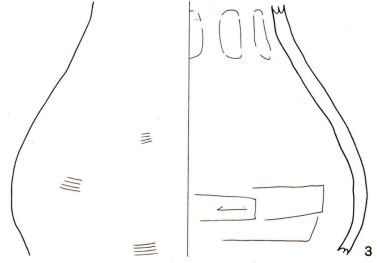
出土した遺物の内、その多くは北東溝と南東溝から検出されたものであり、特にコーナー付近に多くみられた。北東溝に検出された1・4(第185図以下同じ)は、溝の底面上におけるものであり、後者は土器底面を上に向けて出土した。同溝における大型壺(同10図)は、コーナー近くの外周寄りに破片がひとまとまりに分布していたが、土圧を想定させる状況ではなかった。



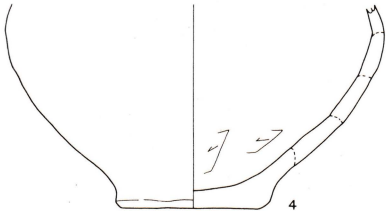
第185图 第10号方形周沟墓



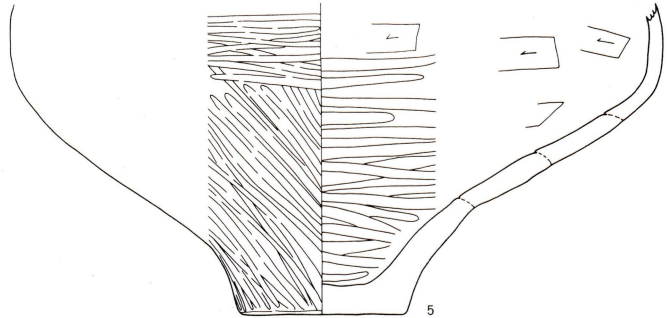
2



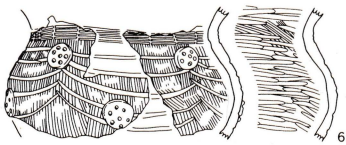
3



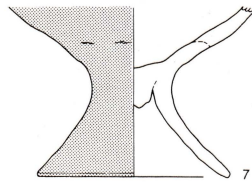
4



5



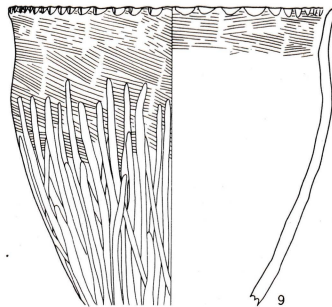
6



7



8



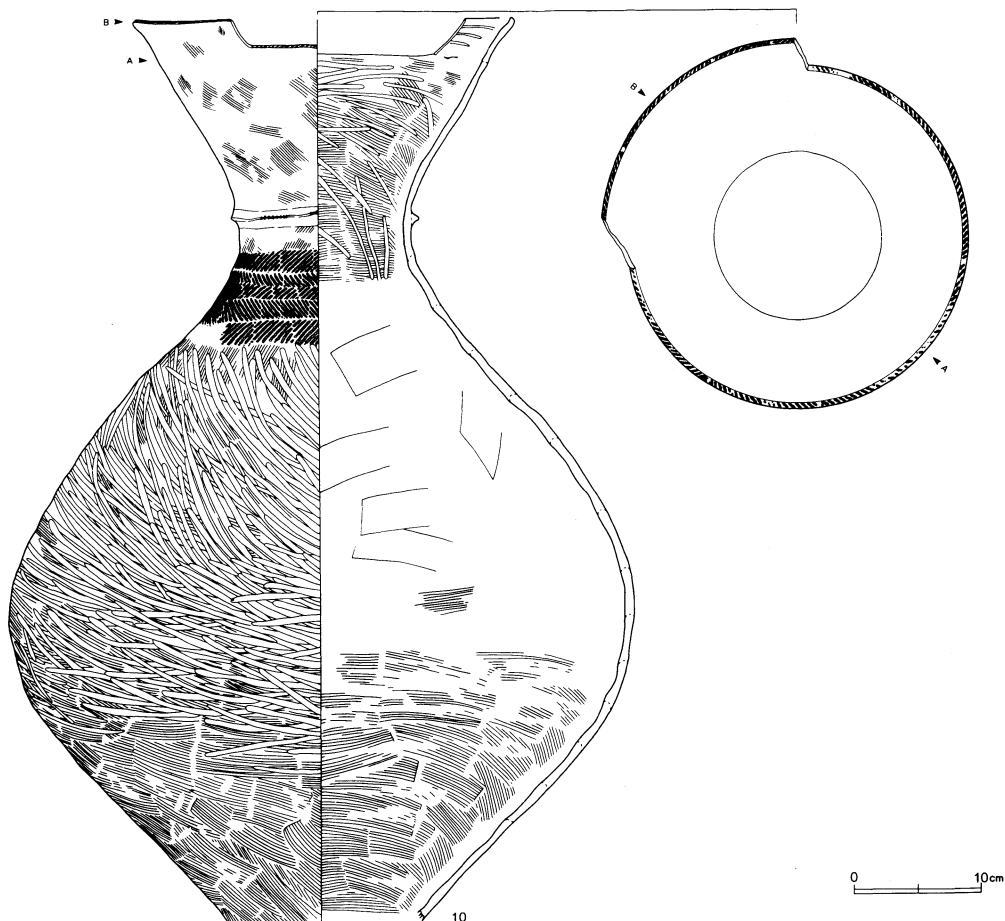
9



第186图 第10号方形周沟墓出土遗物(1)

第10号方形周溝墓出土遺物 (第186・187図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	口径 13.4 現存高 14.3	口縁部：内外面ともハケ目の後横ナデ。頸部：外面ハケ目、内面ナデ。赤褐色。	B+I+J 口・頸80 焼成：やや良
2	壺	現存高 10.2	外面：S字状結接文6段を施した後全体をヘラ磨き。 内面：ナデ。褐色。	A+B+H+J 頸25 焼成：良
3	壺	胴径 (18.8) 現存高 13.3	胴部外面：ハケ目の後ナデか、内面：上位は指頭による押捺、 中位はヘラナデ。橙色。	A+B+I+J 胴40 焼成：やや不良
4	壺	胴径 (19.8) 底径 7.4 現存高 10.6	器面は荒れている。胴部：外面ハケ目の後ナデか、内面ヘラナ デとナデ。底部：外面木葉痕を残す、内面ナデ。橙色。	B+H+J 胴55 底100 焼成：普



第187図 第10号方形周溝墓出土遺物(2)

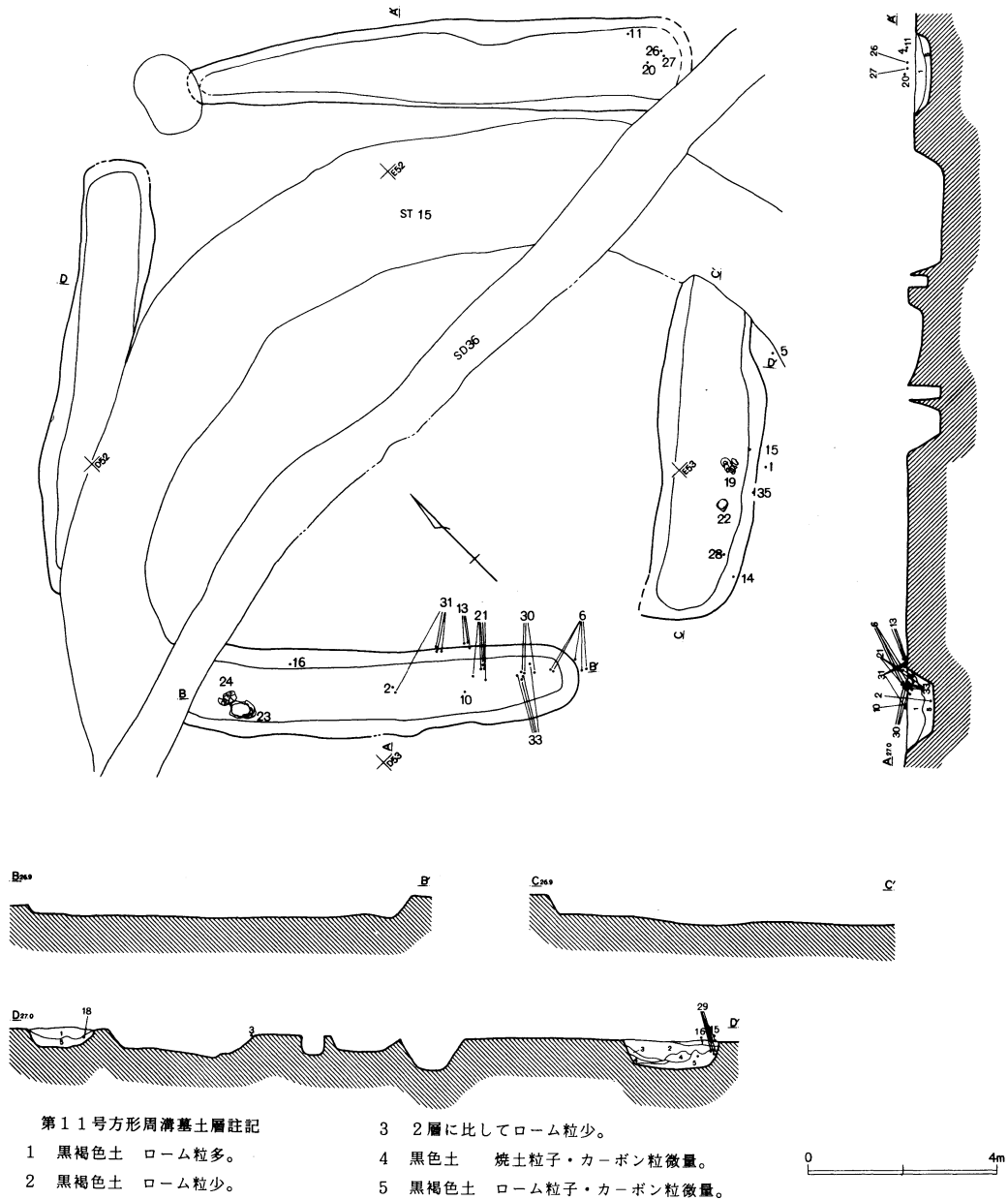
5	壺	胴径 34.3 底径 8.5 現存高 16.1	胴部外面：ヘラ磨き、内面：ヘラによるナデツケとナデ。底部外面：ナデ、内面：ヘラによるナデツケ。明褐色。	A+B+I+J 胴下位95 底100 焼成：普
6	甕	胴径 (12.5) 現存高 7.0	頸部外面：粗いハケ目の後、4本単位の櫛状工具による右回転の等間隔止め簾状文、内面：ハケ目の後ヘラ磨き。簾状文は幅・深さとも大きく鮮明。胴部外面：ハケ目の後ヘラ描き沈線文、その後円形浮文（5箇所残存）。沈線文は最上段が横位に全周し、下の4本は山形状に一巡すると思われる。沈線文は幅・深さとも大きく鮮明。黒褐色。	A+B+I 胴上半40 焼成：やや良
7	高 坏	脚台径 (9.8) 現存高 8.8	坏部～脚台部外面：丁寧なナデ。坏部内面：丁寧なナデ、脚台部内面：ナデ。赤褐色。	A+B+C+E+J 坏55 脚100 焼成：良
8	甕	口径 15.7 胴径 14.0 現存高 12.8	口唇部：指頭による相互押捺。口縁部：外面粗い横ナデの後ハケ目、内面粗い横ナデの後ヘラナデ。胴部：外面ハケ目、内面ヘラナデ。黒褐色。	B+E+J 口50 胴上半40 焼成：やや良
9	甕	口径 (15.7) 胴径 (16.8) 現存高 15.6	口唇部：指頭による相互押捺。口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデ。胴部外面：上半ハケ目、下半ヘラ磨き。胴部内面：ナデ。暗褐色。	A+B+H(多)+J 口40 胴45 焼成：普
10	壺	B口径 (29.8) A口径 25.8 胴径 (48.8) B現存高70.5 A現存高68.0	一旦Aの面で口縁の成形を終え、口唇部にRL縄文を施文した後、改めてBの面まで粘土帯を継ぎ足し、口唇部にLR縄文を施す。頸部に突帯を一巡させ、指頭による刻みを行う。肩部に上位からLR-RL-LR-RL-LR縄文を羽状に施文する。口縁部：外面ハケ目の後ナデ、内面粗いヘラ磨き。胴部外面：ハケ目の後上～中位をヘラ磨き、内面上半ヘラナデとナデ、下半ハケ目。橙色。	A+B+E+H+J A口25 B口100 胴55 焼成：やや良

第11号方形周溝墓 (第188・189図)

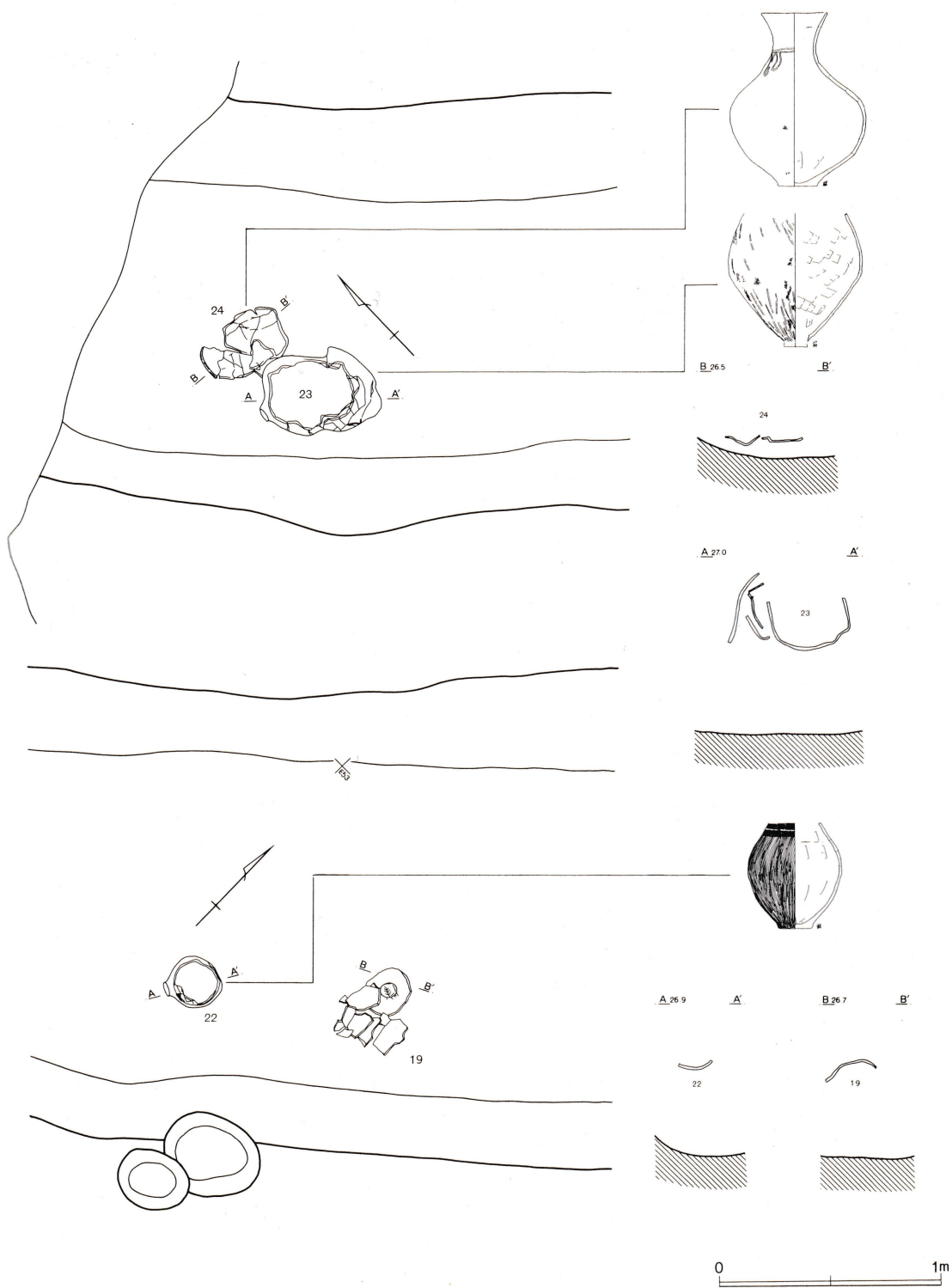
第11号方形周溝墓は、D50 e グリッドに位置する。北東溝は、北側で土壌に切られ、南側では第36号溝跡によって切られている。南西溝は、北側を第15号古墳跡に切られ、南西溝は北側で第15号古墳跡・第36号・第37号溝跡に切られている。北西溝跡についても、南側を第15号古墳跡・第36号溝跡に切られる。方台部の盛り土は、既に失われている。東西コーナー部分が不明確ではあるが、四隅を陸橋状に掘り残す形態であると推定される。

外周を含めた規模は、南東—北西方向で1520cm・南西—北東方向で1536cmを測る。各溝の規模は、北東溝：推定の長さ1080cm・幅192cm・深さ32cm、南東溝：幅240cm・深さ64cm、南西溝：幅192cm・北西溝：幅144cm・深さ40cmを測る。主軸方向はN-42° -Wを指し、これは、第8号方形周溝墓(N-41° -W)・第9号・第10号方形周溝墓(共にN-39° -W)と非常に近い。そしてこれは、南西に13mの距離にある第12号方形周溝墓(N-15° -E)、40m離れた第13号方形周溝墓(N-6° -E)とは大きく異なり、63mの距離にある第14号方形周溝墓(N-30° -W)、68mの距離にある第15号方形周溝墓(N-52° -W)とは若干近い数値であるといえる。

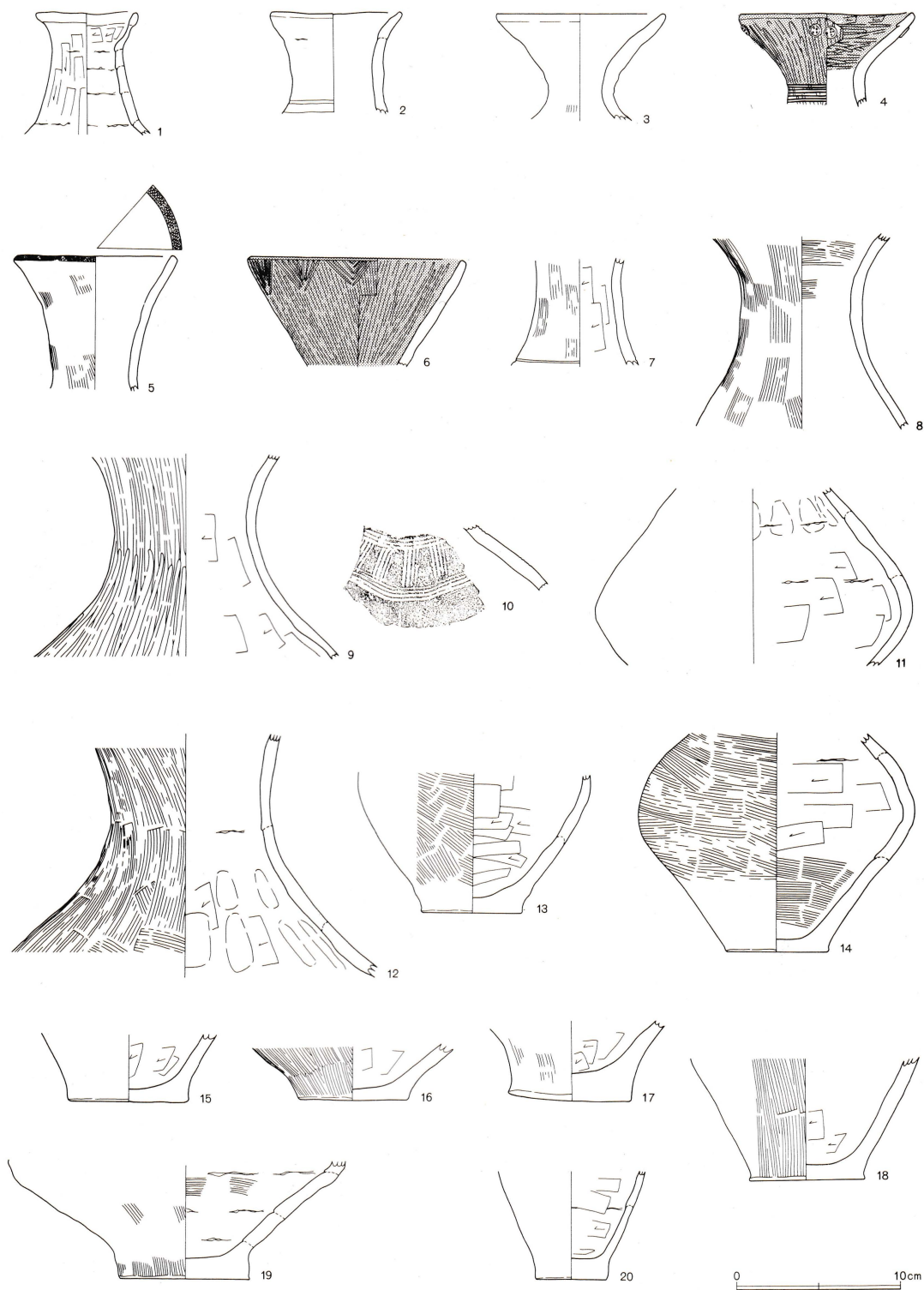
方台部の形状・溝の形状共に直線的であり、整った方形周溝墓である。各々の溝は、端部がやや四角張り、長さ・幅なども比較的同規模なものである。溝底面は比較的平坦であり、底面の立ち上がりは、方台部側で直線的に急に立ち上がり、外周側では緩やかに立ち上がる。図化し得た遺物は、北西溝を除いた各溝から出土している。これらの遺物については、溝底からかなり浮いた状態で検出されている土器の割合が高い。原位置については、葬送儀礼時には墳丘上に置かれていたか、あるいは、墳丘中に埋置されていたものが崩壊のため、転落した結果であろうか。



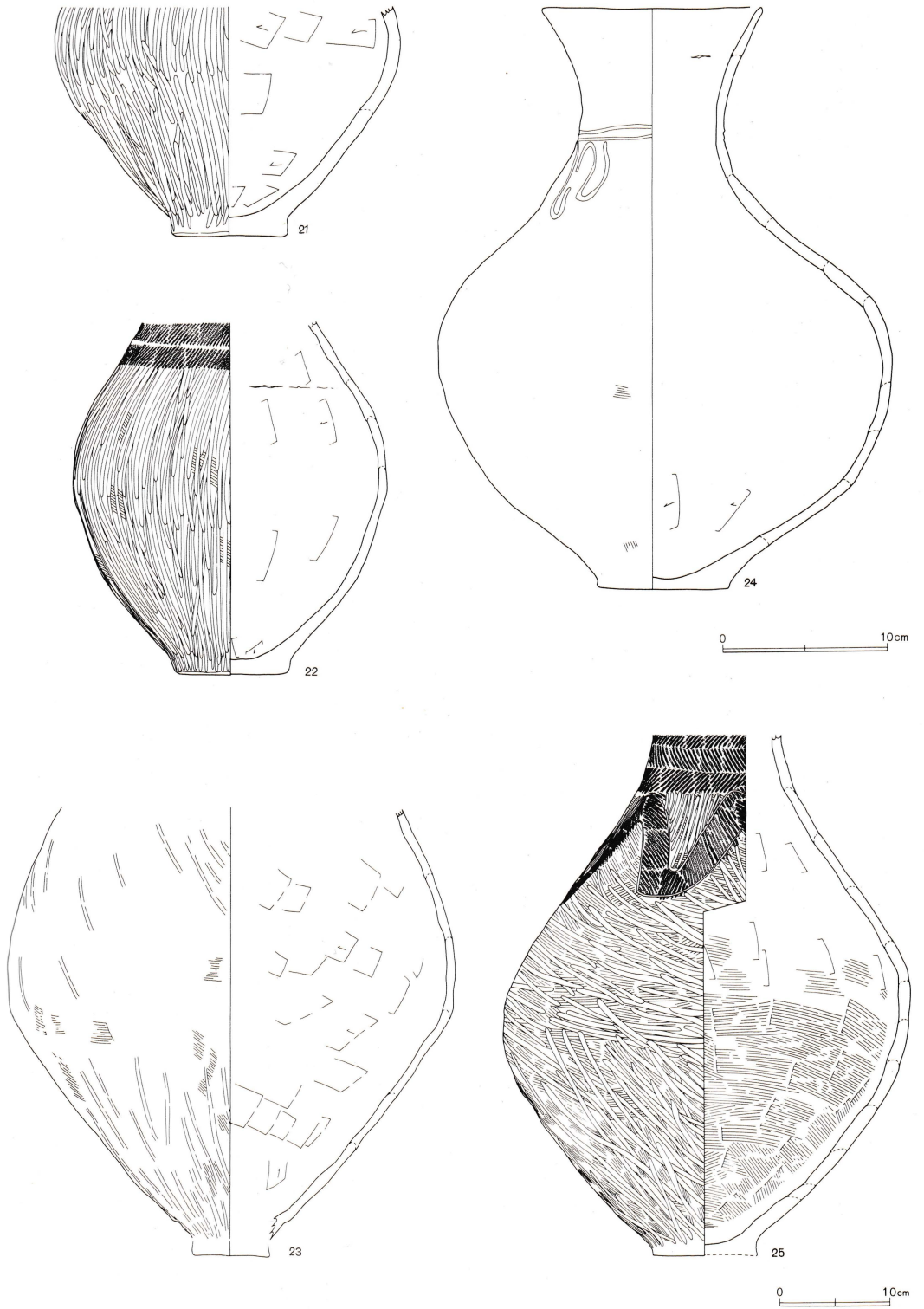
第188図 第11号方形周溝墓(1)



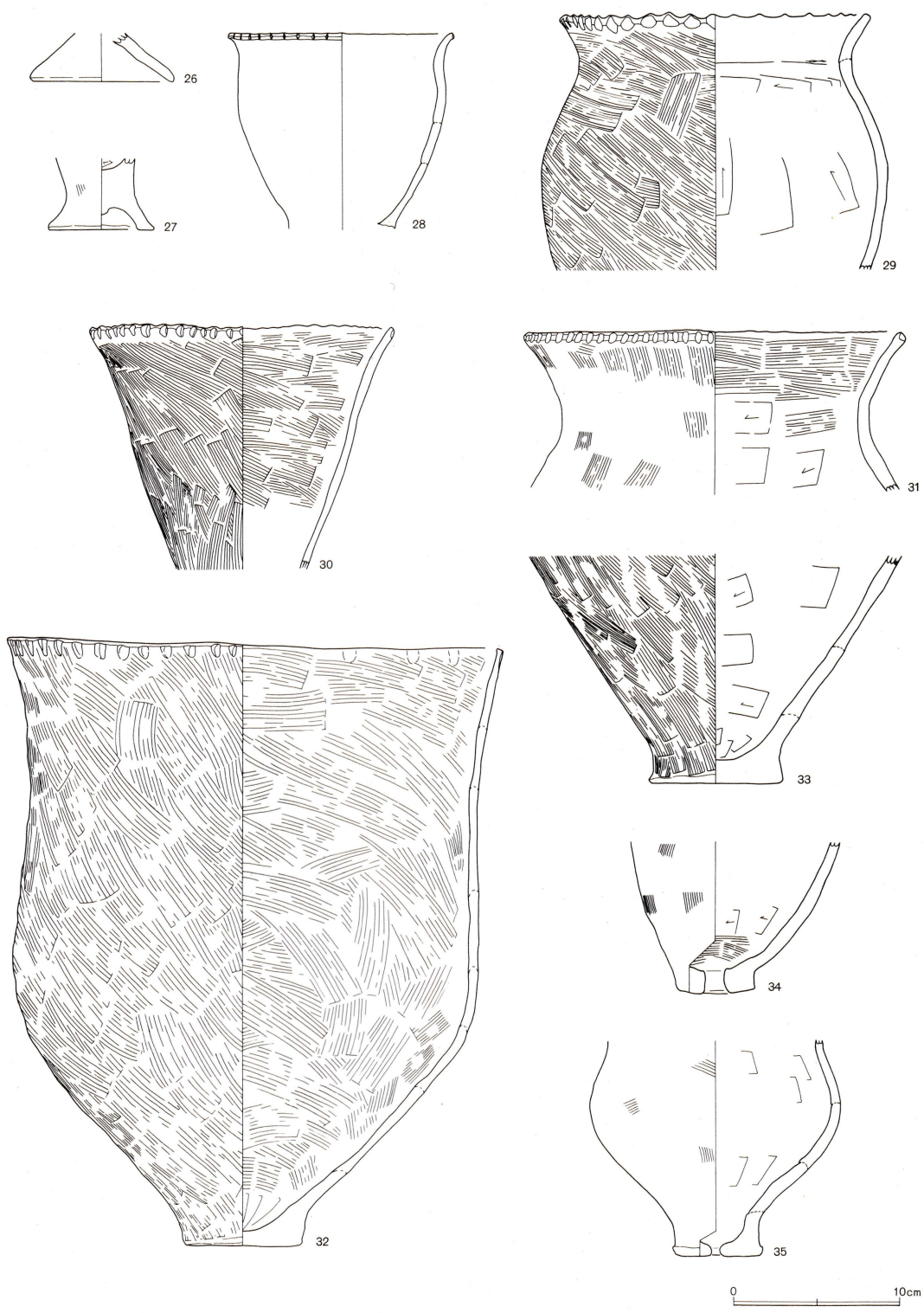
第189图 第11号方形周墓(2)



第190图 第11号方形周沟墓出土遗物(1)



第191图 第11号方形周溝墓出土遺物(2)



第192图 第11号方形周沟墓出土遗物(3)

第11号方形周溝墓出土遺物 (第190~192図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	口径 6.0 現存高 7.4	口縁は粘土紐を全周させ複合口縁状を呈す。口縁部：内外面とも横ナデ。頸部外面：篋削り、内面：上位のみヘラナデ、他はナデ。赤褐色。	A+B+E+J 口径100 焼成：やや良
2	壺	口径 8.1 現存高 6.1	口縁部：内外面とも粗い横ナデ。頸部：内外面とも粗いナデ。赤褐色。	A+B+H+J 口径80 焼成：普
3	壺	口径 (10.2) 現存高 6.3	器面は荒れている。口縁部：内外面とも横ナデ。頸部外面：ハケ目の後ナデか、内面：ナデ。黄褐色。	A+B+I+J 口径25 焼成：やや不良
4	壺	口径 10.6 現存高 5.5	器面は摩滅著しい。口縁外面に円形浮文を2個1単位で4箇所、計8個。口縁部外面：横ナデか、内面：ヘラナデの後横ナデか。頸部：内外面ともヘラ磨き。頸部に横位のヘラ描き沈線7本。橙色。	A+B+I+J 口径100 焼成：普
5	壺	口径 9.3 現存高 8.1	器面は摩滅している。口縁部：内外面とも横ナデか。頸部：外面ハケ目の後ナデか、内面ナデか。口唇部にLR縄文。赤褐色。	A+B+H+J 口径100 焼成：やや良
6	壺	口径 12.4 現存高 6.6	器面は摩滅している。口縁にヘラ描き沈線による三角文を巡らせる。口縁部：内外面ともヘラ磨き。赤褐色。	A+B+F+H 口径60 焼成：普
7	壺	現存高 6.4	外面：ハケ目の後ナデ、内面：ヘラナデ。茶褐色。	A+B+I+J 頸100 焼成：やや良
8	壺	現存高 11.6	器面は摩滅している。外面：ハケ目か、内面：上半ハケ目の後ナデか、下半ナデか。にぶい褐色。	A+B+D+J 頸55 焼成：普
9	壺	現存高 15.6	外面：ヘラ磨き、内面：ヘラナデ。にぶい茶褐色。	A+B+G+J 頸35 焼成：普
10	壺	現存高 3.8	外面：ナデの後、4本単位の櫛状工具により、上位から左回転の簾状文—縦位の直線文—横位の直線文。文様は幅・深さとも大きく鮮明。内面：ヘラナデとナデ。橙色。	A+B+E+H+J 焼成：普
11	壺	胴径 (19.6) 現存高 10.9	器面は荒れている。肩部にS字結接文。外面：ナデか。内面：上位は指頭による押捺、中位はヘラナデ。黄褐色。	A+B+E 胴25 焼成：やや不良
12	壺	現存高 14.9	外面：ハケ目の後粗いナデ。内面：上半ナデ、下半ヘラナデと指頭による押捺。褐色。	A+B+D+J 首100 焼成：やや良
13	壺	胴径 (14.8) 底径 6.0 現存高 8.5	胴部外面：ハケ目、内面ヘラナデ。底部：内外面ともナデ。暗褐色。	A+B+J 胴20 底100 焼成：やや良
14	壺	胴径 (17.0) 底径 (6.4) 現存高 13.3	器面は荒れている。胴部外面：上~中位はハケ目の後ナデか、下位はナデ。胴部内面：上~中位はヘラナデ、下位はハケ目。底部：内外面ともナデ。茶褐色。	A+B+E+I(多)+J 胴30 底45 焼成：普

15	壺	底径 7.0 現存高 4.1	胴部～底部：外面ナデ内面：ヘラナデ。茶褐色。	A+B+J 底100 焼成：やや良
16	壺	底径 6.7 現存高 3.1	胴部外面：ハケ目。底部外面：ナデ。胴部～底部内面：ヘラナデ。明褐色。	B+I+J 底100 焼成：やや良
17	壺	底径 7.5 現存高 4.9	胴部外面：ハケ目の後ナデ、底部外面：ナデ。胴部～底部内面：ヘラナデ。橙色。	A+B+I+J 底100 焼成：やや良
18	壺	底径 7.0 現存高 7.4	胴部外面：ハケ目、内面：ヘラナデとナデ。底部：内外面ともナデ。褐色。	A+B+I+J 底100 焼成：普
19	壺	底径 8.0 現存高 7.2	胴部：内外面ともハケ目の後ナデ。底部：内外面ともナデ。橙色。	A+B+E+J 胴下位90 底100 焼成：普
20	甕	底径 4.3 現存高 7.6	胴部：外面ナデ、内面ヘラナデ。底部：外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。茶褐色。	B+H+J 底100 焼成：やや良
21	壺	胴径 (21.0) 底径 6.9 現存高 13.7	胴部外面：ヘラ削り、内面ヘラナデ。底部外面：ヘラ削り、内面ヘラナデ。橙色。	B+E+I+J 胴45 底100 焼成：普
22	壺	胴径 19.0 底径 6.1 現存高 21.3	胴部外面：ハケ目の後ヘラ磨き、内面：ヘラナデ。底部：外面ナデ、内面ヘラナデ。肩部にLR斜縄文2段。茶褐色。	A+B+I(多)+J 胴60 底100 焼成：やや良
23	壺	胴径 (40.5) 現存高 38.5	器面は摩滅著しい。胴部中位にやや張りをもつ。胴部外面：ハケ目の後ヘラ磨き、内面ヘラナデとナデ。橙色。	A+B+H 胴35 焼成：普
24	壺	口径 13.1 胴径 27.3 底径 7.6 器高 35.0	器面は摩滅著しい。胴部中位に張りをもつ。口縁部：内外面とも横ナデか。胴部外面：ハケ目の後ナデか、内面：ナデとヘラナデか。底部：内外面ともナデか。頸部にヘラ描きによる横線文2条と、波状の沈線文1箇所。橙色。	A+B+I+J 口95 胴65 底100 焼成：普
25	壺	胴径 (36.6) 底径 (9.4) 現存高 46.5	頸部外面：RL・LR縄文を羽状に施文。肩部外面：ハケ目の後RL縄文をし、ヘラ描き沈線で波状に区画、その後周囲をヘラ磨き。頸部～肩部内面：ヘラナデとナデ。胴部外面：ハケ目の後ヘラ磨き、内面ハケ目の後粗いナデ。橙色、一部黒色。	A+E+I+J 胴80 底40 焼成：やや良
26	高坏	脚台径 (8.8) 現存高 2.9	器面は摩滅している。端部は内外面ともに横ナデか。他は内外面ともナデか。オリーブ黒色。	A+B+I(多)+J 脚25 焼成：普
27	台付甕	脚台径 5.3 現存高 4.3	外面全体：ハケ目の後ナデ。底部内面：ヘラナデ、脚台部内面：ナデ。茶褐色。	A+B+H+J 脚100 焼成：普
28	甕	口径 (13.7) 胴径 (12.6) 現存高 12.0	器面は摩滅している。口縁外面に木口状工具による刻み目。口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：内外面ともナデか。茶褐色。	A+B+J 口25 胴20 焼成：普

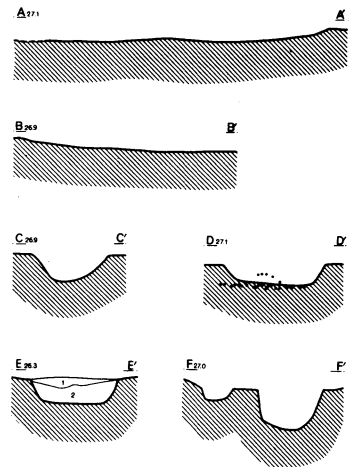
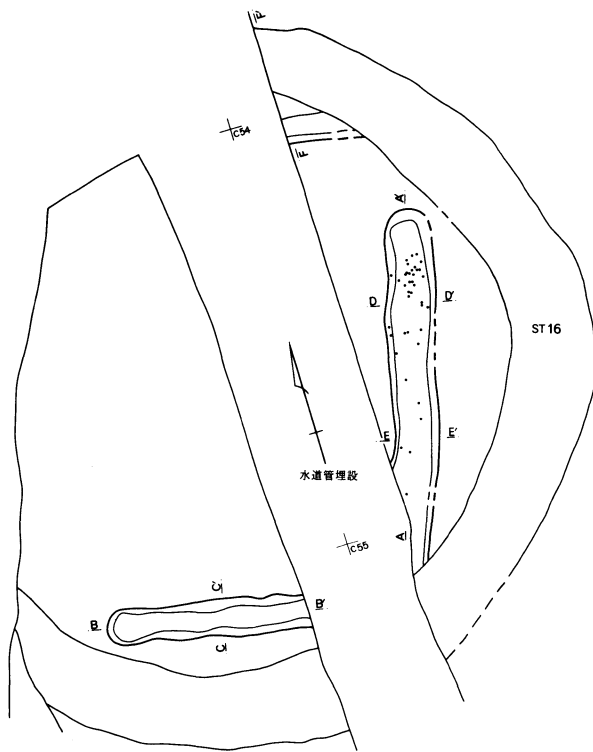
29	甕	口径 (18.0) 胴径 (21.0) 現存高 15.4	器面は摩滅著しい。口縁部に指頭による相互押捺。口縁部外面：ハケ目の後横ナデか、内面横ナデか。胴部外面：ハケ目、内面ヘラナデ。橙色。	B+E+I(多)+J 口15 胴20 焼成：普
30	甕	口径 18.1 現存高 14.5	口縁部は指頭による相互押捺。口縁部：内外面ともハケ目の後粗いナデ。胴部外面：ハケ目、内面上～中位はハケ目の後粗いナデ、下位はナデ。褐色。	A+B+I(多)+J 口60 胴45 焼成：普
31	甕	口径 (22.6) 現存高 9.8	口縁部に木口状工具による刻み。口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデ。胴部：外面ハケ目の後ナデ、内面ヘラナデ。茶褐色。	B+H+J 口25 焼成：やや良
32	甕	口径 (29.5) 胴径 27.9 底径 7.0 器高 36.2	口縁部に指頭による弱い相互押捺。外面にスス附着。胴部～頸部にかけてほぼ直立し口縁でわずかに外反して開く。口縁～胴部：内外面ともハケ目の後ナデ。底部：外面ナデ、内面ヘラナデ。褐色（一部黒色）。	A+E+H 口25 胴60 底100 焼成：普
33	甕	底径 7.9 現存高 13.7	胴部外面：ハケ目の後粗いナデ、底部外面：ヘラ削り。胴部～底部内面：ヘラナデ。外面黒色、内面褐色。	B+I+J 胴下位20 底100 焼成：良
34	甗	底径 4.7 孔径 1.1 現存高 9.1	器形は歪み器面は荒れている。胴部外面：ハケ目の後ナデか、内面：中位ナデか、下位ハケ目とヘラナデか。底部：内外面ともナデか。底部は焼成前穿孔で1箇所。にぶい橙色。	A+B+E+J 胴35 底100 焼成：普
35	甗	胴径 (15.1) 底径 5.1 孔径 0.5 現存高 13.0	器形は歪み器面は荒れている。胴部外面：ハケ目の後ナデか、内面：ヘラナデか。底部：内外面ともナデ。底部は焼成後穿孔で1箇所、壺からの転用と思われる。黒褐色。	B+H+J 胴80 底25 焼成：普

第12号方形周溝墓（第193図）

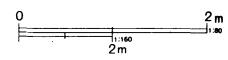
第12号方形周溝墓は、C54 a グリッドに位置する。北溝は東側で第16号古墳跡によって切られ、西側は調査範囲外に続くため、ごく部分的な検出である。東溝は、南側部分が一部攪乱を受けている。南溝に関しても、東側で攪乱を受けている。西溝は、調査区域の端に位置するためか、検出されなかった。非常に遺存率が低いとはいうものの、3本の溝が検出された。方台部の盛り土は、既に失われている。南東コーナー部分が不明確ではあるが、北東部分は陸橋状に掘り残されていると推定される。各溝の規模は、北溝：調査し得た範囲内では深さ32cm、東溝：幅96cm・深さ24cm、南溝：幅80cm・深さ28cmを測る。主軸方向はN-15° - Eを指し、北東約50mの第8号方形周溝墓（N-41° - W）、30mと28mの第9号・第10号方形周溝墓（共にN-39° - W）に比較的近い。また、南西18mの第13号方形周溝墓（N-6° - E）と、同40mの第14号方形周溝墓（N-30° - W）・同47mの第15号方形周溝墓（N-52° - W）との中間的な方位ともいえよう。方台部の形状・溝の形状共に直線的である。溝端部はやや四角張り、溝底面は比較的平坦である。遺物は少数出土したが、遺存度が低く、接合関係にあるものも少なかった。図化し得た遺物は、壺底部1点のみであった。

第12号方形周溝墓出土遺物（第194図）

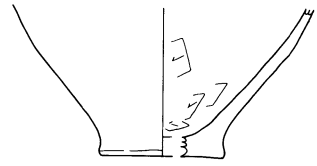
番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	底径 6.4 現存高 7.8	器面は摩滅している。胴部・底部外面：ナデか、内面：ヘラナデ。黄褐色。	A+B+I(多)+J 底30 焼成：普



第12号方形周溝墓土層註記
 1 黒褐色土 ローム粒・焼土粒微量。
 2 暗褐色土 ローム粒子少。



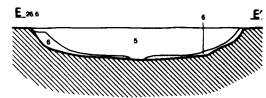
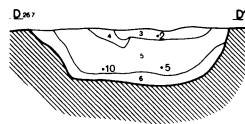
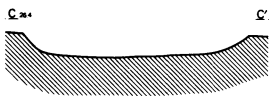
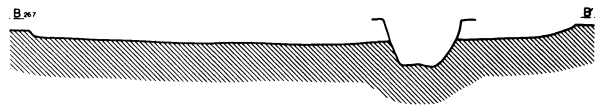
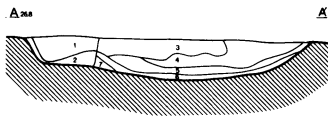
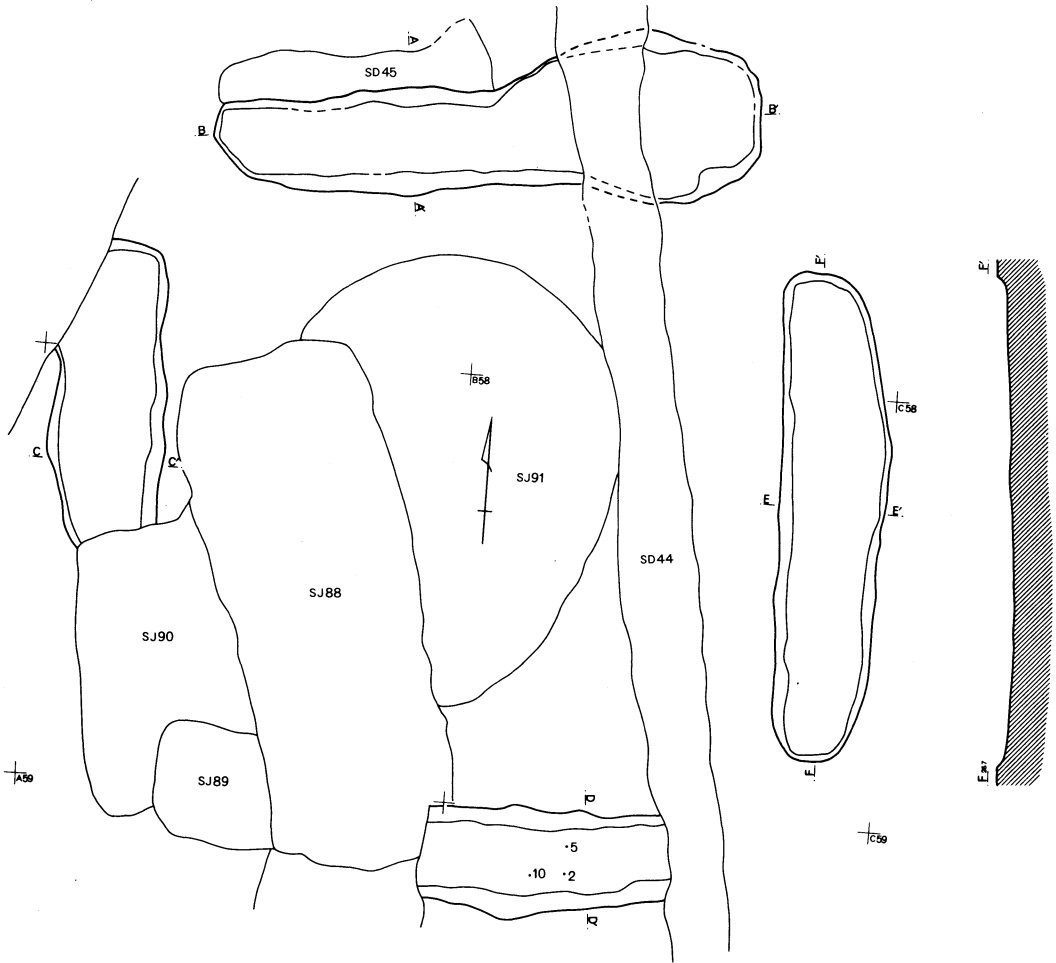
第193図 第12号方形周溝墓



第194図 第12号方形周溝墓出土遺物

第13号方形周溝墓 (第195図)

第13号方形周溝墓は、A56eグリッドに位置する。第44号溝跡・第88号・第90号住居跡等に切られるが、比較的遺存度は高いといえる。方台部の盛り土は、既に失われている。四隅を陸橋状に掘り残す形態であると推定される。外周を含めた規模は、南北1740cm・東西1760cm。各溝の規模は、東溝：長さ1024cm・幅144cm・深さ24cm、南溝：幅240cm・深さ56cm、西溝：幅240cm・深さ24cm、北溝：幅208cm・深さ40cmを測る。主軸方向はN-6°-Wを指し、第12号方形周溝墓(N-15°-E)がやや方位的に近いほかは、周囲のものとは離れた数値を示す。方台部の形状・溝の形状共に比較的直線的であり、整った方形周溝墓である。各々の溝は、端部がやや四角張り、長さ・幅なども比較的同規模なものである。溝底面は、比較的平坦である。他の方形周溝墓と比較して、平面規模の割には、四隅が大きく、溝も幅広な形態を示す。出土した遺物はそれ程多くはなく、図化し得た点数も同様である。溝底から浮いた状態が主であった他は、特徴らしきものは得られなかった。



第13号方形周溝墓土層註記

A-A' D-D' E-E' 共通

- 1 暗褐色土 ローム粒少、カーボン微量。しまり・粘性やや弱。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ2cm)少。しまり・粘性やや弱。
- 3 黒褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり・粘性弱。
- 4 黒褐色土 ローム粒微量。

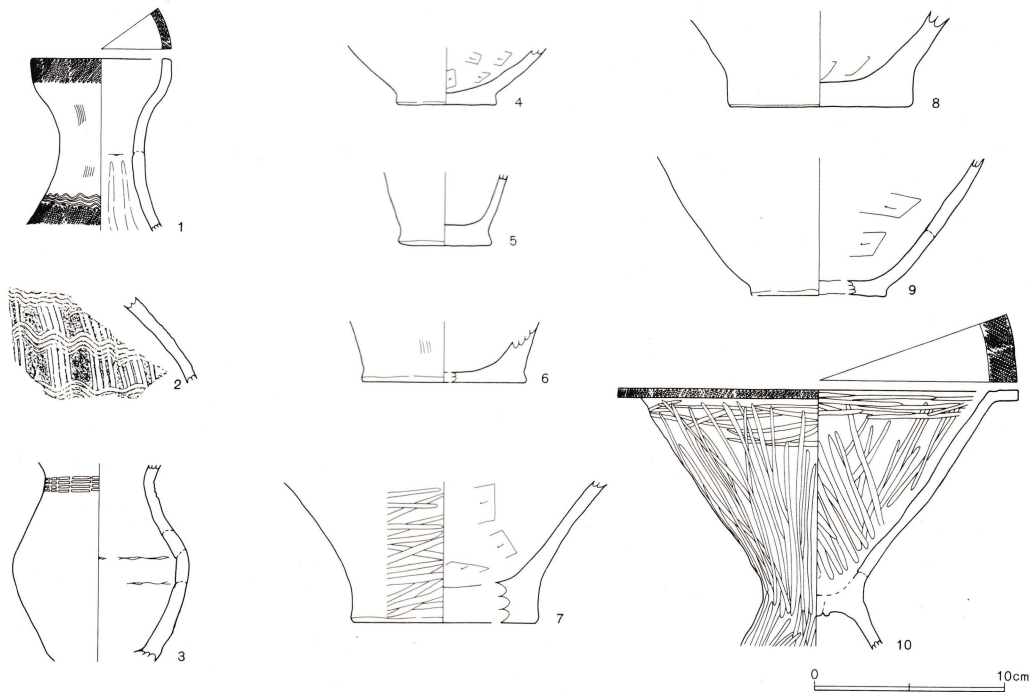
- 5 暗褐色土 ローム粒少。ロームブロック(φ2cm)・カーボン少。しまり・粘性やや弱。
- 6 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ2cm)少。しまり・粘性やや弱。
- 7 暗黄褐色土 ロームブロック(φ3cm)・ローム粒多。



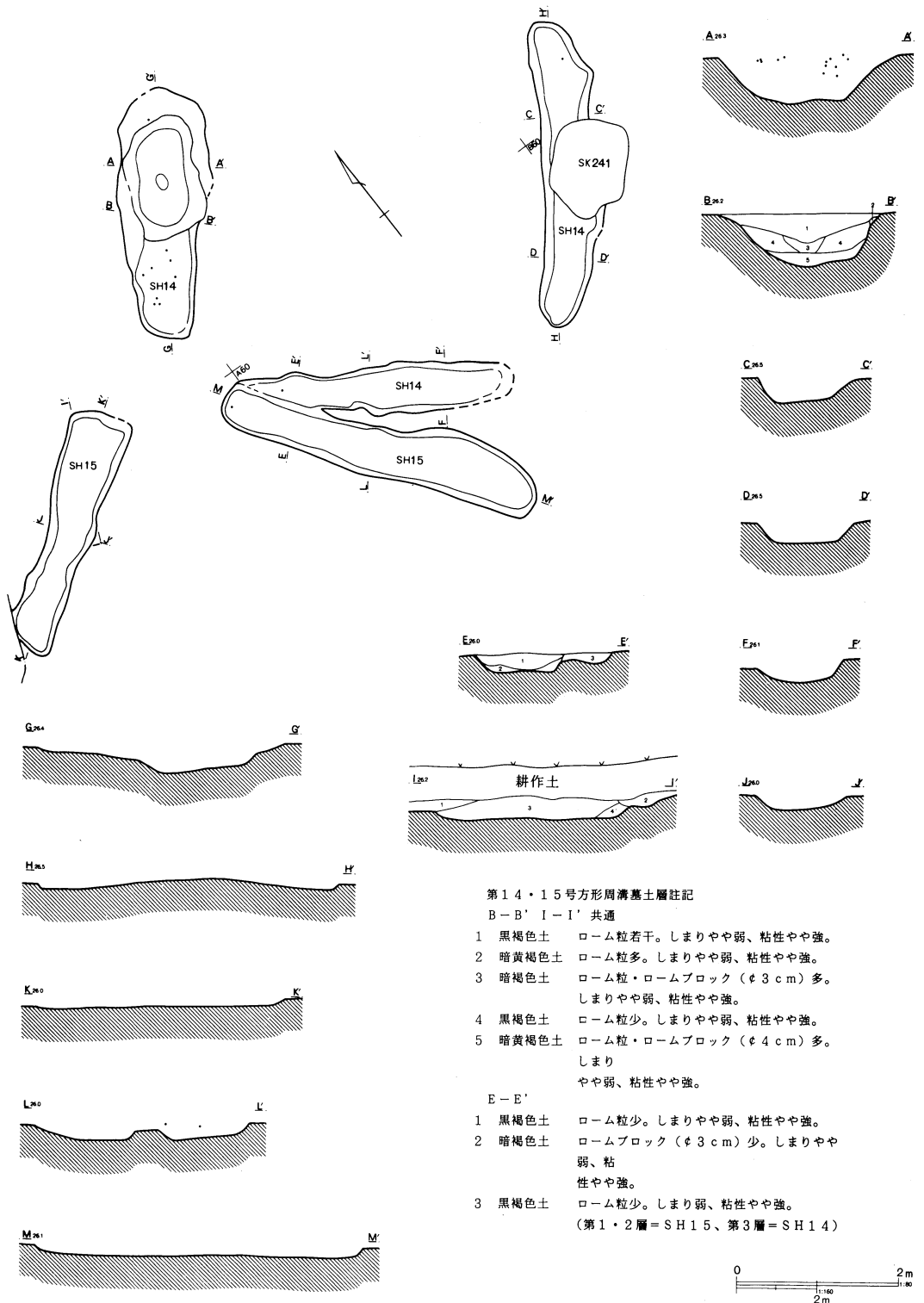
第195図 第13号方形周溝墓

第13号方形周溝墓出土遺物 (第196図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	口径 (6.9) 現存高 8.9	器面は摩滅している。口縁部：内外面とも横ナデの後、外面と口唇部にLR斜縄文。頸部外面：ハケ目の後ナデか、のち4本単位の櫛状工具による波状文を施し、その下位にLR斜縄文。頸部内面：指頭による押捺。櫛描き文は深さもより比較的鮮明。褐色（一部黒色）。	B+E+I+J 口25 頸80 焼成：普
2	壺	現存高 3.6	外面：丁寧なナデの後、4本単位の櫛状工具による右下がりの斜線文、その後波状文（3段残存）。櫛描き文は深さ・幅とも大きく鮮明。内面：丁寧なナデ。黄褐色。	A+B+I+J 焼成：良
3	壺	胴径 9.2 現存高 10.4	器面は荒れている。外面：丁寧なナデ。頸部に4本単位の櫛状工具により左回りの簾状文。文様は等間隔止めで、深さ・幅とも大きく比較的鮮明。赤褐色。	B+I(多)+J 胴90 焼成：やや良
4	壺	底径 5.2 現存高 3.0	胴部外面：ナデ。底部外面：ナデ。胴部～底部内面ヘラナデ。褐色。	A+B+I(多)+J 底100 焼成：普
5	壺	底径 4.8 現存高 3.8	胴部～底部：内外面ともナデ。黄褐色。	A+B+I+J 底100 焼成：普
6	壺	底径 (8.8) 現存高 4.2	胴部外面：ハケ目の後ナデ。底部外面：ナデ。胴部～底部内面：ナデ。灰黄褐色。	I(多)+J 底30 焼成：やや不良



第196図 第13号方形周溝墓出土遺物



第14・15号方形周溝墓土層註記

B-B' I-I' 共通

- | | | |
|---|-------|-----------------------------------|
| 1 | 黒褐色土 | ローム粒若干。しまりやや弱、粘性やや強。 |
| 2 | 暗黄褐色土 | ローム粒多。しまりやや弱、粘性やや強。 |
| 3 | 暗褐色土 | ローム粒・ロームブロック(φ3cm)多。しまりやや弱、粘性やや強。 |
| 4 | 黒褐色土 | ローム粒少。しまりやや弱、粘性やや強。 |
| 5 | 暗黄褐色土 | ローム粒・ロームブロック(φ4cm)多。しまりやや弱、粘性やや強。 |

E-E'

- | | | |
|---|------|------------------------------|
| 1 | 黒褐色土 | ローム粒少。しまりやや弱、粘性やや強。 |
| 2 | 暗褐色土 | ロームブロック(φ3cm)少。しまりやや弱、粘性やや強。 |
| 3 | 黒褐色土 | ローム粒少。しまり弱、粘性やや強。 |
- (第1・2層=SH15、第3層=SH14)

第197図 第14・15号方形周溝墓

7	壺	底径 (9.6) 現存高 5.0	胴部外面：粗いヘラ磨き。底部外面：ナデ。胴部～底部内面：ヘラナデ。明黄褐色。	A+B+H+ (多)+J 底40 焼成：普
8	壺	底径 (9.6) 現存高 5.0	胴部：内外面ともナデ。底部：外面ナデ、内面ヘラナデ。茶褐色。	B+F+I+ (多)+J 底45 焼成：普
9	壺	底径 (7.1) 現存高 7.1	胴部外面：ヘラ削りの後丁寧なナデか、内面：ヘラナデ。底部：内外面ともナデ。黄褐色。	A+B+E+J 底50 焼成：良
10	高坏	口径 (20.8) 現存高 13.5	口唇・口縁外面にLR斜縄文。坏部：内外面ともヘラ磨き。脚台面：外面ヘラ磨き、内面ナデ。橙色。	A+B+H+J 口径10 坏95 焼成：良

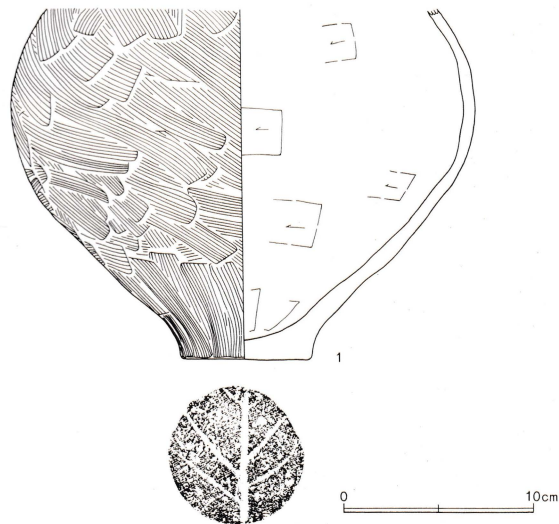
第14号方形周溝墓 (第197図)

第14号方形周溝墓は、A59 d グリッドに位置する。第15号方形周溝墓と重複するが、切られている。この他にも、第93号住居跡・溝跡・土壌等にも切られている。方台部の盛り土は、既に失われている。隅部を陸橋状に掘り残す形態である。外周を含めた規模は、東西1152cm。各溝の規模は、東溝：長さ720cm・幅144cm・深さ24cm、南溝：推定長さ672cm・幅112cm・深さ24cm、西溝：推定長さ528cm・幅192cm・深さ32cm、主軸方向はN-30° -Wを指す。溝底は、方台部側が急に立ち上がり、外周側は緩やかである。土器片が小数出土したが、図化し得たものはなかった。

第15号方形周溝墓 (第197図)

第15号方形周溝墓は、A' 60 b グリッドに位置する。第14号方形周溝墓を切る。攪乱部・調査範囲外に位置するため、2溝のみが検出された。方台部の盛り土は、既に失われている。隅部を陸橋状に掘り残す形態と推定される。各溝の規模は、北東溝：長さ800cm・幅144cm・深さ24cm、北西溝：長さ608cm・幅128cm・深さ18cm。主軸方向はN-52° -Wを指す。溝底は比較的平坦である。

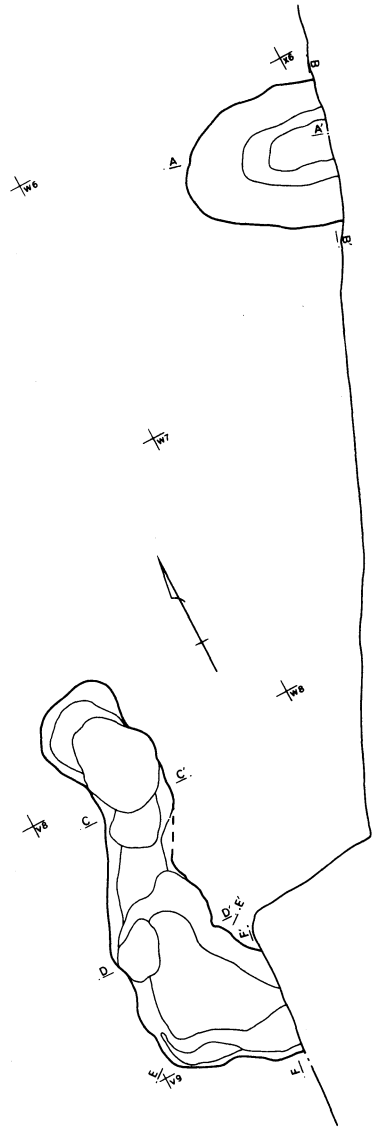
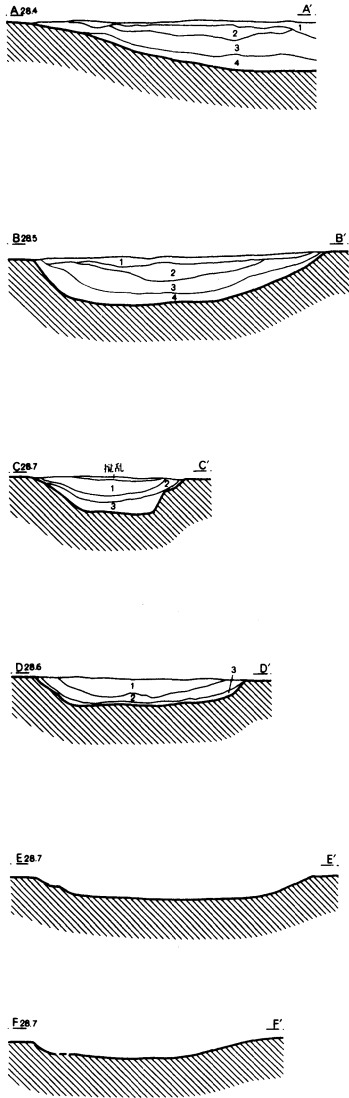
遺物はごく小数検出されたのみあり、図化し得たのは、壺胴部の1点のみである。



第198図 第15号方形周溝墓出土遺物

第15号方形周溝墓出土遺物 (第198図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	胴径 24.3 底径 3.3 現存高 18.3	胴部：外面ハケ目、内面ヘラナデの後ナデ。底部：外面に木葉痕、内面ヘラナデ。にぶい黄橙色。	A+B+D+H(多) 胴75 底100 焼成：普



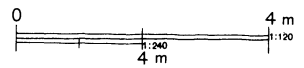
第1号古墳跡土層註記

A-A' B-B' C-C' 共通

- 1 耕作土
- 2 黒褐色土 ローム粒少、カーボン微量。しまり・粘性やや弱。
- 3 暗褐色土 ローム粒少、カーボン微量。しまり・粘性やや弱。
- 4 暗黄褐色土 ローム粒若干、カーボン微量、ロームブロック (φ 2 cm) 少。
しまり・粘性やや弱。

D-D'

- 1 黒褐色土 カーボン・ローム粒微量。しまりやや弱、粘性やや強。
- 2 黒褐色土 ローム粒少、カーボン微量。しまりやや弱、粘性やや強。
- 3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック (φ 2 cm) 若干、カーボン微量。しまり
やや弱、粘性やや強。



第199図 第1号古墳跡

(3) 古墳跡

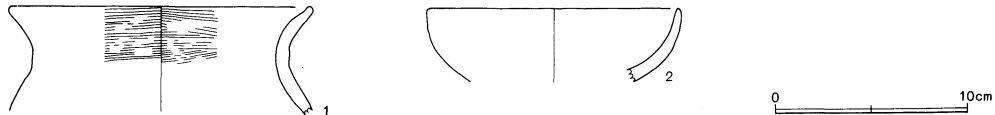
第1号古墳跡 (第199図)

第1号古墳跡は、W6 bグリッドに位置する。周溝内側（墳丘部分）で、第1号・第2号・第4～7号住居跡・第2号・第3号溝跡を切り、周溝部分で第10号・第11号住居跡を切る。周溝の途切れている部分（陸橋状部分または周溝が浅くなり痕跡が残っていない部分）では、第1号溝跡・中近世土壌3によって切られている。北東と南西で、ごく僅かに周溝が検出されたのみである。

北東溝では掘り込みも深くプランも明確であるが、南西溝については形態が掴みにくい。全体の形態・規模をとらえることはできないが、可能性として円墳を想定した。墳丘部分は既に失われており、主体部の規模・形態についても不明である。台地北側縁辺部に立地しており、今回検出された古墳跡のうち、最も北にそして最も東に位置している。周溝は、第2号・第4号古墳跡の周溝と交わることなく近接している。

各土層断面・エレベーション (第199図) での幅・深さは、A-A' : 深さ72cm、B-B' : 幅450cm・深さ72cm、C-C' : 幅216cm・深さ60cm、D-D' : 幅330cm・深さ48cm、E-E' : 幅436cm・深さ36cm、F-F' : 幅330cm・深さ30cmを測る。

遺物はごく小数であり、その殆どは第10号・第11号住居跡からの流れ込みと推定される土器片であり、実測も不可能な小片のみであった。これらの他に、埴輪片が拓本実測を含めて、3個体分検出された。



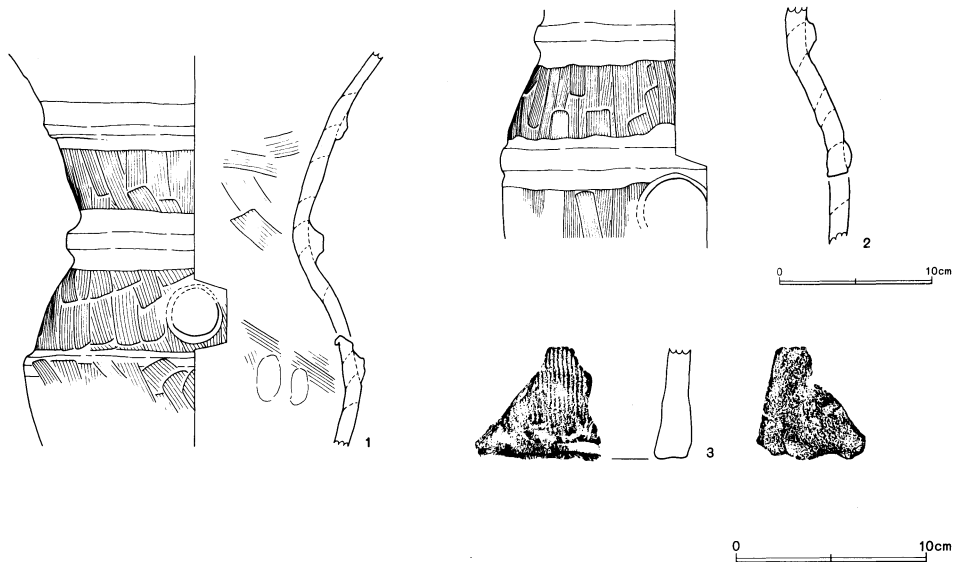
第200図 第1号古墳跡出土遺物

第1号古墳跡出土遺物 (第200図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	甕	口径 (15.7) 現存高 5.5	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面へラ削りか、内面ナデか。にぶい橙色。	B+C+E □20 焼成：普
2	坏	口径 (13.0) 現存高 3.7	口縁部：内外面とも横ナデか。橙色。	A+B+E □20 焼成：普

1号古墳跡出土円筒埴輪 (第201図)

1号墳から出土した埴輪は3点で、1・2が朝顔形埴輪、3は円筒埴輪基底部の破片である。1は朝顔形埴輪のなかでも特異な器形をしている。円筒部最上段および肩部が緩やかな丸味をもち頸部に至り、口縁部は直線的に外傾している。肩部の突帯下端部の突出度は僅小で、例外的に突帯部にまで調整が施されている。突帯の断面形態は肩部・頸部がCタイプ、口縁部はBタイプである。スカシ孔は円形で、肩部に穿たれている。朝顔形埴輪の肩部にスカシ孔が穿孔されている例は希である。関東地方では神奈川県伊勢原市小金塚古墳、茨城県新治郡玉里村舟塚古墳、東茨城郡内原町

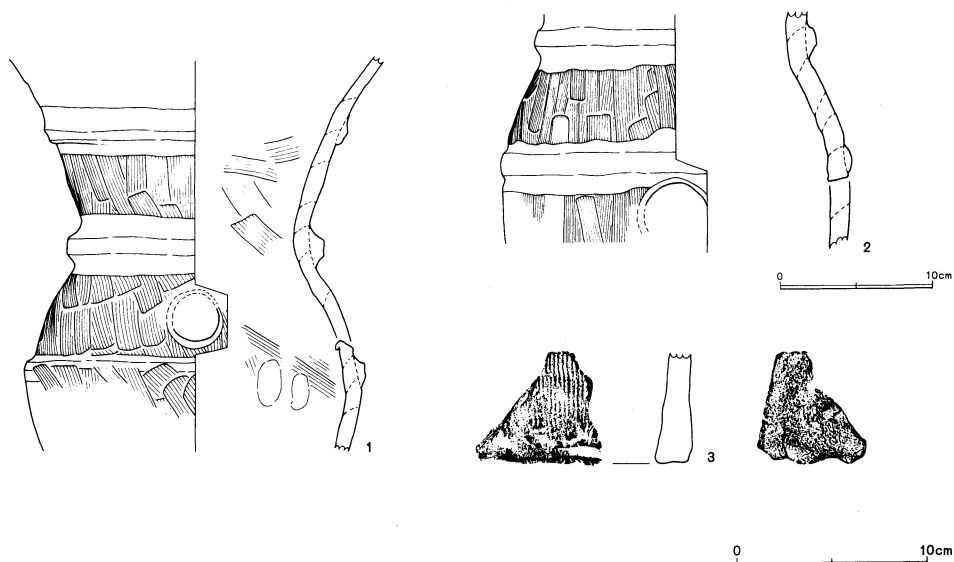


第201図 第1号古墳跡出土円筒埴輪

杉崎88号墳で認められている。これらの例は、いずれも整然とした器形の朝顔形埴輪であることから、本例は形象埴輪の可能性も考慮する必要があるだろう。2はズン胴な円筒部から肩部が内傾して頸部に至る、整然とした朝顔形埴輪の器形を呈している。突帯の断面形態は肩部・頸部ともBタイプである。スカシ孔は円形で、円筒部最上段に穿孔されている。調整は1～3のいずれも外面には一次調整のタテハケが施され、内面にはナデが行なわれているものの弱く、粘土紐積上痕が認められる。1にはハケがみられる。3は底部調整が行なわれていない。いずれも、色調は淡黄色で、胎土には白・黒・赤色粒子、砂粒が含まれ、焼成は良好である。

1号墳出土埴輪 (第201図)

No.	器高	器径	器厚	器質	突帯	スカシ孔	外面調整	内面調整	備考
1	現26.0 胴22.1	頸17.0 肩0.9	口1.1 肩0.9	色 淡黄	肩 C 1.1 2.3 / 1.0	(円形)	一次タテハケ ハケ 9本 / 2cm	ナデ・ハケ ハケ11本 / 2cm	朝顔形埴輪
				胎 白・赤・砂粒 黒多量	頸 C 1.4 3.3 / 1.1				粘土紐積上痕
				焼 良好	口 B 1.0 2.7 / 0.7				ヘラ記号
2	現15.7 胴23.0	頸18.6 肩1.3	肩1.3	色 淡黄	肩 C 1.4 1.9 / 0.5	(円形)	一次タテハケ ハケ14本 / 2cm		朝顔形埴輪
				胎 白・黒・赤 砂粒	頸 C 1.3 2.0 / 0.9				粘土紐積上痕
3			d 1.3	色 淡黄			一次タテハケ ハケ10本 / 2cm		底部調整なし
			e 2.1	胎 赤・黒・砂粒					
				焼 良好					

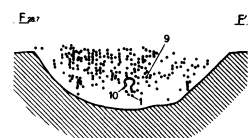
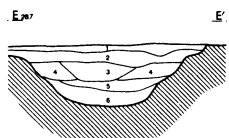
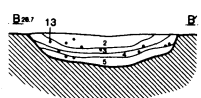
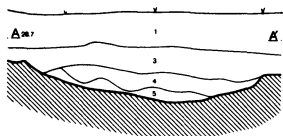
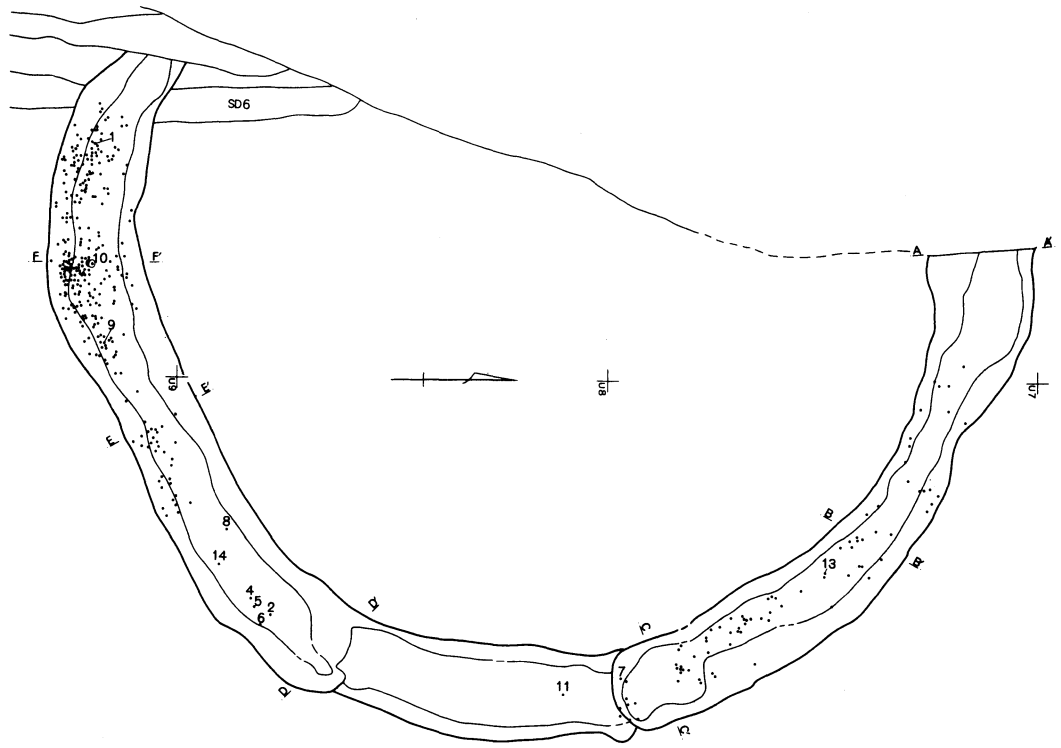


第201図 第1号古墳跡出土円筒埴輪

杉崎88号墳で認められている。これらの例は、いずれも整然とした器形の朝顔形埴輪であることから、本例は形象埴輪の可能性も考慮する必要がある。2はズン胴な円筒部から肩部が内傾して頸部に至る、整然とした朝顔形埴輪の器形を呈している。突帯の断面形態は肩部・頸部ともBタイプである。スカシ孔は円形で、円筒部最上段に穿孔されている。調整は1～3のいずれも外面には一次調整のタテハケが施され、内面にはナデが行なわれているものの弱く、粘土紐積上痕が認められる。1にはハケがみられる。3は底部調整が行なわれていない。いずれも、色調は淡黄色で、胎土には白・黒・赤色粒子、砂粒が含まれ、焼成は良好である。

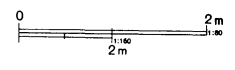
1号墳出土埴輪 (第201図)

No	器高	器径	器厚	器質	突帯	スカシ孔	外面調整	内面調整	備考
1	現26.0	頸17.0	口1.1	色 淡黄	肩 C 1.1 2.3 /1.0	(円形)	一次タテハケ	ナデ・ハケ	朝顔形埴輪
		胴22.1	肩 0.9	胎 白・赤・砂粒 黒多量	頸 C 1.4 3.3 /1.1 口 B 1.0 2.7 /0.7				
2	現15.7	頸18.6	肩 1.3	色 淡黄	肩 C 1.4 1.9 /0.5	(円形)	一次タテハケ	ハケ14本/2cm	朝顔形埴輪 粘土紐積上痕
		胴23.0		胎 白・黒・赤 砂粒	頸 C 1.3 2.0 /0.9				
3			d 1.3	色 淡黄			一次タテハケ	ハケ10本/2cm	底部調整なし
			e 2.1	胎 赤・黒・砂粒					
				焼 良好					



第2号古墳跡土層註記 A-A' B-B' E-E' 共通

- 1 耕作土
- 2 暗褐色土 焼土粒微量。しまり強、粘性弱。
- 3 暗褐色土 カーボン微量。しまりやや強、粘性やや弱。
- 4 暗褐色土 ローム粒少。しまりやや強、粘性やや弱。
- 5 暗黄褐色土 ロームブロック少。しまりやや強、粘性弱。
- 6 暗黄褐色土 ローム粒多。しまりやや強、粘性やや弱。



第202図 第2号古墳跡

第2号古墳跡（第202図）

第2号古墳跡は、T7cグリッドに位置する。東側で第8号・第9号住居跡を、南側で第13号住居跡を切る。西側では第4～6号溝跡と重複するが、切られていると推定される。西側部分は、調査範囲外に続く。全体の6割程の遺存である。本古墳跡の北約2.5mのところ、東西に走る第1号溝跡（第4図）は、本台地北側のほぼ層線にあたる。そして本古墳跡は、台地北端の肩部分に立地している形となっている。第1号・第3号・第4号古墳跡とは周溝を交えることなく、きわめて近い位置関係に存在する。

調査範囲内では、陸橋状部分は検出されなかった。南西端の、第5号溝跡に切られるあたりが浅くなっていることから、あるいは陸橋状を呈す可能性を考えたが、確定するまでに至らなかった。

墳丘部分は既に失われており、周溝のみが検出された。そのため、主体部の規模・形態については不明である。

周溝を含めた南北方向の直径は、2060cmを測り、比較的整った円形を呈する。各土層断面・エレベーション（第202図）での幅・深さは、A-A'：幅224cm・深さ56cm、B-B'：幅160cm・深さ32cm・C-C'：幅208cm・深さ72cm、E-E'：幅208cm・深さ64cmを測る。東側部分では、540cm程に亘って、若干テラス状を呈して浅めに掘り込まれている。

調査時において、第2号古墳跡の周溝より内側＝墳丘下では、中近世以降と推定されるピット等の遺構は、それ程多くはないように思われた。このことは、比較的最近に至るまで、墳丘の名残りが“地膨れ”状に残っていたことを示しているのであろうか。周溝からは、図化したものを始め、破片を含めて五領式土器が多数出土している。この点から、本古墳跡周辺における、既期の住居跡等の存在が想定される。埴輪は検出されていない。

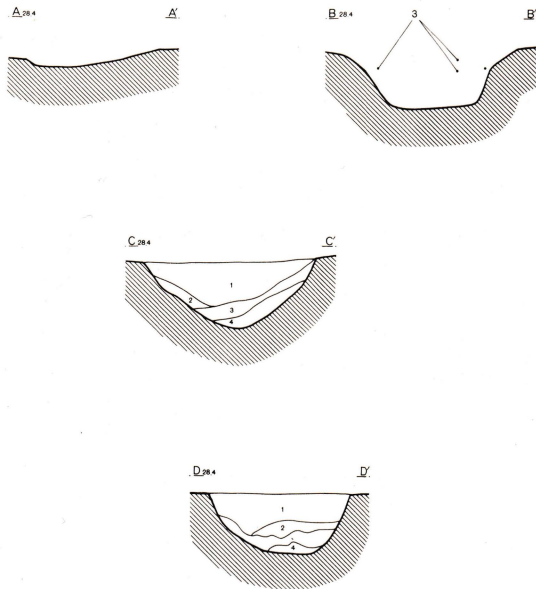
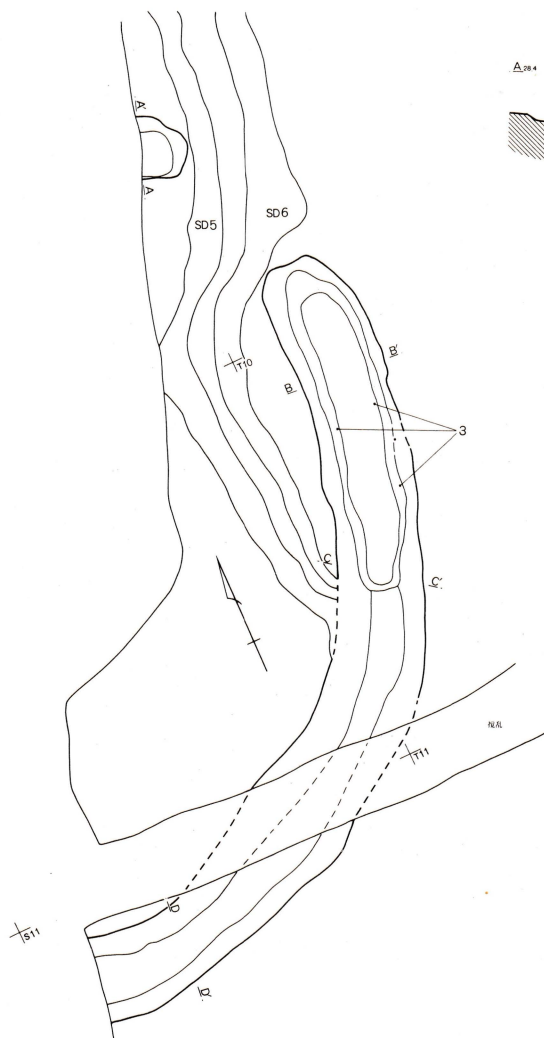
第2号古墳跡出土遺物（第202・203図）

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	口径 (15.5) 現存高 3.2	複合口縁外面に刻み目。器面は磨滅している。内外面ともハケ目の後横ナデか。赤橙色。	A+B+G+J 口15 焼成：普
2	高 杯	口径 (16.4) 現存高 3.2	口縁部：内外面とも横ナデ。赤褐色。	B+J(細密) 杯20 焼成：やや良
3	高 杯	口径 (17.5) 現存高 6.2	器面は磨滅している。口縁部：内外面とも横ナデ。体部：内外面ともナデか。橙色（一部黒色）。	A+B+C+D+G 杯60 焼成：普
4	高 杯	現存高 7.2	脚部：内外面ともナデ。橙色。	A+B+E+J 脚80 焼成：普
5	高 杯	現存高 5.3	脚部：外面へラ磨き、内面ナデ。赤褐色。	B+D+J 脚90 焼成：やや良
6	器 台	脚台径 7.0 現存高 3.0	脚台部：内外面ともナデ。褐色。杯底部の孔径1.0 cm	A+B+E+J 脚40 焼成：普



第203图 第2号古墳跡出土遺物

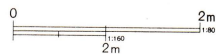
7	高 杯	現存高 5.1	脚台部：外面ヘラ磨き、内面ナデ。脚台部の穿孔は外面からで3箇所。赤褐色。	B+G+J(細密) 脚25 焼成：普
8	手捏ね	口 径 (5.6) 底 径 (2.9) 器 高 3.9	全面ナデ。橙色 (底部黒色)。	A+B+C+G 口20 体40 焼成：普
9	碗	口 径 (11.0) 底 径 5.8 器 高 5.6	体部：外面粗いハケ目の後ナデ、内面ナデ。底部：内外面とも	A+B+C+I 体30 底70 焼成：普
10	小型壺	口 径 13.4 胴 径 15.0 底 径 4.6 器 高 17.0	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：丁寧なナデ、内面ナデ。底部：内外面ともナデ。口縁は内彎気味に開く。赤褐色。	A+B+C+D+F 口95 体85：底100 焼成：普
11	甕	口 径 (16.0) 胴 径 (27.2) 現存高 22.8	口縁部：内外面ともハケ目の後横ナデ。胴部：外面ハケ目、内面ナデ、黒褐色	B+F+H 口 5 胴40 焼成：普
12	甕	口 径 (5.7) 現存高 5.8	口縁部：内外面ともハケ目の後横ナデ。胴部：外面ハケ目、後ナデ、内面ナデ。明褐色。	A+B+G+J 口25 焼成：やや良
13	壺	底 径 4.6 現存高 6.5	外面にスス附着。胴部：外面ハケ目、内面ヘラナデ。底部：外面ナデ、内面ヘラナデ。暗赤褐色。	A+B+G 胴下半65 底100 焼成：普
14	壺	底 径 6.0 現存高 4.4	器面は荒れている。胴下半～底部：内外面ともナデか。橙色 (一部黒色)。	A+B+H+J 底100 焼成：普
15	壺	底 径 (10.5) 現存高 5.7	器面は荒れている。胴下半～底部：内外面ともナデ。明橙色。	A+B+H 胴下位45 底30 焼成：普



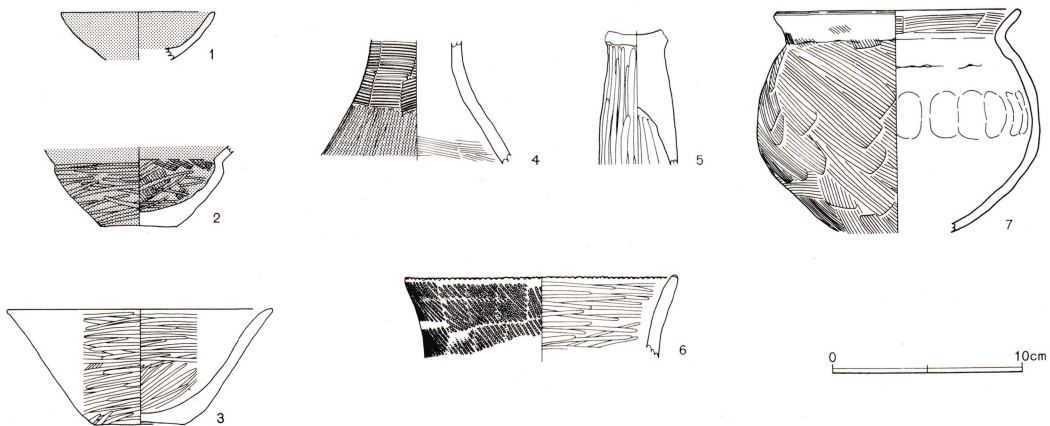
第3号古墳跡土層註記

C-C' D-D' 共通

- 1 黒褐色土 ローム粒若干、カーボン微量。しまり・粘性やや強。
- 2 黒褐色土 ローム粒少、カーボン微量。しまり・粘性やや強。
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒若干。しまり・粘性やや弱。
- 4 暗黄褐色土 ロームブロック多、ローム粒若干。しまり・粘性やや強。



第204図 第3号古墳跡



第205図 第3号古墳跡出土遺物

第3号古墳跡 (第204図)

第3号古墳跡は、T9gグリッドに位置する。東側から南側にかけて第5号・第6号・第7号・第8号溝跡に切られ、西側から北側部分は調査範囲外に続く。南側の一部で攪乱を受けている。全体の4分の1程度の遺存である。

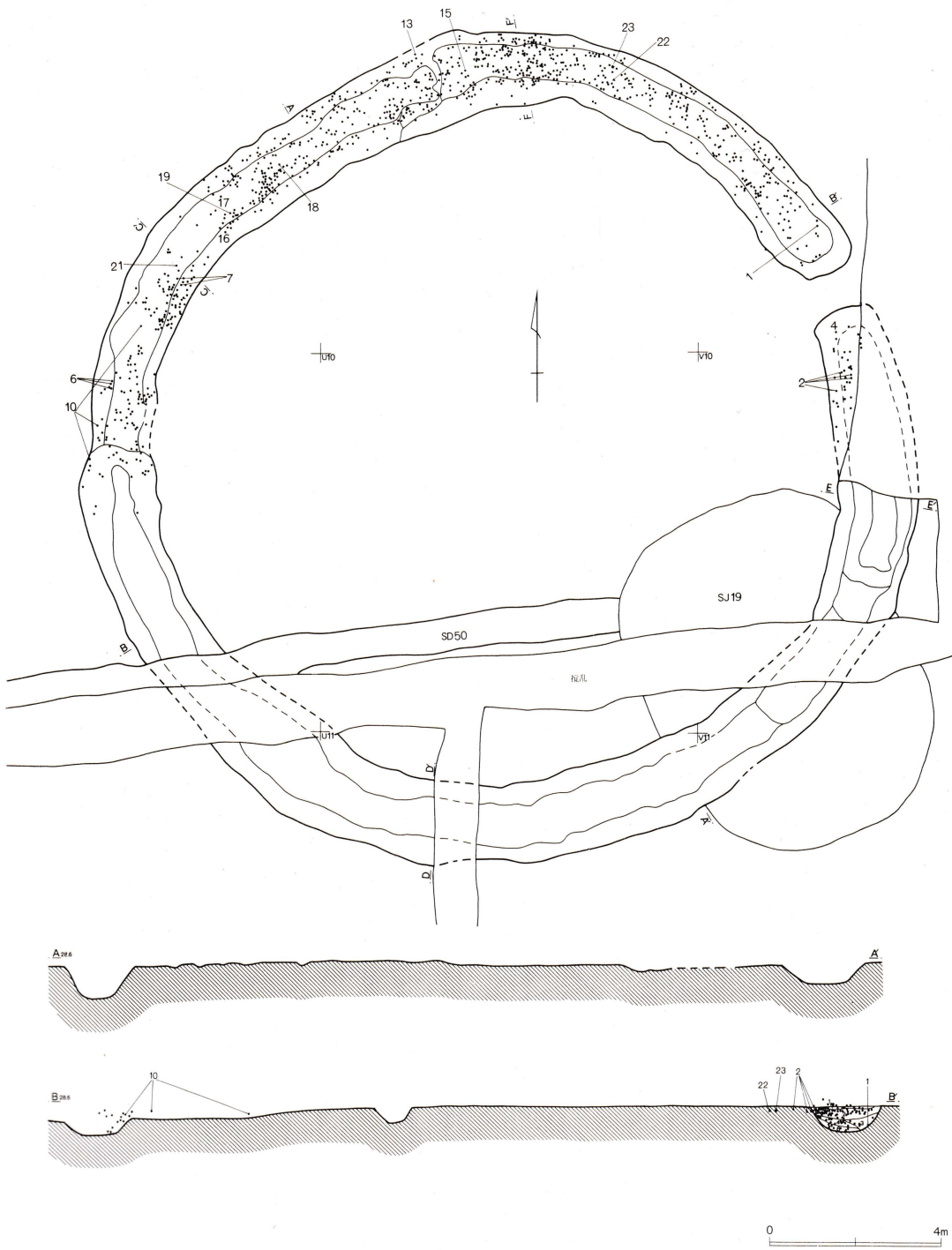
本古墳跡は、第2号・第4号古墳跡とは、周溝を交えることなく、きわめて近い位置関係に存在する。

中心からN-72°-Eの方向に、陸橋状部分が検出された。ちょうど第5号・第6号溝跡に切られてはいるが、周溝がこの箇所では掘り残されているのは明瞭であった。周溝を含めた南北方向の直径は2100cmを測り、これは第2号古墳跡(2060cm)・第4号古墳跡(1950cm・N-62°-E)にきわめて近く、第5号古墳跡(推定1650cm)よりは若干大きいといえる。墳丘部分は既に失われており、周溝のみが検出された。そのため、主体部の規模・形態については不明である。

各土層断面・エレベーション(第204図)での幅・深さは、A-A' : 幅128cm・深さ16cm、B-B' : 幅192cm・深さ56cm、C-C' : 幅176cm・深さ72cm、D-D' : 幅168cm・深さ64cmを測る。陸橋状部分の南側(B-B'からC-C'の付近)では、溝底を平坦ないし船底形に、他の箇所以上に掘り下げを行っている。周溝内からは、吉ヶ谷式と五領式の土器が、若干ではあるが出土をしている。本古墳跡周辺における、既期の遺構の存在が推定される。埴輪は検出されなかった。

第3号古墳跡出土遺物 (第204・205図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	器台	口径(8.0) 現存高 2.5	坏部:内外面ともナデか。赤褐色。 目の後横ナデか。赤橙色。	B+E+J(細密) 坏20 焼成:普
2	埴	底径(4.0) 現存高 4.2	体部外面:ヘラ磨き、内面ハケ目の後粗いヘラ磨き。 平底を呈す。赤褐色。	B+C+H+J 体35 底100 焼成:良
3	碗	口径(13.8) 器高 6.0	体部:内外面ヘラ磨き。底部:ヘラ削り、内面ヘラ磨き。 黄橙色。	D+E+J(細密) 体15 底50 焼成:普
4	壺	現存高 6.2	頸部外面:11本単位の櫛状工具による右回転縲文を2段、内面ナデ。胴部外面:ヘラ磨き、内面ハケ目。褐色。	A+H+I 頸45 焼成:普
5	高杯	現存高 7.0	柱状部:外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。赤褐色。	A+B+H+J 柱70 焼成:やや良
6	甕	口径(15.4) 現存高 4.3	口唇部に木口状工具による刻み目。外面:RL縄文を横位に施文。内面:ヘラ磨き。黒褐色。	B+E+G+J 口25 焼成:やや良
7	甕	口径 11.5 胴径 14.8 現存高 11.5	口縁部:内外面ともハケ目の後横ナデ。胴部:外面ハケ目、内面:中央部は指頭による押捺、他はナデ。におい黄橙色。	A+B+C+E+G・(細密) 脚25 胴65 焼成:普



第206图 第4号古墳跡(1)

第4号古墳跡 (第206・207図)

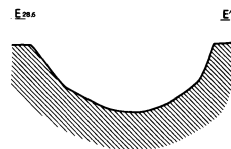
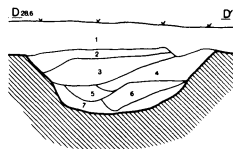
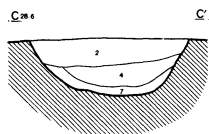
第4号古墳跡は、U10 bグリッドに位置する。北側から東側で第15号・第16号・第17号・第18号・第19号住居跡を、南側では第29号住居跡を、西側では第13号・第14号住居跡を切る。第3号・第4号溝跡と重複するが、切っていると推定される。第8号には、東西に切られている。東側の陸橋状部分の付近は調査範囲外に続いている。これらの他に水道管による攪乱を受けているが、周溝の形態・規模等については、ほぼ全体を知ることができる。本古墳跡は、第1号・第2号・第3号古墳跡とは、周溝を交えることなく、きわめて近い位置関係に存在する。

中心からN-62°-Eの方向に、陸橋状部分が検出された。周溝を含めた南北方向の直径は、1950cmを測り、これは第2号古墳跡(2060cm)・第3号古墳跡(推定2100cm・N-72°-E)に比較的近く、第5号古墳跡(推定1650cm)より若干大きいといえる。墳丘部分は既に失われており、周溝のみが検出された。そのため、主体部の規模・形態については不明である。

各土層断面・エレベーション(第206図)での幅・深さは、A-A'北側:幅176cm・深さ80cm・南側:幅208cm・深さ48cm、B-B'西側:幅160cm・深さ34cm・東側:幅176cm・深さ61cm、C-C':幅176cm・深さ58cm、D-D':幅216cm・深さ64cm、E-E':幅200cm・深さ72cm、F-F':幅184cm・深さ64cmを測る。南東部分(E-E'付近)・西側部分(C-C'南側)・北西部部分(F-F'西)では、他の箇所より深く船底形に掘り下げている。遺物出土は、北側半分からが主である。この周囲には多数の住居跡が分布しており、それらからの混入遺物が大部分であった。

第4号古墳跡出土遺物 (第206~208図)

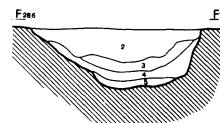
番号	器種	法量 cm	形態および手法的特徴	胎土・残存率%等
1	壺	口径(24.8) 現存高 6.3	口縁部:内外面とも横ナデ。明赤褐色。	A+B+D+H+J □20 焼成:やや良
2	坏	口径(10.6) 器高 5.4	口縁部:内外面とも横ナデ。体部:内外面とも丁寧なナデ。	A+B+C+G □15 焼成:良



第4号古墳跡土層註記

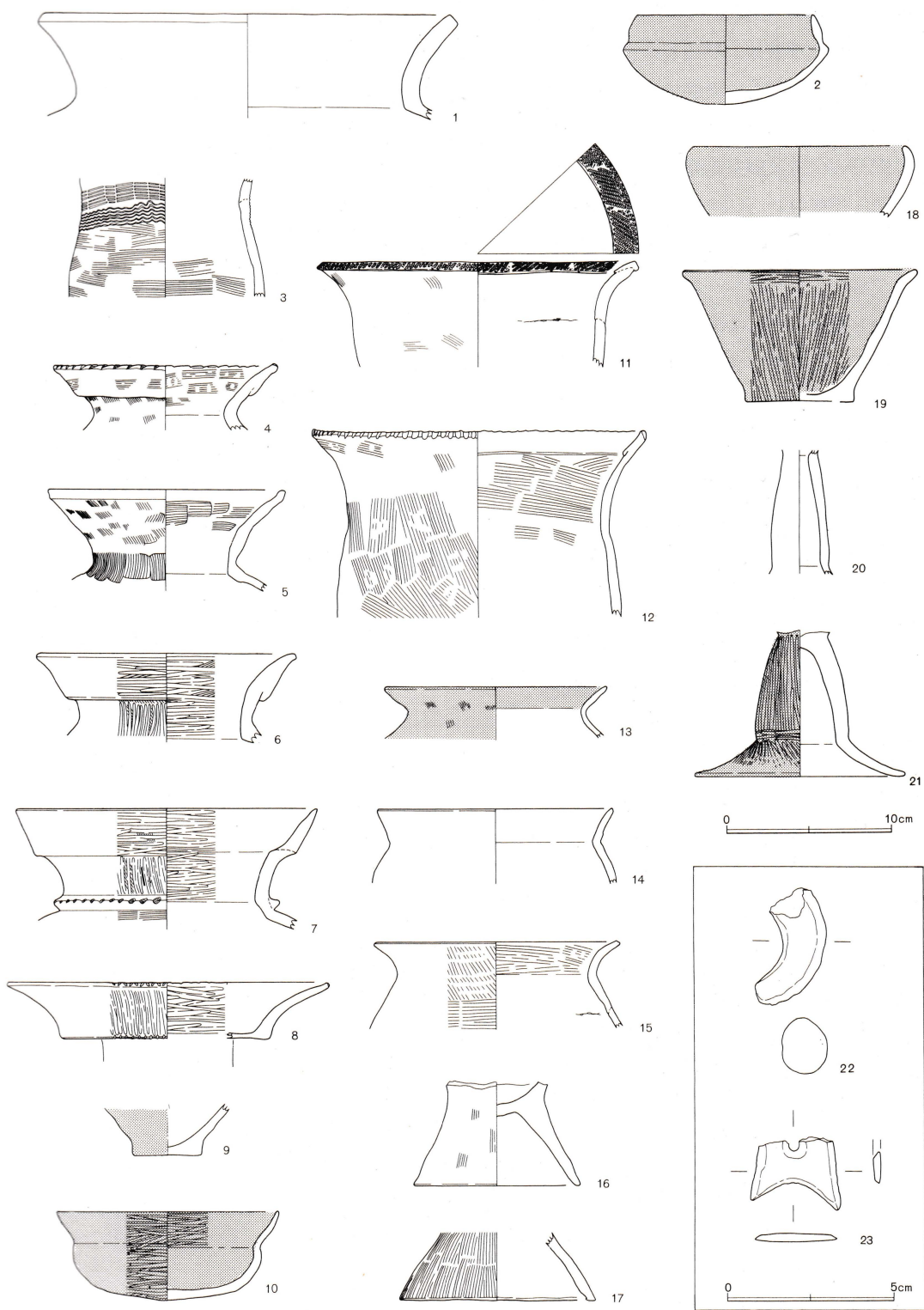
B-B' C-C' D-D' F-F' 共通

- 1 耕作土
- 2 黒褐色土 カーボン微量。しまり・粘性やや強。
- 3 黒褐色土 ローム粒若干。しまり・粘性やや強。
- 4 暗褐色土 ロームブロック少、カーボン微量。
しまり・粘性やや強。
- 5 暗褐色土 ローム粒多、カーボン少。しまりやや弱、粘性強。
- 6 黒褐色土 焼土粒・カーボン少。しまり弱、粘性強。
- 7 暗黄褐色土 ローム粒多。しまり弱、粘性強。



0 2m

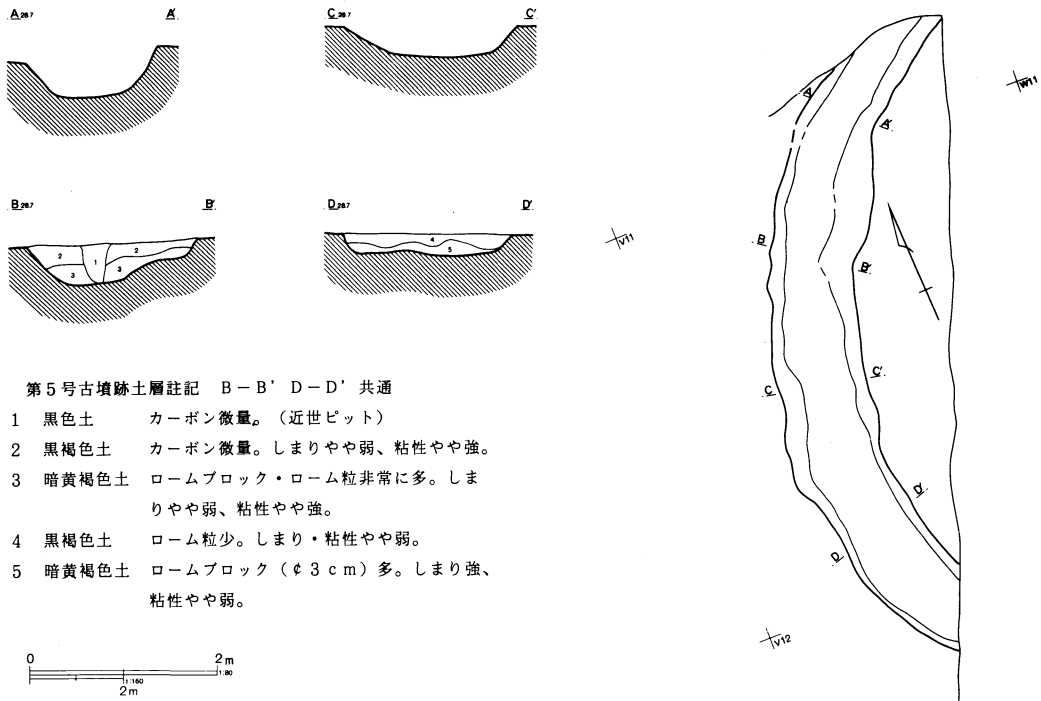
第207図 第4号古墳跡(2)



第208図 第4号古墳跡出土遺物

3	壺	現存高 7.2	頸部に6本単位の櫛状工具による右回転の比較的当間隔の簾状文、その下位に波状文を施す。線は鮮明であるが波高は弱い。器面は摩滅している。内外面ともハケ目の後、粗いナデか。赤褐色。	B+D+J 頸部〜肩100 焼成：普
4	壺	口 径 (13.4) 現存高 3.9	口縁部：内外面ともハケ目の後、横ナデ。黄褐色。	B+I+J 口20 焼成：普
5	壺	口 径 14.1 現存高 6	口縁〜頸部：外面はハケ目の後、横ナデ、口縁内面はハケ目の後、横ナデ。頸部内面はナデ。橙色。	A+B+C+D+H 口70 焼成：良
6	壺	口 径 15.5 現存高 5.4	内外面ともハケ目の後、ヘラ磨き。茶褐色（一部黒色）。	A+B+H+J 口25 焼成：やや良
7	壺	口 径 (18.4) 現存高 7.3	口縁部：外面はハケ目の後、ヘラ磨き、内面はヘラ磨き。黄橙色。	B+E+G+J(細密) 焼成：普
8	壺	口 径 (19.6) 現存高 3.4	口唇部：「ハ」字状に刻み目。器面は磨滅している。 口縁部：内外面とヘラ磨きか。明赤褐色。	B+C+I+J 口15 焼成：普
9	小型壺	底 径 4.2 現存高 3.1	内外面ともナデか。赤褐色。	A+B+D+J(細密) 底100 焼成：普
10	埴	口 径 (13.1) 器 高 5.4	口縁部：内外面とも横ナデの後、ヘラ磨き。体部：外面はヘラ磨き、内面は丁寧なナデ。暗赤褐色。	A+B+C+D+G 口25 体25 焼成：良
11	甕	口 径 (19.0) 現存高 6.5	L R縄文を口唇端部に施文の後、内面折り返し部分へ施文。口縁部：外面はハケ目の後、横ナデ。胴部：外面はハケ目の後ナデ、内面はナデ、黒褐色。	B+D+J 口40 焼成：普
12	甕	口 径 (20.2) 現存高 11.3	口縁部：内外面ともハケ目の後、粗い横ナデ。胴部はナデ。灰黄褐色（一部黒色）。	B+E+H+J 口35 焼成：普
13	壺	口 径 (13.6) 現存高 3.0	口縁部：外面はハケ目の後横ナデ、内面は横ナデ。暗赤褐色。	B+G+J 口20 焼成：やや良
14	壺	口 径 (14.3)	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：内外面ともナデ。	B+G+J 口15
15	甕	口 径 (14.8) 現存高 5.3	口縁部：ハケ目の後、粗いナデ。胴部：外面はハケ目、内面はナデ。褐色。	A+B+G+J 口35 焼成：やや良
16	台付甕	脚台径 10.1 現存高 6.3 器 高 4.9	外面はハケ目の後、粗いナデ、内部はナデ。黄褐色。	A+B+E+I+J 脚65 焼成：普
17	台付甕	脚台径 11.8 現存高 4.2	外面はハケ目、内面はナデ。黄褐色。	A+E+J 脚25 焼成：普

18	鉢	口径 (13.9) 器高 8.0	内外面ともヘラ磨き。赤色。 ナデ。褐色。	B+C+J(細密) 焼成：やや良
19	高杯	口径 (12.8) 現存高 4.4	器面は磨滅している。口縁部：内外面とも横ナデか。体部：内外面ともナデか。橙色。	A+B+D+E+J 坏20 焼成：普
20	高杯	現存高 7.6	外面は丁寧なナデ、内面はナデ。褐色。	B+E+J(細密) 柱100 焼成：良
21	高杯	脚台径 12.7 現存高 8.9	柱状部：外面はヘラ磨き、内面はナデ。裾部：外面はヘラ磨き内面はナデの後、端部を内外面とも横ナデ。赤褐色。	B+D+E+G 脚90 焼成：やや良
22	磨製石鏃	現存長 2.2 幅 2.8 厚さ 0.2	上半部欠損。周囲に面取痕、表裏面に条線を残す。孔径0.3の片側からの穿孔1箇所残存。青灰白色。重量1.8g。	緑泥片岩製
23	土製勾玉	現存長 3.5 幅 1.6 厚さ 1.1	頭部を欠損。頭部はやや膨らみ、尾部はややすぼまる。形状は「く」字状を呈すると思われ、断面は楕円形。重量10.8g	A+B+E+J 体80 焼成：普



第209図 第5号古墳跡

第5号古墳跡 (第209図)

第5号古墳跡は、V10 i グリッドに位置する。第19号・第20号・第22号・第23号住居跡を切る。北側部分では、水道管による攪乱を受けている。4分の1周程の検出である。

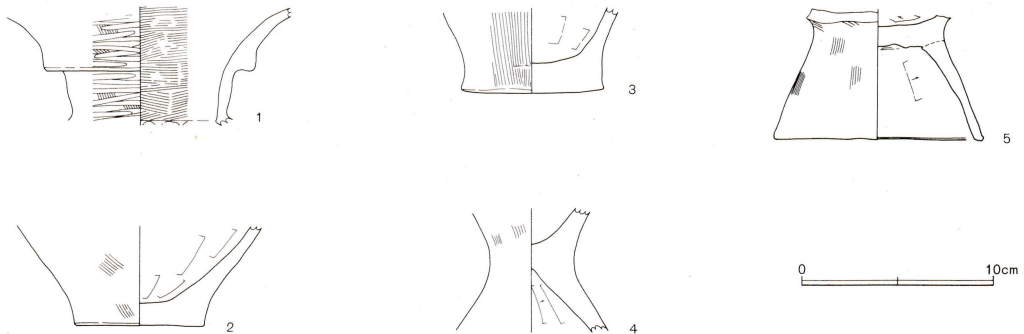
本古墳跡は、第4号古墳跡とは、周溝を交えることなく、きわめて近い位置関係に存在している。陸橋状部分は検出されていない。周溝を含めた推定直径は1650cmを測り、第2号古墳跡(2060cm)・第3号古墳跡(推定2100cm)・第4号古墳跡(1950cm)若干小さい古墳跡である。墳丘部分は既に失われており、周溝のみの検出である。そのため、主体部の規模・形態については不明である。

各土層断面・エレベーション(第209図)での幅・深さは、A-A' : 幅152cm・深さ48cm、B-B' : 幅180cm・深さ46cm、C-C' : 幅176cm・深さ28cm、D-D' : 幅176cm・深さ24cmを測る。南部分では、3軒の住居跡を切って周溝が掘られているため、周溝底面近くが僅かに遺存していたのみである。周溝底面は、比較的平坦であった。

遺物は、周辺遺構からの混入と推定される。

第5号古墳跡出土遺物 (第209・210図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	現存高	6.2	口縁部：外面はハケ目の後ヘラ磨き、内面はハケ目。頸部：外面はハケ目の後ヘラ磨き、内面はハケ目。褐色。	A+B+I+J 焼成：普
2	壺	底径 現存高	6.8 5.2	器面は磨滅している。胴部：外面はハケ目の後ナデか、内面はヘラナデ。底部：外面は木葉痕残す、内面はヘラナデか。橙色	A+B+D+F+I+J 胴25 底100 焼成：良
3	壺	底径 現存高	7.4 4.4	内面は剝離著しい。胴部：外面はハケ目、内面はヘラナデか。底部：外面はナデ、内面はナデか。暗赤褐色。	A+B+F+J 底95 焼成：普
4	台付甕	現存高	6.2	器面は磨滅著しい。胴部：外面はハケ目か、内面はナデか。脚台部：外面はハケ目か、内面はヘラナデか。淡負黄色。	A+D+E(多)+J 焼成：普
5	台付甕	脚台高 現存高	(10.7) 6.3	底部：内外面ともヘラナデ。脚台部：外面はハケ目の後ナデ、内面はヘラナデの後ナデ、橙色。	A+B+I+J 脚60 焼成：普

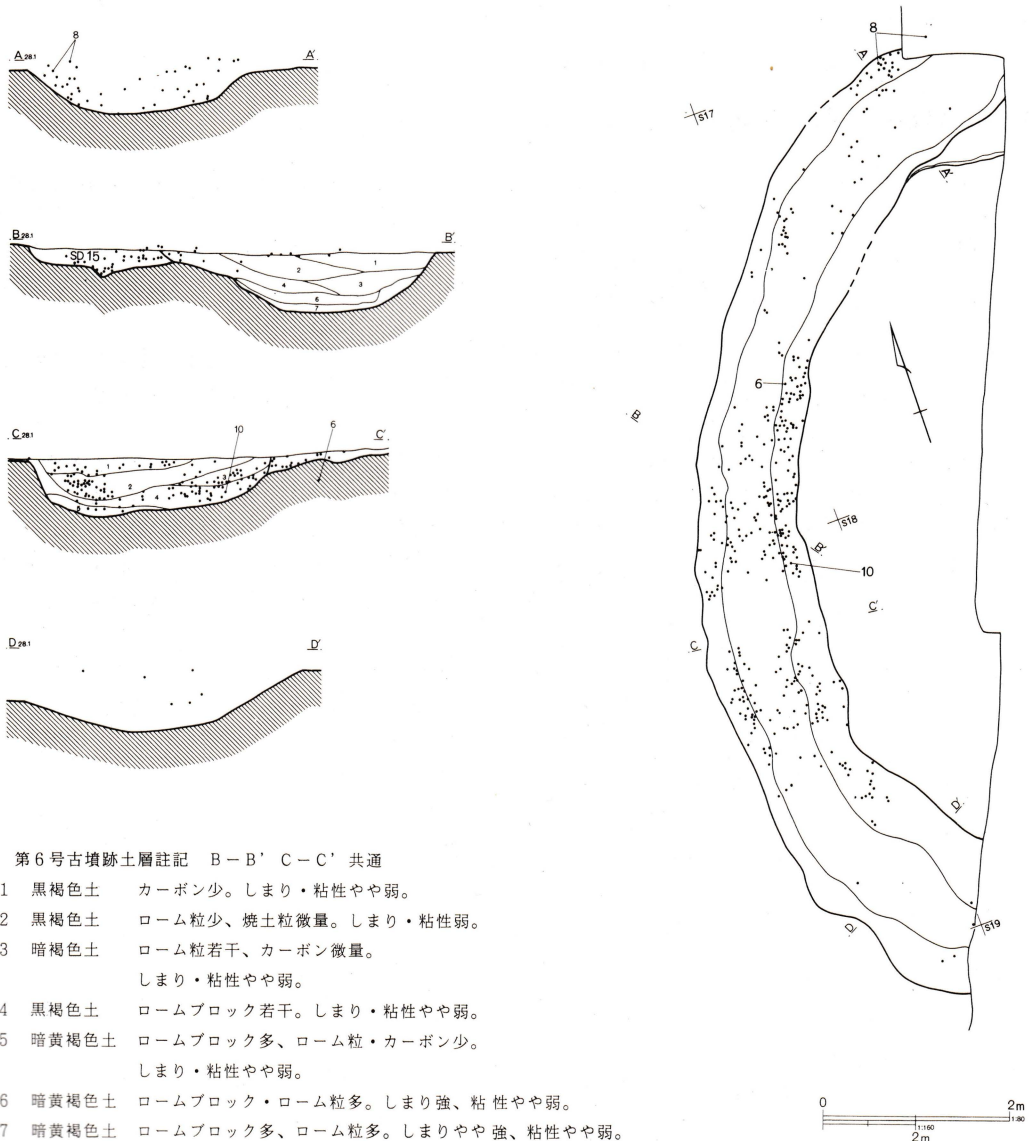


第210図 第5号古墳跡出土遺物

第6号古墳跡 (第211・212図)

第6号古墳跡は、S17bグリッドに位置する。北側と南側は、調査範囲外に続く。第51号・第56号・第59号住居跡・第15号溝跡を切り、第16号溝跡・中近世土壌55に切られる。3分の1周程の検出である。

本古墳跡は、陸橋状部分は検出されていない。周溝を含めた推定直径は2530cmを測り、第2号古墳跡(2060cm)・第3号古墳跡(推定2100cm)・第4号古墳跡(1950cm)・第5号古墳跡(推定1450cm)・第7号古墳跡(1810cm)・第8号古墳跡(推定1450cm)・第9号古墳跡(1760cm)・第10号古墳跡(推定1400cm)・第11号古墳跡(1630cm)・第15号古墳跡(2120cm)・第16号古墳跡(1520)cmを上回り、第12号古墳跡(3360cm)・第13号古墳跡(4160cm)・第14号古墳跡(2830cm)を下回った数値を示している。



第6号古墳跡土層註記 B-B' C-C' 共通

- 1 黒褐色土 カarbon少。しまり・粘性やや弱。
- 2 黒褐色土 ローム粒少、焼土粒微量。しまり・粘性弱。
- 3 暗褐色土 ローム粒若干、Carbon微量。
しまり・粘性やや弱。
- 4 黒褐色土 ロームブロック若干。しまり・粘性やや弱。
- 5 暗黄褐色土 ロームブロック多、ローム粒・Carbon少。
しまり・粘性やや弱。
- 6 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒多。しまり強、粘性やや弱。
- 7 暗黄褐色土 ロームブロック多、ローム粒多。しまりやや強、粘性やや弱。

第211図 第6号古墳跡(1)

墳丘部分は既に失われており、周溝のみの検出である。そのため、主体部の規模・形態については不明である。

各土層断面・エレベーション（第211図）での幅・深さは、A-A'：幅232cm・深さ48cm、B-B'：幅216cm・深さ57cm、C-C'：幅256cm・深さ56cm、D-D'：幅288cm・深さ32cmを測る。D-D'では、第59号住居跡を切って周溝が掘られているため、同住居跡床面が確認面となっており、数値的には浅いものとなっている。

北側においては、第16号溝跡に切られているため、周溝内側のプランがやや不鮮明な状態であった。周溝底面は比較的平坦で、幅や深さは全体的に変化の少ない形態であると推定される。周溝は、深さに比して若干幅広であるといえよう。

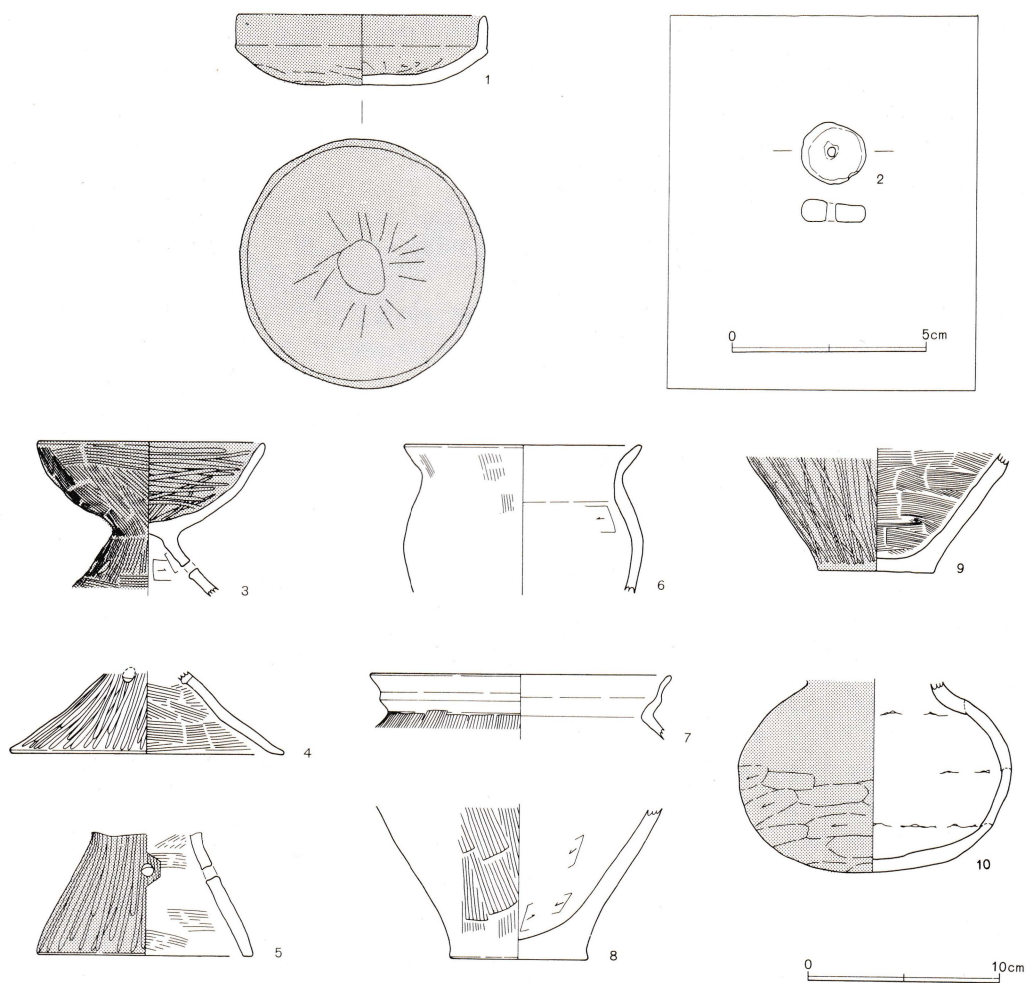
調査し得た範囲において、周溝の立ち上がりは緩やかであり、周溝内覆土は外側からの流入が顕著であった。第7層には、ロームブロックが非常に多く混入をしている。

埴輪は出土していない。北側と西側に、主として遺物が分布しているが、これは第51号住居跡（第89・90図）・第56号住居跡（第97図）からの混入によるものであろうか。

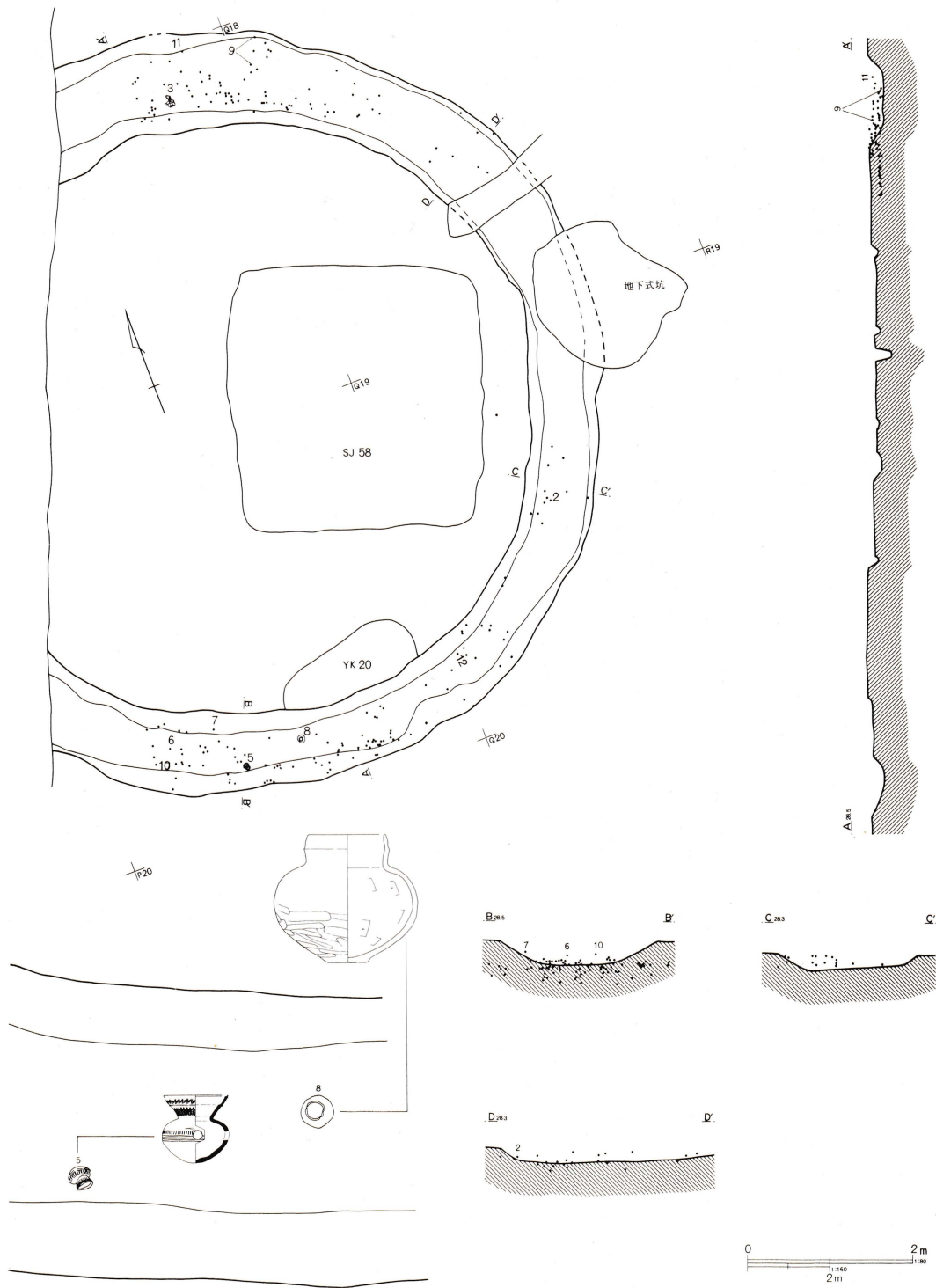
第6号古墳跡出土遺物（第211・212図）

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	坏	口径 12.9 器高 3.6	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：内外面ともなで。底部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はヘラナデの後ナデ、赤褐色。	B+C+E+G ほぼ完形 焼成：良
2	土製 白玉	直径 1.7 厚さ 0.5 孔径 0.2	形状は円板形であるが、やや歪む。片側からの穿孔か。重量1.7 g。橙色。	B+J 完形 焼成：普
3	高坏	口径 11.7 現存高 8.1	坏部：外面は粗いハケ目、内面はヘラなでの後粗いヘラ磨き。脚台部：外面は粗いハケ目、内面は粗いヘラナデ。橙色。	B+C+E+I 坏65 脚上85 焼成：普
4	高坏	底径 (14.2) 現存高 4.2	裾部：外面はヘラ磨き、内面はハケ目。赤褐色。	A+B+H+J(細密) 底20 焼成：普
5	高坏	脚台径 (11.2) 現存高 6.2 孔高 0.7	外面はヘラ磨き、内面は粗いハケ目の後、ナデか。1孔有り。褐色（一部黒色）。	B+D+J 脚90 焼成：普
6	甕	口径 (12.2) 胴径 (12.5) 現存高 7.7	器面は荒れている。口縁部：外面はハケ目の後横ナデ、内面は横ナデ。胴部：外面はハケ目の後ナデか、内面はヘラナデ。褐色（一部黒色）。	B+C+H+J 口20 焼成：普
7	甕	口径 (15.7) 現存高 3.4	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はハケ目、内面はヘラナデ。褐色。	A+B+E+I+J 口15 焼成：普

8	壺	底径 7.4 現存高 8.0	器面は磨滅している。胴部：外面はハケ目、内面はヘラナデ。 底部：外面はナデ、内面はヘラナデ。褐色。	A+B+D+E+H+J 底70 焼成：不良
9	壺	底径 6.0 現存高 6.4	胴部下半：外面はヘラ磨き、内面はハケ目。底部：外面はナデ 内面はハケ目。赤褐色。	A+B+C+D+G 底60 焼成：良
10	壺	現存高 10.1 胴径 15.0	器面はやや荒れている。体部：外面上半はナデ、下半はヘラ削 りの後ナデ、内面はナデ。赤褐色。	B+C+G 体95 焼成：やや良



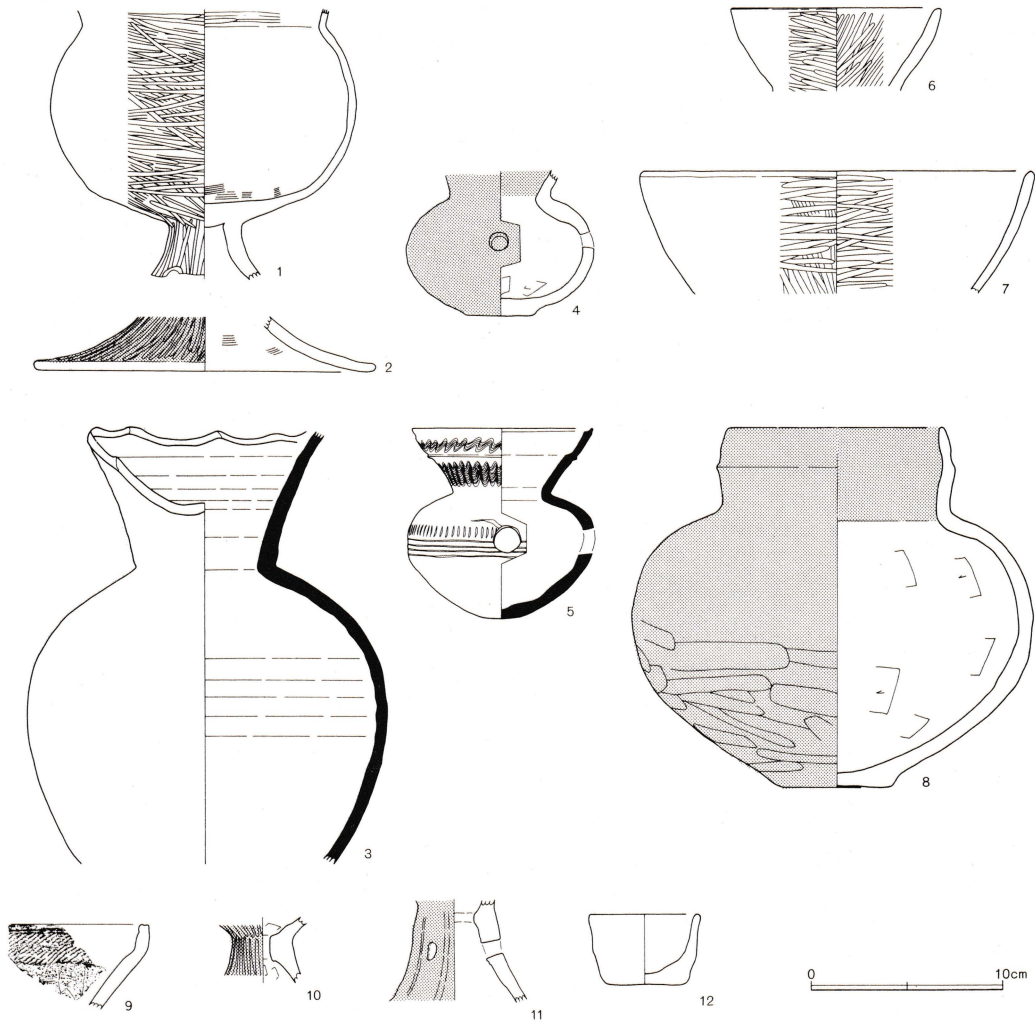
第213図 第6号古墳跡出土遺物



第214图 第7号古墳跡

第7号古墳跡 (第214図)

第7号古墳跡は、P18bグリッドに位置する。第3号方形周溝墓・第52号・第57号・第58号住居跡や、幾つかの土壇を切っている。西側については、調査範囲外に続く。周溝全体の6割程が検出されている。本古墳跡では、陸橋状の部分は検出されていない。周溝を含めた直径は1810cmを測り、整った円形を呈している。規模的には第6号古墳跡(推定2530cm)を下回るが、第8号古墳跡(推定1450cm)・第9号古墳跡(1760cm)・第10号古墳跡(推定1400cm)・第11号古墳跡(1630cm)等に対しては近似し、やや上回っている。墳丘部分は既に失われており、周溝のみの検出である。そのため、主体部の規模・形態については不明である。各土層断面・エレベーション(第211図)での幅・深さは、A-A'北側:幅208cm・深さ40cm・南側:幅160cm・深さ32cm、B-B':幅208cm・深さ26cm、C-C':幅160cm・深さ20cm、D-D':幅208cm・深さ20cmを測る。その平面規模に比して、幅広の周溝といえる。出土した遺物量はそれ程多くはないものの、何点かの良好な資料が

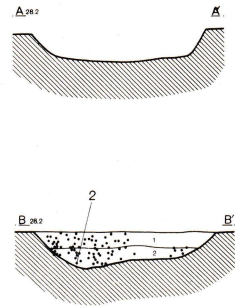
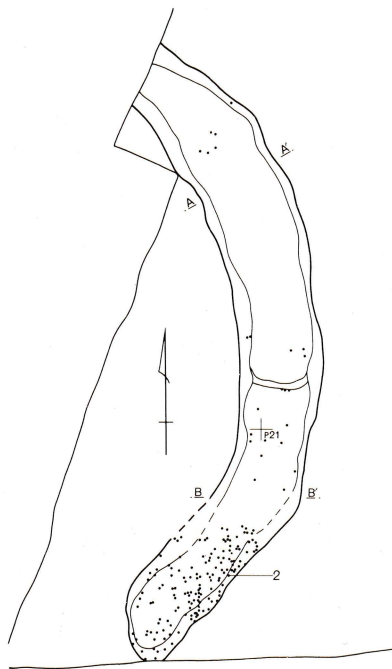


第215図 第7号古墳跡出土遺物

得られた。須恵器の壺（3）は、北側の周溝底から僅かに浮いた位置から、横たわった状態で出土をした。上位面は、耕作等の攪乱によって失われたと推定される。南側の周溝からは、壺（8）と須恵器の甕（5）が、溝底から僅かに浮いた状態で検出された。

第7号古墳跡出土遺物（第214・215図）

番号	器種	法量 cm	形態および手法的特徴	胎土・残存率%等
1	高 杯	現存高 14.0	口縁部：内外面ともヘラ磨き。体部：外面はハケ目の後ヘラ磨き、内面は丁寧なナデ、底部：内面はハケ目の後ナデ。 脚台部：外面はヘラ磨き、内面はナデ。1孔残る。明赤褐色。	体40 脚上65 焼成：やや良
2	高 杯	底 径 (17.0) 現存高 2.9	裾部：外面はヘラ磨き、内面はハケ目の後ナデ。 赤褐色。	A+B+E+J 脚100 焼成：普
3	壺	胴 径 (18.9) 現存高 22.8	頸部内面と肩部外面の一部に自然釉が認められる。 黄灰色。	B+C+G(細部) 頸65 胴40 焼成：良
4	甕	底 径 3.5 胴 径 9.8 現存高 7.5	口縁部：内外面ともに横ナデ。胴部～底部外面：ナデ、胴部内面はナデ。底部内面はヘラナデ。赤褐色。	B+D+E+J 胴100 底100 焼成：良
5	甕	口 径 9.4 胴 径 9.9 器 高 9.9	口縁部に一部歪みあり。口縁内面と肩部の一部に自然釉付着。 灰褐色。	B+C+H 焼成：普
6	壺	口 径 (10.9) 現存高 4.4	内外面とも粗いヘラ磨き。	A+B+E+J 口20 焼成：普
7	高 杯	口 径 (20.4) 現存高 6.4	口縁部：外面はハケ目の後ヘラ磨き、内面はヘラ磨き。 褐色。	A+B+D+E+I+J 口10 焼成：やや良
8	壺	口 径 11 底 径 5.7 器 高 18.7	器面は磨滅著しい。口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はナデか、内面はヘラナデ。赤褐色。	B+D+E+J 口55 胴・底100 焼成：やや良
9	壺	口 径 (19.2) 現存高 4.2	器面は磨滅著しい。口縁外面にLR縄文。内外面ともに横ナデ。 黄褐色。	A+B+I+J 口15 焼成：普
10	器 台	現存高 3.5	杯底部に片側からの穿孔。外面はヘラ磨き、内面はヘラナデ。 黄褐色。	A+B+J 焼成：やや良
11	器 台	現存高 5.3 孔 径 0.7	脚台部に片側からの穿孔3箇所。器面は荒れている。外面はヘラ磨きか、内面はナデ。橙色。	A+B+G 脚上40 焼成：普
12	手捏ね	口 径 (5.6) 底 径 4.0 器 高 3.6	全面ナデ。にぶい橙色（一部黒色）。	A+B+C+E+G 口10 胴70 底100 焼成：普



第8号古墳跡土層註記

- 1 黒褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり・粘性やや強。
- 2 暗褐色土 ロームブロック多、カーボン少。しまり・粘性やや強。



第216図 第8号古墳跡

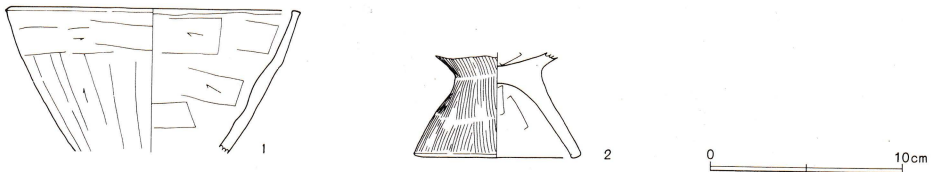
第8号古墳跡 (第216図)

第8号古墳跡は、O20cグリッドに位置する。墳丘部分で第63号住居跡を切り、柵列状遺構と思われるピット列には、北東から南西方向に切られている。北側は調査範囲外に続き、南側では陸橋状部分が存在しているが、水道管によって攪乱を受けている。陸橋状部分の西側については、調査範囲外に延びている。全周の3分の1程の検出である。

本古墳跡では、陸橋状の部分は検出されていない。周溝を含めた直径は推定で1450cmを測り、規模的には、近在する第7号古墳跡(1810cm)・第9号古墳跡(推定1760cm)・第10号古墳跡(推定1400cm)・第11号古墳跡(推定1630cm)等に近いといえる。墳丘部分は既に失われており、周溝のみの検出である。そのため、主体部の規模・形態については不明である。

各土層断面・エレベーション(第216図)での幅・深さは、A-A' : 幅184cm・深さ32cm、B-B' : 幅160cm・深さ40cmを測る。陸橋状部分の近辺(B-B')は、狭くはあるがテラス状を呈する。

出土した土器片は、いずれも周辺遺構からの混入と推定される。埴輪の出土はみられなかった。



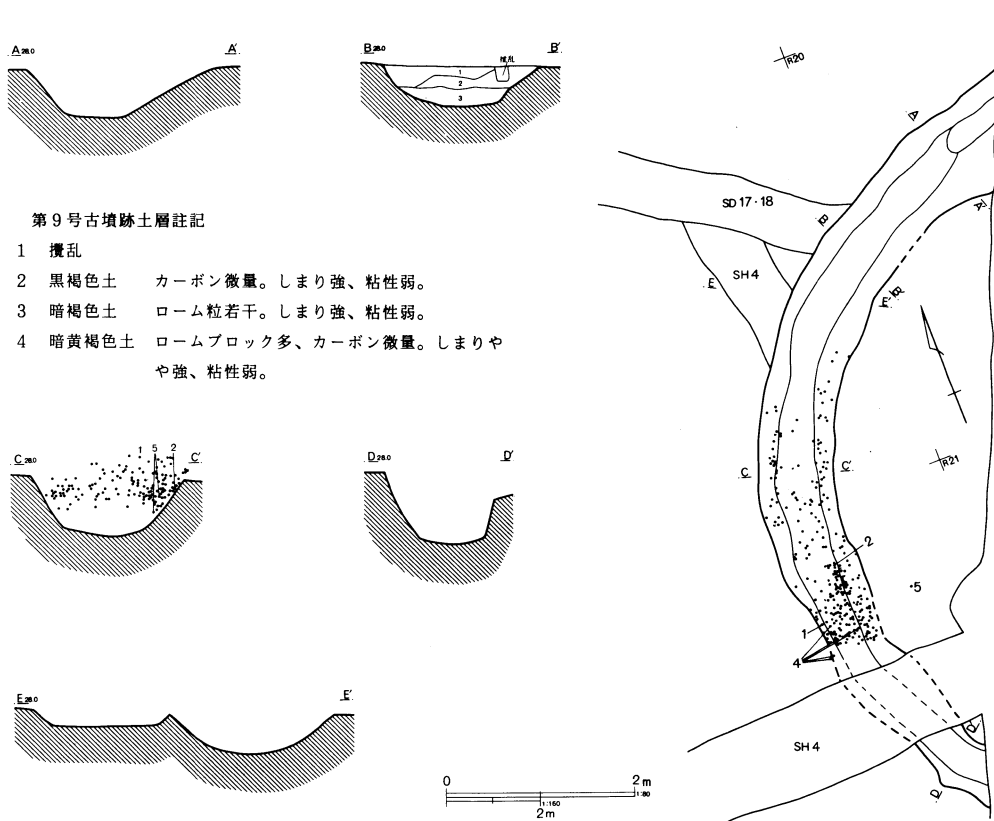
第217図 第8号古墳跡出土遺物

第8号古墳跡出土遺物 (第217図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	台付甕	脚台径 (14.8) 現存高 7.6	整形は非常に雑である。外面はへら削り、内面はへらナデ。黄褐色。	A+B+J+小碟 (多) 脚25 焼成：普
2	台付甕	脚台径 (8.8) 現存高 5.4	底面：内外面ともへらナデ。脚台部：外面はハケ目、内面はへらナデ。黄褐色。	A+B+H+J 脚20 焼成：普

第9号古墳跡 (第218図)

第9号古墳跡は、R20 aグリッドに位置する。西側で第4号方形周溝墓を、南側で第6号方形周溝墓・第65号住居跡を切り、第17号・第18号溝痕に北側部分を切られている。また、南側については、土壌や水道管等による攪乱も受けており、全周の3分の1程の検出である。本古墳跡では、陸橋状の部分は検出されていない。周溝を含めた直径は推定で1760cmを測り、規模的には、近在する第7号古墳跡 (1810cm) ・第8号古墳跡 (推定1450cm) ・第10号古墳跡 (1400cm) ・第11号古墳跡

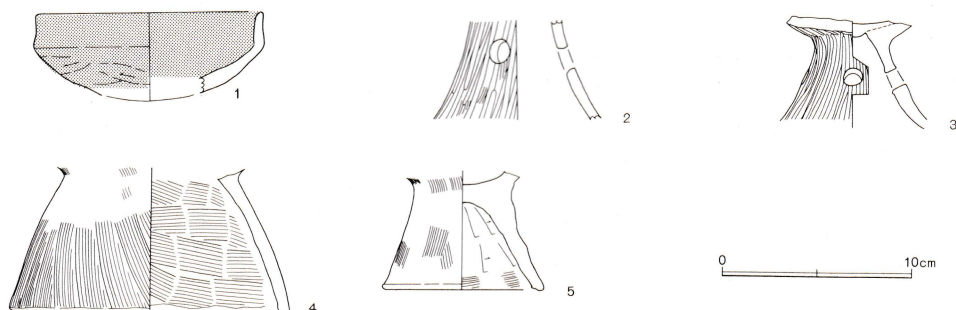


第218図 第9号古墳跡

(推定1630cm)等に近いといえる。墳丘部分は既に失われており、周溝のみの検出である。そのため、主体部の規模・形態については不明である。各土層断面・エレベーション(第218図)での幅・深さは、A-A' : 幅192cm・深さ48cm、B-B' : 幅160cm・深さ40cm、C-C' : 幅160cm・深さ63cm、D-D' : 幅112cm・深さ72cmを測る。北側部分では、やや幅広で、若干深くなる。南側では第6号方形周溝墓を切っていることから、上位面は遺存状況が悪く、確認面が低くなり計測値的には溝幅が狭くなっている。概して、北側は溝底の立ち上がりが弱く、南側では内外面とも、急な立ち上がりを示しているといえる。本古墳跡周溝は、幾つかのピットや土壌に切られているが、その内の1つから、埴輪が破片の密集した状態で検出された。土壌は周溝覆土を切っているものであり、規模や形態は確定困難であった。覆土は、フカフカしたしまりのごく弱い黒色土1層のみからなり、近世以降と推定した。破片を観察すると、割れ口が比較的新しく摩滅度も低いのに対し、接合復元しても破片の絶対数が不足している。これらの点から、本古墳の墳丘削平時、もしくは削平後の耕作時に、一括して打ち砕かれた後“ゴミ穴”に投棄されたものであると推定される。

第9号古墳跡出土遺物 (第219図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	坏	口径 現存高	(11.6) 4.2	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面はヘラ削りの後ナデ内面はナデ。褐色。	B+C+D+H 口70 坏25 焼成：不良
2	器台	現存高	5.2	脚台部に片側からの穿孔3箇所か。外面はハケ目の後ヘラ磨き内面は粗いナデ。赤褐色。	A+B 焼成：やや良
3	高坏	現存高 孔径	5.6 0.9	脚台部に片側からの穿孔4箇所か。外面はヘラ磨き、内面はナデ。赤褐色。	A+B+D+E+J(細密) 脚20 焼成：普
4	台付甕	脚台径 現存高	(14.0) 7.6	外面はハケ目の後上位をナデ、内面はハケ目。黄褐色。	A+B+I+J 脚25 焼成：やや良
5	台付甕	脚台径 現存高	8.0 6.2	器面は荒れている。底部：内面はヘラナデか。脚台部：外面はハケ目の後粗いナデか、内面は上中位はヘラナデ、下位はハケ目。橙色。	A+B+C+H 焼成：普



第219図 第9号古墳跡出土遺物

第9号古墳跡出土形象埴輪（第220～222図）

女子人物埴輪（第220図1）

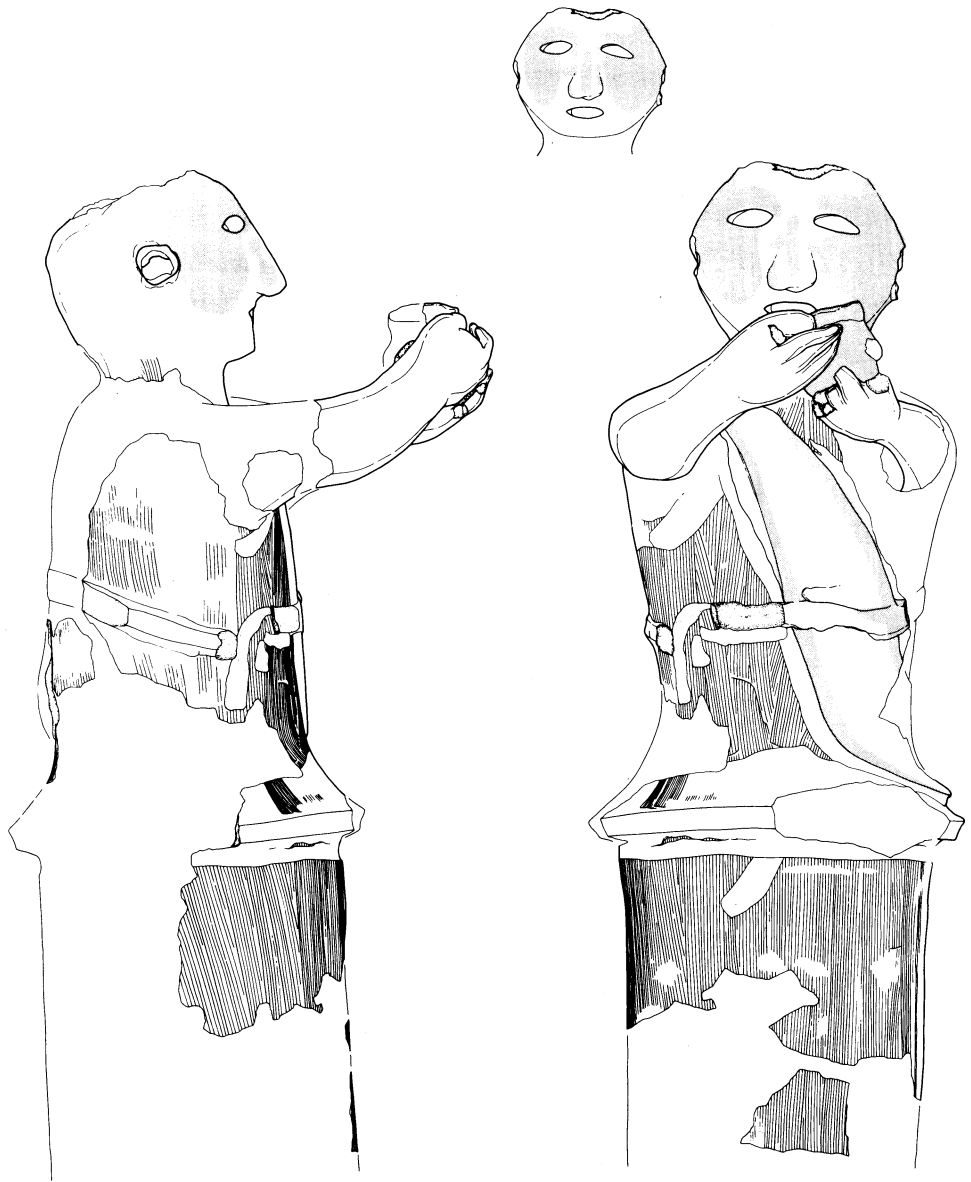
「意須比」を身に纏い壺を捧げもつ女子人物埴輪の半身像である。鬢、肩部から背面及び台部下半を欠損するが、概ね全体の形を窺うことができる。南西側の現道付近の攪乱土内から一括して出土した。胎土は砂粒の混入が少なく、赤色、黒色粒子を含む。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。全体の残存高52cm、人物部分の高さ35cm、腰部最大幅19.7cmを各々測る。

頭部は球形に作られ、全体にふっくらとした顔立ちをしている。頭頂部は塞がれず平坦となっていることから、別作りの板状の鬢を取り付けていたものと判断される。顔面の赤彩は、目の回りから頬にかけて楕円形に大きく塗布し、また鼻稜と下顎にかけて一直線に、さらに鼻の両側に3個の円文を目から小鼻にかけて塗布している。顔面は粘土紐を積み上げ内面から押し出してふっくらとした丸顔に作り、下顎部分に粘土紐を貼付して顔の輪郭を作り出す。目は木葉形に大きく開け、眉の表現はみられない。鼻は高く、鼻頂は丸く作られる。口は大きく木葉形に外側から開けられる。耳は外側から径3cmほどの円孔を雑に開けただけで表現し、耳飾りなどは貼付していない。頭部背面は丁寧に布ナデを施し、ハケメ調整などはみられない。内面は粘土紐の積み上げ痕を指ナデによってナデ消す。また鼻の内面に円形の赤彩痕が付着しており注意される。

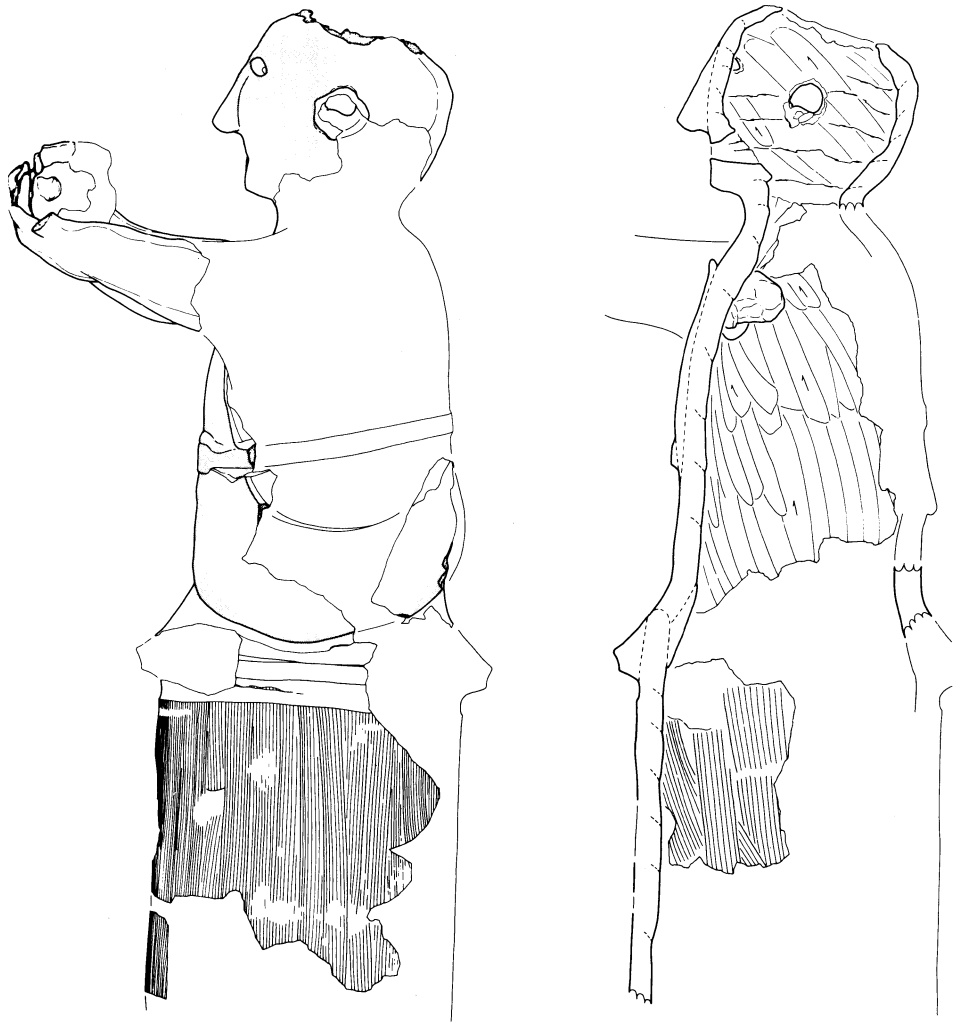
頸部は頭部との接合のために内面に入念な指ナデを加える。腕は前方に高く上げられ、掌の上には小さな壺を捧げもっている。壺にそえられた指は粘土紐を一本一本貼り付けて写実的に表現し、拇指は四指に比べ丸く扁平に作り分けられている。壺は口径3.8cm、器高3.8cmほどの大きさで、約1/2を残存する。頸部でわずかにくびれた広口の壺を表したもので、胴部は球形を呈し底部は作られておらず、左の掌の上ののせた状態で接合している。壺の外表面は淡く赤彩を施し、作りはやや粗雑である。両腕とも緩やかに湾曲して延び、外面は丁寧に布ナデを行い、袖口などの着衣の表現はみられない。腕部の作りは完存しているため中空式なのか中実式なのかは明確ではないが、腕部の基部をシボりこみ肩部にあらかじめ開けておいた円孔に差し込んで接合を行い、付け根部分には指ナデを入念に施している。

胴部には、右肩から左脇下に斜めに幅広の布を廻した「意須比」を身に纏った様子を表現している。「意須比」は下方に向かって徐々に幅を広げ両側に赤彩を施すもので、畿内地方の巫女埴輪に普遍的にみられる袋状のものとは若干異なり「袷袷衣」に近いと言える。また、その上には赤彩を施した腰帯をゆるく締めており、正面右脇の剝離痕から結び緒を垂らしていたものと考えられる。この他には下衣の表現はなく、外面にタテハケメ調整を加え、内面に縦位の指ナデを丁寧に施す。裾部は台部の外面に粘土紐を貼り付け裾の短く開いた衣服を表現している。製作は一定の乾燥期間をおいた台部の上に粘土紐を積み上げて胴部を成形しており、その接合部内面には補強のために粘土紐を貼付している。

台部は径15.6cmほどの円筒形に作られ下半部を欠損する。外面調整は2cmあたり11～12本のやや目の粗いタテハケメ調整を施し、内面にも同様のタテハケメ調整を施す。基部の状態は不明であるが、円筒部分は幅2.5cm～3.5cmの粘土紐の巻き上げによって成形を行っている。



第220图 第9号古墳跡出土形象埴輪(1)



第221图 第9号古墳跡出土形象埴輪(2)

女子人物埴輪（第222図2）

本体から剥離した小破片のため明確ではないが、残存する赤彩痕の状態から1と同じ「意須比」を纏った女子人物埴輪の破片と推定される。西側周溝、Q21cグリッドから出土した。胎土は砂粒の混入が少なく、赤色粒子、雲母を含み、焼成は良好である。色調は淡褐色を呈する。

1と同様に幅1cmほどの赤彩を両側に施した「意須比」の右肩端部の破片である。本体に薄い粘土帯を貼り付けて成形している。

女子人物埴輪（第222図3）

小破片のため明確ではないが、整形の特徴から1と同様の「意須比」を纏った女子の腰に巻かれた腰帯の結び緒と推定される。Q21cグリッドから出土した。胎土は砂粒を多く含み、赤色、黒色粒子の混入が目立つ。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。

タテハケメ調整を施した本体部分に幅1.3cmほどの粘土紐を貼り付けて表現し、帯の部分には赤彩を施す。胎土、焼成、色調等の特徴から2と同一個体の可能性が高い。

馬形埴輪立髪（第222図4）

馬形埴輪の立髪の先端に付属する円柱状の立ち飾りである。Q21cグリッドから出土した。胎土は長石、石英等の砂粒（径1cm～2cm）を多量に含む。焼成は非常に良好で堅緻に仕上がりと、色調は暗赤褐色を呈する。残存高4.6cm、下部径3.5cm、上部径5.2cm×4.6cmを測り、上面はほぼ平坦な楕円形に作られる。製作は粘土塊より形作られ、外面に縦位の指ナデを入念に施す。

馬形埴輪鈴（第222図5）

飾り馬の胸繫、尻繫等に付けられていた馬鈴と考えられる。Q21cグリッドから出土した。胎土は径1mm～2mmの砂粒及び径1cmの小石を含み、焼成は良好である。色調は暗赤褐色を呈する。長径3.3cm、短径3cm、高さ3.4cmを測る。

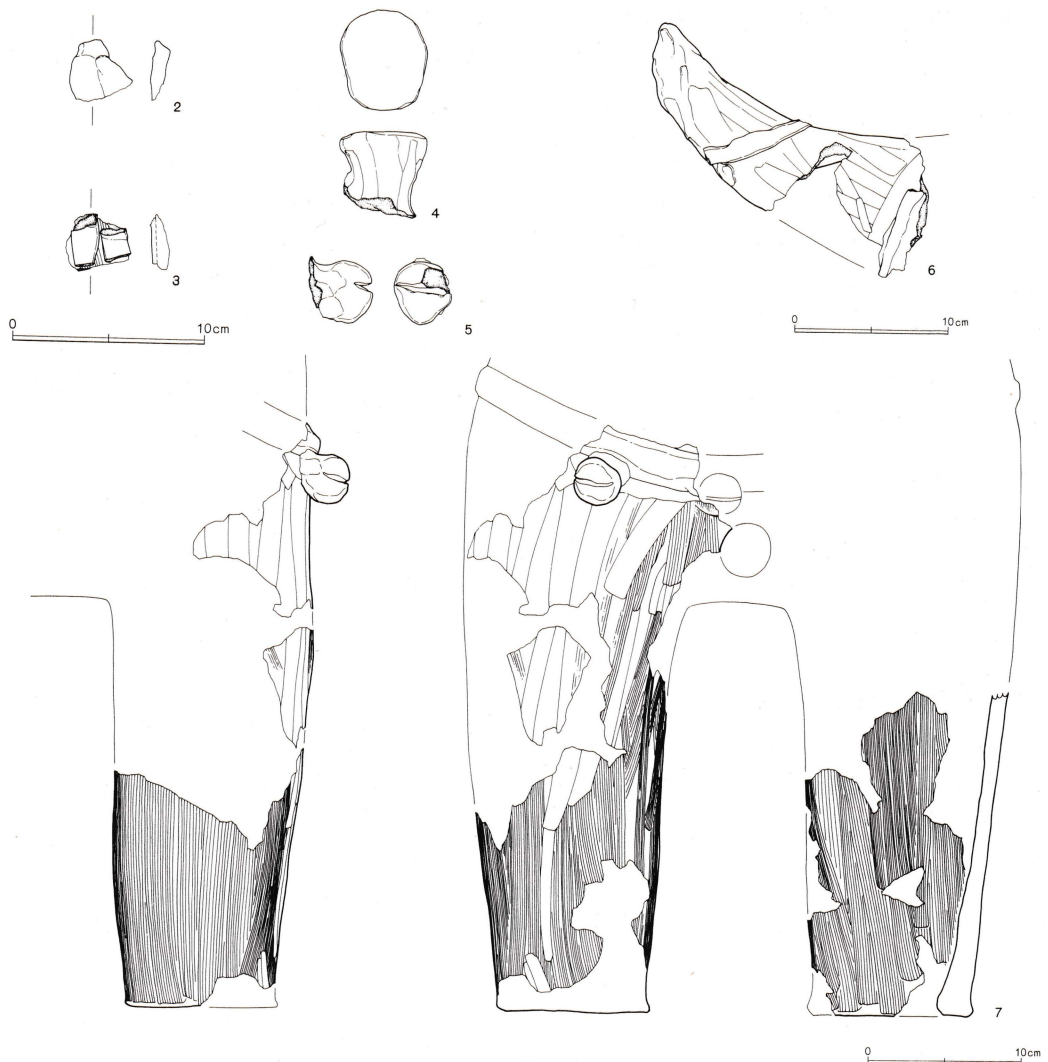
製作は粘土塊を丸めて球形に作られ、全面を布ナデした後に横方向に刀子を用いて深さ1cmほどの切り込みを入れる。鈴の基部には馬本体への取り付けのための指頭圧痕が残る。

馬形埴輪尻尾（第222図6）

馬形埴輪の尻尾の破片である。Q21cグリッドから出土した。胎土は長石、石英の砂粒等を多量に含み、焼成は良好で橙褐色を呈する。残存長21.7cm、基部の復元径約8.5cmを測る。

尻尾は結束した状況を表し、先端に向かって細く尖り大きく反り返って上を向く。尻尾の付け根下側には雲珠につながる尻繫の革帯を表現した幅1.8cm、高さ1.2cmの断面台形の粘土紐が回り、さらに尻尾の中程にも幅1.2cmの低平な粘土紐が巻き付けられている。この粘土紐は部分的にしか残っていないが、剥離痕から尻尾の上面でX字状に交差するように巻き付けられていたものと判断される。また尻尾の下面には径1.7cmの丸い小さな凹みが観察される。これは製作、乾燥時に重い尻尾を支えるために使用した支え木の痕跡と考えられる。

尻尾の先端部は粘土塊によって形作られているため中実には作られているが、中程からは粘土紐の巻き上げによって中空に成形されている。外面調整は布ナデを丁寧に施し、尻尾先端部には成形時の手捏ね痕が残る。尻繫を表した粘土紐は布ナデにより丁寧にナデつけられる。内面は粘土紐巻き上げ痕を縦位の指ナデによってナデ消す。



第222図 第9号古墳跡出土形象埴輪③

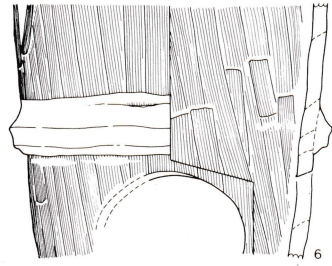
馬形埴輪胸・脚部（第222図7）

馬形埴輪の胸部から脚部にかけての破片である。西側周溝部分、Q21c・eグリッドから出土した。胎土は石英、長石等の小石を多量に含み、焼成は良好で色調は暗赤褐色を呈する。残存高38.4cm、胸部復元幅約36cmを測る。

左前脚として図示した破片は胎土、焼成、色調等の特徴から同一個体と考えられるが、胸部との接点がなく、必ずしも前、後脚の区別は明確ではない。胸部は中央にスカシ孔を穿ち、幅3cmほどの粘土紐を貼り付けて胸繫の革帯を表現し馬鈴を装着する。馬鈴は1個のみを残し、大きさは径3cm、高さ3.5cmを測り、基部を入念にナデつけている。脚部は細長い円筒部で表現し長さ約27cm、底径9.6cmを測る。外面調整は脚部では2cmあたり11~12本のタテハケメ調整を施し、胸部にはタテハケメ調整後、布ナデを加える。内面調整は入念に布ナデを行っている。脚部の製作は、幅4cm前後の基部の上に粘土紐を巻き上げて形作る。

9号古墳跡出土円筒埴輪 (第223図)

9号墳から出土した円筒埴輪の中で図示しえたものは1点である。ズン胴状の器形で、円形のスカシ孔が穿孔されている。器形はスカシ孔のある段からその上段が口縁部に至りにくい感があり、3条突帯4段構成のものとなる可能性がある。突帯の断面形態はCタイプで、突出度は弱い。調整は内外面ともにタテハケが施されている。色調は淡黄色で、胎土には白・黒色粒子、砂粒が含まれている。焼成は良好である。



0 10cm

第223図 第9号古墳跡出土円筒埴輪

9号墳出土埴輪 (第223図)

No	器高	器径	器厚	器質	突帯	スカシ孔	外面調整	内面調整	備考
1	現16.6	突(21.4)	b 1.4 c 1.1	色 淡黄 胎 黒・白・砂粒 焼 良好	C 1.3 3.3 / 1.1	(円形) a b (4.9)	一次タテハケ ハケ11本 / 2cm	タテハケ ハケ12本 / 2cm	

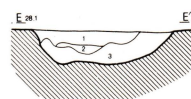
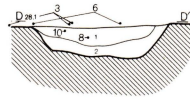
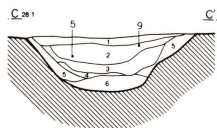
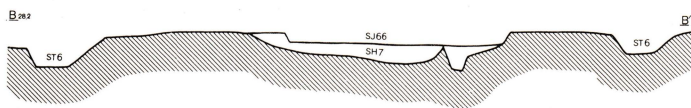
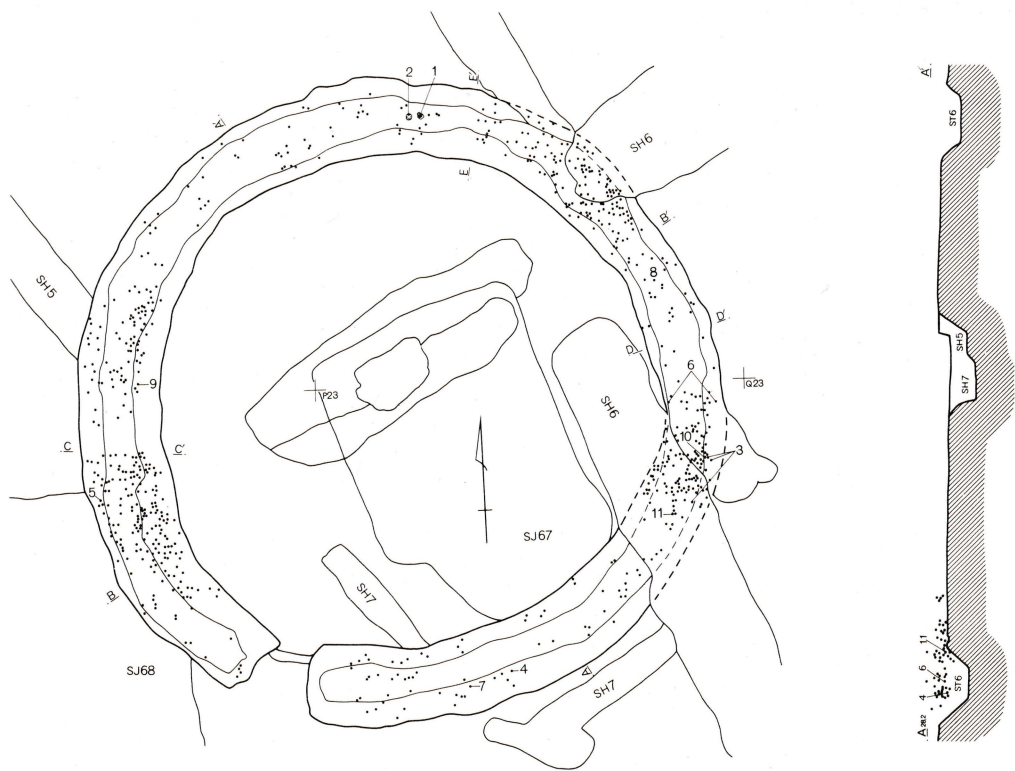
第10号古墳跡 (第224・225図)

第10号古墳跡は、P23aグリッドに位置する。墳丘部分で第5号・第6号・第7号方形周溝墓の各々南東溝・北西溝・西溝を切る。周溝部分では、第5号・第7号方形周溝墓の北東溝・南西溝のそれぞれ南側を、第6号方形周溝墓の北溝西側と西溝北側を切り、さらに第68号住居跡の北東コーナー付近を切っている。他遺構との重複は多いものの、周溝部分は全周が検出されており、平面規模・形態を得ることができた。

陸橋状の部分が、中心からN-153° -Wの方向に検出された。周溝を含めた直径は1400cmを測る。規模的には、近在する第6号古墳跡(推定2530cm)・第12号古墳跡(推定3360cm・主軸方向N-23° -W)に二回り程下回るが、第7号古墳跡(1810cm)・第8号古墳跡(推定1450cm)・第9号古墳跡(推定1700cm)・第11号古墳跡(推定1630cm)等には比較的近いといえる。

ちなみに、北東へ100~130m程離れた第2~5号古墳跡(第1号古墳跡に関しては計測不可であった)や、南西へ180~300m程離れた第13~16号古墳跡についての計測値も挙げておく。第2号古墳跡(2060cm)・第3号古墳跡(推定2100cm・主軸方向N-72° -E)・第4号古墳跡(1950cm・主軸方向N-62° -E)・第5号古墳跡(推定1650cm)、第13号古墳跡(円墳と仮定して4160cm)・第14号古墳跡(推定2830cm)・第15号古墳跡(2120cm・主軸方向N-74° -W)・第16号古墳跡(推定1520cm)を測る。計測値のみからでは、南西よりに位置する第12号~第16号古墳跡の内、第16号を除いて比較的大きな古墳が分布していたとみられる。

実測図において、周溝の外側プランがやや崩れる箇所が見られるのは、他遺構との重複で立ち上がり面が変形しているためであり、本来的には幅も均一的であり、非常に整った円形を呈すると推定される。溝底は比較的变化が少なく、平坦もしくは船底形を呈する。立ち上がりは、概ね緩やかではあるが明確なものであった。南西部分に位置する周溝端部は、やや四角張った形態で、陸橋状



第10号古墳跡土層註記

C-C'

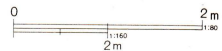
- 1 黒褐色土 黒色が強い。ローム粒及び極く少量の焼土を含有する、粒子は粗い。
- 2 黒褐色土 第1層に比してローム粒の含有が多い。
- 3 黒褐色土 ロームブロック少量混入。
- 4 黒褐色土 砂質の粘土を含む。E-E' 第2層に相当。
- 5 暗黄褐色土 多量のロームブロックを含む、特に東側に顕著。
- 6 暗黄褐色土 ロームを主体とする層。

D-D'

- 1 黒褐色土 ローム粒少、焼土極く微量。しまり・粘性やや弱。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ3cm)多。しまり・粘性やや弱。

E-E'

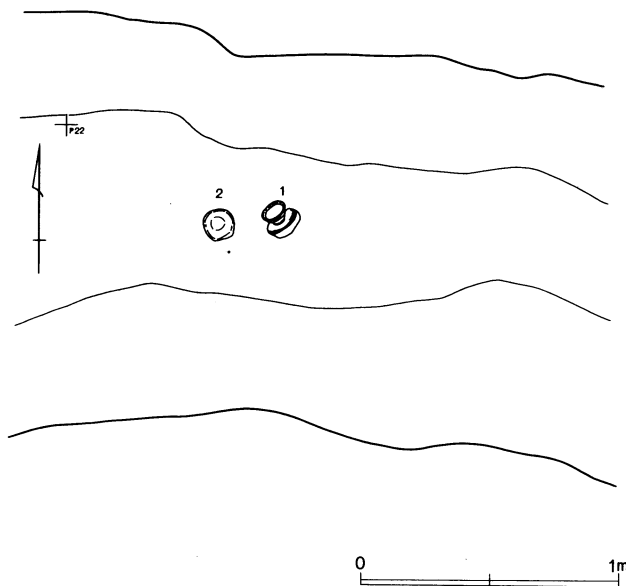
- 1 黒褐色土 ローム粒を多量、極く少量のロームブロックを混入。しまり・粘性弱。
- 2 黒褐色土 砂質の粘土を含む。
- 3 暗黄褐色土 黒褐色土に多量のローム粒・ロームブロックが混入した層。



第224図 第10号古墳跡(1)

第10号古墳跡出土遺物 (第226図)

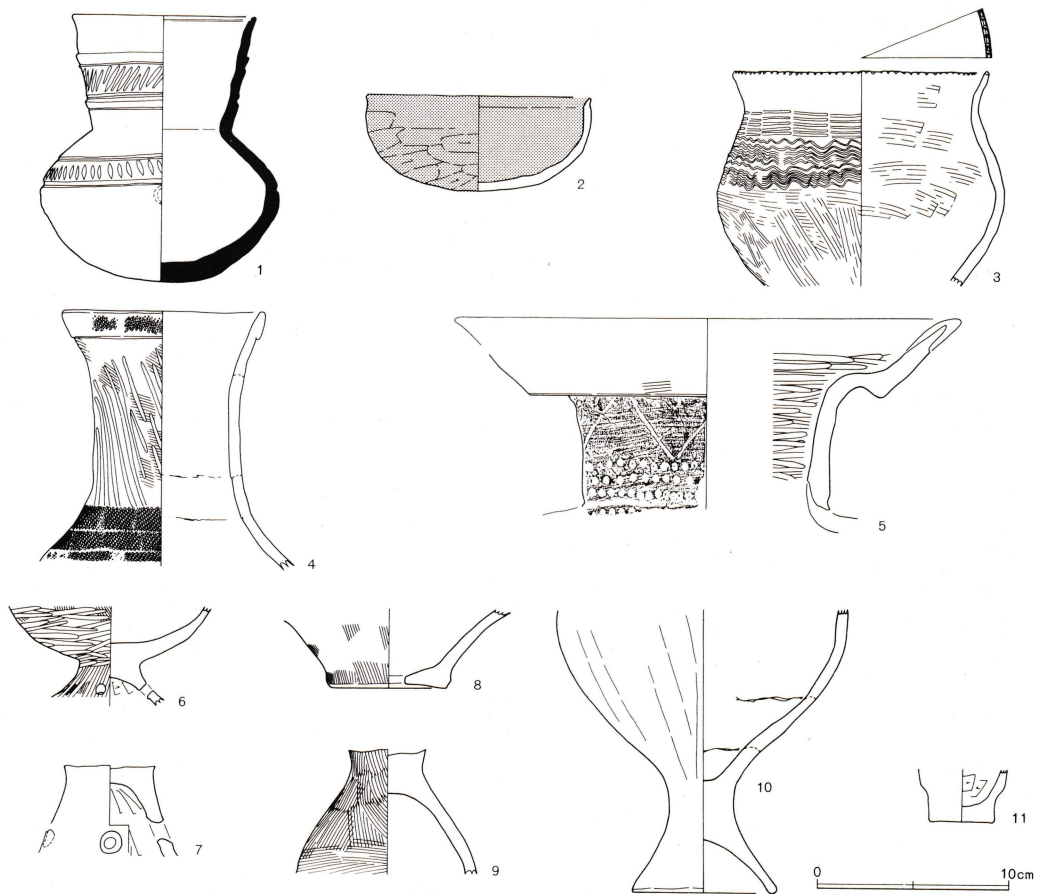
番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	須恵器 はそう	口径	9.5	器面は荒れている。ロクロ整形。灰褐色。	B+E+J (非常に細密) □70 体90 焼成：不良
2	坏	口径	11.6	口縁部：内外面とも横ナデ。坏部：外面はヘラ削りの後丁寧なナデ、内面はナデ。赤褐色（外面に一部黒斑）。	A+B+G □・体85 焼成：良
3	甕	口径	(13.2)	胴部中位に張りもち、口縁は「ハ」字状に開く。口唇部：木口状工具による鮮明な刻み目をもつ。口縁部：外面は横ナデ、	A+B+D+F+H □5 胴25 焼成：やや良
		胴径	(15.1)	頸部：外面は5本単位の櫛状工具による右回転の簾状文。胴部：外面上半は大雑把な5本単位の櫛状工具による波状文を2段。外面下位はハケ目の後ナデ。口縁部～胴部：内面上半はハケ目の後ナデ、下半はナデか。灰褐色。	
		現存高	11.2		
4	壺	口径	(10.7)	LR縄文を口縁に1段、肩部に3段。頸部：外面はハケ目の後粗いヘラ磨き、内面はナデ。褐色。	A+B+I(多)+J □45 胴上100 焼成：普
		現存高	13.4		
5	壺	口径	(26.0)	頸部外面にヘラ描沈線による鋸歯文、その下位に竹管状の工具で刺突文4列。口縁部：外面はハケ目の後ナデか、内面はヘラ磨き。頸部：外面はハケ目の後粗いナデ、のち施文。内面はヘラ磨き。橙色。	A+B+I+J(細密) □15 頸30 焼成：普
6	高坏	現存高	5.2	坏部：外面はヘラ磨き、内面はナデか。脚台部：外面はヘラ磨き、内面はヘラナデとナデ。穿孔4と思われる。表は赤褐色、裏は灰黄褐色。	A+B+D+E+I(多) 坏40 脚上半35 焼成：普



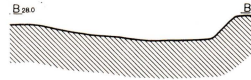
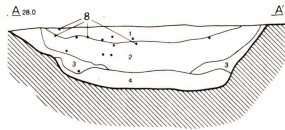
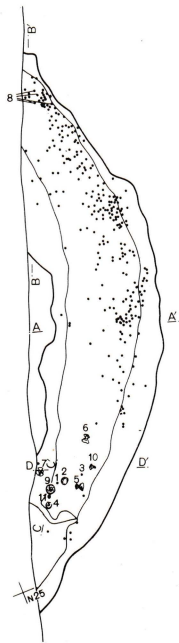
第225図 第10号古墳跡(2)

部分を掘り残している。周溝内側（墳丘部分）では、本古墳跡を切っている遺構はピットが僅かに存在するのみである。これは比較的最近にまで、墳丘もしくは墳丘の痕跡が“地膨れ”状に残っていたことを示しているとも考えられる。遺物は、ほぼ全域から出土しているが、特に北西部分（E-E'の南）・南東部分（D-D'の南）・南西部分（C-C'の南）に集中して検出されている。これは、第6号方形周溝墓や、第68号住居跡からの混入が多数を占めると推定される。

7	高 坏	現存高	4.6	外面はナデ、内面はヘラナデ。穿孔は4つ。赤色。	A+B+E+F+I+J 焼成：良
8	甗	底 径 現存高 孔 径	6 4.5 1.8	穿孔は焼成後であり、甗からの転用品か。胴部：外面はハケ目 内面はナデ。底部：外面はヘラ削り、内面はナデ。 明赤褐色。	A+B+I(多) 底80 焼成：やや不良
9	台付甗	現存高	6.4	脚台部：外面はハケ目の後下位を粗い横ナデ、内面はナデの後 下位を粗い横ナデ。褐色。	A+B+I+J 脚45 焼成：普
10	台付甗	底 径 胴 径 現存高	7.1 (15.3) 14.8	器面は荒れている。胴部～脚台部：外面はヘラ削りの後ナデ、 内面はナデか。にぶい黄橙色。	B+G+J 脚100 胴下半10 焼成：普
11	手捏ね	底 径 現存高	3.3 2.2	外面はナデ、内面はヘラナデ。褐色。	A+B+J(細密) 底100 焼成：普

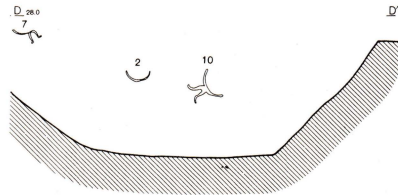
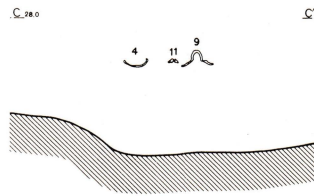
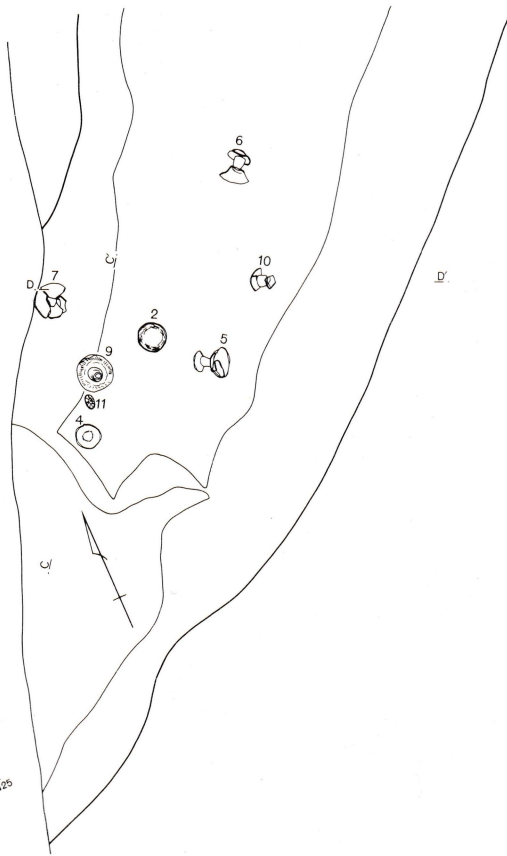
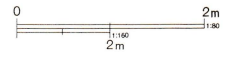


第226図 第10号古墳跡出土遺物



第11号古墳跡土層註記

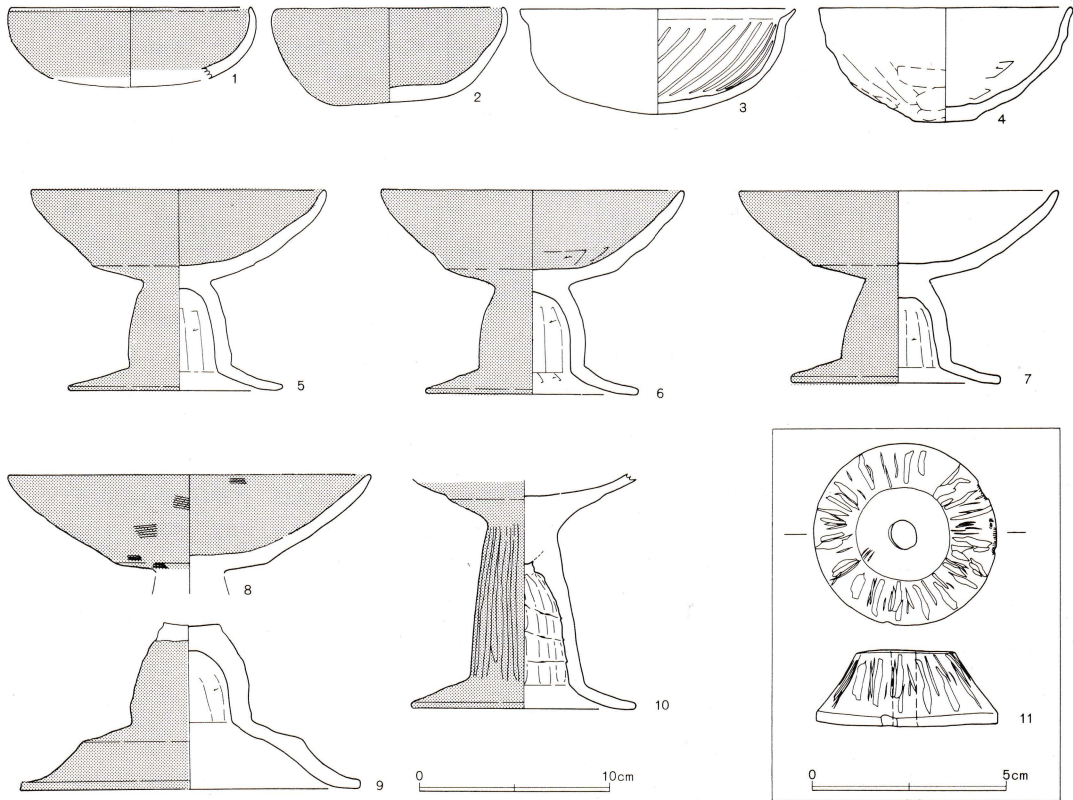
- 1 黒褐色土 ローム粒少、ロームブロック多。粒子粗くザラザラしている。
- 2 黒褐色土 第1層よりローム粒多く、黄色が強い。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。第2層よりしまり弱。
- 4 暗黄褐色土 ロームブロック主体の層、黒褐色土混入。



第227図 第11号古墳跡

第11号古墳跡（第227図）

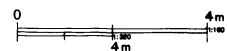
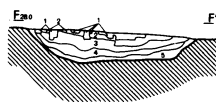
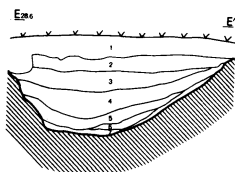
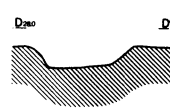
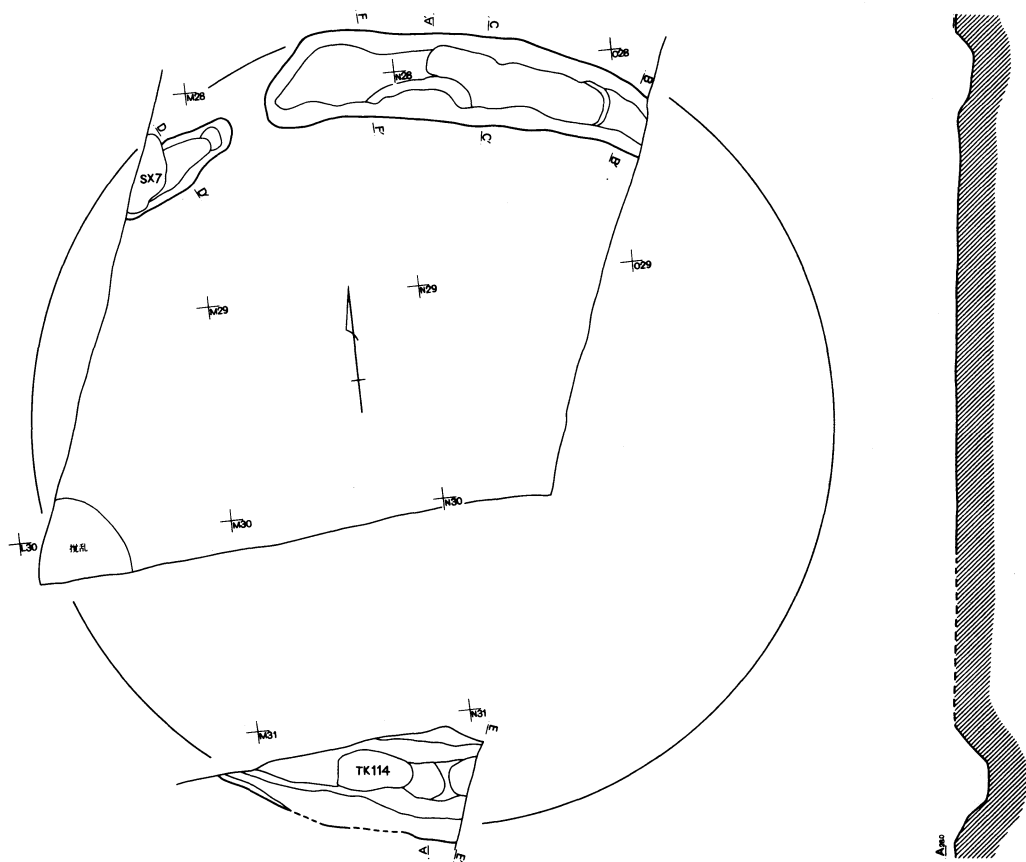
第11号古墳跡は、N24 b グリッドに位置する。西側は調査範囲外に続くほか、中近世土壌90・91に切られる。全周の4分の1程の検出である。本古墳跡では、遺構検出内において陸橋状の部分は検出されていない。墳丘部分は既に失われており、周溝のみの検出である。そのため、主体部の規模・形態については不明である。周溝を含めた推定直径は1630cmを測り、規模的には、近在する第7号古墳跡（1810cm）・第8号古墳跡（推定1450cm）・第9号古墳跡（推定1760cm）・第10号古墳跡（1400cm）等に近く、南に約25mの距離にある第12号古墳跡（推定3360cm）には、二回り程下回っている。各土層断面・エレベーション（第227図）での幅・深さは、A-A'：幅240cm・深さ64cm、B-B'は周溝に直行する方向ではなく、また周溝自体の遺存度もきわめて悪い箇所であるが参考として掲げておく。幅432cm・深さ24cm。D-D'では調査範囲外に続くため、溝幅は計測できないが深さは120cmを測る。概して、平面規模に比して周溝は、幅広といえる。内側（＝墳丘側）の遺存度が低いため、周溝は形態的に整っていない図となっている。しかし、溝底は比較的平坦で、外周側の立ち上がりも明確であり、整った円形を呈していたと想定された。南側端部付近では、溝底がテラス状に若干浅くなる箇所があり、あるいは陸橋状部分が続いているのかとも想定された。遺物の分布は北側に多いが、図化し得たものはテラス状部分近くからまとまって出土したものであり、いずれも溝底面からかなり浮いた位置で検出された。



第228図 第11号古墳跡出土遺物

第11号古墳跡出土遺物 (第228図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	碗	口径 (12.5) 現存高 3.7	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：内外面ともナデ。赤褐色。	A+D+G+J 口径20 焼成：やや良
2	碗	口径 12 底径 5.9 器高 5.9	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：内外面ともナデ。底部：外面はナデ、内面はヘラ削りの後ナデか。赤褐色。	A+B+C+D+E+H 口径80 体100 焼成：普
3	碗	口径 (14.4) 器高 5.5	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面はナデ、内面は暗文状のヘラ磨き。明赤褐色。	A+B+D+H 口径20 体20 焼成：普
4	碗	口径 12.8 底径 3.3 器高 5.9	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面は粗いヘラ削りの後粗いナデ、内面は粗いナデ。底部：外面はヘラ削り、内面は粗いナデ。非常に雑な整形。明赤褐色（一部黒色）。	A+B+C+I(多) 口径100 体100 焼成：普
5	高 坏	口径 15.4 脚台径 (11.2) 器高 10.5	口縁部：内外面とも横ナデ。坏部：内外面ともナデ。脚部：外面はナデ、内面はヘラ削り。裾部：内外面とも横ナデ。赤褐色。	B+C+D+G 坏75 脚100 裾35 焼成：良
6	高 坏	口径 15.5 底径 11.0 器高 10.6	口縁部：内外面とも横ナデ。坏部・底部：内面はヘラナデの後横ナデ。脚部外面～裾部内外面：横ナデ。裾部内面上位：ヘラナデの後横ナデ。脚部：内面はヘラ削り。赤褐色。	B+C+D+G 坏50 脚100 裾90 焼成：良
7	高 坏	口径 16.6 底径 10.4 器高 10.2	口縁部：内外面とも横ナデ。坏部：内外面ともナデ。脚部：外面はナデ、内面はヘラ削りの後ナデか。裾部：内外面とも横ナデ。赤褐色。	B+C+D+G 坏35 脚95 裾65 焼成：良
8	高 坏	口径 (19.0) 現存高 6.1	坏部：内外面ともハケ目の後ナデか。褐色。	B+I+J 坏20 焼成：普
9	高 坏	脚台径 17.8 現存高 8.6	脚部：外面はナデ、内面はヘラ削りの後ナデか。底部：内面はナデ。裾部：内外面とも横ナデ。赤褐色。	B+C+D+G 脚100 焼成：良
10	高 坏	脚台径 (11.6) 現存高 12.2	柱状部内面に輪積痕を残す。器面は荒れている。坏底部：外面はヘラ削りか、内面はナデか。柱状部：外面はヘラ磨き、内面は指頭による押え。裾部：内外面とも横ナデ。赤色。	B+C+D+H(細密) 脚裾10 柱100 坏底85 焼成：良
11	石製 紡錘車	上径 2.5 下径 4.8 厚さ 2.0 孔径 0.6	上面、下面とも滑らかに仕上げられる。側面には縦方向の暗文状の削り痕を残す。側面下端には面取りによる平坦面をもつ。軸穴は片側からの穿孔か。黄緑色。重量58.1g。	滑石製



第12号古墳跡土層註記

E-E'

- 1 耕作土
- 2 暗褐色土 ローム粒若干、カーボン少。
- 3 黒褐色土 ローム粒微量、カーボン少。
- 4 暗褐色土 ローム粒・カーボン少。
- 5 暗黄褐色土 ロームブロック非常に多。

- 6 暗黄褐色土 ロームブロック非常に多。
- 7 暗黄褐色土 ロームブロック多。

F-F'

- 2 黒色土 ローム粒・ロームブロック少。
- 3 黒褐色土 1層に比して茶色が強い。
- 4 黒褐色土 ローム粒若干。
- 5 暗黄褐色 ロームを主体とする層。

第229図 第12号古墳跡

第12号古墳跡 (第229図)

第12号古墳跡は、L28cグリッドに位置する。中近世土壌や攪乱のほか、現道下や調査範囲外に続く部分等調査できた範囲は小さなものであった。しかし、本古墳跡周辺は、代正寺遺跡の中では遺構の疎らな箇所であり、その規模に比して他遺構との重複は少ないといえる。

中心からN-62°-Eの方向に、陸橋状部分が検出され、その東西部分の周溝と合わせ4分の1周程度が、さらに南側でも僅かではあるが周溝が確認され、全体の規模・形態を掴むことができた。

墳丘部分は既に失われており、確認面もゴボウ畑の耕作によって、全面を帯状に攪乱されていた。周溝のみの検出であり、主体部の規模・形態については不明である。周溝を含めた推定直径は3360cmを測り、第13号古墳跡を円墳と仮定した推定値4160cmに次ぐ平面規模をもつ。

各土層断面・エレベーション(第229図)での幅・深さは、A-A' 南側：幅480cm・深さ160cm・北側：幅368cm・深さ64cm、B-B'：幅256cm・深さ48cm、C-C'：幅348cm・深さ80cm、D-D'：幅224cm・深さ48cm、E-E'：幅448cm・地上面からの深さ216cm・確認面からの深さ160cm、F-F'：幅368cm・深さ64cmを測る。検出範囲内において、南側部分は周溝が非常に深くまで掘り込まれており、混入と推定される多数の土器片が出土したが、図化し得るものはなかった。また、周溝北部分については、出土遺物も少なく図化し得るものはなかった。

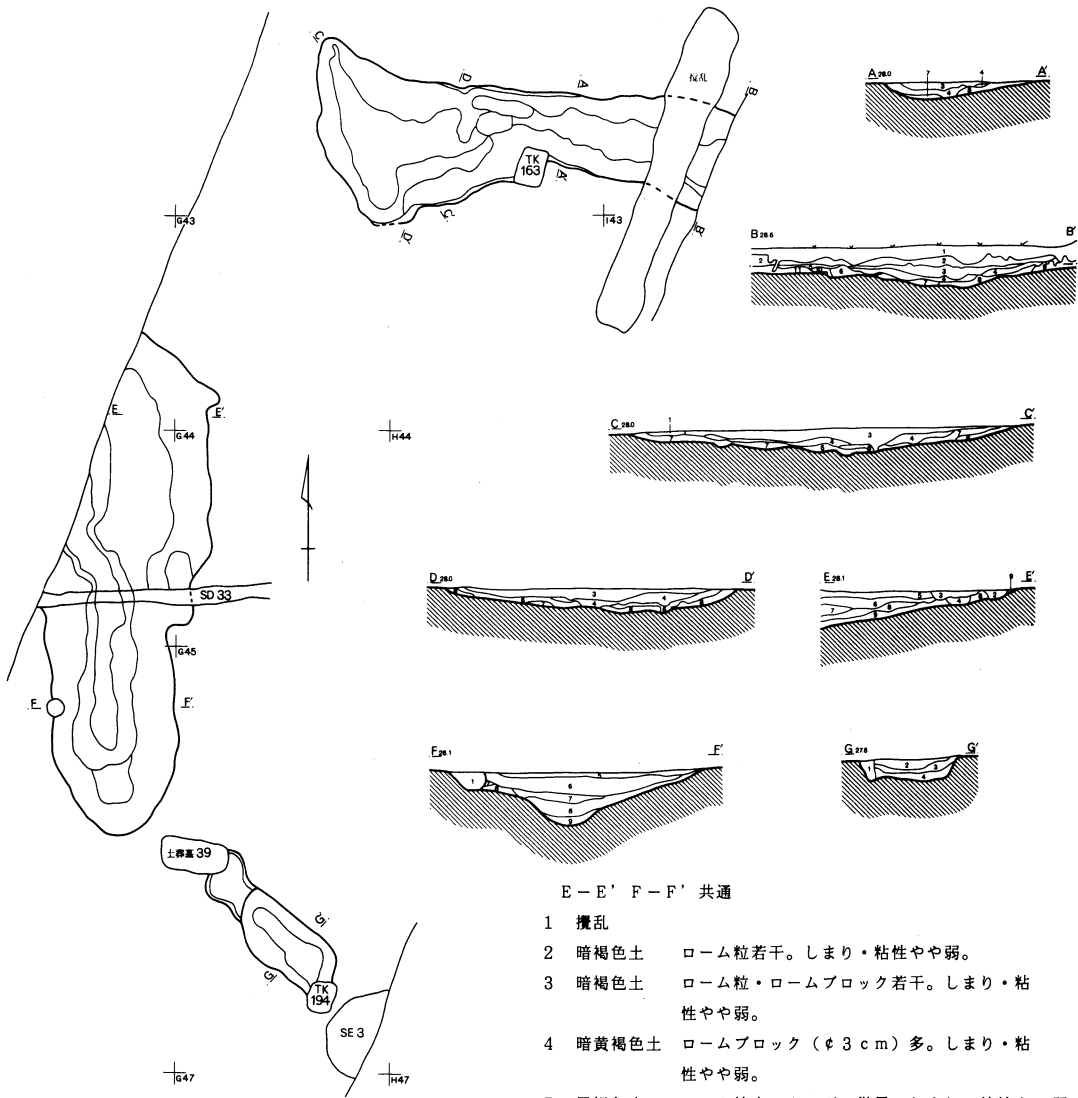
第13号古墳跡 (第230図)

第13号古墳跡は、G42cグリッドに位置する。遺構の遺存度はきわめて悪く、周溝が3箇所不明瞭な形態で検出されたのみである。墳丘部分は既に失われているため、周溝のみの検出であり、主体部の規模・形態については不明である。遺構の検出状況が明確ではなく、調査の過程においては円墳を想定した。しかしその場合、陸橋状に掘り残されている部分の形態については、あるいは撥形状に開いて前方部となるようにも想定できる。遺存状況と調査部分の小ささもあり、判別することはできなかった。可能性の一つとして、挙げておくのとどめたい。各地点における、計測値を掲げておく。A-A'：幅305cm・深さ32cm、B-B'：幅416cm・深さ56cm、C-C'：幅832cm・深さ56cm、D-D'：幅592cm・深さ48cm、E-E'：深さ80cm、F-F'：幅496cm・深さ112cmを測る。西側部分では、立ち上がりは緩やかではあるものの、他の部分に比して掘り込みは深い。円墳を仮定した場合、周溝を含めた推定直径は4160cm、周溝の内側での推定直径は3010cm程が得られる。46グリッド付近の、本古墳跡周溝の以南では、中近世の土壌・土葬墓・ピット等々が密集しているのに対し、周溝内側ではこれらの遺構がきわめて少ない。このことから、南側に土壌・土葬墓・ピット等々が造られていくある過程までは、墳丘ないし墳丘の名残が残されていたと推定したい。

検出された遺物は少なく、主に西側の溝からの出土であった。図化し得た遺物は1点のみである。

第13号古墳跡出土遺物 (第230図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	須恵器 長頸壺	現存高	6.4	内外面に自然釉。ロクロナデ。暗赤褐色。	A+B+E+J 焼成：普



第13号古墳跡土層註記

A-A' B-B' C-C' D-D' 共通

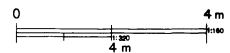
- 1 表土 耕作土。
- 2 暗灰褐色土 ローム粒・焼土粒若干。しまり弱。
- 3 黒色土 黒色が強い、ローム粒少、粒子は粗い。
- 4 黒褐色土 上層より色調かなり明るい、ローム粒多。
- 5 黒褐色土 第3層に類似。茶色が強い。
- 6 暗茶褐色土 暗色のローム粒多。
- 7 黒褐色土 第4層に類似。ロームブロック含有。
- 8 黒褐色土 ロームブロック多。
- 9 暗茶褐色土 第6層に類似。流出土か。しまり強。
- 10 暗茶褐色土 第6層に類似。ローム少。しまり強。
- 11 暗茶褐色土 第9層に類似。黒色土混入。

E-E' F-F' 共通

- 1 攪乱
- 2 暗褐色土 ローム粒若干。しまり・粘性やや弱。
- 3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック若干。しまり・粘性やや弱。
- 4 暗黄褐色土 ロームブロック(φ3cm)多。しまり・粘性やや弱。
- 5 黒褐色土 ローム粒少、カーボン微量。しまり・粘性やや弱。
- 6 黒褐色土 ローム粒・カーボン微量。しまり・粘性やや弱。
- 7 黒褐色土 ローム粒微量、カーボン少。しまり・粘性やや弱。
- 8 暗褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり・粘性弱。
- 9 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ3cm)若干。カーボン少。しまり・粘性やや弱。

G-G'

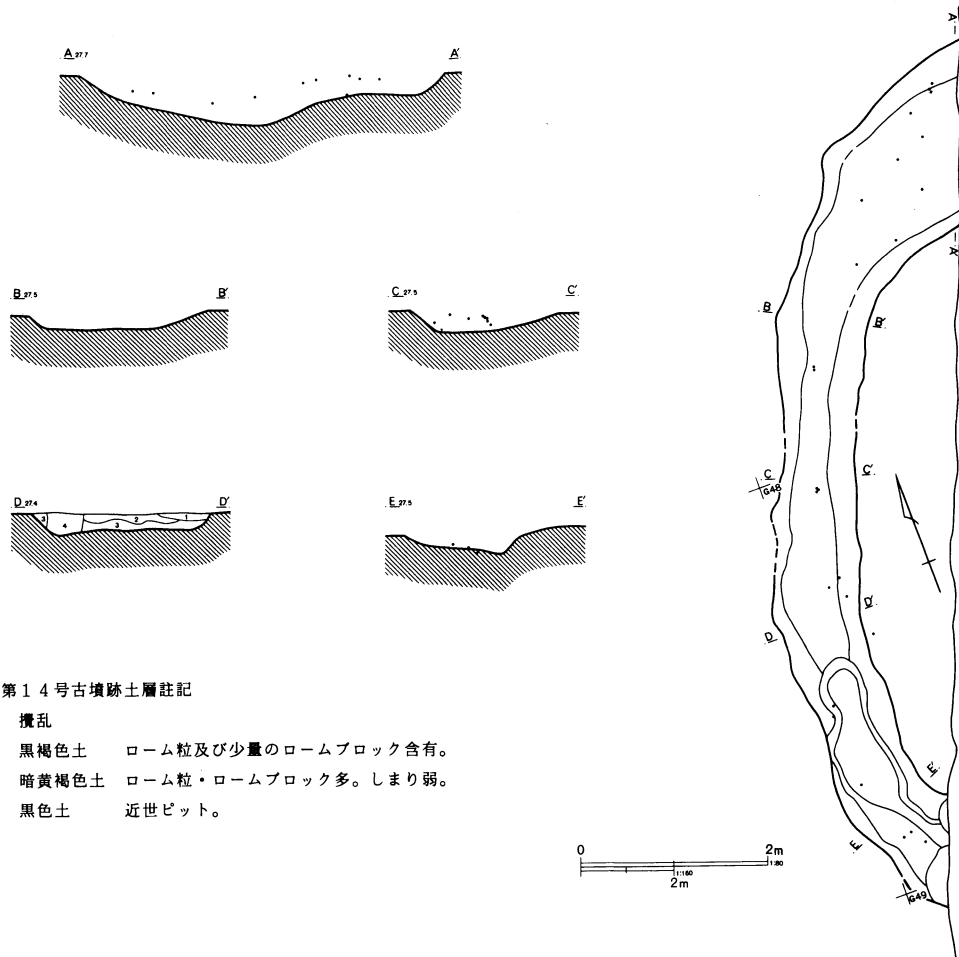
- 1 暗褐色土 ローム粒若干。しまり強。
- 2 黒褐色土 黒色が強い。E-E' F-F' の第5層。
- 3 黒褐色土 茶が強い。E-E' F-F' の第6層。
- 4 暗黄褐色土 E-E' F-F' の第8層。ローム粒・ロームブロック多。



第230図 第13号古墳跡、出土遺物

第14号古墳跡（第231図）

第14号古墳跡は、G47eグリッドに位置する。煩雑化するため図化はしなかった（第231図）が、周溝内・周溝内側（墳丘側）共に、多数のピットや土塊・溝跡などに切られており、遺存状態は非常に悪い。全体の4分の1弱の検出である。第13号古墳跡の周溝との重複については、形態・規模が確定できないため不明である。墳丘部分は既に失われており、主体部の規模・形態等についても不明である。形状が整っておらずプランの想定に無理があるが、周溝を含めた推定直径は2830cm程となる。これは、南に近在する第15号古墳跡（2120cm）・第16号古墳跡（1520cm）を上回る規模を示す。各土層断面・エレベーション（第231図）での幅・深さは、A-A'：幅384cm・深さ54cm、B-B'：幅192cm・深さ16cm、C-C'：幅160cm・深さ20cm、D-D'：幅160cm・深さ16cm、E-E'：幅168cm・深さ24cmを測る。周溝の底部付近が遺存していたのみであるため、溝幅・深さ共に計測値は小さいものとなっている。ピットや土塊の集中区は、本古墳跡内にまで及んでおり、第13号古墳跡より早い段階で墳丘が失われたと推定される。遺物はごく小数が出土したのみであり、図化し得るものはなかった。



第231図 第14号古墳跡

第15号古墳跡（第232～234図）

第15号古墳跡は、D52hグリッドに位置する。本古墳跡の北半部で、第11号方形周溝墓の南東溝・南西溝・北西溝の3溝を切り、南半部では第82号・第83号住居跡等を切っている。そして、中央よりやや北寄りを第36号溝跡が東西に、南西部分を第37号・第38号溝跡が切っている。南東部分の一部は、調査範囲外に続いている。周溝内側にも幾つかのピットが確認されているが、本古墳跡を切っている遺構と推定される。

重複する遺構は多いが、周溝についてはほぼ全域が検出されており、規模・形態は比較的良好に保たれているといえる。なお、本遺構北側部分では、周溝を切って須恵器の甕・蓋・坏からなる9世紀前半の蔵骨器（第271図）が検出されている。底部の一部を打ち欠いたか、もしくは欠損した甕の底部に坏を入れ、骨を納めた後、蓋をした状態で立位に置かれていた。但し、周溝の覆土を切っていることもあり、遺構としてプランを確認することはできなかった。

中心からN-74°-Wの方向に、陸橋状部分が検出された。周溝のみの検出であり、墳丘部分は既になく、主体部の規模・形態については不明である。周溝を含めた直径は2120cmを測り、周溝内では1580cmを測る。非常に整った円形を呈している。

ちなみに、今回の調査で検出された古墳跡の、周溝を含めた直径と陸橋状部分が検出されたものに関しては、その方位を列挙して置くこととする。なお、第1号古墳跡については、形態・規模が不明であるため、計測値を省略する。

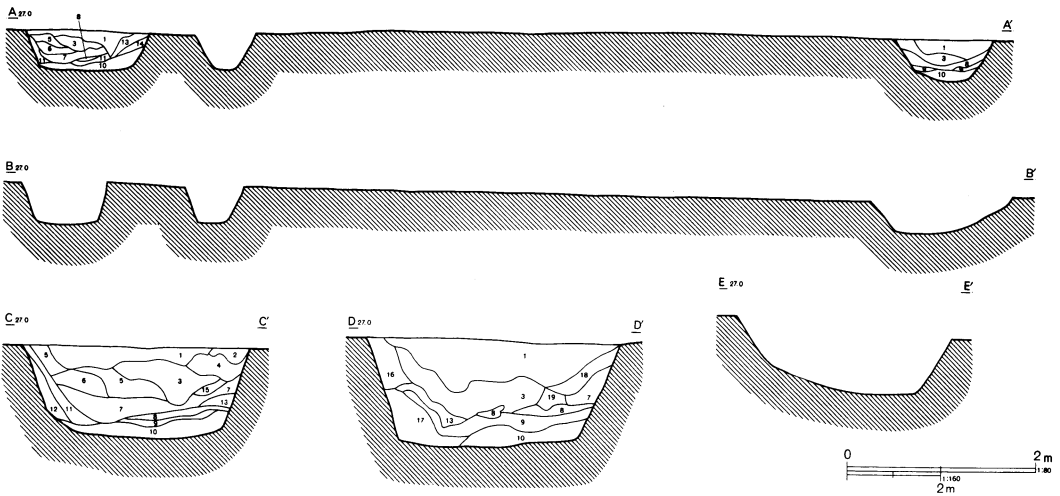
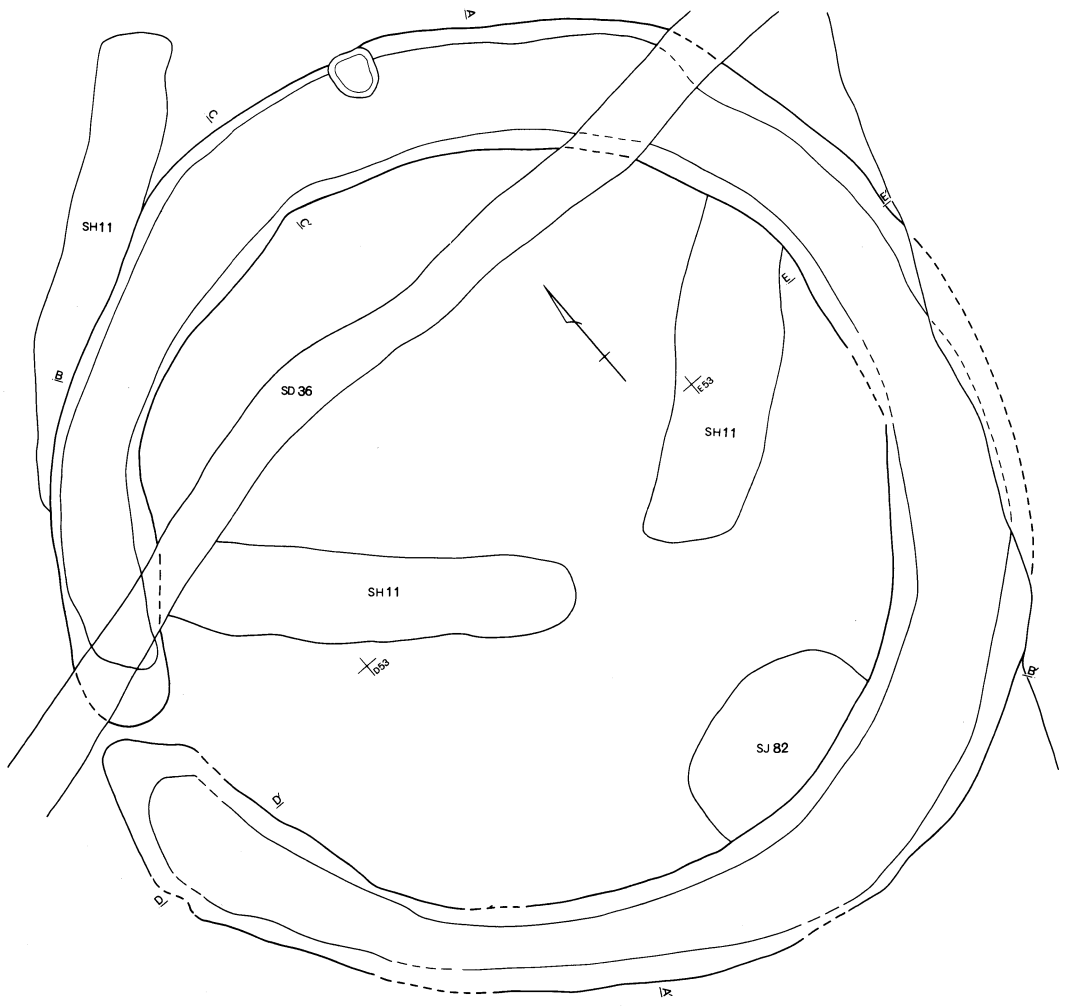
第2号古墳跡：2060cm、第3号古墳跡：推定2100cm・N-72°-E、第4号古墳跡：1950cm・N-62°-E、第5号古墳跡：推定1650cm、第6号古墳跡：推定2530cm、第7号古墳跡：1810cm、第8号古墳跡：推定1450cm、第9号古墳跡：推定1760cm、第10号古墳跡：1400cm・N-153°-W、第11号古墳跡：推定1630cm、第12号古墳跡：推定3360cm・N-23°-W、第13号古墳跡：円墳と仮定して推定4160cm、第14号古墳跡：推定2830cm、第16号古墳跡：1520cmとなる。数値のみから述べるならば、第6号・第12号～第14号古墳跡を下回るが、平均的規模よりやや大きめの古墳跡といえる。

各土層断面・エレベーション（第232図）における幅・深さは、A-A' 北側：幅260cm、深さ84cm・南側：幅204cm・深さ86cm、B-B' 西側：幅180cm・深さ90cm・東側：幅288cm・深さ64cm、C-C'：幅283cm・深さ96cm、D-D'：幅266cm・深さ113cm、E-E'：幅226cm・深さ64cmを測る。

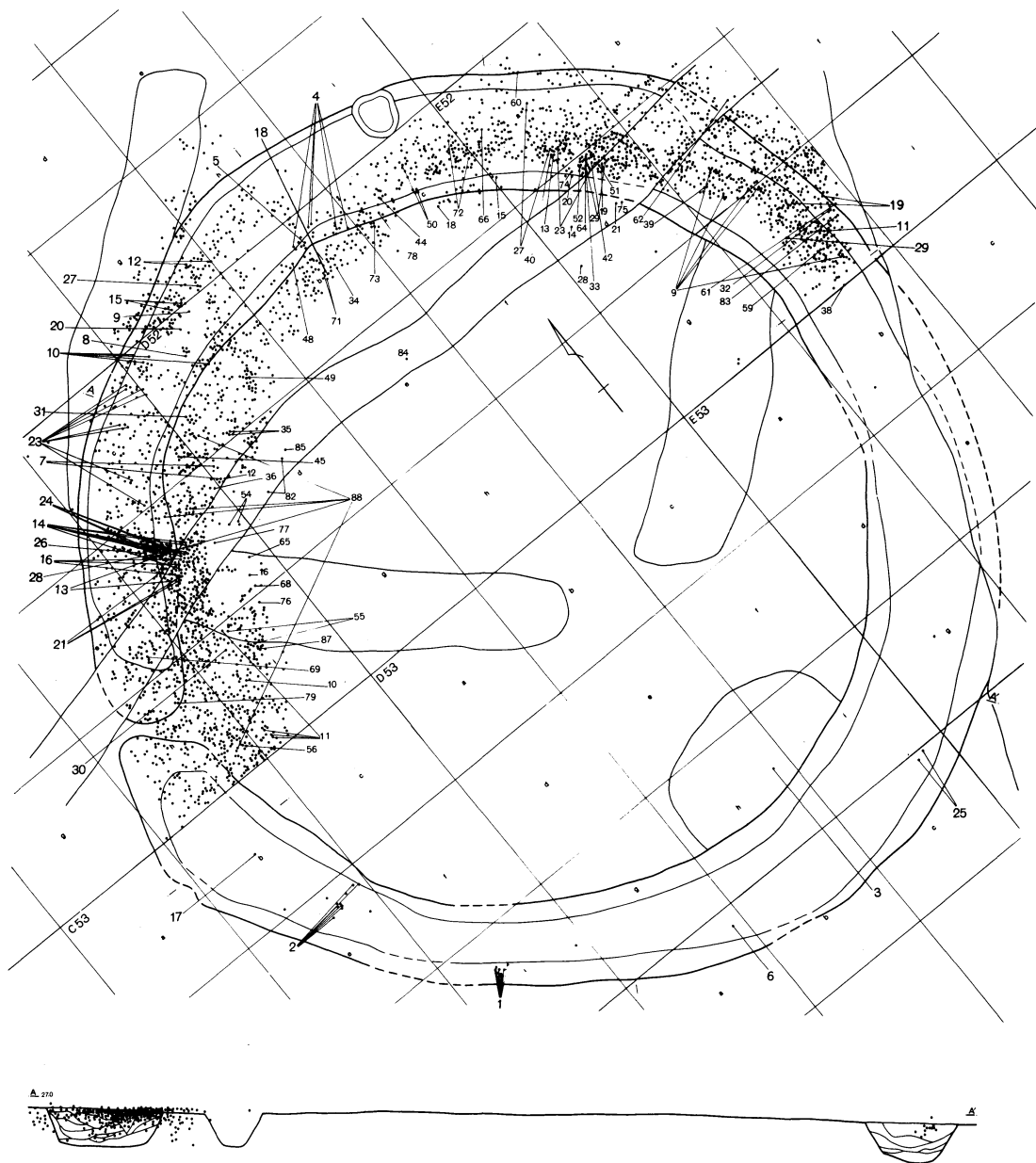
周溝底面は、平坦もしくは船底形を呈し、溝幅も均一的である。溝底からの立ち上がりは、総じて外周側が急で、内側（墳丘側）が緩やかであるといえよう。土層断面において、内側からの埋没が漸次的なものであると観察された。陸橋状部分に接する周溝端部は、底面がやや四角張る。陸橋状部分は、他の古墳跡に比して非常に狭く、確認面において25～100cm程の幅をもつのみである。

次に、遺物の出土状況を概観してみたい（第233図）。非常に煩雑なものとなってしまったが、少し説明しておく。

なお、第15号古墳跡は第36号溝跡に切られているが、この溝跡内からも円筒埴輪だけでなく、形象埴輪の破片が少なからず出土をしている。両遺構の位置関係や、遺物の出土状況・接合関係等から観て、第15号古墳跡に伴う遺物であると判断をして、本項で扱うこととした。



第232图 第15号古墳跡(1)



第233图 第15号古墳跡(2)

図内に設けられている方形区画は、調査時に設定されたグリッドを示し、3m四方の小グリッドまでを図化した。各々の大グリッド名を左上（北西側）に入れ、小方形の中央に小グリッド名を表した。

ドットに振られている番号には、文字の大きさが2種類ある。大きめの文字は、第235図・236図に掲載した遺物番号に対応し、小さめの文字については、第241図～249図に掲げた円筒埴輪の番号に対応をする。

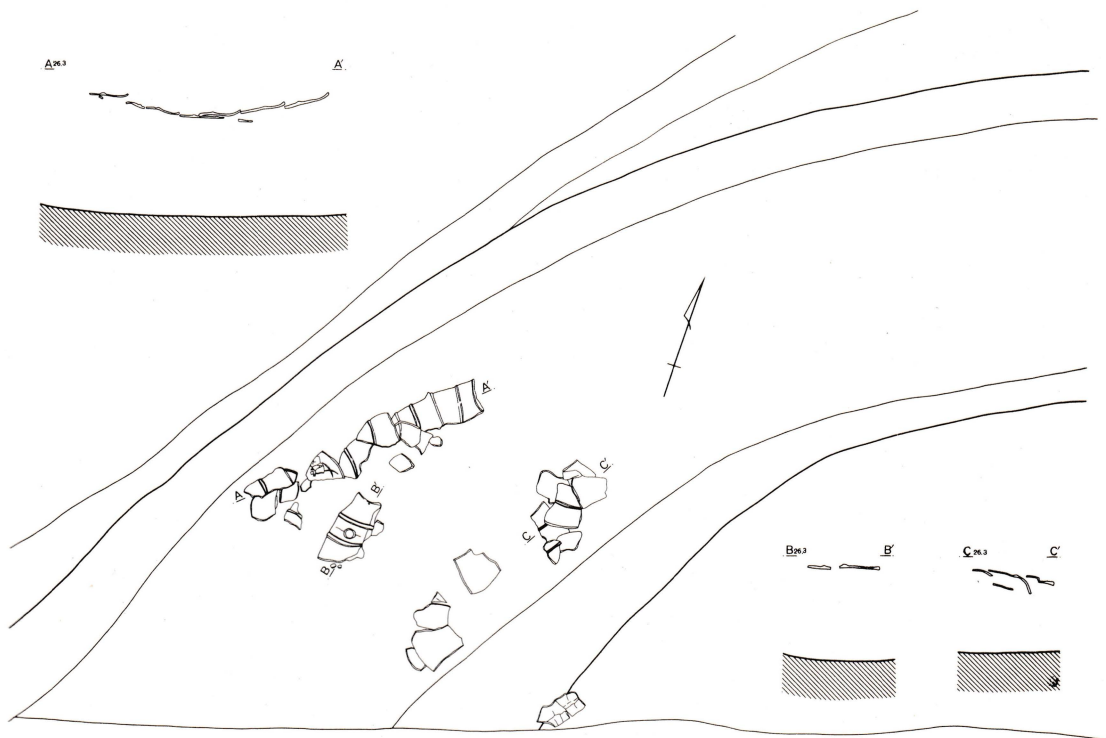
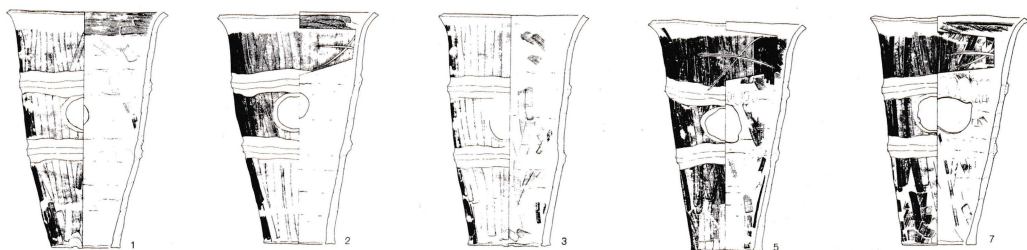
第233図を一見して、まず挙げられる事柄は、遺物の出土が、古墳跡の北側で圧倒的に多いという点である。これは、調査時における精度・遺構の遺存状況の違い、という要因も考えられるが、やはり北側部分が大半を占める、という事実は動かせない事実といえよう。埴輪以外の遺物についても、北側半分で顕著であるのは、第11号方形周溝墓（第188図～第192図）を主として、他遺構との重複に原因が想定できる。

円筒埴輪についても、殆どが北側部分からの出土である。この範囲内において、ほぼ万遍なく分布しているが、とりわけC52fグリッド内とE52a～eグリッドにかけての範囲に、多く検出されているといえよう。

特に前者の場合、復元率の高い円筒埴輪が集中して出土をしているが、周溝底面から40cm～50cmとかなり浮いた状態での検出である。そして、陸橋状部分にきわめて近く、見逃せない位置関係にあるとも推定される。つまり、陸橋状部分を渡っての追葬時において、樹立されていた円筒埴輪を撤去・投棄した痕跡との考え方もできる。無論、あくまでも可能性として掲げるにとどまるものである。円筒埴輪や、形象埴輪に関する詳しい検討については、結語の項で行われるので、そちらの方を参照願いたい。

第15号古墳跡出土遺物（第235・236図）

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	坏	口径 器高	17.3 4.5	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデの後ナデ。黒褐色。	B+J(細密) 口径30 体65 焼成：良
2	坏	口径 底径 器高	(15:2) 12.8 3.6	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面はヘラ削り、内面はナデ。黒褐色（一部褐色）。	B+J(細密) 口径70 体75 焼成：やや良
3	坏	口径 現存高	14.5 3.5	口縁部：内外面とも横ナデ。坏部：外面はヘラ削り、内面はナデ。赤褐色。	B+J(細密) 口径10 焼成：やや良
4	坏	口径 底径 高台径 器高 高台高	13.6 5.7 6.3 4.6 0.7	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸きり離し後、付高台明灰色。	B+I(多)+J 坏90 底100 焼成：不良

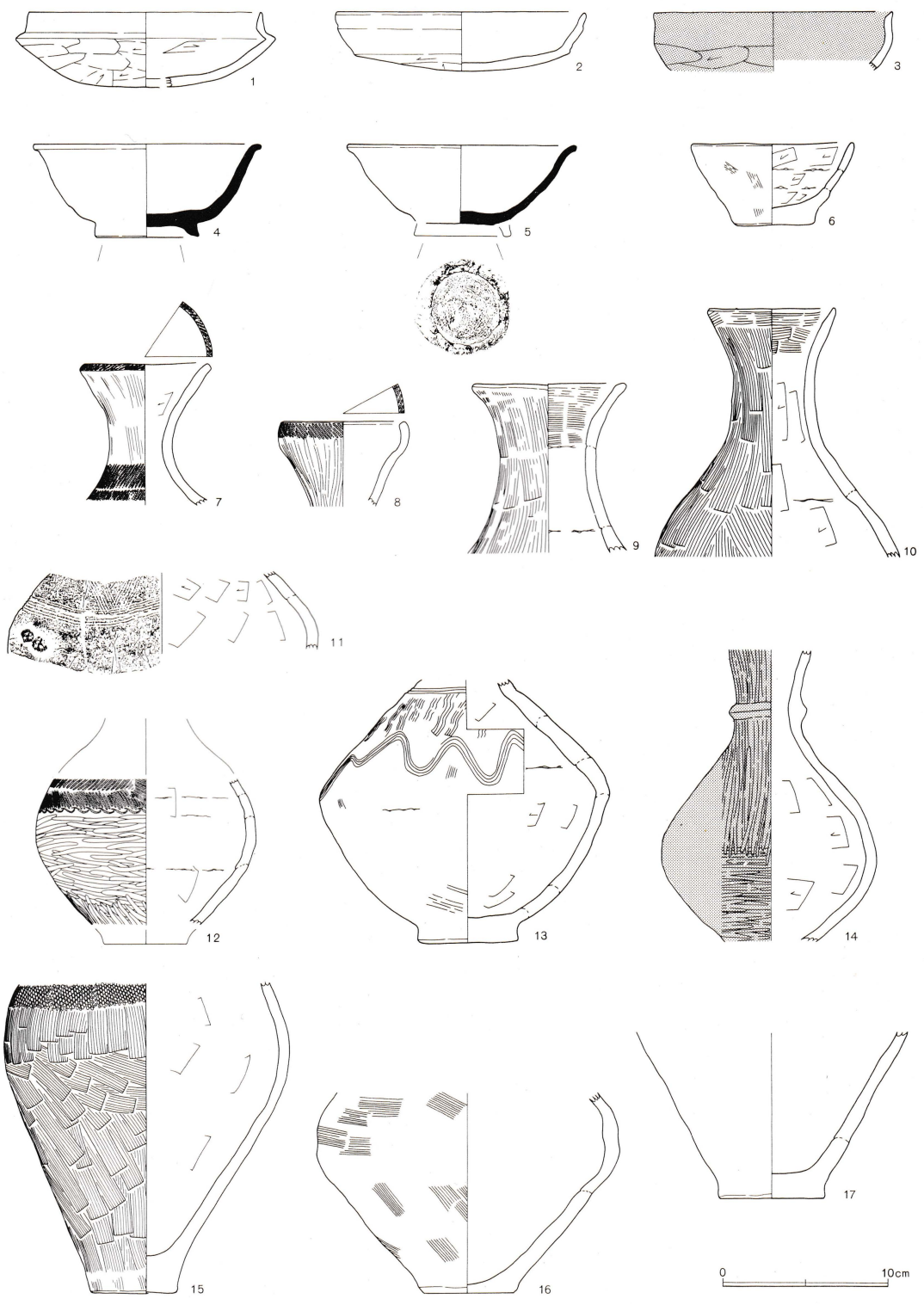


第15号古墳跡土層註記

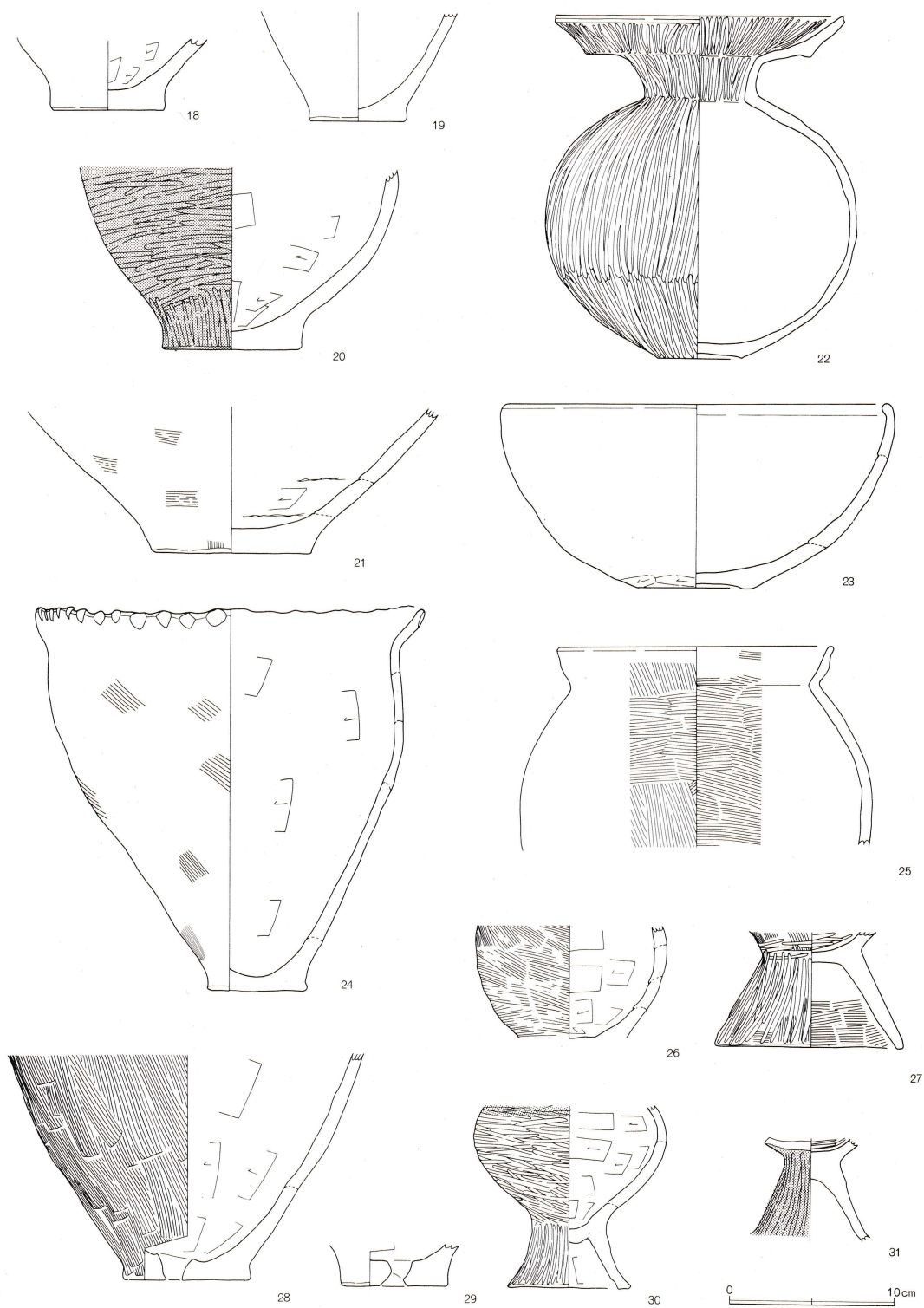
- | | | | |
|----------|--------------------------|----------|--------------------------------|
| 1 黒色土 | 焼土粒・カーボン・ローム粒微量。しまり・粘性弱。 | 12 暗茶褐色土 | ロームブロック若干。しまり・粘性弱。 |
| 2 黒色土 | カーボン・焼土粒微量。しまり・粘性弱。 | 13 暗茶褐色土 | ローム粒多。しまり・粘性弱。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒少。しまり・粘性弱。 | 14 暗黄褐色土 | 8層に類似。 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒・カーボン少。しまり・粘性弱。 | 15 黒褐色土 | ローム粒微量。しまり・粘性弱。 |
| 5 暗褐色土 | 細かいローム粒多。しまり・粘性弱。 | 16 黒褐色土 | ローム粒・カーボン少。しまり・粘性弱。 |
| 6 暗褐色土 | ローム粒少。しまり・粘性弱。 | 17 明茶褐色土 | ローム粒多。しまり・粘性弱。 |
| 7 暗茶褐色土 | ローム粒多。しまり・粘性弱。 | 18 暗褐色土 | 2層に類似。ローム粒・焼土粒・カーボン少。しまり・粘性弱。 |
| 8 暗黄褐色土 | ローム粒多、カーボン少。しまり・粘性弱。 | 19 暗褐色土 | 6層に類似。ローム粒少、焼土粒・カーボン少。しまり・粘性弱。 |
| 9 暗茶褐色土 | ローム粒多、カーボン・焼土粒少。しまり・粘性弱。 | | |
| 10 暗黄褐色土 | ローム粒多。しまり・粘性やや強。 | | |
| 11 暗茶褐色土 | ロームブロック多。しまり・粘性弱。 | | |

0 1m

第234図 第15号古墳跡(3)土



第235图 第15号古墳跡出土遺物(1)



第236图 第15号古墳跡出土遺物(2)

5	坏	口径 13.6 現存高 4.7	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸きり離し後、付高台灰色。	B+J+礫(多) 口径90 坏100 焼成：普
6	碗	口径 (9.5) 底径 4.4 器高 4.9	器面は荒れている。体部：外面は粗いハケ目の後ナデか、内面はヘラナデ。底部：外面はナデ、内面はヘラナデ。橙色(一部黒色)。	A+B+E+I+J 坏50 底100 焼成：やや不良
7	壺	口径 (7.6) 現存高 5.2	頸部は「ハ」字状に開き、口縁部でやや内彎する。口唇部～口縁部外面にLR単節縄文を施す。頸部：外面はヘラ磨き、内面はナデ。口縁部：内面は横ナデ。赤橙色。	A+F+H+J 口径40 焼成：やや良
8	壺	口径 7.5 現存高 8.4	LR縄文を口縁部に1段、肩部に2段。口縁部：内外面ともに粗い横ナデ。頸部：外面はハケ目の後粗いナデ、内面上位はヘラナデとナデ、下位はナデ。赤橙色。	B+I(多)+J 口径80 焼成：やや良
9	壺	口径 9.1 現存高 10.3	器面は摩滅している。口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデ。頸部：外面はハケ目の後ナデか、内面はナデ。赤橙色。	A+B+I+J 頸80 焼成：普
10	壺	口径 7.6 現存高 15.0	口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデ。頸部～肩部：外面はハケ目、内面はヘラナデ。褐色。	A+B+I+J 口径95 肩50 焼成：普
11	壺	現存高 4.8	7本単位の櫛状工具による横線文の後、上位に山形文。ボタン状の円形浮文を2箇残存。器面は摩滅している。外面はヘラ磨きか、内面はヘラナデ。褐色。	A+B+I(多)+J 焼成：普
12	壺	胴径 (13.4) 現存高 8.8	胴部は球形を呈す。肩部にLR、RLの羽状縄文、その下位にS字状結節文。胴部：外面はヘラ磨き、内面はヘラナデとナデ。赤褐色(一部黒色)。	A+B+F+H+J 胴10 焼成：良
13	壺	胴径 17.7 底径 6.0 現存高 15.9	内外面とも摩滅著しい。施文は3本単位の櫛状工具によるもの。頸部に横線文、胴部上半に波状文、その間に波状文を垂下すると思われる。胴部：外面はハケ目の後ヘラ磨き、内面はヘラナデ。底部：外面はナデ、内面はヘラナデ。外面赤彩か、褐色。	A+B+C+I(多) 胴50 底100 焼成：やや不良
14	壺	胴径 (13.2) 現存高 17.7	器面はやや荒れている。頸部に突帯一巡させる。外面は丁寧なヘラ磨き、胴部内面はヘラナデ、頸部内面はナデ。赤色。	B+D+E+J 頸100 胴50 焼成：良
15	壺	胴径 (17.3) 底径 (5.0) 現存高 18.7	肩部にLR縄文。胴部：外面はハケ目、内面はヘラナデ。底部：内外面ともナデか。赤褐色(一部黒色)。	A+B+I+J 底5 胴50 焼成：普
16	壺	胴径 (18.3) 底径 (5.5) 現存高 12.2	胴部：外面はハケ目の後ナデ、内面はナデか。底部：内外面ともナデ。褐色。	A+B+I(多)+J 焼成：普
17	壺	底径 6.4 現存高 10.1	器面は摩滅著しい。胴：外面は不明、内面はナデか、底部：外面はナデ、内面はナデか。褐色(一部黒色)。	A+B+I+J 底100 焼成：やや不良
18	壺	底径 6.6 現存高 4.3	胴部～底部：外はナデ、内はヘラナデ。黄橙色(一部黒色)。	A+B+I+J 底100 焼成：普

19	壺	底径 現存高	5.8 6.1	器面は摩滅している。胴部～底部：内外面ともナデか。橙色。	A+B+H(多)+J 底60 焼成：普
20	壺	胴径 底径 現存高	(21.8) 8.4 (10.9)	胴部：外面は粗いヘラ磨き、内面はヘラナデとナデ。底部：外面はヘラ削りの後粗いナデ、内面はヘラナデ。赤褐色。	A+B+H+J 底100 焼成：普
21	壺	底径 現存高	9.4 8.9	胴部：外面はハケ目の後ナデ、内面はヘラナデとナデ。底部：内外面ともナデ。橙色。	A+B+I+J 底70 焼成：普
22	壺	口径 胴径 底径 器高	17.2 18.7 5.0 20.6	口縁～底部：外面は丁寧なヘラ磨き、口縁～頸部：内面は丁寧なヘラ磨き、胴部～底部：内面はナデか。橙色（一部黒色）。	A+B+H+J ほぼ完形 焼成：良
23	鉢	口径 底径 器高	(13.2) 4.8 11.1	口縁部：内外面とも粗い横ナデ、体部：外面は下端部のみヘラ削り、他はナデ、内面はナデ。底部：外面に木葉痕。赤褐色（黒色）。	A+B+I+J 底90 口50 焼成：やや良
24	甕	口径 胴径 底径 器高	(23.2) (21.4) (5.6) 22.9	口縁部：横ナデの後指頭による交互押捺。胴部：外面はハケ目の後ナデ、内面はヘラナデとナデ。底部：内外面ともナデか。褐色（一部黒色）。	B+H+J 口15 胴40 底5 焼成：普
25	甕	口径 胴径 現存高	(16.4) (21.3) 12.2	口縁部：内外面とも、ハケ目の後横ナデ。胴部：内外面ともハケ目。明赤褐色（黒褐色）。	A+B+H+J 口55 胴上半40 焼成：良
26	甕	胴径 現存高	11.6 7.3	外面はハケ目、内面はヘラナデ。黄褐色。	A+B+H+J 焼成：普
27	台付甕	脚台径 現存高	11.0 7.0	底部：外面はナデ、内面はヘラナデ。脚台部：外面はハケ目の後ヘラ磨き、内面上半はナデ、下半はハケ目。黄褐色。	A+D+E+J 脚80 焼成：やや良
28	甕	底径 現存高	7.5 13.6	焼成前穿孔（1孔）。胴部下半：外面はハケ目、内面はヘラナデ。底部：外面はナデ、内面はヘラナデ。黒褐色。	B+G+J 底20 焼成：やや良
29	甕	底径 現存高	6.1 2.4	焼成前穿孔である。内外面ともナデ、黄褐色。	A+B+H+J 底100 焼成：普
30	台付甕	胴径 脚台径 現存高	(11.6) 7.3 11.0	胴部：外面はヘラ磨き、内面はヘラナデ。脚台部：外面はヘラ磨き、内面はヘラナデとナデ。橙色（一部黒色）。	B+G+J 胴35 脚80 焼成：やや良
31	高坏	現存高	(6.0)	坏部：内面はヘラ磨き、脚台部：外面はヘラ磨き、内面はナデ。橙色（赤彩）。	A+B+I(多) 脚90 焼成：普

第15号古墳跡出土形象埴輪（第237～240図）

女子人物埴輪髻（第237図1）

女子人物埴輪の髻部破片である。北西側周溝部分、D52 a グリッドから出土した。胎土は砂粒を多く含み、焼成良好で堅緻に仕上がる。色調は褐色を呈する。残存長9.2cm、残存幅10.1cm、残存高4.1cmを測る。

撥形を呈するいわゆる島田髻で、後半分を欠損する。中央のくびれた部分には粘土帯を貼り付けて元結を表現し、元結の両端部は上方へ反り上がる。裏面には径7cmほどの円形の剝離痕がみられることから頭頂部を塞がずに髻をのせて顔面部との接合部に粘土紐を貼り付けて補強していることが分かる。また残存する額部分には赤彩がわずかに残る。

製作は扁平な粘土板によって形作られ、表面に2cmあたり14～16本のハケメ調整を施した後に周縁部に布ナデを施す。元結は丁寧にナデ付けられ、端部を押圧によって平坦に作る。

女子人物埴輪髻（第237図2）

髻の元結部分の破片である。1と同形態の髻と推定される。墳丘北側部分で重複するS D36の覆土中（D52 d グリッド）から出土した。胎土は砂粒をやや多く含み、焼成良好である。色調は橙褐色を呈する。残存長3.6cmを測る。

元結端部の破片で、上方へ大きく反り上がり、断面形は2.3cm×1.4cmの矩形を呈する。残存する表面には丁寧にナデを施し、端面は押圧によって平坦に作られる。

女子人物埴輪髻（第237図3）

1・2と同形態の島田髻の元結端部の破片と考えられる。西側周溝ブリッジ部付近、C52 f グリッドから出土した。胎土は砂粒の混入が少なく、焼成は良好である。色調は橙褐色を呈する。残存長2.5cmを測る。

上方へ大きく反り上がり、端部は押圧により幅を広げ平坦面を作り、2cm×1.5cmの楕円形を呈する。残存部には布ナデを丁寧に施している。

男子人物埴輪美豆良（第237図4）

両端部を欠損しているため明確ではないが、男子人物埴輪の下げ美豆良の破片と推定される。表土内出土。胎土は径5mmの小石を含み、特徴的に白色針状物質を多く含む。焼成は普通で、色調は暗灰褐色を呈する。残存長6.6cmを測る。

わずかに湾曲する棒状の下げ美豆良の破片で、断面1.8cm×1.4cmの楕円形を呈する。残存部全体に赤彩を施す。粘土棒を作業台上で回転して成形した後に、ナデ調整を行っている。

人物埴輪鼻（第237図5）

人物埴輪の顔面から剝離した鼻である。墳丘北側部分、D52 e グリッドから出土した。胎土は砂粒をやや多く含み、白色粒子の混入が目立つ。焼成良好で、色調は褐色を呈する。残存長4.6cm、幅

2.7cm、高さ1.3cmを測る。

鼻はやや鷲鼻気味で、鼻梁及び鼻頂から両頬に延びる左右の稜は明瞭である。粘土塊から作られ顔面に貼付されたもので、微かに赤彩が残る。

人物埴輪頸部（第237図6）

小片のため明確ではないが、丸玉の頸飾りをした人物埴輪の頸部破片と考えられる。S D36覆土中（D52 d グリッド）から出土した。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈する。

頸部に突帯を巡らし、その上に粘土粒を互いに接するように二重に貼り付け丸玉を表現する。丸玉は6個しか残存していないが、他に剝離痕が2個ある。首の部分には赤彩を施し、内面は指ナデを丁寧に施す。

人物埴輪腕部（第237図7）

人物埴輪の腕の破片である。掌を欠損しているため左腕か右腕かは明確ではないが、整形、形状等の観察から右腕と考えられる。西側周溝ブリッジ部付近、C52 f グリッドから出土した。胎土は砂粒を多く含み、赤色粒子を混入する。焼成良好で、色調は褐色を呈する。残存長15.5cm、付け根部径4.6cmを測る。

肩部からわずかに湾曲して延び、手首から先を折損している。製作は木芯中空技法によって形作られ、腕の付け根は肩部に差し込むためにシボリ込み、中心孔は塞がれている。また手首の折断面にも中心孔は貫通していないことから別作りの掌部を付けたことが分かる。調整はタテハケメを施した後、内側には指ナデを加える。上腕部を中心に赤彩を斑点状に塗布する。

人物埴輪腕部（第237図8）

左腕の付け根部分の破片である。S D36覆土中（D52 d グリッド）から出土した。胎土は砂粒をやや多く含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈する。残存長4.6cm、径約4cmを測る。

腕は緩やかに湾曲するものと考えられる。製作は木芯中空技法によって作られ、腕の付け根の屈曲部分では穴の断面が大きく歪んでいる。このことから肩部へ差し込むために腕の付け根をシボリ込み、接合部分に粘土を足して補強していることが分かる。外面調整はタテハケメ調整を施した後ナデを加える。

人物埴輪胴部（第237図9）

人物埴輪の胴部、左腋部分の破片である。S D36覆土中（D52 d グリッド）から出土した。胎土は径1mm～2mmの砂粒を多量に含み、焼成良好。色調は暗褐色を呈する。残存長8.2cmを測る。

外面調整はタテハケメ（18～19本／2cm）の後に、腕の付け根付近に指ナデを加えている。内面調整は指ナデを施す。形状からみて腕を前方に上げていたものと考えられる。

人物埴輪腕部（第237図10）

小型の人物埴輪の腕の破片である。墳丘北側部分、D52 d グリッドから出土した。胎土は白色粒子を多く含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈する。残存長5.1cm、径1.4cmを測る。

粘土塊を棒状に伸ばして成形された粘土紐を2本貼り合わせて形作り、簡略化された腕を表現する。左手と考えられるもので、指先を丸く表し、拇指と四指を区別している。調整は残存部全体に布ナデを丁寧に施す。なお、腕の上面には赤彩痕が残る。

人物埴輪足部（第237図11）

小型の人物埴輪の足の破片である。北西側周溝部分、D52 a グリッドから出土した。胎土は白色、黒色粒子を多く含み、焼成は良好である。色調は淡褐色を呈する。踵からつま先までの長さ6.5cm、幅2.8cm、厚さ1.3cm、残存高6.1cmを測る。

足は大きく偏平に作られ、足首より上を欠損する。足の内側を直線的に削っていることから左足と考えられる。つま先はやや角張り、足の指の表現がないため素足なのか沓をはいているのか判断としない。小型であることから胡坐像あるいは椅座像を表した人物埴輪と考えられる。製作は粘土塊から形作られ、残存部全体に布ナデを丁寧に施す。

人物埴輪足部（第237図12）

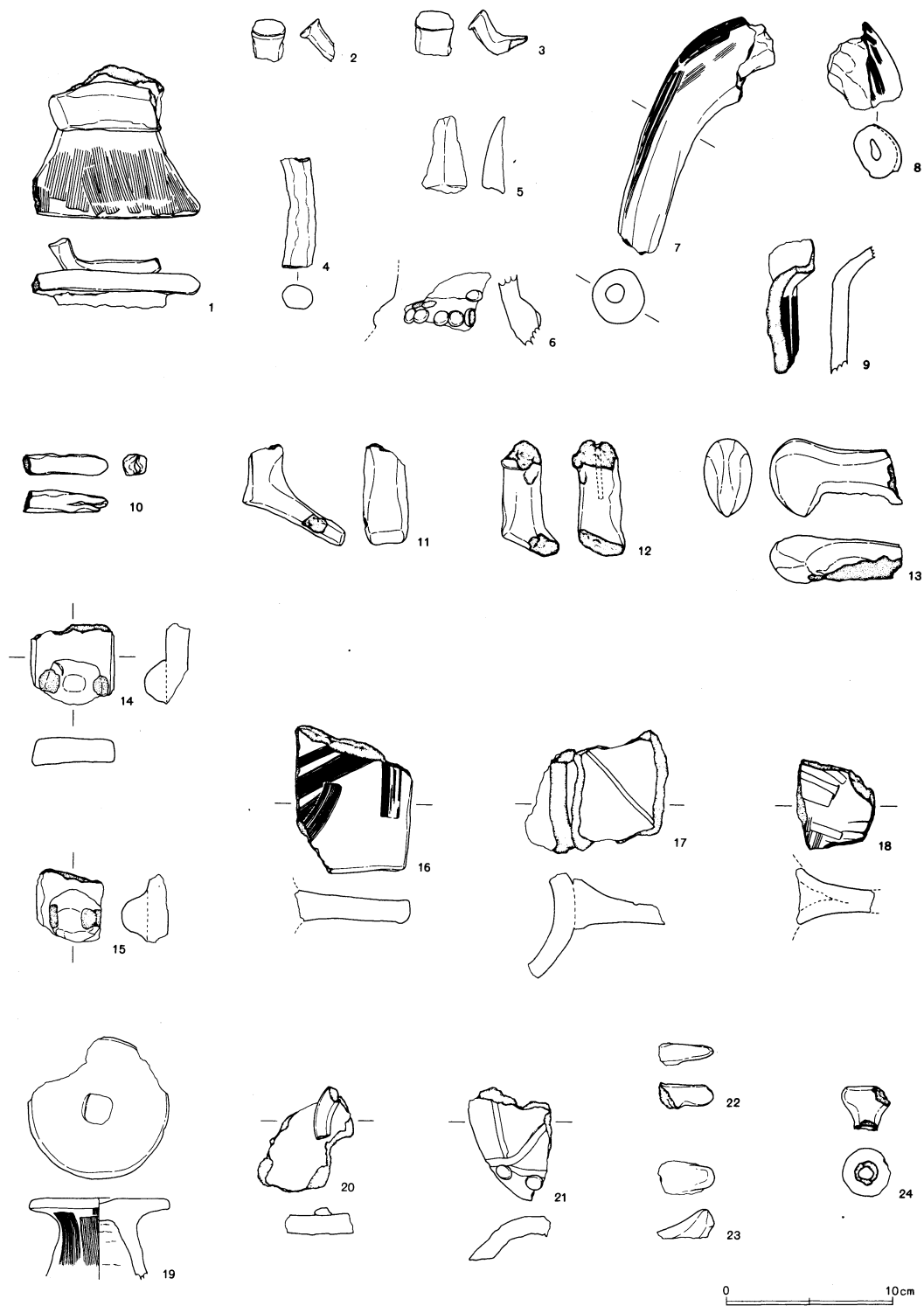
小型の人物埴輪の足の破片である。北西側周溝部分、D52 a グリッドから出土した。胎土は微砂粒を多量に含み、微量の白色針状物質を混入する。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。足のつま先部分を欠損し、残存高7cm、幅3.2cmを測る。

足は偏平に作られ、踵から4cm上に小さな突帯を巡らす。これは袴等の着衣を表現するものと考えられる。全体の作りから右足と推定される。11と同様、胡坐像ないし椅座像を表した人物埴輪と考えられる。製作は粘土塊を径3cmほどの棒に巻き付けて成形し、残存部全体に布ナデを丁寧に施している。11と比較すると成形、整形、足首の断面形など若干異なっており、同一個体とは決めかねるが、足の傾き、足の甲の幅などはほとんど同じである。

人物埴輪付属大刀（第237図13）

人物埴輪の着用した大刀の破片である。把頭を丸く大きく表現していることから頭椎大刀を表したのと考えられる。北東側周溝部分、D52 c グリッドから出土した。胎土は径1mm～2mmの砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈する。把頭径4.7cm×2.9cm、残存長7.9cm。

把頭は断面倒卵形を呈し、金銅装頭椎大刀に通有の腕貫緒の孔や、畦目、把頭の切羽などの表現がないことから、木装呑口式の把を表現したものとも推定される。製作は粘土塊より形作られ、佩表は丁寧に布ナデを施している。また佩裏には剝離痕が残り、人物埴輪の腰に佩用されていたことが分かる。



第237图 第15号古墳跡出土形象埴輪(1)

大刀形埴輪勾金（第237図14）

玉纏大刀を表した大刀形埴輪の勾金（護拳部）の破片である。S D36覆土中（D52 e グリッド）から出土した。胎土は径1mm～2mmの砂粒を多量に含み、焼成良好で、色調は淡褐色を呈する。残存長4.8cm、幅5cmを測る。

勾金は厚さ1.4cmの粘土板によって形作られ、内外面とも布ナデを施し両側面には赤彩を施す。三輪玉は長軸に対して直角位置に装着され1個のみが残る。玉の両耳が剝離しているため大きさは不明であるが、残存長4.2cm、幅2.7cm、高さ1.3cmを測る。粘土板で作られた勾金に大小3個の粘土粒を貼り付けて形作る。また図示した三輪玉の中央左上には貼り付け時の爪跡が残る。

大刀形埴輪勾金（第237図15）

14と同じ大刀形埴輪の勾金の破片である。S D36覆土中（D52 d グリッド）から出土した。胎土は径1mm～2mmの砂粒を多量に含む。焼成良好で、色調は淡褐色を呈する。残存長4.3cm、幅4.1cmを測る。

勾金は厚さ1.2cmの粘土板によって形作られ、内外面とも布ナデを施す。両側面には赤彩を塗布している。三輪玉は長軸に対して直角位置に装着され1個のみが残る。玉の両耳が剝離しているため大きさは不明であるが、残存長3.2cm、幅3.2cm、高さ1.6cmを測る。14と胎土、焼成、色調、調整等の特徴が類似していることから同一個体の可能性が強い。

器財形埴輪（第237図16）

周縁部に布ナデを施した板状の破片である。剝離痕の観察から円筒部に貼付されていたことが分かる。靱形埴輪あるいは盾形埴輪の鱗部と推定される。北側周溝部分、D52 b グリッドから出土した。胎土は径1mm～2mmの砂粒を多く含み、焼成良好である。色調は橙色を呈する。残存長8.9cm、幅7.1cm、厚さ1.3cm～1.8cmを測る。

粘土板によって形作られ、基部には補強のため粘土紐の貼り付けがみられる。外面調整は幅1.2cmほどのハケ工具を用いて目の細かいハケメを施す。

器財形埴輪（第237図17）

靱あるいは盾形埴輪の鱗部と考えられる。墳丘北側部分、D52 e グリッドから出土した。胎土は径2mm～3mmの砂粒を多量に含み、赤色粒子を少量含む。焼成はやや不良で、色調は淡褐色を基調とし内面は灰褐色を呈する。残存長8cm、鱗部最大厚3cmを測る。

復元径約11cmの円筒部に板状の鱗部を貼付し、鱗部表面は布ナデを施した後、沈線による三角文を描いていたものと考えられる。鱗部裏面にはハケメ調整を残す。

器財形埴輪（第237図18）

靱あるいは盾形埴輪の円筒部から剝離した鱗の基部と考えられる。西側周溝ブリッジ部付近、C 52 h グリッドから出土した。胎土は径1mm～2mmの長石粒子を多く含み、焼成は普通である。色調

は灰褐色を呈し、やや須恵質に近い。残存長5.4cm、鱗部最大厚3.4cmを測る。

製作は粘土板から形作られ、基部は粘土紐の貼り付けによって補強する。外面調整はヘラ状工具によるナデつけ、周縁部には布ナデを施す。17と同一個体と考えられる。

器種不明形象埴輪（第237図19）

上面が平坦な円形を呈する台形の形象埴輪である。表土内から出土した。胎土は砂粒を多量に含み、とりわけ白色粒子の混入が目立つ。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。残存高4.8cm、台部径8.5cmを測る。

上面はほぼ水平で、中央に径1.8cm、深さ0.3cmの凹みがみられる。この凹みはヘラでかき取った後、弱くナデを施している。円筒部は粘土紐の積み上げによって形作られ、外面調整は幅1.7cmのハケ工具を用いてタテハケメを施す。内面調整はナデを丁寧に施す。

器種不明形象埴輪（第237図20）

板状の破片で外面には粘土紐を貼り付け斑点状に赤彩を施す。北側周溝部分、D52 b グリッドから出土した。胎土は径2mm～3mmの砂粒を含み、焼成は良好である。色調は橙褐色を呈する。

器種不明形象埴輪（第237図21）

器種については不明であるが、緩やかな丸みをもつ破片で、外面に3本の沈線を描き、沈線部分を中心に赤彩を塗布している。また径1cmほどの2個の粘土粒を貼り付けている。表土内から出土した。胎土は砂粒を多く含み、白色粒子の混入が目立つ。焼成は良好で、褐色を呈する。

鋳留を表現したと考えられる粘土粒の貼付や赤彩の状態から武人埴輪の衝角付冑の一部とも想定されるが明確ではない。

器種不明形象埴輪（第237図22）

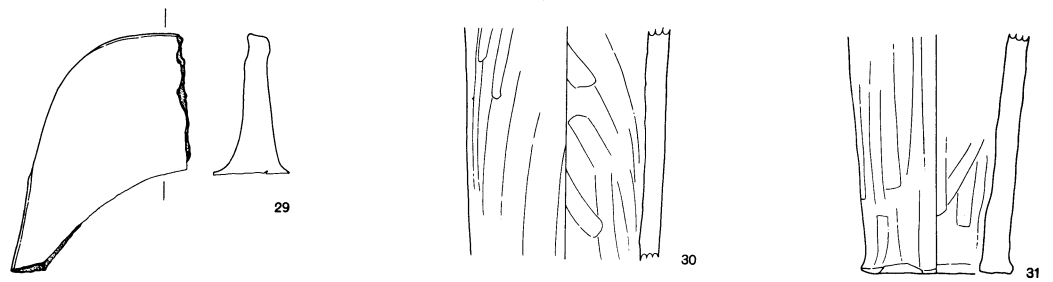
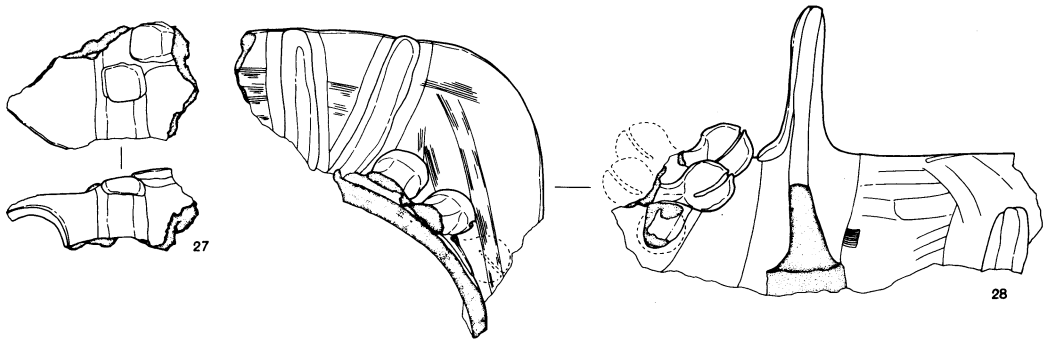
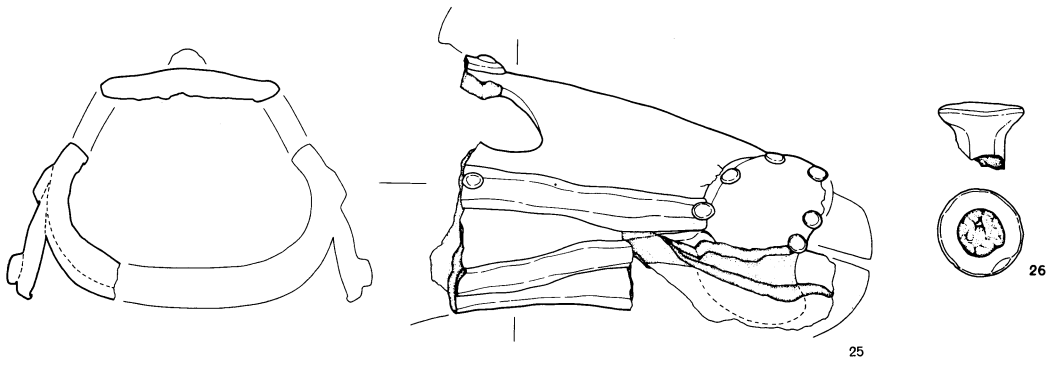
先端部が丸くやや扁平となる小破片であることからミトン形をした掌の拇指とも考えられるが明確ではない。北西側周溝部分、D52 a グリッドから出土した。胎土は砂粒をやや多く含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈する。製作は粘土塊から作られ、ナデ調整を施す。

器種不明形象埴輪（第237図23）

丸く突出する小破片で、表面に赤彩を施す。北側周溝部分、D52 b グリッドから出土した。胎土は砂粒をやや多く含み、焼成は良好である。色調は暗赤褐色を呈する。製作は粘土塊から作られ、残存部にナデ調整を施す。

器種不明形象埴輪（第237図24）

馬形埴輪立髪の円柱状の飾りに類似しているが、やや小型で中空の作りであるため器種は明確ではない。北側周溝部分、D51 h グリッドから出土した。胎土は白色粒子を多く含み、焼成は良好で



0 10cm

第238图 第15号古墳跡出土形象埴輪(2)

ある。色調は暗赤褐色を呈する。残存長2.6cm、下部径1.4cm、上部径1.8cmを測る。

上面はほぼ平らで、残存部には丁寧にナデを施し、中空に作られる。

馬形埴輪頭部（第238図25）

楕円形鏡板付轡を装着した飾り馬の頭部破片である。表土内から出土した。胎土は径1mm～2mmの長石、石英等の砂粒を多く含む。焼成は極めて良好で堅緻に仕上がりに、色調は暗褐色を呈する。残存長21.3cm、残存高13.5cmを測る。

目から轡にかけてを残す。鼻先部分を欠失しているが、刀子によって切り込まれた口の一部分が残る。目は径4.5cm×3.3cmほどの円孔を外側から逆時計回りに開け、上縁部を僅かに盛り上げて表現している。轡は楕円形鏡板付轡を装着した状態を表し、鏡板の下半部を欠損する。鏡板は復元長約8.9cm、横幅5.9cmを測り、一枚の粘土板で成形されている。鏡板の周縁部には径1cmほどの円形の粘土粒を6個貼り付けて鋳留を表し、その周縁には赤彩を施す。引手は幅1.6cmほどの粘土紐を貼り付けて表現しており、手綱との区分は明確ではない。面繫は幅2cmほどの粘土紐を貼り付けて革帯を表し、やや雑に赤彩を施している。また目の下側には径1.1cm×0.8cmの粘土粒を貼り付けて辻金具様の飾り鋳が表現されている。額には幅1.9cmの粘土紐と円形の粘土粒による飾り鋳がみられ、赤彩が施される。

頭部の製作は、幅1.7cm～2cmの粘土紐の巻き上げによって円筒形の本体を形作り、頬の下半に粘土板を貼り付けて平坦面を作り出す。そしてこの平坦面に鏡板、手綱、面繫等を貼り付ける。外面は布ナデを丁寧に施す。内面は指ナデを施し、粘土紐の巻き上げ痕をナデ消す。

馬形埴輪立髪（第238図26）

馬形埴輪の立髪の先端に付けられていた円柱状の立ち飾りである。北側周溝部分、D52 b グリッドから出土した。胎土は長石、石英等の砂粒（径1mm～2mm）を多量に含む。焼成は極めて良好で堅緻に仕上がりに、色調は橙褐色を呈する。残存高3.5cm、下部径2.5cm、上部径4.5cmを測る。

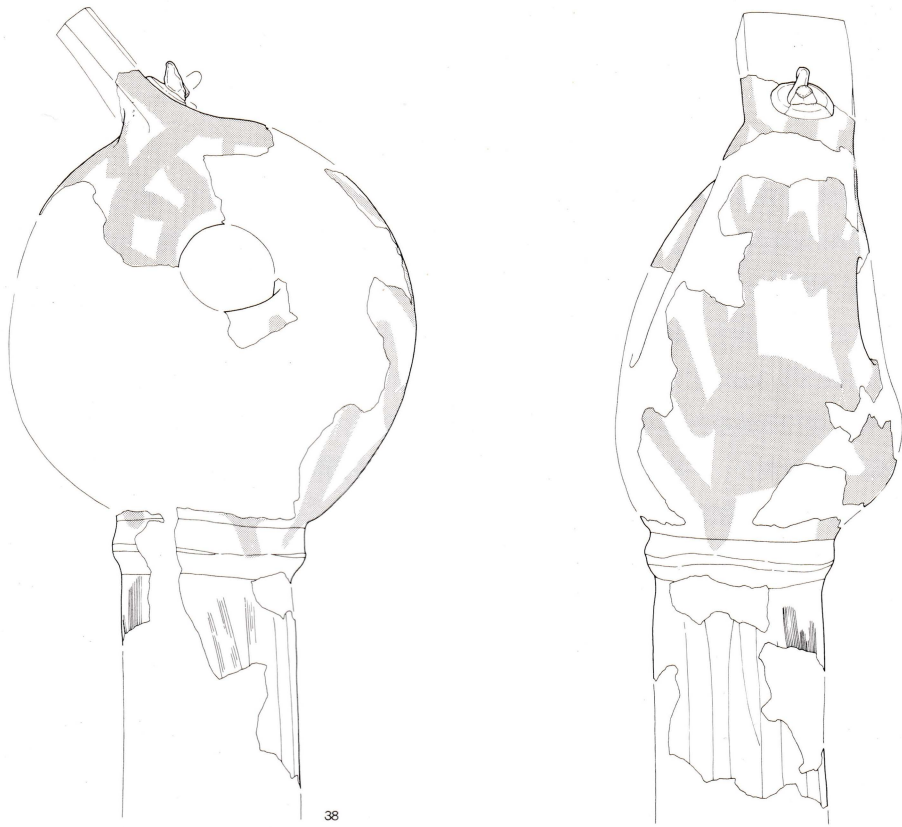
上面は中央にやや膨らみをもつ円形に作られている。製作は粘土塊より形作られ、外面に縦位の布ナデを丁寧に施す。

馬形埴輪額部（第238図27）

方形辻金具を装着した飾り馬の額部破片である。表土内から出土した。胎土は多量の砂粒を含み石英粒、白色針状物質を少量混入する。焼成は良好で色調は橙色を呈する。残存長10cmを測る。

左目上部から額にかけてを残す。目は径3.3cmほどの大きさで外側から刀子によって逆時計回りに開けられている。目の上部は馬形埴輪に特徴的な膨らみがみられる。幅2.8cmの粘土紐を貼り付けて面繫の革帯を表現し、額に方形辻金具を装着する。辻金具は2.5cm×2.2cmの偏平な方形の粘土板を四方に貼り付けていたものと推定され、赤彩が部分的に残る。

製作は、粘土紐を巻き上げて頭部本体を形作り、外面は丁寧に布ナデを施す。内面調整は指ナデを行う。



第239図 第15号古墳跡出土形象埴輪③

馬形埴輪胴部（第238図28）

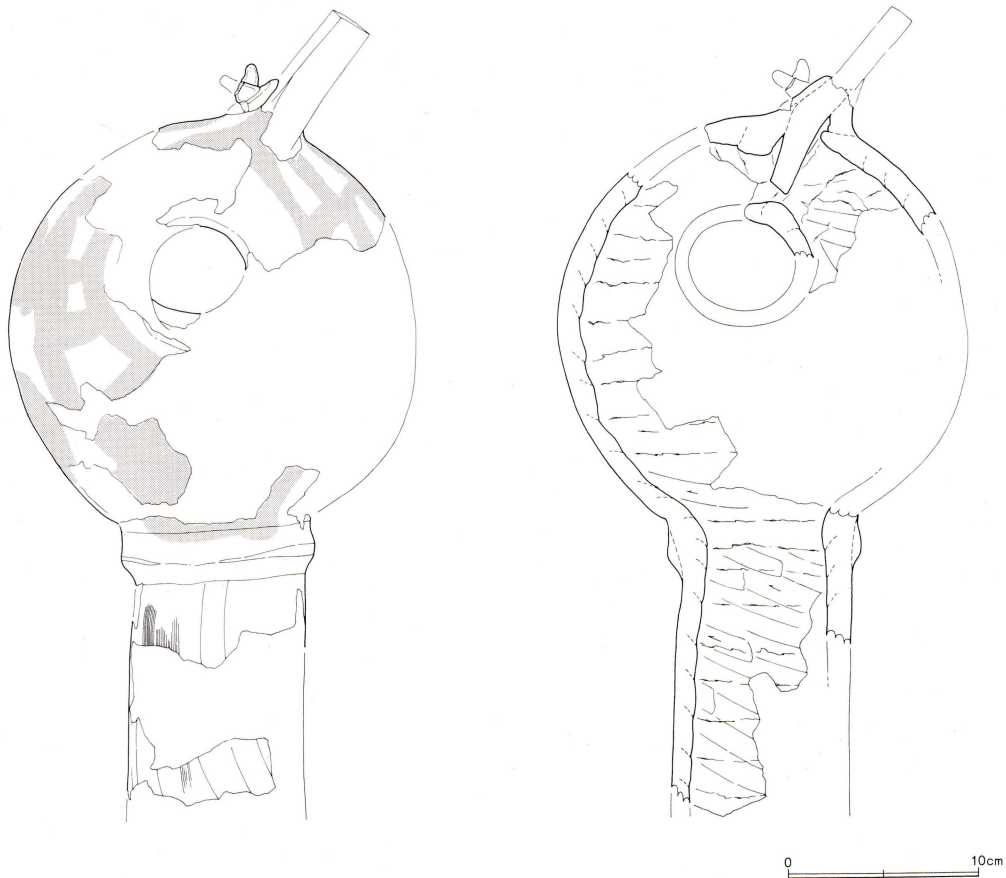
鞍を付けた飾り馬の胴部破片である。表土内から出土した。胎土は長石粒を多く含み、焼成は良好である。色調は橙色を呈する。右側半分のみを残し、残存長22.7cm、残存高15.2cmを測る。

鞍は後輪と鞍褥部分のみを残し、前輪を欠く。後輪は楕円形を呈する粘土板を馬本体に垂直に貼り付けた、いわゆる垂直鞍で高さ7.7cm、復元幅約21cmを測る。周縁部には赤彩が施される。前輪よりには鐙を垂下する鐙鞞を表した粘土紐の表現が一部残り、鞍褥部分には居木等の表現はない。前輪と後輪の間隔は13cm前後と推定される。尻繫は後輪の上端から出た2本の帯が表現される。尻繫は腰の上でX字状に交差し、交差部分の両側に鈴杏葉を垂下していたものと推定される。鈴杏葉は長さ8.5cmを測り、2個の鈴が残る。剝離痕の状態から舌形の本体に五つの鈴を付けた五鈴杏葉と考えられる。鈴は径2.8cmほどの大ききで刀子によって孔が開けられている。

胴部は粘土帯によって形作られている。外面調整は鞍褥部分は布ナデを施す。後輪は2cmあたり15～16本のハケメを施した後、周縁部に布ナデを施す。尻繫、五鈴杏葉等の周縁は丁寧に指ナデを施し貼付する。内面調整は指ナデを丁寧に施す。

馬形埴輪鞍（第238図29）

馬形埴輪の鞍の破片である。胴部から剝離しているため前輪か後輪かは不明であるが、立髪



第240図 第15号古墳跡出土形象埴輪(4)

り付けがないことから後輪の可能性が高い。表土内から出土した。胎土は径2mm～3mmの長石粒を多く含み、焼成良好である。色調は橙色を呈する。残存長9.3cm、高さ7.3cmを測る。

楕形を呈するもので約半分を残し、爪先をわずかに欠失する。覆輪の表現はみられないが、周縁部は布ナデを丁寧に施し、赤彩を塗布する。製作は粘土板によって形作られ、基部に粘土紐による補強帯を貼り付け胴部本体に貼付する。調整は残存部全体に布ナデを丁寧に施す。

馬形埴輪脚部 (第238図30)

馬形埴輪の脚部中位の破片である。西側周溝ブリッジ部付近、C52 i、D52 d グリッドから出土した。胎土は径1mm～2mmの砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は橙色を呈する。残存高12.3cm、最大径10.8cmを測る。

脚部は細長い円筒部で表現され、粘土紐の巻き上げによって成形される。残存部には突帯などはなく、基台部は特に区別されていないものと考えられる。外面調整はタテハケメ調整後、縦位の布ナデを行い、内面調整は斜め方向の指ナデを施す。

馬形埴輪脚部 (第238図31)

馬形埴輪の脚部の破片である。北側周溝部分、D52bグリッドから出土した。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は橙色を呈する。残存高12.5cm、底径8cmを測る。

脚部は細長い円筒部で表し、幅3cm～4cmの基部をつくった後に粘土紐を巻き上げて成形する。蹄の表現はなく、上部に向かって徐々に径を増している。外面調整は目の浅いタテハケメ調整を施した後、縦位の布ナデを行う。内面調整は縦位の指ナデを施している。底面には篠状圧痕が残る。

馬形埴輪鈴 (第238図32)

飾り馬の胸繫、尻繫等に付けられていた馬鈴と考えられる。北側周溝部分、D52bグリッドから出土した。胎土は径1mm～2mmの砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は橙褐色を呈する。球形に近く径4.3cm、高さ5.2cmを測り、鈴の基部は馬本体への装着のため舌状に突出する。

製作は粘土塊を丸めて形作られ、全面を布ナデした後に横方向に刀子を用いて深さ4mmほどの浅い切り込みをぐるりと入れる。鈴の基部は馬本体との装着のため粘土紐を貼り付ける。

馬形埴輪鈴 (第238図33)

飾り馬の胸繫、尻繫等に付けられていた馬鈴と思われる。SD36覆土中(D52dグリッド)から出土した。胎土は径1mm～2mmの砂粒を多く含み、赤色粒子の混入が目立つ。焼成は良好で堅緻に仕上がりに、色調は暗赤褐色を呈する。半球形に近く長径4.4cm、短径3.8cm、高さ4.4cmを測る。

製作は粘土塊を丸めて形作られ、全面を布ナデした後に横方向に刀子を用いて深さ1.5cmの切り込みを両側から入れる。

馬形埴輪鈴 (第238図34)

小型の鈴である。飾り馬の鈴杏葉あるいは胸繫等の馬鈴と推定される。北側周溝部分、D52bグリッドから出土した。胎土は白色粒子の混入が目立つ。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。ほぼ球形で長径3.3cm、短径3.1cm、高さ3.7cmを測る。

製作は粘土塊を丸めて形作られ、全面を布ナデした後に横方向に刀子を用いて深さ4mmの浅い切り込みを右上がり一気に開ける。鈴の基部は舌状につまみ出され、指頭圧痕が残る。

馬形埴輪鈴 (第238図35)

小型の鈴である。飾り馬の鈴杏葉あるいは胸繫等の馬鈴と推定される。北側周溝部分、D52bグリッドから出土した。胎土は砂粒の混入が比較的少なく、焼成は良好で色調は橙色を呈する。ほぼ球形で径3.4cm、高さ4.6cmを測る。

製作は粘土塊を丸めて形作られ、全面を布ナデした後に横方向に刀子を用いて深さ3mmの浅い切り込みを2回に分けてぐるりと入れる。鈴の基部は舌状につまみ出され指頭圧痕が残る。

馬形埴輪鈴（第238図36）

小型の鈴である。飾り馬の鈴杏葉あるいは胸繫等の馬鈴と推定される。北側周溝部分、D52 b グリッドから出土した。胎土は白色粒子の混入が目立つ。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。ほぼ球形で長径2.9cm、短径2.7cm、高さ3.4cmを測る。

製作は粘土塊を丸めて形作られ、全面を布ナデした後に横方向に刀子を用いて深さ5mmの浅い切り込みを2回に分けて入れる。鈴の基部は舌状につまみ出され、指頭圧痕が残る。

馬形埴輪鈴（第238図37）

小型であり、鈴基部の剝離痕の状態から飾り馬に装着されていた鈴杏葉の鈴と考えられる。SD 36覆土中（D52 d グリッド）から出土した。胎土は砂粒を多く含み白色粒子の混入が目立つ。焼成は普通で、色調は淡橙色を基調とし一部灰褐色を呈する。ほぼ球形で長径3.3cm、短径2.9cm、高さ4cmを測る。

製作は粘土塊を丸めて形作られ、全面を布ナデした後に横方向に刀子を用いて深さ3mmと浅い切り込みを鈴部全体に入れる。鈴の基部は粘土紐を貼付し、舌状に作られる。

靱形埴輪（第239図1・2）

赤彩によって幾何学文様の描かれた靱形埴輪である。北東側周溝部分、D52 c、E52 a グリッドから出土した。胎土は砂粒を多量に含み、長石粒の混入が目立つ。焼成は良好で、色調は橙褐色を呈する。全体の残存高38cmを測る。

靱部は全体の1/3 ほどしか残っていないため全容は明確ではないが、板状の突出部をもつ全体にふっくらとした環状の靱に復元される。径約21.5cm、背部最大幅約15cmを測る。突出部は先端を欠失し、基部に径3.4cmの円板の上に2本の触覚のような小突起を付けた飾り部が付属する。靱部の表裏両面には赤彩によって幾何学文様が描かれているが欠損部が多く細部の文様は不明である。文様構成は背部にラフに描かれた三角文を配し、それに接するように両面に二条線を巡らし、さらにその間を斜線によって充填している。靱部の製作は粘土紐の巻き上げによって中空に形作られ、上部で一旦巻き上げを止めて、板状に作られた突出部を挟みこむように接合した後に塞いで全体の形を整えている。また表面が薄く剝離している部分がみられることからふっくらとした丸みをだすために薄い粘土板を貼り付けているものと考えられる。

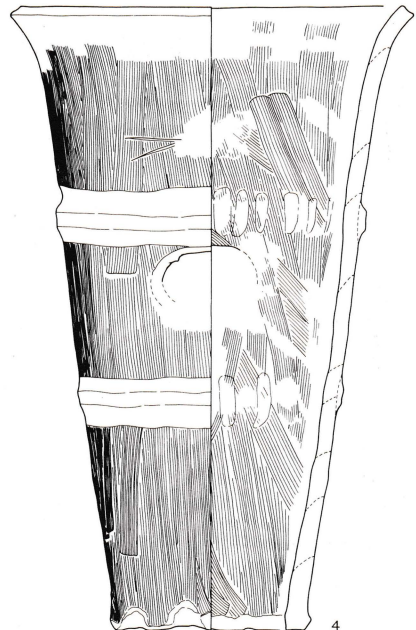
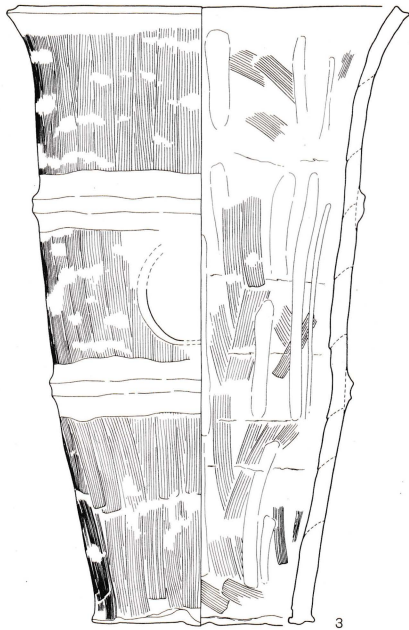
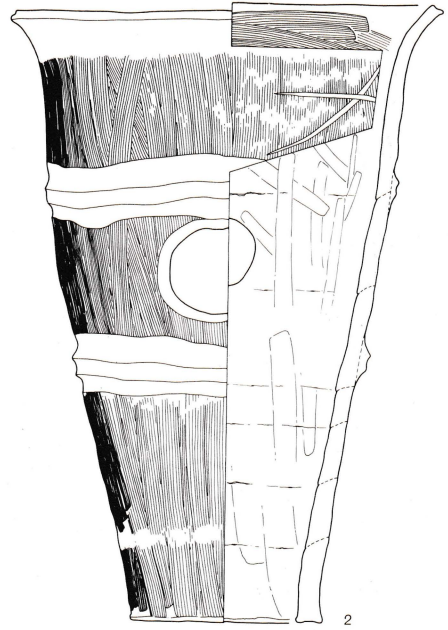
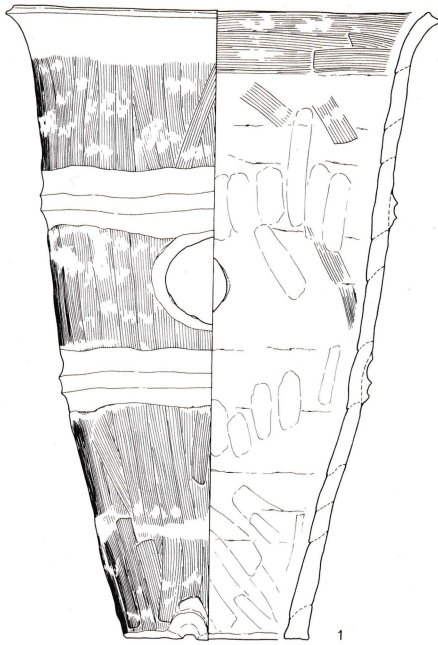
靱部と台部の境には断面三角形の突帯を巡らす。突帯は幅2.5cm～3cm、高さ5mmほどを測り、ナデ付けは全体にやや粗雑である。台部は径9cmほどの円筒形を呈し、下半部を欠損する。台部残存高16cm。台部の製作は幅1.8cmほどの粘土紐を巻き上げて形作り、外面には2cmあたり15～16本の目の細かいタテハケメ調整を施している。内面は斜め方向の指ナデを行い、粘土紐の巻き上げ痕をナデ消す。

15号古墳跡出土円筒埴輪 (第241~249図)

15号墳から出土した埴輪の中で、図示しえたものは88点で、実測可能個体は12点である。埴輪はいずれも円筒埴輪であり、2条突帯3段構成のものである。段間幅は第2・3段がほぼ等しく、第1段は他段にくらべて長い。しかし、明確な長傾化の段階のものではなく、その過渡期的段階として捉えられよう。器形は口径>底径の口縁部がやや開くものであるが、底径の縮小化は認められない。口縁部の形態はAタイプが多く、20・21はBタイプ、7・22はCタイプである。スカシ孔はすべて円形で、第2段に穿孔されている。外面調整は一次のみのタテハケで、ハケ目痕は浅い。内面はハケ・ナデが施されているが、全面に行なわれているものは少なく、多くの個体に粘土紐積上痕が認められる。他の遺構のものも同様であるが、一般的に内面調整は粗雑である。底部調整は行なわれていない。突帯の断面形態はB・Cタイプが多く(バリエーション的存在も含む)、Aタイプは36・54・55・65の4点、Dタイプは35の1点である。いずれも突出度は弱い。突帯外面のナデつけは弱く、全面が密着していない。また多くの個体で突帯部内面に指頭痕が認められている。このことから粗雑な貼付手法が窺われる。ハケ調整や突帯貼付の手法は15号墳出土埴輪の特徴である。色調は赤褐~橙色を呈し、胎土には白・黒・赤色粒子、砂粒および白色針状物質が含まれている。焼成は良好である。また第3段外面には×字状のヘラ記号が認められる。

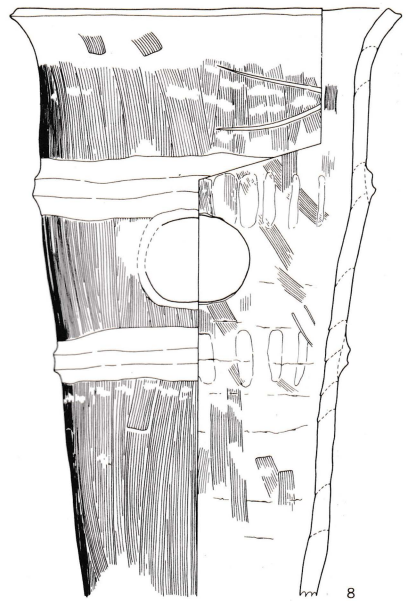
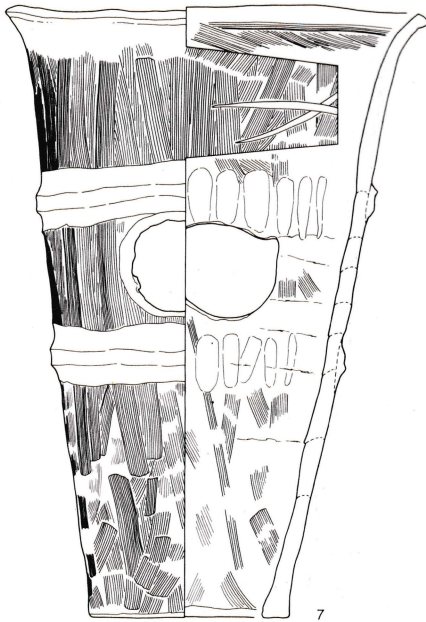
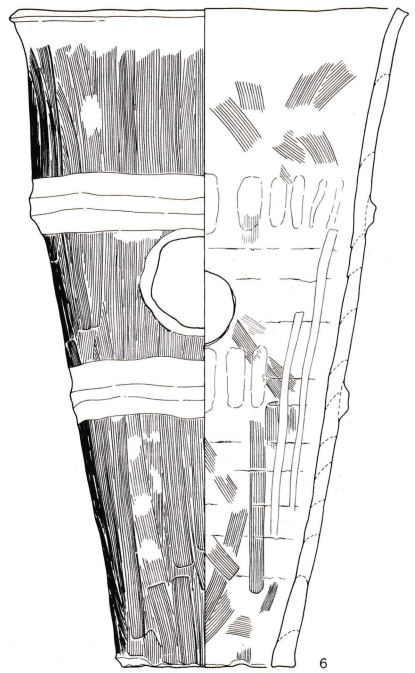
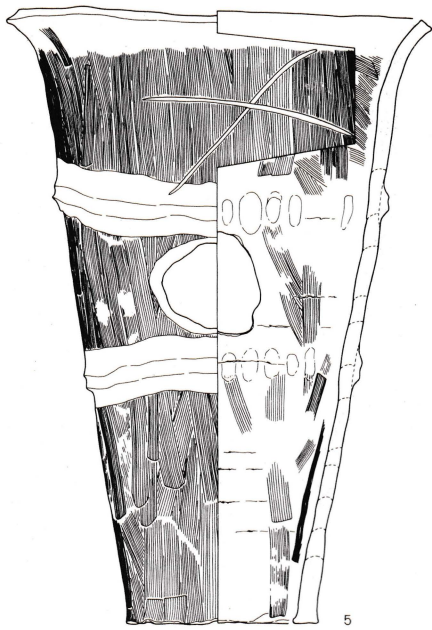
第15号墳出土埴輪 (第241~249図)

No.	器高	器径	器厚	器質	突帯	スカシ孔	外面調整	内面調整	備考
1	h 4 1. 8	□ 2 7. 3	a 1. 2	色	2 B 1.0 2.6 / 0.8	円形	一次タテハケ	ナデ・ハケ	口縁 A
	a 1 3. 0	底 1 2. 0	b 1. 2	胎	1 B 1.0 4.2 / 0.6	a 6. 6	ハケ 1 7 本 / 2 cm	口縁部ヨコハケ	粘土紐積上痕
	b 1 2. 0		c 1. 2			b		ハケ 1 3 本 / 2 cm	
	c 1 6. 8		d 1. 2	焼					
			e 1. 8	焼					
2	h 4 1. 0	□ 2 7. 2	a 0. 8	色	2 B 1.2 2.8 / 0.6	円形	一次タテハケ	ナデ・ハケ	口縁 A
	a 1 3. 5	底 1 2. 5	b 1. 2	胎	1 B 1.2 3.4 / 0.8	a 3. 4	ハケ 1 3 本 / 2 cm	口縁部ヨコハケ	第3段外面にヘラ
	b 1 1. 4		c 1. 2			b		ハケ 1 6 本 / 2 cm	記号
	c 1 6. 1		d 1. 4	焼					粘土紐積上痕
			e 1. 8						
3	h 4 1. 0	□ 2 5. 0	a 1. 2	色	2 B 1.0 2.8 / 0.7	(円形)	一次タテハケ	ナデ・ハケ	口縁 A
	a 1 3. 1	底 1 4. 6	b 1. 1	胎	1 B 0.8 3.0 / 0.6		ハケ 1 3 本 / 2 cm	ハケ 1 2 本 / 2 cm	粘土紐積上痕
	b 1 2. 3		c 1. 2						
	c 1 5. 6		d 1. 1	焼					
			e 1. 8						
4	h 4 1. 2	□ 2 5. 2	a 1. 2	色	2 C' 1.0 2.6 / 0.6	(円形)	一次タテハケ	ハケ・ナデ	口縁 A
	a 1 4. 0	底 1 2. 4	b 1. 2	胎	1 C' 0.9 2.6 / 0.6		ハケ 1 4 本 / 2 cm	ハケ 1 2 本 / 2 cm	第3段外面にヘラ
	b 1 1. 8		c 1. 0						記号
	c 1 5. 4		d 1. 2	焼					
			e 1. 1						
5	h 4 0. 6	□ 2 7. 0	a 0. 9	色	2 B 1.0 2.2 / 0.5	円形	一次タテハケ	ナデ・ハケ	口縁 A
	a 1 2. 4	底 1 2. 3	b 1. 1	胎	1 B 0.9 2.2 / 0.5	a 6. 6	ハケ 1 7 本 / 2 cm	ハケ 1 3 本 / 2 cm	第3段外面にヘラ
	b 1 1. 7		c 1. 0			b			記号
	c 1 6. 5		d 1. 0	焼					粘土紐積上痕
			e 1. 4						



0 10cm

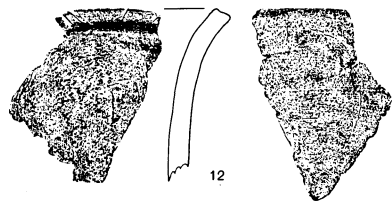
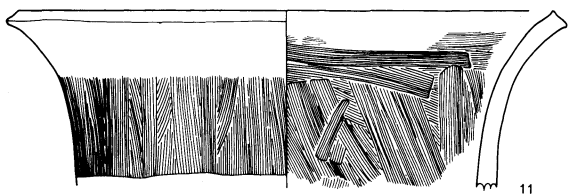
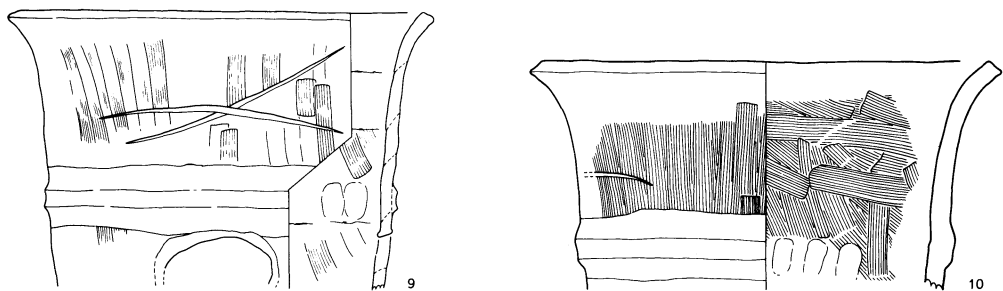
第241图 第15号古墳跡出土円筒埴輪(1)



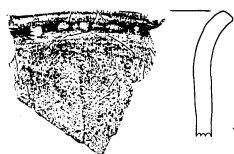
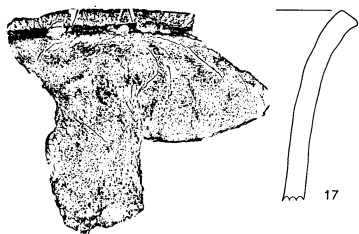
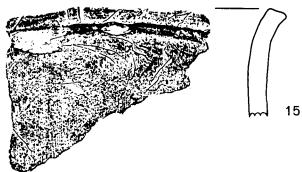
0 10cm

第242図 第15号古墳跡出土円筒埴輪(2)

6	h 43.6	□ 25.0	a 1.0	色	2 B 1.3 2.7 / 0.8	円形	一次タテハケ	ナデ・ハケ	口縁 A				
	a 13.5		底 11.4	b 1.0			胎	1 B 1.2 2.6 / 0.8		a 7.0	ハケ 15 本 / 2 cm	ハケ 9 本 / 2 cm	粘土紐積上痕
	b 12.6			c 1.1						b			
	c 17.5			d 1.1			焼						
7	h 40.5	□ 25.7	a 1.1	色	2 B 1.0 2.6 / 0.8	円形	一次タテハケ	ナデ・ハケ	口縁 C				
	a 13.0		底 13.0	b 1.2			胎	1 B 1.1 3.4 / 0.8		a 6.8	ハケ 16 本 / 2 cm	ハケ 10 本 / 2 cm	第3段外面にヘラ
	b 10.4			c 1.2						b			記号
	c 17.1			d 1.2			焼						粘土紐積上痕
8	現 38.9	□ 24.5	a 1.2	色	2 B 1.2 2.4 / 0.8	円形	一次タテハケ	ナデ・ハケ	口縁 A				
	a 11.6			b 1.2			胎	1 B 1.2 3.0 / 0.8		a 6.6	ハケ 14 本 / 2 cm	ハケ 12 本 / 2 cm	第3段外面にヘラ
	b 11.4			c 1.1						b			記号
				d 1.0			焼						粘土紐積上痕
9	現 18.1	□ 26.6	a 0.9	色 橙	2 B 0.9 1.6 / 0.3	(円形)	一次タテハケ	ハケ・ナデ	口縁 A				
	a 12.0			b 1.0			胎 砂粒やや多	a (8.0)		ハケ 23 本 / 2 cm	ハケ 23 本 / 2 cm	第3段外面にヘラ	
				c 1.0			焼 良好						指頭痕 (指紋) 記号
10	現 15.0	□ 29.5	a 1.0	色 明赤褐	2 B' 1.2 2.3 / 0.4		一次タテハケ	ハケ・ナデ	口縁 A				
	a 12.5			b 0.9			胎 白色砂粒			ハケ 23 本 / 2 cm	ハケ 23 本 / 2 cm	第3段外面にヘラ	
							焼 良好						指頭痕 (指紋) 記号
11	現 11.8	□ 35.4	a 1.1	色 明赤褐			一次タテハケ	ハケ・ナデ	口縁 A				
				b 0.9			胎 白色砂粒少			ハケ 25 本 / 2 cm	ハケ 24 本 / 2 cm		
12			a 0.9	色 橙			一次タテハケ	ハケ・ナデ	口縁 A				
			b 1.1	胎 白色砂粒少				ハケ 25 本 / 2 cm		ハケ 26 本 / 2 cm			
13			a 0.9	色 橙			一次タテハケ		口縁 A				
			b 1.1	胎 白色砂粒少				ハケ 23 本 / 2 cm					
14			a 1.0	色 赤橙			一次タテハケ		口縁 A				
				胎 白・黒・砂粒				ハケ 20 本 / 2 cm					
				焼 良好									
15			a 1.0	色 赤褐			一次タテハケ		口縁 A				
				胎 白・赤・砂粒				ハケ 20 本 / 2 cm					
				焼 良好									
16			a 1.1	色 橙			一次タテハケ		口縁 A				
				胎 白色砂粒少				ハケ 20 本 / 2 cm					
				焼 良好									
17			a 1.1	色 赤褐			一次タテハケ	ハケ・ナデ	口縁 A				
			b 1.2	胎 白色砂粒多				ハケ 19 本 / 2 cm		ハケ 20 本 / 2 cm	粘土紐積上痕		
				赤色砂粒少									
18			a 0.9	色 橙			一次タテハケ		口縁 A				
				胎 白色砂粒少				ハケ 19 本 / 2 cm					
				焼 良好									
19			a 1.1	色 におい橙			一次タテハケ		口縁 A 1				
				胎 白・黒・砂粒				ハケ 20 本 / 2 cm			粘土紐積上痕		
				焼 良好									
20			a 0.9	色 におい橙			一次タテハケ		口縁 B				
				胎 白・黒・砂粒				ハケ 20 本 / 2 cm					
				焼 良好									

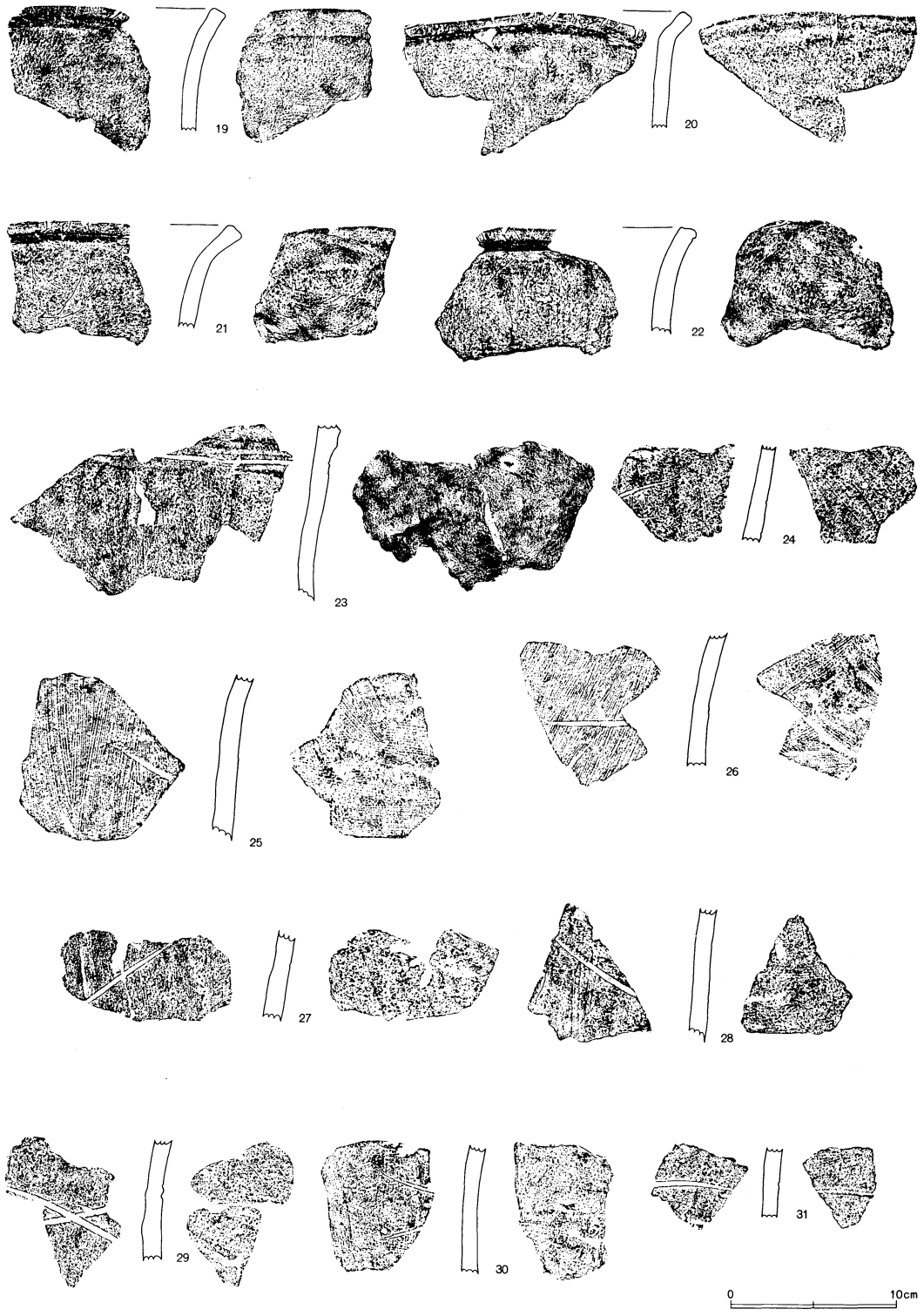


0 10cm

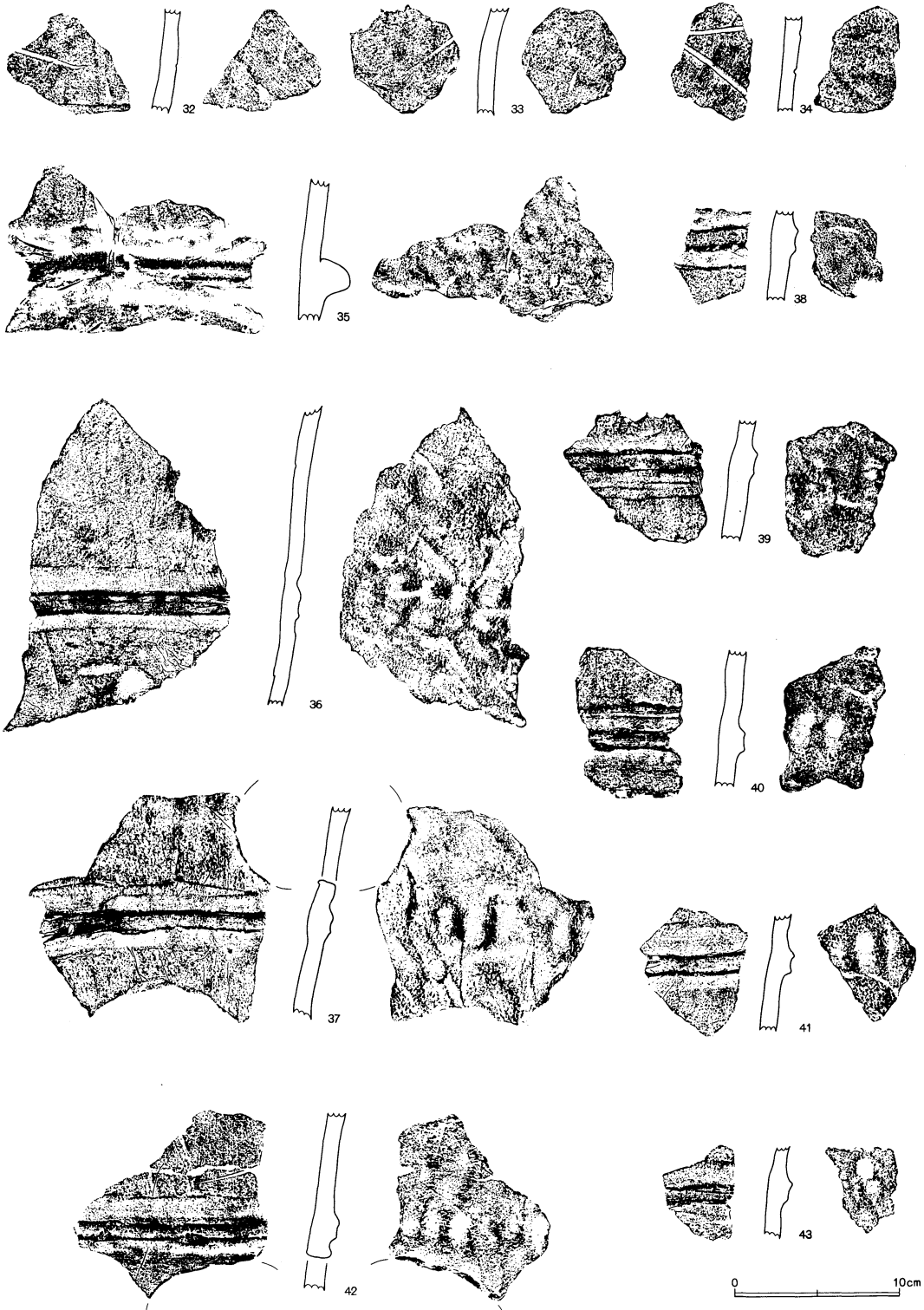


0 10cm

第243图 第15号古墳跡出土円筒埴輪(3)



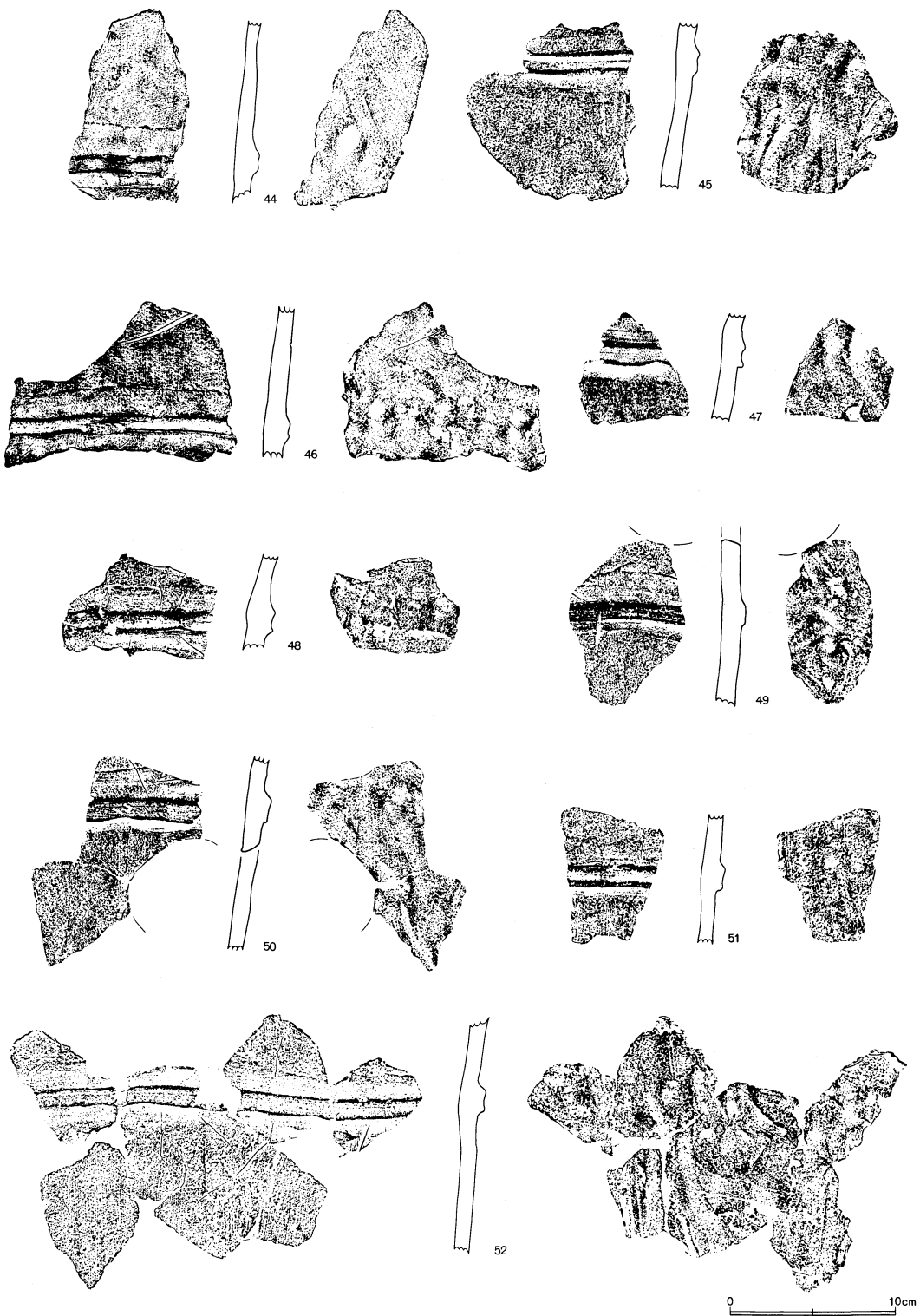
第244図 第15号古墳跡出土円筒埴輪(4)



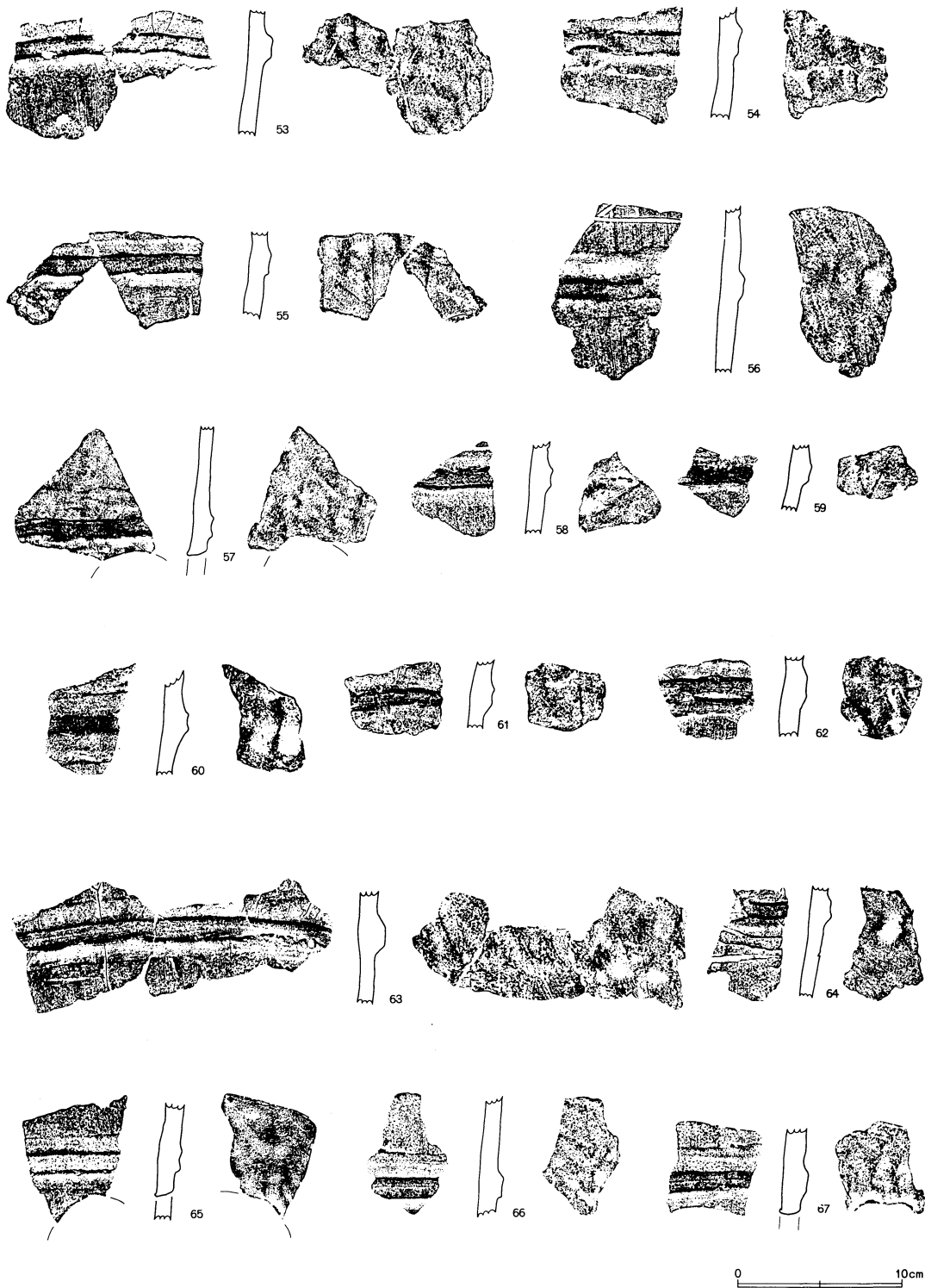
第245図 第15号古墳跡出土円筒埴輪(5)

21		a 1.1	色 橙 胎 白色砂粒少 焼 良好		一次タテハケ ハケ 22本 / 2cm		口縁 B 粘土紐積上痕
22		a 1.0	色 橙 胎 白・黒・赤 砂粒 焼 良好		一次タテハケ ハケ 23本 / 2cm		口縁 C
23		b 1.0	色 赤褐 胎 白色砂粒多 焼 良好	B 0.9 1.7 / 0.4	一次タテハケ ハケ 20本 / 2cm		ヘラ記号 粘土紐積上痕
24		b 1.1	色 にぶい赤褐 胎 白色砂粒少 焼 良好		一次タテハケ ハケ 21本 / 2cm	ハケ・ナデ ハケ 18本 / 2cm	ヘラ記号
25		1.2	色 にぶい橙 胎 白色砂粒多 焼 良好		一次タテハケ ハケ 16本 / 2cm	ハケ・ナデ ハケ 17本 / 2cm	ヘラ記号 粘土紐積上痕
26		1.0	色 にぶい橙 胎 白色砂粒少 焼 良好		一次タテハケ ハケ 21本 / 2cm	ハケ・ナデ ハケ 17本 / 2cm	ヘラ記号 粘土紐積上痕
27		0.9	色 にぶい橙 胎 白色砂粒少 焼 良好		一次タテハケ ハケ 23本 / 2cm	ハケ・ナデ ハケ 24本 / 2cm	ヘラ記号 粘土紐積上痕
28		1.0	色 橙 胎 白・黒・砂粒 焼 良好		一次タテハケ ハケ 22本 / 2cm	ハケ・ナデ ハケ 24本 / 2cm	ヘラ記号 粘土紐積上痕
29		0.9	色 にぶい橙 胎 白・黒 焼 良好		一次タテハケ ハケ 22本 / 2cm		ヘラ記号 粘土紐積上痕
30		0.9	色 にぶい橙 胎 白色砂粒少量 黒微量 焼 良好		一次タテハケ ハケ 18本 / 2cm		ヘラ記号
31		0.9	色 にぶい橙 胎 白色砂粒少 焼 良好		一次タテハケ ハケ 20本 / 2cm		ヘラ記号
32		1.2	色 橙 胎 白・黒・砂粒 焼 良好		一次タテハケ ハケ 21本 / 2cm		ヘラ記号
33		1.0	色 橙 胎 白・黒・砂粒 焼 良好		一次タテハケ ハケ 21本 / 2cm		ヘラ記号
34		0.8	色 橙 胎 白・黒少量 焼 良好		一次タテハケ ハケ 21本 / 2cm		ヘラ記号
35		1.2	色 橙 胎 白・黒・砂粒 焼 良好	D' 0.9 2.4 / 1.8	(円形) 一次タテハケ ハケ 11本 / 2cm		
36		1.2	色 にぶい橙 胎 白・黒・砂粒 焼 良好	A 1.2 2.2 / 0.3	(円形) 一次タテハケ ハケ 18本 / 2cm	ハケ・ナデ ハケ 22本 / 2cm	粘土紐積上痕
37		1.0	色 にぶい橙 胎 白・黒	B 1.0 2.1 / 0.4	(円形) 一次タテハケ ハケ 19本 / 2cm	ハケ・ナデ ハケ 22本 / 2cm	

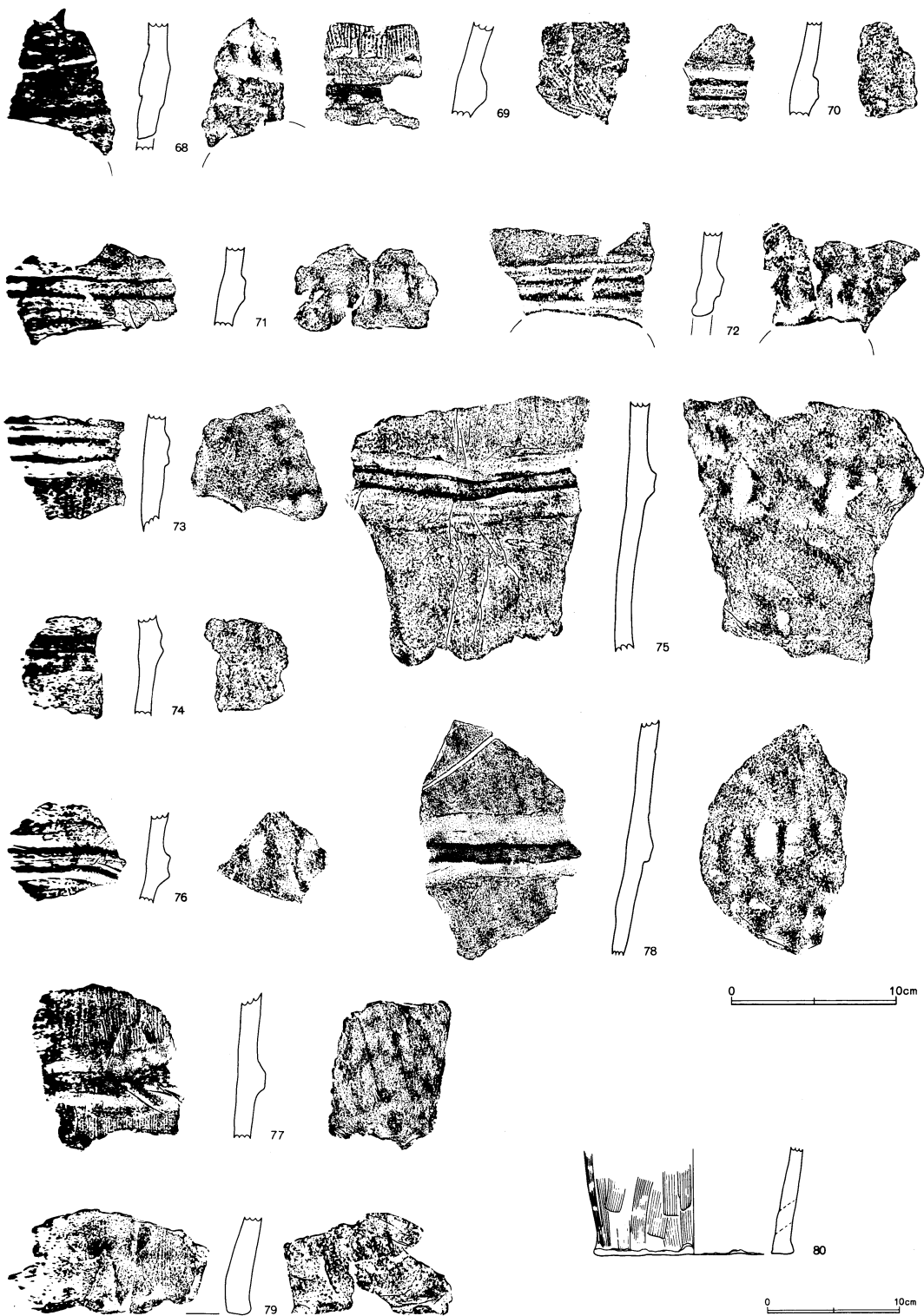
38		1. 1	焼 良好 色 橙 胎 白・黒・砂粒	B 1.8 2.0 /0.3		一次タテハケ ハケ19本/2cm	指頭痕(紋)	
39		1. 1	焼 良好 色 明赤褐 胎 白・黒	B 1.2 2.2 /0.4		一次タテハケ ハケ21本/2cm	指頭痕(紋)	粘土紐積上痕
40		1. 1	焼 良好 色 橙 胎 白・黒	B 1.1 1.8 /0.5		一次タテハケ ハケ20本/2cm	指頭痕(紋)	粘土紐積上痕
41		1. 1	焼 良好 色 赤褐 胎 白・黒	B 1.0 2.2 /0.6		一次タテハケ ハケ19本/2cm	指頭痕(紋)	
42		0. 9	色 におい橙 胎 白・黒多量 焼 良好	B 1.1 2.4 /0.5	(円形)	一次タテハケ ハケ21本/2cm	ハケ・ナデ ハケ20本/2cm 指頭痕(紋)	ヘラ記号
43		1. 0	色 橙 胎 白色砂粒少 焼 良好	B 1.1 2.4 /0.5		一次タテハケ ハケ23本/2cm	指頭痕(紋)	
44		1. 1	色 橙 胎 白・黒 焼 良好	B 1.2 2.2 /0.5		一次タテハケ ハケ20本/2cm	ハケ・ナデ ハケ20本/2cm 指頭痕(紋)	ヘラ記号
45		0. 9	色 におい橙 胎 白・黒やや多 焼 良好	B 1.2 2.1 /0.5	(円形)	一次タテハケ ハケ19本/2cm	ハケ・ナデ ハケ21本/2cm	
46		1. 1	色 におい橙 胎 白色砂粒 焼 良好	B 0.9 1.2 /0.3		一次タテハケ ハケ21本/2cm	ハケ・ナデ ハケ23本/2cm 指頭痕(紋)	ヘラ記号
47		1. 2	色 橙 胎 白・黒 焼 良好	B 1.2 2.2 /0.3		一次タテハケ ハケ19本/2cm	ハケ・ナデ ハケ22本/2cm 指頭痕(紋)	
48		1. 1	色 橙 胎 白・黒 焼 良好	B 1.1 2.3 /0.5		一次タテハケ ハケ22本/2cm		粘土紐積上痕
49		1. 1	色 橙 胎 白・黒・赤・砂粒 焼 良好 針	C 1.2 1.7 /0.3	(円形)	一次タテハケ ハケ21本/2cm	ハケ・ナデ ハケ21本/2cm 指頭痕(紋)	
50		1. 2	色 におい橙 胎 白色砂粒・黒 焼 良好	C 1.4 2.0 /0.6	(円形)	一次タテハケ ハケ21本/2cm	指頭痕(紋)	
51		1. 1	色 橙 胎 白・黒・赤 焼 良好	B 1.2 1.9 /0.5		一次タテハケ ハケ24本/2cm	ハケ・ナデ ハケ26本/2cm	
52		1. 2	色 橙 胎 白・黒砂粒 焼 良好	B 1.3 2.0 /0.5		一次タテハケ ハケ21本/2cm		
53		1. 0	色 におい橙 胎 白色砂粒・黒 焼 良好	B 1.2 2.0 /0.6		一次タテハケ ハケ21本/2cm	指頭痕(紋)	
54		1. 0	色 におい橙 胎 白・黒 焼 良好	A' 1.9 2.2 /0.4		一次タテハケ ハケ20本/2cm		



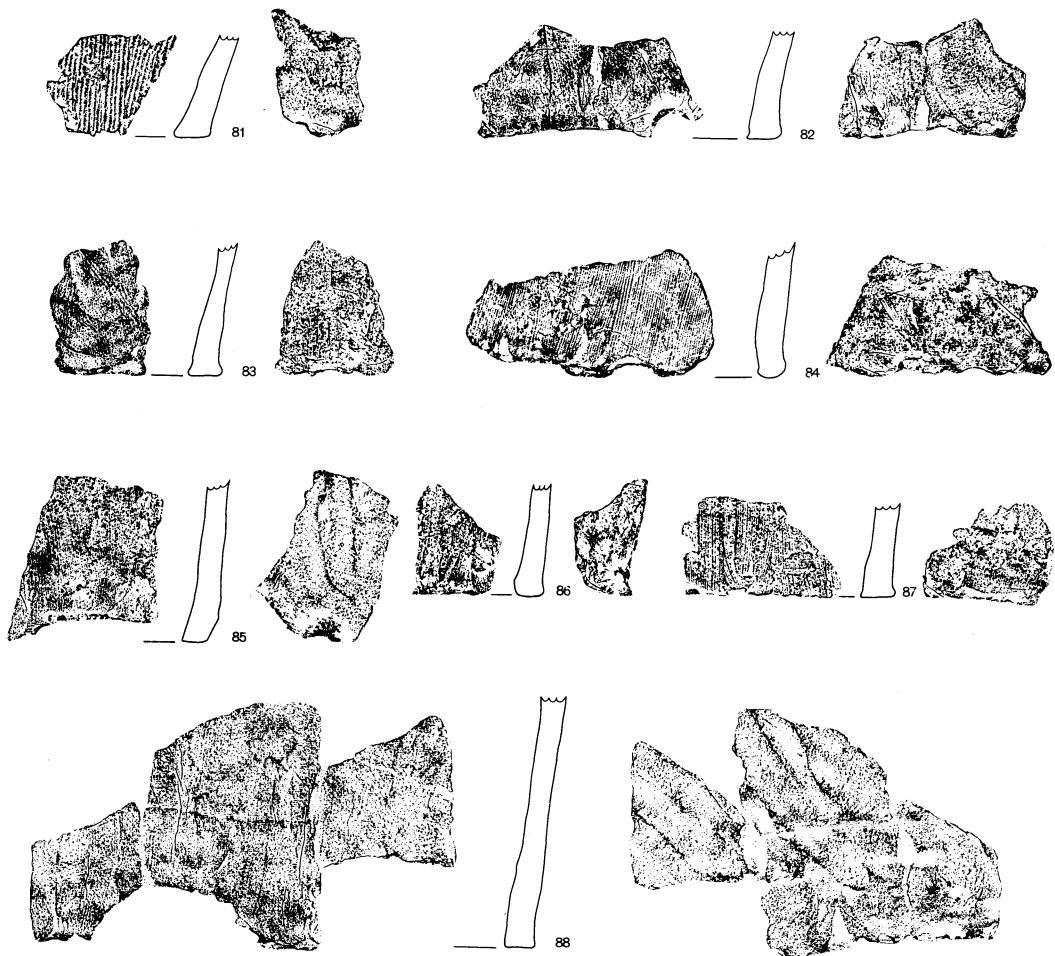
第246図 第15号古墳跡出土円筒埴輪(6)



第247图 第15号古墳跡出土円筒埴輪(7)



第248图 第15号古墳跡出土円筒埴輪(B)



第249図 第15号古墳跡出土円筒埴輪(9)

55		1. 0 色 橙 胎 白・赤砂粒 焼 良好	A' 1.1 1.8 / 0.4		一次タテハケ ハケ16本 / 2cm	指頭痕 (紋)	
56		1. 2 色 にぶい橙 胎 白・黒砂粒 焼 良好	C 1.1 1.8 / 0.4		一次タテハケ ハケ21本 / 2cm	ハケ・ナデ ハケ21本 / 2cm	ヘラ記号
57		1. 0 色 橙 胎 白色砂粒・黒 焼 良好	B 1.1 1.9 / 0.4	(円形)	一次タテハケ ハケ21本 / 2cm	指頭痕 (紋)	
58		1. 1 色 橙 胎 白色砂粒 焼 良好	B 1.0 2.0 / 0.4		一次タテハケ ハケ23本 / 2cm	指頭痕 (紋)	
59		1. 1 色 橙 胎 白色砂粒 焼 良好	B' 1.0 2.1 / 0.5		一次タテハケ		

60		0.9	色 におい橙 胎 白色砂粒 焼 良好	B	1.0 2.0 /0.5		一次タテハケ ハケ20本/2cm	指頭痕 (紋)	
61		0.9	色 橙 胎 白・黒 焼 良好	B	1.0 1.6 /0.3		一次タテハケ		
62		1.1	色 におい橙 胎 白色砂粒 焼 良好	C	1.2 2.6 /0.4		一次タテハケ ハケ22本/2cm	指頭痕 (紋)	
63		1.2	色 橙 胎 白・黒砂粒 焼 良好	C	1.2 2.4 /0.6		一次タテハケ ハケ20本/2cm	指頭痕 (紋)	
64		0.9	色 におい橙 胎 白 焼 良好	C	1.0 2.0 /0.5		一次タテハケ ハケ16本/2cm	指頭痕 (紋)	ヘラ記号
65		1.1	色 におい橙 胎 白色砂粒 焼 良好	A	1.3 1.8 /0.3		一次タテハケ ハケ27本/2cm	指頭痕 (紋)	粘土紐積上痕
66		1.1	色 橙 胎 白色砂粒 焼 良好	C	1.2 1.9 /0.3		一次タテハケ ハケ21本/2cm	指頭痕 (紋)	
67		1.2	色 橙 胎 白・黒砂粒 焼 良好	C	1.2 1.9 /0.3	(円形)	一次タテハケ ハケ24本/2cm		
68		1.2	色 橙 胎 白・黒 焼 良好	C	2.3 3.1 /0.3	(円形)	一次タテハケ ハケ32本/2cm		粘土紐積上痕
69		1.2	色 橙 胎 白・黒・赤 焼 良好	C	1.1 2.6 /0.7		一次タテハケ ハケ13本/2cm	ハケ・ナデ ハケ13本/2cm	
70		0.9	色 におい橙 胎 白・黒・赤 焼 良好	C	1.0 2.0 /0.5		一次タテハケ ハケ20本/2cm		
71		1.0	色 橙 胎 白・黒 焼 良好	C	1.1 1.9 /0.5		一次タテハケ ハケ21本/2cm	指頭痕 (紋)	
72		1.1	色 におい橙 胎 白・黒・砂粒 焼 良好	C	1.0 1.9 /0.6	(円形)	一次タテハケ ハケ25本/2cm	指頭痕 (紋)	粘土紐積上痕
73		1.2	色 橙 胎 白色砂粒・黒 焼 良好	B	1.4 2.0 /0.4	(円形)	一次タテハケ ハケ21本/2cm	指頭痕 (紋)	粘土紐積上痕
74		1.1	色 橙 胎 白・黒・砂粒 焼 良好	B	1.0 2.3 /0.5		一次タテハケ ハケ16本/2cm		
75		1.1	色 におい橙 胎 白・黒多量 焼 良好	C	1.1 2.6 /0.6	(円形)	一次タテハケ ハケ20本/2cm	ハケ・ナデ ハケ23本/2cm	粘土紐積上痕
76		1.1	色 橙 胎 白 焼 良好	B	1.1 2.2 /0.8		一次タテハケ ハケ18本/2cm	指頭痕 (紋) 指頭痕 (紋)	

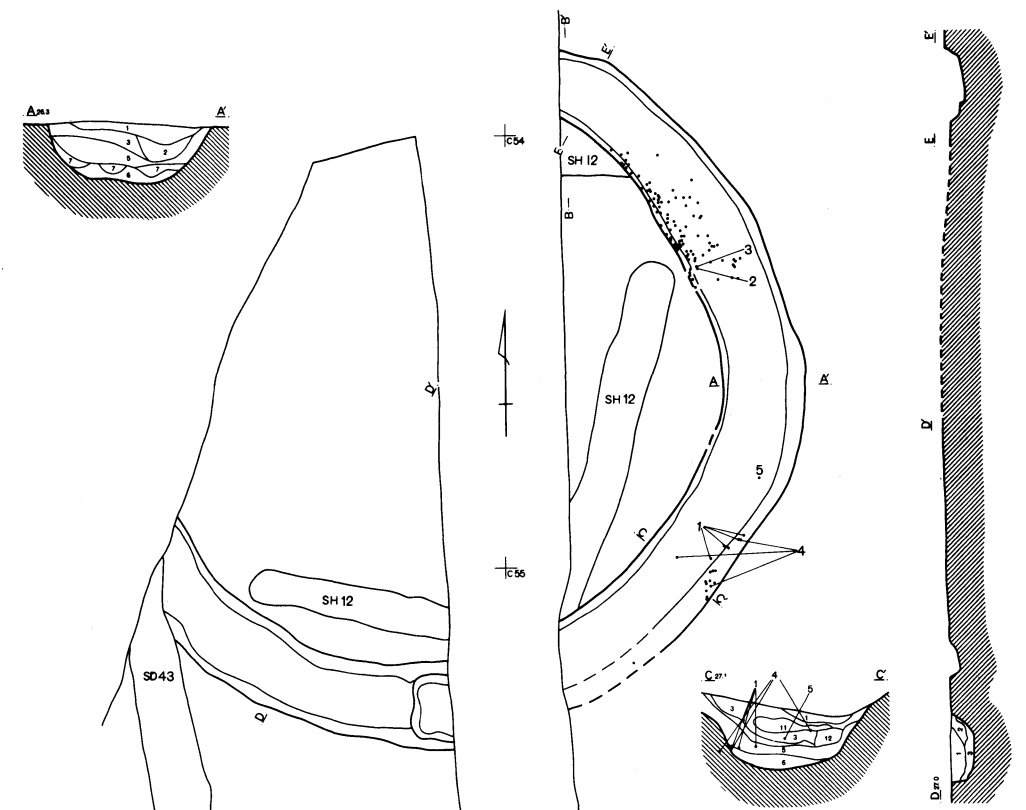
77			1. 2 色 にぶい橙 胎 白色砂粒・赤 焼 良好	C 0.9 2.0 / 0.6 (円形)	一次タテハケ ハケ18本 / 2cm		
78			0. 9 色 橙 胎 白・黒 焼 良好	C 1.0 2.9 / 0.5	一次タテハケ ハケ22本 / 2cm	指頭痕 (紋)	ヘラ記号
79			1. 3 色 橙 胎 白・黒 焼 良好		一次タテハケ ハケ16本 / 2cm	指頭痕 (紋)	底部調整なし
80	現 8. 2	底 14. 7	1. 4 色 橙 胎 白・黒 焼 良好		一次タテハケ ハケ19本 / 2cm		底部調整なし
81			1. 3 色 赤褐 胎 白 焼 良好		一次タテハケ ハケ11本 / 2cm		底部調整なし
82			1. 3 色 橙 胎 白・黒・赤 焼 良好		一次タテハケ ハケ20本 / 2cm		底部調整なし
83			1. 1 色 橙 胎 白・黒 焼 良好		一次タテハケ ハケ21本 / 2cm		底部調整なし
84			1. 5 色 橙 胎 白・黒・赤 焼 良好		一次タテハケ ハケ17本 / 2cm		底部調整なし 粘土紐積上痕
85			1. 2 色 にぶい橙 胎 白・黒・砂粒 焼 良好		一次タテハケ ハケ17本 / 2cm		底部調整なし
86			1. 0 色 橙 胎 白色砂粒 焼 良好		一次タテハケ ハケ18本 / 2cm		底部調整なし
87			1. 2 色 橙 胎 白・黒 焼 良好		一次タテハケ ハケ17本 / 2cm		底部調整なし
88			1. 2 色 にぶい橙 胎 白・黒・赤 焼 良好		一次タテハケ ハケ18本 / 2cm	指頭痕 (紋)	底部調整なし 粘土紐積上痕

第16号古墳跡 (第250図)

第16号古墳跡は、C53gグリッドに位置する。東側で第84号住居跡を、周溝内側で第12号方形周溝基を切り、南西側で第43号溝跡に切られる。中央部やや東寄りを水道管による攪乱を受け、西側から北側にかけては調査範囲外に続く。全体の6割程の検出である。今回調査された代正寺遺跡の範囲内において、最も南に、そして最も西に位置する古墳跡であった。

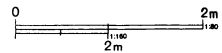
墳丘部分は既に失われており、主体部の規模・形態等についても不明である。周溝を含めた直径は1520cmを測り、近在の第14号古墳跡(推定2830cm)・第15号古墳跡(2120cm)に比して小規模な遺構である。陸橋状部分は検出されなかった。

各土層断面・エレベーション(第250図)での幅・深さは、A-A' : 幅176cm・深さ62cm、B-B' : 幅136cm・深さ88cm、C-C' : 幅176cm・深さ64cm、D-D' : 幅150cm・深さ48cm、E-E' :

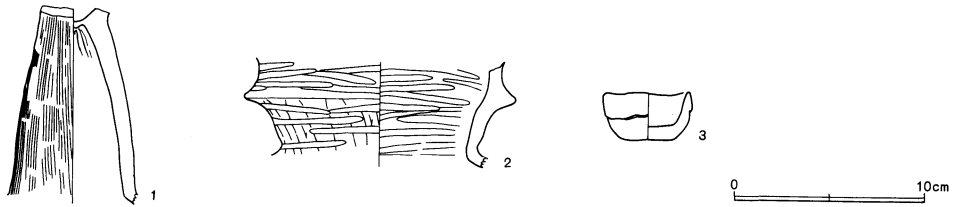


第16号古墳跡土層註記

- | | | | |
|-----------------|------------|---------|-----------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒子微量。 | 9 黒色土 | しまり・粘性弱。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子微量。 | 10 黒褐色土 | ローム粒子微量。 |
| 3 暗茶褐色土 | ローム粒子多量。 | 11 黒褐色土 | しまり・粘性弱。 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒少。 | | ロームブロック多。 |
| 5 暗茶褐色土 | ローム粒子多量。 | 12 黒色土 | しまり・粘性弱。 |
| 6 暗黄褐色土 | 風化したローム層。 | | |
| 7 5層よりやや黒味を帯びる。 | | | |
| 8 黒褐色土 | 大粒のローム粒子少。 | | |



第250図 第16号古墳跡



第251図 第16号古墳跡出土遺物

E' : 幅152cm・深さ40cmを測る。比較的整った円形を呈する。周溝断面に、墳丘側からの埋没土が顕著に認められる。

周溝底は、概ね平坦もしくは船底形を呈し、南側の攪乱部西付近でやや深めに掘り込まれている。溝底の立ち上がりは、墳丘側が急で、外周側が緩やかであると観察された。

遺物は、北東部分と南東部分から僅かに出土したのみであり、周辺遺構からの混入と推定されるものである。

第16号古墳跡出土遺物 (第251図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	高 坏	現存高	10.1	器面は摩滅している。外面はハケ目の後ナデか、内面は上端は絞り、他はナデ。橙色。	A+B+l+J 脚70 焼成：普
2	壺	現存高	5.5	口縁部：内外面ともヘラ磨き。頸部：外面はヘラ削りの後、粗いヘラ磨き、内面はヘラ磨き。灰褐色。	A+B+J(細密) 口25 頸25 焼成：普
3	手捏ね	口 径 底 径 現存高	(4.4) 2.8 2.5	内外面とも全てナデ、黄橙色。	B+J(細密) 口25 底100 焼成：普

(4) 土 壙

始めに、第1分冊における土壙の掲載方法について少し触れておくことにする。代正寺遺跡からは、合せて369基の土壙が検出されている。これらの土壙については、弥生・古墳時代土壙、平安時代土壙、中近世土壙とごく大雑把な分類をしたのみにとどまる。また、G区・H区においては、他の区以上に土壙が密集しており、このような分類も行えないままに、発掘調査を進めて行かざるを得ない状況であった。このためG・H区の土壙に関しては、時期区分がなされていない。

代正寺遺跡（第1分冊）においては、土壙の掲載・説明を4箇所に分けて行うことになる。即ち、2 弥生～古墳時代の遺構と遺物 (4)土壙＝第252図～第254図、3 平安時代の遺構と遺物 (2)土壙＝第270図、4 中近世の遺構と遺物 (1)土壙＝第273図～第285図、5 その他の遺構と遺物 (1)土壙＝第293図～第298図として掲げていくこととする。

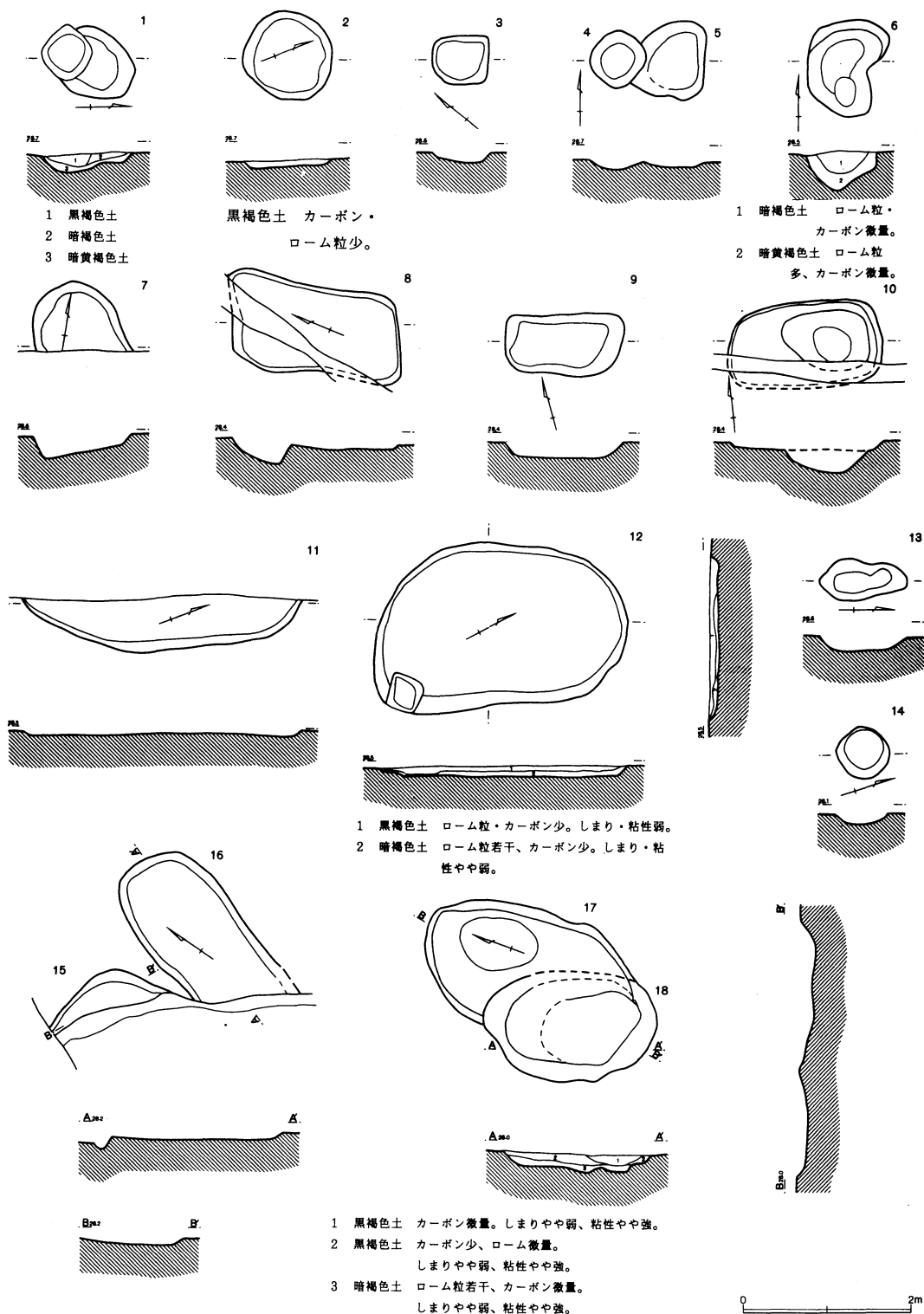
時期区分は、土壙からの出土遺物によるのは無論であるが、小破片で実測できないものが大部分であった。中近世土壙については、遺物の出土がなくとも、覆土の色調や堆積状況から推定をした。弥生～古墳時代に含まれると推定される土壙は、A～F区までに32基検出された。分布状況は、A区7基、B区0基、C区13基、D区0基、E区10基、F区2基である。形状・規模はさまざまであるが、概ね平面形態は、円形もしくは楕円形を呈する。遺構の遺存状況は悪く、確認面からの掘り込みは全体的に浅いものとなっている。これらの土壙からは、弥生～古墳時代に属する遺物が、僅かずつではあるが出土をしており、既期の土壙と推定をした。土壙のみの検出でも、住居跡に伴う貯蔵穴と推定される場合は、住居跡として番号を振って掲載をした。

F区・G区の土壙についても、この時期に含まれる実例があると思われるが、残念ながら特定することはできなかった。

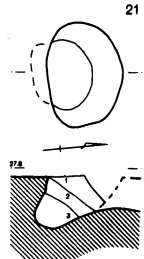
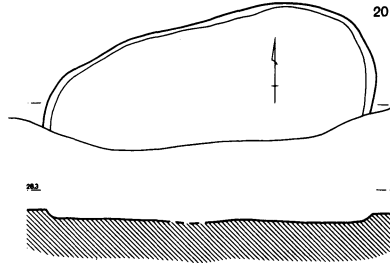
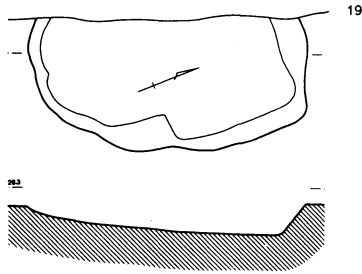
実測可能な遺物が出土した土壙は、僅かに2基を数えるのみであった。

第2表 弥生・古墳時代土壙一覧表

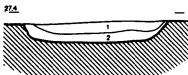
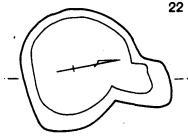
番号	旧番	区	グリッド	規模 (長×短×深) cm	主軸方向
1	200	A	V-8-a	106 × 84 × 21	N-30°E
2	202	A	T-8-i	108 × 107 × 8	N-18°E
3		A	T-8-i	67 × 59 × 10	N-40°W
4		A	T-8-f	69 × 67 × 12	N
5		A	U-8-d	92 × (90) × 7	N
6	205	A	U-9-a	115 × 70 × 48	N
7		A	U-10-a	- × 117 × 25	-
8	6	C	T-12-g	202 × 103 × 28	N-19°W
9	5	C	T-12-h	142 × 79 × 19	N-75°W
10	7	C	T-12-e	185 × - × 37	N-83°W
11		C	R-12-h	335 × - × 6	N-19°E
12	4	C	R-14-g	302 × 198 × 13	N-25°E
13		C	R-14-i	106 × 40 × 18	N
14		C	R-18-d	65 × 64 × 11	N-18°E
15		C	P-18-c	- × - × 9	-
16		C	P-18-e	- × 110 × 9	-
17		C	R-18-g	(255) × (150) × 19	N-15°W
18	12	C	R-18-g	197 × (134) × 20	N-26°W
19		C	P-19-d	296 × - × 30	N-21°E
20		C	P-19-i	353 × - × 10	N-79°E
21	81	E	M-31-e	110 × 80 × 45	N-82°W
22		E	J-35-f	134 × (114) × 22	N-68°W
23	95	E	L-35-g	113 × 105 × 34	N-20°W
24		E	J-37-c	70 × 64 × 57	N
25		E	J-37-h	- × 58 × 10	-
26		E	K-37-b	142 × 80 × 20	N
27		E	K-37-e	(90) × 80 × 11	N-70°W
28		E	I-38-c	88 × 68 × 10	N-42°E
29	98	E	I-38-f	275 × 215 × 16	N-40°E
30	95	E	J-39-d	100 × 75 × 10	N-29°W
31	149	F	F-46-i	168 × 164 × 54	N
32	186	F	F-48-a	182 × (145) × 26	N-42°W



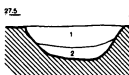
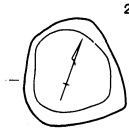
第252図 弥生・古墳時代土壌(1)



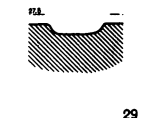
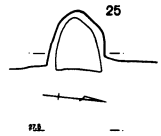
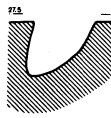
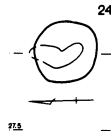
- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗黄褐色土



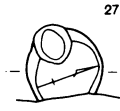
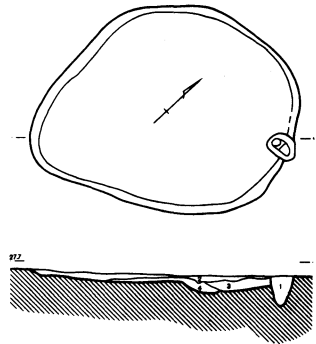
- 1 黒色土 ローム粒・ロームブロック若干。
- 2 黒色土 1層よりロームブロック多。



- 1 黒褐色土 ローム粒・カーボン微量。しまり弱、粘性やや弱。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒多。しまりやや強、粘性やや弱。



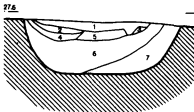
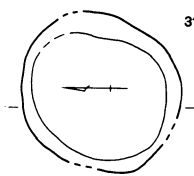
29



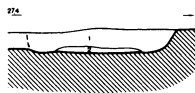
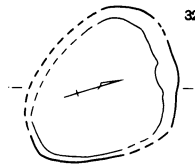
- 1 黒褐色土 カーボン少。しまり・粘性やや弱。
- 2 黒褐色土 カーボン微量。しまり・粘性弱。
- 3 暗褐色土 ローム粒若干。しまり・粘性やや弱。
- 4 黒褐色土 焼土粒・カーボン少。しまり・粘性やや弱。
- 5 暗黄褐色土 ロームブロック少。しまり・粘性やや弱。



黒褐色土



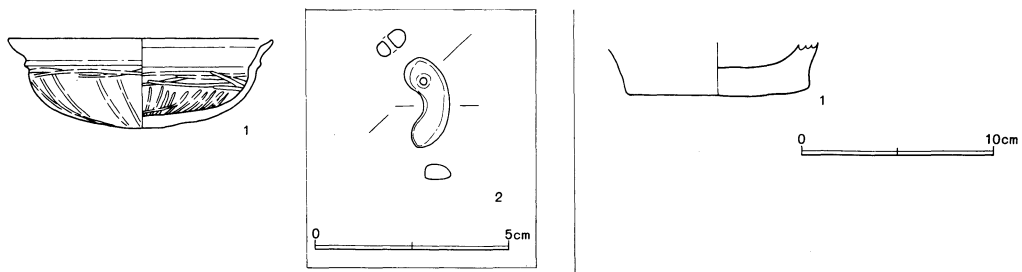
- 1 黒褐色土 ローム粒・炭化物若干。しまり良。
- 2 黒褐色土 ローム粒少、黒色強い。
- 3 暗赤褐色土 焼土粒少。
- 4 黒褐色土 2層に類似。ローム粒多。
- 5 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多。
- 6 黒褐色土 5層よりロームブロック少。しまり弱。
- 7 黒褐色土 6層に類似。ロームブロック多。



- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多。しまり強。ローム殆ど含まず、黒色強い。
- 2 黒褐色土

0 2m

第253図 弥生・古墳時代土壌(2)



第254図 弥生・古墳時代土壌出土遺物

第12号土壌出土遺物 (第254図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	小型鉢	口径 13.6 器高 4.6	口縁はS字状、底部は丸底を呈す。器面は荒れている。口縁部：内外面とも横ナデ。体部：内外面とも丁寧なへら磨き。褐色（部分的に黒色）。	A+F+J 口50体100 焼成：やや良
2	石製 勾玉	全長 2.3 厚さ 0.3	幅は頭部0.8cm、尾部0.7cm、重さ1.7g。遺存状態は良好。頭部は若干膨らむ。形状は「く」字状に近く、断面は偏平な楕円形を呈す。両側からの穿孔。青白色。	滑石製 完形

第29号土壌出土遺物 (第254図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	底径 9.4 現存高 2.8	胴部外面：へら削りの後粗いナデか。底部：内外面ともナデか。暗橙褐色。	A+B+J 底100 焼成：普

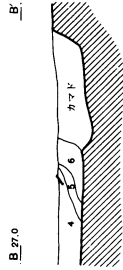
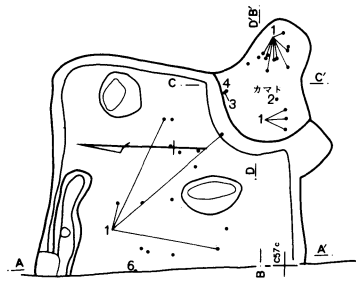
3 奈良平安時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第86号住居跡 (第255・256図)

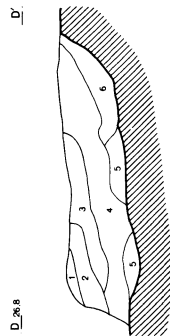
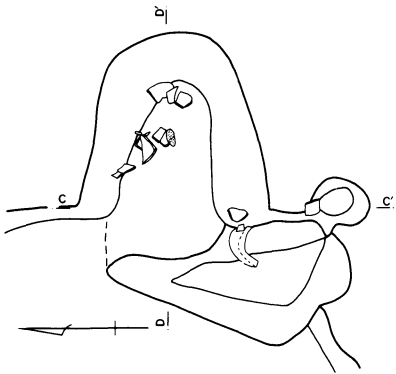
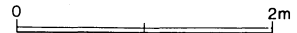
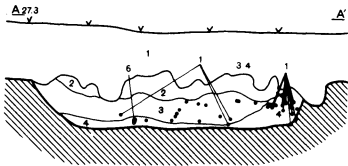
第86号住居跡は、C57hグリッドに位置する。西側部分は水道管による攪乱を受けている。今回検出された奈良・平安時代の住居跡7軒のうち、最も北にそして最も東に位置する住居跡である。

平面規模・形態は、やや不整形な方形もしくは長方形が推定され、南北204cm、深さは42cmを測



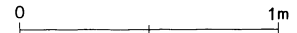
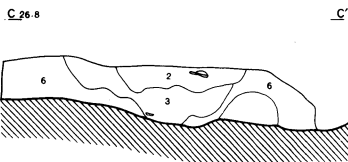
第86号住居跡土層註記

- 1 耕作土
- 2 黒色土 粒子の粗い層、ローム粒・焼土粒若干。
- 3 暗褐色土 茶の強い層、1層よりローム粒・焼土粒多。
- 4 暗褐色土 上層に比してローム粒含有多。
- 5 暗褐色土 カマドより流出した粘土を多く含む。
- 6 暗褐色土 焼土粒を多く含む。



カマド土層註記

- 1 暗黄褐色土 粘土を含む(覆土)、焼土・炭化物・ローム粒含有。
- 2 暗褐色土 ローム粒・焼土粒、炭化物が1層より多。
- 3 暗黄褐色土 1層に類似。黄褐色の粘土多、焼土多含有。
- 4 暗褐色土 ローム粒・焼土粒多、2層より多い。
- 5 暗褐色土 色調は黄色が強い。ロームブロック・ローム粒・焼土含有。
- 6 茶褐色土 地山。



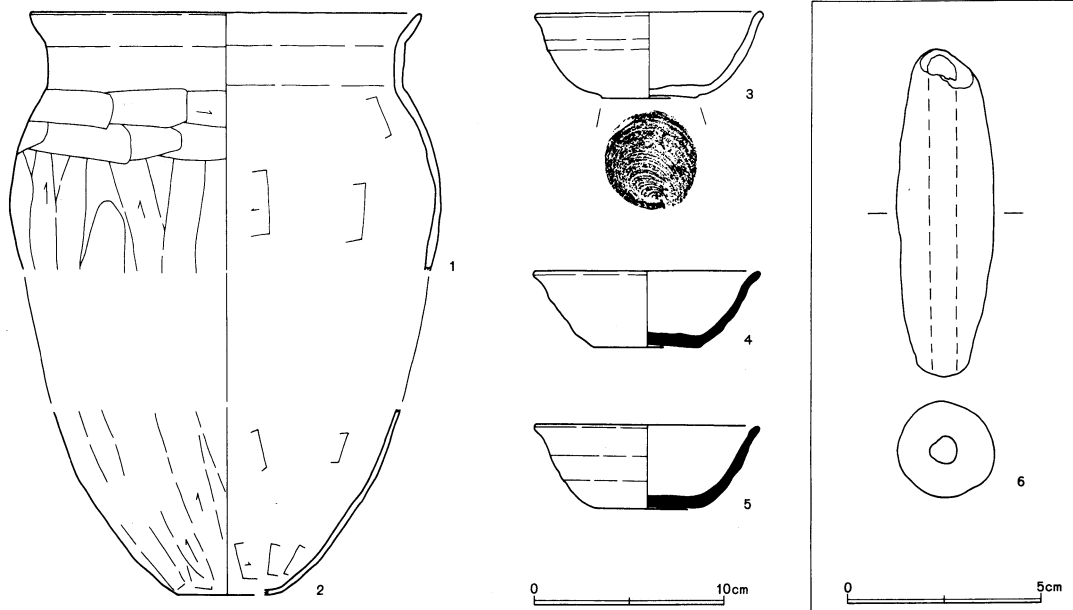
第255図 第86号住居跡

る。主軸方向は、N-92° - Eを指す。カマドは東壁の南端コーナーに位置し、全長90cm・焚口幅75cmを測る。第5層が燃焼部、第6層が煙道に相当すると推定される。燃焼部は僅かではあるが、襞鉢状を呈す。全体的に、焼土ブロックやカーボンの量が少ないカマドである。北壁側で、部分的に壁溝が検出された。

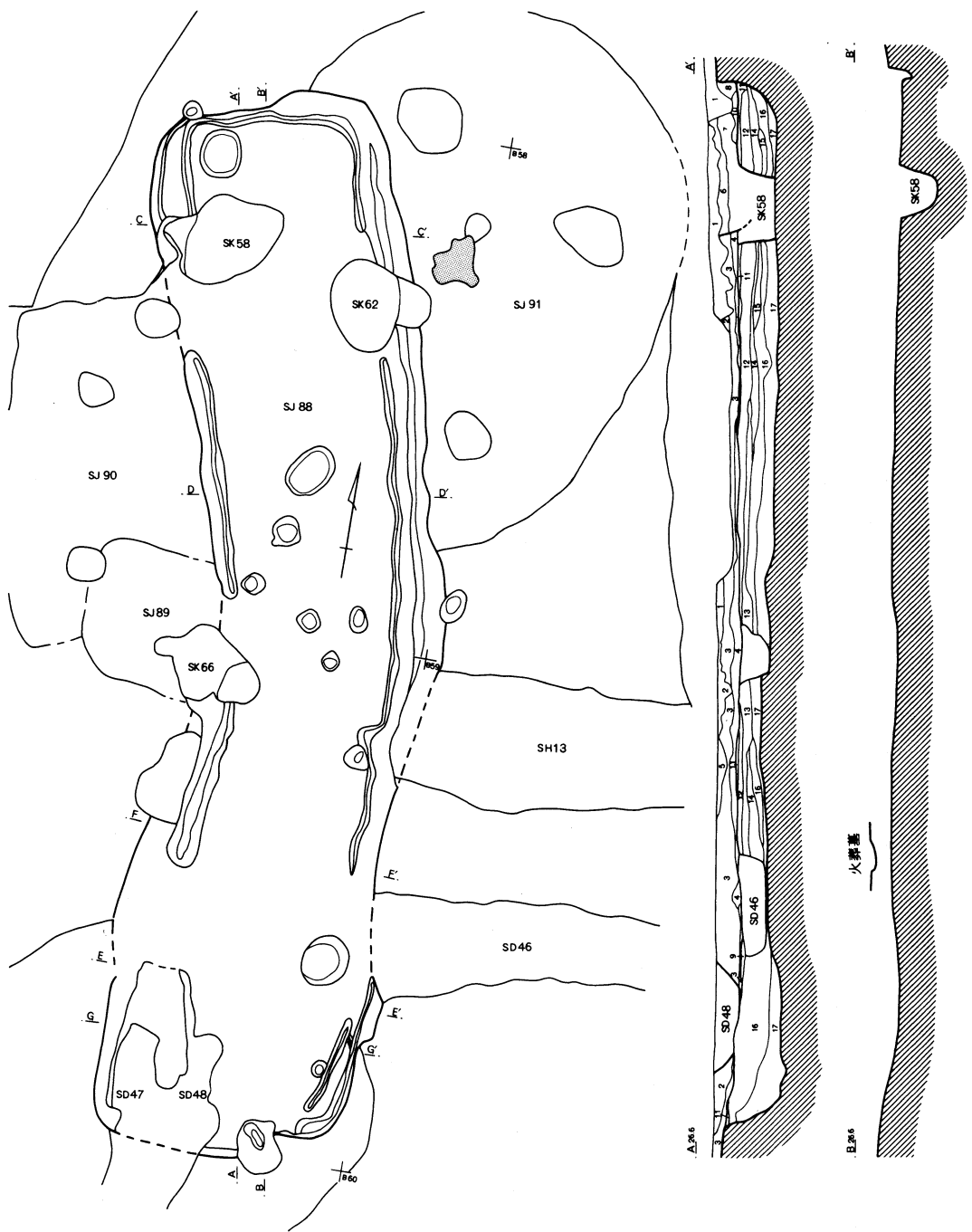
出土した遺物数は少なく、復元できた遺物の殆どは、カマドからのものであった。

第86号住居跡出土遺物 (第256図)

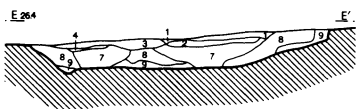
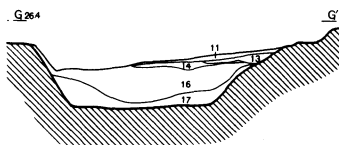
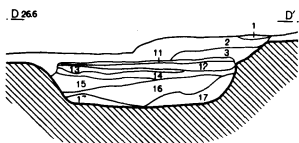
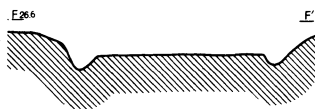
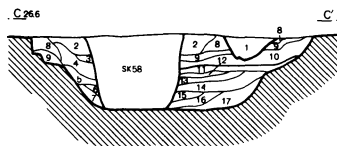
番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径 (20.4)	1・2同一個体。口縁部：内外面ともに横ナデ。胴部：外面はへら削り、内面はへらナデとナデ。褐色。	A+B+D+J 口径60 胴上15 胴下30 焼成：普
2		胴径 (22.6)		
		底径 (5.3)		
		現存高 13.5		
3	坏	口径 11.8	ロクロナデ。底部は回転糸きり離し。ロクロ右回転。橙色。	B+C+E+G 口径100 坏90 底100 焼成：やや良
		底径 5.0		
		器高 4.3		
4	坏	口径 (11.8)	ロクロナデ。底部は回転糸きり離し。ロクロ右回転。灰色。	B+C+J 口径30 胴30 底90 焼成：やや不良
		底径 (5.5)		
		器高 4.0		
5	坏	口径 (11.7)	ロクロナデ。底部は回転糸切り離し。ロクロ右回転。灰褐色（一部黒色）。	B+C+J 口径30 坏30 底30 焼成：やや不良
		底径 (5.6)		
		器高 4.4		
6	土錘	全長 8.6	全面ナデで比較的丁寧な作り。褐色。重量52.4g。	A+B+E+J ほぼ完形 焼成：やや良
		幅 2.6		
		孔径 0.7		



第256図 第86号住居跡出土遺物



第257图 第88号住居跡(1)



第88号住居跡土層註記 A-A'

- | | | |
|----|------------|--|
| 1 | 黒褐色土 | ロームブロック (φ 1cm) 若干、カーボン微量。しまり・粘性やや強。 |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒若干、カーボン微量。しまり・粘性やや強。 |
| 3 | 暗褐色土 | ローム粒少、カーボン微量。しまり強、粘性弱。 |
| 4 | 黒褐色土 | ローム粒少、カーボン微量。しまり・粘性やや強。 |
| 5 | 黒褐色土 | ローム粒・炭化物・焼土粒を若干含む、第1層よりローム含有が少ない。 |
| 6 | 黒褐色土 | ローム粒・炭化物・焼土粒を第5層より多く含む。 |
| 7 | 黒褐色土 | ロームブロック (φ 1cm) 多量に混入。 |
| 8 | 黒褐色土 | ローム粒・ロームブロック (φ 2cm) 少、カーボン微量。しまりやや強、粘性やや弱。 |
| 9 | 暗褐色土 | ロームブロック (φ 3cm) ・ローム粒若干、カーボン微量。しまりやや強、粘性やや弱。 |
| 10 | 暗褐色土 | ロームブロック (φ 1cm) 少。 |
| 11 | 暗黄褐色土 | ロームブロック層中にローム粒少。しまり強、粘性弱 (S J 88の貼床と思われる)。 |
| 12 | 暗褐色土 | ロームブロック (φ 3cm) ・ローム粒・カーボン若干。しまりやや強、粘性やや弱。 |
| 13 | 暗茶褐色土 | ロームブロック (φ 3cm) ・ローム粒多、カーボン少。しまりやや強、粘性やや弱。 |
| 14 | 暗褐色土 | ロームブロック (φ 2cm) ・ローム粒少。しまりやや強、粘性やや弱。 |
| 15 | 赤味を帯びた暗褐色土 | ローム粒・焼土粒少、カーボン微量。しまりやや強、粘性やや弱。 |
| 16 | 黒褐色土 | ローム粒・ロームブロック (φ 2cm) 少。しまりやや強、粘性やや弱。 |
| 17 | 暗黄褐色土 | ローム粒非常に多、ロームブロック (φ 3cm) 少。しまりやや強、粘性やや弱。 |

C-C'

- | | | |
|---|-------|--|
| 1 | 黒褐色土 | ローム粒・ロームブロック・焼土粒・炭化物を含む。しまり不良。 |
| 2 | 黒色土 | 第1層よりローム粒少、黒色が強い。 |
| 3 | 黒褐色土 | 第1層に類似するがロームがやや少ない。 |
| 4 | 暗黄褐色土 | ローム粒を多量に含む層、黄色が強く柔らかい。 |
| 5 | 黒褐色土 | 第2層に類似。ロームを殆ど含まない。 |
| 6 | 黄褐色土 | ロームを主体とする層。 |
| 7 | 黒褐色土 | ローム粒・炭化物・焼土粒を若干含む、第1層よりローム含有が少ない。 |
| 8 | 黒褐色土 | ローム粒・炭化物・焼土粒を第7層より多く含む。 |
| 9 | 黒褐色土 | ロームブロック (φ 1cm) 多量に混入。
(第11~17層=A-A' と共通) |

D-D'

- | | | |
|---|------|--|
| 1 | 黒褐色土 | ローム粒・カーボン微量。しまり・粘性やや強。 |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒少、カーボン微量。しまり・粘性やや強。 |
| 3 | 暗褐色土 | ローム粒若干、カーボン微量。しまり・粘性やや強。
(第11~17層=A-A' と共通) |

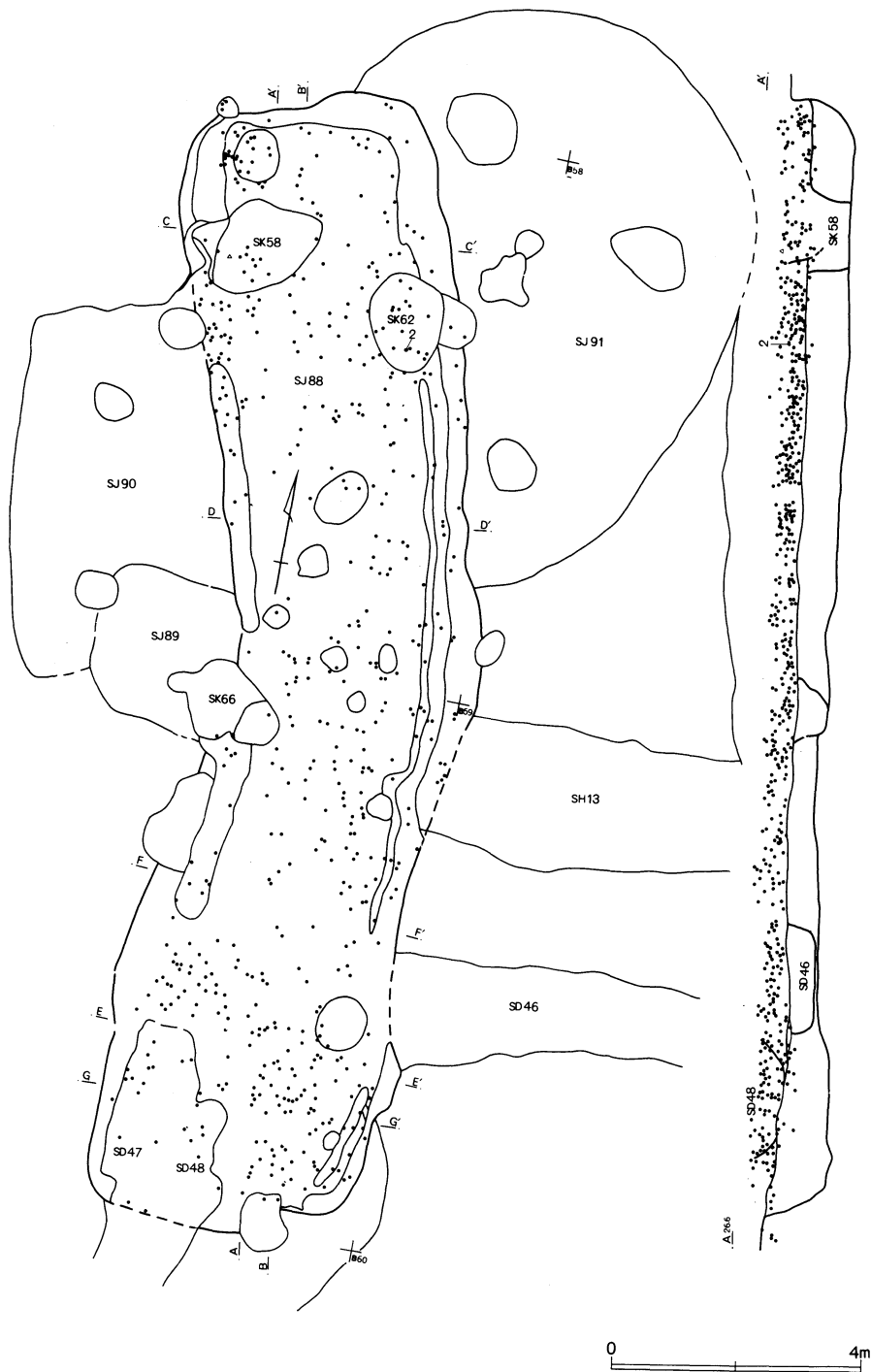
E-E'

- | | | |
|---|------|--|
| 1 | 黒褐色土 | ローム粒少、カーボン微量。しまりやや強、粘性やや弱。 |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒若干。しまり非常に強、粘性弱。 |
| 3 | 暗褐色土 | ローム粒・ロームブロック (φ 3cm) 少。しまりやや強、粘性やや弱。 |
| 4 | 黒褐色土 | カーボン層中にローム粒少。しまりやや強、粘性やや弱。
(第7~9層=A-A' と共通) |

G-G'

(第11~17層=A-A' と共通)

第258図 第88号住居跡(2)



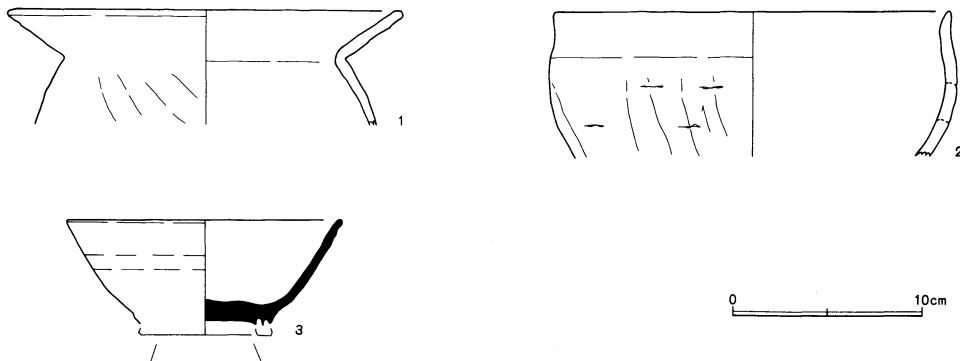
第259图 第88号住居跡(3)

第88号住居跡 (第257~259図)

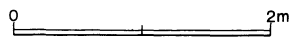
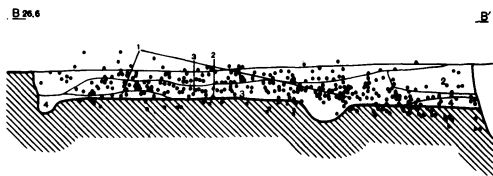
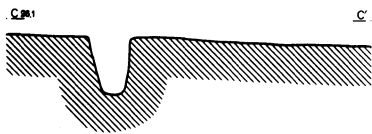
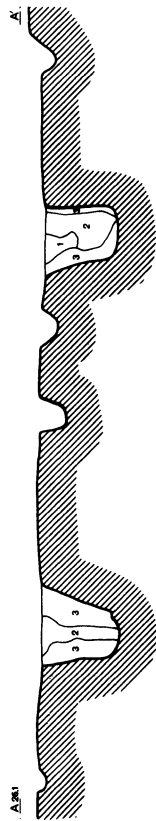
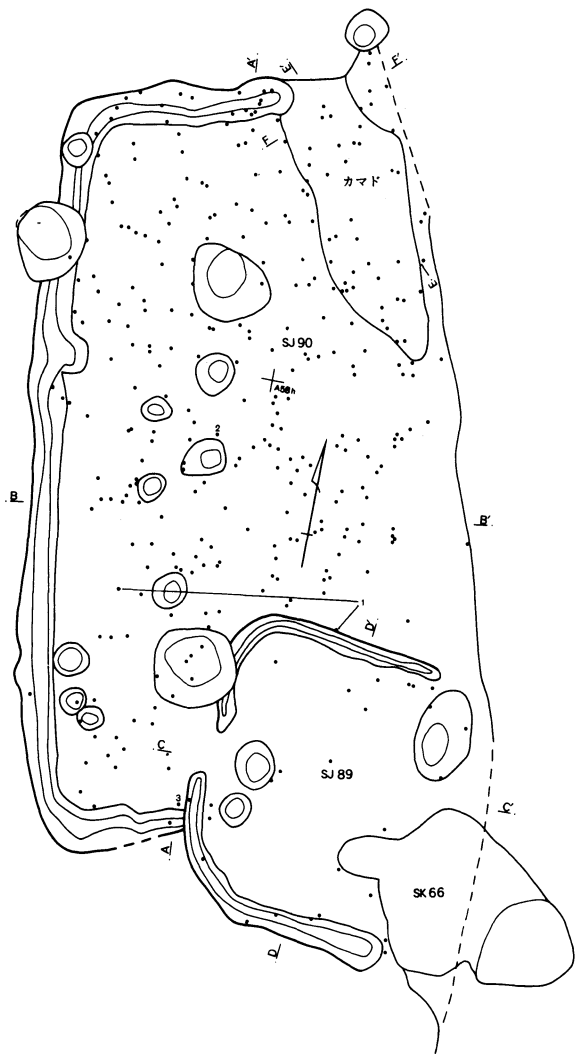
第88号住居跡は、A58hグリッドに位置する。北半部で第13号方形周溝墓・第91号住居跡を切り、南半部では第14号方形周溝墓・第93号住居跡を切る。土壌58・62・66、第46号・第48号溝跡、および火葬墓に切られる。プラン確認の段階では、2~3軒の住居跡を予想したが、結果的に1基の遺構であった。特異な規模・形態をもち、住居跡ではなく、性格不明遺構とすべきかも知れない遺構である。部分的に途切れるが、壁溝がほぼ全周すると推定される。土層断面、エレベーション図(第257図・第258図)における計測値を示す。深さについては確認面から床面までの他、()内に掘り方底面までの数値を掲げておく。A-A' : 全長1580cm・深さ48cm (108cm)、C-C' : 幅44cm・深さ48cm (114cm)、D-D' : 幅402cm・深さ36cm (108cm)、E-E' : 幅480cm・深さ(48cm)、F-F' : 幅420cm・深さ36cm、G-G' : 幅444cm・深さ48cm (96cm)を測る。掘り方底面は整った平坦面であり、版状に2層~5層重ねたのち、貼床を行っている。貼床は第11層が該当する。ピットとの関連については、色調的に区別しなかったため、新旧関係は不明といわざるをえない。しかし調査時の印象では、ピットが切っており、本遺構に伴わないと思われた。柱穴やカマドも検出されず、貯蔵穴の類も同様であった。出土遺物はそれ程多くはなく、図化し得たのは3点であるが、3については1・2と時期的に異なり混入であろうか。第47号・第48号溝跡と重複するが、覆土は堅固によく締まったものであり、道状の遺構ではないかとの推定もされた。

第88号住居跡出土遺物 (第259図)

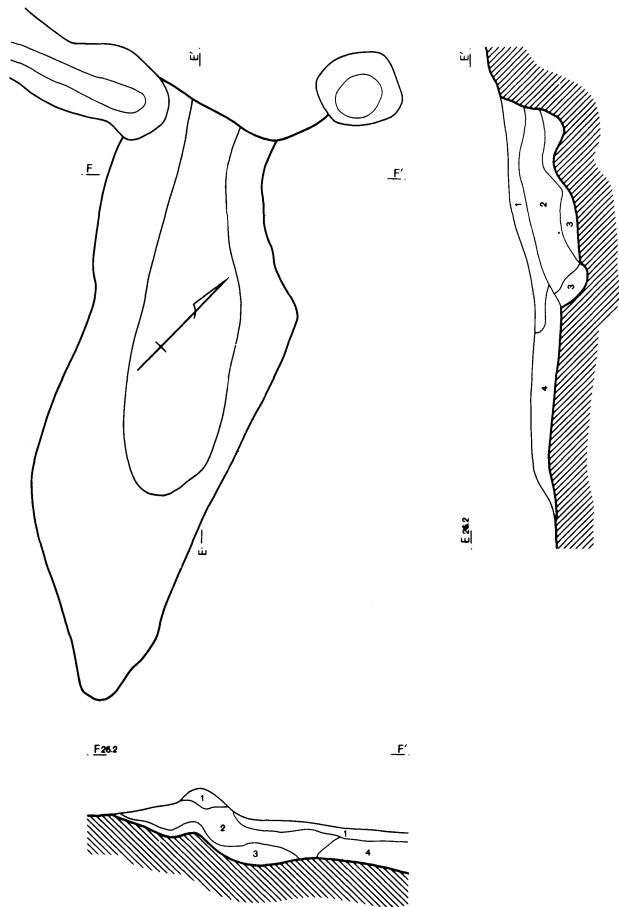
番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径 (20.3) 現存高 5.9	器面は摩滅している。口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削りか、内面はナデか。橙色。	A+B+D+E+H □20 焼成：普
2	甕	口径 (20.8) 現存高 7.5	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面はヘラ削りの後、粗いナデ、内面は丁寧なナデ。橙色。	A+B+J □20 体10 焼成：良
3	坏	口径 (14.4) 底径 6.7 現存高 5.5	高台部欠損。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部は回転糸きり離しの後付高付。灰色。床下	B+E+J 坏47 底100 焼成：不良



第260図 第88号住居跡出土遺物



第261図 第89・90号住居跡



第90号住居跡土層註記 A-A'

- 1 暗黄褐色土 ロームを主とする層。しまり不良。
- 2 黒褐色土 ローム粒・炭化物含有。しまり不良。
- 3 黒褐色土 多量のロームブロック含有。

B-B'

- 1 黒褐色土 ローム粒・カーボン微量。しまり・粘性やや強。
- 2 暗褐色土 焼土粒少。しまり・粘性弱。
- 3 暗褐色土 ローム粒少、カーボン微量。しまり・粘性やや強。
- 4 暗黄褐色土 ローム粒若干、カーボン微量。しまり・粘性やや強。

カマド土層註記

- 1 青灰色土 粘土層中に砂粒若干。しまり強、粘性やや強。
- 2 赤味を帯びた褐色土 青灰色粘土粒、焼土粒・カーボン若干。しまり強、粘性やや弱。
- 3 赤褐色土 焼土粒・ローム粒少、カーボン若干。しまり強、粘性やや弱。
- 4 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少。しまり強、粘性やや弱。

第262図 第90号住居跡電跡

第89号住居跡 (第261図)

第89号住居跡は、A58 d グリッドに位置する。北側で第90号住居跡を切り、東側ではごく僅かの重複ではあるが第88号住居跡を切っている。3軒共に、覆土の色調がきわめて類似をしており、かなりの掘り下げを行うまで、プランを把握することは困難であった。主軸方向はN-10° - Eを指す。エレベーションD-D'の右側(東側)にみられる壁溝は、本住居跡に伴うものと推定される。

規模は南北240cm・東西は壁溝を参考にすれば推定240cmとなり、ほぼ方形に近くなる。確認面からの深さは8cmを測る。一部途切れるが、幅12cm・深さ6cm程の壁溝が巡る。床面はきわめて堅固なものであった。カマド・柱穴・貯蔵穴等々は検出されていない。

第90号住居跡 (第261・262図)

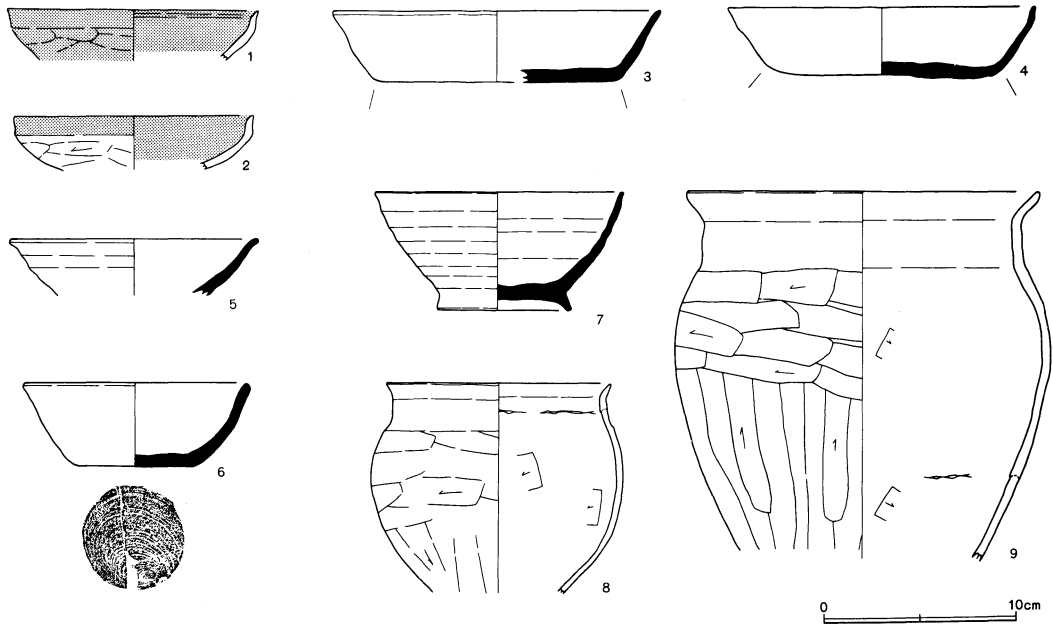
第90号住居跡はA57 i グリッドに位置する。東側を第88号住居跡に、南側を第89号住居跡によって切られており、西側半分の遺存であった。カマドも第88号住居跡によって切られており、残った部分についても、南側に流れ出していた。第3層が焚口部に相当すると推定されるが、カマドとしての原形は殆どとどめてはいない。北カマドであるが、北壁中央よりやや西側に位置しているとも

考えられる。

南北588cm、確認面からの深さは30cmを測る。主軸方向はN-7°-Wを指し、第88号住居跡も湾曲してはいるが、長軸を設定すれば同方向を示しているといえる。幅24cm・深さ12cm程の壁溝が巡る。床面は比較的堅固なものであり、レベルは第89号住居跡のそれと、ほぼ同一のものであった。

ピットが12基検出されており、柱穴を思わせるものも2基存在したが、詳細は不明である。貯蔵穴については検出されていない。なお、壁溝にのるピット2基は、本遺構を切るものである。

遺物は、住居跡内にほぼ万遍なく分布しているが、図化し得た4点とも比較的床面に近いレベルからの出土であった。これらの遺物の他に、弥生時代に含まれる土器片なども何点か検出されているが、本住居跡への流れ込み遺物であるため、図化は省略した。



第263図 第89・90号住居跡出土遺物

1~4=第90号住居跡

5~9=第89号住居跡

第89号住居跡出土遺物 (第263図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
5	須恵器 坏	口径 (13.0) 現存高 2.9	全面：ロクロナデ。灰色。	B+H+J □25 焼成：普
6	坏	口径 11.7 底径 6.2 器高 4.4	全面：ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。 外面に一部スス附着。赤橙色。	A+B+E+J 完形 焼成：普
7	須恵器 坏	口径 (13.2) 底径 4.2 現存高 6.3	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し後付高台。 灰色。高台高0.6cm、高台径7.1cm。	B+J □55 底55 焼成：不良
8	甕	口径 (11.7) 胴径 (13.2) 現存高 11.0	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面は ヘラナデとナデ。灰褐色。	B+D+E+J □98 胴30 焼成：普
9	甕	口径 (18.4) 胴径 (19.8) 現存高 19.3	外面に一部スス附着。口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外 面はヘラ削り、内面はヘラナデとナデ。茶褐色。	A+B+D+J 焼成：普

第90号住居跡出土遺物 (第263図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	坏	口径 (13.2) 現存高 2.6	口縁部：内外面とも横ナデ。坏部：外面はヘラ削り、内面は ナデ。褐色。	A+B+J □20 焼成：やや良
2	坏	口径 (12.4) 現存高 2.8	口縁部：外面内外面とも横ナデ。体部：外面ヘラ削り、内面 はナデ。褐色。	A+B+I+J □10 焼成：普
3	坏	口径 (17.2) 現存高 3.7	全面：ロクロナデ。底部：回転ヘラ削り。 灰色。	B+H+J □20 底25 焼成：普
4	坏	口径 15.8 底径 11 器高 3.5	口縁部：内外面とも横ナデ。底部：外面はヘラ削りの後ナデ 内面はナデ。口縁部は歪んでいる。明黄褐色。	B+D+G □85 底100 焼成：普

第92号住居跡 (第264図)

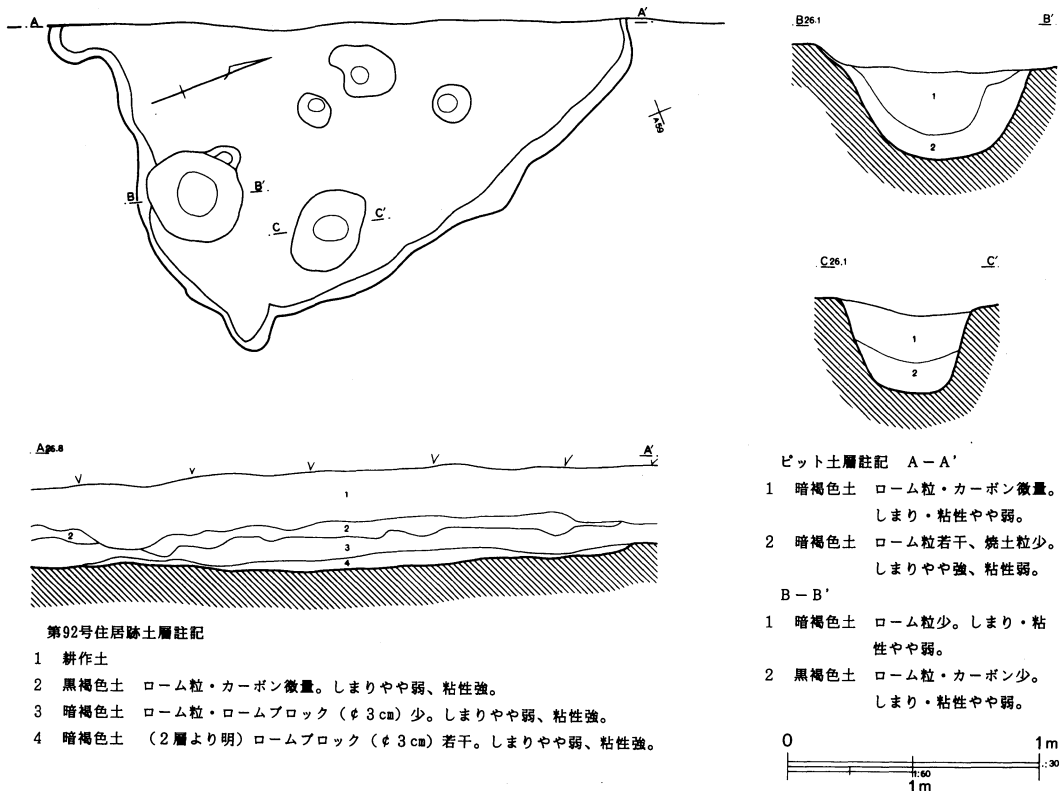
第92号住居跡は、A59hグリッドに位置する。西側は調査範囲外に続いている。検出された部分に関しても、遺存状況は良くはなかった。平面形態は、不整形な方形あるいは長方形を呈すると推定される。

計測できた範囲内での規模は、南北408cm、深さ30cmを測る。カマドは検出されておらず、北カマドあるいは西カマドであろうか。床面も比較的不明瞭であり、凹凸も多い。住居跡内から、土壇2基・ピット3基が検出されているが、南側(土層断面B-B')の土壇は貯蔵穴であろうか。規模・形態は、78cm×78cmの略円形、床面からの深さは33cmを測る。いま1つの土壇は、66cm×48cmの楕円形、床面からの深さは30cmである。壁溝は検出されていない。

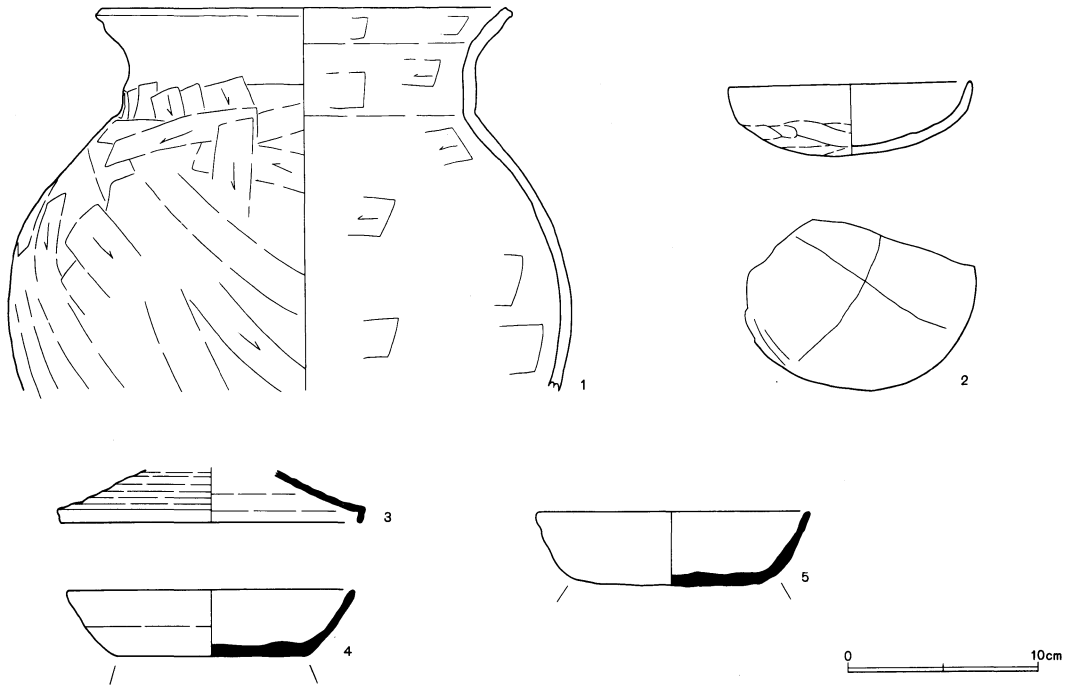
出土した遺物は少数であるが、5点を実測することができた。

第92号住居跡出土遺物 (第265図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径 21.2 現存高 20.0	口縁部：外面は横ナデ、内面はヘラナデの後横ナデ。 胴部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はヘラナデの後ナデ。 赤褐色（一部黒色）。	D+E+J □95 胴50 焼成：やや良



第264図 第92号住居跡



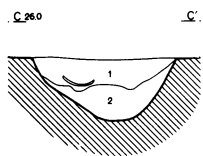
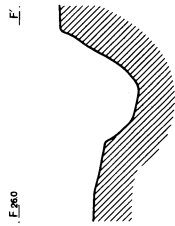
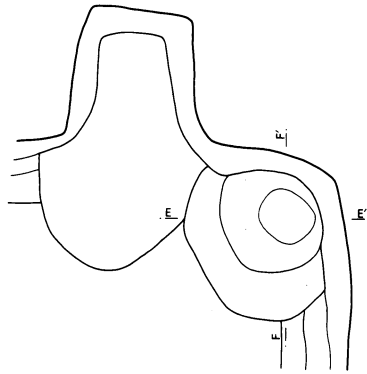
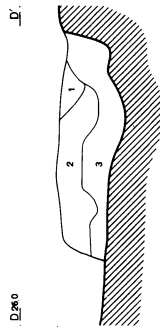
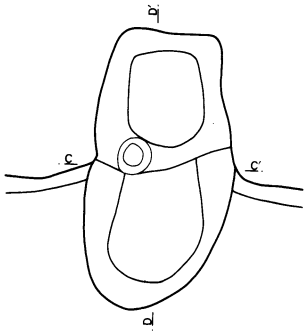
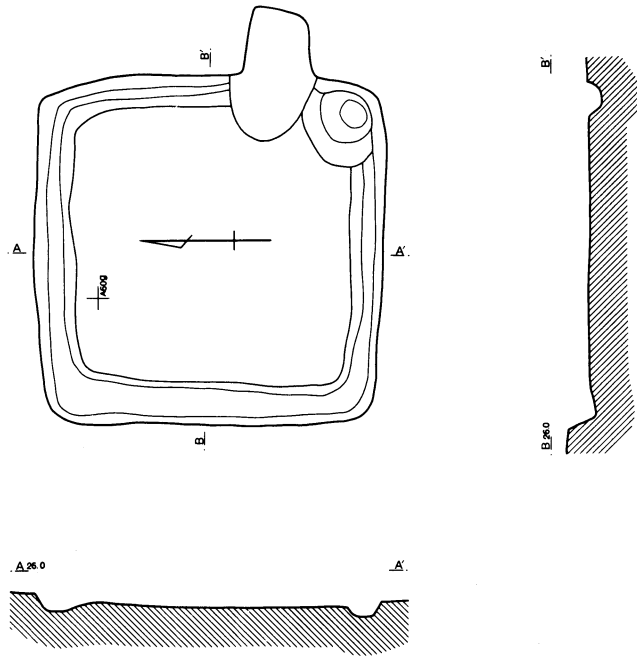
第265図 第92号住居跡出土遺物

2	坏	口径 器高	12.5 13.7	器形は歪んでいる。口縁部：内外面とも横ナデ。外面はヘラ削りの後粗いナデ、内面は粗いナデ。内面に「X」字状の刻線を有す。橙色。	A+B+C+H 口径40 坏60 焼成：普
3	須恵器 蓋	口径 現存高	(15.7) 2.8	ロクロナデ。明灰色。	B+G+J 焼成：やや不良
4	須恵器 坏	口径 底径 器高	(15) 9.8 3.4	ロクロナデ。底部：回転糸きり離し後、回転ヘラ削り。ロクロ右回転。灰黄褐色。	B+C+J 口径10 体45 底100 焼成：普
5	須恵器 坏	口径 底径 器高	13.9 9.4 3.8	口縁部：内外面とも横ナデ。底部：外面はヘラ削りの後ナデ。内面はナデ。	B+C+J+G 口径50 底90 焼成：普

第95号住居跡 (第266図)

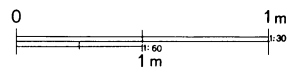
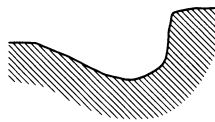
第95号住居跡は、A59hグリッドに位置する。台地の南側肩部に接するようにして立地している。今回の代正寺遺跡の調査で検出された、奈良・平安時代に属す住居跡の中で、最も南にそして最も西にあたる遺構である。

平面規模・形態は東西276cm・南北288cmのほぼ方形、確認面からの深さは18cmを測り、主軸方向はN-90°-Eを指す。非常に整った形態・主軸方向をもつ住居跡である。カマドは東壁面の中央よりやや南寄りに位置する。全長105cm・焚口幅48cmを測り、第2層が焚口部に相当すると推定さ

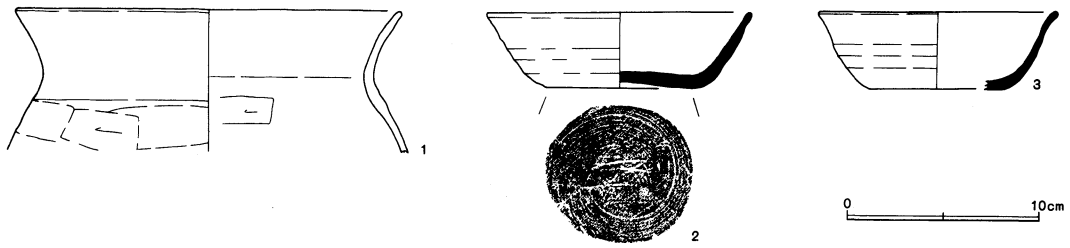


第95号住居跡カマド土層註記

- 1 赤褐色土 焼土。
- 2 暗褐色土 焼土粒子多量含有。
- 3 黒褐色土



第266図 第95号住居跡



第267図 第95号住居跡出土遺物

れる。南東コーナー部分に貯蔵穴が確認された。平面規模は60cm×51cmの略円形、床面からの深さは浅く15cmであった。幅10cm・床面からの深さ5cm程の壁溝が一巡している。柱穴・ピットなどは検出されていない。出土遺物は少なく、凶化し得た遺物は3点であった。

第95号住居跡出土遺物 (第267図)

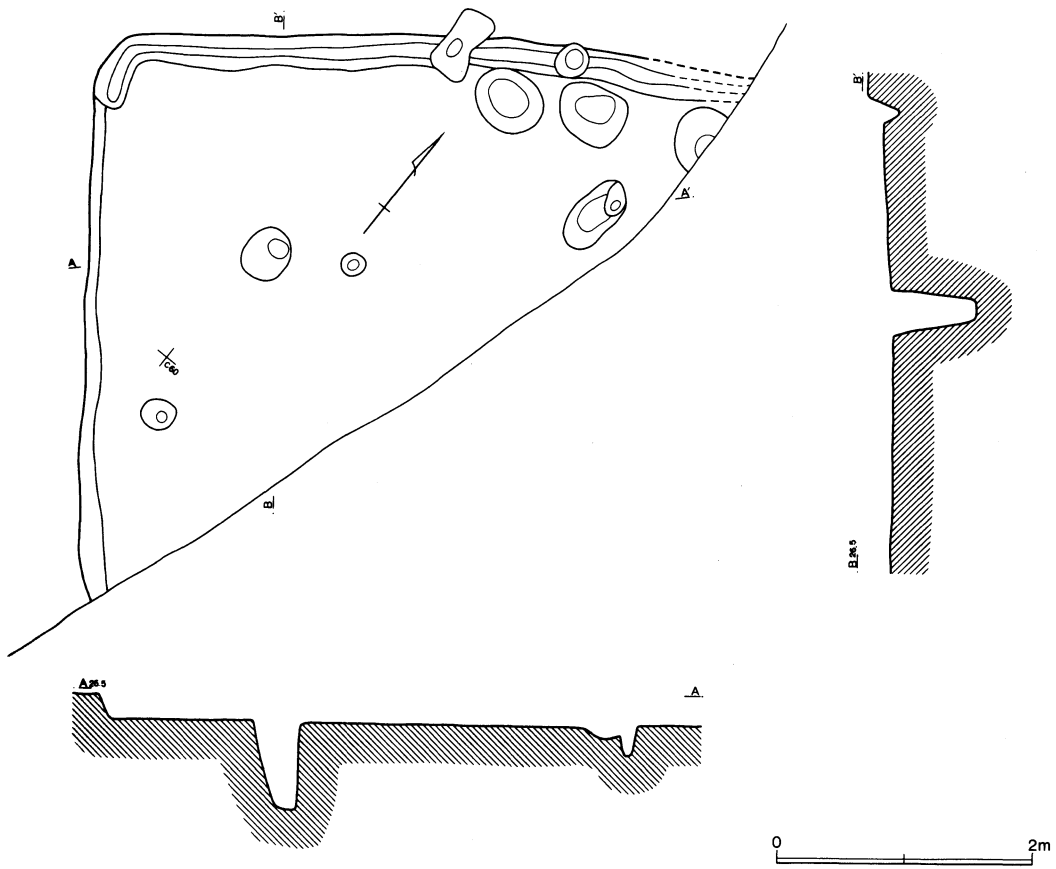
番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径 (20.2) 現存高 7.4	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。褐色。	A+B+D+F 口10 焼成：普
2	須恵器 坏	口径 13.6 底径 3.4 器高 3.9	ロクロナデ。底部：回転糸切り離しの後、回転ヘラ削り。ハトヤマ。灰色（一部黒色）。	B+I+J 完形 焼成：やや良
3	須恵器 坏	口径 (12.4) 底径 7.0 現存高 4.0	ロクロナデ。ロクロ右回転か。底部：回転手糸切り離しか。灰白色。	口15 坏15 底5 焼成：普

第96号住居跡 (第268図)

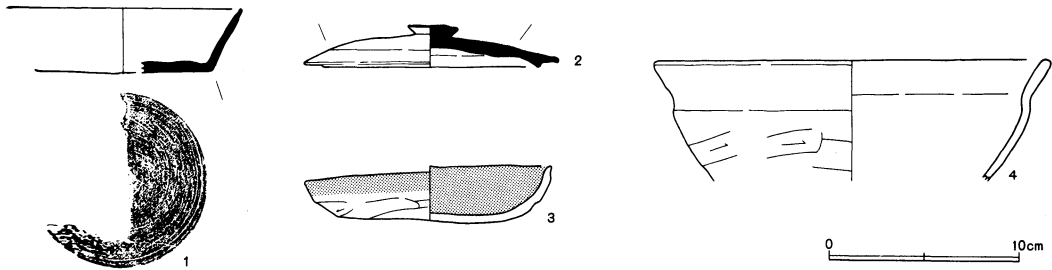
第96号住居跡は、B59 i グリッドに位置する。北側で第46号溝跡と重複し、東側は調査範囲外に続いている。平面規模は不明であるが、確認面からの深さは16cmを測り、形態は方形もしくは長方形を呈すると推定される。北西側に壁溝が検出された。幾つかのピットが確認されているが、本住居跡との関連は不明である。カマド・貯蔵穴などは検出されていない。出土遺物は少なく、凶化し得たのも4点である。3の坏については、時期的に異なる可能性があるが、共に掲げておく。

第96号住居跡出土遺物 (第269図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	須恵器 坏	口径 12.6 現存高 3.4	ロクロナデ。底部：回転糸きり後、回転ヘラ削り。灰色。	B+H+J 坏55 底50 焼成：普
2	須恵器 蓋	つまみ径 2.1 つまみ高 0.5	ロクロナデ。天井部：ヘラ削りの後ナデ。ロクロ右回転。灰色。	B+G+J 完形



第268図 第96号住居跡



第269図 第96号住居跡出土遺物

	口 径 11.2 器 高 2.2		焼成：普
3 杯	口 径 (13.2) 現存高 19.0	器形は歪んでいる。口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はナデ。赤褐色。	A+B+G+J 口70 体70 焼成：普
4 杯	口 径 20.3 現存高 6.3	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はナデ。赤褐色。	B+E+J 口25 焼成：普

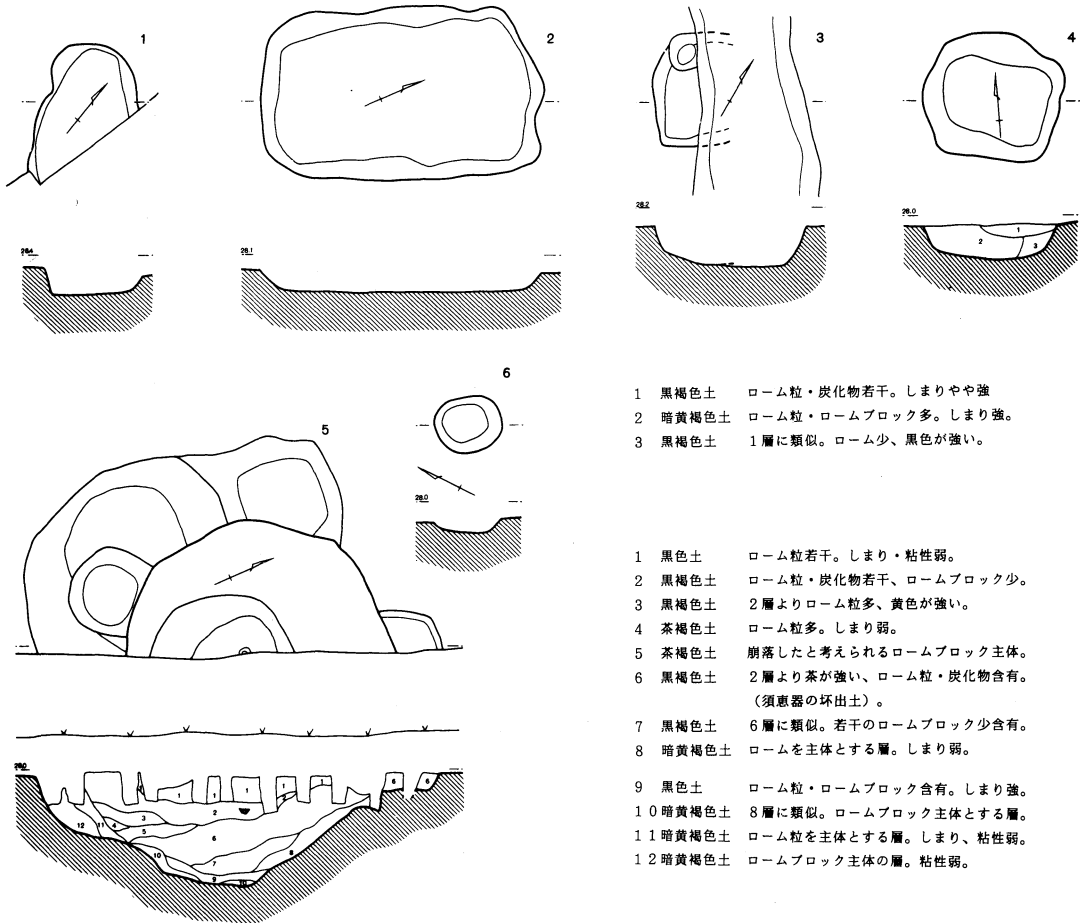
(2) 土壌 (第270図)

代正寺遺跡において検出された土壌の内、奈良・平安時代に含まれると判断されたのは6基である。奈良・平安時代土壌1からは、墨書をもつ須恵器の壺が出土しており、他の墨書土器と共に掲載をした(第272図)。また、小破片からでも、既期の遺構として想定できる土壌については、ここに含めることとした。規模や形態はさまざまであるが、方形あるいは長方形を呈し、底面が平坦なものが多いとまではいえよう。いずれもC区・D区において検出されている遺構である。

第3表 奈良平安時代土壌一覧表

番号	旧番	区	グリッド	規模(長×短×深) cm	主軸方向
1	8	C	T-15-a	- × 107 × 27	-
2	11	C	R-20-a	298 × 183 × 37	N-22° E
3		C	Q-21-c	72 × 60 × 13	N-25° W

番号	旧番	区	グリッド	規模(長×短×深) cm	主軸方向
4		D	N-25-d	143 × 131 × 35	N-73° W
5	SX8	D	O-27-g	- × - × 113	-



- 1 黒褐色土 ローム粒・炭化物若干。しまりやや強
- 2 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多。しまり強。
- 3 黒褐色土 1層に類似。ローム少、黒色が強い。

- 1 黒色土 ローム粒若干。しまり・粘性弱。
- 2 黒褐色土 ローム粒・炭化物若干、ロームブロック少。
- 3 黒褐色土 2層よりローム粒多、黄色が強い。
- 4 茶褐色土 ローム粒多。しまり弱。
- 5 茶褐色土 崩落したと考えられるロームブロック主体。
- 6 黒褐色土 2層より茶が強い、ローム粒・炭化物含有。
(須恵器の坏出土)。
- 7 黒褐色土 6層に類似。若干のロームブロック少含有。
- 8 暗黄褐色土 ロームを主体とする層。しまり弱。
- 9 黒色土 ローム粒・ロームブロック含有。しまり強。
- 10 暗黄褐色土 8層に類似。ロームブロック主体とする層。
- 11 暗黄褐色土 ローム粒を主体とする層。しまり、粘性弱。
- 12 暗黄褐色土 ロームブロック主体の層。粘性弱。

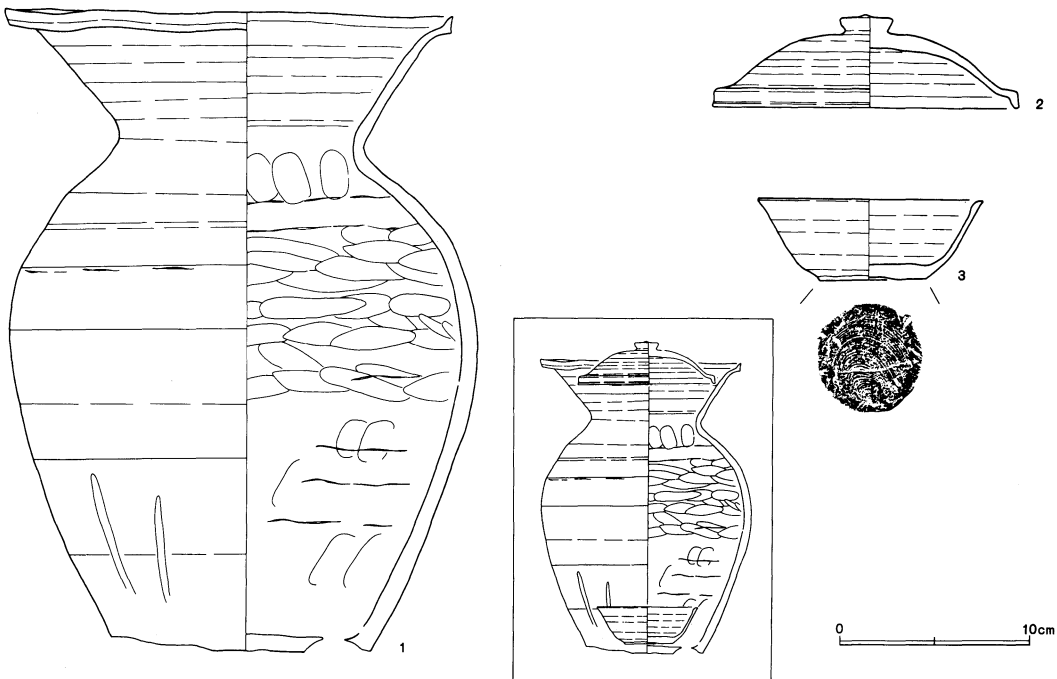
第270図 平安時代土壌

(3) 蔵骨器 (第271図)

蔵骨器は、須恵器の甕・蓋・坏の3点をセットとして検出された。蔵骨器を納めた土壌については、第15号古墳跡の周溝覆土を切っているため、遺構として確認することはできなかった。底部の一部を打ち欠いたか、あるいは欠損した甕に坏を置き、骨を納めた後、蓋をした状態が、立位で出土をした。なお人骨については、国立歴史民俗博物館の西本豊弘氏の御教示によれば、人骨は非常によく焼けて収縮した成人骨であり、男性の可能性が高いとのことであった。

蔵骨器 (第271図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	須恵器 甕	口径 (23.5) 胴径 24.6 底径 (13.7) 器高 33.5	口縁はやや波打つ。口縁内面と胴部外面上半に自然釉付着。ロクロナデ。外面：丁寧な横ナデ、内面：指頭幅くらいの単位による（一部凹凸の激しい）器面調整。底部：30%を残し欠損、1×2cm程の孔をもつ。意図的な打ち欠き・穿孔か。胴部内面に輪積み痕が多くみられる。外面に黒色粒斑文。灰～灰黒色。	B+J 口35 胴100 底35 焼成：普
2	須恵器 蓋	つまみ径 2.8 口径 (16.0) 器高 4.8	全体的にシャープでしっかりしたつくりである。つまみは芯よりずれる。ロクロナデ。ロクロ右回転。灰色。	B+J(多) つまみ100 体45 焼成：良
3	須恵器 坏	口径 11.8 底径 5.1 器高 4.2	表面平滑さを欠く。素地がかなり湿った状態で横ナデ調整を行ったためか。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。胎土はあまり精製されていない。灰色。	B+J 口80 体100 焼成：良



第271図 蔵骨器

(4) 墨書土器 (第272図)

代正寺遺跡において、墨書土器は4点が出土しているが、出土遺構については2基と推定される。即ち、第272図1～3を出土した土壌、同図4を出土した奈良・平安時代土壌1の2基である。1～3については、D52bグリッドから一括して検出された資料である。ちなみに、大西遺跡で検出された墨書土器は2点である。

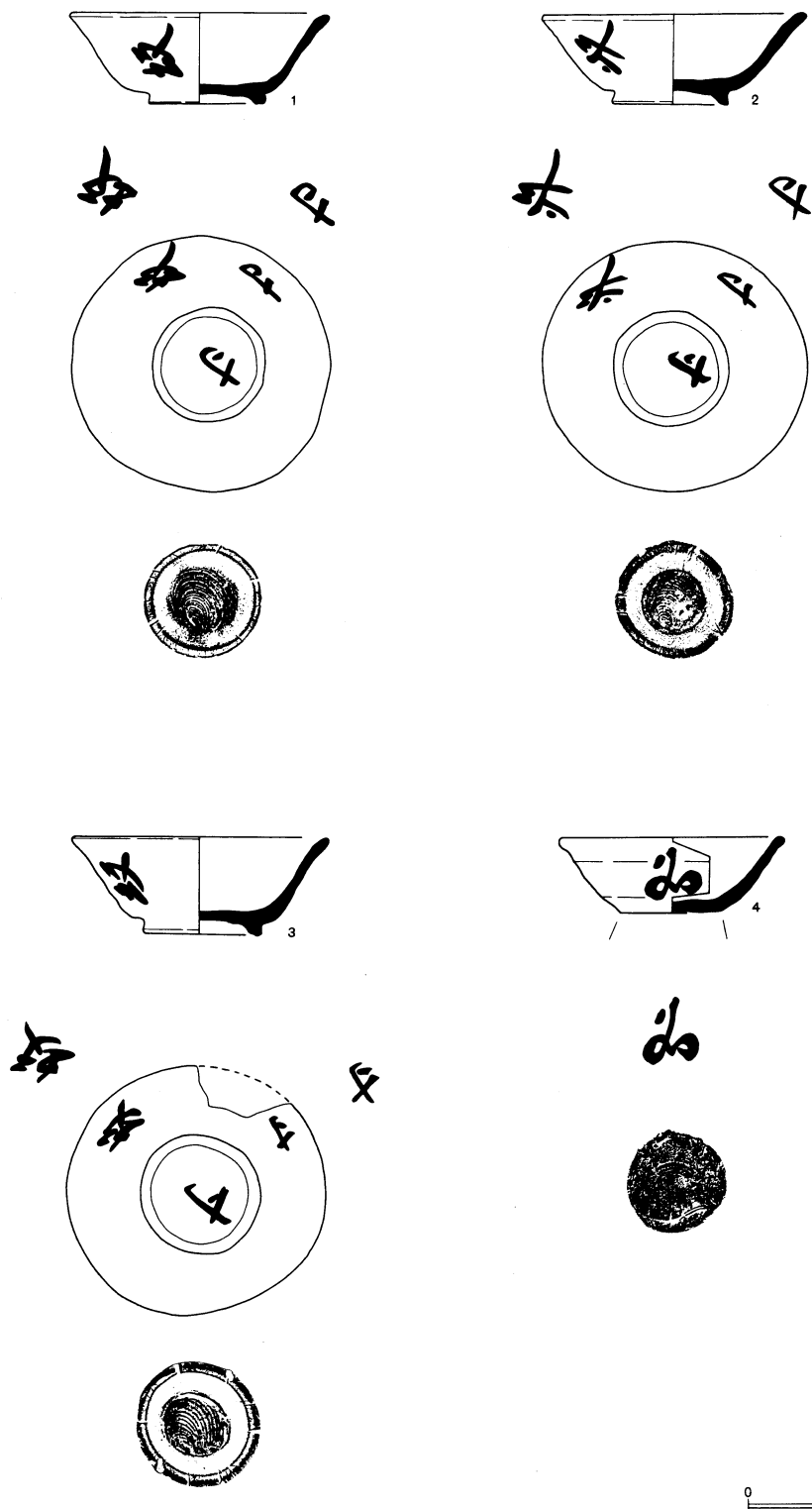
これらは、第15号古墳跡の周溝覆土からの出土であり、周溝を切っている土壌の存在が想定されるが、周溝覆土と土壌覆土に色調などの明瞭な相違点がなかった。そのため、残念ながら遺構として検出するには至らなかった。

墨書を有するのは、いずれも須恵器の高台付きの坏であり、形態・法量についても共通する。文字そのものにおいても、3点とも1字について「坂」であるのか確定できないが、同じ文字であると推定される。判読できない文字を除き、概ね遺存状況は良好である。そして、これらの遺物3点は、墨書の文字・数・位置、およびそれぞれの位置関係が共通であるといえる。また、図化に際して表現することはできなかったが、筆跡そのものに関しても同じではないかと思われた。

4については、T15aグリッド内に位置する、奈良・平安時代土壌1から出土した資料である。須恵器坏の体部外面に、「名」の1文字が検出されているが、遺存状況も良く大変に明瞭な墨書である。この土壌からは、この墨書土器が、完形で1点出土したのみである。

墨書土器 (第272図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	須恵器 坏	口径 13.4 高台径 6.0 高台高 0.5 器高 4.7	D52bグリッド内の、ST15周溝内より出土。器形はやや歪む。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離した後、付け高台。灰黄色。外面に墨書を3字有する。体部は「寸」・「坂」か。底部は「寸」。灰褐色。	B+D+J+ (小碟) ほぼ完形 焼成：不良
2	須恵器 坏	口径 13.7 高台径 6.0 高台高 0.7 器高 4.7	D52bグリッド内の、ST15周溝内より出土。器形はやや歪む。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離した後、付け高台。灰黄色。外面に墨書を3字有する。体部は「寸」・「坂」か。底部は「寸」。灰褐色。	B+D+J+ (小碟) 完形 焼成：やや不良
3	須恵器 坏	口径 13.2 高台径 6.0 高台高 0.6 器高 4.9	D52bグリッド内の、ST15周溝内より出土。器形はやや歪む。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離した後、付け高台。灰黄色。外面に墨書を3字有する。体部は「寸」・「坂」か。底部は「寸」。灰褐色。	B+D+J+ (小碟) 口80 底100 焼成：やや不良
4	須恵器	口径 11.6 底径 5.1 器高 4.0	T15aグリッド内、奈良・平安時代土壌1より出土。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切底部切り離し。体部外面に墨書「名」。灰褐色。	B+C+H+J 完形 焼成：やや不良



第272图 G区内墨书土器

4 中近世の遺構と遺物

(1) 土壌 (第273図～第285図)

代正寺遺跡において検出された、中近世に属すると推定された土壌は242基におよぶ。この他に、時期区分を行えなかったG区・H区90基の大部分は、中近世の遺構と想定される。これらのことから、総数は300基を越すものと判断される。G区・H区の土壌を含めなくとも、A区からF区まで万遍なく分布しており、形態や規模も実に様々である。形態については、平面形と断面形をもとに分類することができよう。つまり平面形では、1：円系統、2：方系統、3：不整形の3種、断面形では、A：壁面がほぼ垂直に立ち上がるもの、B：オーバーハングするもの、C：播鉢状を呈するもの、D：その他。以上の組み合わせによって幾タイプかに分けられるが、本遺跡では遺構の遺存度が全体的にきわめて悪く、そのため分類は行わず、機械的に遺構番号順に掲載をした。

第4表 中近世土壌一覧表

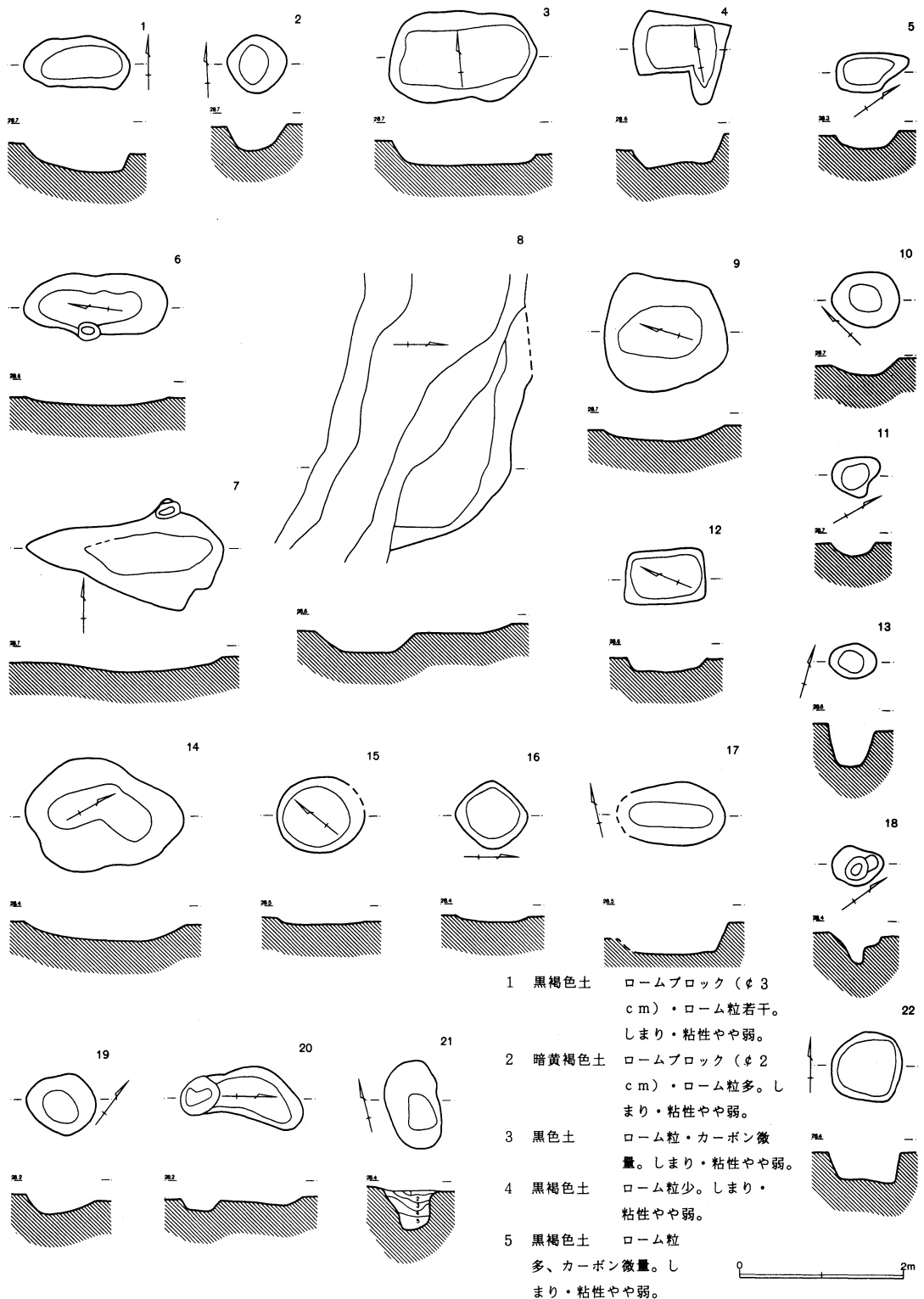
番号	旧番	区	グリッド	規模 (長×短×深) cm	主軸方向	番号	旧番	区	グリッド	規模 (長×短×深) cm	主軸方向
1		A	V-6-d	130 × 62 × 27	N-90-E	30		C	R-12-f	64 × 59 × 13	N
2		A	V-6-d	73 × 71 × 32	N	31	3	C	R-13-d	100 × 95 × 42	N-47-E
3		A	W-6-g	178 × 109 × 25	N-85-W	32		C	S-13-d	134 × 87 × 11	N-90-E
4		A	W-6-i	112 × 68 × 32	N-79-W	33		C	U-13-a	70 × 60 × 7	N-66-W
5		A	T-7-c	78 × 49 × 18	N-33-E	34		C	U-13-d	- × - × 18	-
6		A	T-7-i	177 × 73 × 11	N-9-W	35		C	R-14-a	- × 40 × 11	-
7		A	U-7-a	244 × 98 × 7	N-90-E	36		C	Q-14-i	- × - × 15	-
8		A	U-7-a	- × - × 10	-	37		C	S-14-b	82 × 61 × 28	N
9		A	W-7-d	151 × 136 × 17	N-15-W	38		C	S-14-c	65 × 53 × 24	N-90-E
10		A	W-7-b	84 × 68 × 7	N-44-W	39		C	S-14-c	71 × 71 × 13	N
11		A	U-8-d	54 × 46 × 17	N-27-E	40		C	S-14-c	65 × 65 × 10	N
12	203	A	T-8-h	100 × 67 × 17	N-20-W	41		C	Q-15-c	- × - × 14	-
13		A	U-10-f	59 × 44 × 49	N-76-E	42		C	T-14-c	137 × 69 × 65	N-80-E
14		A	V-8-d	195 × 138 × 24	N-29-E	43		C	Q-15-c	60 × 65 × 12	N-22-E
15		A	V-9-a	107 × 90 × 6	N-40-W	44		C	Q-15-f	- × 62 × 8	N-53-W
16		A	S-10-i	78 × 73 × 8	N-46-E	45		C	S-15-f	- × - × 6	-
17		A	T-10-b	(113) × 74 × 33	N-78-W	46	246	C	P-16-g	- × - × 26	-
18		B	U-12-c	64 × 49 × 36	N-35-E	47	247	C	P-17-i	300 × - × 25	-
19		B	U-12-i	85 × 71 × 23	N-50-E	48		C	S-16-i	120 × 80 × 26	N
20		B	U-12-h	145 × 61 × 16	N	49	246	C	P-17-h	175 × - × 26	-
21	2	C	S-11-g	113 × 108 × 48	N-20-E	50		C	P-17-i	195 × 44 × 16	N-10-W
22	249	C	S-11-e	87 × 85 × 32	N-90-E	51		C	S-17-e	- × 60 × 5	-
23	250	C	S-11-f	86 × 86 × 21	N	52		C	Q-18-f	123 × 108 × 6	N
24	251	C	S-11-f	71 × 64 × 23	N-34-W	53		C	R-18-e	109 × 55 × 9	N-13-E
25	1	C	S-11-e	106 × 97 × 20	N-20-W	54		C	S-18-a	- × 104 × 14	-
26		C	S-11-h	140 × 28 × 8	N-5-E	55	9	C	R-18-h	352 × 195 × 19	N-20-E
27	254	C	T-11-a	- × - × 30	-	56		C	S-18-g	- × 90 × 10	-
28	252	C	T-11-d	85 × 83 × 40	N-12-E	57		C	P-19-h	156 × 120 × 10	N-70-W
29	253	C	T-11-d	68 × 61 × 20	N-12-E	58		C	Q-19-f	64 × (64) × 5	-

番号	旧番	区	グリッド	規模 (長×短×深) cm	主軸方向
59		C	Q-19-f	98 × 44 × 5	N-27-W
60		C	R-19-d	105 × (78) × 15	N-49-W
61		C	R-19-d	- × 40 × 15	-
62		C	R-19-d	70 × 70 × 15	-
63	10	C	R-19-c	386 × 183 × 50	N-59-W
64		C	R-19-h	(180) × 75 × 9	N-79-W
65		C	O-20-c	117 × 82 × 9	N-70-W
66		C	P-20-b	- × 100 × 10	-
67	50.51	C	P-20-d	265 × 132 × 87	N-15-W
68	13	C	Q-20-g	- × 140 × 75	-
69	14	C	Q-20-g	171 × 90 × 18	N-65-E
70		C	Q-20-e	98 × (95) × 27	N-90-E
71		C	Q-20-h	120 × 96 × 18	N-40-E
72		C	Q-20-c	(135) × 75 × 18	N-82-E
73		C	R-20-d	127 × 88 × 8	N-7-W
74		C	R-20-d	89 × 65 × 10	N-69-E
75		C	R-20-g	- × 75 × 12	-
76		C	O-21-b	- × 90 × 13	-
77		C	P-21-e	65 × 59 × 17	N-7-E
78		C	Q-21-b	150 × 121 × 26	N-59-W
79		C	Q-21-c	72 × 60 × 13	N-25-E
80		C	Q-20-g	190 × (157) × 30	N-30-E
81		C	Q-21-a	365 × 220 × 26	N-90-E
82	39	D	O-21-g	114 × (70) × 26	N-60-W
83	21	D	P-21-i	176 × 67 × 36	N-21-E
84	43	D	O-22-g	69 × 56 × 25	N-17-W
85	27	D	P-21-g	(104) × 70 × 10	N-10-W
86	20	D	P-22-b	280 × 129 × 41	N-70-E
87	47	D	N-23-h	190 × 114 × 14	N-16-E
88	42	D	O-23-d	200 × 95 × 20	N-25-E
89	41	D	O-23-d	170 × 88 × 20	N-25-E
90	70	D	N-24-b	264 × - × 20	N-34-W
91	48.49	D	N-24-e	105 × 79 × 14	N-13-W
92	76	D	N-24-f	175 × 120 × 14	N-53-W
93	74	D	O-24-f	163 × 117 × 10	N
94		D	P-24-a	76 × 59 × 16	N-27-E
95		D	P-33-h	70 × 42 × 20	N-40-W
96	77	D	P-24-a	88 × 78 × 14	N-37-E
97	78	D	P-24-d	80 × 70 × 14	N-43-E
98	72	D	P-24-e	95 × 92 × 12	N
99	37	D	P-24-b	- × 145 × 18	-
100	73	D	P-24-e	92 × 55 × 19	N-75-W
101	75	D	P-24-g	117 × 117 × 5	-
102	36	D	M-25-i	100 × 95 × 54	N-82-W
103	40	D	N-25-h	86 × 77 × 20	N
104	SX4	D	P-25-a	380 × 160 × 10	N-90-E

番号	旧番	区	グリッド	規模 (長×短×深) cm	主軸方向
105	79	D	M-28-d	94 × 94 × 1	-
106	80	D	L-29-g	85 × 72 × 25	N-52-E
107	82	E	K-31-f	120 × 115 × 35	N-90-E
108	81	E	K-32-a	105 × 87 × 14	N-80-W
109		E	K-32-e	115 × 115 × 20	-
110	83	E	K-32-c	- × 45 × 21	-
111	85	E	K-32-h	117 × 100 × 22	N-73-E
112		E	K-32-g	261 × 176 × 22	N-2-E
113	SX11	E	L-32-i	- × 171 × 15	-
114	SX10	E	L-32-i	- × 383 × 85	-
115	86	E	L-33-f	235 × 105 × 40	N-82-E
116	87	E	M-33-d	- × 113 × 53	-
117		E	J-34-c	116 × 74 × 17	N-65-W
118		E	J-34-c	108 × 99 × 28	N-15-E
119		E	J-34-f	120 × 118 × 36	N-4-E
120		E	J-34-c	90 × 74 × 21	N-61-W
121		E	J-34-c	100 × - × 84	N-36-E
122		E	K-34-d	80 × 67 × 31	N-64-E
123		E	K-34-d	220 × 175 × 24	N-36-W
124		E	K-34-e	94 × 82 × 25	N-85-E
125		E	K-34-e	122 × 84 × 16	N-45-E
126		E	K-34-h	75 × 66 × 26	N-33-E
127	90	E	K-34-g	(97) × 65 × 20	N-61-E
128	89	E	K-34-g	86 × 73 × 21	N-8-W
129		E	J-35-f	116 × 78 × 14	N-3-E
130		E	J-35-e	76 × 59 × 13	N-44-W
131		E	J-35-h	70 × 59 × 15	N-7-W
132		E	J-35-h	121 × 34 × 9	N-11-W
133		E	K-35-g	124 × 91 × 29	N-33-E
134	91	E	K-35-d	136 × 112 × 33	N-15-E
135	92	E	K-35-i	82 × 71 × 26	N
136	93	E	K-35-h	79 × 70 × 28	N-60-W
137	94	E	L-35-g	158 × 124 × 30	N-90-E
138		E	J-36-a	231 × 205 × 20	N
139		E	J-36-g	218 × 117 × 56	N-25-W
140		E	I-36-f	224 × 87 × 53	N-5-W
141		E	J-36-d	105 × 69 × 12	N-12-W
142		E	K-36-e	70 × 49 × 30	N-48-E
143		E	K-36-f	60 × 41 × 44	N-44-W
144		E	K-36-h	66 × 48 × 40	N-26-E
145		E	I-37-i	99 × 50 × 18	N-32-E
146		E	J-37-d	166 × 60 × 11	N-65-W
147		E	H-38-i	196 × 48 × 15	N-83-E
148		E	I-38-a	69 × 61 × 29	N-37-E
149		E	I-39-a	141 × 115 × 6	N
150		E	I-39-a	145 × 94 × 30	N-37-E

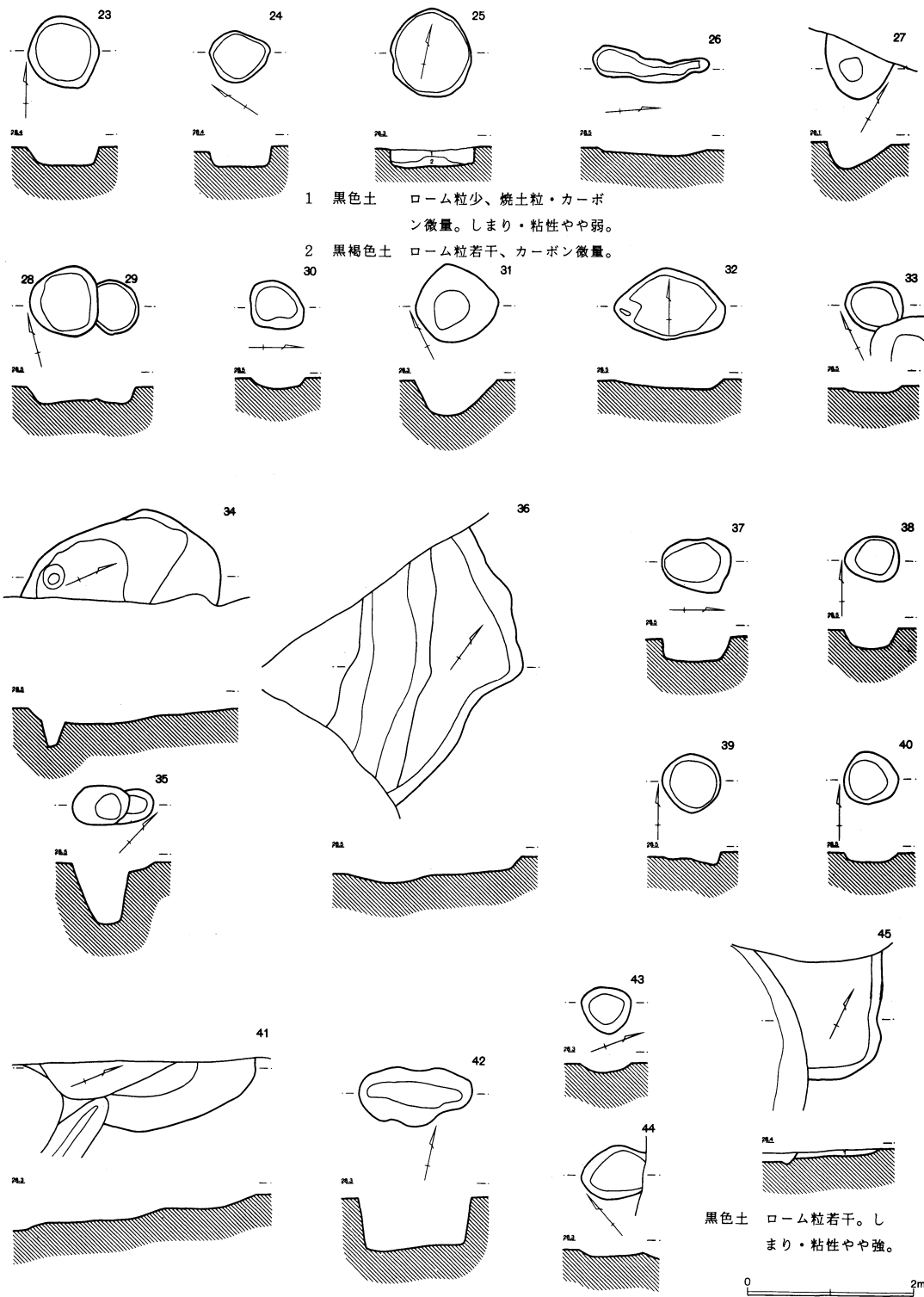
番号	旧番	区	グリッド	規模 (長×短×深) cm	主軸方向
151		E	I-39-g	138 × 80 × 27	N-14-W
152		E	I-39-c	111 × 79 × 17	N-35-E
153		E	I-39-c	128 × 73 × 10	N-33-W
154	96	E	J-39-a	139 × 120 × 14	N-25-W
155	99	F	H-41-a	140 × 90 × 15	N-90-E
156	101	F	H-40-i	118 × 69 × 15	N-51-E
157	102	F	H-41-e	160 × 155 × 5	N-90-E
158	104	F	H-41-f	120 × 65 × 9	N-40-E
159	103	F	H-41-f	131 × 48 × 10	N-23-E
160	100	F	H-41-i	170 × 108 × 21	N-8-E
161	105	F	H-41-i	74 × 60 × 12	N
162	108	F	G-42-i	(98) × 65 × 15	N-22-W
163	107	F	H-42-h	(176) × (115) × 16	N-17-E
164	109	F	H-43-h	106 × 77 × 21	N
165	110	F	H-43-i	242 × 134 × 24	N
166	111	F	G-44-c	102 × 100 × 9	N-90-E
167	134	F	G-44-h	125 × 80 × 23	N-67-E
168	127	F	G-44-i	111 × 82 × 20	N-58-W
169	123	F	H-44-g	131 × 103 × 15	N
170	120	F	H-44-a	175 × 28 × 16	N-90-E
171	119	F	H-44-a	95 × 45 × 13	N-79-W
172	118	F	H-44-c	126 × 93 × 16	N-43-W
173	121	F	H-44-e	93 × 54 × 9	N-83-E
174	122	F	H-44-e	120 × 110 × 50	N-90-E
175	SX14	F	H-44-h	- × - × 84	-
176	155	F	G-45-g	74 × 66 × 47	N
177	141	F	F-45-d	123 × 84 × 64	N
178	133	F	F-45-f	93 × 78 × 6	N-33-E
179	132	F	F-45-f	124 × 75 × 23	N-90-E
180	135	F	G-45-i	70 × 46 × 64	N-25-E
181	130	F	H-45-a	168 × 86 × 23	N-9-W
182	131	F	H-45-a	130 × 60 × 14	N-90-E
183	148	F	F-46-a	430 × 202 × 20	N-78-W
184	140	F	F-46-b	205 × 120 × 18	N
185	144	F	F-46-e	194 × 170 × 39	N-42-E
186	160	F	F-46-c	93 × 47 × 65	N-6-W
187	158	F	F-46-e	73 × 50 × 49	N-10-W
188	143	F	G-46-f	200 × 136 × 54	N-14-E
189	142	F	G-46-f	288 × 225 × 110	N
190	189	F	G-46-f	(166) × (120) × 103	N-45-W
191	157	F	F-46-f	129 × 55 × 31	N
192	159	F	F-46-i	64 × 40 × 50	N
193	161	F	G-46-g	112 × 77 × 56	N-26-E
194	154	F	G-46-e	124 × 115 × 36	N-82-W
195	153	F	G-46-g	109 × 74 × 11	N-69-E
196	147	F	G-46-g	(175) × 128 × 20	N-56-W

番号	旧番	区	グリッド	規模 (長×短×深) cm	主軸方向
197	146	F	G-46-g	130 × 104 × 97	N-71-W
198	145	F	G-46-g	165 × 85 × 35	N-11-E
199	152	F	G-46-g	224 × (138) × 54	N-70-W
200		F	G-46-g	- × 74 × 6	-
201	150	F	G-47-a	- × 148 × 62	-
202	151	F	G-47-a	- × 98 × 27	-
203	187	F	E-47-i	110 × 76 × 40	N-33-E
204	170	F	E-47-e	129 × 85 × 42	N-24-E
205	182	F	E-47-d	- × - × 52	-
206	183	F	E-47-g	- × 75 × 45	-
207	SX18	F	E-47-f	440 × 127 × 15	N
208	181	F	E-47-f	136 × 126 × 27	N-90-E
209	162	F	F-47-b	(205) × 170 × 39	N-23-W
210	SX17	F	F-47-d	- × - × 150	-
211	178	F	F-47-d	118 × 100 × 9	N-90-E
212	177	F	F-47-d	(336) × (267) × 88	N-15-E
213	179	F	F-47-d	- × - × 28	-
214	163	F	F-47-h	92 × 83 × 14	N-38-W
215	164	F	F-47-h	145 × 104 × 8	N-75-E
216	188	F	F-48-a	130 × 93 × 30	N-8-E
217	189	F	F-48-d	102 × 64 × 17	N-4-E
218	175	F	E-48-i	145 × 115 × 80	N-85-W
219	193	F	E-48-g	83 × 70 × 58	N-82-W
220	194	F	E-48-g	55 × 45 × 45	N-78-W
221	192	F	E-48-g	73 × 47 × 60	N-17-W
222	184	F	E-48-c	120 × 89 × 44	N-32-E
223	185	F	E-48-f	- × 66 × 13	-
224	167	F	F-48-f	116 × 94 × 10	N-50-E
225	168	F	F-48-c	126 × 104 × 25	N-90-E
226	166	F	F-48-f	134 × 98 × 48	N-79-W
227	165	F	F-48-d	130 × 110 × 15	N-60-W
228	198	F	D-49-e	- × 58 × 26	-
229	197	F	D-49-c	- × - × 14	-
230	196	F	D-49-c	(121) × 90 × 15	N-9-E
231	195	F	D-49-c	(157) × 106 × 25	N-21-W
232	190	F	E-49-c	- × - × 35	-
233	174	F	F-49-d	160 × (93) × 10	N-17-E
234	173	F	F-49-c	120 × 64 × 24	N-80-W
235	191	F	E-49-e	150 × 95 × 11	N-25-E
236	169	F	F-49-c	- × 86 × 10	-
237	168	F	F-49-c	- × - × 70	-
238	171	F	F-48-a	109 × (78) × 8	N-11-E
239	SX16	F	F-48-a	197 × 116 × 17	N-11-E
240	SX16	F	F-48-a	- × - × 38	-
241	SX16	F	F-48-a	- × - × 40	-
242	176	F	F-48-a	203 × (130) × 35	N-78-E



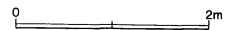
- 1 黒褐色土 ロームブロック(φ3 cm)・ローム粒若干。しまり・粘性やや弱。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック(φ2 cm)・ローム粒多。しまり・粘性やや弱。
- 3 黒色土 ローム粒・カーボン微量。しまり・粘性やや弱。
- 4 黒褐色土 ローム粒少。しまり・粘性やや弱。
- 5 黒褐色土 ローム粒多、カーボン微量。しまり・粘性やや弱。

第273図 中近世土壌(1)

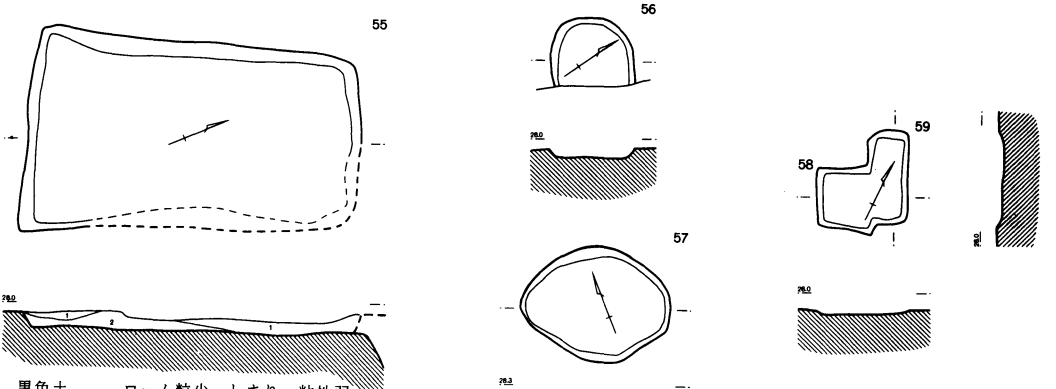
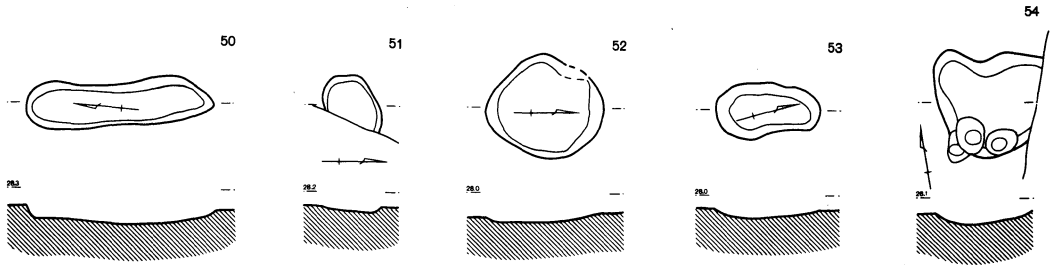
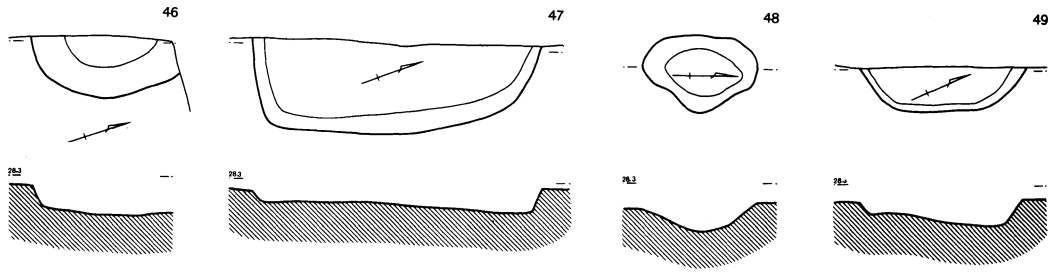


- 1 黒色土 ローム粒少、焼土粒・カーボ
ン微量。しまり・粘性やや弱。
- 2 黒褐色土 ローム粒若干、カーボン微量。

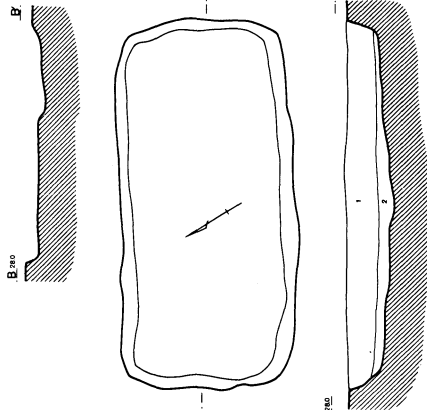
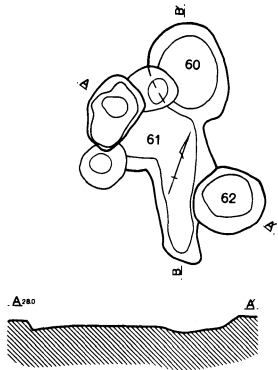
黒色土 ローム粒若干。し
まり・粘性やや強。



第274図 中近世土壌(2)



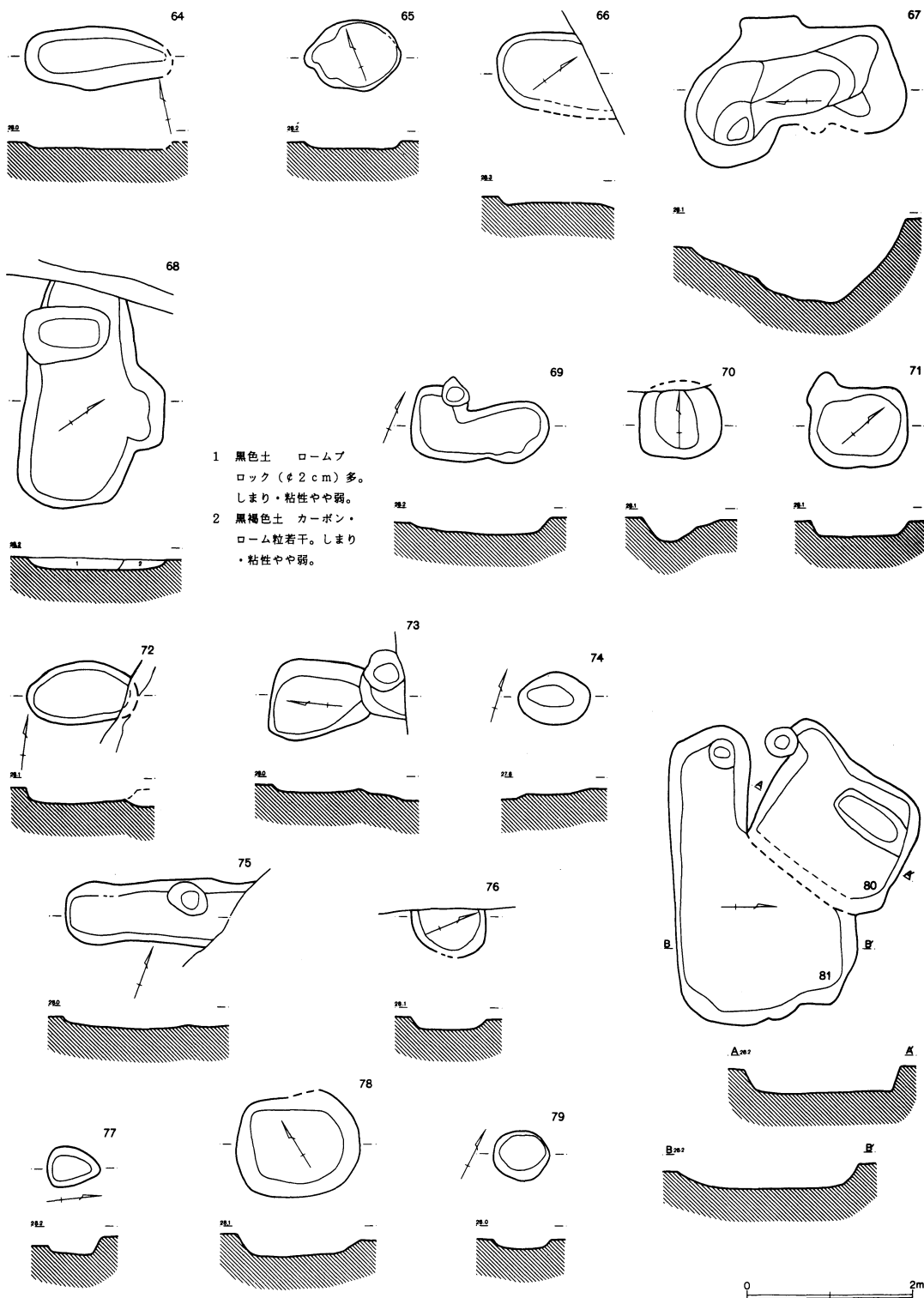
- 1 黒色土 ローム粒少。しまり・粘性弱。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック (φ 3 cm) ・ローム粒非常に多。



- 1 黒褐色土 ロームブロック (φ 4 cm) ・ローム粒若干。しまり・粘性やや弱。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック (φ 2 cm) ・ローム粒非常に多。しまり・粘性やや弱。

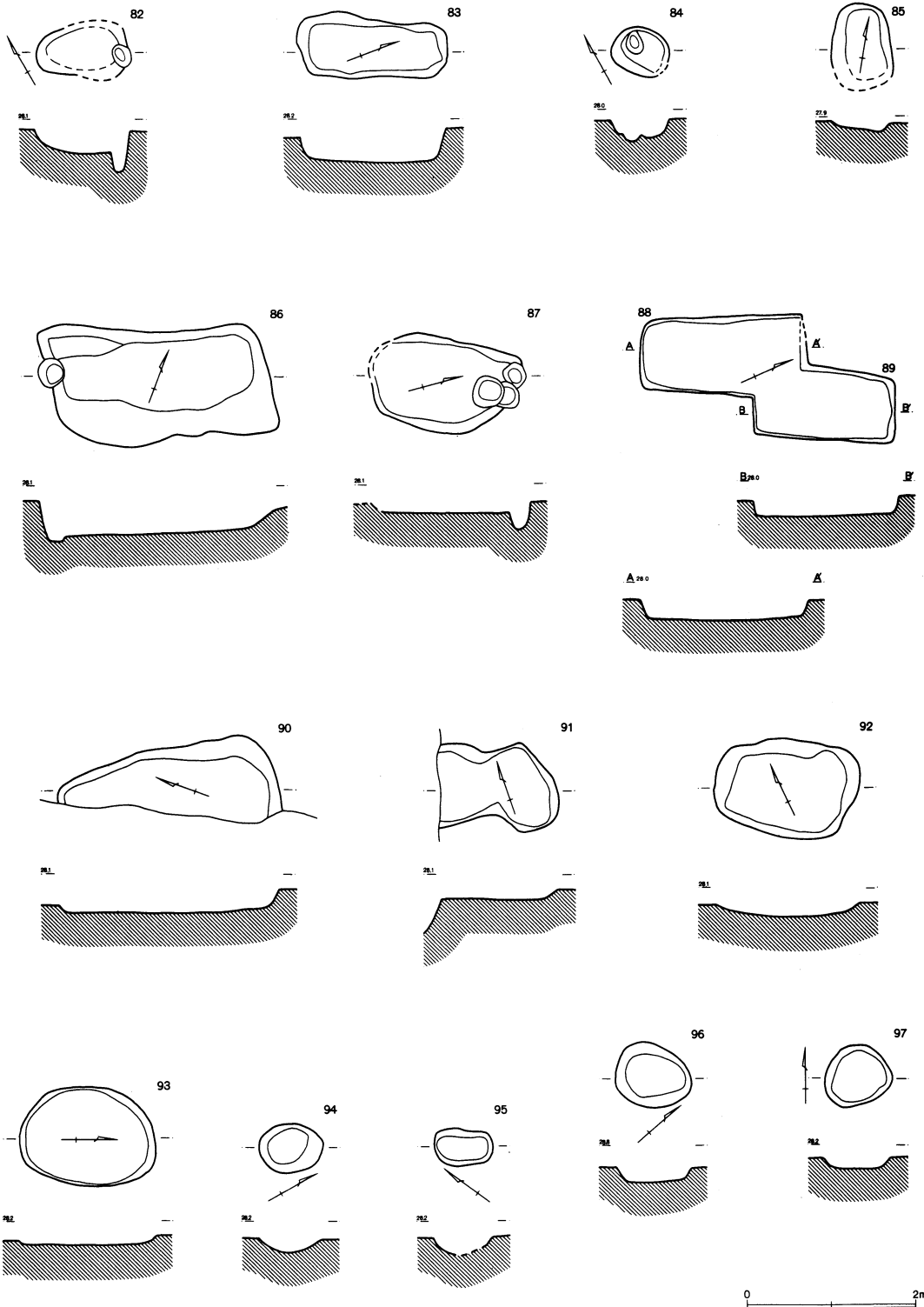


第275図 中近世土坑(3)

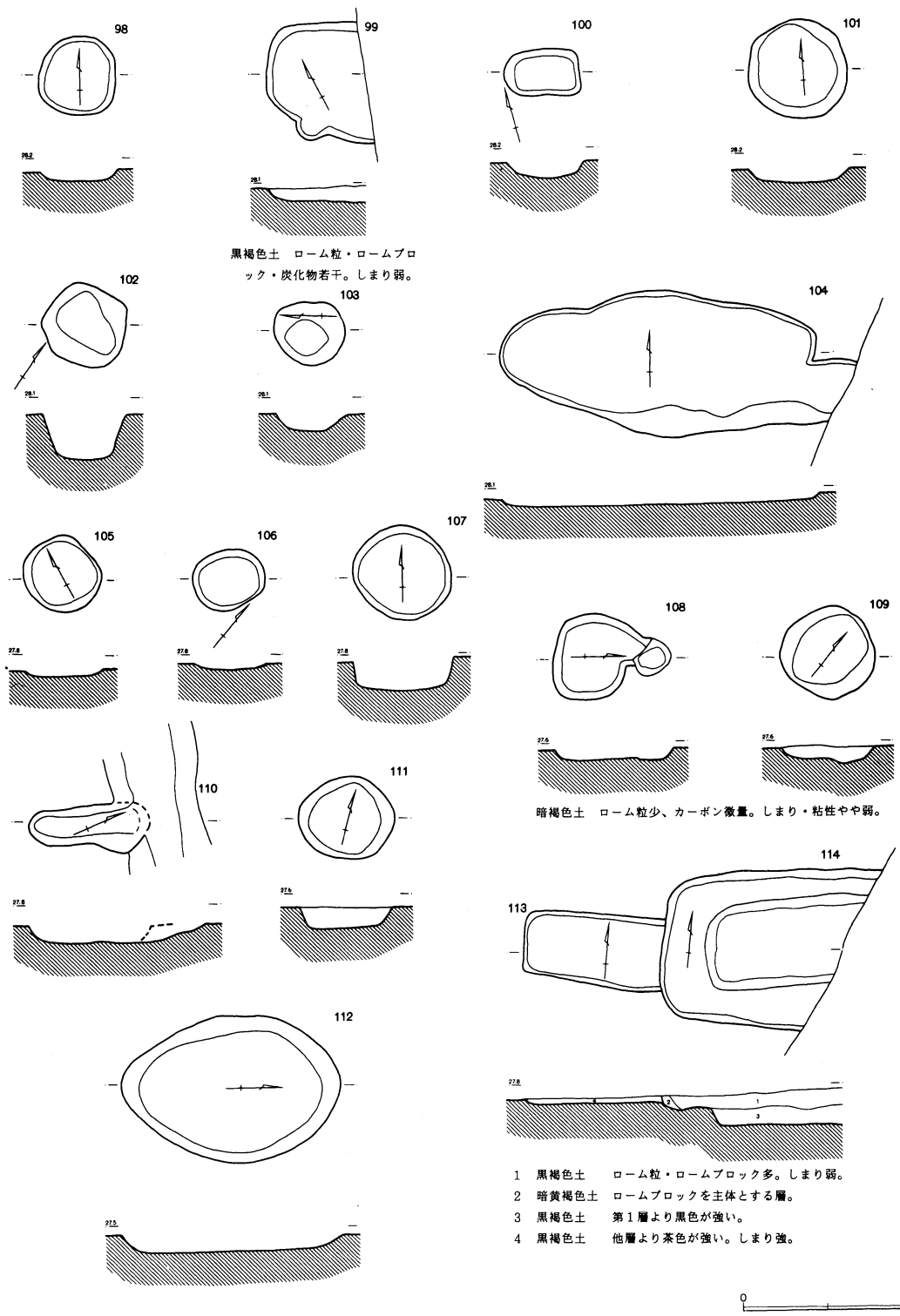


- 1 黒色土 ロームブロック (φ 2 cm) 多。しまり・粘性やや弱。
- 2 黒褐色土 カーボン・ローム粒若干。しまり・粘性やや弱。

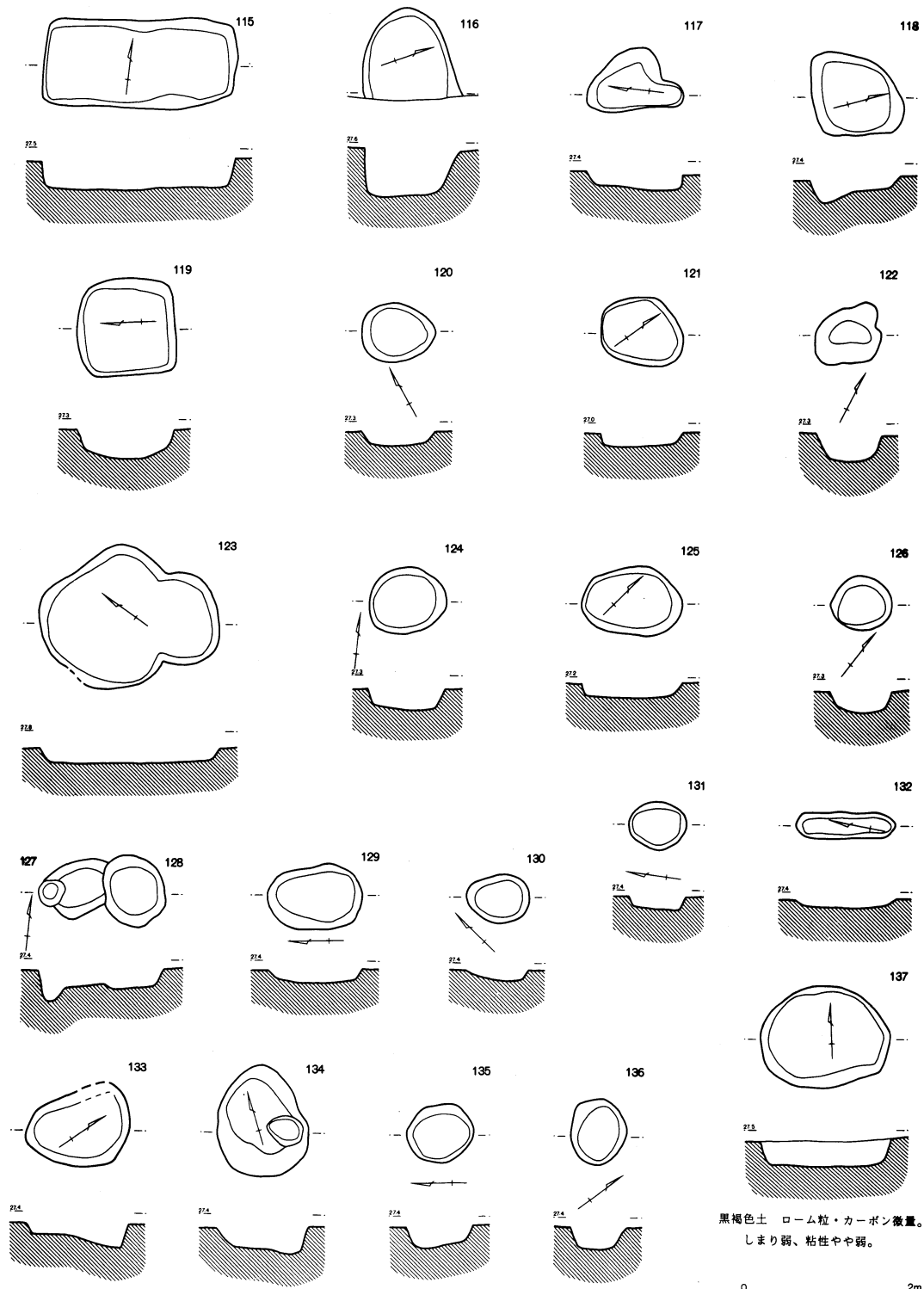
第276図 中近世土坑(4)



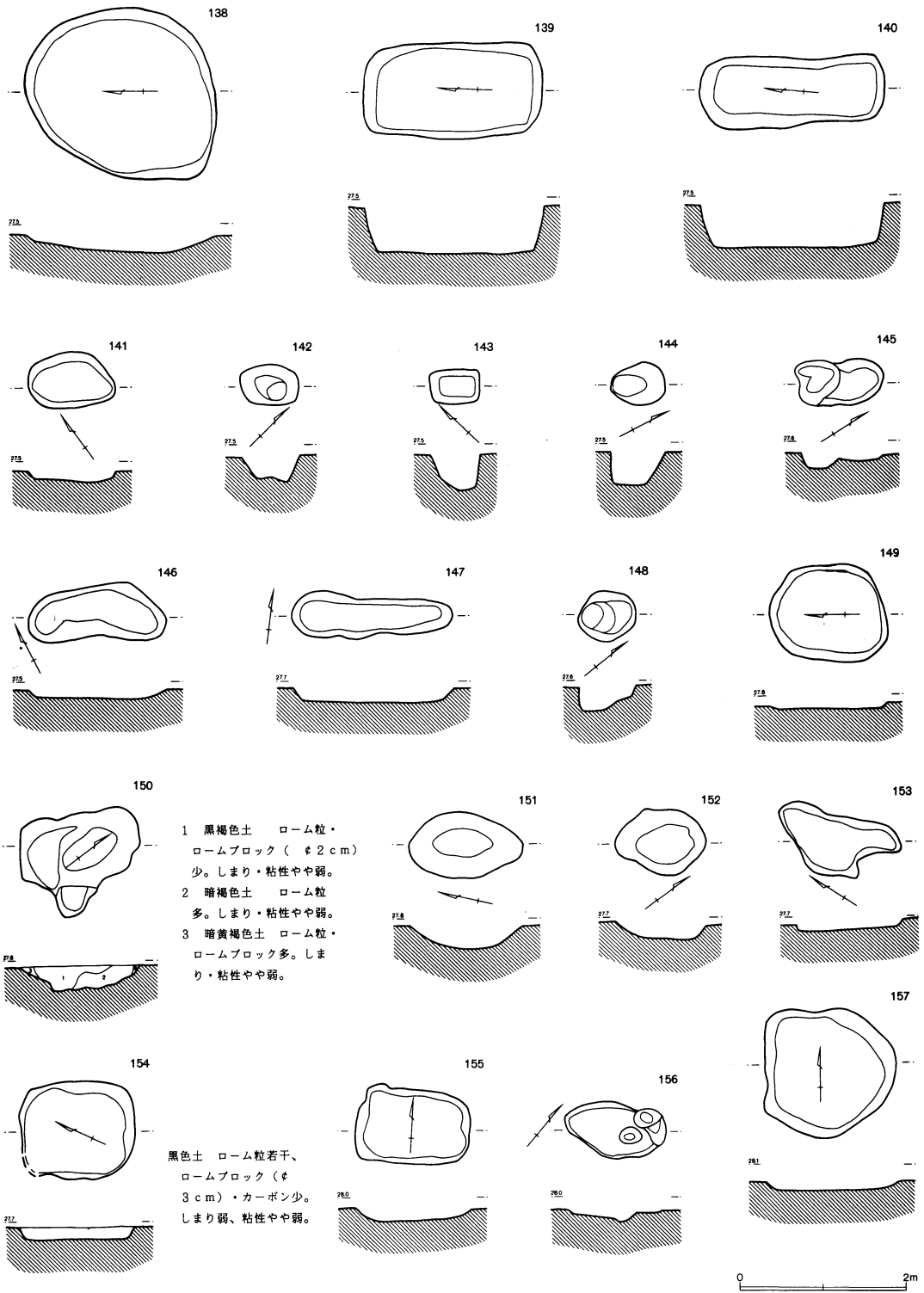
第277图 中近世土壙(5)



第278図 中近世土壌(6)



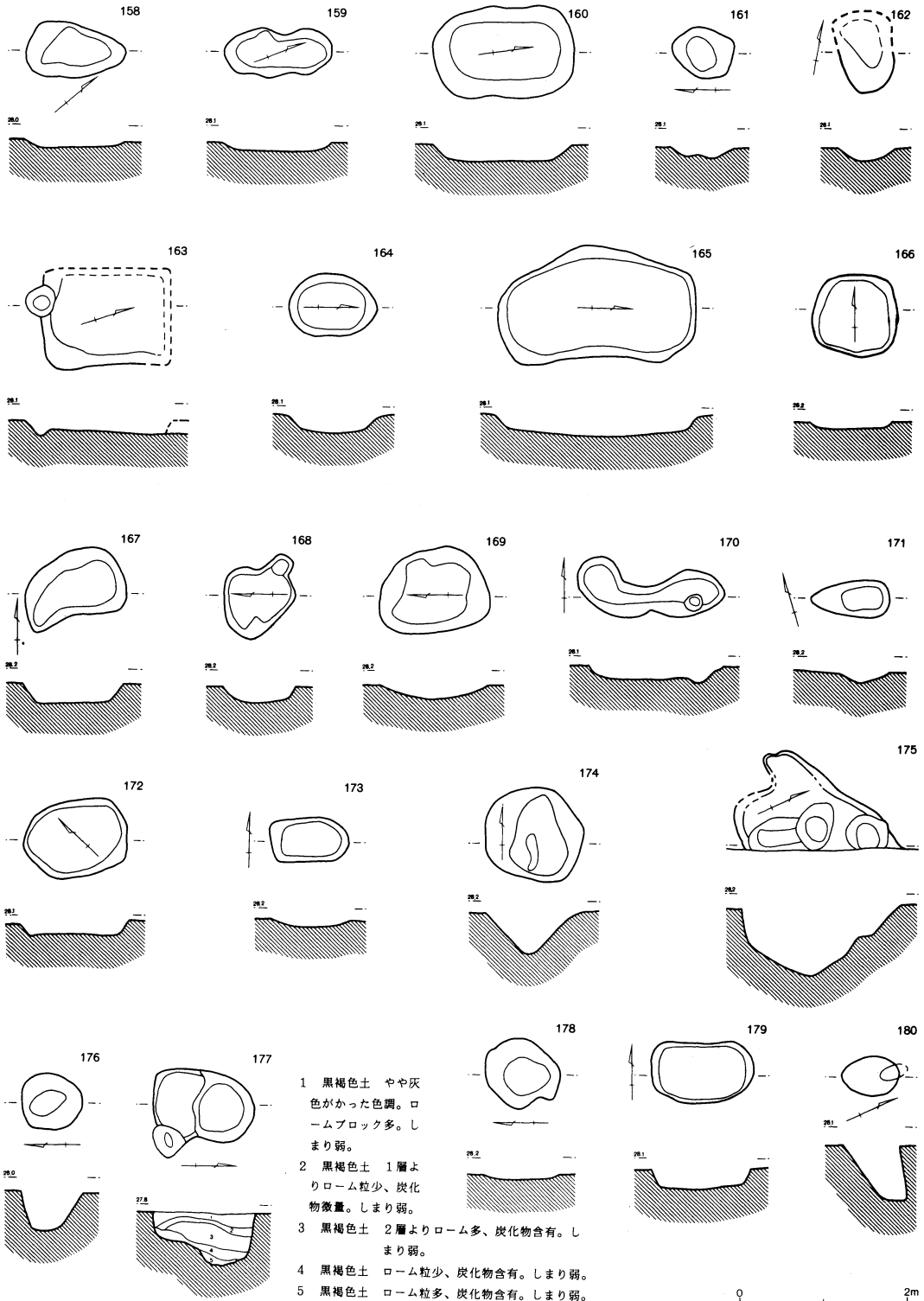
第279図 中近世土坑(7)



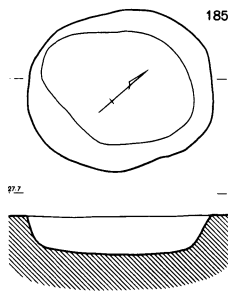
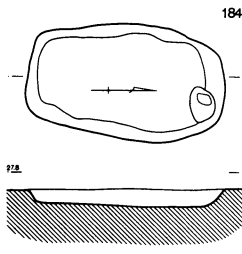
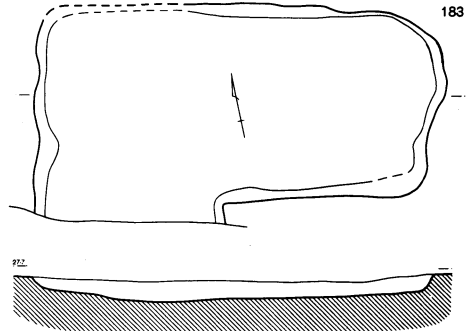
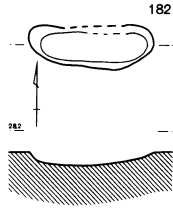
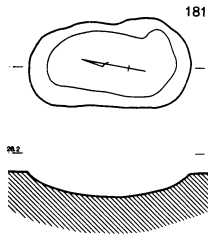
- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック (φ 2 c m) 少。しまり・粘性やや弱。
- 2 暗褐色土 ローム粒多。しまり・粘性やや弱。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多。しまり・粘性やや弱。

黒色土 ローム粒若干、ロームブロック (φ 3 c m) ・カーボン少。しまり弱、粘性やや弱。

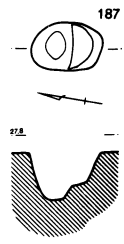
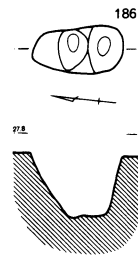
第280図 中近世土坑(8)



第281図 中近世土壌⑨

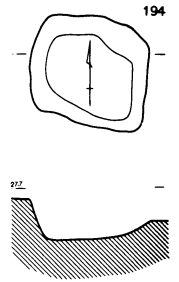
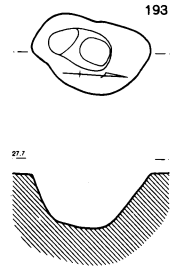
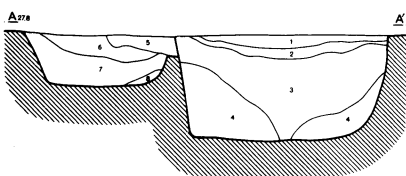
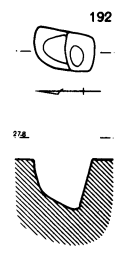
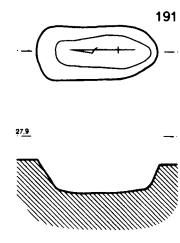
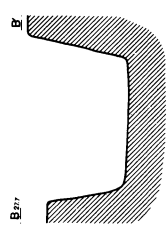
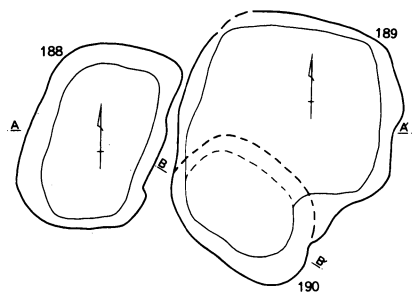


黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多、粒子の粗い層。しまり強。



黒褐色土 やや灰色がかる、ローム粒・ロームブロック多。しまり弱。

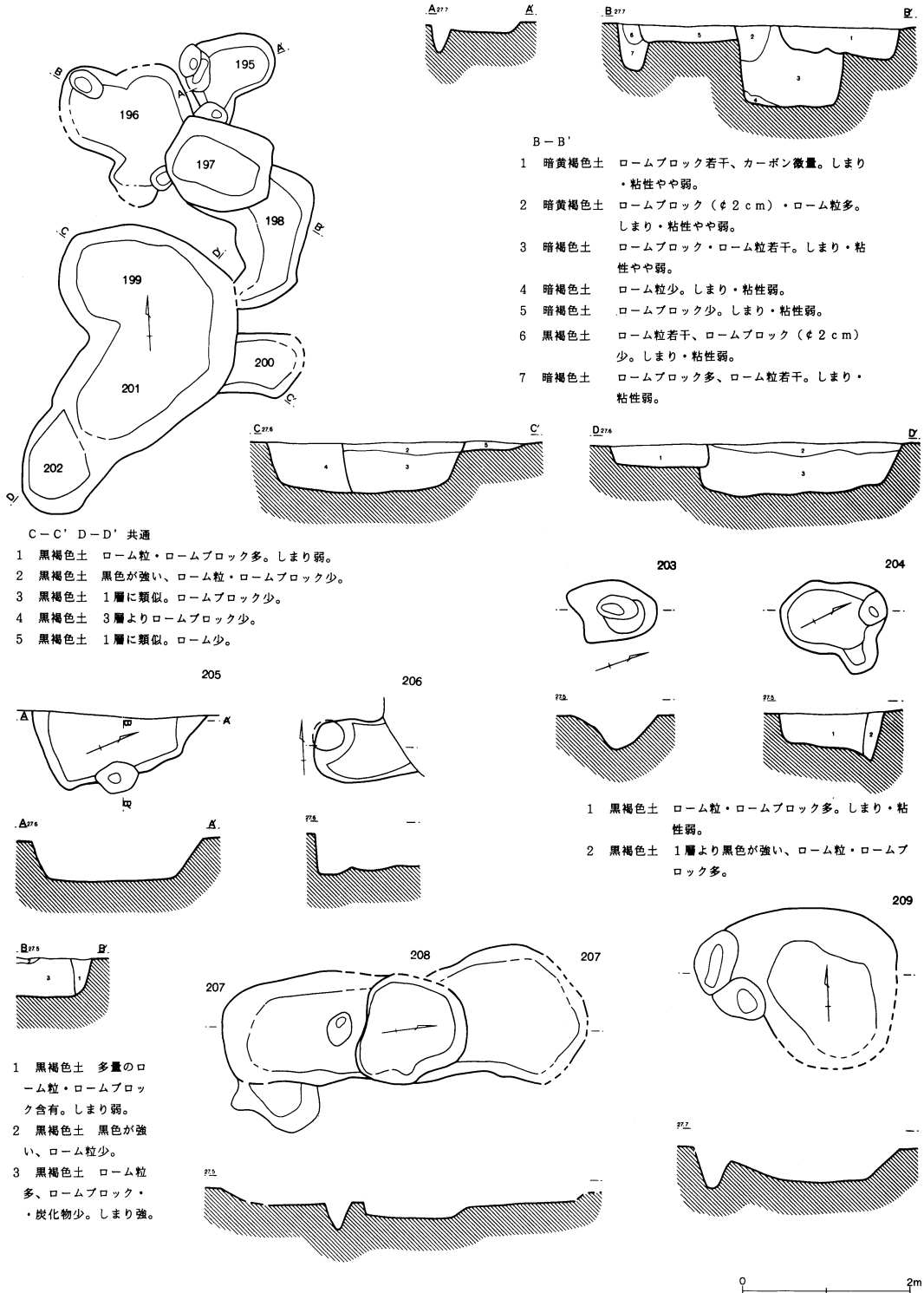
暗褐色土 ロームブロック(φ4cm)・ローム粒多。しまりやや弱、粘性弱。



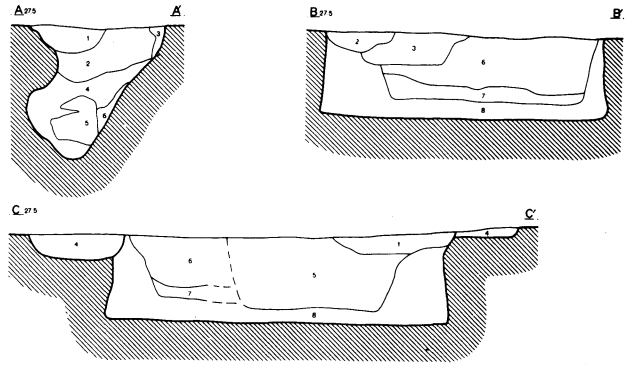
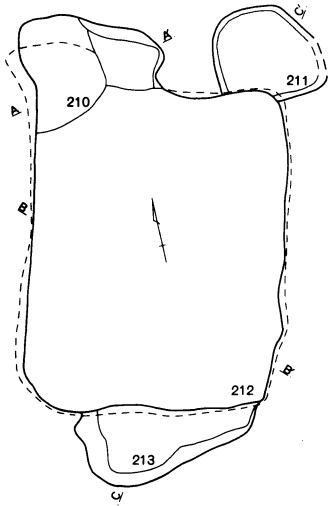
- 1 暗茶褐色土 ローム粒・炭化物含有、しまり強。
- 2 茶褐色土 炭化物・ロームブロック含有。しまり弱。
- 3 黒褐色土 ロームブロック多、炭化物若干。しまり・粘性弱。
- 4 黒褐色土 3層より黒色強。しまり・粘性弱。
- 5 黒褐色土 黒色土に近く、ローム粒含有。しまり強。
- 6 黒褐色土 黄色が強い層、ローム粒多。粘性弱。
- 7 黒黄褐色土 6層より黄色が強く、ローム粒多。
- 8 黒褐色土 7層より暗い色調、ローム粒多。

0 2m

第282図 中近世土坑(10)

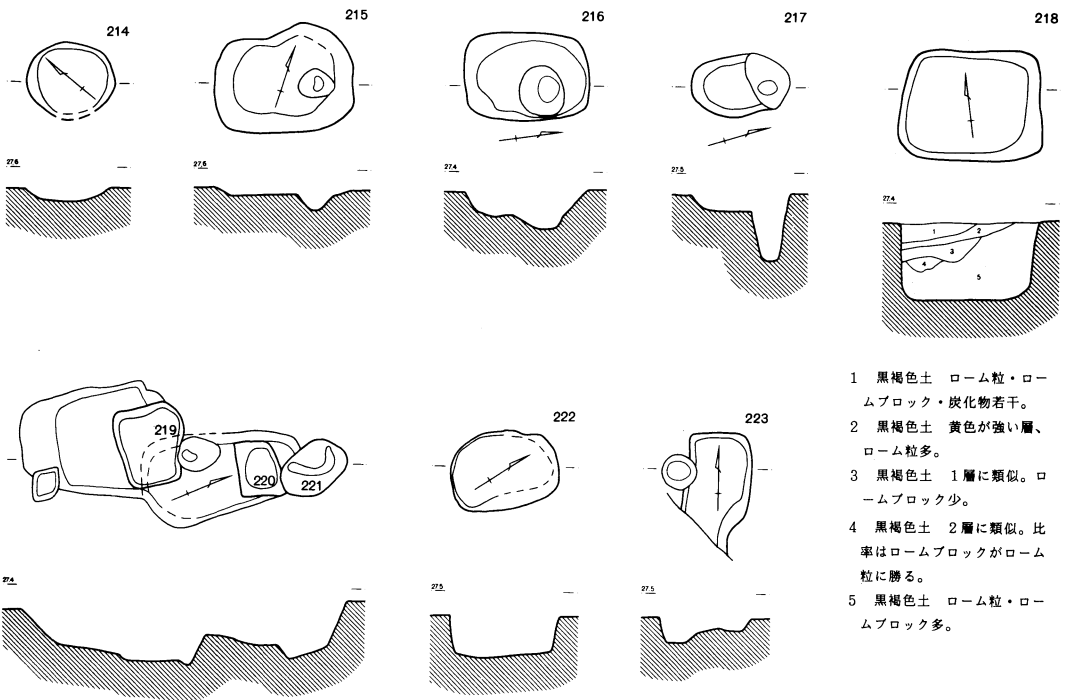


第283図 中近世土壌(11)



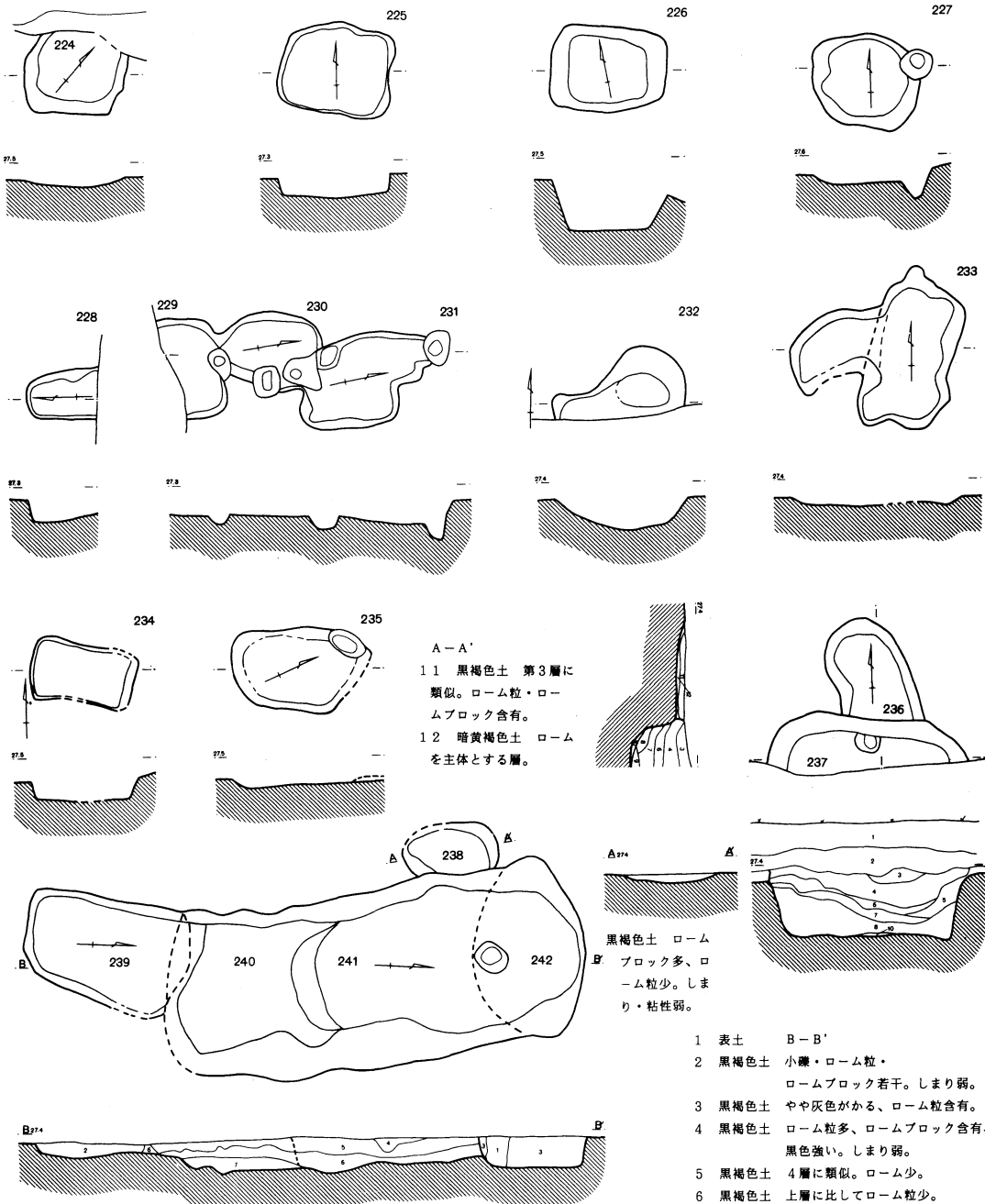
- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・小礫含有。
- 2 灰褐色土 1層よりローム粒多。
- 3 暗黄褐色土 ロームを主体とする層。
- 4 暗褐色土 2層より色調明るい。上層よりしまり強。
- 5 暗黄褐色土 ロームを主体とする層。しまり弱。
- 6 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック含有。しまり強。

- 211・212・213 共通
- 1 灰褐色土 ローム粒・ロームブロック含有。
 - 2 灰褐色土 1層よりロームブロック少。
 - 3 暗黄褐色土 ロームブロック含有。しまり強。
 - 4 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック含有、粘性弱。
 - 5 暗黄褐色土 色調黒色が強い。3層に類似。
 - 6 黒褐色土 4層に類似。ローム多。
 - 7 暗黄褐色土 ローム主体の層。しまり強。
 - 8 暗黄褐色土 4・6層に色調類似。しまり強。



- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・炭化物若干。
- 2 黒褐色土 黄色が強い層、ローム粒多。
- 3 黒褐色土 1層に類似。ロームブロック少。
- 4 黒褐色土 2層に類似。比率はロームブロックがローム粒に勝る。
- 5 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多。

第284図 中近世土壌(12)



A-A'
 11 黒褐色土 第3層に類似。ローム粒・ロームブロック含有。
 12 暗黄褐色土 ロームを主体とする層。

黒褐色土 ロームブロック多、ローム粒少。しまり・粘性弱。

- 1 黒褐色土 ロームブロック含有。しまり・粘性強。(近世ピット)
- 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多。しまり強。
- 3 黒褐色土 ローム粒・炭化物微量。
- 4 黒褐色土 1層に類似するが色調暗い(近世ピット)。
- 5 黒色土 ローム粒・炭化物少。しまり・粘性弱。
- 6 暗茶褐色土 茶の強い層、ローム粒・ロームブロック多。
- 7 暗茶褐色土 7層よりロームブロック多。しまり弱。

- 1 表土 B-B'
- 2 黒褐色土 小礫・ローム粒・ロームブロック若干。しまり弱。やや灰色がかかる、ローム粒含有。
- 3 黒褐色土 ローム粒多、ロームブロック含有、黒色強い。しまり弱。
- 4 黒褐色土 4層に類似。ローム少。
- 5 黒褐色土 上層に比してローム粒少。
- 6 黒褐色土 6層に同。黒色強い。しまり弱。
- 7 黒褐色土 3層に類似。ロームブロック多。しまり弱。
- 8 黒色土 ローム粒等少。しまり弱。
- 9 黒褐色土 8層に類似。黄色が強い。
- 10 黒褐色土



第285図 中近世土壌(13)

第14号土壙出土遺物 (第286図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	高 坏	口 径 9.6 現存高 4.2	口縁にヘラ描き沈線による山形文を巡らせる。坏部：粗いヘラ磨き、内面ナデ。赤褐色。	A+B+I+J 坏80 焼成：やや良

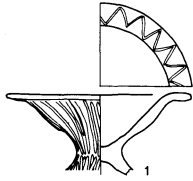
31号土壙出土埴輪 (第287図)

31号土壙から検出された埴輪は朝顔形埴輪1点である。基部から口縁部の一部が現存し、全形を復元すると、円筒部3段、肩部1段、口縁部2段の6段構成のものと考えられる。製作手順は第1段・2段→第3段→肩部(第4段)→口縁部の順に粘土紐積上と乾燥を繰り返しながら成形していったものである。スカシ孔は円形で、第2・3段に穿たれている。円筒部の器形はほぼズン胴状を呈し、段間幅は1・2段が若干長い。しかし第1段の長傾化や底径の嬌小化は認められない。肩部は直線的に内傾し、口縁部も直線的に外方に開くものと思われる。突帯の断面形態は頸部のものがAタイプ、第3突帯はDタイプ、第2・1突帯はCタイプで、いずれも突出度は弱い。調整は外面に一次のみのタテハケ、内面の円筒部および頸部にナデ、肩部・口縁部にはハケが施されている。また内面には粘土紐積上痕が明瞭にみられる。底部調整は行なわれていない。色調は 色、胎土には が含まれ、焼成は良好である。

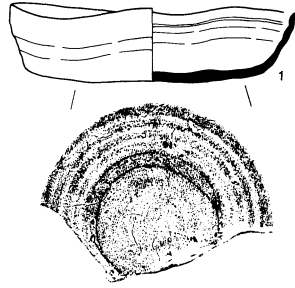
31号土壙出土埴輪 (第287図)

No	器 高	器 径	器 厚	器 質	突 帯	スカシ孔	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
1	現46.4	頸14.4	口 1.4	色	頸 A 1.4 3.4 0.8	3 円形	一次タテハケ	ナデ・ハケ	朝顔形埴輪 粘土紐積上痕
	肩 8.1	肩18.3	肩 2.0						
	310.0	底12.2	3 1.7	焼 良好	2 C 1.2 3.2 0.8	b	段ごとに調整が異なる		
	211.8		2 1.6		1 C 1.4 3.2 0.6	2 円形			
	110.4		1 1.6		a 5.2				
			底 1.7		b				

SK 14



SK 58



SK 43



2

3

4

5

6



7

8

9

10

11



12

13

14

15

16



17

18

19

20

21

SK 44



1

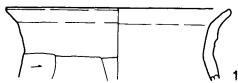
2

3

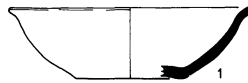
4

5

SK 66



SK 89



0 10cm

0 5cm

第286圖 中近世土坑出土遺物(1)

第43号土坑出土遺物 (第286図)

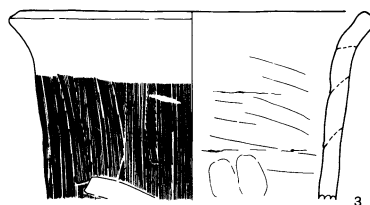
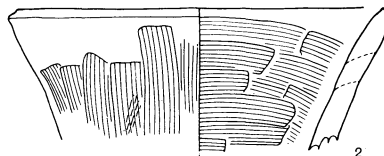
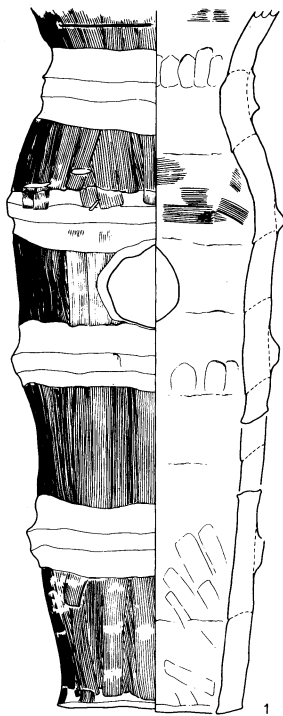
番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	坏	口径 10.1 底径 6.7 器高 3.9	器形は歪み著しい。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。黄褐色。	A+B+F+J(細密) 口50 体60 焼成：普

第43号土坑出土古銭一覧表 (第286図)

番号	銭種	径	孔径	備考
2	開元通宝	2.35	0.67	
3	景德通宝	2.45	0.6	
4	天聖元宝	2.25	0.6	
5	〃	2.33	0.6	
6	皇宋通宝	2.37	0.72	
7	〃	2.42	0.77	
8	至和元宝	2.4	0.7	
9	嘉祐通宝	2.3	0.6	
10	元豊通寶	2.4	0.65	
11	〃	2.45	0.7	

番号	銭種	径	孔径	備考
12	元祐通宝	2.45	0.67	
13	〃	2.37	0.67	
14	〃	2.4	0.7	
15	〃	2.3	0.6	
16	〃	2.4	0.6	
17	聖宋元宝	2.35	0.67	
18	政和通宝	2.45	0.65	
19	慶元通宝	2.35	0.6	背文「五」
20	洪武通宝	2.3	0.6	
21	〃	2.35	0.6	
22	宣徳通宝	2.5	0.5	

TK 31



0 10cm

TK 218



0 10cm

第287図 中近世土坑出土遺物(2)

第44号土壙出土古銭一覧表 (第286図)

番号	銭種	径	孔径	備考
1	開元通宝	2.4	0.68	
2	〃	2.45	0.65	
3	天聖元宝	2.45	0.73	
4	皇宋通宝	2.45	0.7	
5	嘉祐通宝	2.4	0.8	

第58号土壙出土遺物 (第286図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	須恵器 坏	口径 14.8 底径 6.5 器高 4.1	器形は歪み著しい。ロクロナデ。底部：回転糸切り離しの後全面をヘラ削り。灰色。	B+G+J □50 体55 焼成：普

第66号土壙出土遺物 (第286図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径 (11.7) 現存高 3.7	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面ヘラ削り、内面ナデ。褐色。	A+B+D+E □15 焼成：普

第89号土壙出土遺物 (第286図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	須恵器 坏	口径 (12.6) 底径 (5.8) 器高 3.7	ロクロナデ。底部：回転糸切り離しか。灰色。	B+J(多) □・体20 焼成：普

213号土壙出土埴輪 (第288図)

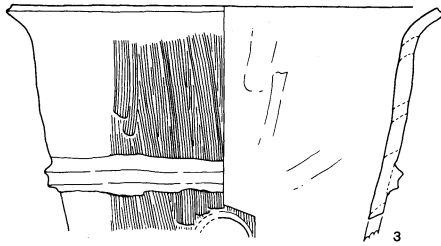
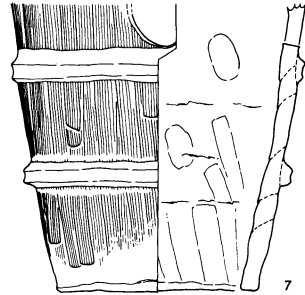
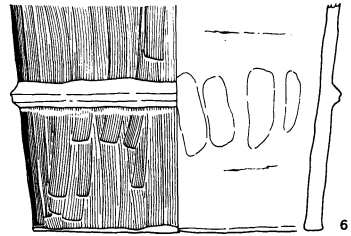
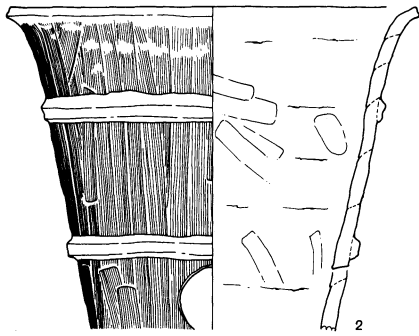
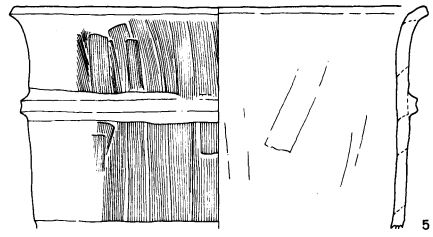
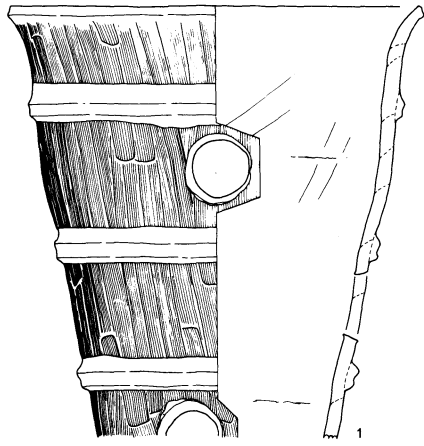
213号土壙から出土した埴輪のなかで図示したものは9点で、いずれも円筒埴輪である。1～4・7は口径>底径の口縁部が開く器形を呈しているが、底径の矯小化は認められない。5・6はズン胴状の器形である。1・2・5～7は段間幅がほぼ等しいもので、3・4は変化が認められる可能性が高いものであろう。3・4は2条突帯3段構成、2・7は3条突帯4段構成、1・5・6は4条突帯以上のものになると推定される。口縁部の形態は1・2・8がAタイプ、3～5がBタイプである。突帯の断面形態は、いずれもBタイプで、突出度は弱い。スカシ孔は円形で、特に1は千鳥状に穿孔されている。調整は外面に一次調整のタテハケ、内面にはナデ・ハケが施されているが弱く、粘土紐積上痕が認められる。6・7・9は底部調整が行なわれていない。胎土には白・黒色粒子、砂粒および白色針状物質が含まれている。色調は赤色もしくは赤橙色で、焼成は良好である。

213号土壙出土埴輪 (第288図)

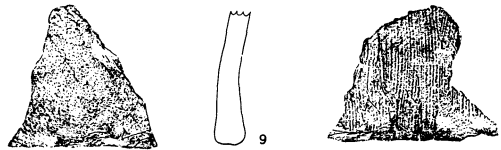
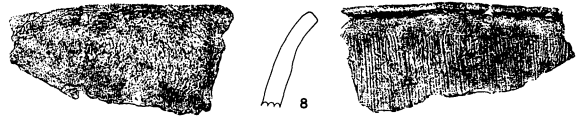
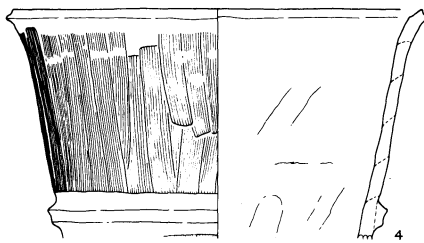
No	器高	器径	器厚	器質	突帯	スカシ孔	外面調整	内面調整	備考		
1	現28.4	□27.1	a 0.6	色 赤	上 B 1.1 1.9 / 0.6	上 円形	一次タテハケ	ナデ	4条突帯以上の 大型品 口縁 A 粘土紐積上痕		
	a 6.8		b 0.4	胎 白・黒・砂粒	中 B 1.0 1.8 / 0.4	a 4.5	ハケ17本 / 2cm				
	b 9.4		c 0.9		下 B 1.0 2.1 / 0.9	b 4.3					
	c 8.4		d 0.7	焼 良好		中 円形					
			e 1.0				a 4.6 下(円形) b 4.4				
2	現21.4	□26.6	a 0.6	色 赤橙	上 B 1.1 1.7 / 0.5	(円形)	一次タテハケ	ナデ・ハケ	3条突帯? 口縁 A 粘土紐積上痕		
	a 6.9		b 1.1	胎 白・黒・砂粒	下 B 1.0 1.6 / 0.6		ハケ11本 / 2cm	ハケ22本 / 2cm			
	b 9.1		c 1.0								
			d 0.7	焼 良好							
3	現15.2	□28.2	a 0.7	色 赤	B 1.1 2.6 / 0.7	(円形)	一次タテハケ	ナデ	口縁 B		
	a 11.4		b 1.0	胎 白・黒・砂粒			ハケ16本 / 2cm				
			c 0.9	焼 良好							
4	現15.0	□26.8	a 0.7	色 赤	B 0.8 1.2 / 0.8	(円形)	一次タテハケ	ナデ	口縁 B 粘土紐積上痕		
	a 13.7		b 1.1	胎 白・黒・砂粒			ハケ15本 / 2cm				
5	現14.6	□27.0	a 0.6	色 赤	B 0.8 1.2 / 0.8	(円形)	一次タテハケ	ナデ	口縁 B 粘土紐積上痕		
	a 7.5		b 0.8	胎 赤・白・黒			ハケ15本 / 2cm				
			c 0.8	砂粒							
6	現15.0	底18.8	d 1.2	色 赤	B 0.7 1.6 / 0.6		一次タテハケ	ナデ	指頭痕(紋)		
	c 8.8		e 1.2	胎 白・黒・砂粒			ハケ14本 / 2cm				
			f 0.8	多量							
7	現19.0	底12.8	b 0.8	色 赤	上 B 1.0 1.8 / 0.6	(円形)	一次タテハケ	ナデ・ハケ	3条突帯以上 粘土紐積上痕		
	b 6.8		c 1.1	胎 白・黒・砂粒	下 B 0.9 1.9 / 0.5					ハケ18本 / 2cm	ハケ26本 / 2cm
	c 7.8		d 1.5								
			e 1.3	焼 良好							
			a 0.6	色 赤							一次タテハケ
8				胎 白・黒・砂粒			ハケ本 / 2cm				
				焼 良好							
			e 1.5	色 赤			一次タテハケ		粘土紐積上痕		
9				胎 白・黒・砂粒			ハケ本 / 2cm				
				焼 良好							

第218号土壙出土遺物 (第287図) 中近世土壙

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	焙烙	口径 (24.2) 現存高 5.1	体部を欠損する。口縁はやや内彎しながら開き、体部との境に稜をもつ。内外面ともナデか。灰色。	口10 焼成：普



0 10cm



0 10cm

第288圖 中近世土壙出土遺物(3)

(2) 地下式坑 (第289図)

代正寺遺跡において検出された、地下式坑と推定される遺構は4基であるが、第3号・第4号地下式坑は重複しており、前者が新しいと観察された。この他にも“室”的な性格が考えられる遺構(中近世土壇212=第284図)もあるが、地下式坑とは区別して扱うこととした。分布状況は、第1号がC区、第2号～第4号がF区において検出されている。

第1号地下式坑 (第289図)

第1号地下式坑は、Q19cグリッドに位置する。第54号住居跡と、第7号古墳跡を切っている。壁面の崩落により、プラン確認の段階ではほぼ円形を呈しており、当初井戸跡として調査を開始した。しかし、掘り下げるに従って円形と思われた形態が長方形に近くなり、地下式坑の可能性が想定され始めて間もなく、東側に階段部分が検出され井戸跡との呼称を改めた。

長軸方向は正確に北を示す。確認面での規模は、南北344cm・東西216cm、確認面からの深さ240cmを測り、長方形を呈す。この坑部分の東側、中央部分よりやや南寄りに、階段部分をもつ。坑の底面規模は、南北320cm・東西200cmを測り、長方形を呈す。断面は、東-西・南-北両方向ともオーバーハングをしており、坑内は台形の空間であったと想定される。但し崩落のため、天井部分の厚さは不明である。階段部分は最大幅104cm・奥行き128cmを測り、崩壊のため原形は大きく失われているが、勾配は急であり、3段から成っていたと推定された。土層断面には、ロームから成る薄い層が幾重にも観察され、天井部が僅かづつ、何度にも亘って崩れていったことが想定できた。

「このあたりは、室は一丈まで掘る」と、調査過程において、調査補助員の御一方から御教示を戴いた。地表面から確認面までは約60cmを測り、確認面から底面までの深さは240cm。結果的にも、まさに一致をしていた。埋没し切らない間は“ゴミ穴”的な性格だったと思われ、近現代の遺物がみられた。

第2号地下式坑 (第289図)

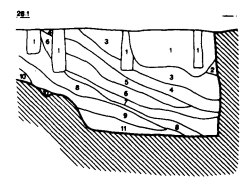
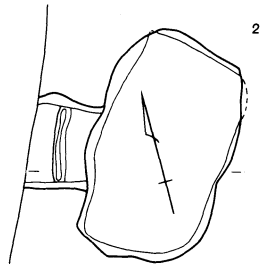
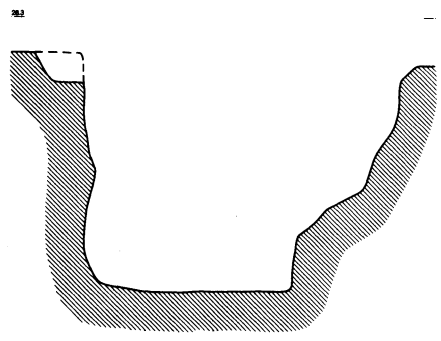
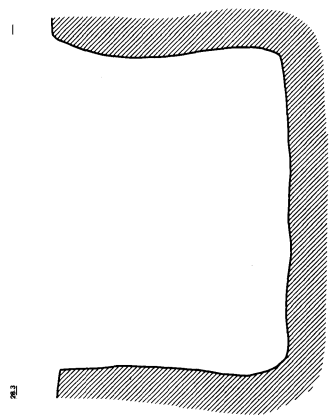
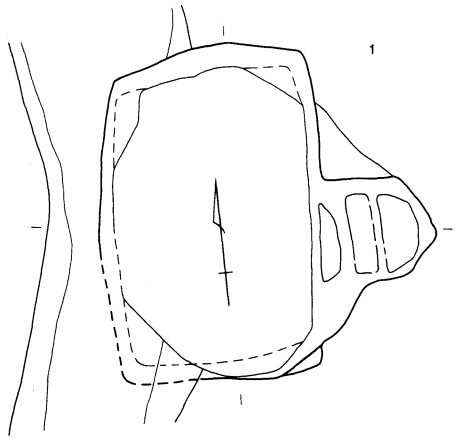
第2号地下式坑は、M27dグリッドに位置する。階段部分は西側のやや南寄りに付き、調査範囲外に続く。長軸方向はN-25°-Eを指す。確認面での規模は、南北240cm・東西144cm、確認面からの深さ104cmを測り、略長方形を呈す。坑の底面規模は、南北216cm・東西120cmを測り、略長方形を呈す。断面は、東-西・南-北両方向ともオーバーハング気味である。崩落のため、天井部分の厚さは不明である。階段部分は最大幅96cm・奥行きは不明。崩壊のため原形は大きく失われているが、勾配は緩やかであり、2段まで検出された。時期を示す遺物の出土はなかった。

第3号・第4号地下式坑 (第289図)

第3号・第4号地下式坑は、L28fグリッドに位置する。土層断面から、前者が後出と判断できる。共に、西側は調査範囲外に続く。重複のため、遺構の原形は大きく損なわれており、規模・形態を推定するのはきわめて困難であるといわざるを得ない。

第3号地下式坑については、地表面からの深さは192cm、底面形は不明、断面はオーバーハングをしている。階段部分は、検出されなかった。近現代の遺構と推定される。

第4号地下式坑については、地表面からの深さは160cm、底面形は略長方形か、断面はややオーバーハング気味である。階段部分は、検出されなかった。近現代の遺構と推定される。

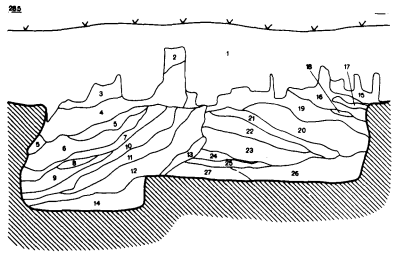
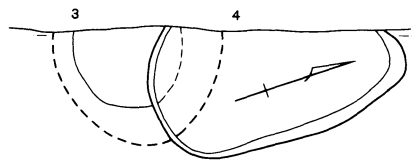


地下式坑2土層註記

- 1 攪乱
- 2 黒色土 ロームブロック多。しまり・粘性弱。
- 3 黒褐色土 やや灰色がかり、ローム粒含有。しまりなし。
- 4 黒褐色土 2層より黒色強い。ロームブロック含有。
- 5 黒褐色土 色調2層に類似。含有物3層に同じ。
- 6 黒褐色土 ロームブロック4層より多く含有。
- 7 黒色土 ローム等の含有少。
- 8 黒褐色土 4層に類似。ローム粒・ロームブロック含有。
- 9 黒褐色土 6層に類似。色調明るい。
- 10 黒褐色土 8層に類似。しまり強。
- 11 黒褐色土 7層に類似。ローム含有多。

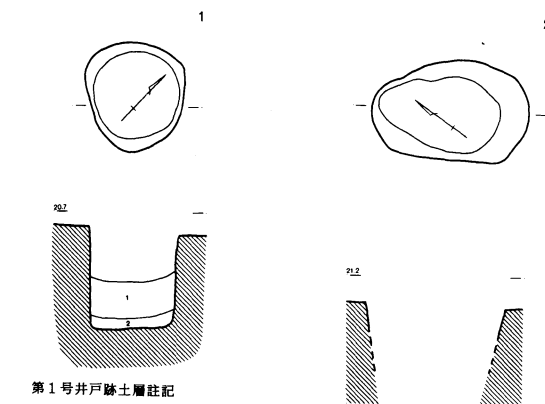
地下式坑3土層註記

- | | | | |
|----------|----------------------|----------|----------------------|
| 1 耕作土 | ローム粒少。 | 14 暗褐色土 | ローム粒少。 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒少。 | 15 黄褐色土 | ローム層。 |
| 3 暗褐色土 | ローム(φ2cm)少。 | 16 黒褐色土 | カーボン微量。 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒少。 | 17 暗褐色土 | カーボン微量。 |
| 5 暗褐色土 | カーボン微量。 | 18 暗黄褐色土 | ローム粒多。 |
| 6 黒褐色土 | カーボン微量。 | 19 黒褐色土 | ローム粒少。 |
| 7 暗黄褐色土 | ローム粒非常に多、
カーボン微量。 | 20 黒褐色土 | カーボン微量。 |
| 8 暗黄褐色土 | ローム粒多、カーボン
微量。 | 21 暗褐色土 | ローム粒若干。 |
| 9 暗黄褐色土 | 7層に類似。 | 22 黒褐色土 | ローム粒少。 |
| 10 暗褐色土 | ローム粒多。 | 23 暗褐色土 | ローム粒少。 |
| 11 暗褐色土 | ローム粒少。 | 24 暗褐色土 | ロームブロック
(φ1cm)若干。 |
| 12 暗褐色土 | ローム粒若干。 | 25 暗褐色土 | ロームブロック
(φ1cm)少。 |
| 13 暗黄褐色土 | ローム粒多。 | 26 黒褐色土 | ローム粒少。 |
| | | 27 暗褐色土 | ローム粒少。 |



0 2m

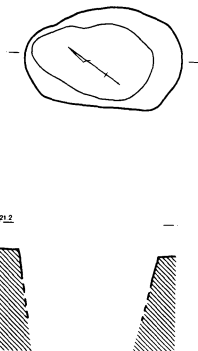
第289図 地下式坑



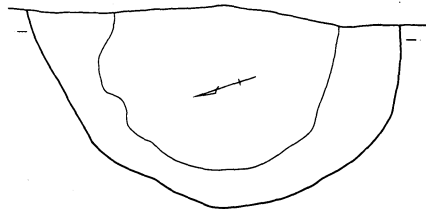
第1号井戸跡土層註記

- 1 黒色土 小礫・粘土ブロック含有。しまり不良、粘性あり。
- 2 黒褐色土 小礫・粘土多量含有。しまり不良、粘性あり。

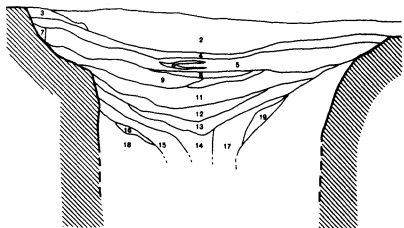
2



3



2&3

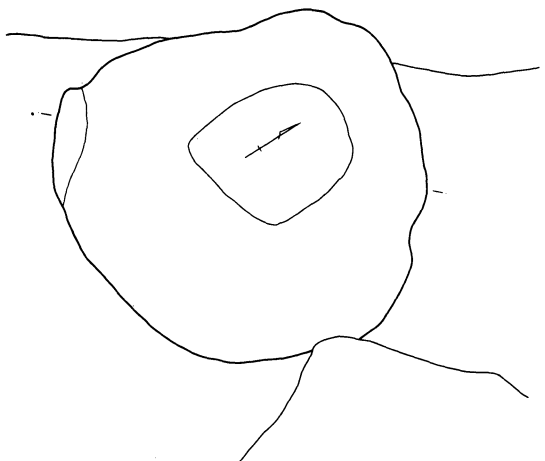


第3号井戸跡土層註記

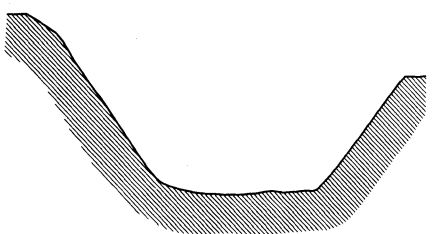
- 1 表土 耕作土。
- 2 灰褐色土 多量の小礫・小砂利含有、ローム粒・ロームブロック若干含有。しまり悪。
- 3 黒色土 小礫・ローム粒少量含有。しまり比較的良。
- 4 黒褐色土 部分的に黒色強く、ローム粒・小礫含有。第2層よりしまり良。
- 5 黒褐色土 色調明るい。上層よりローム粒・ロームブロック多、炭化物少。しまり良。
- 6 黒褐色土 第5・8・9層に間層的に混入、粘土状の層。しまり強。
- 7 黒褐色土 第5層に類似。色調第4層に類似。
- 8 黒褐色土 第5層・第9層に比して色調暗い。
- 9 黒褐色土 やや灰色がかかる色調。他は5層と同じ。
- 10 黒褐色土 第9層よりローム粒多く含有、色調明るい。
- 11 黒褐色土 上層の9層より黒色強く、粒子粗い。しまり悪。
- 12 暗黄褐色土 ロームブロックを主体とする層。
- 13 黒褐色土 多量のロームブロック・ローム粒含有。しまり悪く、ボンボンしている。
- 14 暗黄褐色土 第12・13層の混合層。
- 15 黒色土 ローム粒・ロームブロック含有。しまり比較的良。
- 16 黒褐色土 第15層よりロームを多く含有、焼土・炭化物混入。第13層に類似するがローム含有少。
- 17 黒褐色土 第13層に類似するがローム含有少。
- 18 黒色土 第15層に類似するが焼土混入。
- 19 暗黄褐色土 崩落したロームを主体とする層。



4



2&3



0 2m

第290図 井戸跡

(3) 井戸跡

第1号井戸跡 (第290図)

第1号井戸跡は、B' 64 i グリッドに位置する。立地的には、斜面部半ばにあたる。性格不明遺構3 (= SX 3) の調査の過程で検出された遺構である。遺構検出時において、覆土・プラン等を精査したが、帰属関係や新旧関係については確認することができなかった。調査時も湧水が盛んにみられた。規模は112cm×104cmの略円形、確認面からの深さは108cmを測り、断面筒状を呈す。底部に曲物などの水溜は検出されなかった。混入と思われる土師器片のほか、石製品が1点出土したのみであり、時期判定することはできなかった。

第1号井戸跡出土遺物 (第291図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	不明 石製品	長さ	9.8	孔径1.1cm、現存重量190.7g。右側面上位・左側面全域、上部面の一部・下部面全域を欠損。残存面は平滑で、部分的に条線を残す。砥石に転用されたものか。	滑石製
		幅	7.5		
		厚さ	1.5		

第2号井戸跡 (第290図)

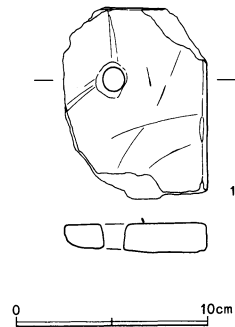
第2号井戸跡は、A' 65 b グリッドに位置する。第94号住居跡を切っている。立地的には第1号井戸跡と同様に、斜面部半ばに位置している。確認面は粘土質であり、遺構中からの湧水も激しいため、30cm程掘り下げたのみで調査を断念せざるを得なかった。ピン・ポールを刺した結果からでは、数十cmの深さはあると推定された。規模は160cm×104cmの楕円形、断面筒状を呈すと思われる。その規模・形態から井戸跡と判断した。遺物の出土はなかった。

第3号井戸跡 (第290図)

第3号井戸跡は、G46 i b グリッドに位置する。東側半分は、調査範囲外に続く。立地的には、台地平坦部といえる。規模は確認面で、直径384cmの略円形、円筒部では直径232cmの略円形、断面ロート状を呈すと思われる。調査範囲外からの崩落の危険性があるため、150cm程掘り下げた時点で調査を断念せざるを得なかった。ピン・ポールを刺した結果からでは、まだ数十cm続くと推定された。調査段階での湧水はみられなかった。時期判定の手掛りとなる、遺物の出土はなかった。

第4号井戸跡 (第290図)

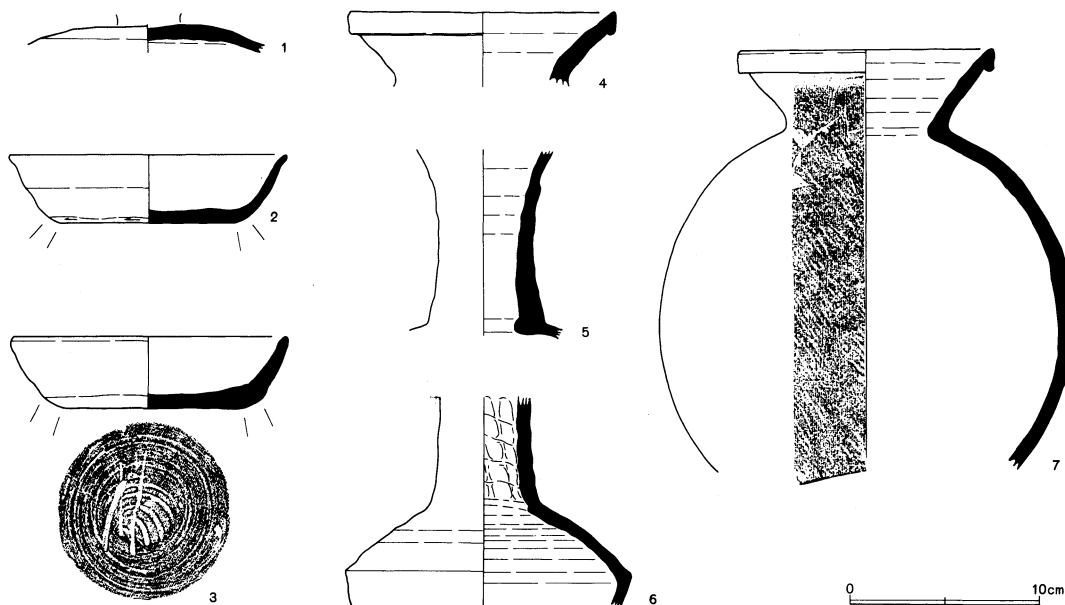
第4号井戸跡は、B' 60 e グリッドに位置する。立地的には、台地の肩部にあたる。第44号溝跡との重複により、西側の原形は大きく損なわれている。規模は376cm×336cmの楕円形、調査は底部にまで行うことができた。深さは184cmの断面台形状を呈すと思われる。調査当初、その規模から住居跡と推定して掘り下げを行った遺構であるが、最終的には井戸跡と判断をした。調査時には湧水はみられなかった。周辺に存在する奈良・平安時代の遺構との関連が推定される井戸跡といえる。



第291図 第1号井戸跡出土遺物

第4号井戸跡出土遺物 (第292図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	須恵器 蓋	現存高 1.4	つまみ部欠損。ロクロナデ。ロクロ左回転。天井部：回転ヘラ削り。灰色。	B+J 焼成：普
2	須恵器 坏	口径 (14.4) 底径 (9.2) 器高 3.0	ロクロナデ。底部：静止糸切り離しの後、周辺ヘラ削りか。灰白色。	B+J 口・体40 焼成：やや不良
3	須恵器 坏	口径 (14.2) 底径 9.8 器高 3.8	ロクロナデ。底部：回転糸切り離しの後、周辺ヘラ削り。灰褐色。	B+C+J 口20 体80 焼成：やや不良
4	須恵器 甕	口径 (13.9) 現存高 3.9	内外面ともナデ。灰褐色。	B+I+J 口15 焼成：やや不良
5	須恵器 長頸瓶	現存高 9.6	外面の一部に自然釉附着。ロクロナデ。ロクロ右回転か。黄灰色。	B+J 頸90 焼成：普
6	須恵器 長頸瓶	胴径 15.1 現存高 15.0	外面に自然釉附着するが、頸部は泡立ち状にボソボソしている。頸部～胴部：外面はロクロ整形痕は弱い、頸部内面：指頭による押さえか。灰黄色。	B+I 頸70 胴上 半95 焼成：普
7	須恵器 甕	口径 (13.2) 胴径 (21.6) 現存高 22.0	口縁部：内外面ともナデ。胴部外面に平行叩き目痕残す。明灰色。	B+J 口30 胴5 焼成：普



第292図 第4号井戸跡出土遺物

5 その他の遺構と遺物

(1) 土壌 (第293図～第298図)

G区・H区においては、90基の土壌が検出された。両区共に、遺構の分布密度がきわめて高い範囲であり、土壌についても同様であった。

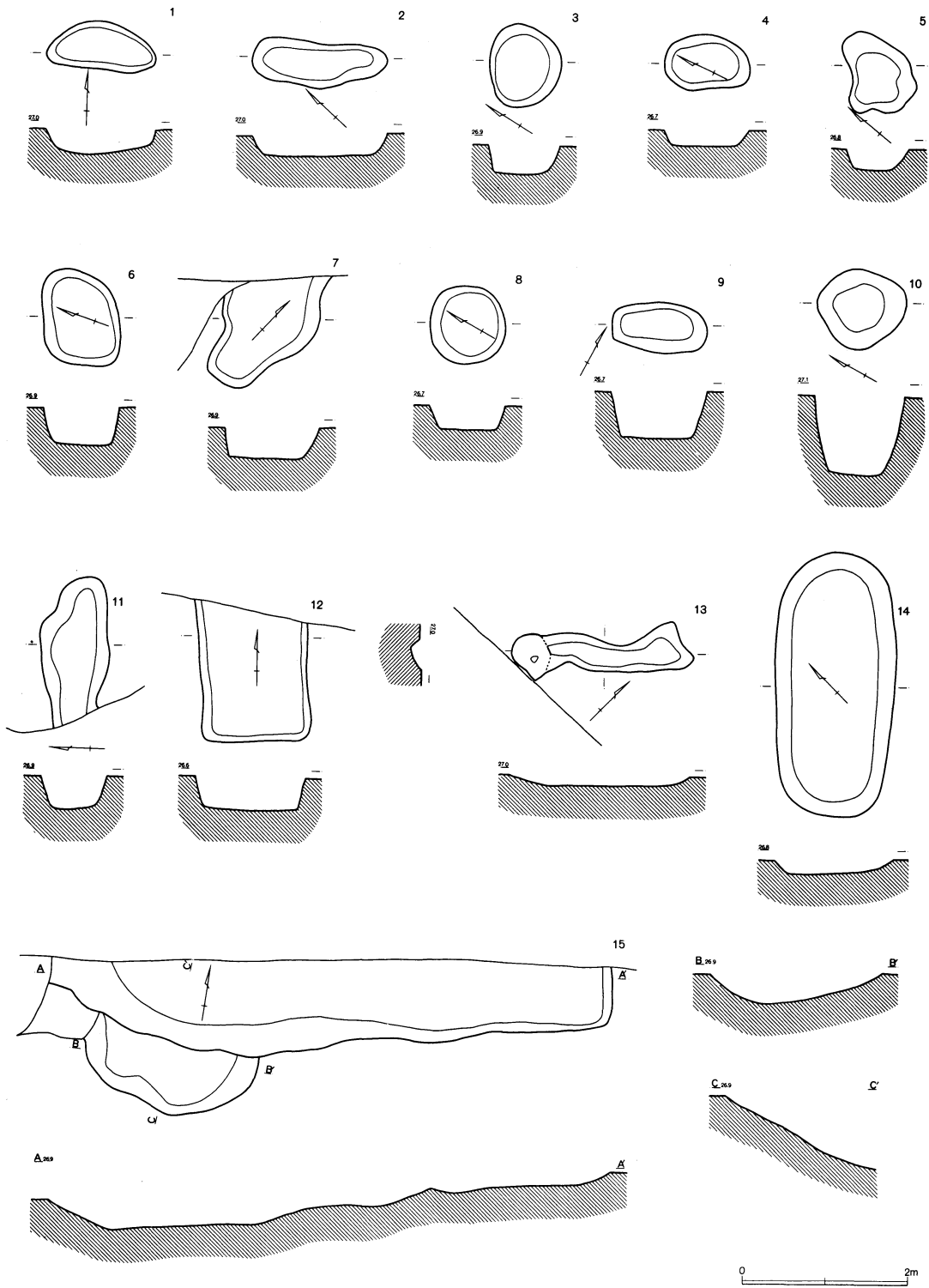
他の区で確認された土壌と同様に、形態・規模ともに様々である。敢えて形態別に分けるならば、平面形から、1：円形統、2：方形統、3：不整形の3種に、断面形からでは、A：ほぼ垂直のもの、B：オーバーハングするもの、C：搦鉢状を呈すもの、D：その他等々が挙げられる。これらの組み合わせにより、幾種類かのタイプに分類をすることが可能となる。タイプ別に掲載することも検討をしたが、既に述べたように代正寺遺跡は遺構の遺存度が悪く、本来の形態・規模を推し量るのは困難を伴う。さらに、多くの土壌は遺物が出土しておらず、時期の特定にも無理があることが多い。以上のことから、分類しての掲載はそれほどの意味がないものと判断した。他の箇所の場合と同じく、北側から機械的に遺構番号を振り、その番号に従って掲げていくという体裁をとった。

土壌とした中には、近現代の芋穴の性格が想定される例もある。また、墓塚と判断される遺構に

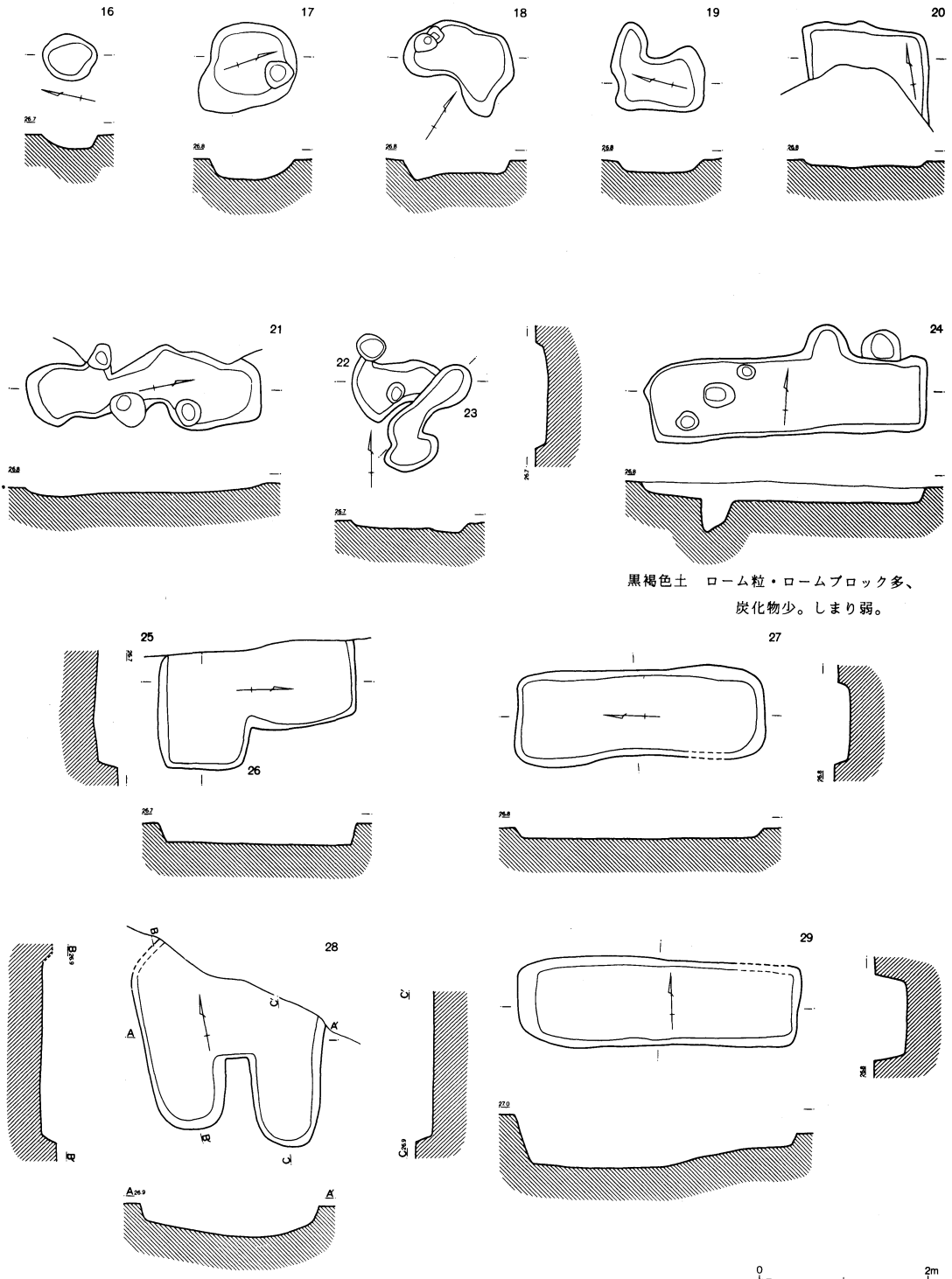
○第5表 代正寺土壌一覧表

番号	旧番	区	グリッド	規模 (長×短×深) cm	主軸方向
1		G	D-51-a	133 × 57 × 29	N-88-E
2		G	D-51-c	165 × 54 × 23	N-46-W
3		G	D-51-e	101 × 87 × 35	N-59-E
4		G	C-53-c	105 × 66 × 21	N-26-W
5		G	E-53-g	107 × 91 × 26	N-4-E
6		G	C-53-a	115 × 91 × 46	N-72-E
7		G	C-53-c	- × 114 × 38	-
8		G	E-54-a	93 × 92 × 30	N-29-W
9		G	D-53-d	116 × 64 × 56	N-64-E
10		G	D-54-a	109 × 98 × 95	N-30-W
11		G	C-53-f	- × 80 × 39	-
12		G	D-54-b	- × 133 × 41	-
13		G	E-49-i	221 × 35 × 18	N-45-E
14	256	G	E-50-h	321 × 143 × 16	N-45-E
15		G	D-49-i	- × - × 87	-
16		G	C-55-c	67 × 54 × 17	N-9-E
17		G	C-55-i	102 × 95 × 27	N-18-W
18		G	C-55-i	131 × 66 × 22	N-61-W
19		G	C-55-i	102 × 76 × 13	N-14-E
20		G	C-55-h	- × - × 9	-
21		G	D-55-e	284 × 95 × 12	N-13-W
22		G	C-55-e	- × 70 × 8	-
23		G	C-55-e	146 × 40 × 15	N-44-W
24	229	G	C-55-e	390 × 94 × 22	N-87-W
25		G	C-55-d	237 × - × 27	-

番号	旧番	区	グリッド	規模 (長×短×深) cm	主軸方向
26		G	C-55-d	- × - × 27	-
27		G	C-55-e	208 × 112 × 13	N-3-W
28		G	D-53-a	- × - × 40	-
29		G	D-54-a	350 × 109 × 59	N-88-W
30		G	D-55-a	(135) × - × 13	-
31		G	C-56-f	- × - × 19	-
32		G	C-56-g	99 × - × 30	N-2-E
33		G	D-56-g	94 × - × 25	-
34		G	E-57-f	- × - × 8	-
35		G	D-55-b	70 × 56 × 62	N-30-W
36		G	O-57-c	105 × 58 × 38	N-35-W
37		G	C-57-b	129 × 74 × 21	N-1-W
38		G	D-56-d	158 × - × 43	N-18-W
39		G	D-56-d	- × 77 × 14	-
40		G	C-56-i	243 × 91 × 28	N-78-W
41	219	G	D-56-a	239 × 101 × 13	N-5-W
42	217	G	C-56-c	- × 74 × 12	-
43	216	G	C-56-c	130 × 72 × 31	N
44	209	G	C-56-i	129 × 74 × 26	N
45	210	G	C-56-i	167 × 81 × 23	N-85-W
46		G	C-56-c	- × 23 × 39	-
47		G	C-56-c	- × 53 × 52	-
48	213	G	C-56-c	- × - × 24	-
49		H	B-55-e	59 × 46 × 12	N-32-W
50		H	B-55-f	73 × 47 × 24	N-87-E

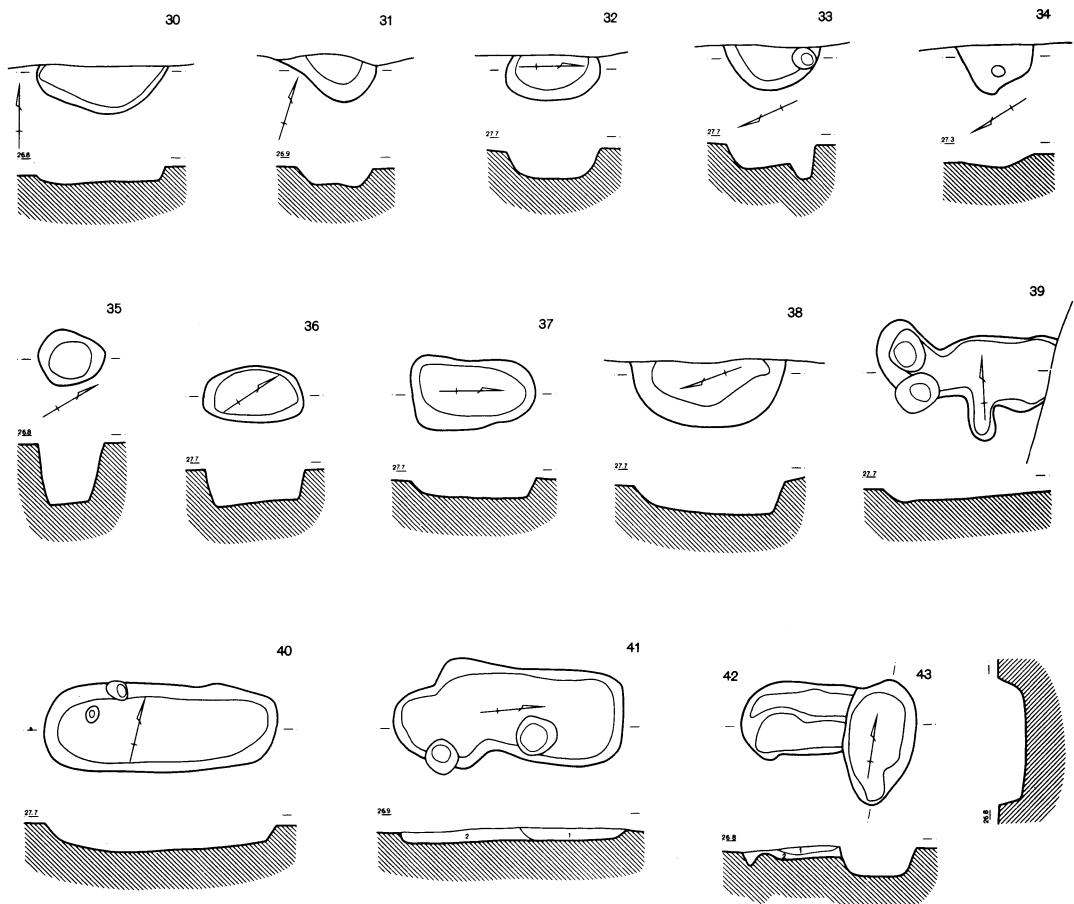


第293圖 土壤(1)

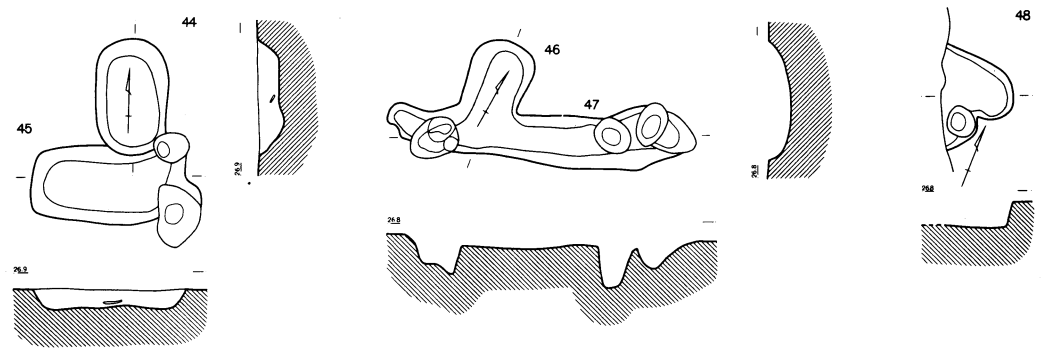


黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多、
炭化物少。しまり弱。

第294図 土壌(2)



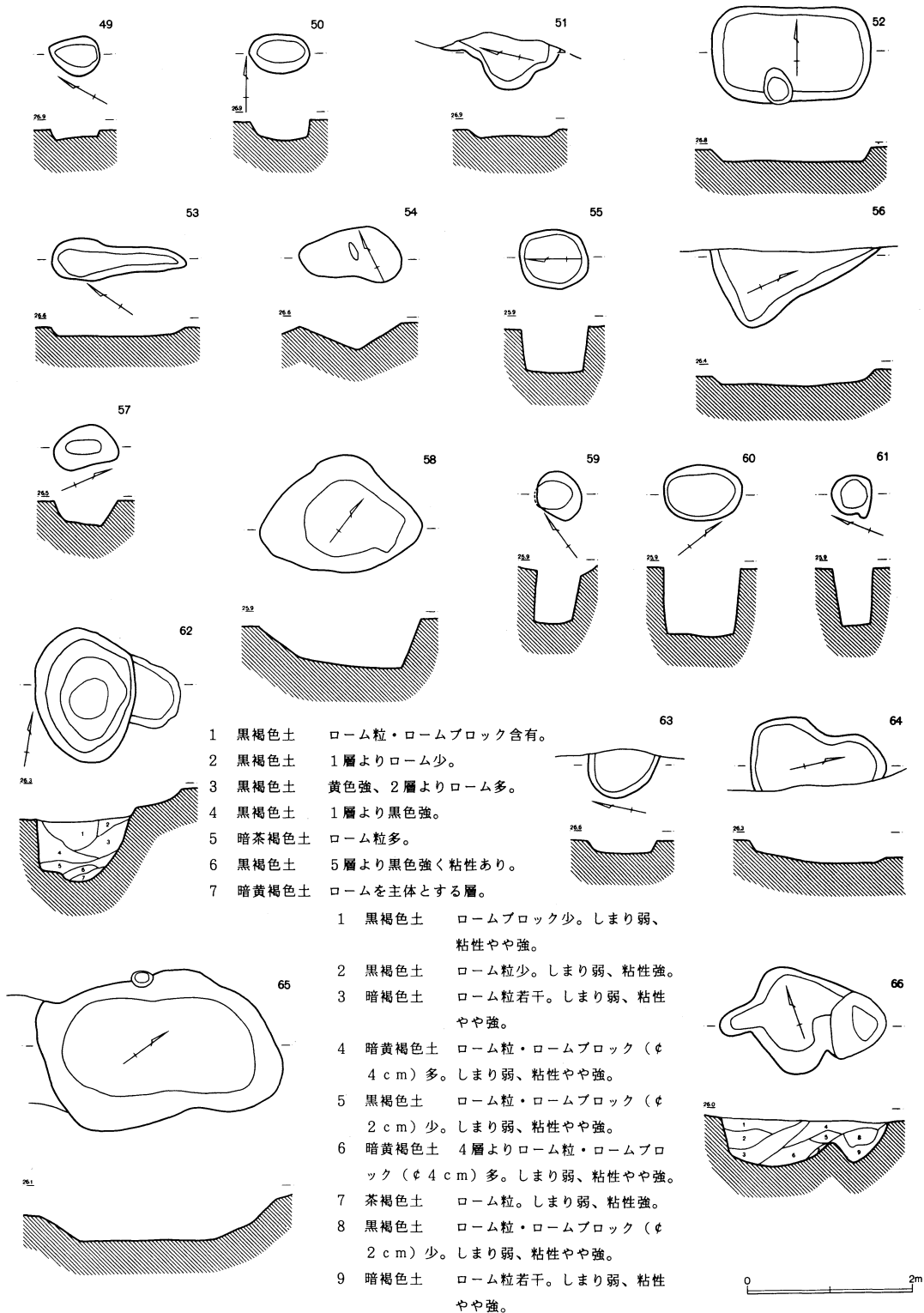
- 1 暗褐色土 ローム粒少、人骨有り。
- 2 暗褐色土 第1層よりローム粒多。
- 1 明赤褐色土 焼土層。
- 2 黒褐色土 ソフトローム混入。



- S K 44 暗褐色土 ロームブロック含有、人骨あり。しまり弱。
- S K 45 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック含有。しまり弱。

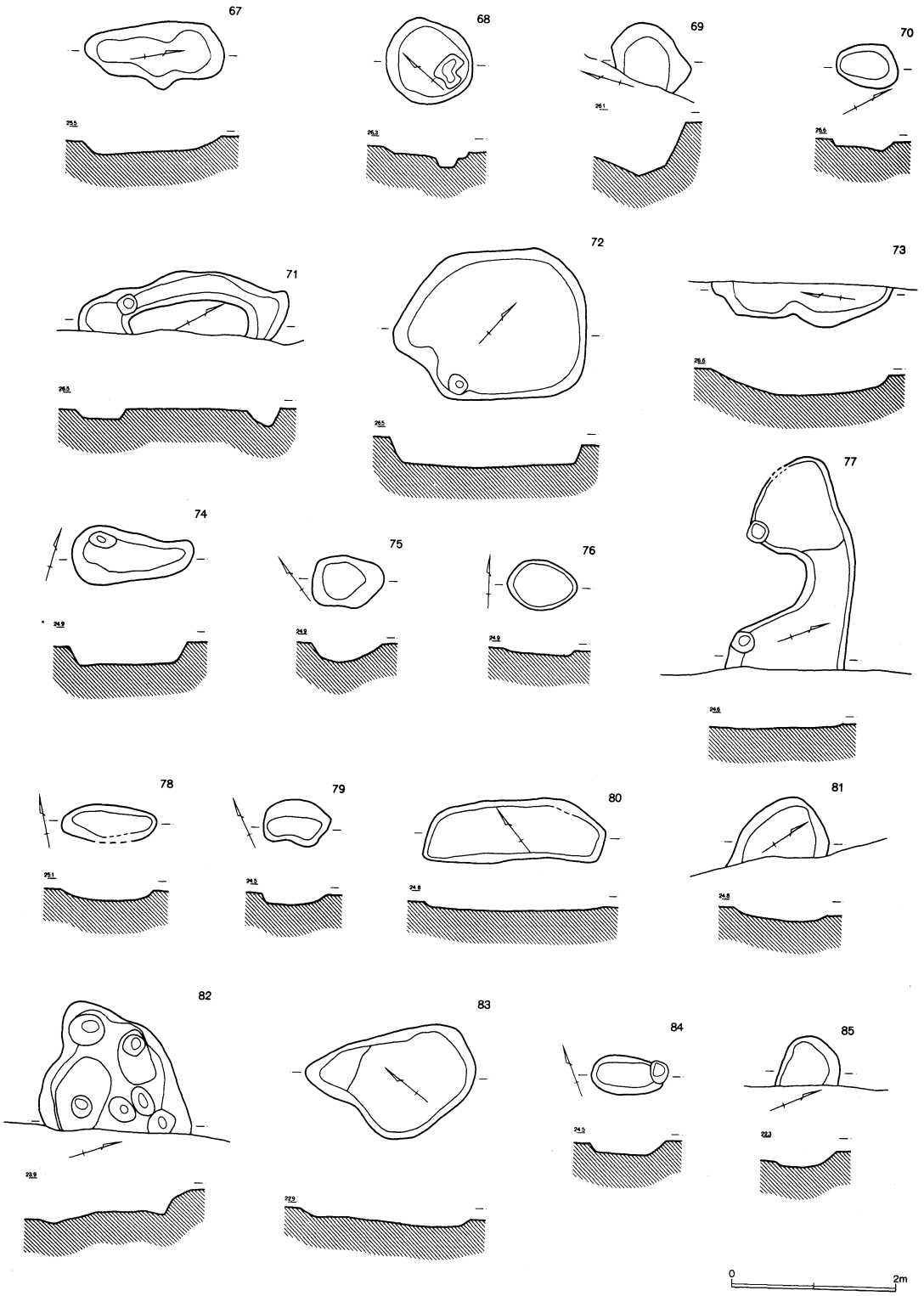


第295図 土坑(3)



- | | |
|---------|--------------------------------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒・ロームブロック含有。 |
| 2 黒褐色土 | 1層よりローム少。 |
| 3 黒褐色土 | 黄色強、2層よりローム多。 |
| 4 黒褐色土 | 1層より黒色強。 |
| 5 暗茶褐色土 | ローム粒多。 |
| 6 黒褐色土 | 5層より黒色強く粘性あり。 |
| 7 暗黄褐色土 | ロームを主体とする層。 |
| 1 黒褐色土 | ロームブロック少。しまり弱、粘性やや強。 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒少。しまり弱、粘性強。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒若干。しまり弱、粘性やや強。 |
| 4 暗黄褐色土 | ローム粒・ロームブロック(φ 4cm)多。しまり弱、粘性やや強。 |
| 5 黒褐色土 | ローム粒・ロームブロック(φ 2cm)少。しまり弱、粘性やや強。 |
| 6 暗黄褐色土 | 4層よりローム粒・ロームブロック(φ 4cm)多。しまり弱、粘性やや強。 |
| 7 茶褐色土 | ローム粒。しまり弱、粘性強。 |
| 8 黒褐色土 | ローム粒・ロームブロック(φ 2cm)少。しまり弱、粘性やや強。 |
| 9 暗褐色土 | ローム粒若干。しまり弱、粘性やや強。 |

第296図 土壌(4)

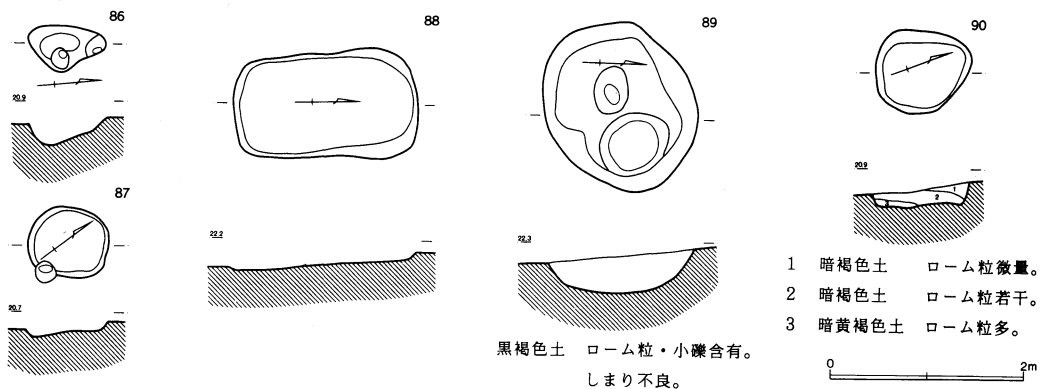


第297图 土坑(5)

番号	旧番	区	グリッド	規模 (長×短×深) cm	主軸方向
51		H	B-55-g	- × - × 9	-
52		H	B-56-b	194 × 112 × 16	N
53		H	B-57-g	164 × 34 × 10	N-39-E
54		H	B-57-e	125 × 58 × 27	N-67-E
55		H	A-58-b	82 × 72 × 56	N
56		H	A-58-f	- × - × 16	-
57		H	B-58-g	74 × 47 × 31	N
58	234	H	A-58-b	198 × 143 × 55	N-50-W
59		H	A-58-d	62 × 53 × 61	N-14-E
60		H	A-58-f	94 × 67 × 84	N-28-E
61		H	A-58-i	50 × 45 × 70	N-23-W
62	236	H	A-58-c	165 × 122 × 72	N-20-W
63		H	B-58-e	- × - × 14	-
64		H	A-59-b	165 × - × 15	N-13-E
65		H	A-59-d	289 × 179 × 41	N-34-E
66	235	H	A-59-b	157 × 124 × 56	N-50-W
67		H	A-59-e	172 × 69 × 16	N-12-E
68		H	A-59-e	106 × 102 × 8	N-40-W
69		H	A-59-f	- × - × 65	-
70		H	C-59-a	75 × 52 × 10	N-30-E

番号	旧番	区	グリッド	規模 (長×短×深) cm	主軸方向
71		H	B-60-b	250 × - × 12	N-32-E
72	240	H	B-60-a	238 × 183 × 30	N-50-E
73		H	C-59-a	220 × - × 28	N-6-W
74		I	A-62-c	148 × 60 × 25	N-76-E
75		I	A-62-a	86 × 63 × 23	N-51-W
76		I	A-62-a	86 × 60 × 7	N-90-E
77		I	A-63-b	- × - × 4	-
78		I	A-62-c	113 × (48) × 14	N-78-W
79		I	A-62-f	78 × 48 × 13	N-60-W
80		I	A-62-h	220 × 73 × 9	N-54-W
81		I	A-62-i	- × 113 × 10	-
82		I	A-63-g	- × 182 × 15	-
83		I	A-64-b	206 × 134 × 12	N-36-W
84		I	A-63-a	94 × 47 × 14	N-70-W
85		I	A-64-g	- × 74 × 13	-
86		I	A-65-a	80 × 49 × 24	N-3-E
87		I	A-65-c	85 × 72 × 9	N-35-E
88	245	I	A-65-d	195 × 103 × 5	N
89	244	I	A-64-b	178 × 158 × 38	N-80-E
90	246	I	A-65-a	95 × 86 × 15	N-14-E

つについては、別に(4)火葬墓・(5)土葬墓という項目を設けそちらで扱うこととした。本項で取り扱う土壇は、その大部分が性格の不明なものである。また、溝跡を始めとして、他の遺構の底面付近が部分的に遺存したものを、土壇として判断してしまったという例もあるかも知れない。墓壇と判別できずに、土壇とした可能性も否定し切れない。あるいは土壇状遺構とすべきであったかも知れない。



第298図 土壇(G)

(2) 溝跡 (第299図～第309図)

溝跡として検出された遺構は合わせて52条である。グリッドは代表に1グリッドのみを記す。

第1号溝跡(第299図)は、T6fグリッドに位置する。台地の肩のライン(崖線)に沿って走る、根切り溝と思われる。規模は、幅144cm～192cm・深さ8cm～28cm。遺物の出土はなかった。

第2号・第3号溝跡(第299図・第300図・第311図)は、V7b・fグリッドに位置する。前者が先行する。第2号は、南側で西に屈曲し第1号古墳跡に切られる。幅56cm～128cm・深さ10cm前後。遺物の出土はなかった。第3号は北側で東へ屈曲し、一端途切れた後第4号古墳跡の南側から、さらに南へ続くと思われる。幅48cm～64cm・深さ12cm～64cm。甕の口縁部が1点出土している。

第4号溝跡(第301図)は、T8bグリッドに位置する。黒色のしまりのない覆土である。幅80cm・深さ10cm～16cmを測る。一端途切れ、さらに南へ続くと推定された。遺物の出土はなかった。

第5号・第6号溝跡(第301図)は、T8e・gグリッドに位置する。第5号は幅40cm・深さ16cm、第6号は幅40cm・深さ32cmを測り、共に黒色のしまりのない覆土である。遺物の出土はない。

第7号溝跡(第301図)は、S10dグリッドに位置する。東西に走る幅40cm・深さ10cmの溝跡であり、黒色のしまりのない覆土である。遺物の出土はない。

第8号溝跡(第301図)は、T10gグリッドに位置する。東西に走る幅40cm・深さ20cmの溝跡であり、黒色のしまりのない覆土である。遺物の出土はない。

第9号溝跡(第301図)は、S14aグリッドに位置する。東西に走る幅80cm・深さ20cmの溝跡であり、黒褐色のしまりのある覆土である。遺物の出土はないが、中近世に降るとは思われない。

第10号溝跡(第301図)は、R14iグリッドに位置する。東西に走る幅100cm・深さ40cmの溝跡であり、黒褐色のしまりのある覆土である。遺物の出土はないが、中近世に降るとは思われない。

第11号溝跡(第301図・第311図)は、Q14iグリッドに位置する。東西に走る幅60cm・深さ42cmの溝跡であり、黒褐色のしまりのある覆土である。須恵器の坏が1点出土した。

第12号溝跡(第303図)は、R14dグリッドに位置する。一端途切れる幅50cm・深さ32cmの溝跡であり、黒色のしまりのない覆土である。遺物の出土はない。

第13号溝跡(第303図)は、R14fグリッドに位置する。第44号住居跡と重複する部分で途切れる。幅72cm・深さ32cmを測る。黒色のしまりのない覆土である。遺物の出土はない。

第14号溝跡(第303図・第311図)は、R14iグリッドに位置する。当初、方形周溝墓と推定して調査にはいったが、周囲に対応する溝もなく単独の溝跡と判断した。幅204cm・深さ60cmを測る。底面は平坦もしくは船底形に近く、立ち上がりは比較的緩やかである。覆土は、暗褐色でしまりもやや強いものであった。図化し得た遺物は5点である。

第15号溝跡(第300図・第311図)は、S16cグリッドに位置する。幅108cm・深さ48cmを測る断面V字状を呈し、北東から南西にやや湾曲しながら走る。覆土は、住居跡のそれに類似する。図化し得た遺物の出土は3点である。

第16号溝跡(第300図)は、R17fグリッドに位置する。幅96cm～114cm・深さ15cmを測る。拳大の石が多数投棄されており、常滑産と思われる大甕の破片が出土したが、図化に至らなかった。

第17号・第18号溝跡(第303図・第310図)は、Q20aグリッドに位置する。ほぼ平行して「コ」

字状に巡る。幅50cm前後・深さ15～35cmを測り、北東溝—南西溝間の距離は、外周部分を含めた範囲で第17号溝跡（内周溝）：1840cm、第18号溝跡（外周溝）：2020cmを測る。主軸方向は、N—36°—EまたはN—54°—Wを指す。2本の溝跡が、拡張によるのか、並存したものであるかは確認し得なかった。いずれにしろ、同一の屋敷の範囲を示す、地割り溝であると推定したい。東側は調査範囲外に続くが、西側と同様に「コ」字状を呈し、全体的には方形または長方形をなすと推定される。両溝跡の区画内には多数のピットが存在するが、“屋敷”に伴う遺構に関連するものもあろうと推定された。但し、ピットの配置について検討してはみたが、建物跡として並ぶことはできなかった。第18号溝跡から、陶磁器壺の頸部が出土したほかに、図化し得た遺物はなかった。

第19号・第20号溝跡（第304図）は、M25 c・iグリッドに位置する。両溝跡共に、第70号・第71号住居跡を切り、後者は土壇157・土壇159と重複する。両溝跡は平行して走るが、第20号溝跡は北西部分でほぼ90°屈曲する。規模は、第19号溝跡：幅45cm～72cm、深さ12cm～30cm、第20号溝跡：幅48cm～120cm、深さ12cm～21cmを測る。黒色のしまりの弱い覆土であり、遺物の出土はなかった。

第21号～第23号溝跡（第305図）は、L31 a・e、M31 gグリッドに位置する。第22号・第23号溝跡は、底部が途切れてしまっているが、本来はもっと長かったものと推定される。両溝跡はほぼ平行し、第21号溝跡と直行している。各溝跡の規模は、第21号溝跡：幅32cm・深さ40cm、第22号溝跡：幅68cm・深さ24cmを測る。第23号溝跡：幅64cm・深さ24cmを測る。黒色のしまりの弱い覆土であり、遺物の出土はなかった。なお、これらの溝跡は、並存か否かは別問題として、第24号溝跡を除くE区内の全溝跡と、方位的に対応しているといえよう。遺物の出土はなかった。

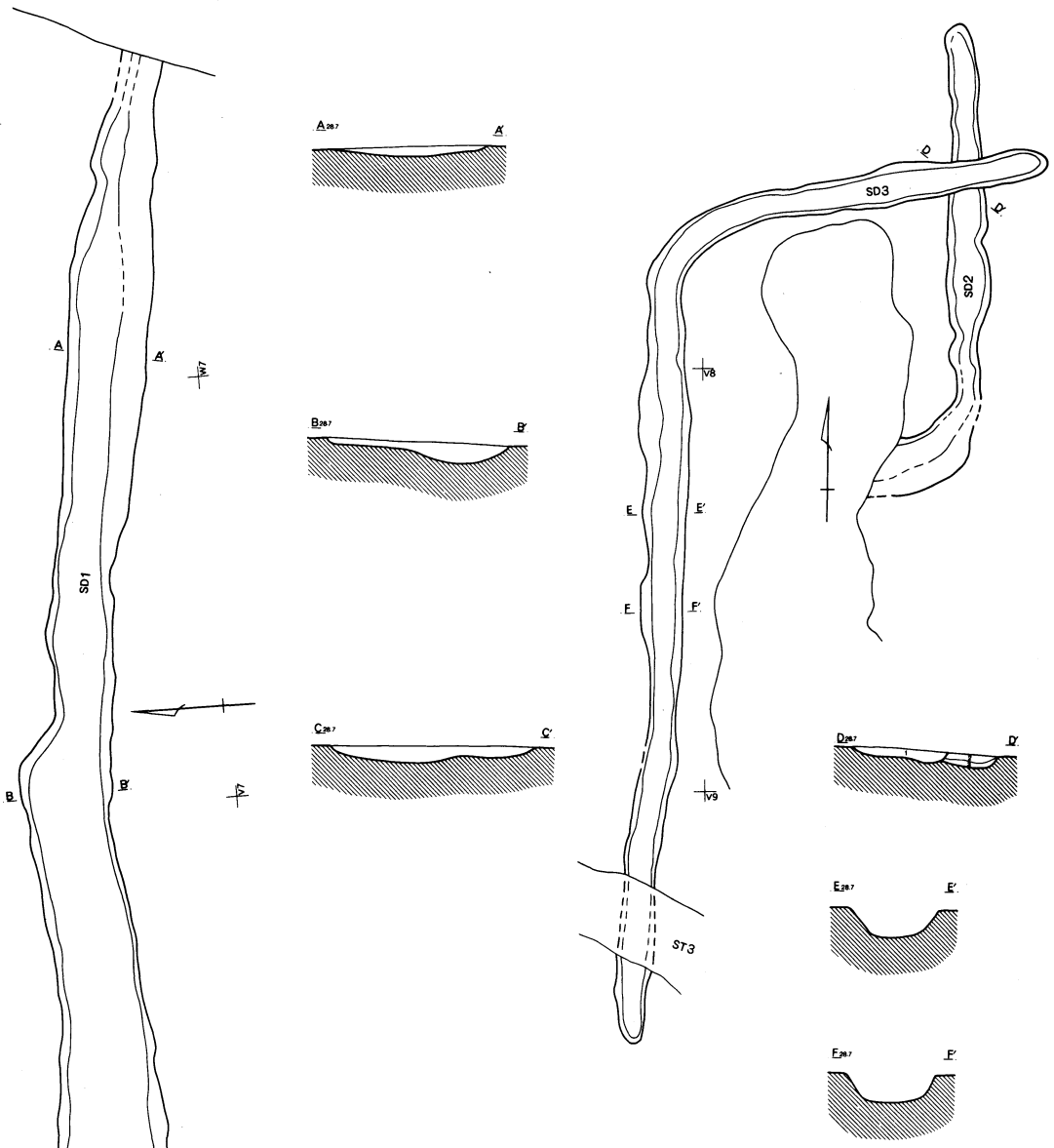
第24号溝跡（第305図・第310図）は、K32 bグリッドに位置する。E区内の全ての溝跡と方位が異なっており、それらの溝跡とは、時期的に異なることが推定される遺構である。方位的には、第11号・第19号・第20号溝跡に近いといえようか。幅100cm・深さ20cmを測り、ほぼ直線的に走る。溝底面は平坦な船底形を呈し、立ち上がりは緩やかである。須恵器環が1点検出された。

第25号溝跡（第305図）は、K33 fグリッドに位置する。幅36cm・深さ36cmを測り、断面は「U」字状を呈す。立ち上がりは明瞭である。遺物の出土はないが、中近世以前に遡ることはないと推定される。

第26号溝跡（第305図）は、J35 bグリッドに位置する。南端部は、第76号住居跡を切った状態で途切れているが、本来はもっと南に延びていたと推定される。幅40cm・深さ28cmを測り直角に屈曲する。屋敷地かどうかは確定できないものの、地割りの溝であろうとは想定できる。元の地主の方に伺っても、屋敷の存在は御存じないとのことであったが、個人的には近代の屋敷地ではないかと考えている。遺物の出土はみられなかった。

第27号・第28号溝跡（第305図）は、J35 f・K35 bグリッドに位置する。第27号溝跡は、幅32cm・深さ8cm、第28号溝跡は幅40cm・深さ28cmを測り、両溝跡はほぼ平行する。本来はもっと南に延びていたと想定される。第26号溝跡によって区画された、“屋敷地”に伴う遺構と推定したい。

第29号溝跡（第305図）は、I37 hグリッドに位置する。北西部分で第30号溝跡と交差しているが、本溝跡が切っていると判断した。第26号溝跡によって区画された範囲内との関連は不明である。本遺構も地割り溝と推定される。遺物の出土はみられなかった。



第1・2・3号溝土層註記

A-A' B-B' C-C' 共通

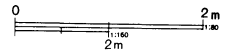
1 暗褐色土 ロームブロック少。しまり・粘性弱。

D-D'

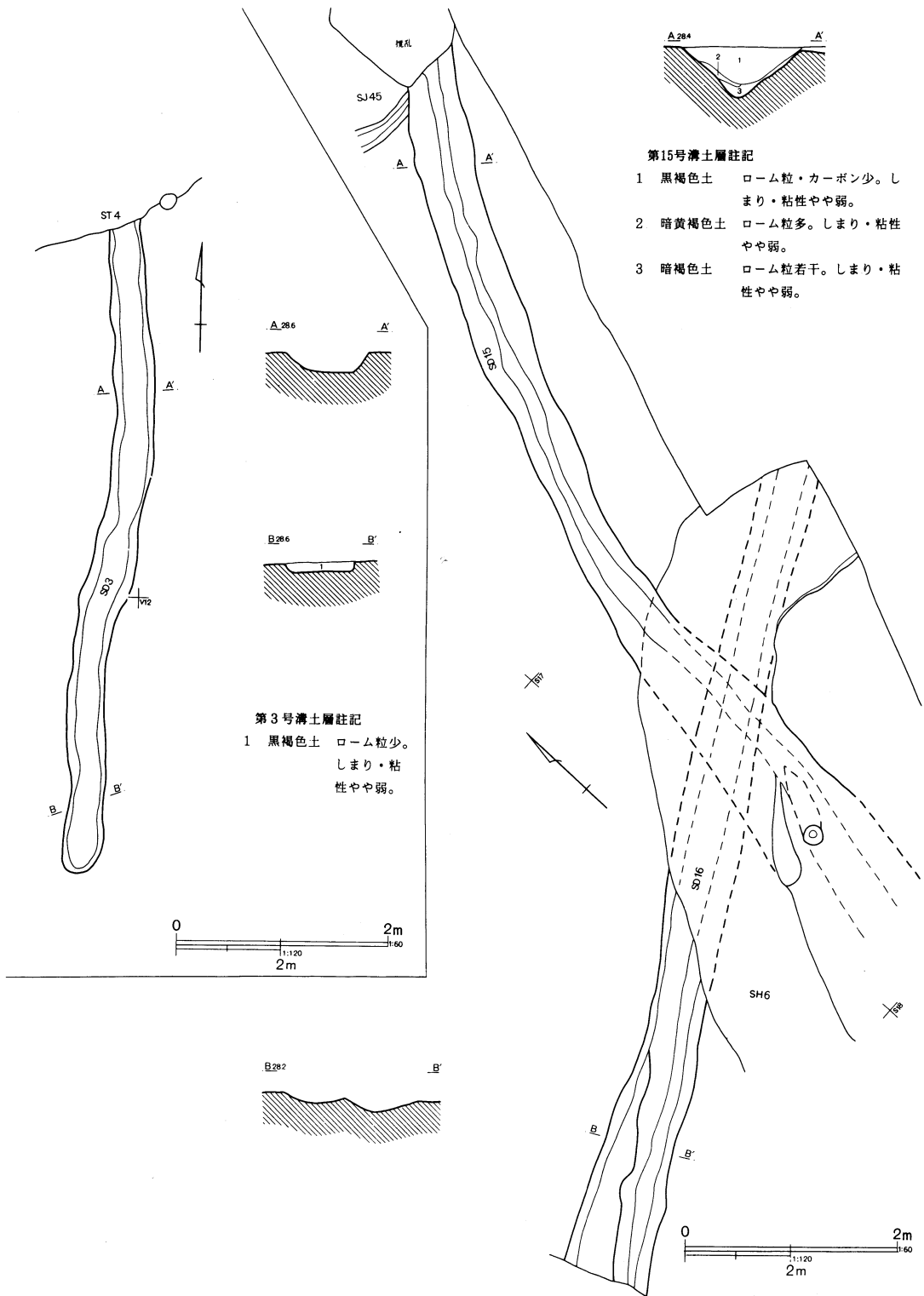
1 黒褐色土 カーボン・ローム粒微量。しまり・粘性弱。

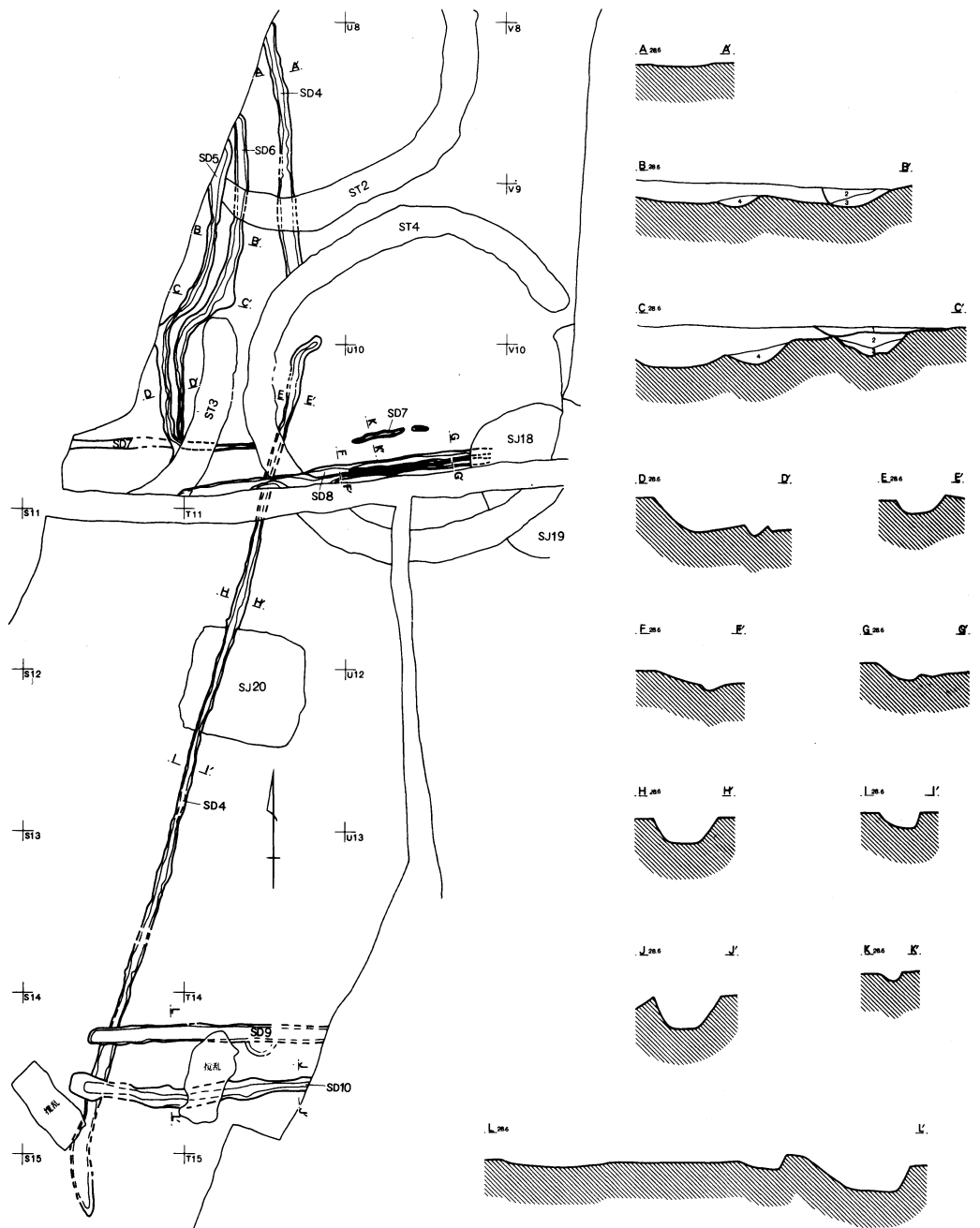
2 暗褐色土 カーボン・ローム粒少。しまり・粘性弱。

3 暗黄褐色土 ローム粒若干、カーボン微量。しまり・粘性やや弱。



第299図 第1・2号溝跡





第5・6号溝土層註記

B-B' C-C' 共通

- 1 攪乱
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック (φ1cm) 若干。
- 3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック (φ1cm) 多し。
- 4 暗褐色土 ローム粒少。しまり・粘性やや弱。

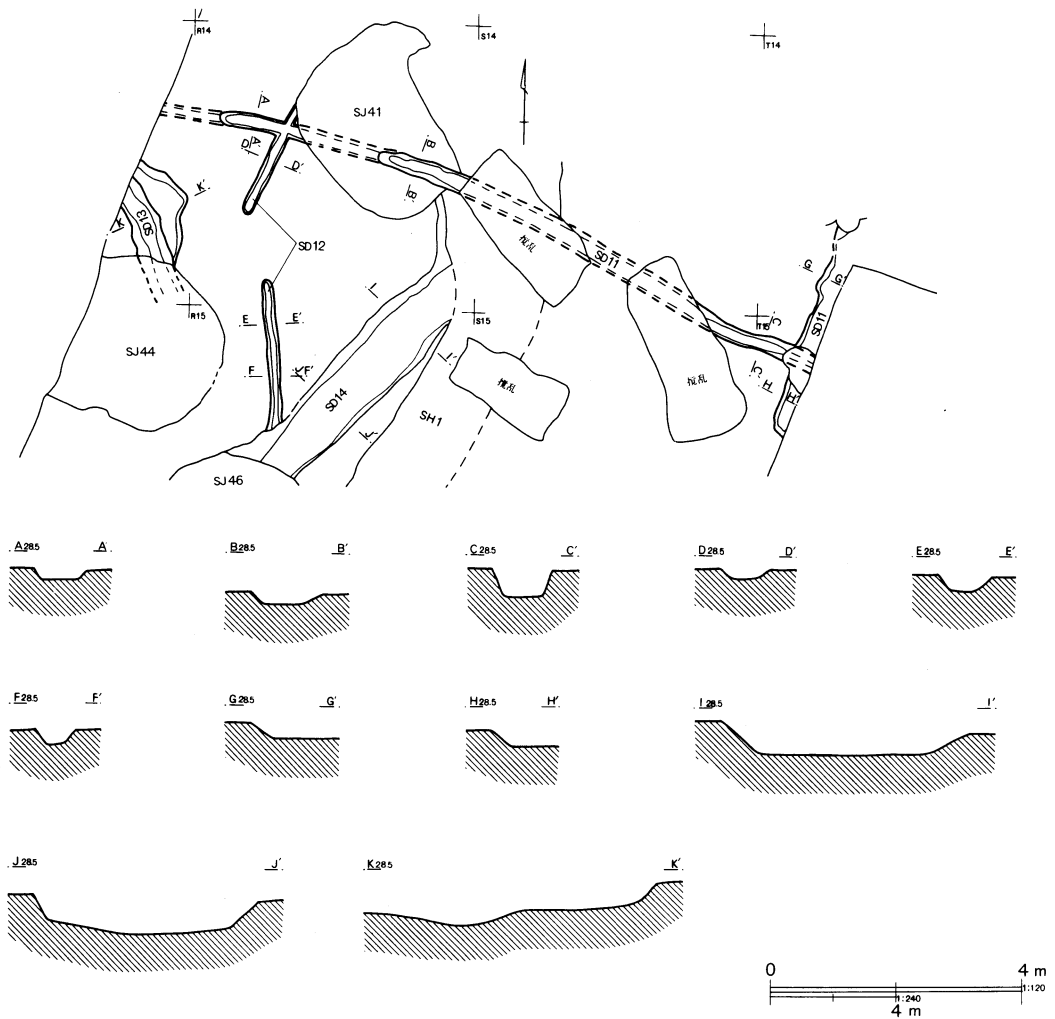
第301図 第4~10号溝跡

第30号溝跡（第305図）は、I 38 a グリッドに位置する。第26号溝跡に切られる。幅50cm・深さ30cmを測る。第26号溝跡によって区画された範囲内との関連は不明である。本遺構も地割り溝と推定される。遺物の出土はみられなかった。

第31号溝跡（第306図）は、I 38 a グリッドに位置する。東側は調査範囲外に続き、ごく部分的な検出である。幅54cm・深さ12cmを測る。方位的には、E区の溝跡や第32号溝跡と異なる遺構である。遺物の出土はなかった。

第32号溝跡（第306図）は、G 42 b グリッドに位置する。幅96cm・深さ12cmを測る。E区の溝跡・第31号溝跡とは方位的に対応しない。遺物の出土はなかった。

第33号・第34号溝跡（第306図）は、F 44 h・G 44 e グリッドに位置する。前者は第13号古墳跡を切り、後者には切られている。前者は幅64cm・深さ28cm、後者は幅48cm・深さ8cmを測り、共に



第302図 第11～14号溝跡



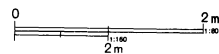
第17・18号溝土層註記

18号溝土層註記

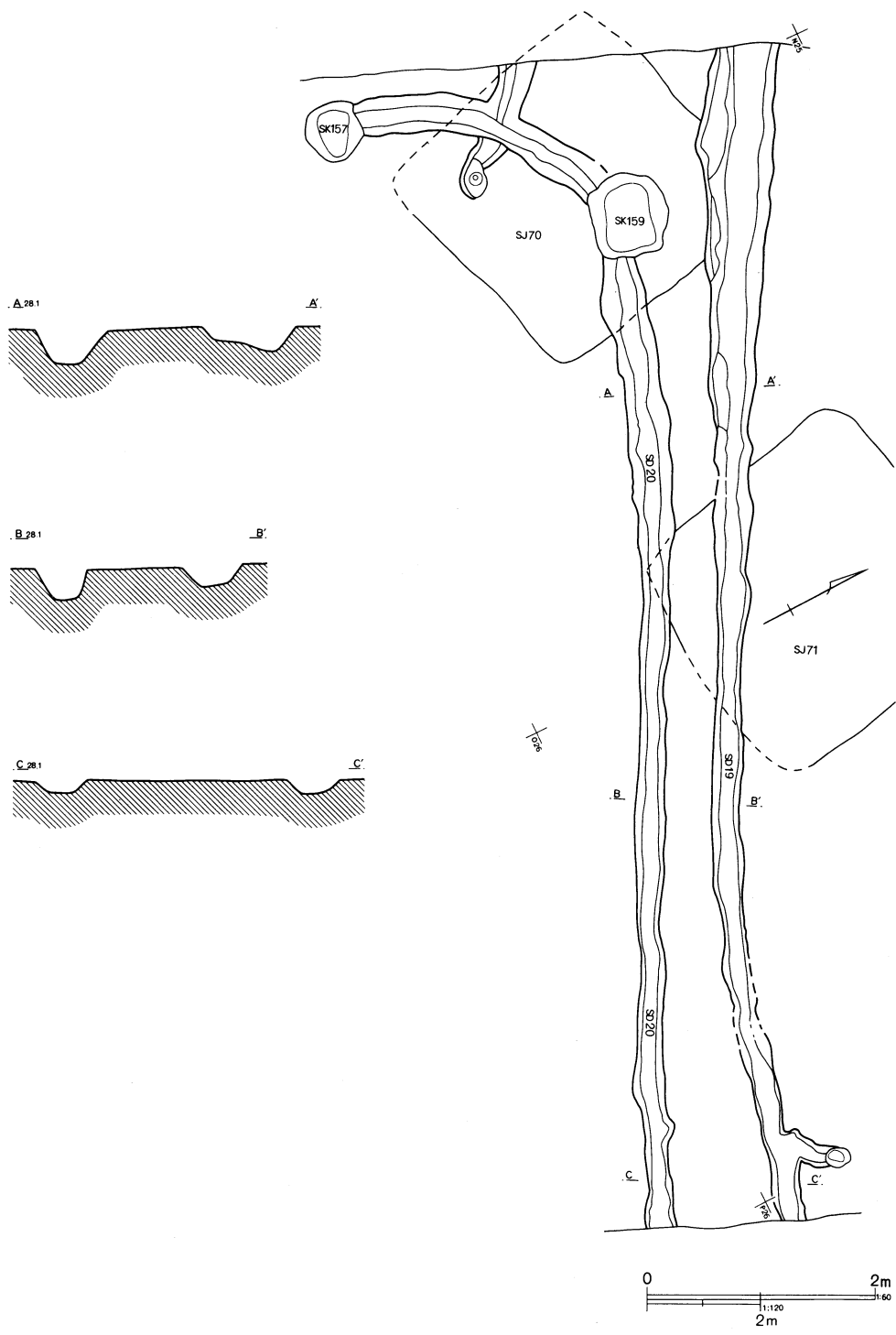
- 1 黒褐色土 ローム粒及び若干の焼土粒を含有。
- 2 黒褐色土 第1層よりローム含有が多く、黄色が強い。
- 3 黒褐色土 ロームブロックを含有。(崩落土か)
- 4 黒褐色土 第2・3層に比してローム混入が少なく、第1層に類似する層。

第17号溝土層註記

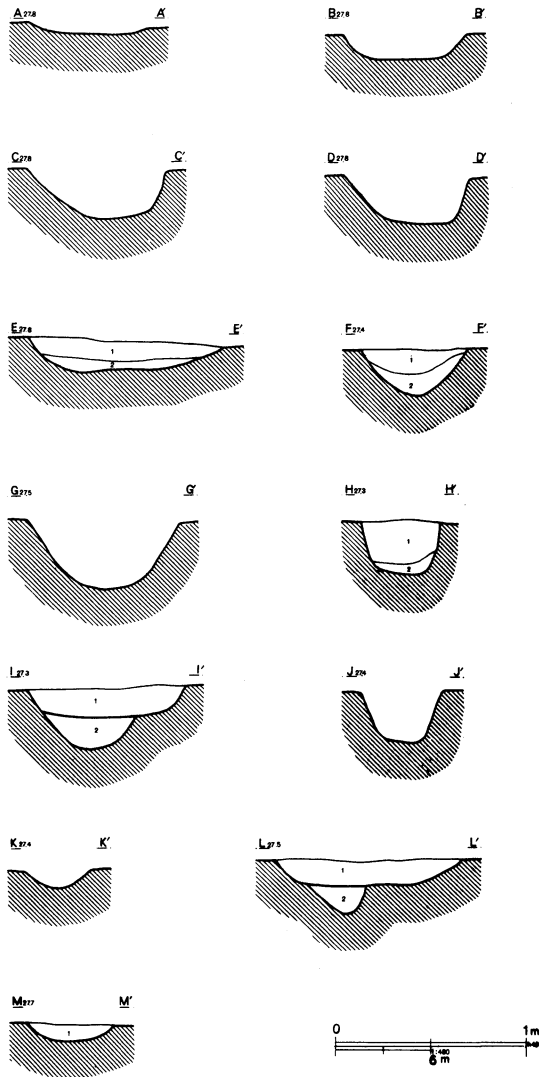
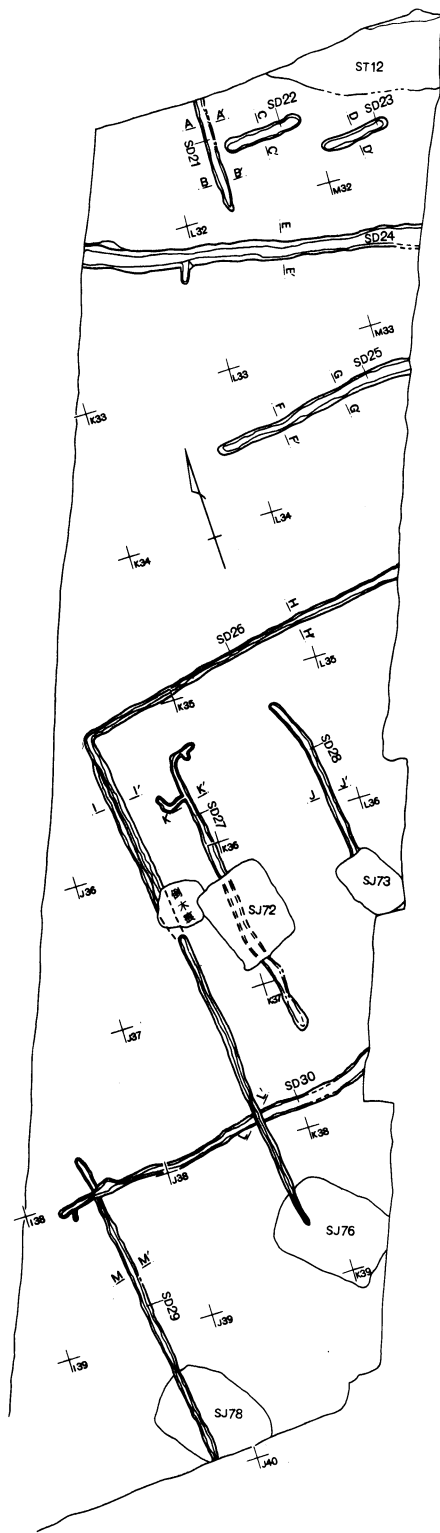
- 5 黒褐色土 粒子が粗くザラザラした感がある、ローム粒等の含有は少ない。



第303図 第17・18号溝跡



第304图 第19·20号沟迹



第24号溝土層註記 E-E'

- 1 黒色土 カーボン少。しまり弱、粘性やや強。
- 2 暗褐色土 カーボン・ローム粒少。しまり・粘性やや弱。

第25号溝土層註記 F-F'

- 1 黒色土 カーボン・ローム粒微量。しまり弱、粘性強。
- 2 暗褐色土 カーボン・ローム粒少。しまり弱、粘性強。

第26号溝土層註記 H-H' I-I' 共通

- 1 黒褐色土 カーボン・ローム粒微量。しまり・粘性弱。
- 2 黒褐色土 ローム粒少。しまり・粘性やや弱。

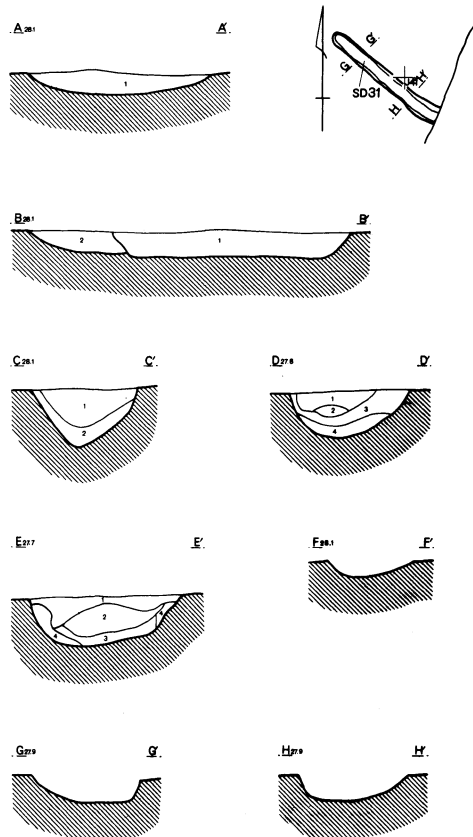
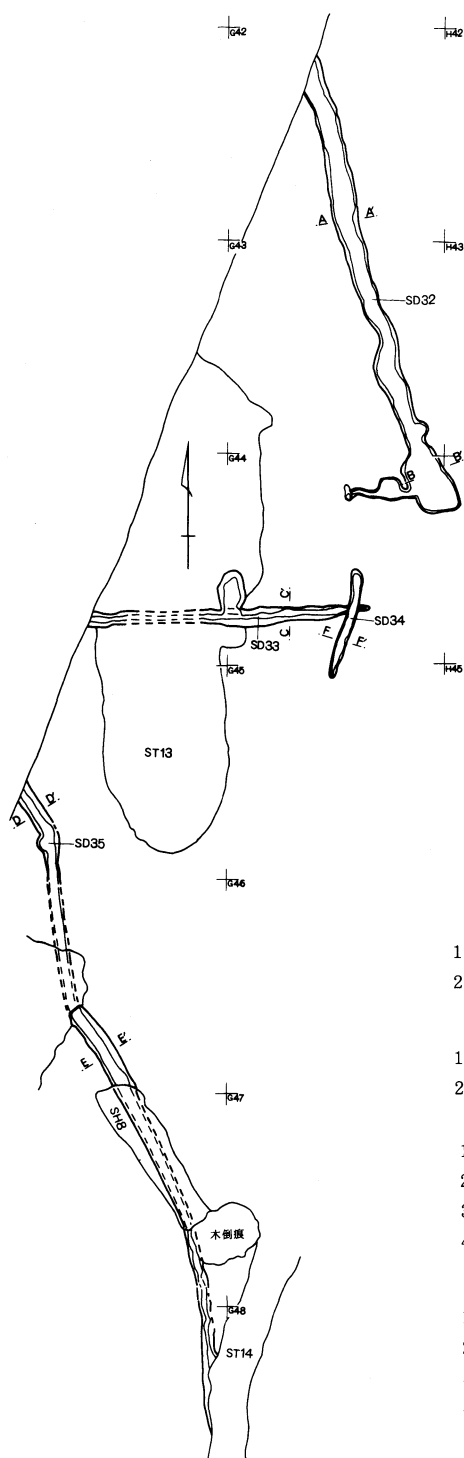
第26・30号溝土層註記 L-L'

- 1 灰色味を帯びた黒褐色土 カーボン少。しまり・粘性弱。
- 2 黒色土 カーボン微量。しまり弱、粘性やや強。

第29号溝土層註記 M-M'

- 1 黒色土 ローム粒若干、やや灰色。しまり・粘性弱。

第305図 第21~30号溝跡



第32・33・35号溝土層註記

32号溝土層註記 A-A' B-B' 共通

- 1 暗褐色土 ローム粒若干。しまり・粘性やや弱。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック若干。しまり・粘性弱。

33号溝土層註記 C-C'

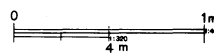
- 1 黒褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり・粘性やや弱。
- 2 暗褐色土 ロームブロックローム粒少。しまり・粘性弱。

35号溝土層註記 D-D'

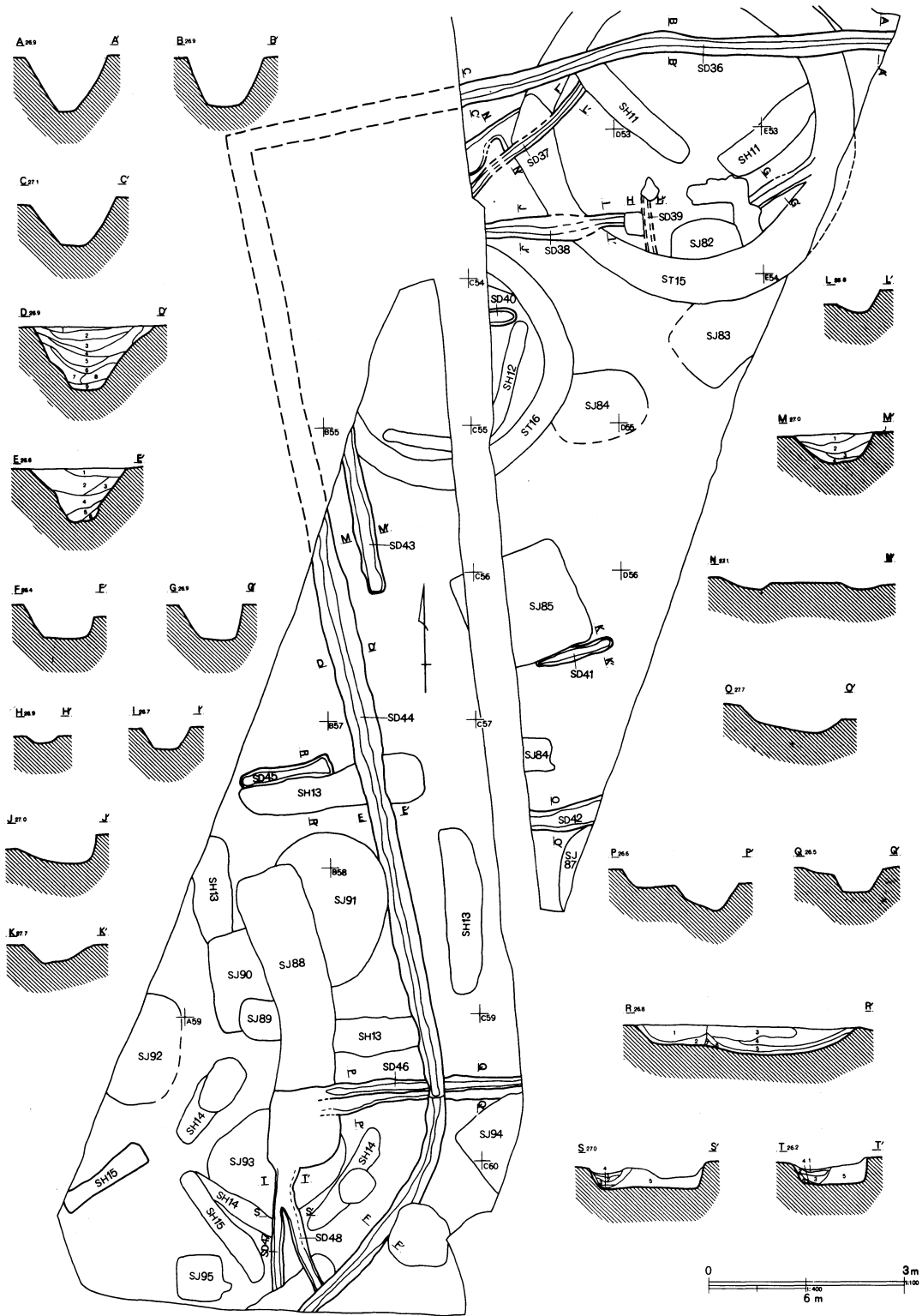
- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・炭化物少。
- 2 黒褐色土 第1層よりローム含有が少ない。
- 3 黒褐色土 東側に多量のローム流入が見られる。
- 4 黒褐色土 ロームブロック(大)若干。

E-E'

- 1 黒褐色土 ロームブロック・炭化物少。しまり強。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多。
- 3 黒褐色土 第2層に類似。ローム少。
- 4 黒褐色土 ローム含有多。しまり悪。



第306図 第31~35号溝跡



第307图 第36~46号沟跡

第45号溝土層註記 R-R'

- 1 暗褐色土 ローム粒少、カーボン微量。しまり・粘性やや弱。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ2cm)若干。しまり・粘性やや弱。
- 3 黒褐色土 ローム粒・カーボン少。しまり・粘性弱。
- 4 黒褐色土 ローム粒微量、カーボン少。しまり・粘性やや弱。
- 5 暗褐色土 ローム粒若干、ロームブロック(φ2cm)カーボン少。しまり・粘性やや弱。
- 6 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ2cm)若干。しまり・粘性やや弱。
- 7 暗黄褐色土 ロームブロック(φ3cm)ローム粒多。しまり・粘性やや弱。

第47・48号溝土層註記

S-S'

- 1 暗褐色土 ローム粒若干。しまり非常に強、粘性弱。
- 2 暗褐色土 ローム粒多、ロームブロック(φ2cm)若干。しまり強、粘性弱。
- 3 黒褐色土 ローム粒・カーボン微量。しまり強、粘性弱。
- 4 暗褐色土 ローム粒若干。しまり強、粘性弱。

ローム層

47・48号溝土層註記 T-T'

- 1 暗褐色土 ローム粒若干。しまり非常に強、粘性弱。(一番強い層である)。
- 2 暗褐色土 ローム粒多、ロームブロック(φ2cm)若干。しまり非常に強、粘性弱。
- 3 黒褐色土 ローム粒・カーボン微量。しまり非常に強、粘性弱。
- 4 暗褐色土 ローム粒若干。しまり非常に強、粘性弱。

第43・44・45・47・48号溝土層註記

43号溝土層註記 M-M'

- 1 黒褐色土 ローム粒含有。しまり不良。
- 2 黒褐色土 1層よりローム含有少。しまり不良。
- 3 暗黄褐色土 多量のローム粒・ロームブロック含有。しまり不良。
- 4 暗黄褐色土 ロームブロックを主体とする層。

44号溝土層註記 D-D'

- 1 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック・若干焼土粒含む。しまり良。
- 2 黒褐色土 ローム粒と少量のロームブロック、焼土含む、西側にローム含有の固まりがある。
- 3 黒褐色土 2層より茶色がかかる、含有物は同じ。
- 4 黒褐色土 2層に近い色。しまり良。
- 5 黒褐色土 多量のローム粒含有、西側にかたよる。
- 6 暗黄褐色土 全体に多量のローム粒含有。
- 7 暗黄褐色土 ローム・ロームブロック多含有、粒子粗くボソボソしている。
- 8 黒褐色土 ローム含有少、ロームブロック・ローム粒含有。
- 9 黒褐色土 8層よりしまっている。

E-E'

- 1 黒褐色土 ローム粒・カーボン微量。しまり・粘性やや強。
- 2 暗褐色土 ローム粒多、カーボン微量。しまり・粘性やや強。
- 3 黒褐色土 1層と同じ。しまり・粘性やや強。
- 4 暗褐色土 2層と同じ。しまり・粘性やや強。
- 5 黒褐色土 ローム粒少。しまり・粘性やや強。
- 6 暗褐色土 ローム粒少。しまり・粘性やや強。

遺物の出土はない。

第35号溝跡(第306図)は、F45dグリッドに位置する。途中途切れるが、1条の溝跡と判断した。幅96cm・深さ24cmを測る。遺物の出土はなかった。

第36号溝跡(第307図・第311図)は、C52dグリッドに位置する。本遺構は第11号方形周溝墓と第15号古墳跡を切る。覆土内からは、円筒埴輪や形象埴輪の破片が多数出土しているが、第15号古墳跡に伴う遺物と判断をし、そちらの項目に掲載することとした。図化し得ないほどの小片ではあるが、底面が糸切り離しの須恵器環が出土をしている。これが本遺構の時期を示すものであると推定される。混入と推定されるが、以上とは異なる時期の遺物が1点図化できた。なお、第44号溝跡と同一遺構という可能性を想定して、破線で結んでみた(第307図)。

第37号溝跡(第307図)は、C52fグリッドに位置する。幅60cm・深さ32cmを測る。黒色で、しまりの弱い覆土であり、遺物の出土はみられなかった。

第38号溝跡(第307図)は、C53dグリッドに位置する。幅65cm~100cm・深さ30cmを測る。黒色で、しまりの弱い覆土であり、遺物の出土はみられなかった。

第39号溝跡(第307図)は、D53dグリッドに位置する。溝の存在は検出されたが、遺存状況は悪く、計測に至らなかった。黒色で、しまりの弱い覆土であり、遺物の出土はみられなかった。

第40号溝跡（第307図）は、C53 a グリッドに位置する。遺存状況は悪い。幅100cm・深さは不明。遺物の出土はなかった。

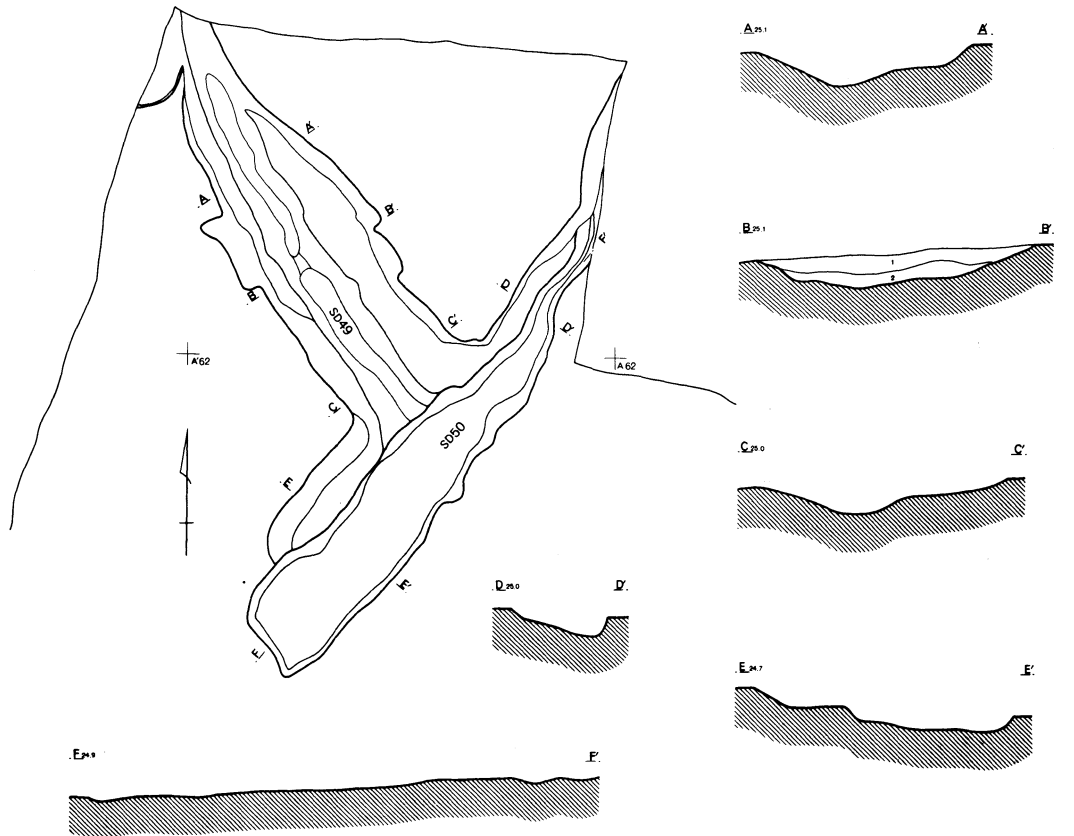
第41号・第42号溝跡（第307図）は、C56 e・C57 e グリッドに位置する。当初、2溝は方形周溝墓と推定したが、のち溝跡と改めた。前者は幅100cm・深さ30cm、後者は幅150cm・深さ26cmをはかる。両溝跡とも覆土は、暗褐色でややしりをもつ。第41号溝跡から、遺物が1点出土した。

第43号溝跡（第307図）は、B55 d グリッドに位置する。幅120cm・深さ40cmを測る。黒褐色でしまりのない覆土であり、遺物の出土はなかった。

第44号溝跡（第307図）は、B56 a グリッドに位置する。幅150cm～180cm・深さ80cm～100cmを測り、断面は底面がやや平坦な「V」字状を呈す。図化し得た遺物は7点である。溝跡は南側で湾曲するが、第88号住居跡の湾曲と、ほぼ対応しているようにも見受けられる。なお、第44号溝跡と同一遺構という可能性を想定して、破線で結んでみた（第307図）。

第45号溝跡（第307図）は、A57 b グリッドに位置する。確認し得た範囲内で、幅110cm・深さ25cmを測る。当初、方形周溝墓を想定したが、のち溝跡と改めた。出土遺物の内1点を図化し得た。

第46号溝跡（第307図）は、B59 a グリッドに位置する。西側は第88号溝跡に切られている。エレ



第49号溝土層註記 B-B'

- 1 暗褐色土 ローム粒少。しまりやや強、粘性やや弱。
- 2 暗黄褐色土 黄白色粘質土若干。しまり強、粘性やや弱。

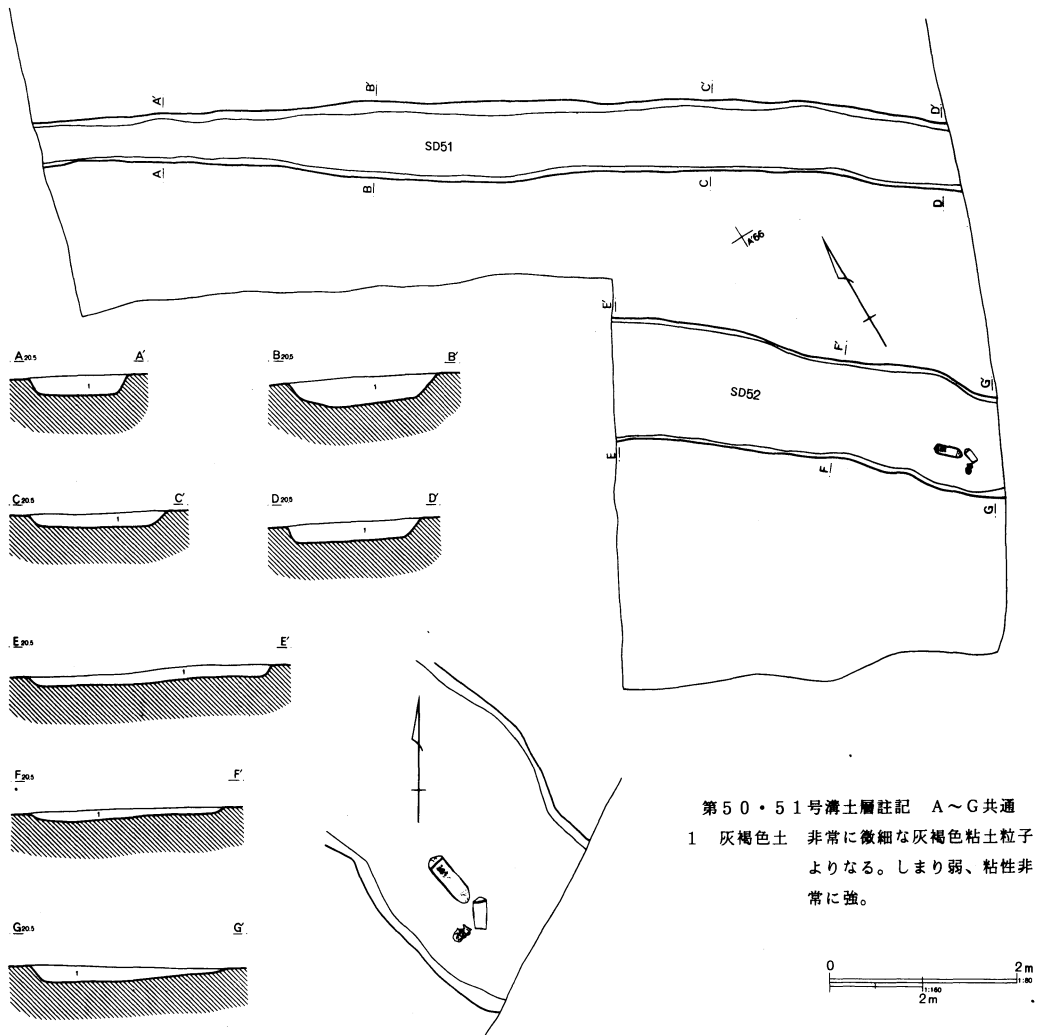


第308図 第49・50号溝跡

バージョンP-P'・Q-Q' から、2条が重複しているとも推定できるが、新旧関係に関しては確定できなかった。遺物の出土はなかった。また、H区土器集中区や第94号住居跡との関連等についても不明である。

第47号・第48号溝跡（第307図）は、A60b・cグリッドに位置する。2条の溝跡は第88号住居跡の南で合流し、住居跡において途切れる。前者は幅50cm・深さ20cm、後者は幅70cm・深さ15cmを測る。遺物の出土はない。表面や覆土が、非常に堅固なものであり溝跡とは考えにくいことから、これらの溝跡は道条遺構ではないかとの推定もあった。その場合、この道条遺構は、第88号住居跡に続いていると考えられるが、あくまでも可能性の1つとして挙げるにとどめたい。遺物の出土はない。なお、この遺構の続きはF区では検出されなかった。

第49号・第50号溝跡（第308図）は、A' 61a・fグリッドに位置する。両溝跡とも非常に遺存状況が悪く、プランは不明確であった。第49号溝跡は幅216cm・深さ32cm、第50号溝跡は幅96cm～192cm・深さ32cmを測る。前者については、2条の溝跡の可能性が考えられる。後者に関しては、プラン的に第44号溝跡とつながりそうな印象を受けるが、覆土はまったく異なるものであり、別遺構で



第309図 第51・52号溝跡

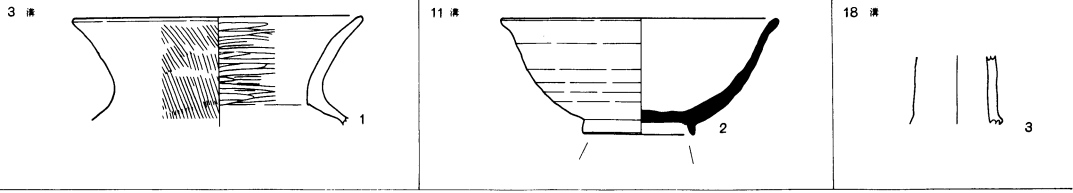
あることは明白であった。ごく僅かな出土遺物の中から、1点を図化し得た。

第51号・第52号溝跡(第309図・第312図)は、C' 64 i・B' 66 bグリッドに位置する。両溝跡はほぼ平行すると推定される。斜面部を下りきった位置に近く、確認面はぬかるみに似た状況であった。第51号溝跡は幅96cm~144cm・深さ20cm~28cm、第52号溝跡は幅192cm~248cm・深さ12cm~20cmを測る。覆土は共に、灰褐色の粘土層である。第51号溝跡では、遺物の出土はなかった。第52号溝跡からは、板碑2点と仏華器1点がまとまった状態で出土をした。溝内に一括投棄されたものであろうか。板碑の内1点は題目板碑と思われるが、表面の剝離が著しい。拓本を取っても判読できないため、実測を省略した。

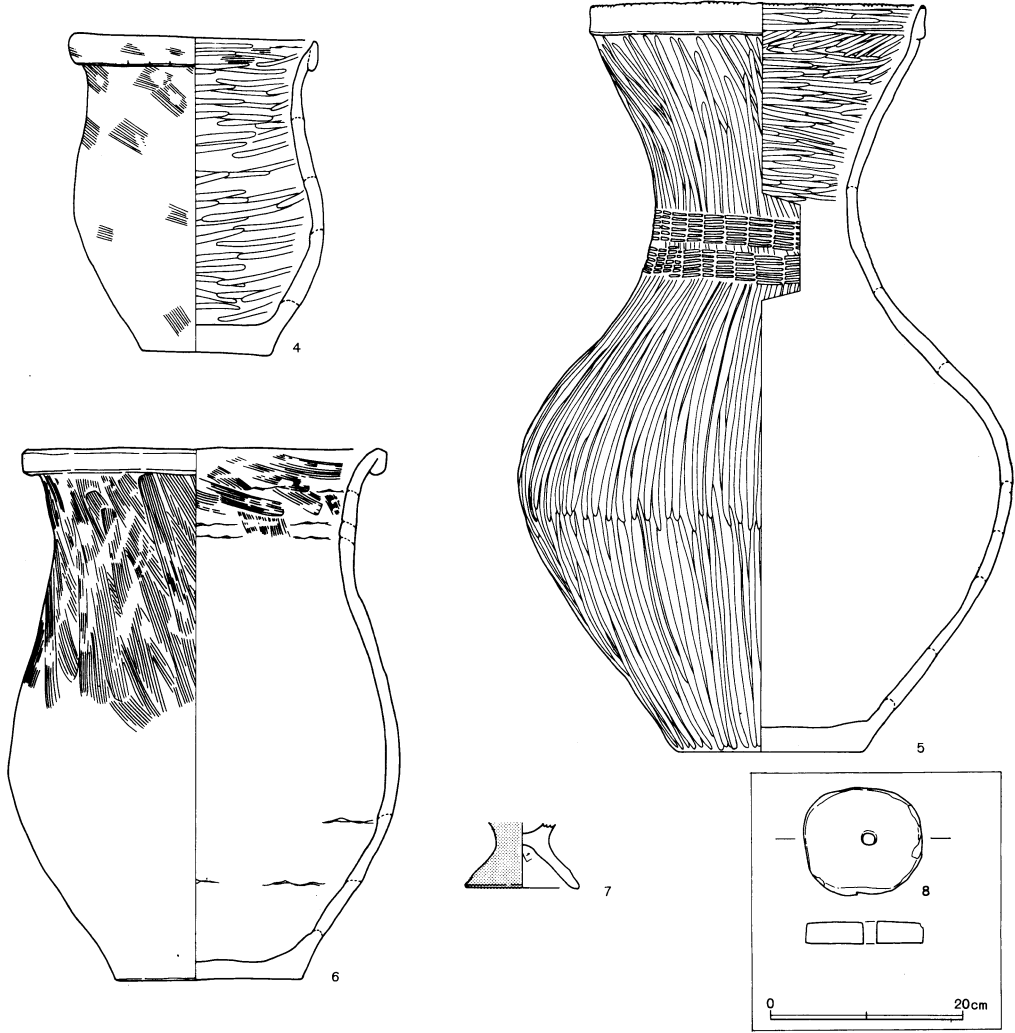
溝跡出土遺物 (第310~312図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径 (15.0) 現存高 5.7	第3号溝跡出土。口縁部：外面ハケ目の後粗い1横ナデ、内面ハケ目の後横ナデ。赤褐色。	A+B+I+J 口40 焼成：良
2	須恵器 杯	口径 14.6 底径 5.0 高台径 5.9	第11号溝出土。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離しの後付高台。緑褐色。	B+I+J 完形 焼成：やや不良
3	陶磁器 壺	現存高 3.6	第18号溝出土。釉のため光沢をもつ。焦茶色。	
4	壺	口径 12.4 胴径 13.1 底径 6.8 器高 16.4	第14号溝出土。頸部~口縁にかけて緩く外反して開き、複合口縁を呈す。外面は磨滅著しい。口縁部：外面ハケ目の後横ナデ、内面ハケ目の後粗いヘラ磨き。胴部：外面ハケ目の後粗いナデか、内面粗いヘラ磨き。底部：内外面ともナデ。茶褐色。	A+B+F 口95 胴50 底100 焼成：普
5	壺	口径 12.4 胴径 (25.9) 底径 9.3 器高 29.2	第14号溝出土。口唇部に爪先による刻み目を施す。頸部に6本単位で右回転の等間隔による櫛描き簾状文を2段。文様は線は太いが浅く不鮮明で、施文も雑。内面は剝落著しい。口縁：外面横ナデ、内面ヘラ磨き。頸部~胴部外面：ヘラ磨き、頸部内面：ヘラ磨き、胴部内面：ナデか。底部：外面ナデ、内面ナデか。褐色。	A+B+H+J 口75 頸80 胴45 底60 焼成：やや良
6	壺	口径 18.4 胴径 20.4 底径 9.5 器高 27.8	第14号溝出土。頸部~口縁にかけて緩く外反して開き、複合口縁を呈す。器面は荒れている。口縁部：内外面とも横ナデ。頸部~肩部外面：ハケ目。胴部~底部外面：ナデか、頸部~底部内面：ナデ。にぶい橙色。	A+B+D+G 口50 頸・胴60 底100 焼成：普
7	器台	脚台径 (5.9) 現存高 3.5	第14号溝出土。外面：ナデ、内面：ヘラナデの後ナデか。赤褐色。	A+B+E+H+J 脚25 焼成：普
8	有孔 石板	直径 3.1 厚さ 0.6	第14号溝出土。欠損面をもつ。比較的整形は粗い。片側からの穿孔か。青灰色。現存重量9.9g。	滑石製 ほぼ完形
9	高杯	現存高 5.7	第15号溝出土。複合口縁を呈し、耳たぶ状の棒状浮文1箇所のみ残存。口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：内外面ともヘラ磨きか。赤褐色。	B+I(多) 杯5 焼成：普

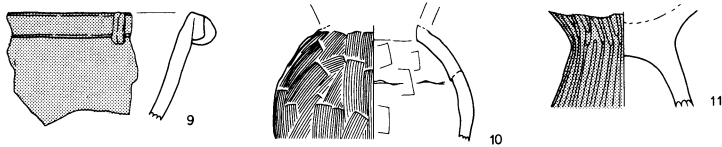
10	小型壺	胴径 (10.5) 現存高 6.0	第15号溝出土。外面：ハケ目、内面ヘラナデ。 褐色 (一部黒色)。	A+B+J 胴30 焼成：やや良
11	高 坏	現存高 5.1 器 高 6.0	第15号溝出土。外面：ヘラ磨き、内面：ナデ。赤褐色。	B+E+J 焼成：普
12	須恵器 坏	口径 (11.6) 底径 (6.0) 現存高 3.9	第24号溝出土。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り 離し。黄褐色。	A+B+J □45 底20 焼成：不良
13	瓦 質 鉢	口径 (30.0) 現存高 6.0	第36号溝出土。内外面とも丁寧なナデ。外面：黄橙色、内面： 灰白色。播鉢か。	□15
14	壺	胴径 8.9 現存高 8.0 底径 6.5	第36号溝出土。胴部：外面ハケ目の後ナデ、内面上半はナデ、 下半はヘラナデ。底部：外面ナデ、内面ヘラナデ。明赤褐色。	B+D+E+H 胴80 底100 焼成：良
15	須恵器 蓋	つまみ径 5.4 現存高 1.5	第44号溝出土。ロクロナデ。灰色。	B+H+J 焼成：普
16	須恵器 坏	底径 10.0 現存高 1.0	第44号溝出土。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り 離しの後、周辺を左回りの回転ヘラ削り。明灰色。	B+H+J 底55 焼成：普
17	須恵器 坏	底径 (9.0) 現存高 1.5	第44号溝出土。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り 離し。黄褐色。	D+E 底25 焼成：普
18	坏	口径 (14.1) 現存高 3.0	第44号溝出土。器面は摩滅著しい。口縁部：内外面とも横ナデ。 褐色。	A+B+C(細密) □45 焼成：やや不良
19	坏	口径 (14.1) 器 高 4.5	第44号溝出土。口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面ヘラ削 りの後ナデ。内面丁寧なナデ。外面褐色、内面黒色。	A+B+E+H □20 体40焼成：やや良
20	壺	底径 (10.4) 現存高 3.2	第44号溝出土。胴部～底部：外面ヘラナデとナデ、内面ナデ。 黄褐色。	B+I+J 底20 焼成：やや良
21	土師質 土器皿	口径 7.9 底径 5.5 器 高 1.8	第44号溝出土。器面はやや荒れている。ロクロナデ。ロクロ右 ：底部回転か。回転糸切り離しか。	A+B+G □30 体60 焼成：普
22	壺	口径 (16.0) 現存高 7.2	第45号溝出土。口縁部：内外面とも横ナデ、後外面にRL-LR縄 文を羽状に施文。頸部：ヘラミガキ、内面ナデ。褐色。	A+B+H+J □20 焼成：良
23	瓦 質 播 鉢	口径 28.0 底径 (11.0) 器 高 11.5	第50号溝出土。口縁部は直線的に開く。内外面とも丁寧ナデ。 灰褐色。	□50 底30 焼成：やや不良
24	瓦 質 播 鉢	口径 (29.4) 底径 (10.8) 器 高 10.2	第52号溝出土。口縁部は直線的に開く。ロクロナデか。 明赤褐色。	□20・底15 焼成：普



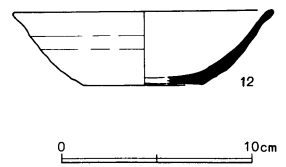
14 溝



15 溝

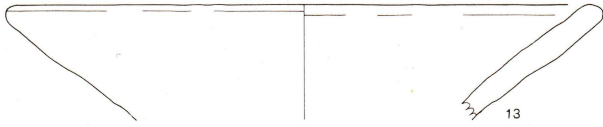


24 溝

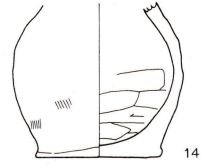


第310圖 溝跡出土遺物(1)

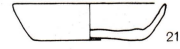
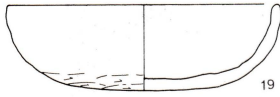
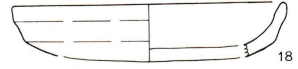
36 溝



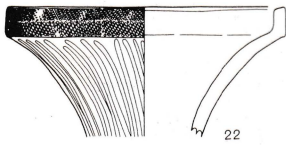
41 溝



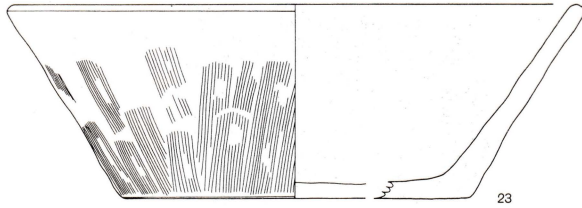
44 溝



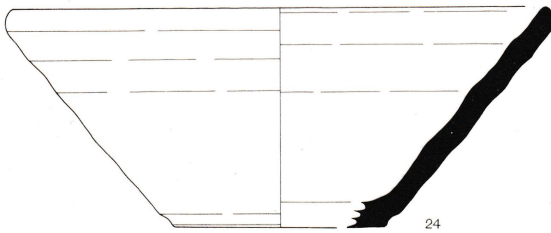
45 溝



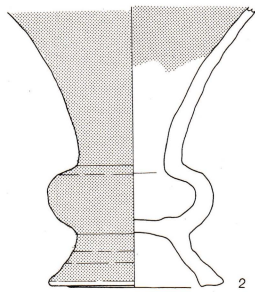
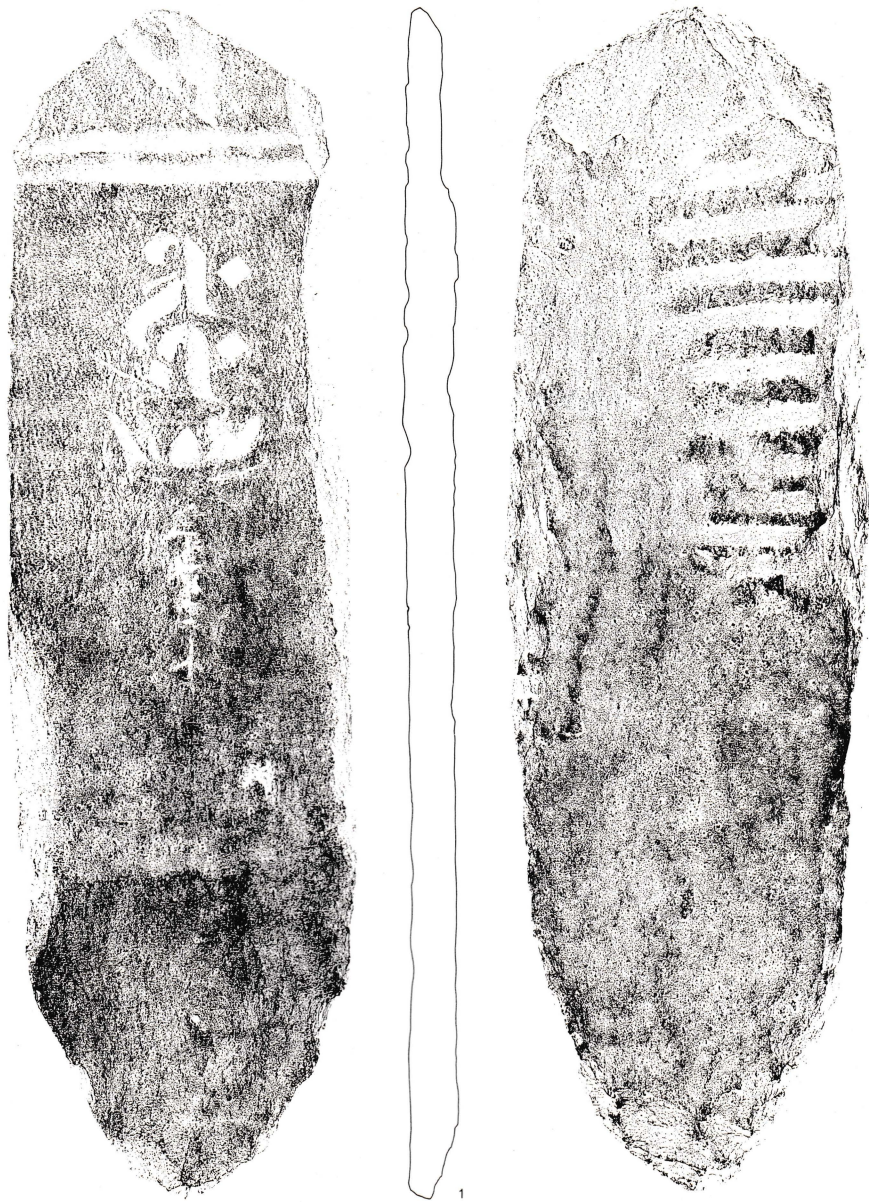
50 溝



52 溝



第311図 溝跡出土遺物(2)



第312図 溝跡出土遺物(3)

(3) 掘建柱建物跡 (第313図～第314図)

代正寺遺跡において検出された掘建柱建物跡は2棟であり、共にI区での検出である。I区は南西に面した斜面部であり、2棟共に中腹に位置している。図化してしまうとごく緩やかな斜面であるが、調査時においてはもっと急であるとの印象を受けた。

第1号掘建柱建物跡は、A' 63aグリッドに位置する。台地の肩部分から18m程の距離にある、斜面部中腹での検出である。この周辺ではロームは失われており、砂礫混じりの層を地山としている。土壌やピットが僅かに重複をしているが、比較的遺存状況は良いといえる。庇や雨落溝等は、検出されておらず、P1-P2間のピットは、繰り返し精査したにも関わらず検出できなかった。

建物跡の規模は2間×3間であり、梁行480cm・桁行830cmを測る。主軸方向はN-88°-Wを指し、第2号掘建柱建物跡(N-71°-W)とは多少異なる。

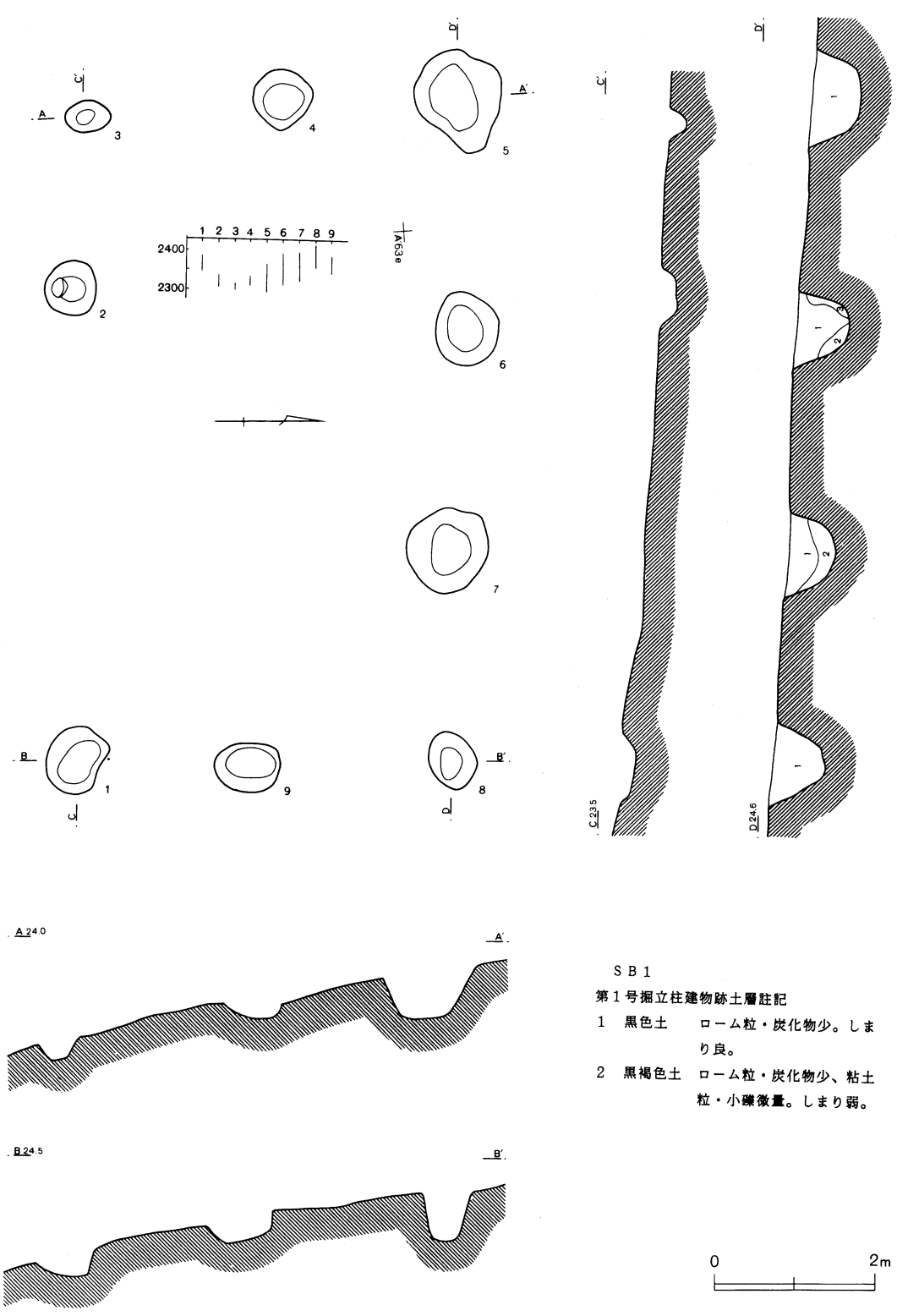
各柱穴間の距離は、梁行240cm・桁行270cmを測る。各ピットの、確認面での平面規模と深さは、P1:80cm×64cm・20cm、P2:63cm×62cm・24cm、P3:56cm×40cm・24cm、P4:72cm×64cm・20cm、P5:132cm×100cm・64cm、P6:92cm×80cm・24cm、P7:112cm×104cm・56cm、P8:80cm×56cm・64cm、P9:80cm×64cm・24cmを測る。全体的に、平面形態は円形あるいは楕円形であり、掘り込みのしっかりしているものもあるが、概して断面は底面の立ち上がりは緩やかである。斜面上に立地しているためあつてか、各柱穴の底面レベルにはバラツキがみられる。調査の段階では、土層断面を観察しても柱痕は確認されず、ピット及びその周辺からは、礎石や根石等も検出されていない。遺物の出土はみられなかった。

第2号掘建柱建物跡は、A' 64eグリッドに位置する。台地の肩部分から30m程の距離にあり、斜面部中腹よりやや下がった位置からの検出である。第1号掘建柱建物跡の場合と同様に、この周辺でもロームは失われており、砂礫混じりの層が地山である。

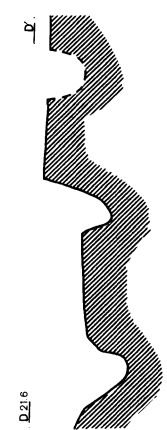
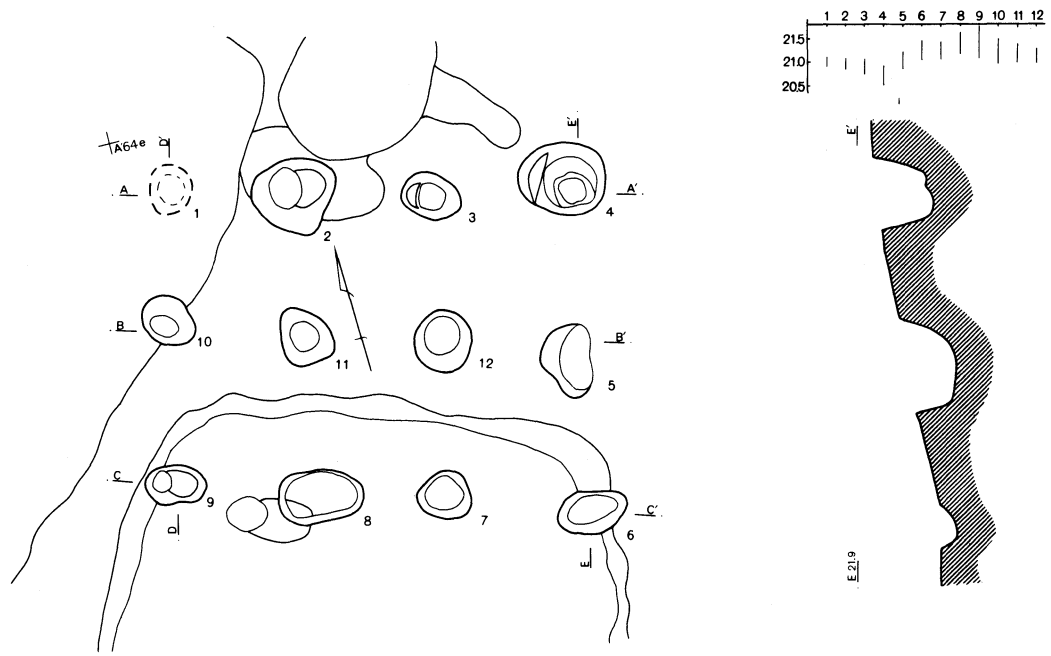
P1については、性格不明遺構1と重複していると推定されるが、性格不明遺構1の覆土との区別は不明瞭であり、検出することはできなかった。P10の調査においても、性格不明遺構1の覆土との区別は不明瞭であったが、P10が切っているように観察された。南側では、P6~P9が第94号住居跡を切っている。庇や雨落溝等は、検出されていない。

建物跡の規模は2間×3間の総柱であり、梁行320cm・桁行450cmを測る。主軸方向はN-71°-Wを指し、第1号掘建柱建物跡(N-88°-W)とは多少異なる。

各柱穴間の距離は、梁行・桁行共にほぼ等しく150cmを測る。各ピットの、確認面での平面規模と深さは、P2:88cm×80cm・36cm、P3:64cm×48cm・40cm、P4:96cm×80cm・56cm、P5:72cm×56cm・48cm、P6:80cm×48cm・20cm、P7:64cm×48cm・24cm、P8:92cm×56cm・28cm、P9:64cm×45cm・56cm、P10:64cm×48cm・72cm、P11:68cm×56cm・28cm、P12:72cm×64cm・40cmを測る。全体的に、平面形態は円形あるいは楕円形であり、断面については底面の立ち上がりは比較的急でしっかりとしている。斜面上に立地しているためあつてか、各柱穴の底面レベルには、若干のバラツキがみられる。しかし、東西の並びではレベル的にほぼ深さが等しいといえよう。調査の段階では、土層断面を観察しても柱痕は確認されず、ピット及びその周辺からは、礎石や根石等も検出されていない。遺物の出土はみられなかった。



第313図 第1号掘立柱建物跡



第314图 第2号掘立柱建物跡

(4) 火葬墓 (第315図)

代正寺遺跡において検出された火葬墓は、合わせて10基である。遺存状況は様々であるが、概ね100cm×60cm程の竪穴の長軸方向中央に焚口が設けられているもので、四隅に拳大の石が据えられている例があった。いずれも骨片を僅かに残すのみである。火葬墓と表現をしたが、火葬を行った後、骨は別の場所に納めるのであろうから、墓という語を用いるのは適切ではないかも知れないが、通例に従い火葬墓という語を用いた。火葬墓10を除いて、D区・F区で検出されており、その周囲には土葬墓がそれ以上に数多く確認されている。火葬墓10は、2基の土葬墓と共に検出された。なおこの他に、I区の台地の肩部分から、火葬墓と覚しき遺構の痕跡が、1基検出された。

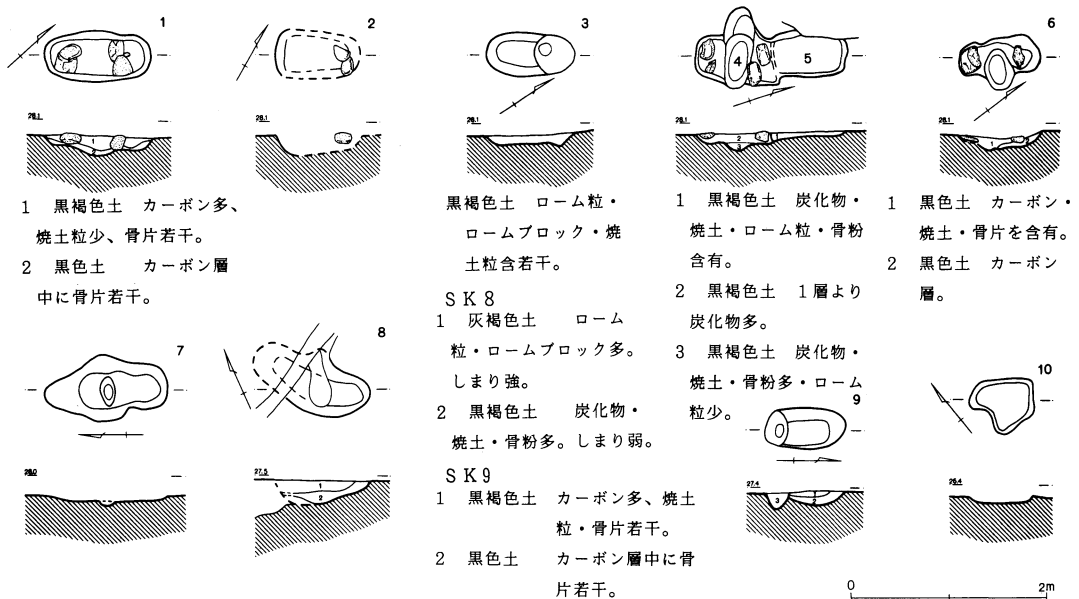
第6表 火葬墓一覧表

番号	旧番	区	グリッド	規模(長×短×深)cm	主軸方向
1	15	D	Q-19-e	112 × 53 × 20	N-41-E
2	26	D	P-21-g	(88) × (50) × 21	N-53-E
3	35	D	O-22-c	90 × 45 × 9	N-30-E
4	29	D	O-22-c	(79) × 47 × 7	N-19-E
5	30	D	O-22-c	(89) × 50 × 17	N-19-E

番号	旧番	区	グリッド	規模(長×短×深)cm	主軸方向
6	32	D	O-22-c	84 × 54 × 13	N-33-E
7	136	F	G-46-c	130 × 49 × 11	N
8	179	F	E-47-c	- × 53 × 25	-
9	180	F	E-47-f	83 × 44 × 15	N
10		H	A-59-f	65 × 52 × 7	N-40-W

第2号火葬墓出土遺物 (第319図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	須恵器 坏	口径(11.8) 底径(4.7) 器高 4.8	器面は磨滅している。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。灰白色。	B+D+H+J 口・体20 焼成：不良



第315図 火葬墓

(5) 土葬墓 (第316図～第317図)

代正寺遺跡で検出された土葬墓は、合わせて42基に及ぶ。分布範囲としては、大きく分けて3地点が挙げられる。

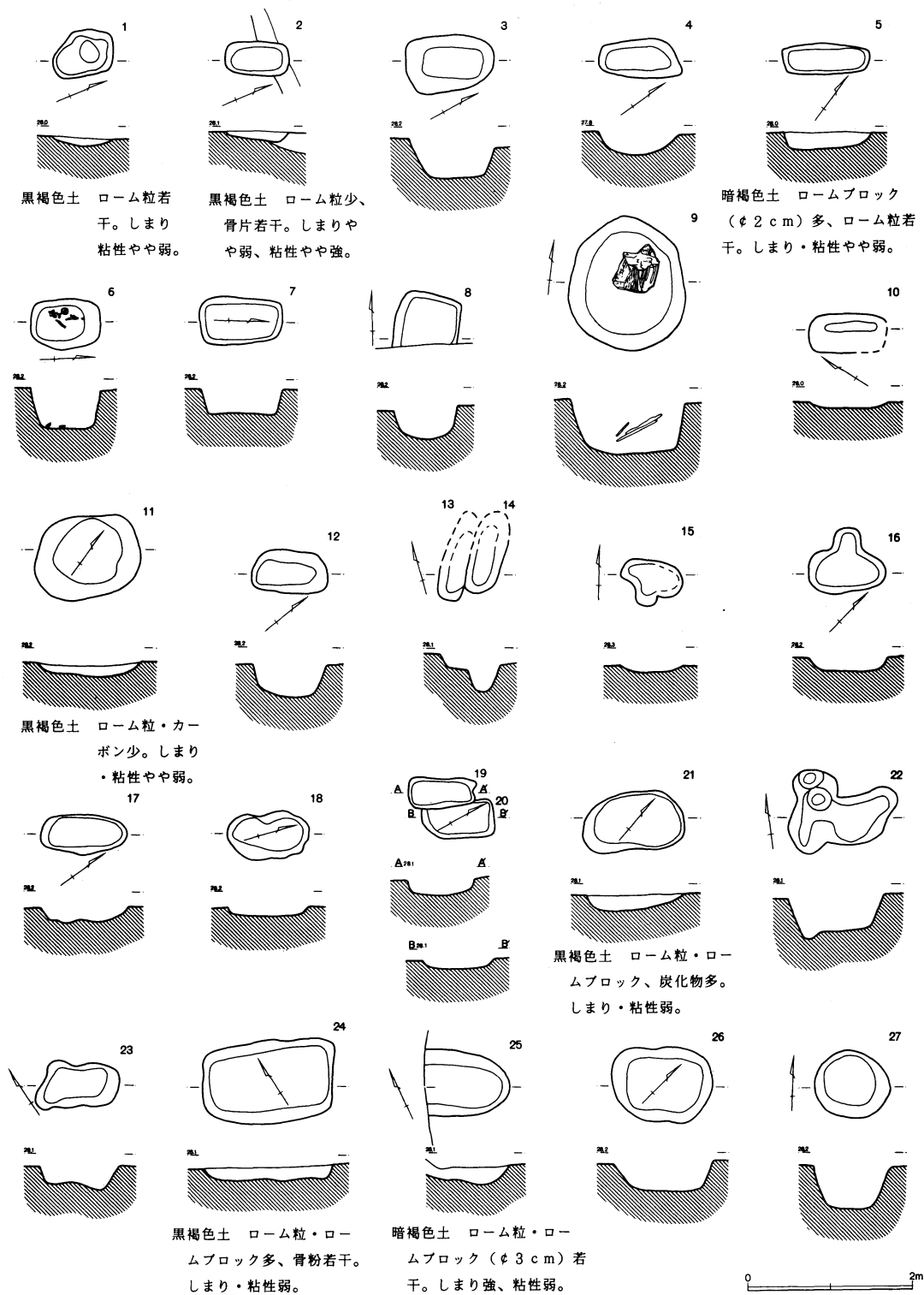
第1番目は、Q19グリッドからO22グリッドにかけての、およそ35m×20m程の範囲であり、全体の過半数に及ぶ25基が検出された。そして、この墓域内には6基の火葬墓(1～6=第315図)も確認されている。この地点では、100cm×60cm・160cm×100cm程の長方形を呈する墓壇が多く、全体的に小振りであるといえる。墓壇の数に比して、副葬品をもつ遺構が少なく内容的にも少ないといえる。なおこの箇所に関しては、調査にはいるまでは地元の住民の方も、墓地の存在を御存知なかったようである。

第2番目は、F43グリッドからF46グリッドにかけての、およそ30m×20m程の範囲であり、15基が検出された。そして、この墓域内には6基の火葬墓(1～6=第315図)も確認されている。この地点では、円形・長方形等、形態・規模も様々であり、墓壇同士の重複や1基内に、複数分と思われる人骨片が検出された例もあった。数に比して副葬品をもつ頻度・量も多いといえよう。この地点では、付近に墓地が現存していたが、その範囲内に含まれるとも推定されよう。

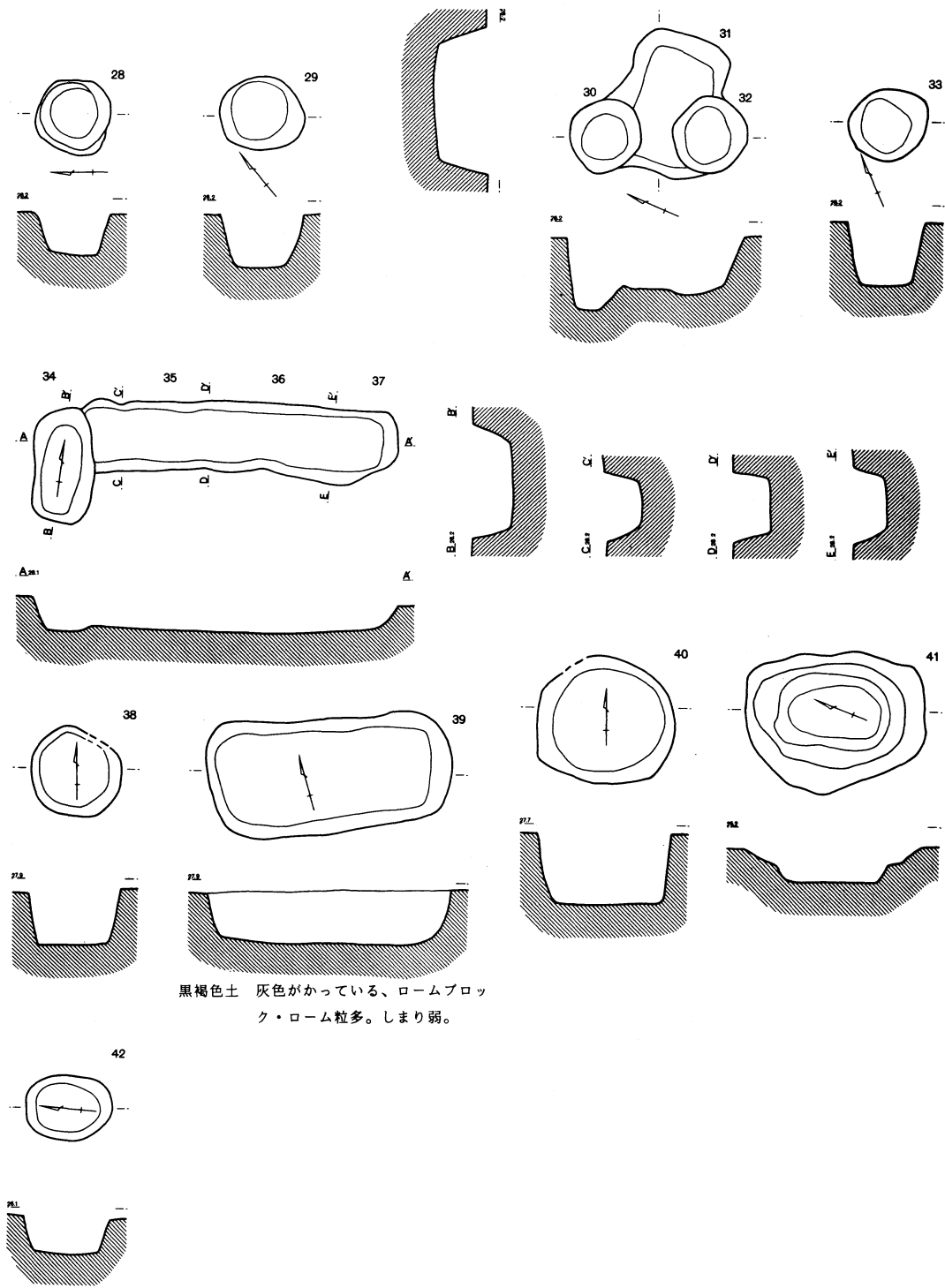
第3番目は、A'59グリッドからA60グリッドにかけての、およそ9m×6m程の範囲であり、土葬墓2基と火葬墓1基が検出されている。副葬品をもつ例は検出されなかった。この地点においても、付近に墓地が現存していた。本例もその範囲内に含まれるとも推定されよう。

第7表 土葬墓一覧表

番号	旧番	区	グリッド	規模(長×短×深)cm	主軸方向
1	22	C	Q-19-e	80 × 45 × 10	N-13 [・] -W
2	18	C	P-20-f	- × 39 × 12	-
3		C	Q-20-d	106 × 67 × 45	N-28 [・] -E
4		C	P-20-i	97 × 43 × 27	N-32 [・] -E
5	19	C	O-30-c	105 × 35 × 22	N-50 [・] -E
6	17	C	P-21-f	86 × 60 × 47	N
7		C	P-21-c	100 × 54 × 30	N
8		D	P-21-f	- × 80 × 37	-
9	16	D	Q-21-a	165 × 142 × 63	N-11 [・] -W
10		D	P-21-h	94 × 49 × 7	N-34 [・] -W
11	23	D	O-22-b	130 × 97 × 14	N-46 [・] -E
12	25	D	P-21-a	94 × 52 × 39	N-34 [・] -E
13	26	D	P-21-g	(110) × - × 15	N-26 [・] -E
14	27	D	P-21-g	(105) × 40 × 37	N-26 [・] -E
15		D	P-21-h	74 × 35 × 8	N-73 [・] -W
16		D	P-21-h	95 × 48 × 16	N-40 [・] -E
17	28	D	O-22-c	105 × 45 × 20	N-35 [・] -E
18	44	D	O-22-e	100 × 54 × 11	N-15 [・] -E
19	34	D	O-22-e	79 × 36 × 20	N-29 [・] -E
20	33	D	O-22-e	87 × 45 × 12	N-29 [・] -E
21	31	D	O-52-f	123 × 70 × 18	N-42 [・] -E
22	45	D	O-22-d	120 × 59 × 41	N-83 [・] -W
23	46	D	O-22-e	96 × 49 × 28	N-57 [・] -E
24	38	D	O-22-i	162 × 95 × 16	N-66 [・] -W
25	137	F	F-43-f	- × 80 × 20	-
26	24	D	O-22-i	125 × 88 × 35	N-47 [・] -E
27	117	F	G-44-b	90 × 83 × 51	N-88 [・] -E
28	112	F	G-44-b	90 × 87 × 48	N
29	113	F	G-44-c	100 × 86 × 63	N-50 [・] -W
30	114	F	G-44-f	86 × 83 × 85	N-67 [・] -E
31	115	F	G-44-f	167 × 52 × 63	N-89 [・] -E
32	116	F	G-44-f	91 × 90 × 65	N-65 [・] -E
33	123	F	G-44-h	97 × 85 × 73	N-81 [・] -W
34	125	F	H-45-a	136 × 70 × 47	N
35	126	F	H-45-a	- × 79 × 42	-
36	127	F	H-45-a	- × 80 × 43	-
37	128	F	H-45-a	- × 80 × 38	-
38	156	F	F-45-i	107 × 107 × 63	N
39	138	F	G-45-g	291 × 139 × 64	N-82 [・] -W
40	139	F	F-46-i	172 × 155 × 84	N-63 [・] -E
41	239	H	A-59-i	212 × 153 × 40	N-22 [・] -W
42	240	H	A-60-b	102 × 78 × 40	N-3 [・] -W



第316図 土葬墓(1)



黒褐色土 灰色がかっている、ロームブロック・ローム粒多。しまり弱。

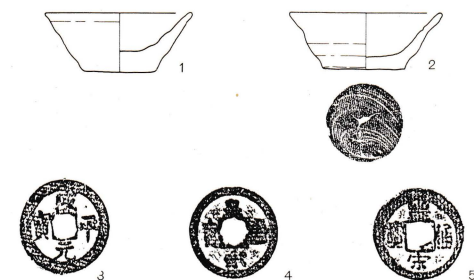
0 2m

第317図 土葬墓(2)

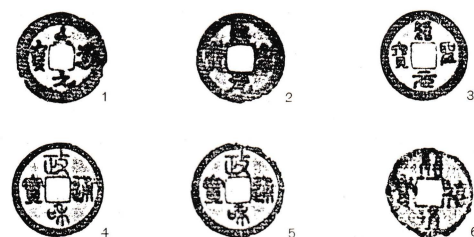
土葬墓 1



土葬墓 6



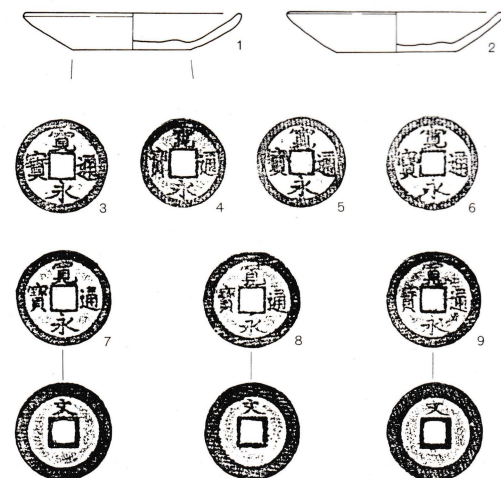
土葬墓 11



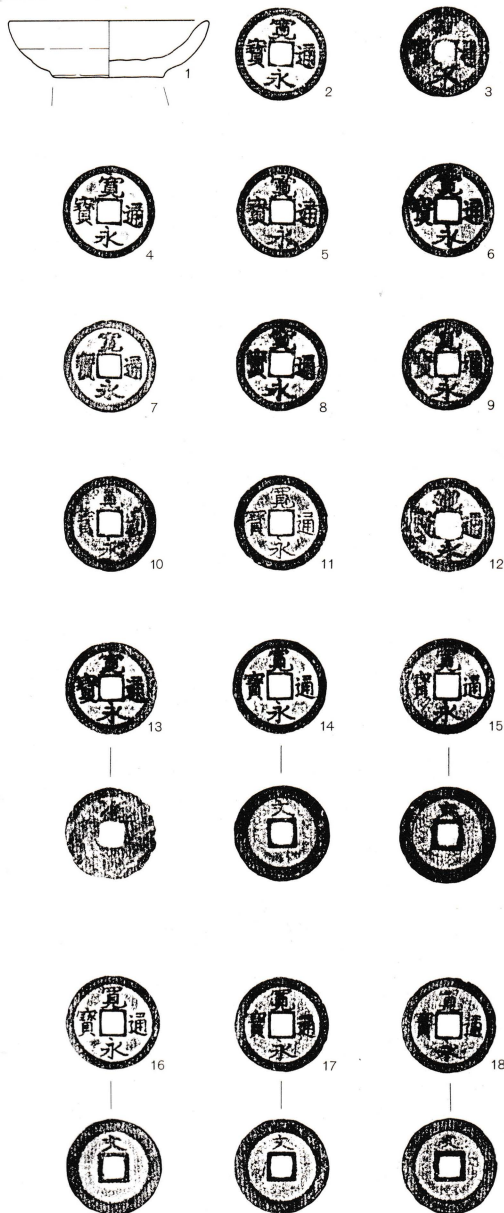
土葬墓 22



土葬墓 27



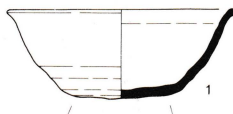
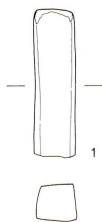
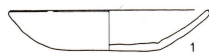
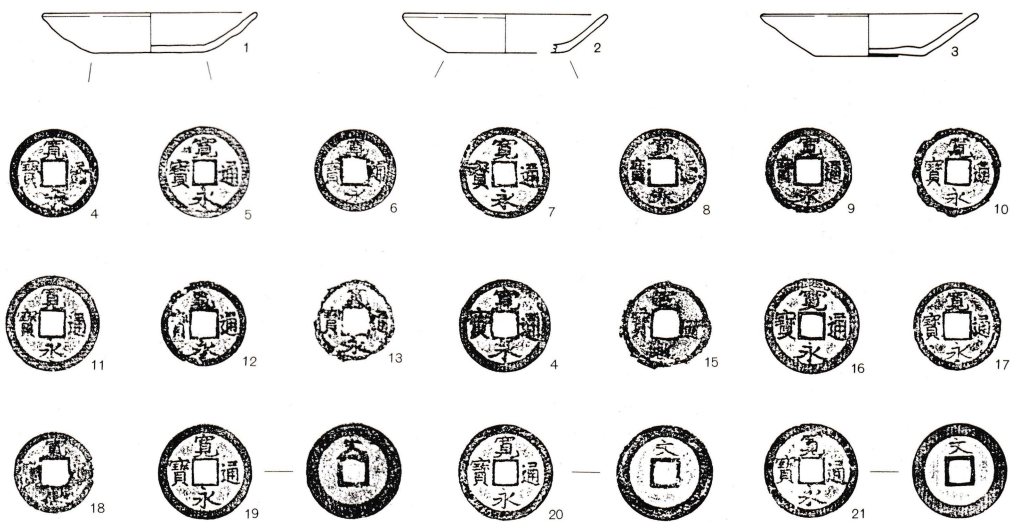
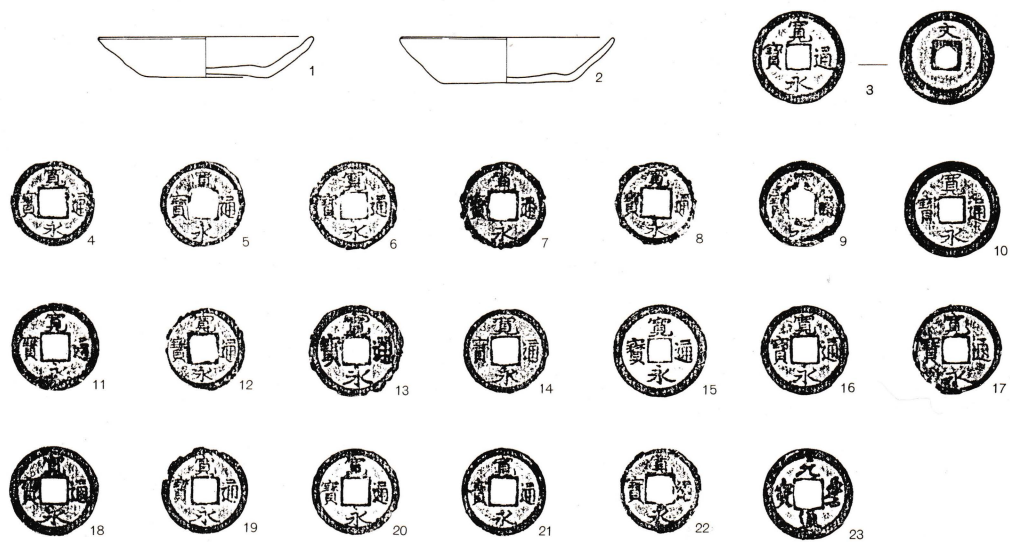
土葬墓 29



0 10cm

0 5cm

第318圖 土葬墓出土遺物(1)



0 10cm

0 5cm

第319図 土葬墓出土遺物(2)

第6号土葬墓出土遺物 (第318図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	土師器 皿	口径 7.6 底径 3.7 器高 3.1	器面は摩滅著しい。ロクロナデ。底部：回転糸切り離しか。に ぶい橙色。底部は肥厚する。	A+B(細密) ほぼ完形 焼成：普
2	土師器 皿	口径 7.8 底径 4.3 器高 2.9	器面は摩滅著しい。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸 切り離し。にぶい橙色。	A+B(細密) 完形 焼成：普

第27号土葬墓出土遺物 (第318図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	土師器 皿	口径 11.2 底径 6.2 器高 1.9	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。橙色。	B+G 完形 焼成：やや不良
2	土師器 皿	口径 11.2 底径 6.2 器高 2.1	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。橙色。	B+G ほぼ完形 焼成：普

第29号土葬墓出土遺物 (第318図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	土師器 皿	口径 10.4 底径 5.8 器高 2.9	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。 底部は肥厚する。	A+B+E+J 完形 焼成：やや不良

第30号土葬墓出土遺物 (第319図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	土師質 皿	口径 11.3 底径 6.3 器高 2.1	やや上げ底を呈し、底部は肥厚する。ロクロナデ。ロクロ右回 転。底部：回転糸切り離し。橙色。口縁はやや内彎しながら開 く。	A+B+J(細密) 口・体65 焼成：普
2	土師質 皿	口径 11.0 底径 6.7 器高 2.4	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。橙色。	A+B+E+J(細密) 口95 体100 焼成：やや不良

第32号土葬墓出土遺物 (第319図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	土師質 皿	口径 (11.4) 底径 (5.9) 器高 2.1	器面は摩滅している。ロクロナデか。底部：回転糸切り離しか。橙色。	A+B+E □25 体10 焼成：やや不良
2	土師質 皿	口径 (10.1) 底径 (6.0) 器高 2.0	器面は摩滅している。ロクロナデか。底部：回転糸切り離しか。黄橙色。	A+B+E+J □20 体5 焼成：普
3	土師質	口径 10.8 底径 5.9 器高 2.2	やや上げ底を呈す。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。黄橙色。	A+B+J(細密) ほぼ完形 焼成：普

第33号土葬墓出土遺物 (第319図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	土師質 皿	口径 10.3 底径 5.3 器高 2.1	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。黄橙色。	A+B+J(細密) □35 体90 焼成：普

第40号土葬墓出土遺物 (第319図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	砥石	現存長 7.7 幅 2.1	上端は自然面か。下端部を欠損。表裏面・側面ともよく使用され平滑。厚さ1.8cm、現存重量59.9g。明褐色。	凝灰岩製

代正寺

第43号土壙出土古銭一覧表 (第286図)

番号	銭種	径	孔径	備考
2	開元通宝	2.35	0.67	背文「五」
3	景德通宝	2.45	0.6	
4	天聖元宝	2.25	0.6	
5	〃	2.33	0.6	
6	皇宋通宝	2.37	0.72	
7	〃	2.42	0.77	
8	至和元宝	2.4	0.7	
9	嘉祐通宝	2.3	0.6	
10	元豊通宝	2.4	0.65	
11	〃	2.45	0.7	
12	元祐通宝	2.45	0.67	
13	〃	2.37	0.67	
14	〃	2.4	0.7	
15	〃	2.3	0.6	
16	〃	2.4	0.6	
17	聖宋元宝	2.35	0.67	
18	政和通宝	2.45	0.65	
19	慶元通宝	2.35	0.6	
20	洪武通宝	2.3	0.6	
21	〃	2.35	0.6	
22	宣徳通宝	2.5	0.5	

第44号土壙出土古銭一覧表 (第286図)

番号	銭種	径	孔径	備考
1	開元通宝	2.4	0.68	
2	〃	2.45	0.65	
3	天聖元宝	2.45	0.73	
4	皇宋通宝	2.45	0.7	
5	嘉祐通宝	2.4	0.8	

代正寺

遺構名	図版番号	銭種	径 孔径	備 考
土葬墓 1	318図 1 2 3 4	開通元宝	2.35 0.7	背文「鄂」
		〃	2.45 0.67	
		嘉祐通宝	2.4 0.7	
		元豊通宝	2.45 0.7	
土葬墓 6	318図 3 4 5	咸平元宝	2.45 0.7	
		皇宋通宝	2.4 0.7	
		〃	2.4 0.6	
土葬墓11	318図 1 2 3 4 5 6	至道元宝	2.4 0.65	背文「元」
		熙寧元宝	2.4 0.7	
		紹聖元宝	2.4 0.63	
		政和通宝	2.5 0.6	
		〃	2.5 0.65	
		開禧通宝	2.4 0.65	
土葬墓22	318図 1 2 3 4	熙寧元宝	2.4 0.6	
		元豊通宝	2.45 0.65	
		紹聖元宝	2.3 0.68	
		永樂通宝	2.45 0.6	
土葬墓27	318図 3 4 5 6 7 8 9	寛永通宝	2.4 0.55	背文「文」
		〃	2.35 0.55	
		〃	2.4 0.53	
		〃	2.5 0.6	
		〃	2.4 0.6	
		〃	2.5 0.6	
土葬墓29	318図 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13	寛永通宝	2.4 0.55	背文「文」
		〃	2.45 0.5	
		〃	2.4 0.53	
		〃	2.4 0.55	
		〃	2.45 0.55	
		〃	2.45 0.55	
		〃	2.45 0.58	
		〃	2.4 0.6	
		〃	2.5 0.55	
		〃	2.5 0.6	
		〃	2.5 0.6	
		〃	2.45 0.5	

土葬墓30	319図 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19	〃	2.5 0.6	背文「文」		
		〃	2.5 0.6			
		〃	2.5 0.6			
		〃	2.5 0.57			
		〃	2.5 0.6			
		〃	2.5 0.6			
		〃	2.45 0.65			
		寛永通宝	2.45 0.55		背文「文」	
		〃	2.2 0.68			
		〃	2.28 0.7			
		〃	2.3 0.6			
		〃	2.3 0.65			
		〃	2.25 0.6			
		〃	2.3 0.7			
		〃	2.5 0.58			背文「文」
		〃	2.33 0.6			
		〃	2.2 0.65			
		〃	2.5 0.65			
		〃	2.5 0.65			
〃	2.45 0.55					
〃	2.3 0.62					
〃	2.33 0.63					
〃	2.3 0.65					
〃	2.3 0.6					
〃	2.4 0.65					
〃	2.3 0.63					
〃	2.2 0.65					
〃	2.38 0.7					
土葬墓32	319図 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21	寛永通宝	2.35 0.6	背文「文」		
		〃	2.43 0.55			
		〃	2.2 0.65			
		〃	2.4 0.55			
		〃	2.3 0.65			
		〃	2.3 0.65			
		〃	2.4 0.6			
		〃	2.5 0.6			
		〃	2.3 0.65			
		〃	2.3 0.65			
		〃	2.45 0.65			
		〃	2.45 0.6			
		〃	2.5 0.6			
〃	2.35 0.65					
〃	2.18 0.65					
〃	2.5 0.6	背文「文」				
〃	2.5 0.6					
〃	2.5 0.6					
〃	2.5 0.6					

(6) 性格不明遺構 (第320・321図)

第1号性格不明遺構は、A' 61aグリッドに位置する。南西向き斜面に立地しており、第2号掘建柱建物跡と重複するが、両者の覆土から本遺構が切られていると推定された。長軸方向は、N-46°-Eを指し、斜面の向きにはほぼ対応する。各地点における計測値は、A-A'間で1188cm・確認面同士の比高差168cm・底面同士の比高差144cm、C-C'間で348cm・深さ48cm、D-D'間で336cm・深さ36cm、E-E'間で324cm・深さ60cm、F-F'間で360cm・深さ46cm、G-G'間で360cm・深さ48cmを測る、やや湾曲する隅丸の長方形を呈す。内部は4箇所の平坦面(上位から1段〜4段と仮称)からなり、1段-2段間は落差36cm、2段-3段間には幅50cm前後、高さ20cm程を土手状に掘り残す。3段-4段間は落差36cmを測る。2段には15cm程の段をもち、さらに96cm×84cmの焼土粒を主体とする部分(炉跡か)が検出された。3段内に検出された井戸跡は、本遺構に伴うものか判定することはできなかった。時期差があるが、図化し得た遺物を2点とも掲げておく。

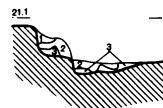
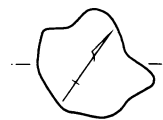
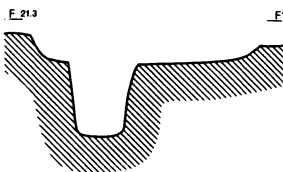
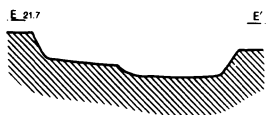
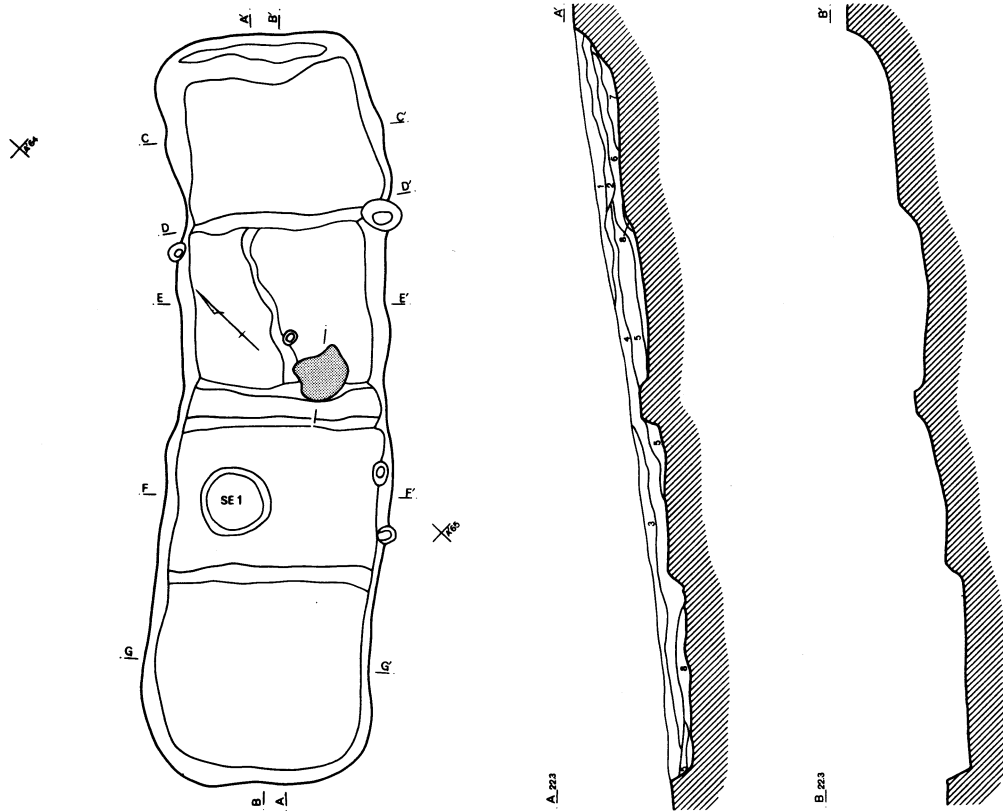
第1号性格不明遺構出土遺物 (第321図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	土師質 皿	口径 9.0 底径 4.7 器高 2.2	口縁は直線的に開く。底部は肥厚する。器面は摩滅著しい。ロクロナデか。底部：回転糸切りか。黄橙色。	B+F+J(細密) □80 体100 焼成：普 2
2	甕	口径(11.1) 現存高 5.4	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面ヘラ削り、内面ナデ。口縁は直立気味に僅かに開く。黄褐色。	A+B+F+J □25 焼成：普

第2号性格不明遺構(第166図参照)は、Q15hグリッドに位置する。第1号方形周溝墓・第48号住居跡を切り、西側は調査範囲外に続くと推定される。第1号方形周溝墓の、周溝掘り下げの過程で1・2の遺物が出土をしたためプラン精査を行ったが、残念ながら遺構として把握することはできなかった。調査範囲の土層断面を精査した結果、土塊の存在が想定されたため部分的に拡張をしたが、形態・規模等をとらえることはできなかった。

第2号性格不明遺構出土遺物 (第322図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	須恵器 提瓶	口径(7.9) 胴径 15.2 幅 14.6 器高 20.9	口縁〜胴部上半外面に自然釉附着。口縁部と胴部の接合面が明瞭である。胴部下位を円形状に欠損。頸部・胴部：ロクロナデ。灰色。	B □45 頸80 胴60 焼成：普



S X 1 土層註記

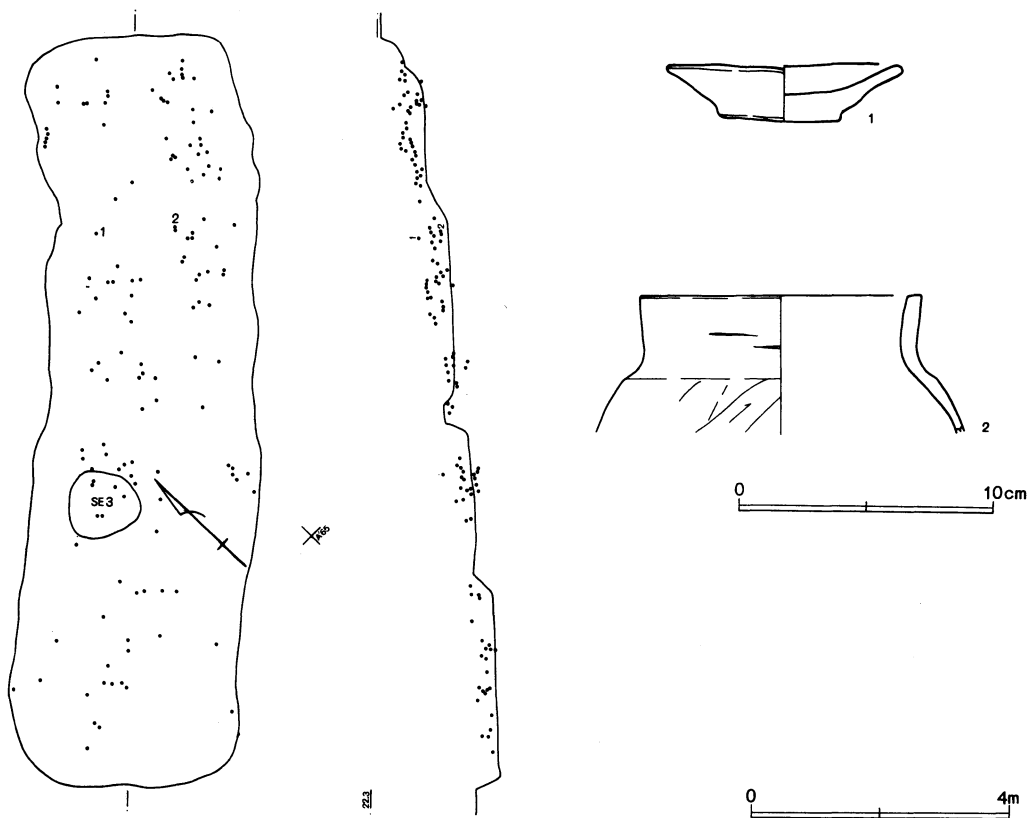
- 1 暗褐色土 ローム粒・礫 (φ 5mm) 少、焼土粒微量。しまり強、粘性やや弱。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック (φ 3cm) 若干、礫 (φ 5mm) 少。しまり強、粘性弱。
- 3 黒色土 ローム粒・炭化物・礫 (φ 5mm) 少。しまり強、粘性やや強。
- 4 黒褐色土 ローム粒若干、炭化物少。しまり強、粘性やや強。
- 5 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック (φ 2cm) 少。しまり強、粘性やや弱。
- 6 黒褐色土 ローム粒微量・礫 (φ 1cm) 少。しまり強、粘性やや弱。
- 7 暗褐色土 礫 (φ 1cm) 若干、ローム粒少。しまり強、粘性弱。
- 8 暗黄褐色土 ロームブロック (φ 3cm) 多。しまり強、粘性弱。

S X 1 炉跡土層註記

- 1 暗褐色土 炭化物・焼土粒有。
- 2 暗赤褐色土 焼土粒主体の層。
- 3 暗褐色土 小礫若干。

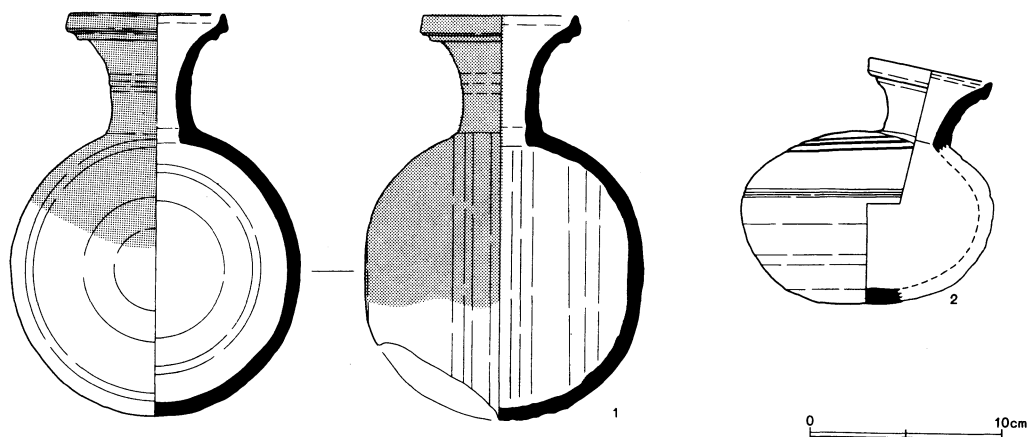


第320図 第1号性格不明遺構



第321図 第1号性格不明遺構遺物分布図・出土遺物

2	須恵器 平瓶	口径 6.4 胴径 13.2 器高 12.8	胴部上位に3条、中位に1条へら状工具による沈線を巡らす。 ロクロナデ。灰色。	B ほぼ完形 焼成：普
---	-----------	------------------------------	---	-------------------

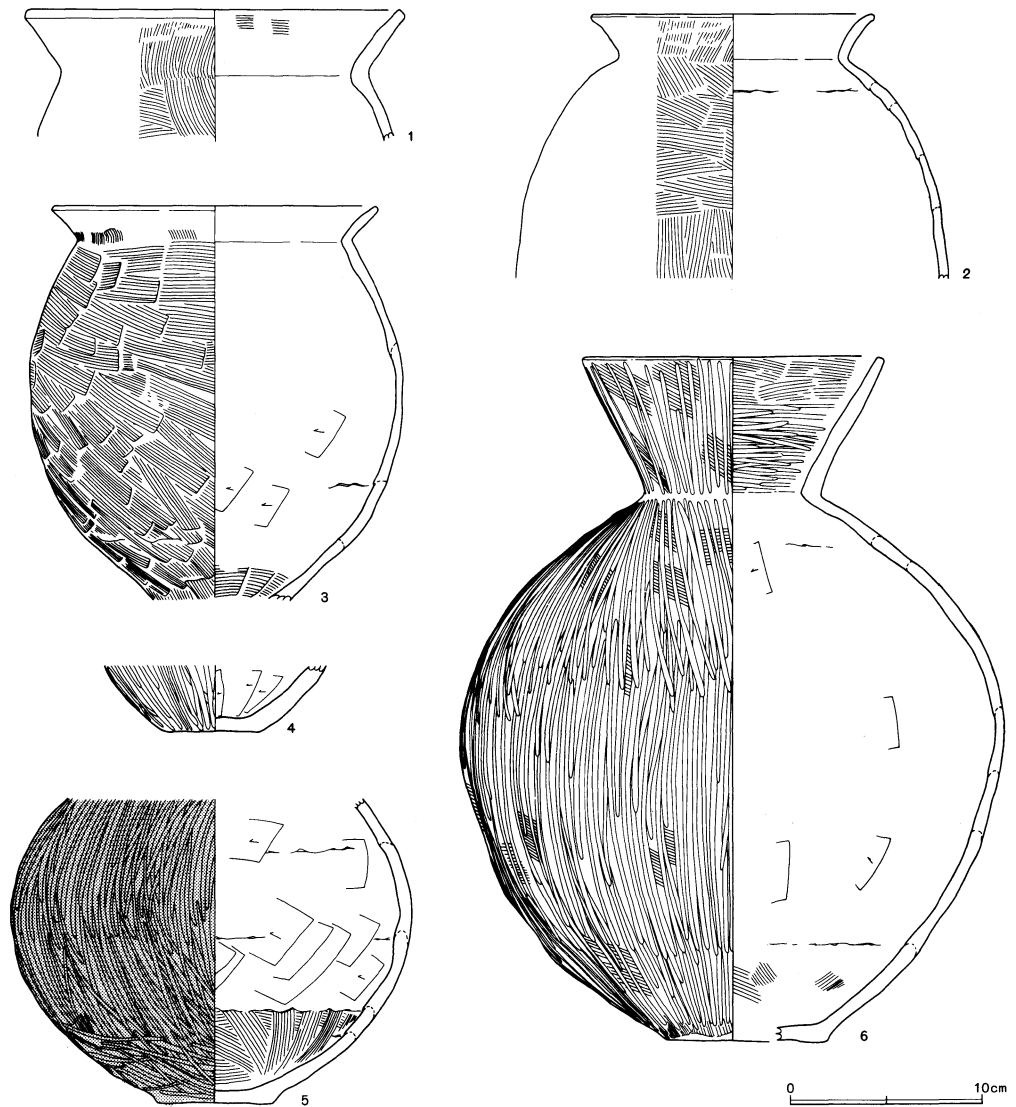


第322図 第2号性格不明遺構出土遺物

(7) 土器集中区 (第323~325図)

遺構の種類を特定できないものの、何らかの遺構の覆土と推定され得る部分から、遺物が集中して出土している地点が、H区とI区の2箇所で存在をした。その集中度から、グリッド一括として取り扱うよりは、“土器集中区”として扱う方が妥当であると判断した。

H区土器集中区は、A' 66aグリッドが相当する。第51号溝跡と第52号溝跡との間の部分にあたるこの範囲は、台地斜面をほぼ降りきった位置であるため、湧水が多く遺構をとらえることはできなかった。遺物は、湧水によってできた水溜まりとぬかるみの中で、ピン・ポールを地面に突き刺して捜し当て、手探りで取り上げるという状況であった。井戸跡の存在を推定したが確定要素は得られなかった。合わせて、15点が図化し得るものであった。



第323図 H区遺物集中地点出土遺物

H区遺物集中区 (第323図)

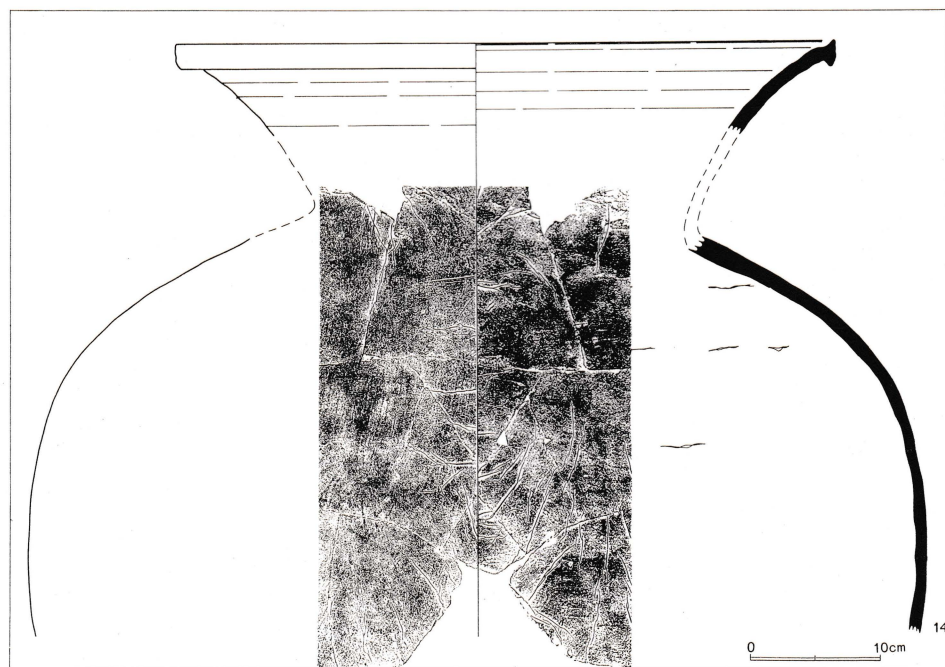
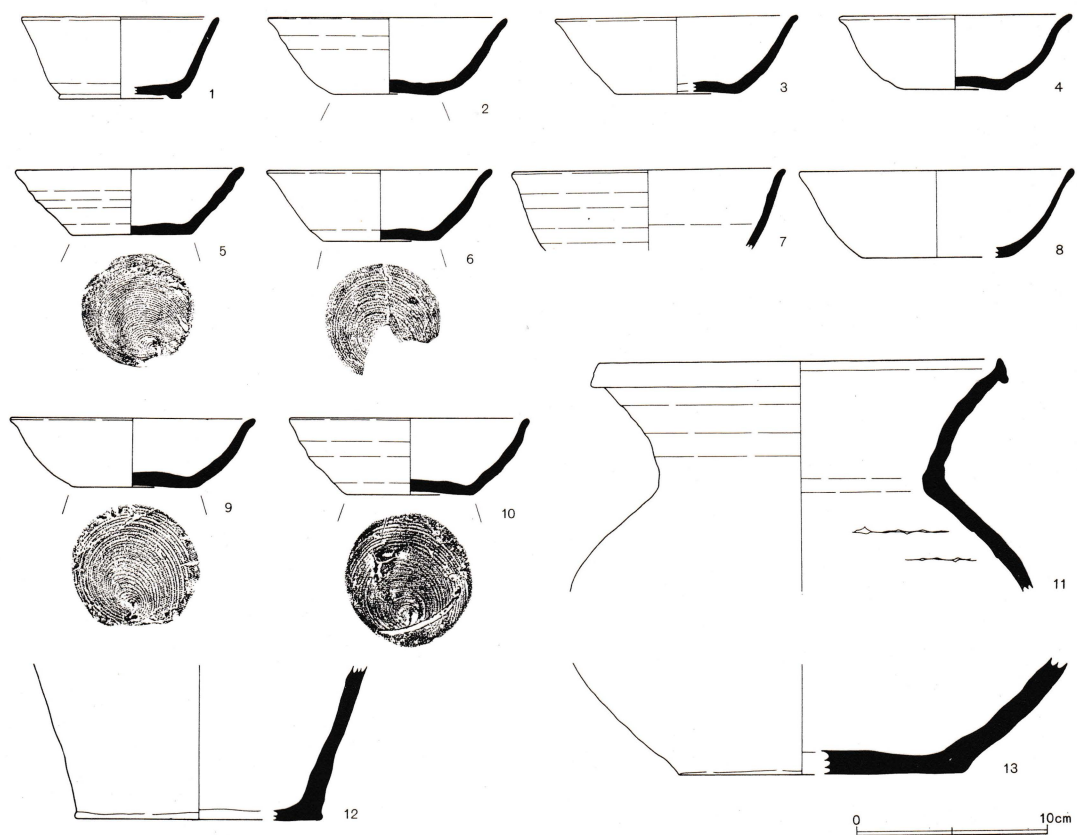
番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径 (19.2) 現存高 6.9	口縁部：内外面ともハケ目の後外面は粗く、内面は丁寧なナデ。 胴部：外面ハケ目、内面ナデ。褐色。	A+B+E+H 口径20 焼成：やや良
2	甕	口径 (14.6) 現存高 13.8	口縁部：内外面ともハケ目の後、内外面とも横ナデ。胴部：外面ハケ目、内面ナデ。褐色。	A+B+E+H 口径25 焼成：普
3	甕	口径 (16.8) 胴径 (19.5) 現存高 26.0	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面ハケ目、内面上～中位はヘラナデとナデ、下位はハケ目。橙色（一部黒色）。	A+B+G+J 口径20 胴30 焼成：普
4	壺	底径 4.8 現存高 3.5	胴部：外面はヘラ磨き、内面はヘラナデ。底部：内外面ともナデ。褐色。	B+D+J 底80 焼成：普
5	壺	胴径 21.0 底径 6.0 現存高 15.2	胴部外面：丁寧なヘラ磨き、内面：上～中位ヘラナデ、下位ハケ目。底部：外面ナデ、内面ハケ目。胴部中央に最大径をもつ。赤褐色。	B+D+J(細密) 胴75 底100 焼成：やや良
6	壺	口径 (15.4) 胴径 (28.5) 底径 (8.4) 器高 35.8	口縁部外面：ハケ目の後上位を横ナデ、その後全体をヘラ磨き、内面：上位をハケ目の後横ナデ、その後中～下位をヘラ磨き。胴部：外面ハケ目の後ヘラ磨き、内面ヘラナデ。底部：外面ヘラ削り、内面ハケ目とナデ。褐色。	B+G+J 口径25 胴40 底20 焼成：やや良

I区土器集中区はB59e・fグリッド内の、第46号溝跡南の、同溝跡に切られている部分を指す。掘り下げを開始した当初、住居跡と推定したが、床面を想定させる要素はなく窪み状の落ち込み様を呈していた。また、住居跡とするには、壁面の立ち上がりは緩やかであり、壁溝・柱穴・貼床炉跡等々の痕跡はなく、あるいは規模が大きく、浅い土壌が存在していたのであろうか。

出土した土器片は多く、集中度もきわめて高い。図化し得た遺物も6点を数える。

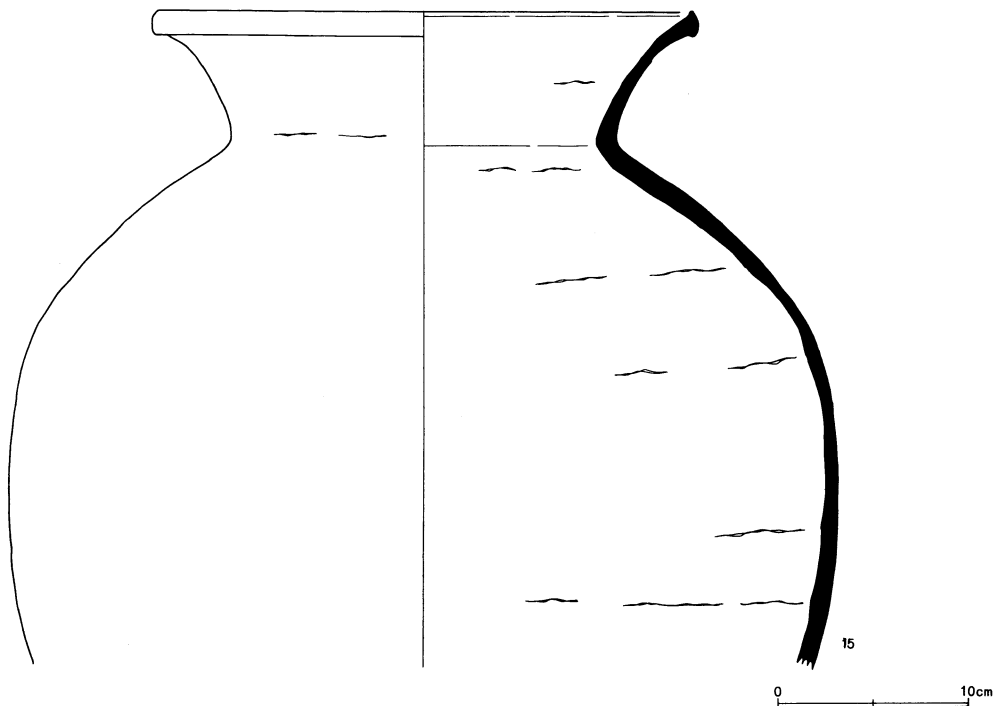
第I区土器集中区出土遺物 (第324図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	須恵器 坏	口径 高台径 高台高 器高		
2	須恵器 坏	口径 (12.6) 底径 5.2 器高 4.0	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。暗緑灰色。	B+I(多)+J 口径15 体100 焼成：普



第324图 I区遺物集中地点出土遺物(1)

3	須恵器 坏	口 径 (12.6) 底 径 (6.3) 器 高 4.0	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。褐灰色。	B+E+J □30 体40 烧成：普
4	須恵器 坏	口 径 (11.8) 底 径 (5.1) 器 高 3.9	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。	B+H+J(+ 砂粒) □25 体45 烧成：普
5	須恵器 坏	口 径 (12.0) 底 径 (6.2) 器 高 3.4	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。	B+G+J(+ 砂粒) □25 体90 烧成：普
6	須恵器 坏	口 径 (11.8) 底 径 6.8 器 高 3.6	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。	B+C+J □40 体70 烧成：普
7	須恵器 坏	口 径 (14.2) 現存高 4.2	ロクロナデ。褐灰色。	B+G+J □45 烧成：普
8	須恵器 坏	口 径 (14.2) 底 径 (7.2) 器 高 4.6	器面は磨滅著しい。ロクロナデ。ロクロ右回転か。底部：回転糸切り離しか。浅黄橙色。	B+G+J □15 体20 烧成：普



第325図 I区遺物集中地点出土遺物②

9	須恵器 坏	口径 12.8 底径 6.3 器高 3.6	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。灰褐色。	B+C+J 口径35 体95 焼成：やや不良
10	須恵器 坏	口径 12.4 底径 6.6 器高 4.0	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。褐灰色。	B+D+J 口径60 体100 焼成：やや不良
11	須恵器 甕	口径 21.1 現存高 12.0	口縁部内外面と肩部外面に自然釉。ロクロナデ。暗緑灰色。	B+G 口径35 焼成：やや良
12	須恵器 甕	底径 (12.8) 現存高 8.1	ロクロナデか。灰色。	B+H+J 底20 焼成：普
13	須恵器 甕	底径 (15.0) 現存高 5.8	ナデか。灰色。	B+H+J 底30 焼成：やや不良
14	須恵器 甕	口径 (52.0) 胴径 (70.8) 現存高 38.1	胴部外面に平行叩き目痕、内面に当て具痕のため凹凸あり。灰色。	C+H+J 口径20 胴上半30 焼成：良
15	須恵器 甕	口径 (27.6) 胴径 (43.5) 現存高 34.2	口縁は「ハ」字状に開く。器形はやや歪む。ロクロ整形か。灰褐色。	C+I+J 口径10 同上半15 焼成：普

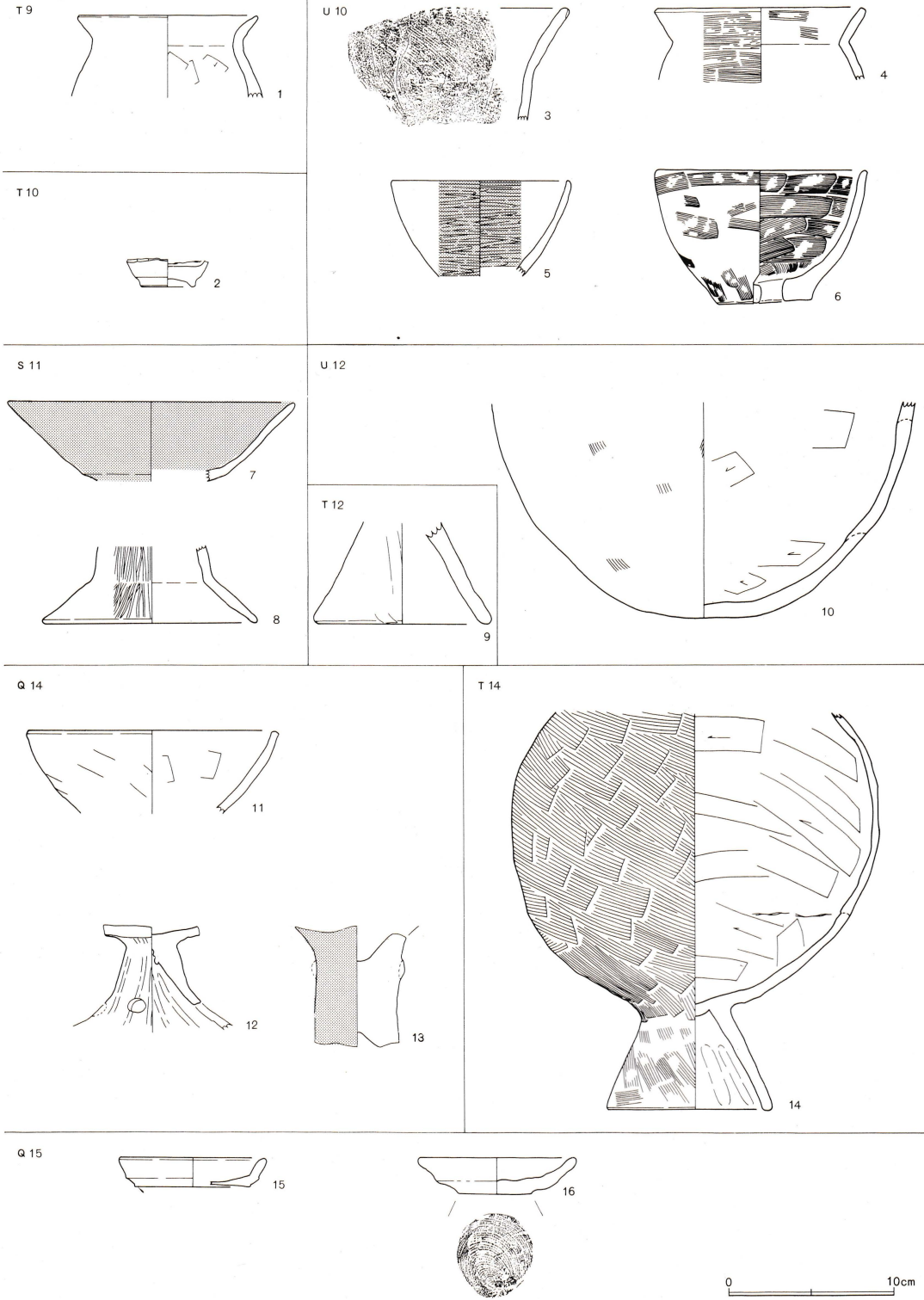
(8) グリッド一括・表面採集遺物 (第326~330図)

ここに掲げる遺物は、1：表土削平以前の段階で採集されたもの、2：表土削平段階で採集されたもの、3：プラン確認の段階で遺構外から採集されたもの、4：プラン確認の段階で、遺構範囲内からの出土であっても、掘り下げ以前に動いてしまい、原位置不明となってしまったもの。

5：攪乱内から出土したもの、6：遺構内からのものでも、後にその遺構に伴う遺物ではないと判明したもの等々を原則とした。しかし、古墳跡の周溝から出土した遺物については、古墳出土ではなく古墳“跡”出土という意味で、各古墳跡と共に掲げることとした。

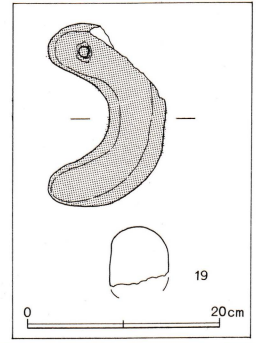
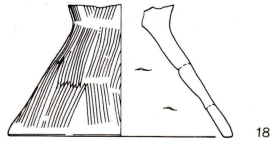
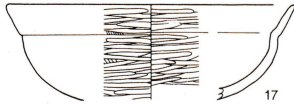
グリッド一括遺物 (第326~329図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径 11.0 現存高 5.0	T9gグリッド。器面は摩滅著しい。口縁部：内外面とも横ナデか。胴部：外面横ナデか、内面ヘラナデ。褐色。	A+B+E+I+J 口径20 焼成：普

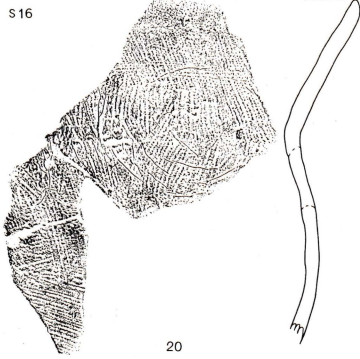


第326図 グリッド出土遺物(1)

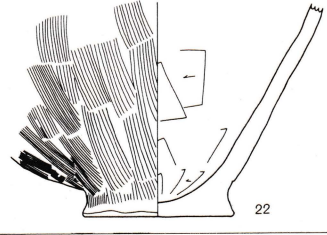
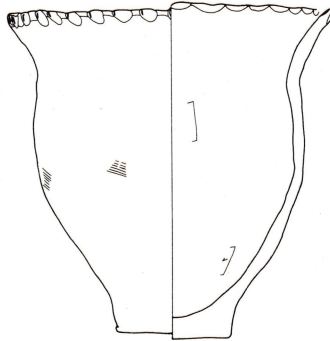
016



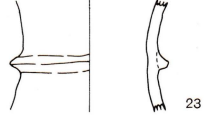
S16



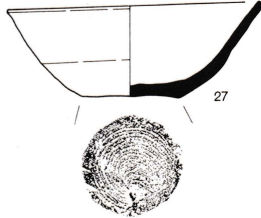
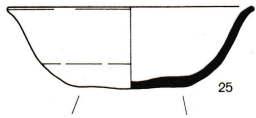
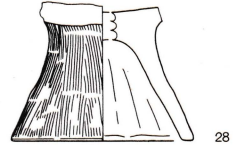
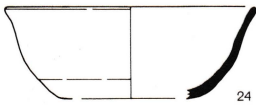
O17



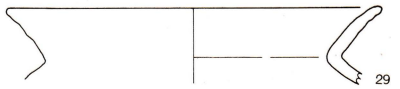
O21



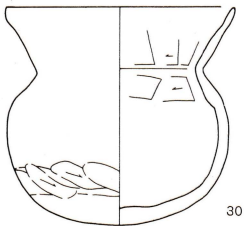
P21



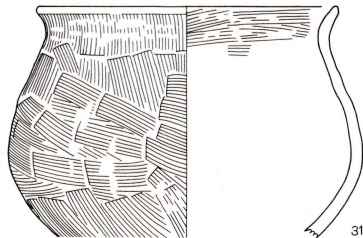
Q 22



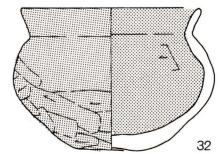
O22



N 23



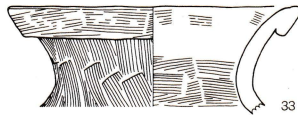
O23



0 10cm

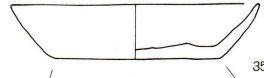
第327図 グリッド出土遺物(2)

Q23

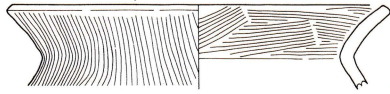


33

N26



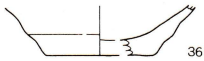
35



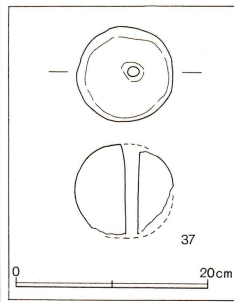
34



F46



36

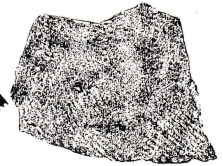


0 20cm

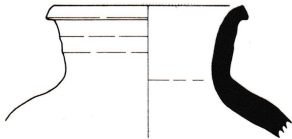
G46



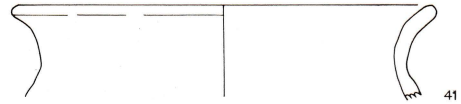
38



E49

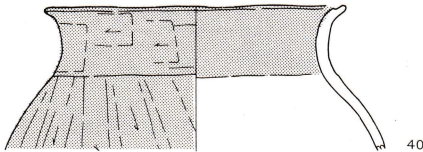


39

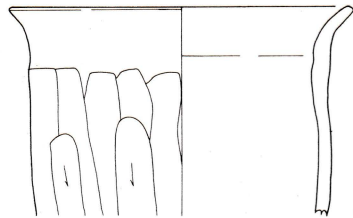


41

D50

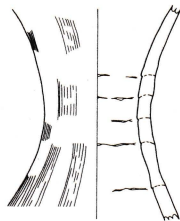


40



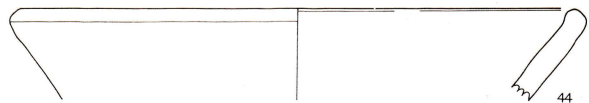
42

B51



43

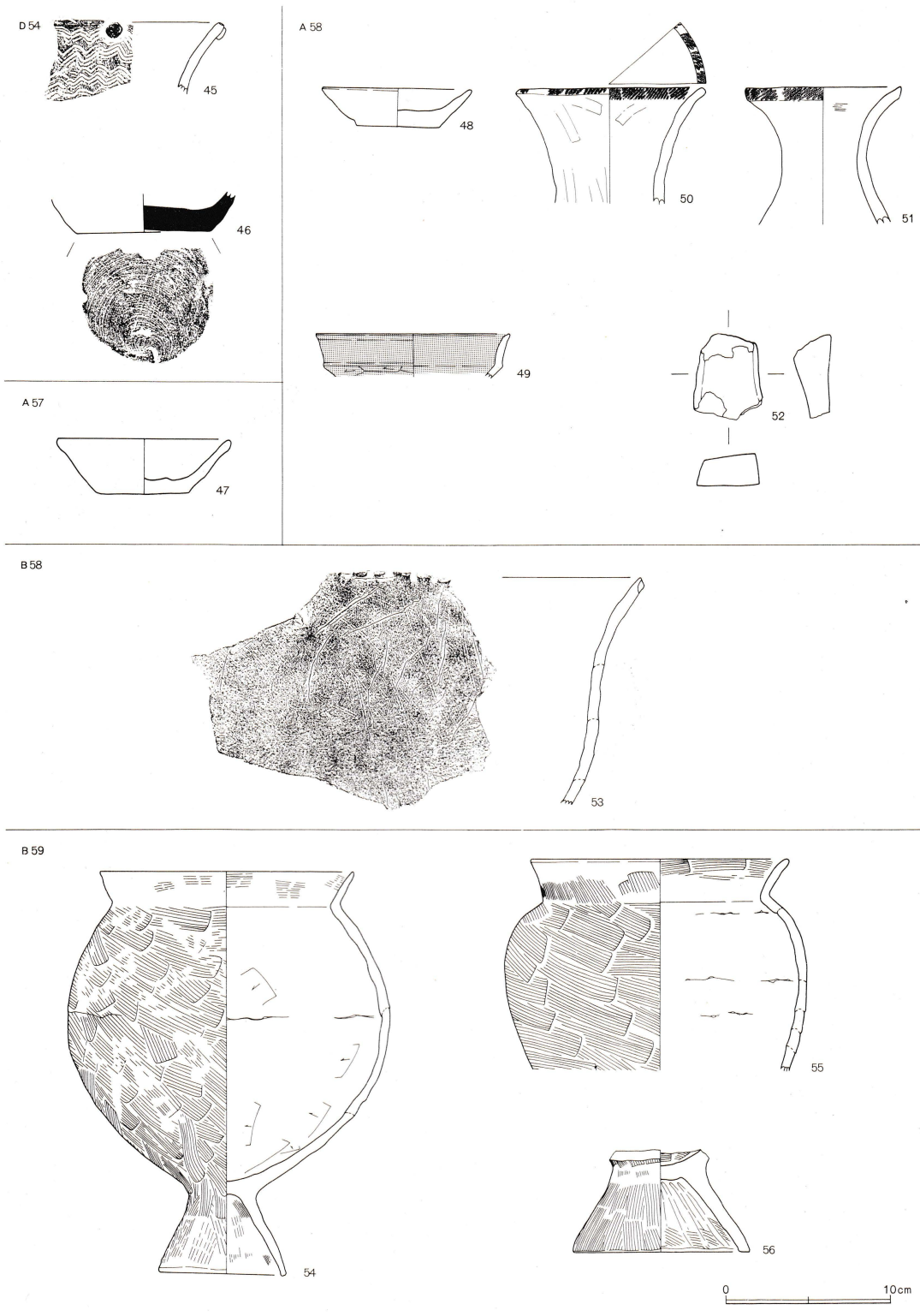
D52



44

0 10cm

第328図 グリッド出土遺物(3)



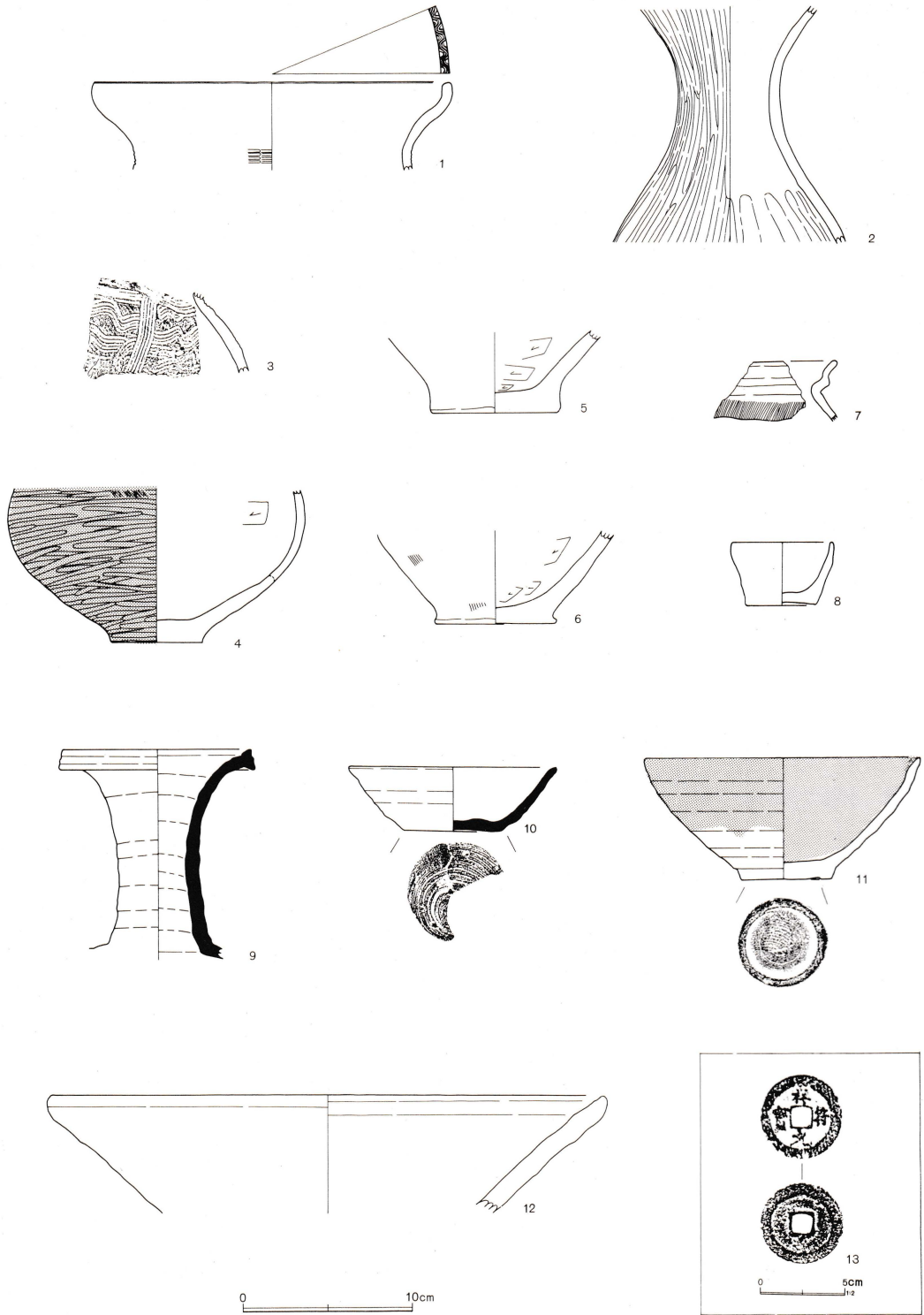
第329図 グリッド出土遺物(4)

2	陶磁器 茶碗	底径 3.2 現存高 1.6	T10a グリッド。体部を欠く。欠損面が面取りされているとも 観られ、内面に赤色のシミ状残存物もあることから、紅血に転 用されたものか。白色。	底100 焼成：良
3	甕	現存高 6.8	U10b グリッド。口縁は緩く外反して開く。口唇部に木口状工 具による刻み目。内外面ともハケ目。褐色。	A+B+H+J 焼成：普
4	甕	口径 (12.2) 現存高 4.5	U9e グリッド。口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデ。 胴部：外面ハケ目、内面ナデ。橙色。	A+B+J 口25 焼成：普
5	小型壺	口径 (12.5) 現存高 5.7	U9e グリッド。口縁は内彎しながら開く。内外面ともヘラ磨 き。赤褐色。	E+G+J 口20 焼成：普
6	甕	口径 12.6 底径 5.7 器高 8.0	U9e グリッド。体部：外面ハケ目の後ナデ、内面ハケ目。底 部：内外面ともナデ。焼成前穿孔、孔径1.4cm。にぶい黄橙色。	A+B+C 口・体70 底100 焼成：良
7	高 杯	口径 17.1 現存高 4.8	S17h グリッド。器面は摩滅著しい。内外面ともナデか。 内外面とも赤彩と思われる。黄橙色。	A+B+C+D+E+H 杯85 焼成：やや不良
8	高 杯	脚台径 13.1 現存高 4.7	S17h グリッド。器面は摩滅著しい。外面：横ナデの後粗いヘ ラ磨き、内面：横ナデ。橙色。	A+B+C+E+H 脚70 焼成：普
9	台付甕	脚台径 (11.0) 現存高 6.1	T12g グリッド。内外面ともナデ。橙色。	A+B+H 脚45 焼成：普
10	壺	現存高 13.0	U12d グリッド。器面は摩滅している。外面：ハケ目の後ナデ か、内面：ヘラナデ。黄褐色。	A+E+H+J 底100 焼成：普
11	高 杯	口径 (15.1) 現存高 5.0	Q14i グリッド。器面は摩滅している。内外面ともヘラナデの 後ナデか。橙色。	A+B+E+I+J 杯15 焼成：普
12	高 杯	現存高 6.2	Q14i グリッド。器面は摩滅している。脚台部に外面からの穿 孔4箇所か。杯部：外面ヘラ磨きか、内面ナデか。脚台部：外 面ヘラ磨き、内面指によるナデツケか。黄褐色。	A+B+F+I+J 脚60 焼成：普
13	高 杯	現存高 7.2	Q14i グリッド。脚台部上位に突帯1条を巡らせると思われる。 杯部内面：粗いヘラ磨きか。杯～脚台部外面：ナデか。脚台部 内面ハケ目。赤褐色。	A+B+J 脚100 焼成：良
14	台付甕	胴径 22.4 脚台径 9.9 現存高 24.0	T14f グリッド。胴部：外面ハケ目、内面ヘラナデ。脚台部： 外面ハケ目の後粗いナデ、内面指頭による押捺。褐色。	B+I+J 胴100 脚55 焼成：普
15	土師質 皿	口径 (8.8) 底径 (7.0) 器高 1.8	Q15b グリッド。ロクロナデ。底部：回転糸切り離し。 浅黄橙色。	A+B+D 口40 体30 焼成：普

16	土師質 皿	口 径 9.3 底 径 4.4 器 高 2.2	Q15c グリッド。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。橙色。	A+B+D □75 体100 焼成：普
17	小型鉢	口 径 (15.0) 現存高 5.0	Q16f グリッド。口縁部～体部：外面ハケ目の後へラ磨き、内面へラ磨き。黄褐色。	A+B+H+J □15 体10 焼成：良
18	台付甕	脚台径 (12.0) 現存高 6.9	Q16b グリッド。脚台部：外面ハケ目、内面ナデ。端部のみ粗い横ナデ。褐色。	A+B+I+J 脚25 焼成：普
19	土 製 勾 玉	長 さ 4.8 幅 1.7 厚 さ 1.5	Q16f グリッド。背部の一部欠損。器面は荒れているが非常に丁寧なナデ。両側からの穿孔か。赤褐色。形状は「コ」字状に近い。現重量20.4g。	A+B+J 70 焼成：やや良
20	甕	現存高 17.9	S16g グリッド。口縁は直線的に開く。口縁部：内外面ともハケ目の後、端部付近を横ナデ。胴部：外面ハケ目、内面へラナデとナデ。褐色。	A+H+J □・胴上半5 焼成：普
21	甕	口 径 16.9 胴 径 14.0 底 径 6.0 器 高 17.6	Q17e グリッド。口縁に指頭による交互押捺による刻み目。口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面ハケ目の後ナデ、内面へラナデ。底部：内外面ともナデ。にぶい橙色（一部黒色）。	B+C+J □・胴・底60 焼成：普
22	甕	底 径 8.0 現存高 11.2	Q17e グリッド。胴部：外面粗いハケ目、内面へラナデ。底部：外面ナデ、内面へラナデ。にぶい黄橙色。胴部は歪んでいる。	A+B+C+G 胴下半40 底90 焼成：普
23	壺	現存高 5.9	器面は摩滅著しい。頸部に突帯を巡らせる。外面：へラ磨きか、内面ナデか。褐色。	B+H+J 頸90 焼成：普
24	須恵器 坏	口 径 (13.2) 現存高 4.8	P21g グリッド。ロクロナデ。底部：回転糸切り離し。灰色。	B+E+I+J 体15 焼成：不良
25	須恵器 坏	口 径 (13.2) 現存高 4.3	P21g グリッド。ロクロナデ。底部：回転糸切り離しか。灰黄色。	B+H+J 体・底25 焼成：不良
26	須恵器 坏	口 径 11.2 底 径 (5.5) 器 高 3.7	P21g グリッド。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離しか。灰色。	B+C+H □70 体65 底30 焼成：普
27	須恵器 坏	口 径 13.1 底 径 5.1 器 高 5.0	P21g グリッド。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。にぶい黄橙色。	B+E+H(多) □・体・底80 焼成：非常に不良
28	台付甕	脚台径 (9.6) 現存高 7.0	P21i グリッド。脚台部外面：ハケ目の後、下位のみ粗いナデ。内面：へラナデの後、下位のみ粗い横ナデ。褐色。	B+I+J 脚20 焼成：やや不良

29	甕	口径 (19.0) 現存高 3.8	Q22a グリッド。器面は摩滅著しい。成形不明。橙色。	A+B+J □20 焼成：やや不良
30	小型壺	口径 12.0 胴径 11.7 器高 11.4	O22グリッド。口縁部：外面横ナデ、内面ヘラナデの後横ナデ。体部外面：上半ナデ、下半ヘラ削りの後ナデか、体部内面：上ヘラナデ、下半ナデ。橙色。	B+C+D+E+J ほぼ完形 焼成：普
31	甕	口径 (15.8) 胴径 (18.6) 現存高 12.0	N23h グリッド。口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデ。胴部：外面ハケ目、内面ヘラによるナデツケ。淡い褐色。	A+B+D+J(細密) □25 胴15 焼成：普
32	小型壺	口径 (9.2) 胴径 10.5 底径 2.9 器高 7.4	O23h グリッド。器面は荒れている。口縁部：内外面とも横ナデ。体部外面：上半ナデ、下半ヘラ削りの後ナデ。体部内面：ヘラナデの後ナデ。外面は赤橙色、内面は赤褐色。やや上げ底を呈す。	A+B+C+D+I □10 体95 焼成：良
33	壺	口径 14.8 現存高 5.5	O23g グリッド。口縁部：内外面ともハケ目の後横ナデ。頸部：内外面ともハケ目。橙色（一部黒色）。	A+B+J □70 焼成：普
34	甕	口径 (19.3) 現存高 4.2	Q23g グリッド。縁部：内外面とも目の粗いハケ目。橙色（一部黒色）。	B+C+E+G □25 焼成：やや不良
35	坏	口径 12.8 底径 8.6 器高 2.9	N26h グリッド。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。明黄褐色。	B+C+D □50 底100 焼成：普
36	土師質 皿	底径 (5.2) 現存高 2.6	F46i グリッド。ロクロナデ。底部：回転糸切り離しか。黄褐色。	A+E(細密) 底25 焼成：普
37	土玉	直径 2.5 現存長 2.4	G46g グリッド。上端と下端の一部欠損。ほぼ球形を呈す。孔径0.3cm、現存重量15.0g。褐色。	A+B+J 85 焼成：良
38	須恵器 甕	現存高 6.0	G46f グリッド。外面：平行叩き目、内面：青海波文を残す。灰色。	B+H+J 焼成：普
39	須恵器 壺	口径 (10.0) 現存高 6.9	E49c グリッド。ロクロナデ。口縁内面の一部に自然釉。灰色。	B(細密) □50 焼成：良
40	甕	口径 (15.8) 現存高 7.5	D50グリッド。口縁部：外面ヘラナデの後横ナデ、内面横ナデ。胴部：外面ヘラ削り、内面ナデ。赤褐色。	A+B+ (多) +E+I □50 焼成：良
41	甕	口径 (21.6) 現存高 4.8	D50グリッド。器面は摩滅している。口縁部：内外面とも横ナデ。橙色。	A+B+I+J □20 焼成：普
42	甕	口径 (17.3) 胴径 (15.8) 現存高 11.0	D50グリッド。口縁部内外面とも横ナデ。胴部：外面ヘラ削り、内面ナデ。茶褐色。	B+I(多)+J □15 焼成：普

43	壺	現存高 10.0	B51c グリッド。器面は摩滅している。頸部：外面ハケ目の後ナデか、内面ナデ。橙色（一部黒色）。	A+B+G+J 頸100 焼成：良
44	焙烙	口径 (33.0) 現存高 4.8	D52e グリッドピット内。外面：ナデ、内面：丁寧なナデ。褐灰色。	口径15 焼成：普
45	壺	現存高 4.0	D54e グリッド。口唇部に木口状工具による刻み目。3本単位の櫛状工具による波状文を4段まで確認可。口縁外面に円形浮文1箇所残存。外面にスス附着。内面：ナデ。黒褐色。	A+B+J 焼成：やや良
46	坏	底径 (8.4) 現存高 2.3	D54d グリッド。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。橙色。	A+B+E+J 底95 焼成：普
47	土師質 皿	口径 10.4 底径 5.6 器高 3.4	C56c グリッド。器面は摩滅している。ロクロナデ。ロクロ右回転か。底部：回転糸切り離しか。底部は肥厚する。	J(細密) ほぼ完形 焼成：普
48	土師質 皿	口径 (9.2) 底径 5.0 器高 3.4	A58グリッド。器面は摩滅している。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：糸切り離し。におい黄橙色。底部は肥厚する。	J(細密) 口径30 底100 焼成：普
49	坏	口径 (11.8) 現存高 2.8	A58a グリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。坏部：外面ヘラ削り、内面ナデ。赤褐色。	A+B+I 口径25 焼成：やや良
50	壺	口径 11.0 現存高 7.0	A57h グリッド。器面は荒れている。口唇部にLR縄文。口縁部：内外面とも横ナデ。頸部：内外面ともナデ。におい黄橙色。	B+E+H+J 頸80 焼成：やや不良
51	壺	口径 9.5 現存高 8.4	A58i グリッド。器面は荒れている。口縁外面にLR縄文。口縁部：内外面とも横ナデか。頸部：外面ナデ、内面口縁部近辺はハケ目の後ナデか、それ以下はナデ。	A+E+J 口径85 焼成：普
52	砥石	現存長 5.3 幅 3.8 厚さ 2.2	A58b グリッド。上端は自然面か。下端は欠損面を砥面としたためか一部分平滑。表裏面および一方の側面は滑らか。明褐色。53.2g。	凝灰岩製
53	甕	現存長 14.0	A58d グリッド。外面にスス附着。口唇に木口状工具による刻み目。口縁部～胴部上半：外面ハケ目、内面ナデ。褐色。	A+E+H+J 口径15 焼成：やや良
54	台付甕	口径 (15.6) 胴径 (19.7) 脚台径 7.8 器高 24.7	B59e グリッド。外面にスス附着。口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデ。胴部：外面ハケ目の後上半を粗いナデ、内面ヘラナデ。脚台部：内外面とも粗いハケ目の後、下端部を粗い横ナデ。橙色。	B+C+H+J 口径25 胴65 脚70 焼成：普
55	甕	口径 15.6 胴径 18.5 現存高 13.0	B59e グリッド。器面は荒れている。内面に輪積み痕を比較的良く残す。口縁部：内外面ともハケ目の後横ナデ。胴部：外面ハケ目、内面ナデ。暗茶褐色。	A+B+C+I 口径80 胴上半85 焼成：やや良
56	台付甕	脚台径 10.7 現存高 6.1	底部内面：ハケ目。脚台部：外面ハケ目、内面指頭による押捺とハケ目。におい褐色。	A+B+D+E 脚65 焼成：普



第330図 表面採集遺物

表面採集遺物 (第330図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口 径 (21.2) 現存高 6.3	A区。4本単位の櫛状工具により、口唇部に波状文、頸部に簾状文。口縁部：内外面とも横ナデ。黄褐色。	B+E+H+J 口30 焼成：普
2	壺	現存高 15.0	G区。器面は磨滅している。外面：へら磨きか、内面：頸部はナデか、肩部は指頭による押捺。橙色。	B+E+H+J 頸80 焼成：普
3	壺	現存高 4.6	D区。外面：ナデの後、5本単位の櫛状工具で上位から横線文1段-波状文3段-垂下文を施す。内面：へら磨き。褐色。線は鮮明で波高も大。	A+B+F+J 焼成：普
4	壺	胴 径 (17.8) 底 径 5.4 現存高 9.1	G区。胴部に無節I縄文を残す。胴部：外面へら磨き、内面へらナデと丁寧なナデ。底部：内外面ともナデ。暗赤褐色。	A+B+H+J 胴35 底100 焼成：普
5	壺	底 径 7.5 現存高 4.8	G区。胴部：外面ハケ目か、内面へらナデとナデか。底部：外面へら削り、内面へらナデ。黄褐色。	A+B+I+J 底100 焼成：やや不良
6	壺	底 径 7.2 現存高 5.6	G区。胴部：外面ハケ目の後ナデ、内面へらナデ。底部：外面へら削り、内面へらナデ。茶褐色。	A+B+I+J 底100 焼成：普
7	S字甕	現存高 3.5	B区。口縁はS字状を呈す。外面の稜は明瞭で、内面に平坦面をもつ。口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面ハケ目、内面ナデ。	A+F+H+J 口5 焼成：良
8	手捏ね	口 径 (6.0) 底 径 4.2 器 高 3.4	口縁は内彎気味に広がる。全面ナデ。灰黄褐色。	A+B+C+H 口35 体65 底100 焼成：やや不良
9	須恵器 長頸壺	口 径 (11.2) 現存高 12.2	外面に一部灰釉附着。ロクロナデ。ロクロ右回転か。灰褐色。	B+C+D+E 口20 頸100 焼成：普
10	須恵器 坏	口 径 (12.2) 底 径 (5.8) 器 高 3.8	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。灰色。	B+C+J 口40 体70 焼成：普
11	須恵器 坏	口 径 (16.2) 高台径 5.3 高台高 0.2 器 高 7.2	外面上半と内面全域に灰釉。ロクロナデ。体部外面に削り痕を残す。底部：静止糸切りの後、削り出しにより高台を造り出す。浅緑色。	口30 体40 底100 焼成：普
12	瓦質鉢	口 径 (32.9) 現存高 7.4	ロクロナデ。暗灰色。	B+I 口15 焼成：普

(9) 瓦

代正寺遺跡と大西遺跡とは緩やかな谷によって隔てられており、出土した瓦のほとんどはこの周辺の表層から採集されたものである。詳細な出土地点は大西遺跡内の方が多いが、本節で一括して掲載した。

検出されたのは小破片が大半であり、その内の丸瓦と判断されるものすべてと、平瓦は端部と側縁を残すものについてのみ図示した。36点の瓦の内訳は軒丸瓦2点、丸瓦8点、平瓦26点である。3の丸瓦を除いてはすべて破片であり、接合資料はなかった。

1は代正寺遺跡第3号溝跡より検出された軒丸瓦瓦当部の破片である。瓦当の径は推定18.2cmで、全周の約45°が残存する。24弁の単弁蓮華文である。外縁は欠損する。破損部分の状態から、厚さ1.2cmほどの、やや外周を高めた円板状の瓦当面に、別に形作った文様部分を貼り合わせ、蓮華の周囲を刻み込んで肉厚な蓮弁を作出し、さらに外縁部を巡らせる製作工程が観察される。火熱を受けて赤変し、文様部分は煤が濃く付着している。

2は三巴文の瓦当面の破片である。巴文頭部の剝離痕が見られる。尾部は細く長く延び、外区には0.9cm～1.2cmの間隔で径5mmの珠文が巡らされている。成形は1と同様、偏平な瓦当面に文様部分を貼り合わせたもので、文様と外縁部は一体で型抜きされている。

3は完形の丸瓦である。瓦尻部はやや厚く作られ、玉縁部との接点は内側に削ぎ込まれて上方の頭部を受ける形になっている。側縁は面を取った後になでられて丸みを帯び、頭部内面は幅広く緩やかな面取りが施される。内面に布目を残し、外面は縄目をすり消しており、中央部に僅かに痕跡を残している。

他の丸瓦も3とほぼ同様の作りである。9の頭部内面の面取りは幅が狭く鋭角的である。整形は外面に縄目を残すものが3点あり、6は内面の布目をすり消している。

11～36は平瓦である。18は唯一両側縁を残す広端部である。尻幅は24.8cm、谷の深さは約3.8cmを測る。側縁末端に僅かに面取りが施される。凸面は縄目、凹面は布目をすり消している。

その他の平瓦の整形は、側縁の面取りを施すものと切り離しのままのもの、凹凸面をすり消すものとしなないものがある。すり消しについては、弱くなでるものと、細い篋状の工具で瓦の縦方向または斜位に削り取るものがある。また、やや幅の広い工具によって横方向に整形して、刷毛目様の整形痕をそのまま残す例があり、凸面ではその上に縄目を施すため、器面は細かい格子目状となっている。

28の凹面には刻印が認められる。文字は不明である。また、29では縦の破損面に28の刻印の縁に類似する切り込みが認められる。その位置や形状、瓦の整形方法などもほぼ同じであるので、おそらく刻印と思われる。

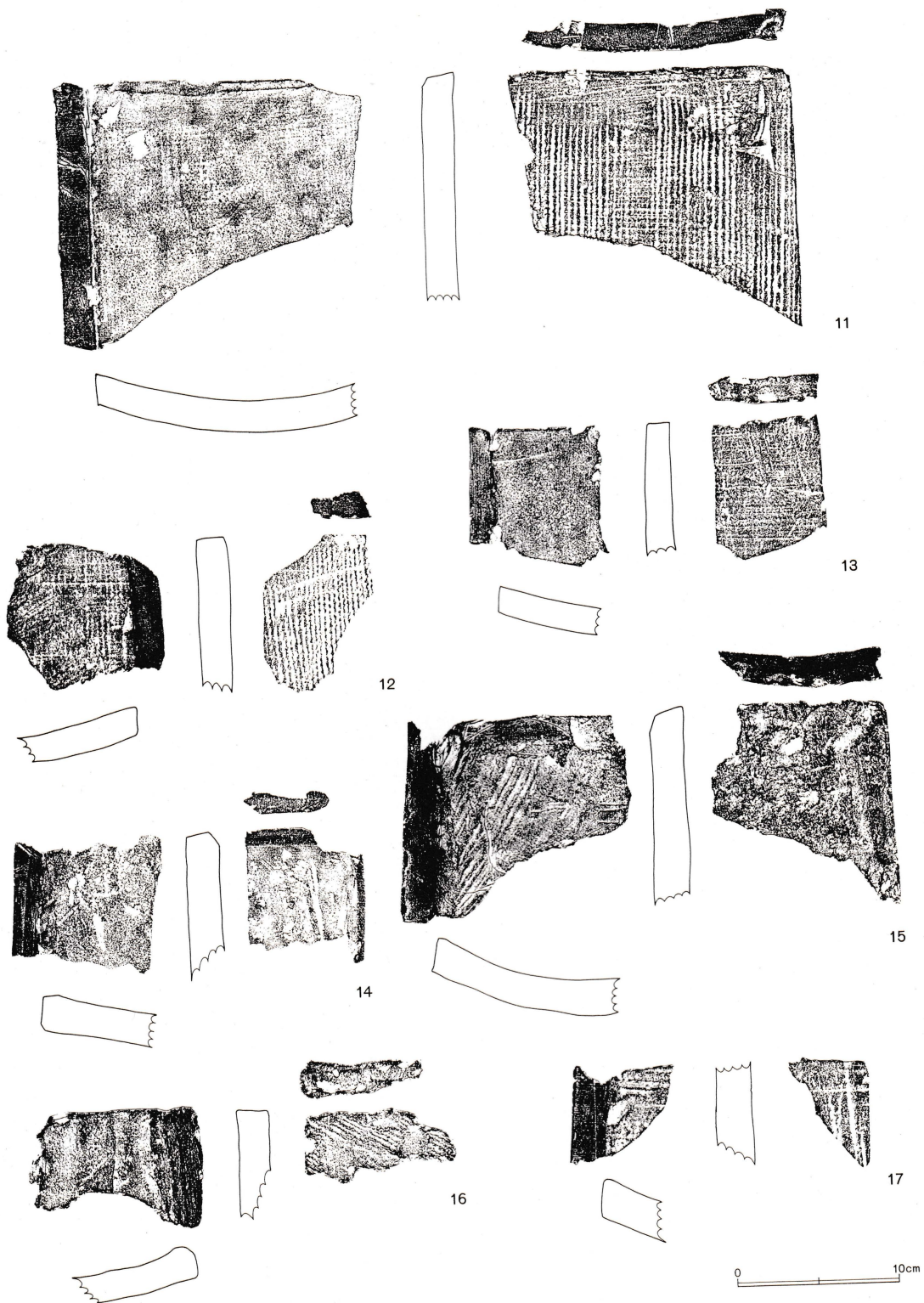
その他、出土地点、計測値等は以下の一覧表に示した。

瓦観察表

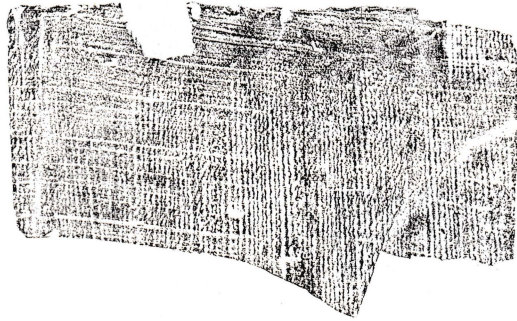
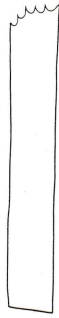
No	出土地点	計測値	備 考	No	出土地点	計測値	備 考
1	大西 第3号溝跡	高 7.6 厚 2.3	軒丸瓦瓦当部 単弁蓮華文 表面煤付着	20	表土	長 8.2 厚 1.8	平瓦広端部 一部赤変 凹面すり消し、凸面縄目
2	表土	高 8.0 厚 2.0	軒丸瓦瓦当部 三巴文	21	F' -74	長 11.4 厚 2.1	平瓦広端部 凹面すり消し、凸面縄目
3	G' -77	長 31.8 幅 12.0 厚 2.0	丸瓦 完形 内面布目、外面縄目をすり 消す	22	D' -71	長 11.1 厚 1.9	平瓦広端部 凹面縦横の弱 いなどで、凸面刷毛目+一部 に縄目
4	E' -73-h	長 11.5 厚 2.2	丸瓦玉縁部 内面布目、外面縄目	23	J区表土	長 6.9 厚 1.8	平瓦 凹面すり消し、凸面縄目
5	E' -73	長 12.2 厚 1.7	丸瓦玉縁部 内面布目	24	表土	長 7.9 厚 2.1	平瓦広端部 凹面すり消し 凸面縄目 側縁面取り
6	F' -78	長 7.2 厚 1.5	丸瓦 内面布目をすり消す	25	F' -79	長 15.0 厚 2.3	平瓦広端部 凹面弱いなどで、凸面縄目
7	E' -76	長 5.8 厚 1.5	丸瓦 内面布目	26	F' -78	長 11.1 厚 2.2	平瓦 凹面すり消し、凸面 縄目 側縁面取り
8	E' -73	長 6.4 厚 1.7	丸瓦 内面布目、外面縄目	27	表土	長 9.7 厚 2.0	平瓦 凹面縄目、凸面縄目
9	A' -67	長 5.6 厚 1.9	丸瓦端部 内面布目	28	F' -73	長 12.6 厚 2.1	平瓦広端部 凹凸面粗い削 り 側縁面取り 凹面端部 中央付近に刻印
10	E' -73	長 6.6 厚 2.4	丸瓦 内面布目 外面縄目	29	D' -72	長 11.5 厚 2.2	平瓦 被熱により赤変 凹凸面粗い削り 側縁面取 り 中央部破損面に刻印の 痕跡あり
11	E' -73	長 16.1 厚 1.9	平瓦狹端部、凹面布目 凸面縄目+刷毛目	30	F' -79	長 7.9 厚 2.4	平瓦 凹面すり消し、凸面縄目
12	E' -75	長 9.7 厚 2.0	平瓦狹端部 凹面布目、凸面縄目	31	表土	長 9.6 厚 2.0	平瓦広端部 被熱により凹 面赤変 凹面すり消し、凸 面粗い削り
13	D' -72	長 8.6 厚 1.7	平瓦狹端部 凸面刷毛目をすり消す	32	E' -74	長 5.9 厚 1.9	平瓦 凹凸面すり消し
14	E' -75	長 9.2 厚 2.1	平瓦狹端部 被熱により赤 変 凹凸面すり消し	33	F' -74	長 11.3 厚 1.9	平瓦 凹凸面すり消し
15	F' -73	長 12.3 厚 2.2	平瓦狹端部 凹面削り、凸面無整形	34	F' -75	長 10.1 厚 1.9	平瓦 凹凸面横方向のなで の後一部に粗い削り
16	E' -73	長 7.4 厚 1.9	平瓦狹端部 凹凸面削り 側縁面取り	35	E' -76	長 8.4 厚 1.7	平瓦 被熱により赤変、歪 む 凹凸面すり消し
17	F' -74	長 6.4 厚 2.3	平瓦狹端部付近 凸面縄目	36	F' -78	長 7.7 厚 2.0	平瓦 凹凸面すり消し
18	D' -71	幅 24.9 長 16.1 厚 2.4	平瓦広端部 凹面すり消し、凸面弱い刷 毛目+縄目				
19	D' -71	長 13.1 厚 1.8	平瓦広端部 凹面すり消し 凸面弱い刷毛目+縄目				



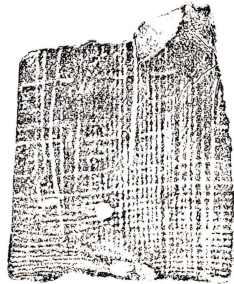
第331图 瓦(1)



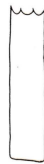
第332图 瓦(2)



18



19



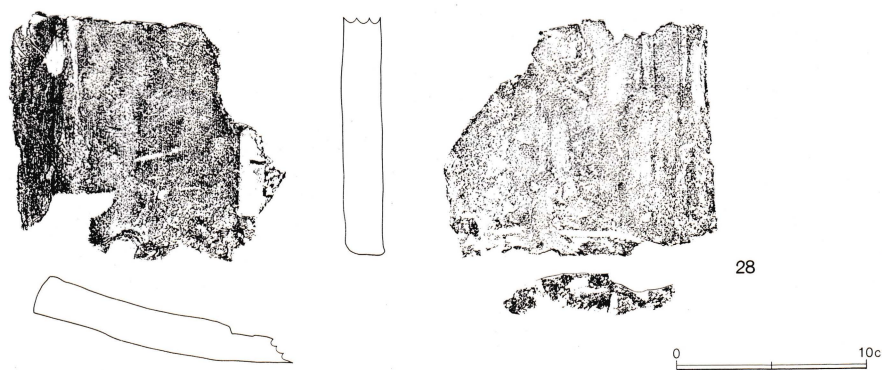
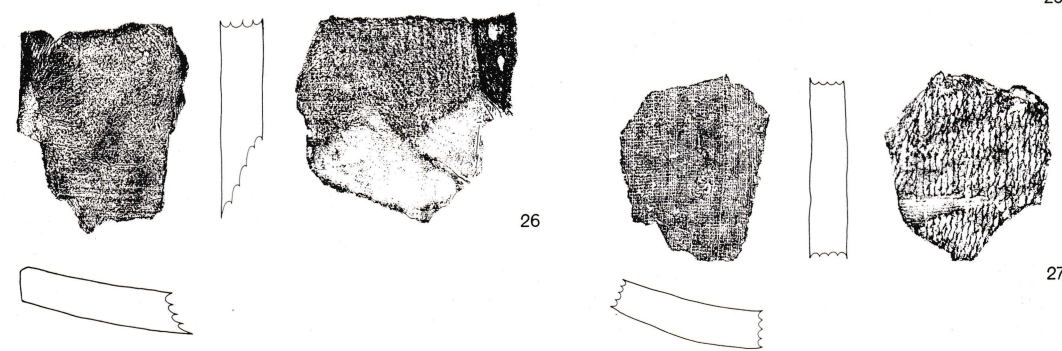
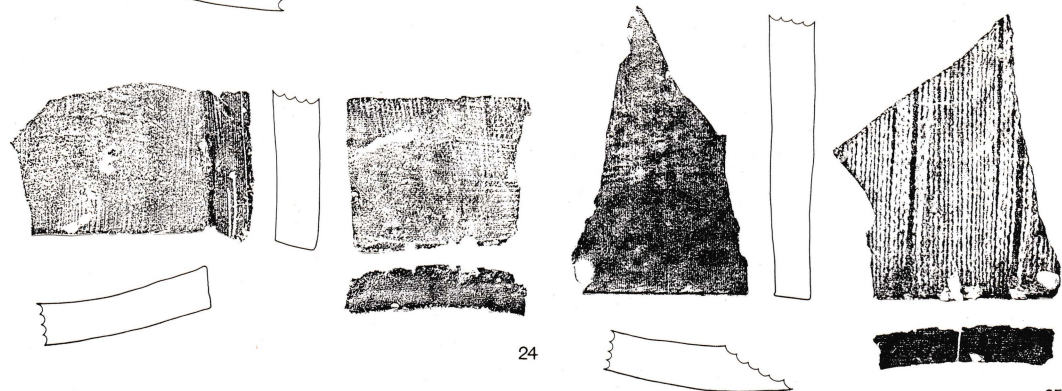
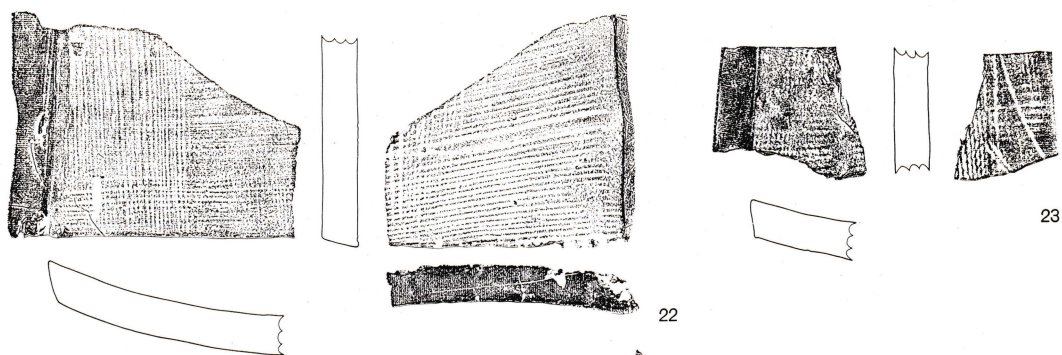
20



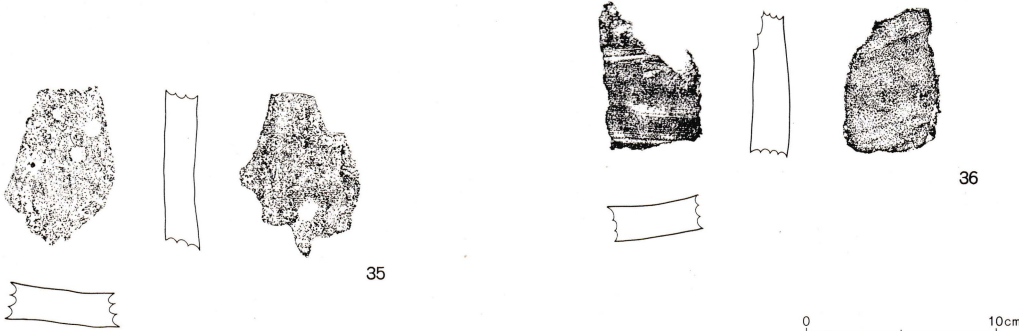
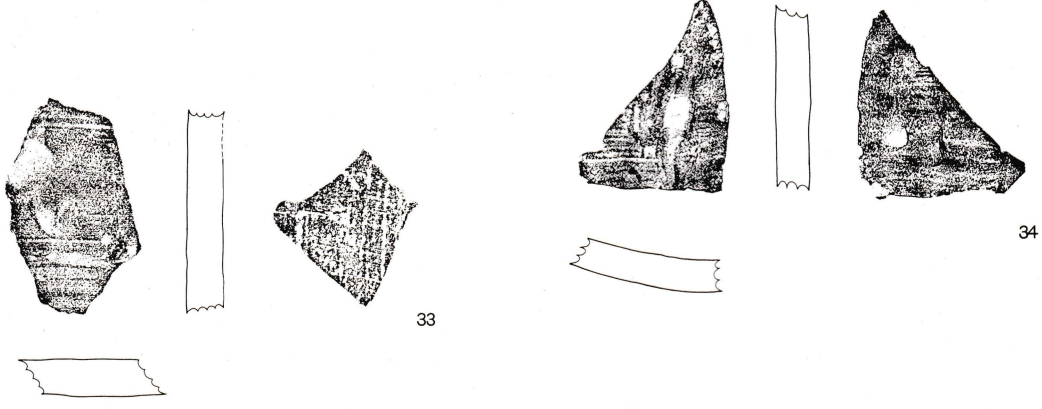
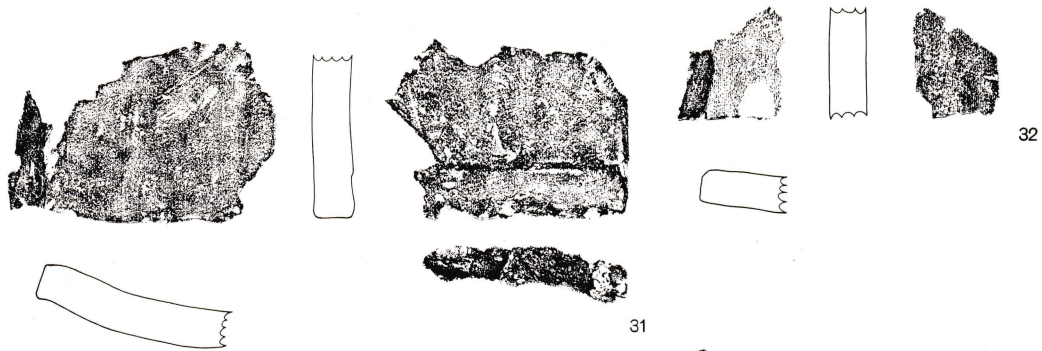
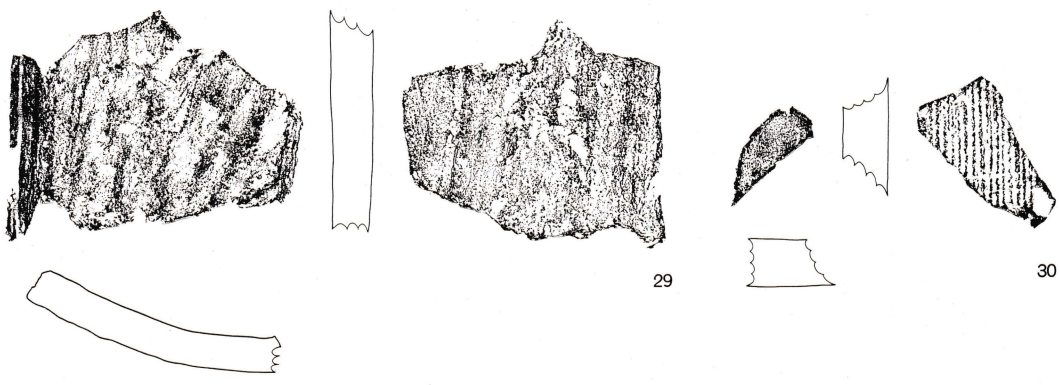
21

0 10cm

第333图 瓦(3)



第334图 瓦(4)



0 10cm

第335图 瓦5

(10) 金属製品 (第336図)

代正寺遺跡において検出された金属製品は、鉄製品22点、青銅製品1点の計23である。遺構内・遺構内と思われるもの・遺構外・表面採集等々さまざまであるが、ここに一括して掲げることとした。概して錆化著しく、残存部分も大変に少ない。そのため用途不明の金属製品が大部分を占めている。用途名を判断するについては、推定に拠るものばかりといわざるを得ない。

1～4は、同一遺構（SK48）からの出土。いずれも錆化著しく原形をとどめない。1～3は同一個体であり、上部から1・2・3の順に部位を形成すると思われる。鉄製紡錘車の軸部分か。

1は、製品の上端部付近と考えられる。上半に木質を残し、断面形は丸味を帯びた長方形に近い。現存長6.4cm、幅0.5cm。

2は、1の下端部と接合面すると思われる。上端から3分の1程の位置に木質を残し、断面形は丸味を帯びた長方形に近い。現存長9.4cm、幅0.5cm。

3は、2と直接に接合しないが製品の下端部と思われる。断面形は丸味を帯びた方形に近く、先端部で先細り、やや曲がりもつとみられる。現存長3.9cm、上端部で幅0.5cm。

4は、1と2の間、2と3の間に接合面をもたず、幅も異なることから別個体と考えられる。断面形は方形に近い。釘の一部分か。現存長4.0cm、幅0.2cm。

5は、F46 i Grid 内、弥生・古墳時代SK31を切っている土層中よりの出土。錆化著しい。下半部を欠く。断面方形を呈す釘の一部分と思われる。現存長2.6cm、幅は頭部0.2cm、芯部0.5cm。

6は、E52 e Grid 内、ST15を切っている土層中よりの出土。比較的原形をとどめる。断面台形を呈す釘の一部分と思われる。現存長7.3cm、幅は頭部1.3cm、芯部0.6cm。

7・8はP21 g Grid 内の、SD14を切っている土葬墓13または14からの出土と思われる。

7は、錆化著しい。断面台形を呈す釘と思われる。先端部を欠き、端部付近で屈曲している。現存長6.1cm、幅は頭部1.0cm、芯部0.7cm。

8は、用途不明。錆化著しい。一方の端部はすぼまり木質を残し、もう一方の端部は「コ」字状を呈す。あるいは木材に打ち込んだ釘であり、木材の反対側から飛び出た部分叩き曲げたものであろうか。断面形は方形もしくは長方形。現存長4.6cm、幅0.3～0.8cm。

9・10はともに錆化著しく、P21 g Grid のSH5を切っている土層中よりの出土。

9は、下半部を欠く。断面方形を呈す釘の一部分と思われる。現存長4.7cm、幅0.4～0.8cm。

10は、用途不明、錆化著しい。一部木質を残す。8と同様に、一方の端部はすぼまり、もう一方の端部は「コ」字状を呈す。あるいは木材に打ち込んだ釘であり、木材の反対側から飛び出た部分叩き曲げたものであろうか。断面方形を呈す。現存長5.5cm、幅0.3～0.4cm。

11は、SJ83内出土。用途不明、錆化著しい。一部木質を残す。幅はいずれも0.8cmと変化なく、側面はともに0.3cmの平坦面であり、刃部をもつ製品とは考えにくい。断面長方形を呈す棒状製品の途中部分であろうか。現存長7.6cm。

12は、SJ91内出土。用途不明、錆化著しく原形をとどめない。内部が空洞になっているが、本

来的なものかは不明。断面は丸味を帯びた方形か。棒状製品の途中部分と思われる。現存長3.8cm、

13は、S J 13内出土。用途不明、銹化著しい。幅は0.5~0.7cmと変化が小さく、側面も0.3~0.4cmの平坦面であり、刃部をもつ製品とは考えにくい。棒状製品の途中部分か。現存長7.7cm。

14は、P 21 g Grid 内の、S H 5 を切っている土層中よりの出土。用途不明。比較的現状をとどめる。一方の端は大きく平坦面をもち、他方は端部を欠くが尖形を呈す。8・10と同様に木材に打ち込んだ釘であり、木材の反対側から飛び出た部分叩き曲げたものであろうか。断面方形を呈す。現存長6.0cm、幅0.2~0.4cm。

15は、表面採集によるもの。用途不明。両端とも欠損面。比較的遺存度は良い。現存長7.6cm、幅0.6cm、厚さ0.3cm。

16は、D 54 a Grid 内出土。用途不明、銹化著しい。幅0.4~0.5cm、厚さ0.2cm程の鉄板を「コ」字状に折り曲げた形状を呈す。現存長2.6cm。

17は、S 13 f Grid 内のS D 4 からの出土。用途不明、銹化著しく原形をとどめない。幅1.5cm、厚さは一方は0.2cm、他方は不明。あるいは刀子等の刃部をもつ製品の途中部分か。現存長3.5cm。

18は、用途不明、銹化著しい。現存形態は三角形に近い。一辺は破損面であるが、他の二辺は製品としての部分を残す。鎌の先端部分か。現存長4.2cm、現存幅3.3cm、厚さ0.1cm。

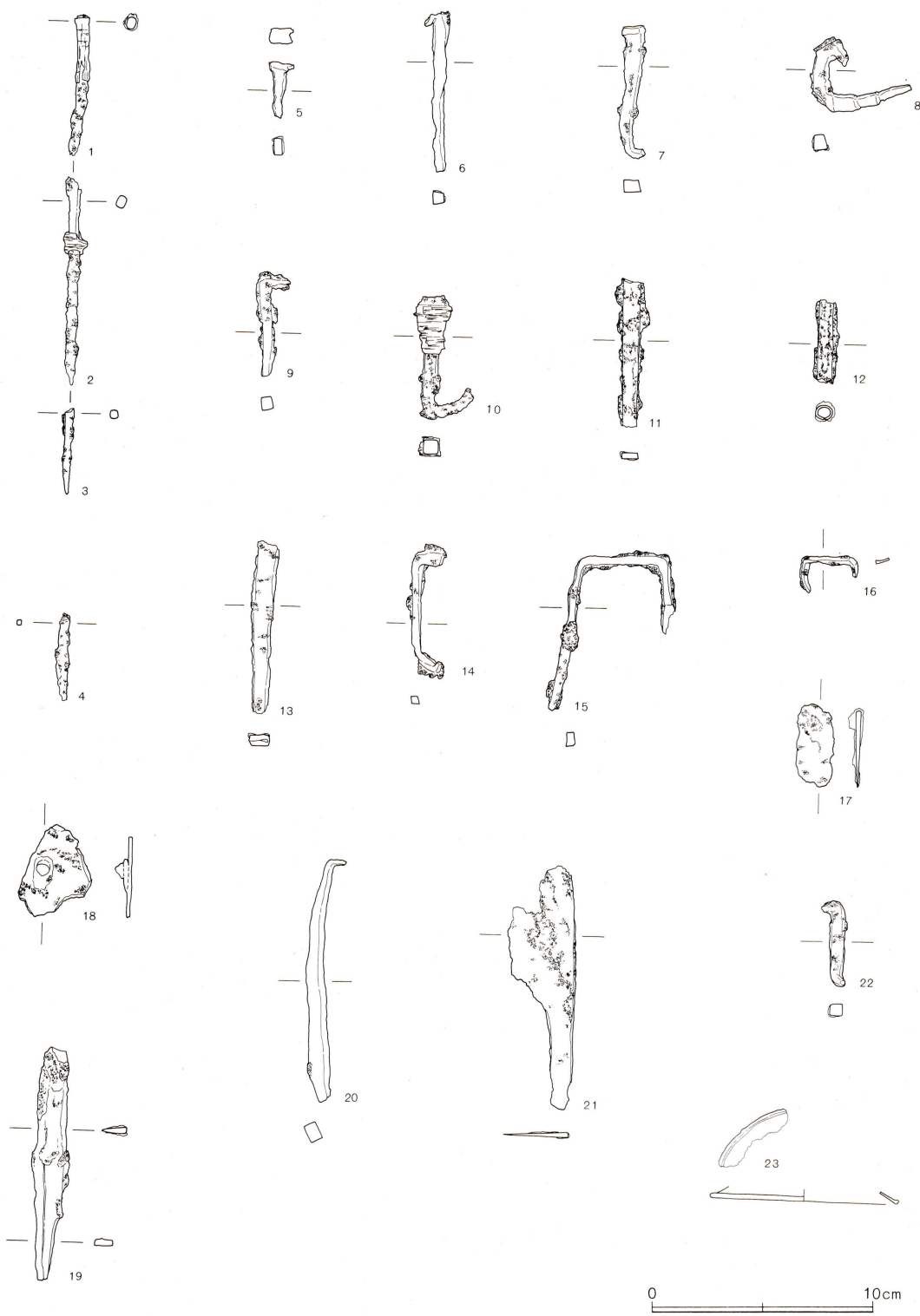
19は、Q 16 b Grid 内出土。S H 1 または S X 2 に帰属するものか。銹化著しい。一部木質を残す。刀子の茎部と刃部の一部と思われる。平棟造り。現存長9.2cm。残存部の最大幅で刃幅0.8cm、棟幅0.3cm、茎幅0.8cm、厚さ0.2cm。

20は、F 44 e Grid 内出土。比較的遺存状態は良い。断面方形もしくは長方形を呈す鋸（かすがい）と思われる。一方は先端部を欠く。形状は左右対称ではない。現存長10.8cm、幅および厚さは最大部分で0.7cm。

21は、S 13 g Grid 内の攪乱土層中より出土。銹化著しく、表面は層状に剝離する。鎌の茎部と刃部の一部と考えられる。現存部の、刃部における最大幅は2.9cm、棟幅は0.3cm、茎部は1.2cm、厚さ0.3cm。

22は、表面採集によるもの。全面を錆に覆われており、原形は判断しづらい。用途不明。丈は8・10・14に比べ短い。木材に打ち込んだ釘であり、木材の反対側から飛び出た部分叩き曲げたものであろうか。現存長3.8cm、幅0.5~0.6cm。

23は、青銅製品である。用途不明。内外面に緑青が付着する。実測図は脚台部を意識して表現されているが、容器型製品の口縁部の可能性もある。



第336図 金属製品

6. 代正寺遺跡についての小結

以上、代正寺遺跡において検出された遺構と遺物について、事実記載の報告を行ってきた。大西遺跡の報告にはいる前に、代正寺遺跡について、時期ごとにごく簡単なまとめをしておきたいと思う。そして、大西遺跡の事実記載を行った後、両遺跡の総括を第2分冊でしたい。

先土器時代：今回の調査では、この時期に比定される遺物は確認されなかった。台地の北端・南端での遺構確認や遺構調査の過程や、E区で検出された埋没谷の縁辺部に入れたトレンチにおいても確認することはできなかった。しかし、これらは非常に限られた範囲内での調査結果であり、台地北端部では現道のため調査範囲外となっている。立地的にも、今後の調査において既期の遺物が検出される可能性は十分に考えて良いであろう。

縄文時代：現状においては、高坂台地に人々の生活の痕跡が確認されるのは、縄文時代には入ってからといえる。当台地ではこれまで、台地南部・東部で中期の土器が確認されているのみであった。今回1軒ではあるが（第94号住居跡）前期（諸磯式期）の住居跡が確認され、上限が遡ったことになる。この住居跡は、代正寺遺跡と大西遺跡の間となる開析谷に臨んで立地をしており、集落としては、この谷部に面して営まれたと考えられようか。この他には、僅かではあるが後世の遺構に流れ込んだ状況で、中期（下小野式・阿玉台式・加曾利E式）・後期（堀之内式・安行式）の土器片が分布しており、この時期の集落の存在を想定させる。

弥生時代：高坂台地が、人々の生活の舞台として活発化するのには、弥生時代中期後半以降であると表現できよう。その痕跡は、住居跡・方形周溝墓・土壇等によって認められる。当台地では、杉の木遺跡が吉ヶ谷式土器を用いた集落跡として知られているほか、岩鼻式土器についても遺物採取の結果から、集落跡の存在が推定されていた。今回の調査では、両種の遺物が検出されたことからその集落跡の存在が確認され、さらに岩鼻式土器に加えて宮の台式土器も検出されて新たな知見となった。周辺における調査結果から観ても、既期の集落跡や墓域は、今後の調査によってさらに広がるものと考えられる。

古墳時代：当台地では、諏訪山古墳群・毛塚古墳群のほか高坂古墳群が存在しているが、今回確認された古墳跡は、この高坂古墳群に含まれる遺構と看做されよう。遺物採取の結果から、既期の集落跡についてもその存在が予想されていたが、今回の調査によって確認が得られ、その範囲はさらに広がりをもつものと予測できる。

奈良・平安時代：古墳時代後期以降の住居跡は、いずれも当遺跡の南端部付近（G～I区）で検出されており、大西遺跡に及んでいる。大西遺跡は複合遺跡ではあるものの、既期の大規模な集落跡が想定され、その集落域がこの範囲にまで及んでいるという可能性を考えたい。遺跡南端の掘建柱建物跡2棟については、これらの遺構に伴うものであろうか。なお、東山道が当台地を横切る可能性に関しては、残念ながら今回の結果からは資料を得ることはできなかった。

中近世：土壇・溝跡・ピット・土葬墓・火葬墓等々、遺跡全体に亘って広がりを見せる。とくに、中世における小代氏館跡との関連遺構の存在を仮定し、今回の調査にはいったが、残念ながら検出遺構からは確証を得るに至らなかった。

7. 代正寺遺跡新旧対照表

代正寺遺跡と大西遺跡は、各々発掘作業の時点において、調査した順に各遺構の略号（SJ・SH・ST他）の後に番号を付して SJ1、SJ2……、SH1、SH2……と銘々していった。この他に土葬墓や火葬墓、地下式坑等のように略号をもたない遺構については、そのまま第1号土葬墓、第2号土葬墓……と番号付をした。しかし、調査はさまざまな要因により一定の方向からのみ行い得るものではなく、区を飛び越えたりあるいは複数の区を平行して調査したりするなどの制約があった。これらの遺構を報告するにあたり、各遺構を番号順に行うのは位置的にも時期的にも、大変に煩雑なものとならざるを得ない。そのため整理作業の段階で、各遺構ごとに新番号を設けることとした。ナンバーリングは北方向からとし、土壌についてはG～I区を除いて時期ごとに行うことを原則とした。また土壌や地下式坑、土葬墓・火葬墓等々の事実記載においては、形態や規模等を合わせ表化する必要から、新旧対照表を兼ねた一覧表としてそれぞれの項目内に掲示した。

ここでは、それ以外の遺構である住居跡（SJ）・方形周溝墓（SH）・古墳跡（ST）・溝跡（SD）・井戸跡（SE）・掘立柱建物跡（SB）・性格不明遺構（SX）についての新旧対照表を掲げておく。

代正寺遺跡新旧対照表

住居跡（SJ）

新番	旧番	区	グリッド	新番	旧番	区	グリッド	新番	旧番	区	グリッド
1	65	A	W-7-e	33	4	C	S-13-a	65	111	C	Q-21-f
2	67	A	W-7-e	34	5	C	S-13-b	66	50	D	P-23-a
3	113	A	U-8-c	35	6	C	T-13-c	67	51	D	P-23-e
4	69	A	V-8-c	36	13	C	T-13-b	68	53	D	N-23-c
5	70	A	V-8-c	37	14	C	T-13-a	69	54	D	O-23-d
6	66	A	V-8-f	38	19	C	T-13-a	70	56	D	L-25-f
7	68	A	V-8-f	39	20	C	T-12-g	71	57	D	N-25-c
8	72	A	U-8-d	40	9	C	S-13-c	72	58	E	J-36-f
9	71	A	U-8-a	41	8	C	R-13-c	73	59	E	K-36-f
10	75	A	V-9-a	42	10	C	S-13-g	74	114	E	K-38-a
11	76	A	U-8-i	43	7	C	T-14-a	75	63	E	J-38-g
12	79	A	U-8-f	44	12	C	Q-15-c	76	60	E	J-38-f
13	87	A	T-9-c	45	17	C	S-15-e	77	61	E	J-39-b
14	80	A	T-9-i	46	18	C	R-15-g	78	62	E	I-39-e
15	77	A	U-9-i	47	27	C	R-15-e	79	64	F	G-47-e
16	78	A	U-9-h	48	15	C	Q-15-i	80	121	G	C-51-d
17	74	A	V-10-a	49	22	C	Q-16-h	81	122	G	D-53-e
18	100	A	V-10-d	50	23	C	R-16-h	82	117	G	D-54-e
19	109	B	V-11-a	51	25	C	S-16-d	83	118	G	C-54-i
20	102	B	V-11-a	52	24	C	Q-17-d	84	120	G	C-55-h
21	104	B	U-12-d	53	32	C	Q-17-i	85	85	G	C-57-b
22	103	B	V-12-a	54	36	C	R-18-g	86	84	G	C-57-h
23		B	V-12-a	55	31	C	Q-18-c	87	83	H	A-58-b
24	112	B	U-12-e	56	29	C	R-17-h	88	115	H	A-58-h
25	105	B	U-12-i	57	33	C	R-18-e	89	89	H	A-58-d
26	1	C	T-11-g	58	34	C	P-18-i	90	88	H	A-57-i
27	2	C	S-11-i	59	30	C	R-19-b	91	96	H	A-59-c
28	3	C	T-11-f	60		C	R-18-h	92	92	H	A-59-h
29	106	C	T-11-f	61	38	C	Q-19-h	93	96	I	A'-64-h
30		C	T-11-i	62	39	C	O-19-i	94	125		
31	110	C	R-12-h	63	35	C	O-21-b	95	124		
32	45	C	R-12-i	64	37	C	Q-21-c				

代正寺遺跡新旧対称表

方形周溝墓 (SH)

番号	旧番	区	グリッド	番号	旧番	区	グリッド	番号	旧番	区	グリッド
1	1	C	R-13-d	6	20	D	P-22-f	11	32	G	D-51-e
2	30	C	U-12-h	7	22	D	P-23-a	12	31	G	C-54-a
3	3	C	Q-17-d	8	24	F	E-47-b	13	27	H	A-56-e
4	5	C	P-20-b	9	34	G	D-50-h	14	28	H	A-59-d
5	21	D	O-21-h	10	33	G	E-50-d	15	29	H	A'-60-b

古墳跡 (ST)

番号	旧番	区	グリッド	番号	旧番	区	グリッド	番号	旧番	区	グリッド
1	11	A	W-6-b	7	3	C	P-18-b	13	9	F	G-42-c
2	12	A	T-7-c	8	5	C	O-20-c	14	10	F	G-47-e
3	15	A. C	T-9-g	9	4	C	R-20-a	15	17	G	D-52-h
4	13	A. B. C	U-10-b	10	6	D	P-23-a	16	14	G	C-53-g
5	16	B	V-10-i	11	7	D	N-24-b				
6	2	C	S-17-b	12	8	E. D	L-28-c				

溝 (SD)

番号	旧番	区	グリッド	番号	旧番	区	グリッド	番号	旧番	区	グリッド
1	30	A	T-6-f	19	12	C	M-25-c	37		G	C-52-f
2	31	A	V-7-b	20	13	C	M-25-i	38		G	C-53-d
3	32	A	V-7-b	21	14	E	L-31-a	39		G	D-53-d
4	2	A. C	T-8-b	22	15	E	L-31-e	40	52	G	C-54-a
5	33	A	T-8-e	23	16	E	M-31-g	41	SH26	G	C-56-e
6	34	A	T-8-g	24	17	E	K-32-b	42	35	G	C-57-e
7		A	S-10-d	25	18	E	K-33-f	43	36	H	B-55-d
8	50	A	T-10-g	26	19	E	J-35-b	44	37	H	B-56-a
9		C	S-14-a	27	21	E	J-35-f	45	38	H	A-57-b
10		C	S-14-e	28	20	E	K-35-b	46	43	H	B-59-a
11	3	C	Q-14-c	29	22	E	I-37-h	47	40	H	A-60-b
12		C	R-14-d	30	23	E	I-38-a	48	41	H	A-60-c
13		C	Q-14-f	31	24	F	I-40-i	49	45	I	A'-61-a
14	SH 2	C	R-14-i	32	25	F	G-42-b	50	46	I	A'-61-f
15	12	C	S-16-c	33	26	F	F-44-h	51		I	C'-64-i
16	1	C	R-17-f	34	28	F	G-44-e	52	47	I	B'-66-b
17	4.11	C	Q-20-a	35	27	F	F-45-d				
18	10	C	Q-20-a	36	50	G	C-52-d				

井戸跡 (SE)

掘立柱建物跡 (SB)

性格不明遺構 (SX)

番号	旧番	区	グリッド	番号	旧番	区	グリッド	番号	旧番	区	グリッド
1	SE 3	I	B'-64-i	1	1	I	A'-63-a	1	1	I	A'-61-a
2		I	A'-65-b	2	2	I	A'-64-e	2		C	
3	SE 2	F	G-46-i								
4	SJ95	H	B'-60-e								

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第110集

代正寺・大西 (第1分冊)

代正寺遺跡

一般国道407号線東松山市地内

埋蔵文化財発掘調査報告

平成3年12月20日 印刷

平成3年12月27日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884

電話 0493(39)3955

F A X 0493(39)3579

印刷 凸版印刷株式会社